

大下原遺跡・吉田原遺跡

—安中市すみれ工業団地造成事業に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

1993

群馬県安中市教育委員会

大下原遺跡・吉田原遺跡

—安中市すみれ工業団地造成事業に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

1 9 9 3

群馬県安中市教育委員会

頁	行	誤	正
P. 2	15行	大グリッド	大グリッド
P. 3	7行	黄褐色軽石層	黄色軽石層
P. 8	6行	菱形状を施文したもの	菱形文様を施文したもの
P. 10	19行	リクッチドフレイクB類	リクッチドフレイクA類
P. 20	31行	J-10号住はの	J-10号住の
P. 25	17行	隣接しする	隣接する
P. 27	13行	E W	W E
P. 27	18行	第9表 集石遺構観察表	第9表 集石遺構・集石土壌観察表
P. 28	1行	S-1号1集石遺構	S-1号集石遺墟
P. 28	32行	第14図 S-1・3号集石土壌実測図	第14図 S-1号集石遺構・S-3号集石土壌実測図
P. 29	25行	第15図 S-2・J-2号住居址S-1集石土壌実測図	第15図 S-2・J-2号住居址S-1号集石土壌実測図
P. 50	18行	E W	W E
P. 55		J-7号住 炉-1 I-J・J-8号住 炉-2 K-L	追加 J-7号住 炉-1 I-J エレベーション238.8m J-8号住 炉-2 K-L エレベーション238.8m
P. 59		J-12号住 炉-1・炉-2	追加 J-12号住 炉-1 エレベーション238.0m 炉-2 エレベーション238.0m
P. 70	18行	T-10 294 250 250 120 24	T-10 294 250 150 120 24
P. 70	19行	T-12 140 98 93 100	T-12 140 98 93 100 12
P. 70	36行 ~ 37行	T-8 隅円方形 皿状 II C・凹石・石皿・多孔石 諸磯 b 小形浅鉢	追加 T-8 A 280 104 232 72 16 隅円方形 諸磯 b T-8 B 232 112 208 88 32 隅円方形 小形浅鉢 石皿・凹石・多孔石 諸磯 b T-8 C 160 120 136 88 24 大形精円 石皿 諸磯 b T-8 D 208 112 168 88 24 隅円方形 諸磯 b T-8 E 144 80 120 64 8 大形精円 諸磯 b T-8 F 152 80 112 64 12 大形精円 諸磯 b
P. 71	6行	D-10 16	D-10 - - - - 16
P. 73	24行	D-137	削除
P. 83	24行	T-19	T-20
P. 83	29行	T-20	D-140
P. 88	26行	U-3号層番3 黒褐色土層 2 (3 △○※※※)	削除
P. 89	6行	(上端) (下端)	(上端) (下端)
P. 89	13行	E W	W E
P. 91	20行	平行沈線いよる	平行沈線による
P. 131	9行	石器製作的パターン	石器消費的パターン
P. 185		Y-3号住 炉E-F	追加 Y-3号住 炉E-F エレベーション238.4m
P. 221	19行	土器出ある	土器である
P. 223	3行		追加 (関根二)
P. 223	18行	第 図	第160図
P. 226	10行	小さが	小さい
P. 228	2行	少数	少数
P. 229	10行	消費されてい存在していなかった	消費されていなかった
P. 230	16行	関根二・谷藤保彦 1986 『糸井宮前遺跡Ⅱ』 群馬県埋蔵文化財調査事業団	17行と入れ替え
P. 233	21行	80°Cで恒温乾燥。	80°Cで恒温乾燥。
図版-6	32行	J-3号住居址南北土層断面	重複
図版-23	32行	J-9号住居址炉址土層断面	J-9号住居址土層断面

序

大下原遺跡・吉田原遺跡は安中市の南部、中野谷地区に位置しています。ちょうど道路をはさんで富岡市と接しています。この遺跡のある中野谷地区は、安中市有数の遺跡集中地域です。すぐ東に隣接するすみれヶ丘聖苑の場所は注連引原遺跡で、群馬県の弥生時代の黎明期を語る時、欠かすことのできない遺跡です。また、縄文時代の遺跡として有名な天神原遺跡、松原遺跡もこの地区に存在しています。このような、中野谷地区の中で、縄文時代を中心とした二つの重要な大下原遺跡・吉田原遺跡が発掘されたわけです。

今回の発掘調査は、安中市の南部開発の一環である工業団地の造成に伴うものです。大下原遺跡・吉田原遺跡とも、調査の前は雑木林に覆われていましたが、現在この場所には工場の建設が進められています。過去と未来をつなぐ架け橋として、埋蔵文化財の発掘調査は行われています。開発は将来の安中市に希望を与えるものです。また、太古の遺跡がこの場所にあったことを後世へ語り継ぐことも、私たち現代人の責務のひとつです。

こうした意味をもった貴重な文化財は、学校教育・社会教育の場をとおして、多くの市民の皆さまに有効に活用していただきたいと考える所存であります。

最後になりましたが、発掘調査にご協力いただきました多くの関係者の方々には、この場を借りて厚くお礼申し上げたいと存じます。

平成5年3月

安中市教育委員会

教育長 山 中 誠 次

例 言

- 1 本書は安中市土地開発公社が実施したすみれ工業団地（事業名：ミニ工業団地）造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査を実施した遺跡は大下原遺跡（略称G-15B・C）、吉田原遺跡（G-15A）であり、安中市の中野谷字大下原・字吉田原地内に存在する。
- 3 試掘調査は平成2年度国宝重要文化財等整備費補助金及び群馬県文化財保存事業費補助金の交付を受けて安中市教育委員会が実施した。また、本調査及び遺物整理は安中市土地開発公社の委託金により実施した。
- 4 試掘調査は平成2年度に実施し、本調査は平成3年度に実施した。また、遺物整理は平成3年度・平成4年度に実施した。
- 5 調査は安中市教育委員会社会教育課文化財係主事大工原豊が担当した。
- 6 遺物整理については、遺構は主として大工原、和田宏子が担当し、土器は主として関根慎二（群馬県埋蔵文化財調査事業団）、金井京子が担当した。また、石器は大工原、麻生敏隆（群馬県埋蔵文化財調査事業団）、中島誠（藤岡市教育委員会）が担当して行なった。また、自然科学分野の分析については、植生分析を杉山真二（古環境研究所）、テフラ分析を早田勉（同）、石材・地質分析を磯貝基一（元県立高校教諭）に委託して行なった。そして、全体を大工原が総括した。
- 7 本書の編集は大工原が行った。本文の執筆は大工原のほか金井（京）、和田、関根、麻生、中島、磯貝、杉山、早田が行った。大工原の執筆箇所以外は、文末に執筆者名を記した。
- 8 縄文土器の分類及び時期判別は関根による。また、石器の分類は大工原、麻生、中島が行い、石器石材の鑑定は磯貝が行った。
- 9 遺構平面図の作成は大工原、和田、瀧沢徹が行った。遺構図のトレース・版組は和田、古立真理子が行った。土器の拓本は神宮幸四郎、金井俊美、梓田尚が採拓し、実測図の作成・トレース・版組は金井（京）、筑井美佐子、伊田百合子が行った。石器の分類・実測は大工原、麻生、中川京子、佐藤佐由里が行い、トレース・版組は大工原、古立、中島が行った。
- 10 遺構写真の撮影は大工原が行い、航空写真の撮影は（有）青高館に委託して実施した。また、遺物写真の撮影は、石器及び完形土器は実測用写真を兼ねて、写真家小川忠博に委託して行なったが、土器片を及び一部の土器は大工原が撮影した。また、写真図版は大工原、金井（京）、神宮香代子が作成した。
- 11 基準点・水準点の測量は（株）桜井測量設計事務所に委託して実施した。また、グリッド杭

の測量及び水準点の移動は大工原、(故)小野始が行った。

12 今回の調査記録、出土遺物は安中市教育委員会が保管している。

13 発掘調査及び遺物整理の期間中次の方々に有益な指導、助言、協力を行っていただいた。記して感謝の意を表したい。

赤山容造 磯部建設㈱ 荒川竜一 井上慎也 植田真 上野修一 宇貫俊夫 金井安子 金山喜昭 小杉康 小林達雄 小山岳夫 堤隆 谷口康浩 中島誠 能登健 羽鳥政彦 羽生淳子 林克彦 春成秀爾 前原豊 ㈱宮本製作所 武藤康弘 本橋恵美子(敬称略・50音順)

凡 例

1 遺構実測図は1/80を基本としたが、炉址土層断面図、集石土壙は1/40とした。

2 遺物実測図の縮尺は次のとおりである。

土器：1/4 (大形1/6)

A類石器：2/3、石皿・大形石棒：1/8、その他：1/4

3 石器実測図中の記号は石材を示し、略号は以下のとおりである。

O b：黒曜石 C h：チャート S h：頁岩 H S h：硬質頁岩

S c h：輝緑凝灰岩 B A n：黒色安山岩 A n：安山岩 S S：(牛伏)砂岩

S c：結晶片岩 G r R：緑色岩類

4 A類石器、B類石器では実測図中の細密平行線は使用痕の範囲と使用方向を示す。ただし、使用方向が不明のものは縦線とした。

5 磨石・凹石・石皿では使用部分を白抜きとし、原礫面は点描とした。そして、凹石の場合、凹と磨面の切り合い関係を示すため、凹→磨では凹の範囲を破線で表現し、磨→凹では実線で表現した。

6 砥石は使用方向を点描で表現した。

7 石器写真図版は原則として1/2、1/4としたが、A類石器1/1、石皿・大形石棒等は1/6或いは任意の大きさとした。

8 その他、表記の方法は「II調査の方法」を参照されたい。

調 査 組 織

教育委員会事務局

教 育 部 長 渋谷 栄 (平成4年3月転出)

茂木勝文

社会教育課長 多胡泰宏

文化財係長 吉田 洋 (平成3年8月退職)

小山治男

主 事 大工原 豊 (調査担当)

千田茂雄

小黑勝明 (平成4年3月転出)

主 事 補 深町 真

社会教育指導員 萩原米造

発掘調査 遺物整理従事者

秋山広吉 秋山森雄 伊田百合子 上原藤男 氏家芳子 打越 進 (故)小野始

小野泰野 梓田 尚 金井京子 金井俊美 金谷清一郎 佐藤佐由里 清水 正

白石純子 白石俊子 神宮香代子 神宮幸四郎 鈴木茂美 鈴木八郎 鈴木将之

須藤ダイ 高橋敏男 瀧沢 徹 竹内 基 多胡梅子 多胡かつ子 多胡 静

多胡末子 多胡光子 多胡 操 多胡好江 田島元治 田島かつ子 田島せい子

田中利策 筑井美佐子 中川京子 萩原直樹 萩原研也 藤卷岩男 古立 京

古立真理子 増田トヨミ 松本 芳 松本恭子 丸岡民子 山田きの江 山村ヨネ子

湯川光子 吉本律子 和田宏子 和田光江

目次

序

例言

凡例

I 調査の経緯	1	2 大下原遺跡	48
1 調査に至る経過	1	(1) 遺跡の概要	48
2 調査の経過	1	(2) 縄文時代の遺構と遺物	49
II 調査の方法	2	(3) 弥生時代の遺構と遺物	183
1 発掘調査の方法	2	(4) 平安時代の遺構と遺物	188
(1) 発掘調査の方針	2	(5) 小結	190
(2) グリッドの設定	2	V 成果と問題点	220
(3) 遺構確認面	2	1 土器の編年の位置付けについて	220
(4) 遺構の調査と記録の方法	3	2 住居址への土器の廃棄について	223
2 遺物整理の方法	5	3 前期中葉の石器群について	226
(1) 遺物整理の方針	5	VI 自然科学的分析	231
(2) 遺構の記載・分析の方法	5	1 テフラ分析	231
(3) 遺物の記載・分析の方法	6	2 植物珪酸体分析	237
(4) 遺構・遺物相互の分析方法	11	3 石器石材の分析	244
III 遺跡の地理的・歴史的環境	14	写真図版	
1 地理的環境	14		
2 歴史的環境	14		
3 層序	19		
IV 遺跡各説	20		
1 吉田原遺跡	20		
(1) 遺跡の概要	20		
(2) 縄文時代の遺構と遺物	20		
(3) 小結	45		

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

大下原遺跡・吉田原遺跡が存在する地域は調査以前は大部分中野谷地区の共有林として利用されており、雑木林が広範囲に広がっていた。全体的に北傾斜で、小谷地が入り込む地形であったので、小規模な遺跡は存在するとしても、大きな遺跡の存在は予想されていなかった。

昭和61年度に実施された詳細分布調査により、縄文時代の遺物が散布していることが確認され、大下原遺跡の存在が明かとなった。その後、昭和62年民間の工場用地造成事業に伴う試掘調査が実施された。この際、縄文時代前期の住居址が数軒確認されたが、原因者の配慮により遺構に影響のないように工場用地の造成が行われたため、本調査には至らなかった。

その後、安中市土地開発公社により、この遺跡を含む広範囲の場所に工業団地を造成する計画が立案された。平成2年度に至り計画が実施されることが確定し、安中市教育委員会へミニ工業団地造成事業として計画が照会された。これを受けて市教育委員会では大下原遺以外の遺跡の存在も予想されるため、事業計画区域全体についての試掘調査を実施することになった。

試掘調査は平成3年3月に実施した。この調査により大下原遺跡の範囲が明確になり、大規模な縄文時代の集落遺跡であることが判明した。また、大下原遺跡の北東に小規模な縄文時代前期の吉田原遺跡も存在していることが明かとなった。

しかし、事業計画は進行しており、中止は不可能な状態となっていた。また、事業実施により遺跡が影響を受けることも回避できないことから、本調査を実施し記録保存の措置を講じて遺跡を後世に残すこととなった。

2 調査の経過

発掘調査は平成3年から4月から8月までの約4カ月間実施した。吉田原遺跡の調査は4月15日に着手し、6月18日に終了した。一方、大下原遺跡の調査は5月7日に着手し、8月12日に終了した。一部の期間、両遺跡の調査は並行して実施した。調査の進捗は春期には順調であったが、夏期になると気候条件によりやや遅れ気味となった。途中7月からは工事と並行する形での調査となった。

また、遺物整理作業は調査終了後、平成3年度に遺物水洗・注記作業を断続的に実施した。そして、平成4年9月から本格的に遺物整理・報告書作成作業に着手し、平成5年3月に終了した。

II 調査の方法

1 発掘調査の方法

(1) 発掘調査の方針

今回の調査はすでに工事の実施時期が迫っており、時間的制約が大きいこともあり、迅速に現場作業を進める必要があった。伐採と表土掘削、遺構確認、遺構精査、遺構測量の期間を最小限に抑えるように調査計画を立てた。具体的には、従来実施されている調査方法の中で、合理化が遅れている部分については、新技術を用いた方法をできるだけ導入するように努めた。例えば、ミニバックホー(2 t)、キャリアダンプを常駐させ、人力による単純重労働を極力排除するよう努めた。また、住居址の精査では分層16分割法を導入し、土層断面図作成にはビニール転写法を採用した。さらに、遺構平面図には気球による簡易航空測量法を用いた。

一方、本遺跡は縄文時代前期の集落遺跡を主体としていることから、集落全体像を明かにすることを基本方針として調査を行うことにした。また、石器類などの微細な遺物にも十分注意して発掘調査を行うように、ねじり鎌等の調査機材を用い調査精度の維持をはかった。

(2) グリッドの設定

位置の記録方法としては、従来から安中市の調査で用いているとおり、100m×100mの大グリッドと4m×4mの小グリッドを併用する方法を採用した。小グリッドの呼称は北から南へアルファベットでA、B、C・・・、西から東へ算用数字で1、2、3・・・であり、グリッドの名称は北西隅の杭の名称とした。また、大グリッドは南北方向はアルファベットの頭に1、2、3と数字を冠し、100mごとに数字が大きくなるようになっている。そして、包含層調査の場合、小グリッドをさらに4分割し北西隅からa、b、c、dとグリッドの最後に付して記録することにした。

グリッドの方向は地形の傾斜に即した造成事業用の中心線を利用することにした。したがって、南北方向はN-64.5°Wである。そして、グリッドの位置は国家座標に取り付けた。吉田原遺跡では、1 J-10グリッドがX=31875.384、Y=-86042.059、H=226.24mであり、1 R-10グリッドがX=31846.466、Y=-86028.357、H=228.23mである。また、大下原遺跡では2 M-35グリッドがX=31816.993、Y=-85903.735、H=236.06mであり、2 Y-35グリッドがX=31773.617、Y=-85883.179、H=239.60mである。

(3) 遺構確認面

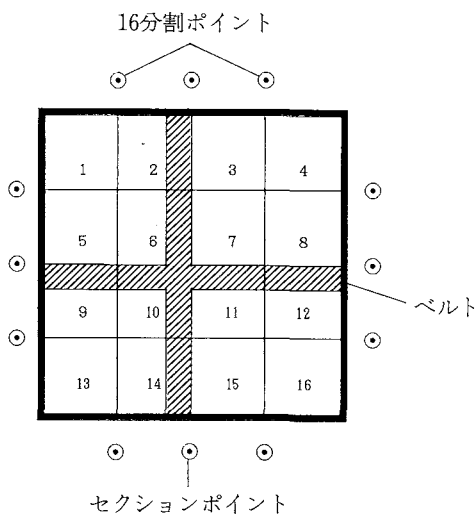
縄文時代前期の確認面は試掘の結果、褐色土層(IV層)の中部であることが判明していたので、その面まで、バックホーにより掘削することにした。しかし、褐色土層は傾斜部では浅くなっており、吉田原遺跡及び大下原遺跡調査区北部ではローム層(V層)上面が確認面となった。

住居址は容易に確認することができた。大下原遺跡調査区南部の土壌・ピット集中部分はIV層とV層が攪拌された状態で厚く堆積していたため、一度IV層上面で遺構確認を行なった。しかし、遺構確認が困難であることと、遺物の分布密度が低いことから、再度バックホーにより黄褐色軽石層（VI層）上面まで確認面を下げた。また、大下原遺跡南東部はIV層上面まで掘り下げたところで遺物が濃密に分布していたことから、その面を確認面とした。

遺構確認作業は原則として、ジョレンを用いて人力で行った。しかし、遺構確認が困難な場合には速やかに確認するため、ミニバックホーを用いてサブトレンチを掘削して実施した。この方法は人力に比べ圧倒的に早く遺構の有無を確認できるので有効であった。この方法は主として中央広場部分に対して行った。

（4）遺構の調査と記録の方法

住居址の調査は原則として分層16分割法で行った。この方法はまず最初に住居址の中心に主軸方向に50cmのサブトレンチを設定し、床面及び壁面を確認し、土層堆積状態を把握する。そして、次に平面上16の区域に分割し、層位及び区域ごとに遺物を取り上げる方法である。また、今回の調査では遺物出土状態の記録は、最下層についてのみ遺物を残し、写真撮影により実施したが、これは遺棄され、原位置をとどめている遺物が存在している可能性があるからである。なお、16分割の各区の呼称は、北西隅から1区、2区、3区・・・で、南東隅が16区となる（第1図）。例えば、J-6住11区3層というように遺物の出土位置は記録される。また、



第1図 住居址の16分割の方法と各区の位置

遺物出土状況カード

遺跡略称 住居名 調査年月日
記録者

遺物出土状況

1層

2層

3層

- ◎ 大量（大*リ以上）
- 多量（大*リ）
- △ 少量（中*リ）
- * 若干（小*リ）

土層の区分

層名	厚さ
1層	Cm
2層	Cm
3層	Cm

第2図 住居遺物出土状況カード

気球による航空写真を利用して実施した。前者は比較的小規模で詳細な図面が必要な遺構、具体的には、集石土壇・埋設土器などに対して行った。また、後者の方法は遺構全般に対して行った。航空写真を利用した測量では写真撮影の際にグリッド・セクションポイント等に対空標識を設置し、遺構の上端・下端に水性ペイント、石灰によりマーキングを行って実施した。また、垂直画像を確認するため、2 mポールを随所に垂直に立てて写真精度の確認を行った。写真は高高度から広範囲を撮影したものと、個々の住居址を低高度から撮影したものを使用した。これらの写真はデジタルコピー機（リコーIMAGIO420P）により部分ごとに歪を補正し、これをもとに現場で個々の遺構を確認しつつ、製図用フィルムにトレースする方法で平面図は作成した。平面図の縮尺は1/40を基本とした。この方法の長所は考古学的図面に要求される精度は維持できること、精度の確認が容易に行えること、図化作業が短期間で実施できること、測量の助手を必要としないこと、経費が安価であることなどがあり、非常に有効な方法である。特に、この方法は遺構が高密度に集中する部分について有効であることが確認された。

また、写真は住居址については、基本的には最下層の遺物出土状況、土層断面、炉址、住居址全景を撮影した。また、航空写真により、遺跡の全景を撮影した。

2 遺物整理の方法

(1) 遺物整理の方針

遺物整理は調査した遺跡の情報を記録として残すことを一義的な目的としている。したがって、遺構と遺物がどのような状態で存在していたかを客観的な形で示す必要がある。しかし、膨大な量の遺物をすべて報告することは物理的に不可能である。そこで、ある程度取捨選択を行って、報告書に記載する方法が採られている。今回の遺物整理もこの方法により行った。その際、取捨選択の規準としては、本遺跡群が縄文時代前期を中心とする集落遺跡であるので、集落の景観を明かにすることを主眼とした遺物整理を実施することにした。

具体的方法としては、まず遺構、土器群、石器群に分け、それぞれ個別に分析していくことにした。そして、次にそれぞれの分析を総合化して、時間的・空間的様態を明かにし、時期ごとの集落の景観を復元することにした。

(2) 遺構の記載・分析の方法

[住居址の記載・分析方法]

住居址は平面図・土層断面図・遺物分布図・写真・調査時の所見を検討し、住居址の状態を把握することにした。重複がある場合は、主として土層断面図及び、土器群の分布状況を調べ新旧関係を判断した。主柱穴は位置及び深さにより配列を検討した。報告書には各住居址の平面図・遺物分布図・土層断面図・炉址土層断面図・土層説明表・住居址観察表を掲載し、必要に応じて

遺構断面図を作成して掲載した。

その後、住居址は形態（平面形及び竖穴の深さ）・壁溝・支柱穴の配列・炉址の形態から分類を行ない、各時期の住居形態を明かとすることにした。

[土壙の記載・分析方法]

土壙は「土壙」と「土坑」と表記する場合があります、前者は墓を推定し、後者は特定の機能を示さないで用いている。本遺跡の場合、墓と推定される例と性格不明の例が並存しており、両者を明確に区別することが困難であるため、基本的には「土壙」で統一して表記した。ただし、吉田原遺跡で検出された1例（D-1）は今村啓爾氏の定義（今村1983）に従い「陥穴」の呼称を用いた。

土壙は最初に平面形態より円・楕円・隅円方形・不定形に分類し、合わせて大きさの大小に分類した。また、断面形態から皿状・碗状・袋状に分けた。次に、土層堆積状態・遺物出土状態・存在位置・出土遺物の時期を多角的に検討し、さらに細分を行った。土壙の存在位置の検討では、単独か群を構成するかについて重点的に検討を行った。

土壙は基本的には時期別に分け、各形態及び土壙群別に表示した。また、土壙の諸要素を観察表としてまとめて表示することにした。

そして、これらの個々の土壙の分析結果をもとに、土壙群の集落内での位置・規模・性格について調べることにした。なお、この作業は次の遺構・遺物の総合的分析と重なる作業である。

[集石・集石土壙の記載分析]

本遺跡からは遺存状態が良好であったため、比較的多数の集石及び集石土壙が検出された。集石は本来掘り込みを有していた可能性もあるので、集石土壙と一緒に扱うことにした。

集石土壙は礫の重量・欠損率・被熱率・石材を調べることにした。この分析によって、集石土壙の機能・性格について明かにすることに努めた。報告には平面図・遺構断面図・礫重量、欠損率、被熱率、石材のグラフを表示した。（和田宏子）

(3) 遺物の記載・分析の方法

[土器記載・分析の方法]

土器群は住居址では各層・各区ごとに分類し、重量及び個数を計測した。重量を計測することにしたのは、土器の場合復元不可能な破片が多く、また、個数のみでは破片の大小に相当な幅があり客観性の観点で問題があることからである。1個体の土器の重量が解れば、住居址1軒で何個体分の土器が出土しているか推定することが可能になる。このことから、1軒の住居の保有する土器数、或いは廃棄された土器数を用いた分析が可能になる。また、個数の計測は重量と一緒に用いて効果を発揮する。すなわち、「重量÷個数=1個体あたりの平均重量」であり、出土した破片の大きさが解る。これによって、遺棄或いは廃棄のパターンを客観的に表示することが可能

になる。

したがって、重量或いは個数を示すことで、土器の流れ込み、或いは廃棄の方向が明確になるように図示することにした。この過程で型式学的に明らかに異なる遺物がある場合、住居址・土壙との重複関係を検討し、別の遺構に所属する可能性が高いことが判明した際には、元の遺構の遺物とすることにした。

また、住居址の時期決定にあたっては炉体土器が存在する場合はその時期とし、それ以外の場合は下層から最も多量検出される土器群の時期とした。また、土器は共伴関係を配慮して各層ごと、文様ごとにまとめて図版に掲載することにした。これと併行して層位と土器型式との関係についての検討を行った。その過程で住居址とは直接的にほとんど関係がないと判断される土器群が混在しているケースが多いことが判明した。そこで、量的に少なく、型式学的に明かに異なる判断された土器については住居址から除外することにした。しかし、資料的に報告する必要がある土器については、別にまとめて掲載することにした。

土壙出土の土器群についても、重量及び個数を計測し、一覧表として掲載した。また、土壙の所属時期の量的に安定して出土しているものの時期とした。また、図版への掲載は土壙番号順とし、時期別にはなっていない。また、観察表にまとめて土器の諸要素を記載することにした。

なお、土器の実測は完形及びそれに近いものは長焦点法により撮影した写真（小川忠博撮影）を用いて実施した。また、それ以外の破片等については拓本を用い、真弧により断面図を作成する通常の方法によった。

「縄文土器分類の方法」

大下原遺跡・吉田原遺跡で出土した縄文時代の土器は、前期を主体としているが、中期の土器も若干出土している。

本遺跡で検出された遺構の時期については、出土土器と深く関係している。遺構内出土土器による出土傾向では、下層からその遺構時期の主体となる土器が多く出土し、混入と思われる時期の異なる型式の土器は上層から出土する傾向にある。

土器は出土遺構ごとにまとめ、下記の基準で分類を行い掲載した。また、出土土器について、型式・特徴など各々について記述する方法は採らず、報告書紙面の都合上分類記号によって代用した。「群」は時間軸として捉え型式的变化を含む単位とし、複数の型式をまとめた。これは、本遺跡が時間的に大きく分けると前期前半、前期後半になり、これらの単位ごとに「群」を構成し、細かい時間的推移については、別項に記載するためである。

次に型式が時間の推移を表す単位とした場合、これを「類」に置き換えた。また、型式は地域差も加味されるものであるが、これについても「類」によって表現した。「類」は土器型式が器形や文様構成・モチーフ・施文方法などの諸属性によって設定されることから、特に文様構成によっ

て分類したものを、さらにいくつかの小項目によって分類し、これらの集合とした。

I 群土器 前期前半（関山式・有尾式・黒浜式・神ノ木式）

1 類 関山式

- A 瘤状の貼付けを有するもの
- B 半截竹管などの工具によるコンパス文を施文したもの
- C 半截竹管による平行沈線による格子・渦巻・菱形文様を施文をしたもの
- D 無文・縄文のみのもの

2 類 有尾式

- A 櫛状工具による刺突文を施すもの 口縁に縦位の刺突・菱形のモチーフを構成するもの
- B 半截竹管による爪形文を施文するもの 口縁に変形・山形のモチーフを構成するもの
- C 半截竹管による平行沈線を施文するもの 口縁に変形・山形のモチーフを構成するもの
- D 櫛状工具による刺突・爪形文・平行沈線を併用して施文するもの
- E 無文・縄文施文のもの
- F 隆帯をもち、刻み・刺突が加えられるもの

3 類 黒浜式

- A 半截竹管による爪形文を施文するもの
- B 半截竹管による平行沈線を施文するもの 波状・横位・縦位に施されるもの
- C 半截竹管状の工具による刺突文、押し引きによる刺突が施されるもの
- F 沈線による格子目文、あるいはそれが崩れた乱雑な文様を施すもの
- G 縄文のみのもの

4 類 神ノ木式

- A 口縁部に沈線を横位に施文するもの

II 群土器 前期後半（諸磯 a・b・c 式、浮島・興津式、十三菩提式）

1 類 諸磯 a 式

- A 細い半截竹管による爪形文、押し引きによる爪形文を施文するもの
- B 半截竹管による平行沈線・肋骨文・波状沈線等を施文するもの
- C 円形竹管の先端を刺突し、円形の刺突列が縦位に垂下するもの
- D 無文・縄文施文のもの

2 類 諸磯 b 式

- A 浮線文を施すもの 粘土紐による浮線で横位・弧状・渦巻状の文様を構成するもの
- B 幅太の半截竹管による爪形文を施すもの 弧状・渦巻状・木葉状の文様を構成するもの
- C 半截竹管による平行沈線を施文するもの 1～数本単位で横位に間隔をあけて施文する

もの 沈線間に波状・弧状・渦巻状の文様を構成するもの

D 無文・縄文施文のもの

3類 諸磯c式

A 半截竹管による平行沈線を施文するもの 平行沈線を連続して施文、または数本束ねた集合沈線により器面に密に横位・縦位の矢羽状に文様を描くもの

B A類の文様を地文にし、棒状・ボタン状・耳たぶ状の貼付けがされるもの

4類 浮島・興津式

A 口縁に凹凸文・条線・平行沈線による文様をもつもの

B 貝殻腹縁による波状の文様を施すもの

C 貝殻腹縁文上に平行沈線、あるいは有節沈線文をもつもの 貝殻腹縁文を磨消すもの

D 櫛状工具による刺突文を施すもの

5類 有孔浅鉢

6類 十三菩提式

A 幅の太い集合化された平行沈線と三角形の印刻が器面に施されるもの

7類 その他の前期後葉の土器

A 平行沈線による格子目を構成する土器

III群土器 中期前半の土器

1類 五領ヶ台式

A 幅の太い集合化された平行沈線と三角形の印刻が器面に施されるもの

B 平行沈線間に刺突が施されるもの 橋状の把手が付けられるもの

IV群土器 中期後半の土器

1類 加曾利E3式

A 口縁部を楕円区画し、胴部地文は、縄文が施文されるもの。

2類 曾利式

A 口縁部を楕円区画する。地文は太い沈線で「ハ」の字状に施文されるもの。

B 口縁部無文帯を持ち、胴部地文は太い沈線で「ハ」の字状に施文されるもの

(関根慎二)

[礫記載・分析の方法]

礫はすべて安山岩であるので、石材について考慮する必要はない。そこで重量・個数を計測し、被熱・欠損について観察を行った。報告書には住居址の各区・各層ごとに個数・被熱のデータを掲載した。この場合、「重量÷個数＝1個体あたりの平均重量」であり、礫の平均的な大きさが客観的な形で示されるようにした。また、土壌については一覧表として掲載することにした。

[石器記載・分析の方法]

石器は器種と石材との間に一定の結びつきがあることが考えられるため、これにより分類を行った（第2表）。また、住居址での出土状態について、各区・各層ごとに器種及び石材を観察して石器出土状況カードを作成した。そして、報告では器種の大別レベルでの出土状態を図示することにした。土壌についても住居址と同様に分類を行い、カードを作成した。石器の場合、器種により大きさの差が著しいので、重量により表示しても分布状態を客観的に示すことはできないと判断されるので、重量による分布図は作成しなかった。

石器は土器と異なり個々に時期を決定することが困難であるため、時期の決定については土器との相伴関係によることに重点を置いた。したがって、石器群の分析では、器種・形態・使用痕・石材を重点として、各器種ごとに観察・検討を行って行くことにした。器種ごとに観察表を作成し、法量・諸要素を記載し、一部は報告書にグラフ・表として掲載した。また、各住居址ごとの石器・石材組成は一括して掲載した。

石器の図版は住居址別ではなく、一括して器種ごとに掲載することにした。これは石器を型式学的・機能形態学的に検討し、その情報を明かにすることを目的としている。そして、図の掲載

石器種別	器種	技術的特徴	石材種別	石材	石材の特徴
A類	石鋏 石錐 スクレイパーA類 リタッチドフレイクB類 楔形石器 石匙A類	押圧剥離を多用	I類	黒曜石 チャート 硬質頁岩 黒色安山岩 めのう	硬質で粘度が少ない 剥片剥離に最も適し鋭利
B類	打製石斧 スクレイパーB類 石匙B類 リタッチドフレイクB類	直接打撃を多用	II類	頁岩 輝緑凝灰岩	多少軟質でやや粘度がある 剥離に適するが鋭利さは劣る
C1類	磨石 凹石 石皿	使用痕跡により 石器と認識される	III a類	安山岩	軟質で粘度がある 剥離に不適で剥離面は粗面 耐火性に富む
C2類	敲石 台石 砥石		III b類	(牛伏)砂岩	軟質で粘度がない 剥離に不適でポロポロと崩れる
D類	石棒 多孔石 棒状礫 丸石	直接打撃・敲打・研磨を複合的に用いる	IV類	結晶片岩	節理が発達している
E類	磨製石斧	直接打撃・敲打・研磨を複合的に用いる	V類	緑色岩類	重量があり比較的硬質で粘度がある 剥離にあまり適さず剥離面は粗面
F類	石製品 垂飾	直接打撃・敲打・研磨を複合的に用いる	VI類	その他	多種多用な希少石材

第2表 石器及び石材分類表

にあたっては、石器製作時の剥片剥離技術は従来の実測図で器種・形態の典型例を図示し、それ以外のものについては使用痕を重視し、使用時の情報を掲載することにした。このように図示を行った意図は、縄文時代の石器分析では製作時の情報（技術形態学的情報）以上に使用時の情報（機能形態学的情報）が重要であると考えられるからである。特に、打製石斧についてはこの点を重視した。

また、スクレイパーの場合、これまでの表現方法では区別ができない剥片剥離の方法（押圧剥離：P・直接打撃：D・使用による微細な連続剥離：M）を記号として付した。この大別を行うことにより従来看過されていたスクレイパーの有機的意味を見い出そうと試みた。

石器の形態と同様に石材の情報も同時に識別できるよう、個々の図には石材の略称を付した。これは同一器種での形態差と石材の性質との関係を調べるためである。

なお、石器の実測には効率化を図るため、長焦点法により撮影した写真（小川忠博撮影）を原寸・1/2・1/3に引き伸ばしたものを用いた。そして、写真図版にもこの写真を利用することにした。また、それ以外の石器についてはデジタルコピー機を利用して実測図を作成した。

（４）遺構・遺物相互の分析方法

遺跡の景観を明かにするためには、個々に検討してきた遺構と遺物を関連付けて、総合的に分析を行う必要がある。ここでは、遺構・土器群・石器群とこれまで個々に記載と分析を行ってきたが、これらを相互補完的に判断すると明かになる部分について、検討を行うものである。

遺構と土器群と石器群の時間的変遷を明かにする必要がある。例えば、住居址では遺構分析によって抽出された住居形態と、土器群の変遷が整合性をもつかどうか、換言すれば住居形態が型式組列を保持しているかどうか、検証することである。この方法は土壌についても同様である。

また、石器群の場合、時間的検討は個別には行ってきていないので、土器群との共伴関係を調べることは重要な位置を占める。

そして、土壌群のような複数の遺構がまとまっている箇所の時期的・機能的意味を検討することもこの段階で行う。例えば、土器のみが検出された土壌と、石器のみが検出された土壌がまとまっていた場合、一緒に検討して初めて意味が理解されることになる。

このように個々の分析でははっきりしなかった部分を検討し、細分化された諸要素を再び総合化する様々な作業を同時進行形で実施することにより遺跡の意味を明かにして行く。そして、最後に同時に併存する遺構・遺物とその時空的意義を明かにし、集落の景観を復元することで報告書の作業は終了することになる。

種別	器種	形態	分類基準・特徴
A類	石鏃	I	凹基無茎
		II	平基無茎
	石錐	I a	摘み無し・小形
		II a	摘み有り・小形
		II b	摘み有り・大形
	石匙A類	II c	先端部作出・大形
		I a	縦形・押圧剝離による精緻な調整
	スクレイパーA類	II a	横形・押圧剝離による精緻な調整
		I a	押圧剝離による精緻な調整
		I b	押圧剝離と直接打撃による調整
		II	直接打撃による粗雑な調整
		III	縁辺微細剝離（一辺の1/2以上）
III		縁辺微細剝離（一辺の1/2以下） 両極技法により両端部が潰れている	
B類	打製石斧	I	撥形・急角度調整・断面蒲鉾形・片刃 （細部の違いによりさらにa～h形態に細分）
	スクレイパーB類	II	撥形～短冊形・両面調整・断面レンズ状・両刃 （細部の違いによりさらにi～q形態に細分）
		I a	押圧剝離を主体とした精緻な調整
		I b	粗雑な押圧剝離と細かい直接打撃による調整
		II	直接打撃による調整
		III	縁辺微細剝離（一辺の1/2以上）
	石匙B類	I a	縦形・押圧剝離と直接打撃を併用した調整
		II a	横形・押圧剝離と直接打撃を併用した調整
		II b	横形・大形で直接打撃による調整
	リタッチドフレイクB類	III	縁辺微細剝離（一辺の1/2以下）
	C1類	磨石	I
II			楕円形
III			棒状
IV			四角形
V			不定形
石皿		I a	円形・作業面は凹面
		I b	円形・作業面は平坦
		II a	楕円形・作業面は凹面
		II b	楕円形・作業面は平坦
		III b	不定形・作業面は平坦

第3表 石器器種分類表（1）

種別	器種	形態	分類基準・特徴
C 1 類	凹石	I a I b I c II a II b II c III a III b III c IV a IV b V a V b V c	円形・切り合い関係は磨→凹 円形・切り合い関係は凹→磨 円形・凹のみ 楕円形・切り合い関係は磨→凹 楕円形・切り合い関係は凹→磨 楕円形・凹のみ 棒状・切り合い関係は磨→凹 棒状・切り合い関係は凹→磨 棒状・凹のみ 四角形・切り合い関係は磨→凹 四角形・切り合い関係は凹→磨 不定形・切り合い関係は磨→凹 不定形・切り合い関係は凹→磨 不定形・凹のみ
C 2 類	台石 敲石 砥石	I II III IV V I II III	円形 楕円形 棒状 四角形 不定形 荒砥 中砥 仕上砥
D 類	石棒 棒状礫 多孔石 丸石		加工痕有り 加工痕無し 凹有り 凹無し
E 類	磨製石斧	I a II a II b III a	小形・断面楕円形 中形・断面楕円形 中形・定角式 大形・断面楕円形

第 4 表 石器器種分類表 (2)

III 遺跡の地理的・歴史的環境

1 地理的環境

安中市は群馬県西部に位置する。碓氷峠付近に源を発する碓氷川が市の中心を西から東へ流れる。本遺跡群の存在する中野谷地区は安中市の南部に当たる。この場所は碓氷川河岸段丘の上位段丘に相当し、なだらかな横野台地が広範囲に広がっている。台地の北側には碓氷川と支流の柳瀬川により形成された下位段丘面が広がり、台地との境には段丘崖線が存在する。一方、台地の南側には鎗川の支流星川が流れ、この河川によって浸食された急峻な峡谷が存在する。また、南西には妙義山に源を発する高田川が流れ、この沖積低地との間にも急峻な段丘崖線が存在する。

横野台地は中野谷地区で南北1.5kmほどの幅を有し、碓氷川流域では最も台地の幅が広い地域である。この台地の南部には猫沢川と呼ばれる小河川が北東方向へ流れ、これに注ぎ込む小河川により台地は浸食され、細長い舌状台地が連続する地形を呈する。

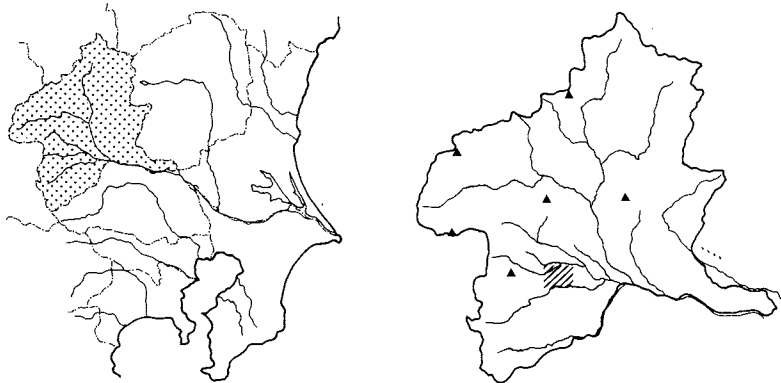
大下原遺跡・吉田原遺跡はこの台地の南端部に存在する。遺跡の北を猫沢川が流れ、南側は急峻で出入りの多い崖線が存在する。この細長い台地は馬の背状に丘陵性の地形が東西に延び、碓氷川と鎗川の分水嶺となっている（第4図・第5図）。

微地形をみると、遺跡の存在する場所は北に傾斜した斜面地であり、小谷地が北へ開く形で幾筋も入り込んでいる。大下原遺跡は比較的緩傾斜で平坦部が広い北斜面に存在する。東側には最も大きな谷地が深く遺跡の南側まで回り込むように入り込んでいる。遺跡の範囲は調査区の南西部にかけて及んでおり、200m×100mの規模を有している。標高は231m～245mである。一方、吉田原遺跡は北へ延びる小さな舌状台地の先端部に位置し、40m×50mの規模で、標高は225m～228mである（第6図）。

2 歴史的環境

本遺跡群及び周囲の遺跡は第4図及び第5表のとおりである。本遺跡と特に関連する遺跡について、概観する。注連引原遺跡（3）・同Ⅱ遺跡（4）は大下原遺跡の小谷地を挟み、東の丘陵に存在する。両遺跡は弥生時代中期初頭の遺跡として著名であるが、縄文時代前期・中期・後期の遺構・遺物も検出されている。また、大下原遺跡の東に隣接して、弥生時代中期初頭の下原遺跡（5）が存在する。下原遺跡出土の遺物についてはすでに報告されている（小野・新井1985）が、発掘調査が実施されていないため、遺跡の性格は不明である。

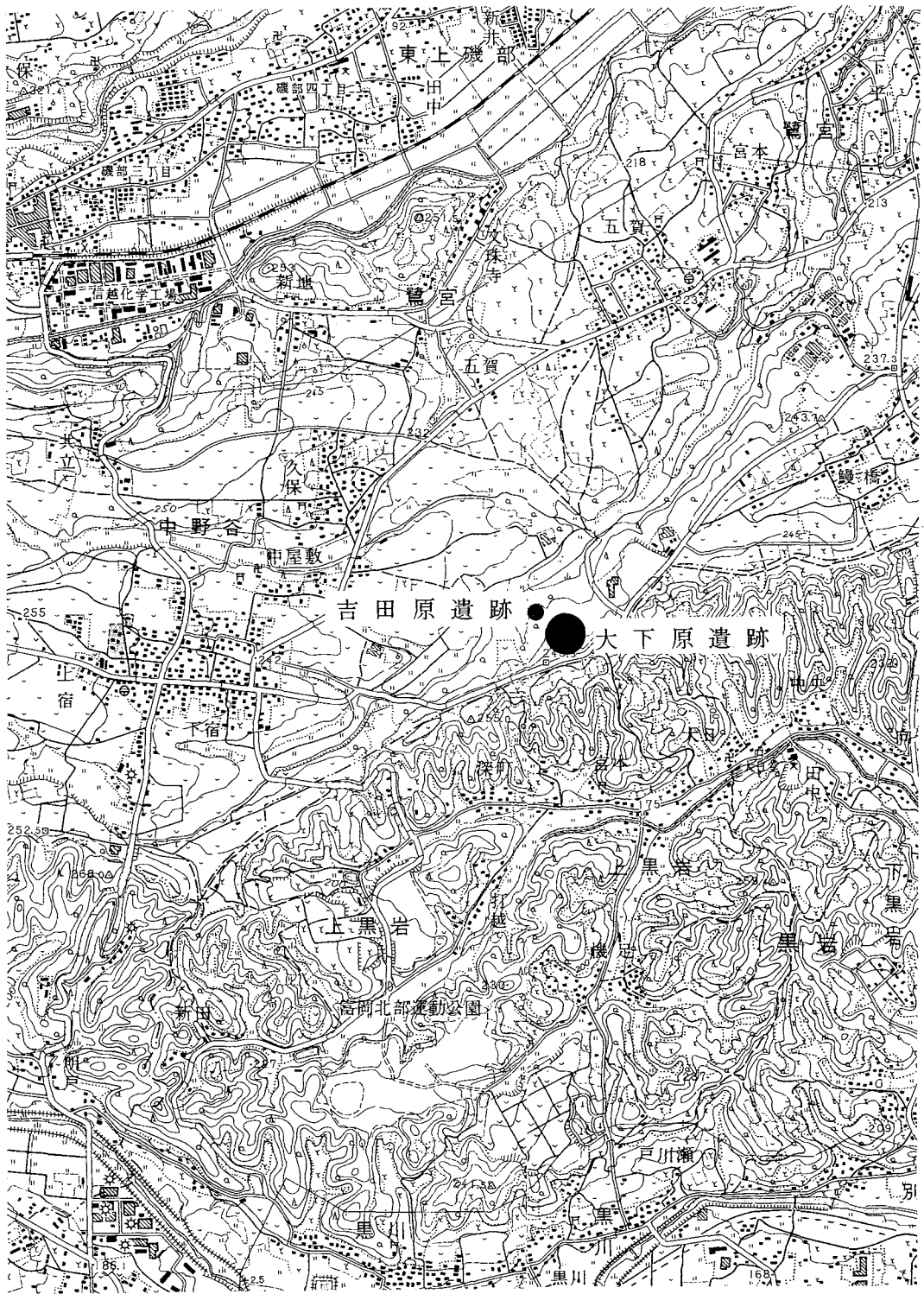
また、猫沢川を挟んで北の台地上には縄文時代前期前半の集落址である中原遺跡（6）、落合原遺跡（7）が存在する。そして、本遺跡群の北西に位置する東畑遺跡（13）では中期後半の敷石住居址が検出されている。



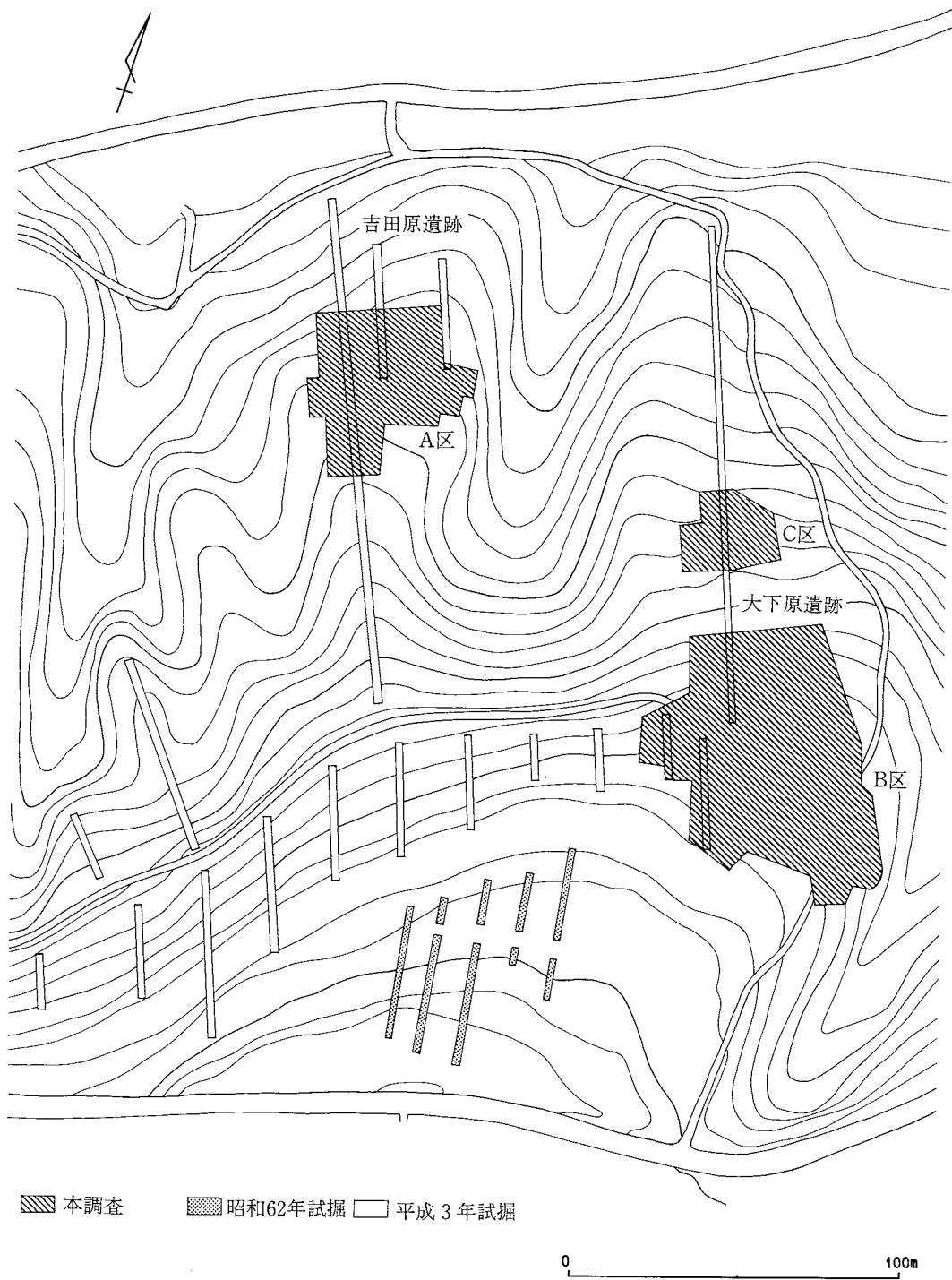
第4図 大下原・吉田原遺跡と周辺関連遺跡

	遺跡名			旧	縄			文			弥		古			奈良	平安
					草	早	前	中	後	晩	中	生	前	中	後		
1	大	下	原				◎	△			○					△	
2	吉	田	原				◎										
3	注	連	引	原			◎				◎						
4	注	連	引	原	*		○	*	△		◎					△	
5	下		原								○						
6	中		原			△	◎				*		△		?	◎	
7	落	合	原				△										
8	落		合	*			*	*			*	*		△	◎	◎	
9	北	下	原				○								?	◎	
10	下	塚	田				△	*						△	△	△	
11	北	東・堤	下				◎	△						◎	○		
12	金	井	谷	戸			◎	△									
13	東		畑				◎	△									
14	下	宿	東			*	◎	△	○				◎		?	◎	
15	細		田				◎	△					△	○	?	◎	
16	和	久	田				*	*					△		?	◎	
17	東	向	原				*	*							?	?	
18	天	神	原				◎	◎	◎	◎				○		◎	
19	松		原	△		*	◎	◎	○						◎	?	
20	田	中田・久保	田											◎		◎	
21	塩	ノ	久	保											◎		
22	西	裏・西	新	井			△	△							◎	◎	
23	諏	訪	辺													◎	
24	松	井田工業	団地					*			○		○		◎	◎	
25	上	人	見								◎						
26	経	塚	古	墳									◎				
27	荒	神平・吹	上				△	◎	○		◎		◎	○	◎	◎	
28	道	前	久	保			◎	◎	◎						◎	◎	
29	蔵		畑											◎	◎		
30	諏	訪	ノ	木							◎				◎		
31	上	黒	岩				◎										

第5表 周辺遺跡一覧表



第5図 遺跡位置図 (1 : 25,000)



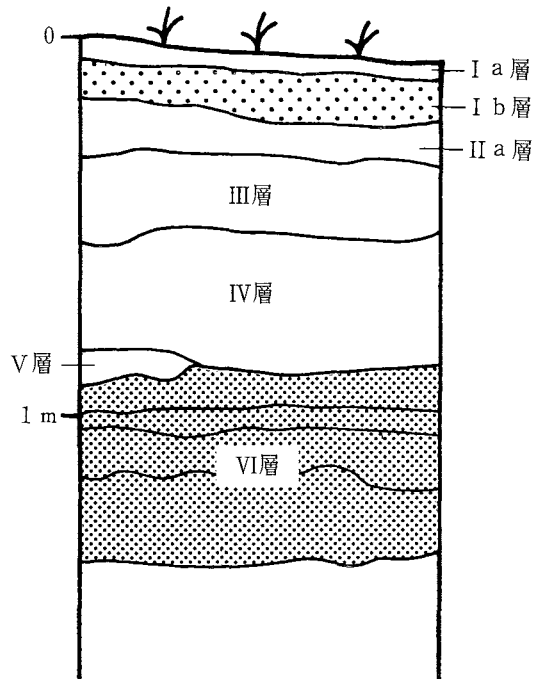
第6図 調査区の位置と周辺地形 (1 : 2,000)

3 層序

本遺跡群の基本層序は第7図のとおりであり、土層説明は第6表のとおりである。ここでは主として縄文時代以降の層序について述べる。それ以前の各土層の詳細及び自然科学的方法による分析については、VI章で記す。

本遺跡は調査前は山林であったため、ほぼ全域に渡ってAs-A軽石は純層で堆積していた。また、A軽石の上部にはほとんど土壌が形成されていない状態であった。しかし、北から西を向いた傾斜地であるため、下層の示準テフラであるAs-B軽石は残存状態が非常に悪い。これと同様な状況は東に隣接する注連引原遺跡においても確認されており、この地域全体に渡ってこのような状態が広がっていると推定される。

縄文時代の遺物包含層はIII~IV層である。そして、遺構の覆土は縄文時代前期ではIV層に近似した土質である。また、弥生時代・平安時代ではIII層に近似した土質である。したがって、本来縄文時代の遺物を包含する土層はIV層と推定される。なお、IV層は非常に硬くしまった土壌であり、この層が堆積したと推定される遺構の覆土も非常に硬くしまっている。縄文時代の遺構では地山と遺構覆土の識別を困難な状態にしている。



第7図 基本層序柱状図

層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物					備考
					RP	RB	YP	As-A	As-B	
I a 層	黒色土層		△	△				◎		
I b 層	灰白色軽土層		×	×				◎		純層
II a 層	黒色土層		△	△					◎	
III 層	黒褐色土層	II a < III	△	○						
IV 層	暗褐色土層	III < IV	○	○	*		*			
V 層	暗黄褐色土層	IV < V	◎	◎	◎	○	*			
VI 層	黄色軽石層	V < VI	×	×			◎			純層

第6表 基本土層説明

IV 遺跡各説

1 吉田原遺跡

(1) 遺跡の概要

吉田原遺跡は縄文時代前期中葉（関山・神ノ木～黒浜・有尾期）の集落遺跡である。遺構としては住居址5軒、集石土壇2基、集石2基、土壇11基、陥穴1基などが検出された(第8図)。本遺跡は前期段階に数回に渡って小規模な集落址が形成された場所と推定される。

また、前期後半（諸磯b期）には集石土壇、土壇が作られている。小規模な活動の場として利用されていたことが推定される。

(2) 縄文時代の遺構と遺物

a 遺構

住居址（第9図～第12図）

縄文時代前期前半の住居址が5軒検出された。各住居址の形態及び諸特徴及については第9図～第11図ならびに第7表のとおりである。

本遺跡の住居址は形態から2群に分類することができる。すなわち、長方形に近く、掘り込みの深いJ-4・J-10号住（IA形態）と、やや隅の円い正方形で、掘り込みの浅いJ-1・J-2・J-3号住（IIB形態）に分かれる。

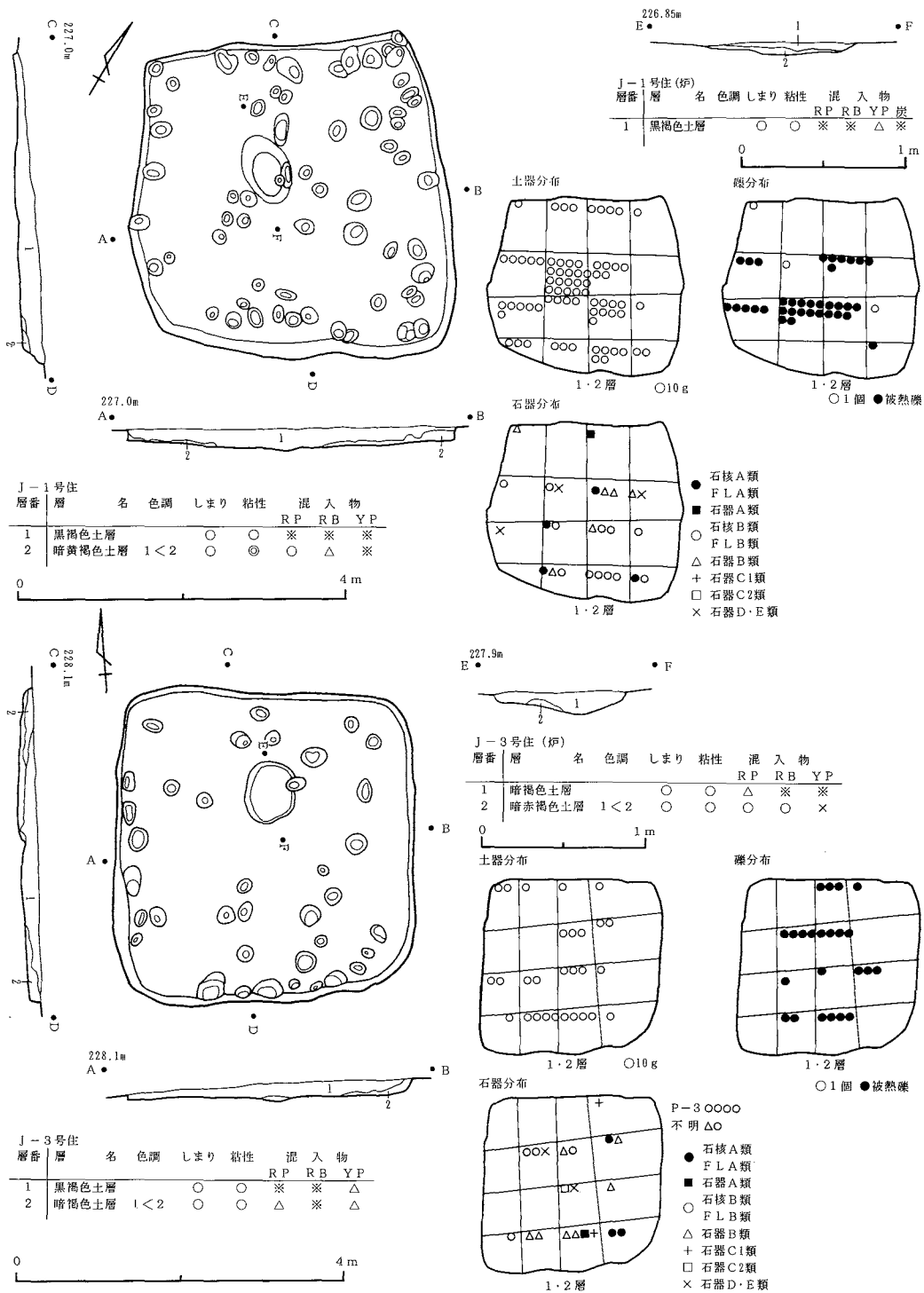
前者は主柱穴が内側に直線的に2本～5本存在する以外に、壁際に規則的に並んだ主柱穴を有する。それに対し、後者では内側に「ハ」の字状に4本～6本の主柱穴が存在する。また、多数の補助柱穴が内側及び壁際に存在する。

炉址は明確でないものが多いが、J-1号住・J-3号住は地床炉である。そして、J-10号住は底面に平たい河原石が置かれていたが、石囲炉の縁石が抜き取られたものと推定される。このように、IA形態とIIB形態の住居址では炉址でも差異が認められる。そして、いずれの炉でも北東部分にいわゆる「Cピット」が存在する点では共通性が認められる。

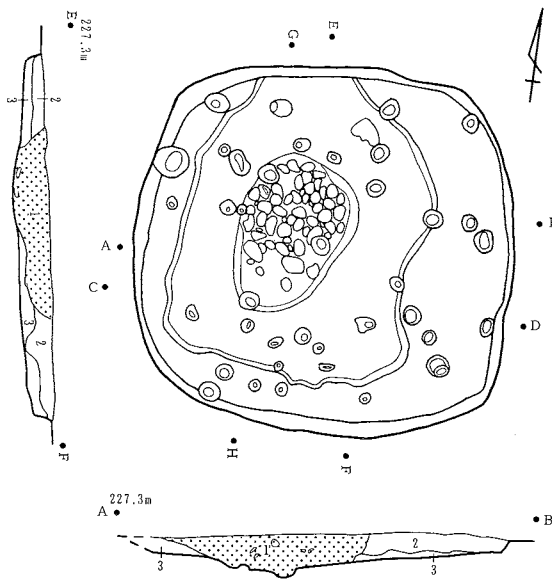
[住居址の遺物出土状態]

各住居址の層ごとの土器・礫・石器の分布状況を調べると、すべての遺物の分布が一致する場合と、必ずしも分布域が一致しない場合がある。前者は一般的な廃棄のパターンを表していると考えられる。それに対し、後者の場合、その部分だけ何らかの人為的要因により特定の遺物が廃棄または遺棄されたものと推定される。例えば、J-1号住6区、J-10号住7区にこうした現象が認められる。

特に、J-10号住はの場合、この部分に諸磯b式の土器が集中し、礫も周囲に比べ著しく少ない。したがってこの場合には、住居埋没段階に諸磯b期の土壇が作られ、その際に礫が取り除か

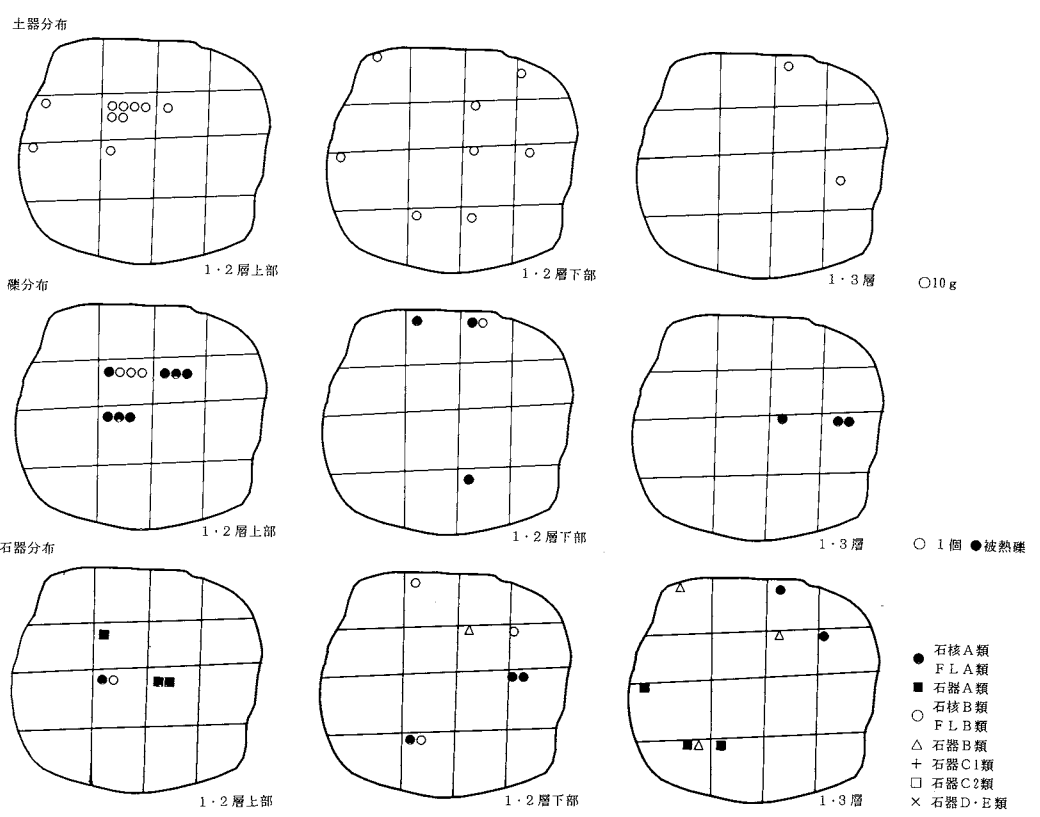
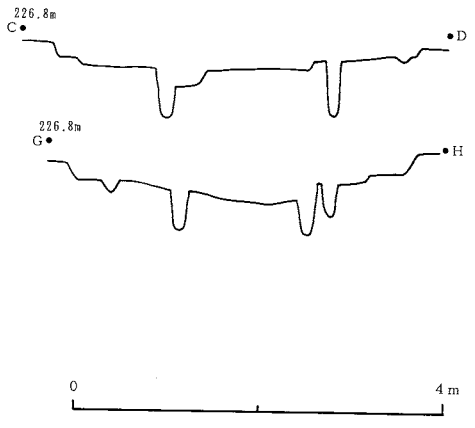


第9図 J-1号・J-3号住居址実測図

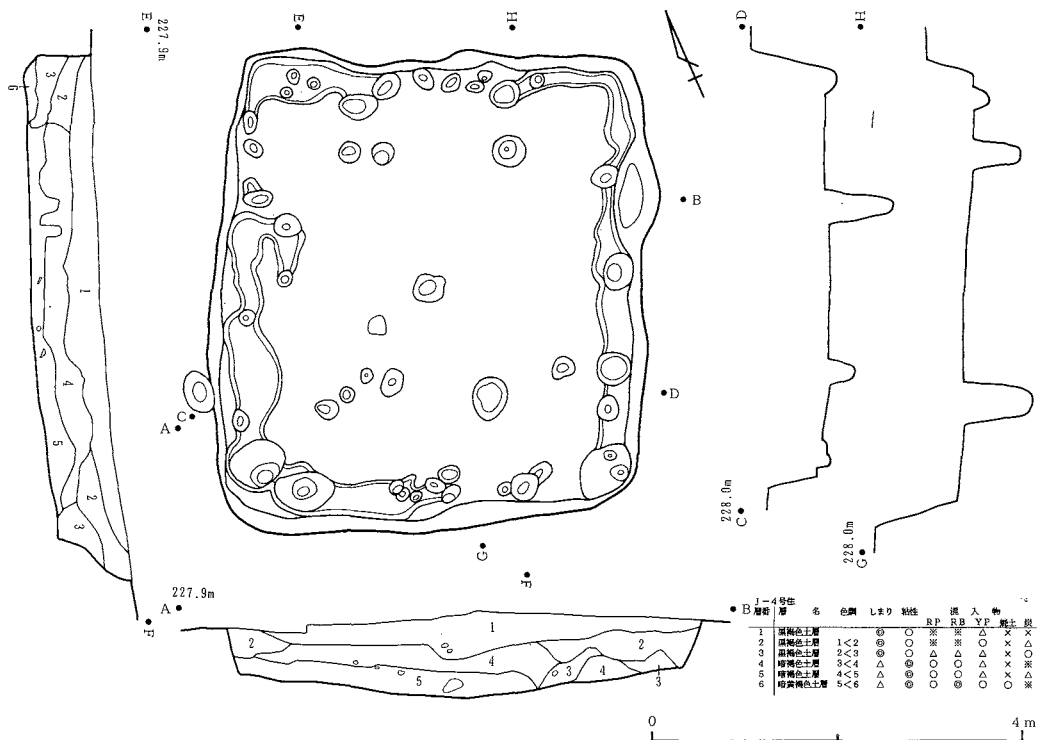


J-2号住

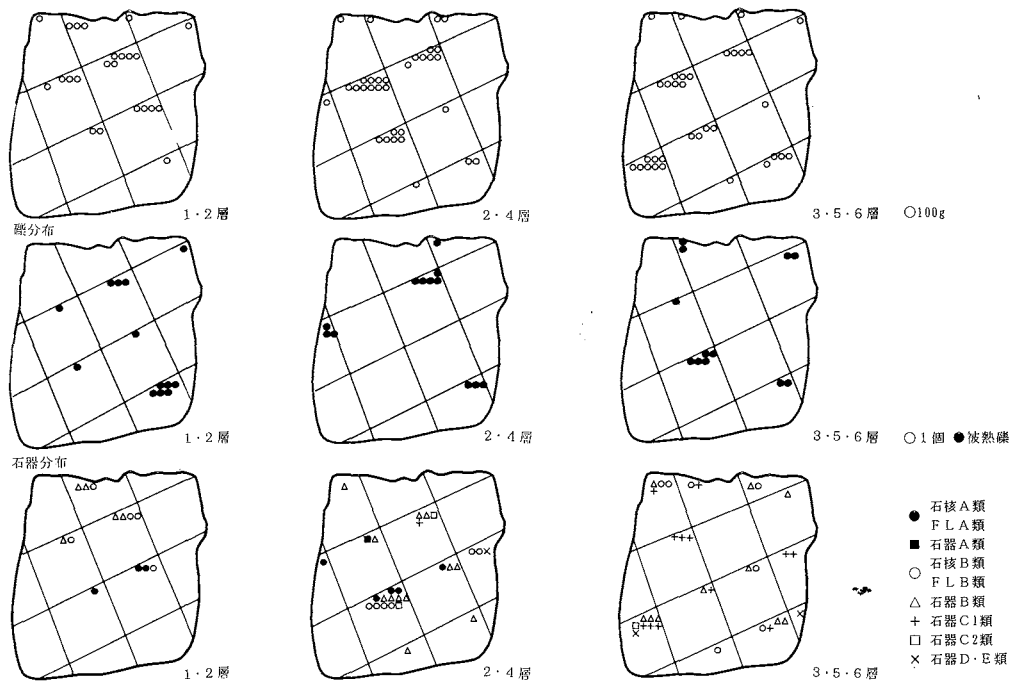
層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物		
					RP	RB	YP
1	黒褐色土層		○	○	※	※	※
2	黒褐色土層	1<2	○	○	△	※	※
3	暗褐色土層	2<3	○	○	△	△	※



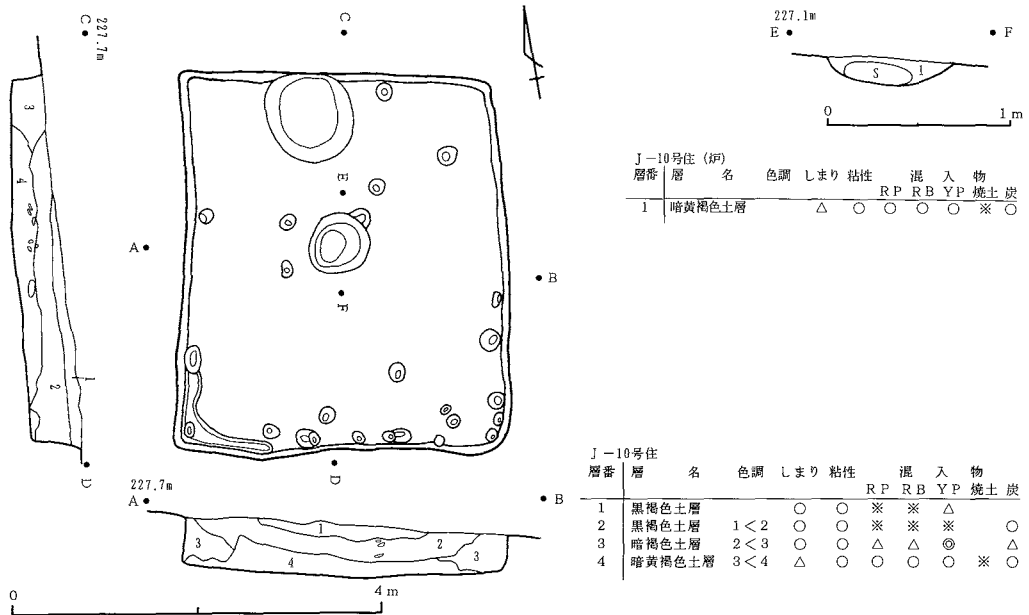
第10図 J-2号住居址実測図



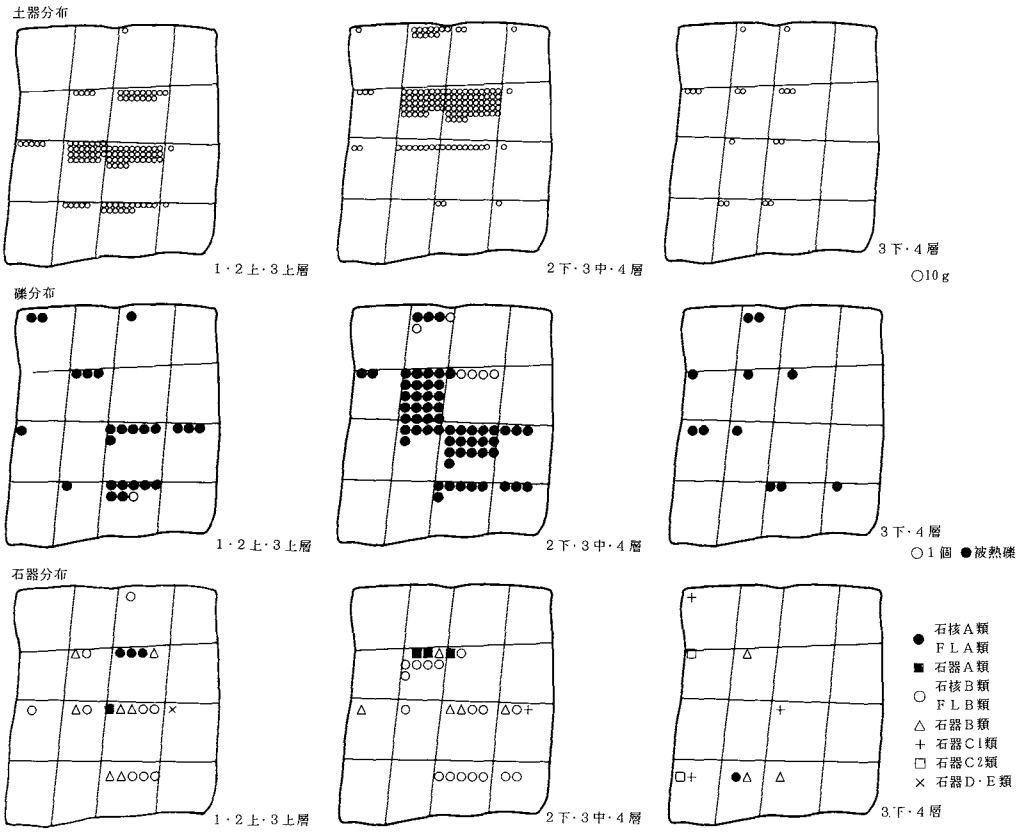
土器分布



第11図 J-4号住居址実測図



層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物			
					RP	RB	YP	焼土炭
1	黒褐色土層		○	○	※	※	△	
2	黒褐色土層	1<2	○	○	※	※	※	○
3	暗褐色土層	2<3	○	○	△	△	◎	△
4	暗黄褐色土層	3<4	△	○	○	○	○	※ ○



第12図 J-10号住居址実測図

れ、その後に土器が再び廃棄された可能性が高い。また、同じ諸磯b期にはJ-2号住の中央に集石土壙(S-1)が作られており、重複パターンが類似している。

このように、かつて住居が存在した場所は、埋没過程においても他の場所と異なった景観を呈していたので識別され、再度利用されることが多かったと考えることができる。したがって、詳細に分析を行うことなく、単純に一括遺物とすることは危険である。

土壙・陥穴(第13図)

D-1号は陥穴であるが、遺物が全く検出されなかったので時期は判然としないが、早期の遺構の可能性はある。

土壙は調査区南西部にと北東部にややまとまる傾向がある。南西部の土壙は大形で長楕円形を呈するものが多く、北東部のものは小形で楕円形のものが多い。これらの土壙はほとんど浅い掘り込みのもので、遺物もほとんど検出されなかった。しかし、周囲の住居址配置状況から、前期のものとして推定される。

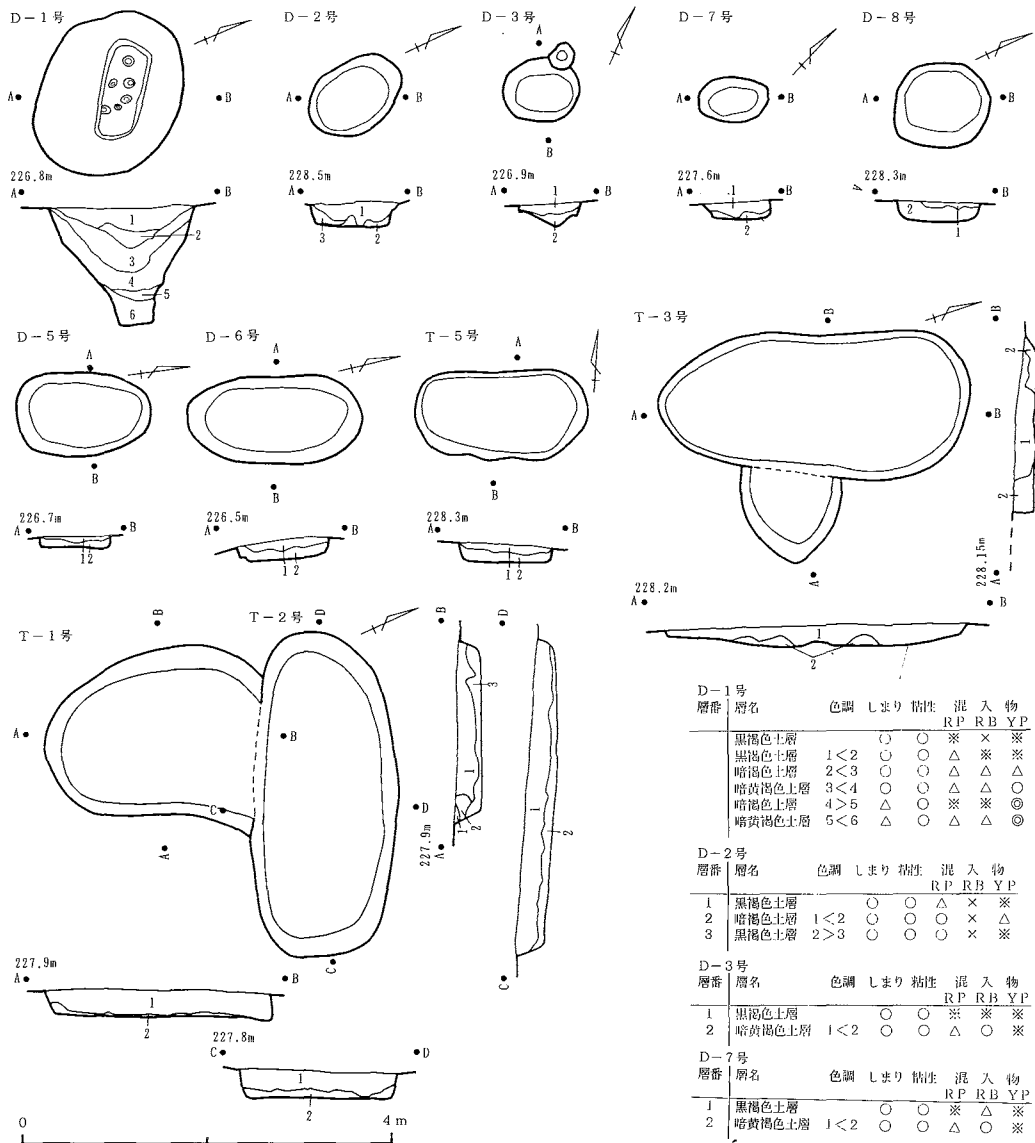
集石・集石土壙(第14図・第15図)

集石2基、集石土壙2基が検出された。集石であるS-1は傾斜方向に礫が散乱した状態を呈しており、本来はまとまっていたものと推定される。礫の垂直分布からみて、掘り込みは存在していなかった可能性が高い。この遺構からは石鏃・棒状礫が出土している。また、J-1号住居址に隣接しており、関連性が窺える。S-2は調査区南西部の土壙群に隣接する。非常に小規模にまとまっていたものであるが、この遺構は掘り込みがあった可能性がある。いずれの集石も礫はほとんど被熱の痕跡が認められる。

集石土壙は2基とも類似した形態を呈しており、いずれの遺構とも礫が赤化し、炭化物を大量混入していた。これらは調理施設としての機能を有していたと推定される。J-2号住居址と重複するJ-2号住S-1は諸磯b期の土器・磨石・凹石などが検出されているが、S-3ではほとんど土器が検出されなかったため、時期ははっきりしないが、遺跡の状況から前期の所産と推定される。

住居番号	平面形態	規模			主柱穴		補助柱穴		炉址形態	規模		付帯施設
		EW	NS	深さ	位置	本数	位置	本数		長軸	短軸	
J-1	隅円方形	389	385	28	内	6	内・壁	45	地床	86	58	
J-2	隅円方形	392	408	29	内	8	内・壁	26	—	—	—	
J-3	隅円方形	363	371	27	内	4	内・壁	29	地床	76	62	
J-4	正方形	453	512	89	内	5	内・壁	28	—	—	—	壁溝
J-10	長方形	398	402	58	内	2	内・壁	18	石囲?	64	62	土壙

第7表 住居址観察表



D-1号 層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物		
					RP	RB	YP
	黒褐色土層		○	○	※	×	※
	黒褐色土層	1<2	○	○	△	※	△
	暗褐色土層	2<3	○	○	△	△	△
	暗黄褐色土層	3<4	○	○	△	△	△
	暗褐色土層	4>5	○	○	※	※	◎
	暗黄褐色土層	5<6	△	○	△	△	◎

D-2号 層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物		
					RP	RB	YP
1	黒褐色土層		○	○	△	×	※
2	暗褐色土層	1<2	○	○	○	×	△
3	黒褐色土層	2>3	○	○	○	×	※

D-3号 層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物		
					RP	RB	YP
1	黒褐色土層		○	○	※	※	※
2	暗黄褐色土層	1<2	○	○	△	○	※

D-7号 層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物		
					RP	RB	YP
1	黒褐色土層		○	○	※	△	※
2	暗黄褐色土層	1<2	○	○	△	○	※

D-8号 層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物		
					RP	RB	YP
1	暗褐色土層		△	○	△	※	※
2	暗黄褐色土層	1<2	△	○	○	※	※

T-5号 層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物		
					RP	RB	YP
1	暗褐色土層		△	○	△	※	※
2	暗黄褐色土層	1<2	△	○	○	※	※

T-1号 層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物		
					RP	RB	YP
1	暗褐色土層		△	○	○	※	※
2	暗黄褐色土層	1<2	△	○	◎	○	※
3	暗黄褐色土層	2<3	△	○	◎	○	※

D-5号 層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物		
					RP	RB	YP
1	黒褐色土層		○	○	△	※	※
2	暗褐色土層	1<2	○	○	△	※	※

T-3号 層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物		
					RP	RB	YP
1	暗褐色土層		△	○	△	×	×
2	暗黄褐色土層	1<2	○	○	○	○	×

T-4を切っている

T-2号 層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物		
					RP	RB	YP
1	暗褐色土層		△	○	○	※	※
2	暗黄褐色土層	1<2	△	○	◎	○	※

D-6号 層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物		
					RP	RB	YP
1	黒褐色土層		○	○	※	※	※
2	暗褐色土層	1<2	○	○	△	△	※

T-4号 層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物		
					RP	RB	YP
1	暗黄褐色土層		△	○	△	△	×

第13図 土壤実測図

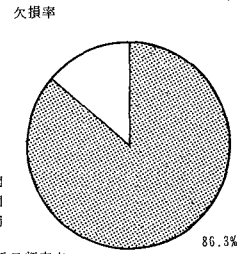
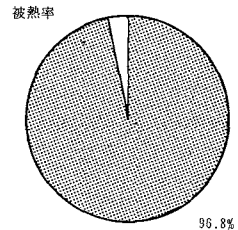
土壌番号	規模 (上端)		規模 (下端)		深さ	平面形態	断面形態	出土遺物
	WE	NS	WE	NS				
D-1	160	182	48	98	128	大楕円	碗状	少量の礫が出土
D-2	80	100	60	80	30	小楕円	皿状	
D-3	80	70	60	40	25	小楕円	皿状	
D-5	150	90	120	70	28	大楕円	皿状	
D-6	190	92	158	70	22	大楕円	皿状	
D-7	80	50	50	30	20	小楕円	皿状	
D-8	110	88	80	70	20	小楕円	皿状	
T-1	184	252	136	228	28	大楕円	皿状	
T-2	348	152	304	122	32	大楕円	皿状	
T-3	156	336	128	316	22	大楕円	皿状	
T-4	180	108	164	84	18	大楕円	皿状	
T-5	96	188	170	80	20	大楕円	皿状	

第8表 土壌観察表

番号	規模(EW×NS)	出土数	平均長	平均幅	平均厚	平均重量	被熱率	欠損率	石材
S-1	4.3m×3.1m	95	14.3cm	10.6cm	6.8cm	2.0g	96.8%	86.3%	安山岩
S-2	0.58m×0.83m	47	10.3cm	7.4cm	5.1cm	1.2g	97.9%	91.5%	安山岩
S-3	1.45m×1.53m	340	10.1cm	57.4cm	4.9cm	0.7g	72.1%	97.9%	安山岩
J-2・S-1	1.2m×1.7m	73	7.9cm	5.4cm	3.4cm	0.3g	93.2%	82.2%	安山岩

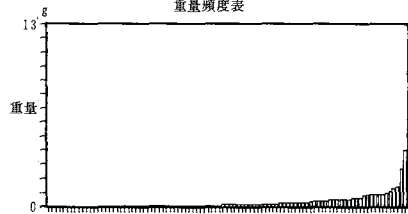
第9表 集石遺構観察表

S-1号集石遺構



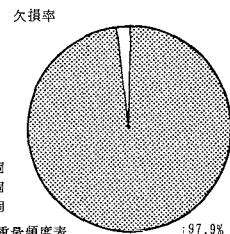
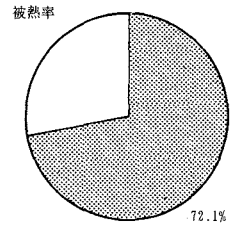
出土個数 95個
被熟個数 92個
欠損個数 82個

重量頻度表



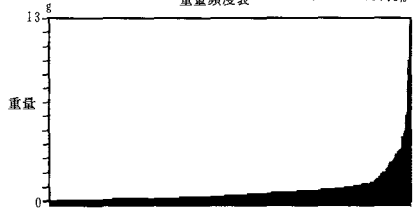
225.2m

S-3号集石土壇



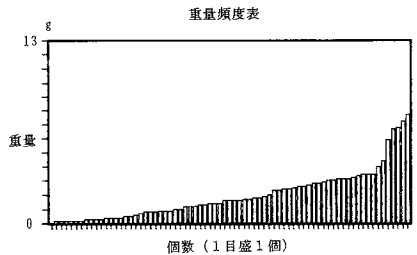
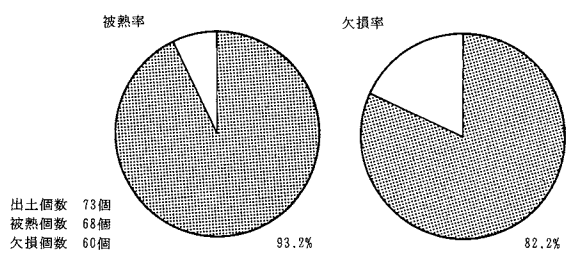
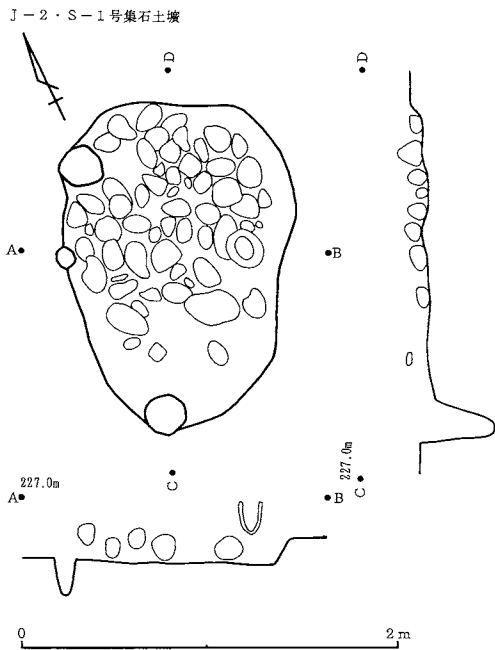
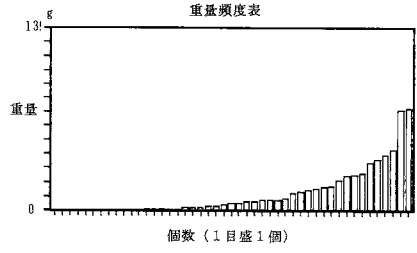
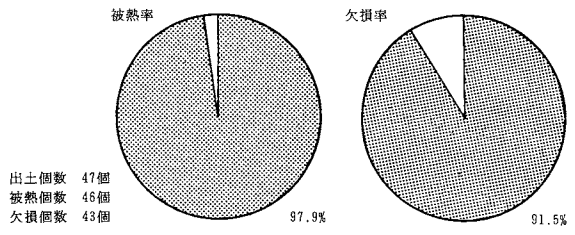
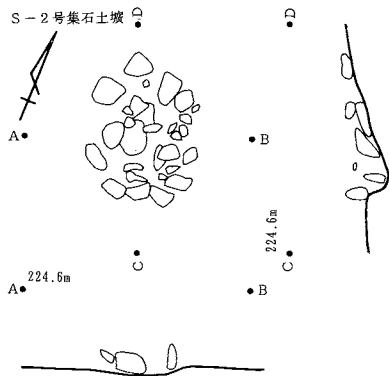
出土個数 340個
被熟個数 245個
欠損個数 333個

重量頻度表



224.2m

第14図 S-1・3号集石土壇実測図



第15図 S-2・J-2号住居址S-1集石土壇実測図

b 遺物

土器（第16図～第24図）

各住居址の遺物出土状況を見ると、J-4・J-10号住居址では下層の土器は型的にはほぼ同時期の一括遺物と考えられるが、上層には遺構とは別の時期の土器片が混入する傾向が共通して認められる。一方、出土土器の特徴を概観してみると次のようである。

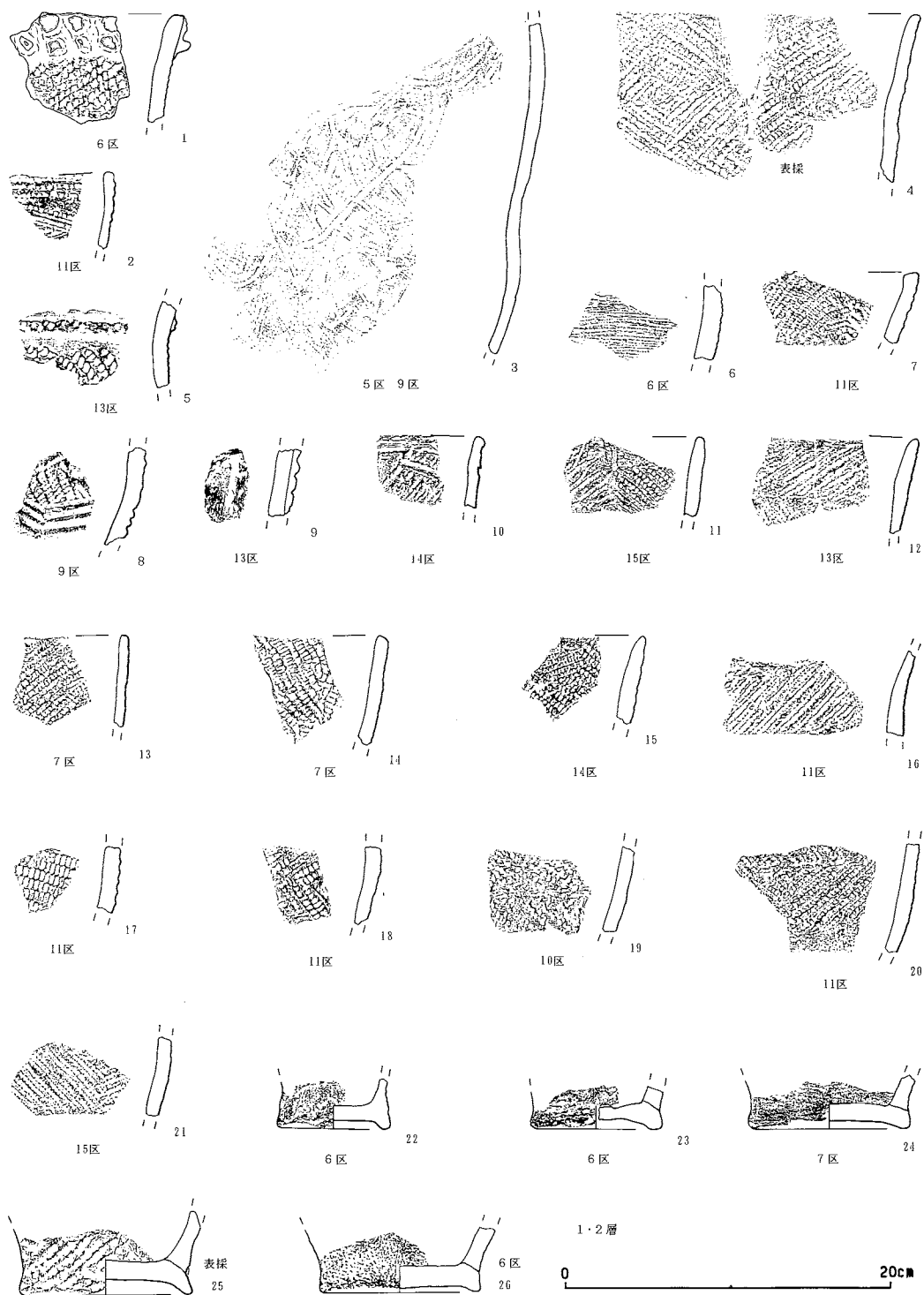
J-10号住居址出土の土器は、関山II式土器に特徴的である半截竹管による平行沈線で鋸歯状、渦巻状等の口縁部文様帯への施文されたものが見られた。出土した土器は、器形を窺えるものは無く、破片のみである。そして、口縁部文様帯が少なく、明確でないものが多いが、これも関山II式土器の特徴である。また、地文の縄文についても、直前段合撚り（正反の合）や附加条の土器が多く、ループ文や、結節、結束等の縄文施文の土器が少ないことから、本住居址から出土した土器の主体は、関山II式土器といえる。ただし、関山II式に見られる、組み紐施文の土器が本遺跡では見られないことから、本住居址が関山II式でも新しい時期になるのか、それとも地域的な特色なのかは、本遺跡の資料からは、はっきりしない。

J-4号住居址出土の土器は、J-10号住居址よりさらに新しくなる傾向を示す。口縁部文様帯の省略化がさらに進み、半截竹管による平行沈線で、鋸歯状や、菱形に施文されるが、文様帯の幅は、狭くなる。また、地文の縄文についても、直前段合撚りが少なくなり斜行縄文が多くなる。底部については、上げ底と平底が見られる等、10号住居址より新しい傾向を示すが、口縁部文様帯などの構成を考えると本住居址についても関山II式土器の範疇に入れられると考える。

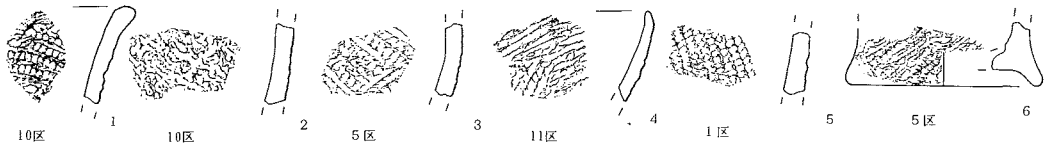
J-1号住居址出土の土器は、若干の関山II式土器の混入も見られるが主体となるのは、黒浜式土器である。文様が施文されている土器（3）のように沈線による胴部への規則性の無い乱雑な施文画見られる。地文の縄文に、附加条縄文を多用する、斜行縄文が多い等の特徴は黒浜式土器に多くみられることから、本住居址の土器は、黒浜式と考えられる。

J-2号住居址、J-3号住居址出土の土器については、出土遺物が少なく、文様を持つ土器も出土していないので、時期の確定は難しいが、縄文施文の土器からの判断になった。縄文施文の土器を見ると、附加条や、斜行縄文などの土器がJ-1号住居址の縄文施文土器と傾向が似ていることからJ-1号住居址とほぼ同時期のもと考えられる。

以上、土器を検討した結果、J-10→J-4→J-1・2・3といった時間的変遷が認められた。従来、群馬県においてこの時期の関山II式から黒浜式に変遷する過程で、いわゆる長野県で型式設定された神ノ木式・有尾式土器が伴う場合が多いのであるが、本遺跡からはこれらの土器がはっきりした形で遺構内から出土していない。本遺跡の周辺遺跡からは、神ノ木式・有尾式土器が出土していることから、本遺跡の性格を考えると、長野県地域の影響を受けない遺跡であると考えられ、今後このような遺跡が県内にあるのか検討すべき課題として残った。（関根慎二）

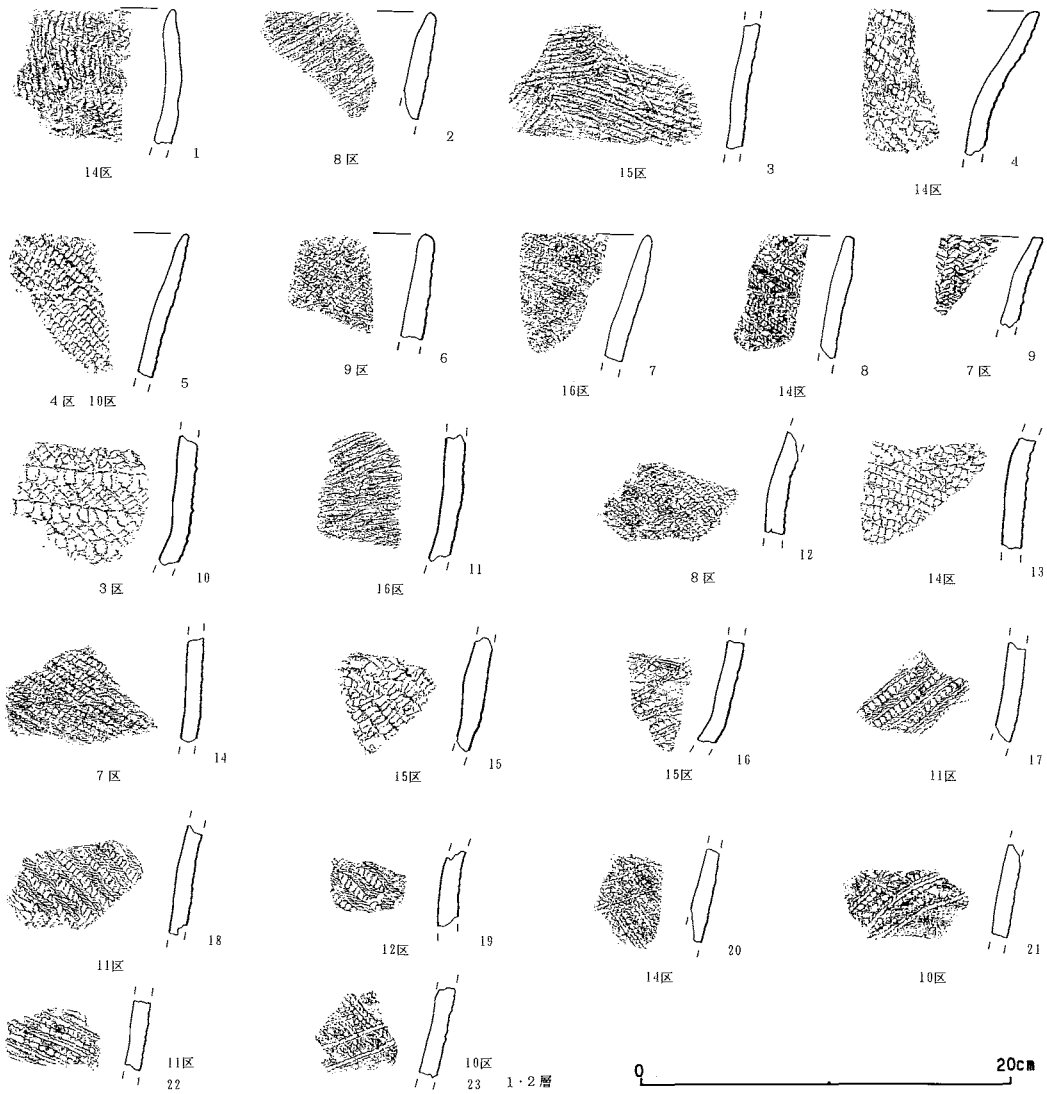


第16図 J-1号住居址出土の遺物

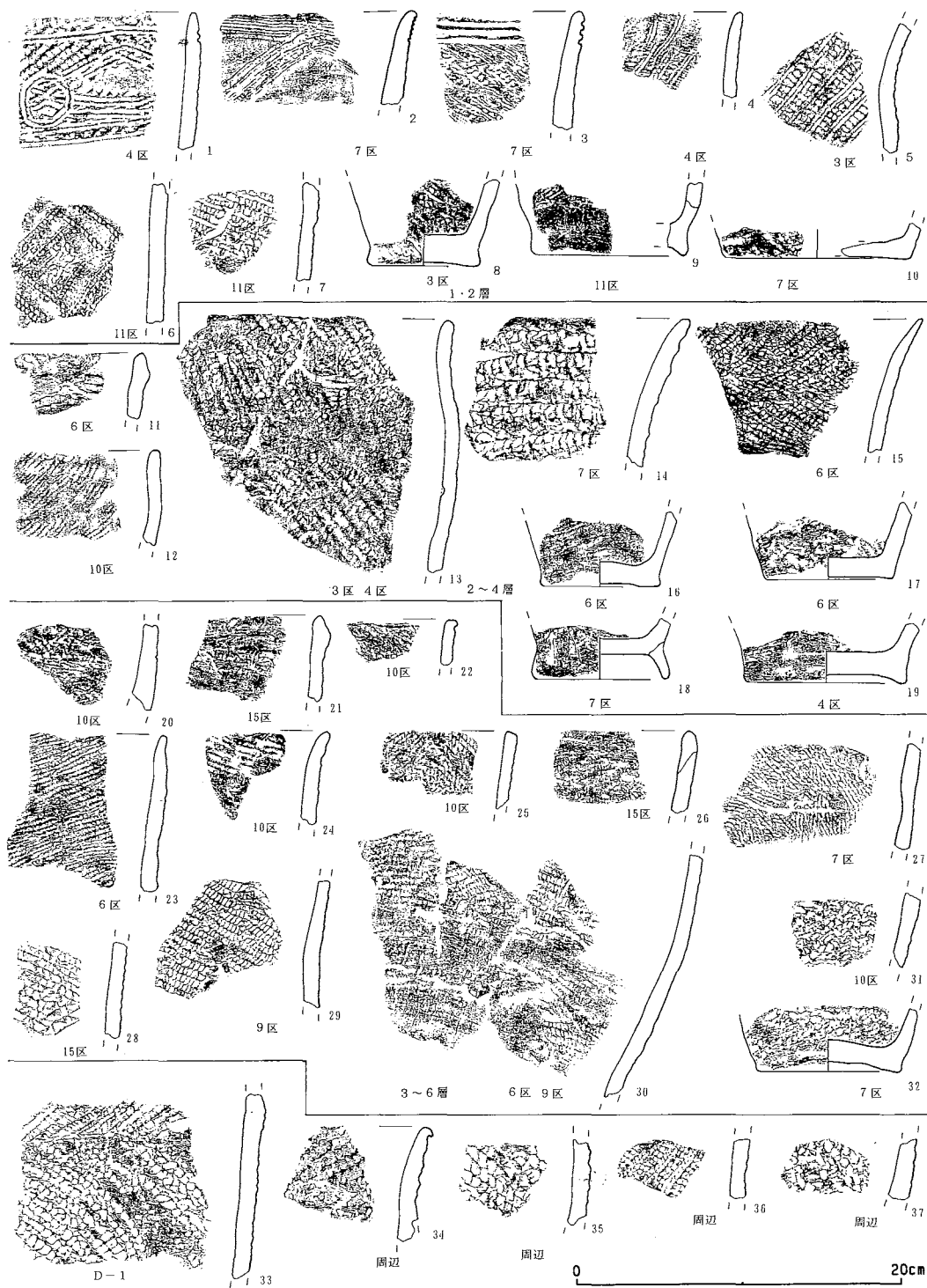


1・2層

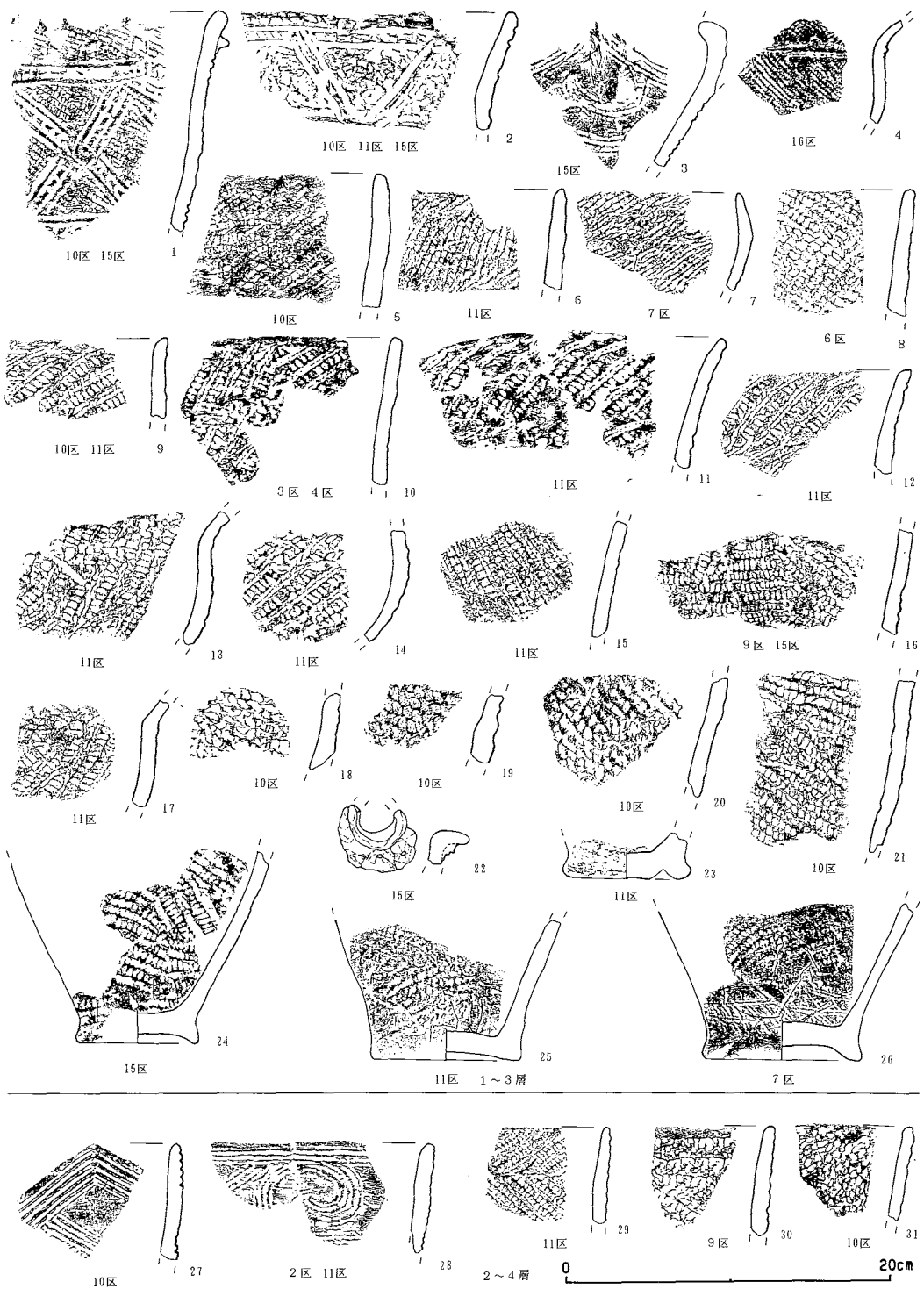
第17図 J-2号住居址出土の遺物



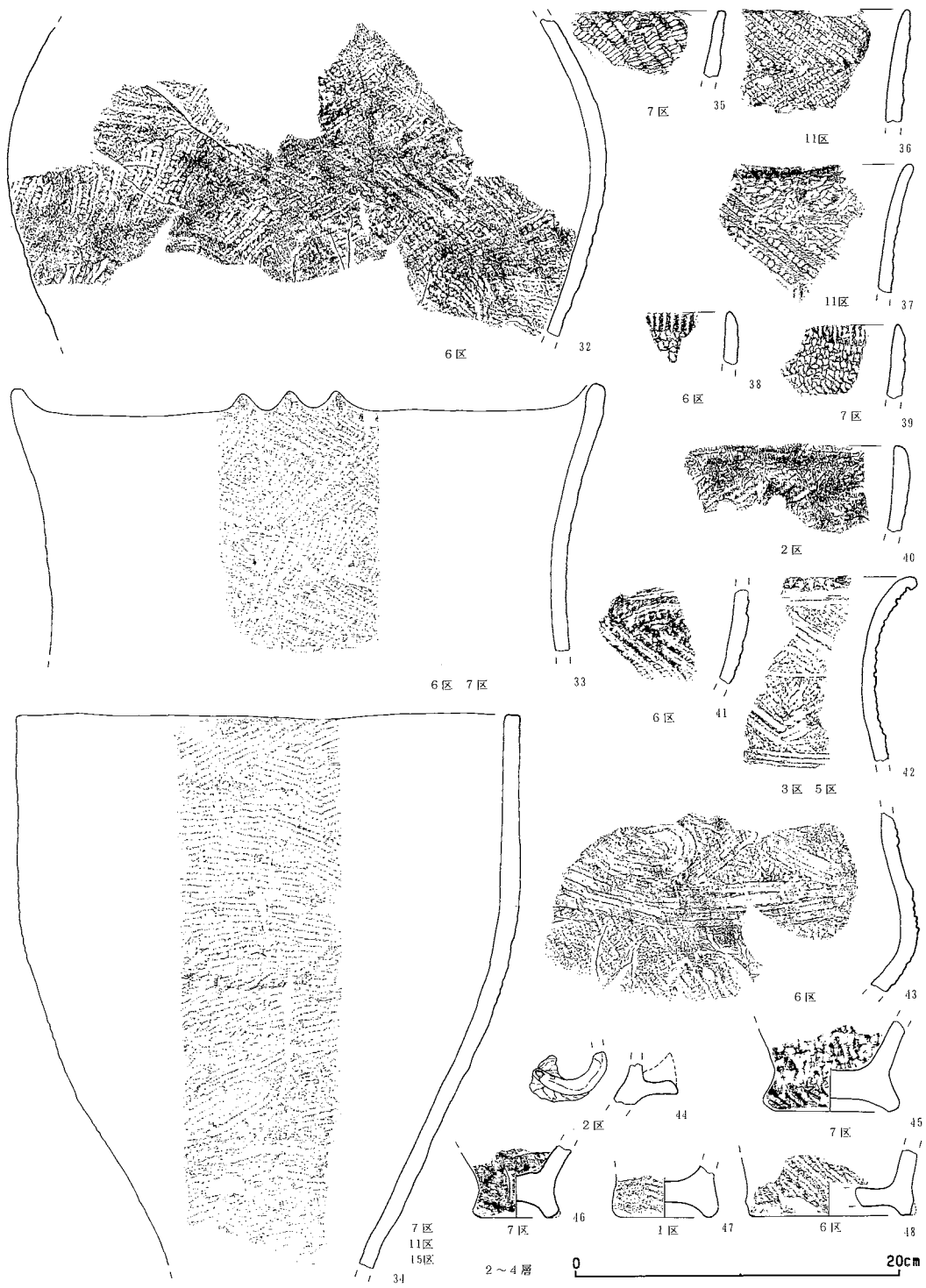
第18図 J-3号住居址出土の遺物



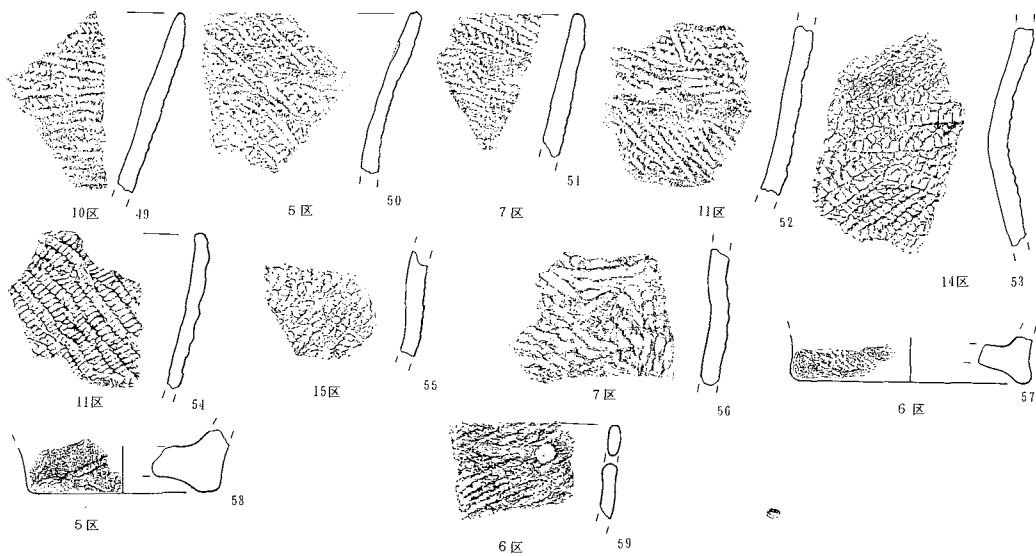
第19図 J-4号住居址出土の遺物



第20図 J-10号住居址出土の遺物(1)

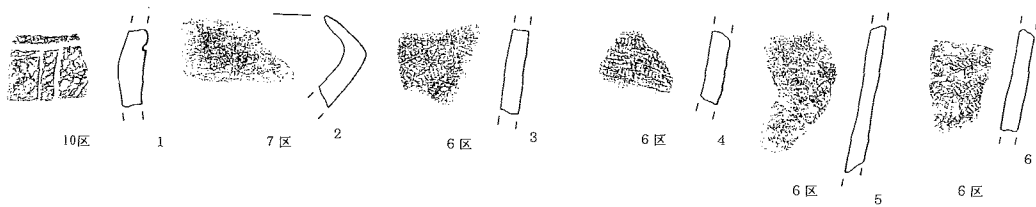


第21図 J-10号住居址出土の遺物(2)

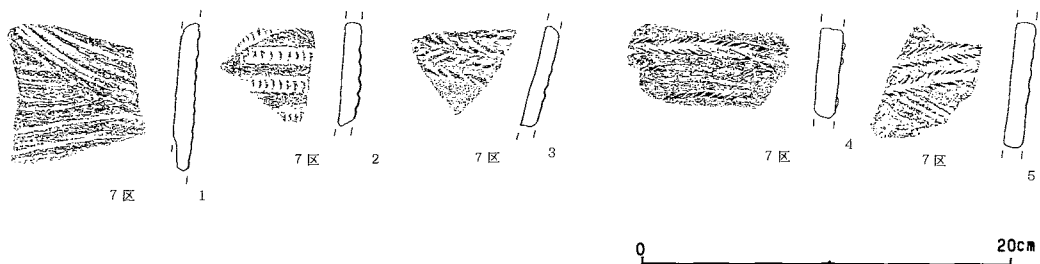


3・4層

第22図 J-10号住居址出土の遺物（3）



第23図 J-2号住居址出土の遺物（混在遺物）



第24図 J-10号住居址出土の遺物（混在遺物）

石器（第25図～第30図）

【石器組成】 各住居址の石器・石材組成は第25図・第26図のとおりである。J-1・2・3住居が石器の出土量が少なく、特定の種別・器種・石材に偏る傾向があるのに対し、J-4・J-10号は出土量が比較的多く、種別・器種・石材とも類似した傾向を示す。

次に、代表的な器種について述べる。なお、各器種の形態分類の基準は出土数量の多い大下原遺跡の分類に準拠している。

【石鏃】（第27図1～4） 4点すべてI形態かつ、黒曜石製である。欠損後、被熱により発泡したものが存在する（4）。これらの石鏃は多少時間差のある遺構から検出されているにもかかわらず、強い範型を保持していることが窺える。

【石匙A類・B類】（第27図5～15） この器種は前期には安定して存在する器種であり、12点検出された。すべて住居址から出土している。従来から摘み部を作出することから一括して扱われてきたが、形態差が大きく同じ機能を有している単一器種とはいえない。

精緻な押圧剝離により小さな摘み部が作出されたA類（5・13～15）と、B類（6～12）に二分可能である。

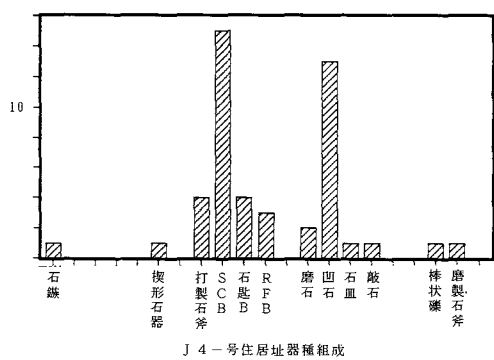
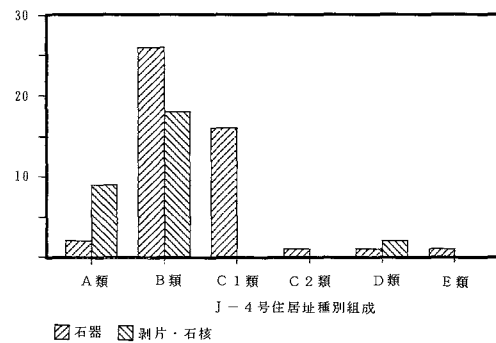
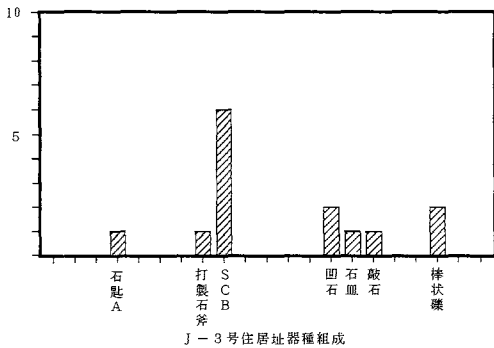
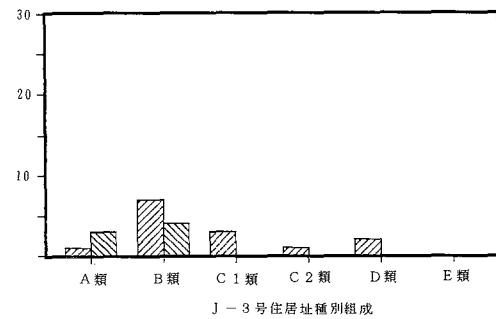
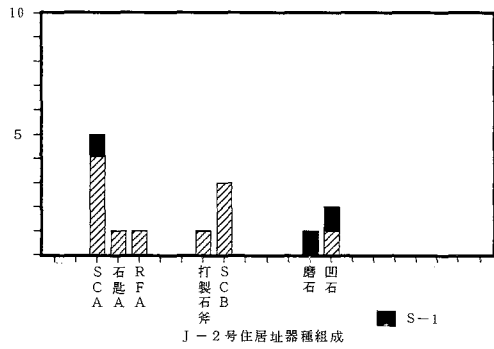
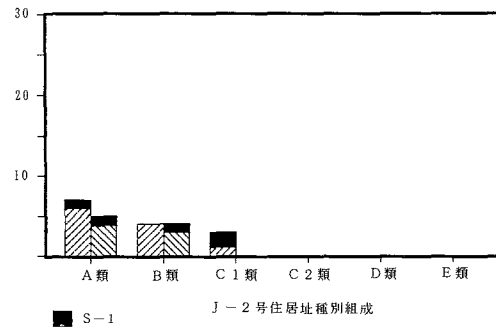
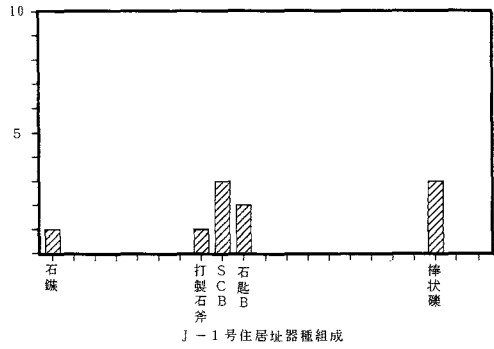
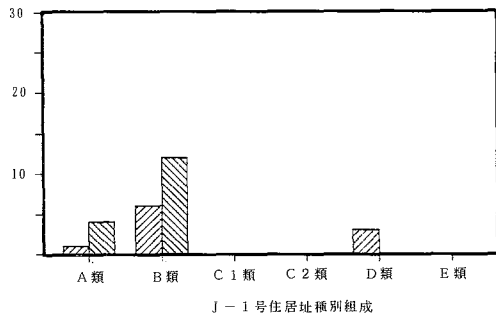
黒曜石、チャート、硬質頁岩等良質の石材は石匙A類に多用される。縦形のI a形態（5）と、横形のII a形態（13～15）に細分できる。数量が少なく、範型を認定し難いが、14・15では瘤状突起を意図的に作出しており、同一住居址から出土しているため、範型の一つと推定される。

一方、石匙B類は頁岩・安山岩製であり、この遺跡の例では押圧剝離と直接打撃を併用している。縦形のI b形態（6～8）と、横形のII b形態（9～12）に細分される。縦形では6・7が比較的強い範型を有していることが看取される。これに対し、横形では範型が弱い。

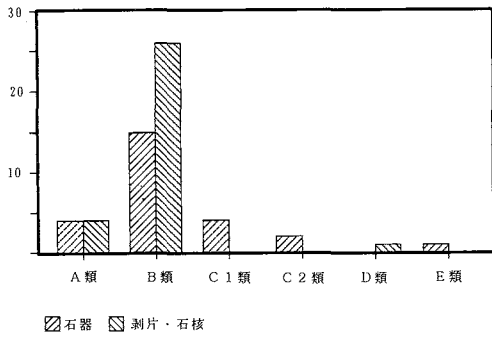
縦形横形が同一住居址で共伴する例が認められるものの、最も古いJ-10住居で縦形が多い傾向がある。

【打製石斧】（第27図16～21） 直接打撃により調整が施された斧形の石器を一括した。この器種は10点検出されたが、すべて頁岩製である。本遺跡では撥形・片刃のI a形態（16～20）と撥形・両刃のII j形態（21）が出土しているが、I a形態が圧倒的に多い。このI a形態では図示したように比較的強い範型をもっている。I a形態は使用による刃部磨痕はまったく観察されない。I a形態は刃部の特徴からみても「土掘具」としての機能を有しておらず、土を掘る以外の用途に用いられたものと考えられる。これに対し、「土掘具」的なII j形態は1点のみであり、全体的に風化していて、使用痕もはっきりしない。また、図示した以外に各形態の欠損したものが数例存在する。

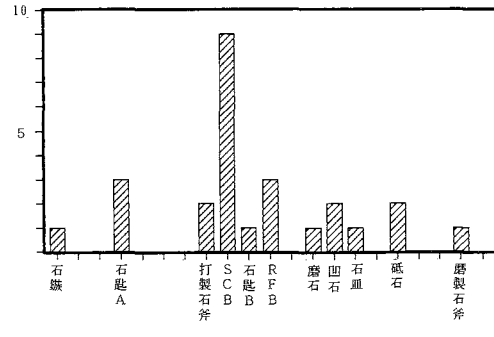
【スクレイパーB類】（第28図） 全体で35点検出されており、本遺跡で最も多く出土した器種である。多用な形態と多用な技法により作出されたものである。素材剥片自体の形状を著しく変え



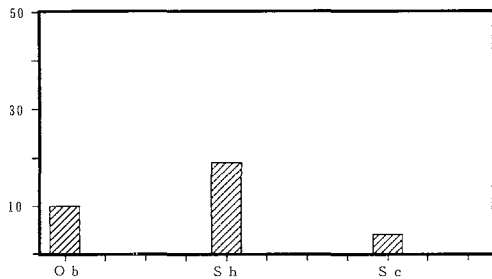
第25図 住居址石器組成グラフ (1)



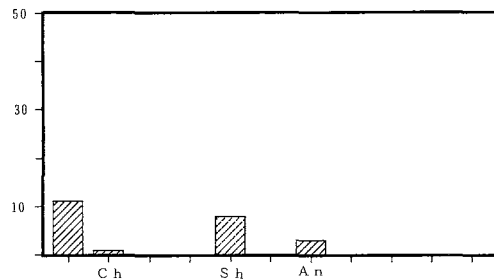
J-10号住居址種別組成



J-10号住居址器種組成



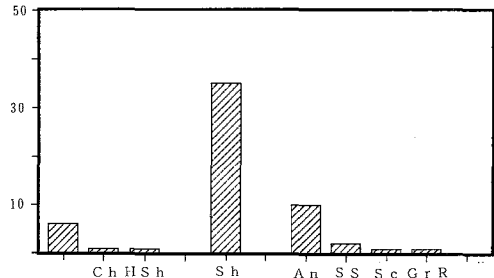
J-1号住居址石材組成



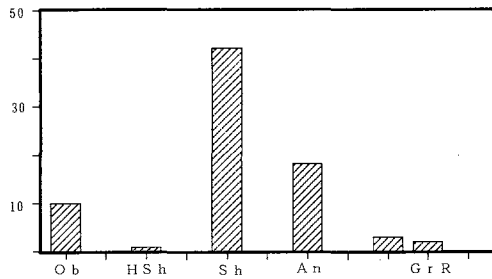
J-2号住居址石材組成



J-3号住居址石材組成

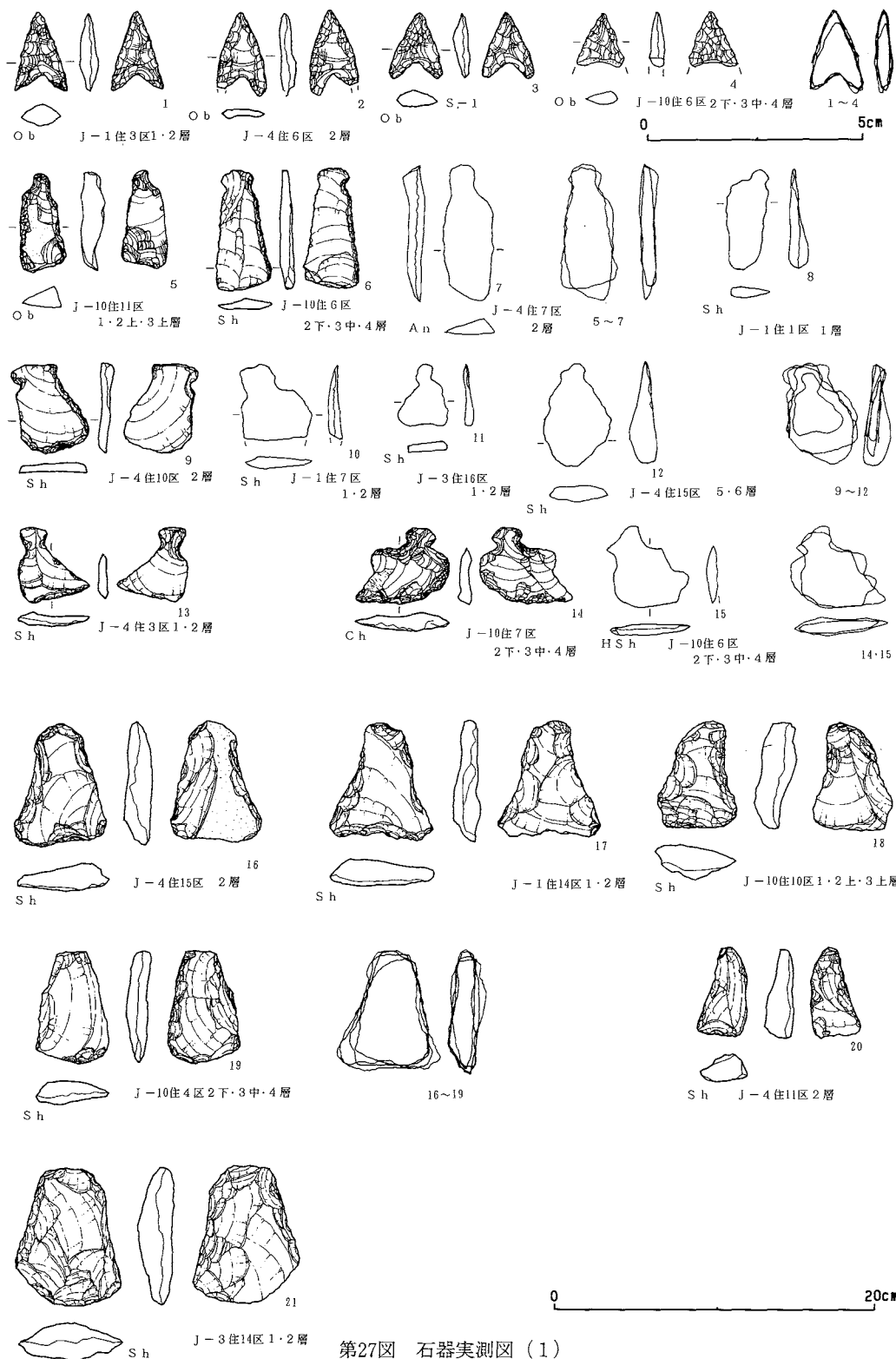


J-4号住居址石材組成

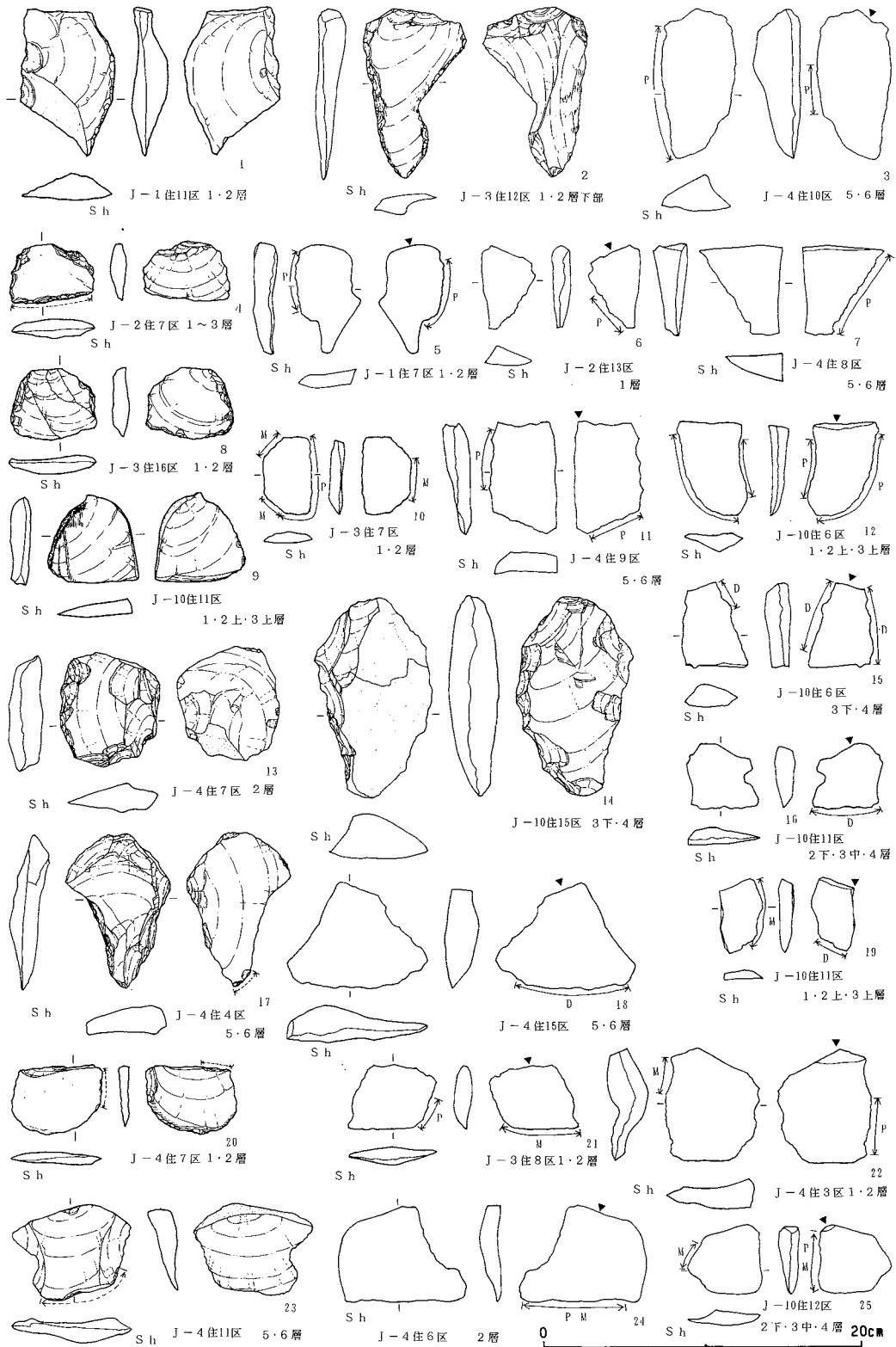


J-10号住居址石材組成

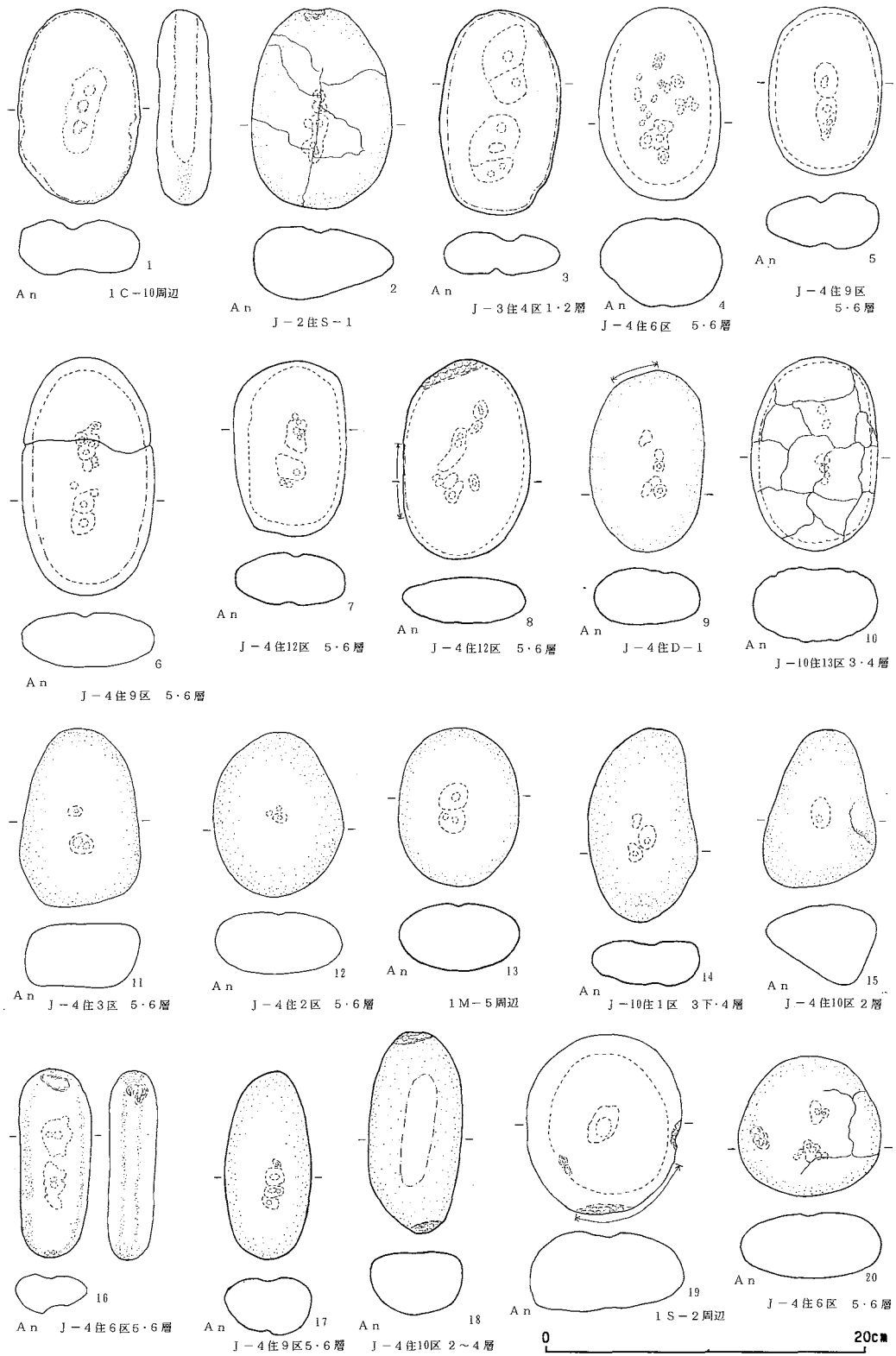
第26図 住居址石器組成グラフ(2)



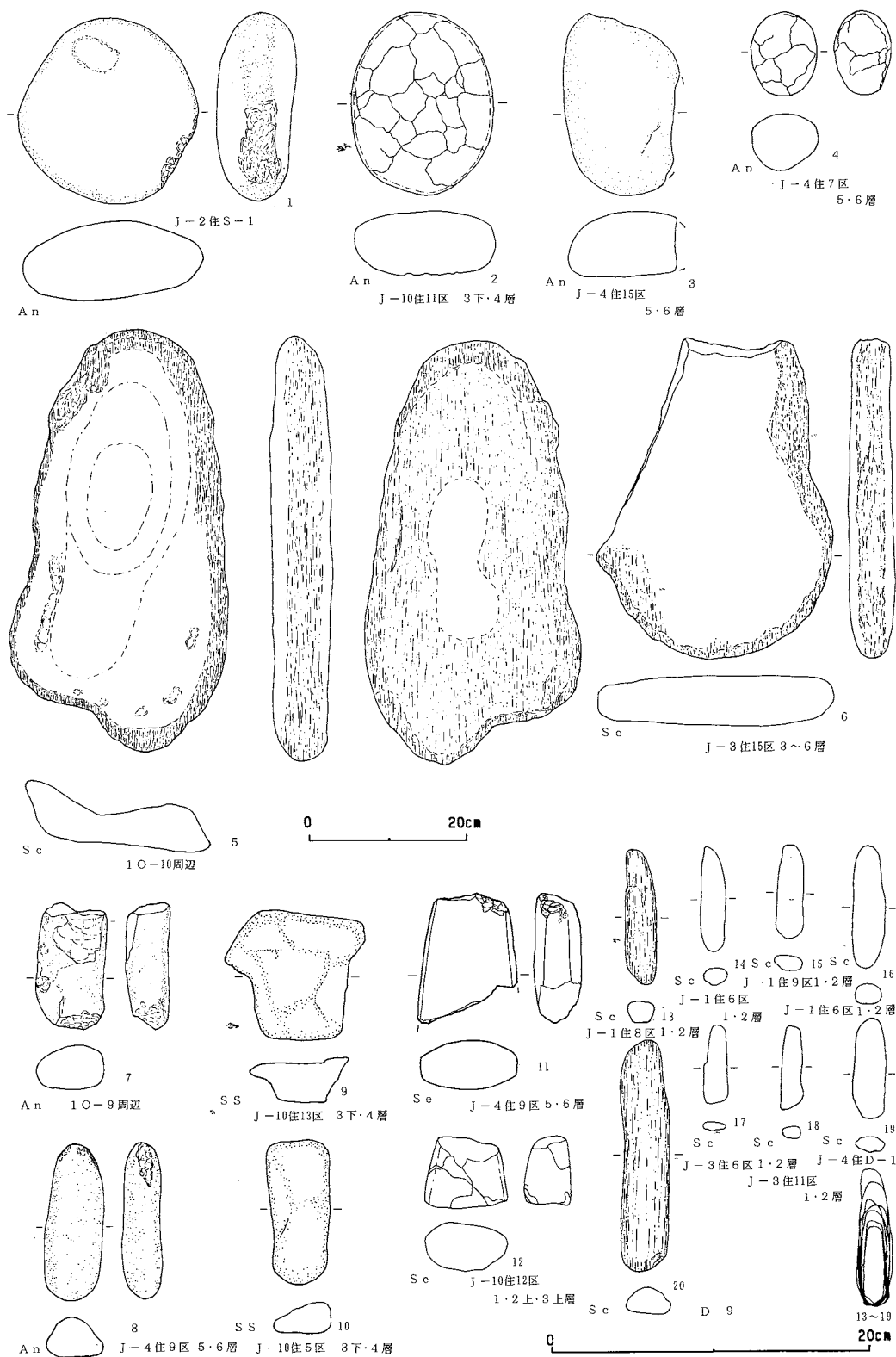
第27图 石器实测图(1)



第28图 石器实测图(2)



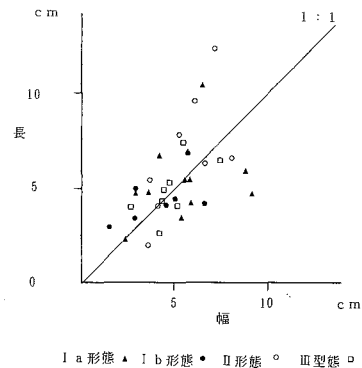
第29图 石器实测图(3)



第30图 石器实测图(4)

るような二次加工を施さないものが大部分である。石材は安山岩の1点を除き頁岩であり、打製石斧と素材を共用しており、両者の間に密接な関係があることが窺える。

形態別にみると、押圧剥離によるI a形態(1~7・9・10・12)12点、押圧剥離と直接打撃を併用するI b形態(8・11)6点、直接打撃によるII形態(13~18)9点、縁辺微細剥離によるIII形態(19~25)8点である。I a形態がやや多く、I b形態がやや少ない傾向があるが、著しい差異は認められない。また、大きさ・形状は第31図のグラフ



第31図 スクレイパーB類の長幅比

のとおりであり、長幅比の差があまり大きくない、3~7 cm程度のものが多い。そして、形態と形状の間に顕著な差異は認められない。グラフでは読み取れないが、I a形態は形状が整っているものが多く、II形態では大形のものが多い。また、III形態では大きさが比較的均質である傾向が認められる。

【凹石】(第29図) 凹石は巨大で多数の孔が穿たれた多孔石を除いたものである。したがって、磨面が存在しても磨石には分類せず、凹石と分類している。全部で21点検出された。このうち14点はJ-4号住居址より検出されたものである。

楕円形のもの(II形態)が選択的に用いられている傾向がある。石材は緑色岩類1点以外は安山岩であり、この点でも強い選択性が窺える。また、凹と磨面との切り合い関係を観察したところ、すべて凹→磨面の順であった。

被熱の観察されるものは7点存在する。しかし、欠損は1点のみであった。

【磨石】(第30図1~3) 全部で4点検出された。すべて安山岩製である。被熱は3点と高率であるが、欠損は1点と少なく、凹石と同じ傾向を示す。1点小形のもの存在する。

【石皿】(第30図5・6) 3点検出された。結晶片岩製が2点と安山岩製が1点である。少ないので形態等の傾向は不明である。

【敲石】(第30図7・8) 3点検出された。すべて安山岩製であり、図示した2点はいずれも先端部側面に敲打痕が観察される。石器製作のハンマーストーンとして用いられた可能性がある。

【砥石】(第30図9・10) J-10号住居址から2点検出されたのみである。2点とも牛伏砂岩製の荒砥である。

【棒状礫】(第30図13~20) 結晶片岩製の小形の棒状を呈する礫である。加工痕は観察されないが、各住居址から出土していること、ほぼ同じ大きさであり、選択性がうかがえること、結晶片岩の入手には最短でも約5 kmの距離があることから、人間が意図的に遺跡内へ搬入されたものとみなされる。このような結晶片岩製の棒状礫は関山期の住居址からも検出されており、継続性

も窺える。

この器種の機能・用途については判然としないが、敲石と形態的に共通性があることから、敲石として使用する目的で搬入されたものである可能性がある。また、石棒の初源的なものとも考えることも可能である。今後、留意する必要がある器種である。

【磨製石斧】(第30図11・12) 2点検出された。2点とも類似した蛇紋岩製である。そして、両者ともII b形態であり、きわめて共通性が強い。

それぞれ隣接するJ-4号住居址3～6層と、J-10号住居址1～3層から検出されたものであるが、住居の埋没順序と出土層位の間には、時間的整合性があり、J-4号住居の居住者がより古いJ-10号住居址に対して廃棄行為を行っていたことの傍証ともなる。

(3) 小結

a 遺構と遺物の関係

【遺構と土器の関係】 土器の型式学的分析によって、各住居址の時間的推移について判明した。すなわち、

1 a 期 (関山期) J-10住

1 b 期 (関山・神ノ木期) J-4住

2 期 (黒浜・有尾期) J-1住、J-2住、J-3住

3 期 (諸磯 b 期) J-2・S-1 集石土壙、J-10上層土壙

という4段階の変遷が把握された。このうち、1 a 期・1 b 期は時間的に連続し、その後の段階は断続的に遺跡が利用された状態であったと推定された。

第1期の住居址は掘り込みが深く、角がはっきりした形態であり、2期の住居址は掘り込みが浅く、角が円い形態であり、土器の分析結果と整合性が認められる。また、3期には土壙のみで住居址が存在せず、前段階とは大きく異なった様相を示しており、土器の分析結果と整合性を有していることが確認された。

土壙については、遺物が検出されたものが少ないので、時期を確定することができないものが多く、はっきりしない。

【遺物分布状態と土器の関係】 次に、遺物分布状態と土器の分析結果を検討すると、1期では土器・礫・石器が混在した状態で多量廃棄されているのに対し、2期では土器・礫・石器の分布状態はズレがあり、単なる一括廃棄とは異なった分布状態を示している。このように遺物分布状態とも土器の分析結果は整合性があることが明かとなった。

【土器と石器の関係】 1期の石器組成ではB類が多く、A類とC類が次に多い状態を示す。2期の石器組成も基本的には1期と同様であるが、住居址により石器組成に偏りがある傾向がある。

また、個々の器種の形態についても特に大きな差異は認められない。そして、3期については、石器・土器とも少な過ぎて傾向をうかがい知ることは不可能である。

以上のように、石器の時期的な変化は少なく、遺跡での滞在期間の長短はあったものの、1期・2期とも、基本的には同じ生業形態であったことが推定される。

b 集落の景観と変遷

これまでの分析結果を総合化すると、吉田原遺跡の集落景観の変遷は第32図のようになる。

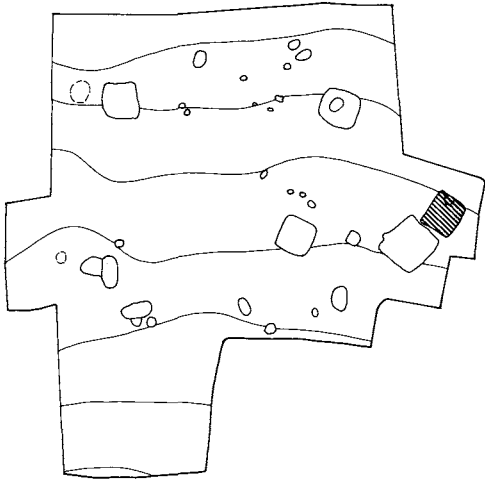
1 a 期 1軒の住居が台地の東端の湧水点に近い場所に構築される。

1 b 期 1 a 期の住居のすぐ南に1軒の住居が構築される。廃棄は1 a 期の住居の窪地に対して行われる。滞在期間は2期より長かったと推定される。

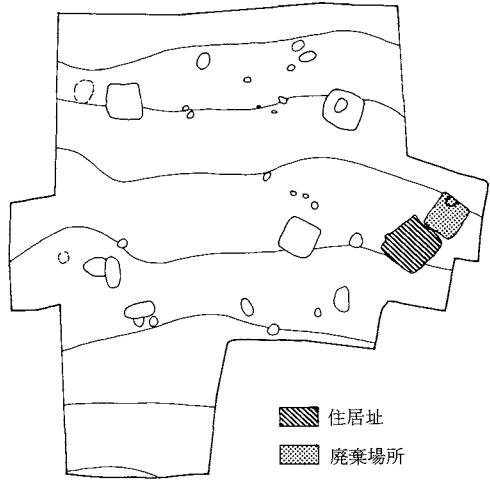
2 期 台地の内側に集落が形成される。1期に比べ集落の滞在期間は短かったと推定される。住居は3軒構築されたが、同時並存かどうかについては、今回の分析では確定できなかった。同時並存した場合でも、直径約30m程度の小規模な集落であったと推測される。

3 期 1 a 期、2期の住居址の窪地に集石土壙、土壙が構築される。蒸し焼き料理と考えられる調理が行われるが、長期にわたる滞在は行われなかったと推定される。


このように、1期～2期では1～3軒の住居で構成される小規模な集団の存在が推定される。この集団が前期では一般的な狩猟・採集活動を含んだ生業活動を営むための集落として、この場所を選地していた。しかし、この生業活動は長期にわたる恒久的なものではなく、移動性に富んだ形態であったと考えられる。

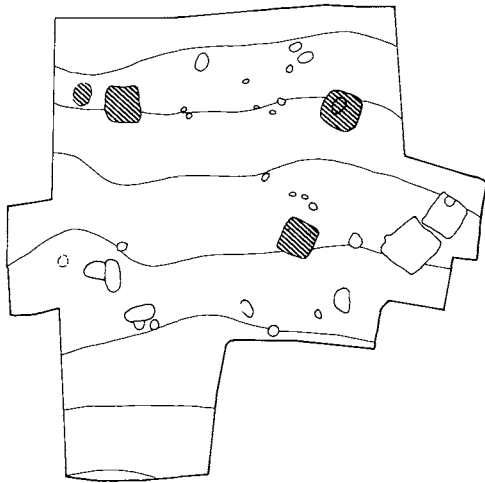


1 a 期

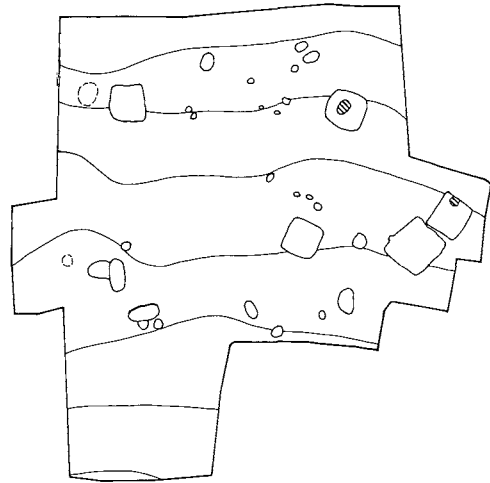


1 b 期

 住居址
 廃棄場所



2 期



3 期

0 ————— 20m

第32図 吉田原遺跡・集落変遷図

2 大下原遺跡

(1) 遺跡の概要

大下原遺跡は縄文時代前期中葉～後半を主体とする遺跡である。調査区全域から縄文前期の遺構と遺物が検出された。前期の住居址は17軒検出された。他に集石土壙4基、土壙約180基、ピット約2,500基が検出された（付図）。

住居址は一見すると環状に配列しているように見えるが、時期が数型式に及んでいることと、調査区が集落域の一部であるため、明確でない。住居址は関山期から存在するが、有尾・黒浜期の住居址が最も多く、諸磯b期まで存続する。また、遺物は諸磯c段階まで検出されており、この段階までは引き続きこの場所が人間活動の場として利用されていた。

調査区の南西部には広範囲に約2,000基のピットの集中する広場の部分が存在する。この部分には住居址以外の簡易構造物が繰り返し建てられていたと推定される。

また、土壙はこの広場の部分から住居址群にかけて存在する。黒浜・有尾段階の土壙は廃棄の様相をもったものと、土壙墓がそれぞれ群を形成する。そして、諸磯b段階の土壙は長軸約30m・短軸約20mの楕円形に環状に配列した土壙墓群を形成する。これらの土壙は抱石を有するものであり、一部の土壙には副葬品が認められた。

一方、調査区南西部の斜面には黒浜・有尾段階の遺物が包含層を形成しており、この段階の廃棄場所と推定される。

前期以外の時期では、縄文時代中期、弥生時代後期、奈良・平安時代にこの場所が小規模な集落址などとして利用されていたことも判明した。

中期初頭段階（五領ヶ台期）では、土壙が11基散漫に分布していることが判明した。これらの土壙中からは残存率の高い小形の深鉢形土器が検出される例がしばしば認められ、墓壙の可能性がある。

また、中期後半段階（加曾利E期）では調査区中央部で、埋設土器4基を伴う配石遺構が検出された。この遺構は弥生時代後期の住居に半分以上破壊されてしまっていたので、詳細は不明である。しかし、この段階の住居址はまったく検出されず、明確な集落址としての痕跡は確認されなかった。

弥生時代後期（樽式期）では3軒の住居址が調査区のほぼ中央部で検出された。3軒がほぼ同じ間隔で一列に並んでおり、相互の関連性が窺える。しかし、この段階の住居址は遺物が少なく、詳細は不明であるが、小規模な集落が形成されたことが明かになった。中野谷地区ではこの段階の集落址は初出である。

また、奈良・平安時代（8世紀末～9世紀初）では住居址と、掘立柱建物址が各1軒ずつが検出され、小規模な集落が存在したことが判明した。

(2) 縄文時代の遺構と遺物

a 遺構

住居址 (第33図～第46図)

【形態】 前期中葉から後葉にかけての住居址は17軒検出された。形態は長方形のものから円形を呈するものまで多様であるが、この時期に一般的な形態の範疇で捉えられるものである。各住居址の形態と特徴は第10表のとおりである。

これらの住居址は長方形または正方形のものと、隅円方形または円形のものに大別することができる。そして、長方形または正方形の例では深い壁溝を巡らすもの（J-9・12・13・15B・17・18・20・21）と、浅い壁溝または壁溝のないもの（J-16・7・8）に分けられる。また、隅円方形または円形のものには浅い壁溝をもつもの（J-5・6）と壁溝のないもの（J-11A・11B・14）に分類される。

ところで、本遺跡の住居址で重複しているものは以下の8例11軒に及ぶ。

J-12→J-13→J-18

J-9・17→J-8→J-7

J-15B→J-15A

J-11A→J-11B

以上のことから住居址の時間的推移と支柱穴の位置、炉址の形態及び位置について検討すると、次の7形態に分類され、時間的変遷が辿れる。なお（）の住居址は重複関係は確認されていないものである。

1形態：J-12・(20・21) 平面形は長方形で深い壁溝を有する。掘り込みは深いものと、確認できないものがある。支柱穴は長軸に沿って内側に6～8本と、壁溝中に2～8本程度存在し、炉址は枕石をもった地床炉で、著しく北に寄って位置する。存在しないものもある。

2形態：J-9・17 平面形は正方形で深い壁溝を有する。掘り込みは比較的浅い。支柱穴は6本内側に存在し、中央にやや北寄りに地床炉が位置する。

3形態：J-13・18・(15B) 平面形は隅円方形で、深い壁溝を有する。掘り込みは浅い。支柱穴は4本内側に存在する。炉址は確認されていない。

4形態：(J-5・6) 平面形は隅円方形で、浅い壁溝を有する。掘り込みは比較的深い。支柱穴は内側に4本存在する。炉址は北奥と南西の支柱穴付近に位置し、地床炉である。

5形態：J-11A・11B・15A・(14) 平面形は隅円方形または円形で、壁溝はない。掘り込みは比較的浅い。支柱穴は4本内側に存在する。炉址は南西または南東の支柱穴付近に位置し、地床炉または埋甕炉である。

6形態：J-8 平面形は正方形で壁溝はない。掘り込みは深い。支柱穴は内側に8本存在する。

炉址は地床炉と埋甕炉で南東と南西に位置する。

7 形態：J-7 平面形は正方形で、浅い壁溝を有する。掘り込みは浅く、炉址は確認されていない。重複により支柱穴ははっきりしないが、内側に4本存在すると推定される。

このうち、1～3形態は有尾・黒浜段階に相当し、4～7形態は諸磯b段階に相当する。また、J-16号住居址はどの形態にも属さない例であり、やや特殊であるが、諸磯b段階の集石土壇(S-4・6)と重複しており、出土遺物からもこれより古いため、有尾・黒浜段階に相当すると推定される。

以上のように、有尾・黒浜段階では方形で深い壁溝を有する形態を基本としている。そして、諸磯b段階では隅田方形で浅い壁溝を有する形態を基本としている。このように時期によって住居形態は異なっており、変化していることが看取される。

〔遺物出土状態〕 各住居址の遺物分布状態については第33図～第46図に示した。次に各住居址の所見を述べる。

J-5号住居址 上層から下層まで多量遺物が出土しており、基本的には土器・礫・石器類とも分布が重なる。ただし、礫は各層とも、やや少ない傾向を示す。そして、各層とも概ね南側に遺物が偏って分布している。しかし、土器は下層・10区のみ集中傾向が認められる。各層の土器型式に変化はなく、ほぼ同時期の遺物が検出されている。本住居址は諸磯b段階のものとして推定され

住居址名	平面形態	規 模			主柱穴		補助柱穴		炉址 形態	規 模		付帯 施設
		NS	EW	深さ	位置	本数	位置	本数		長軸	短軸	
J-5	隅田方形	528	594	68	内	5	内・壁	101	地床	48	42	壁溝
J-6	隅田方形	542	644	38	内	4	内・壁	74	地床(1) 地床(2)	48 52	32 28	壁溝
J-7	正方形	606	622	42	内	7	内・壁	24				壁溝
J-8	正方形	578	598	74	内	8	内・壁	14	埋甕(1) 地床(2)	38 48	28 34	
J-9	正方形(推定)	615	510	32	内	3	内・壁					壁溝
J-11A	隅田方形	678	632	54	内	4	内	63	地床(1)	51	32	
J-11B	円形	502	488	44	内	6			埋甕(2)	82	48	
J-12	長方形	888	552	72	内	18	内・壁	47	枕石(1) 枕石(2)	48 74	36 70	壁溝
J-13	隅田方形	520	624	32	内	3						壁溝
J-14	隅田長方形	338	462	26	内	4	内・壁	73	地床	38	28	壁溝
J-15A	不整円形	512	556	16	内	4						壁溝
J-15B	隅田方形(推定)	616	440	20	内	3						壁溝
J-16	隅田長方形	692	496	38	内	7	内・壁	51				
J-17	正方形	654	558	26	内	6	内	36	地床(1) 地床(2) 地床(3)	66 66 22	38 38 16	壁溝
J-18	長方形(推定)	474	605	26	内	3						壁溝
J-20	長方形	384	298	28	内	9	内・壁	21				壁溝
J-21	長方形(推定)	694	548	19	内	8	内・壁	75				壁溝

第10表 大下原遺跡・住居址観察表

るが、各層ともこの段階の土器と一緒に前期中葉の土器が混在しており、これらは全体の14%を占めている。

J-6号住居址 各層とも土器・礫・石器類ともに多量検出されており、同じ分布状況を示す。すなわち、住居址の南側に遺物が偏在する。また、本住居址も諸磯b段階のものであるが、前期中葉の土器が混在しており、出土量全体の34%を占めている。また、上層と下層の土器に時間差はほとんど認められない。

J-7号住居址 この住居址はJ-8・9号住居址と重複している。各層の遺物分布状況を見ると、土器は西から中央部にかけてまとまって分布しているが、礫・石器類は南西部分を中心に分布しており、土器の分布とは多少分布域が異なっている。西に遺物が集中するのは、重複関係にあるJ-8号住居址の遺物が混在していることによると考えられる。また、北西隅から中期の五領ヶ台式土器が集中して出土しており、この部分に土壌が存在していた可能性が高い。

J-8号住居址 J-7・9・17号住居址と重複関係にあり、さらに土壌も数基重複していることから、かなり多くの遺物が混在しているとみられる。遺物は土器・礫・石器類とも南西部分に偏在しているが、この部分にはD-1号土壌が新しく掘られており、この土壌に帰属する遺物が多いものとみられる。

J-9号住居址 J-7・8号住居址と重複している。土器・礫・石器類ともほぼ同じ分布状態を示す。D-1号土壌部分に集中しており、多くは土壌遺物の可能性がある。また、諸磯b型式の土器が少量検出されている。

J-11A・B号住居址 J-11B号住居址は北西部分に重複しており、この方が新しい。住居址の南には風倒木痕があり、一部の遺物は攪乱されている。遺物は多量出土しており、中央から南の部分に集中する。分布域からみて、遺物の多くはJ-11A号住居址に帰属するものと推定される。土器は下層では少ないのに対し、礫は下層で多い傾向がある。礫が上層部分で少ないのはJ-11B号住居址は影響と推定される。J-11A号住居址は諸磯b段階とみられるが、J-11B号住居址は炉体土器から諸磯c段階とみられる。しかし、諸磯c式土器は全体量の1%に過ぎない。

J-12号住居址 J-13・18号住居址と重複関係にある。これらの住居址の掘り込みは上層までであるので、この住居址の本来的な堆積ではない。そのため、これらの住居の土器が混在している。しかし、中層以下が元々の堆積である。そして、この中層に大量の有尾段階の遺物が集中している。この層位では土器・石器類は多いが礫はやや少ない。それぞれの分布域は重なっており、南西部に偏る。下層からの出土量は少ないが、この部分は拡張住居の貼床部分にあたるので、少ないものと推定される。

J-13号住居址 J-12号住居址の上層に重複しているため、遺物分布状況は判然としない。土器・礫は南に偏って分布するのに対し、石器類は北に偏って分布している。

J-14号住居址 集落の縁辺に存在する小規模な住居址である。遺物は諸磯b段階のものが少量出土している。土器・石器類は南東部分にまとまる傾向があるが、礫は少なく、こうした傾向は認められない。

J-15A・B号住居址 2軒重複しており、さらに風倒木が重なっているため、本来の堆積状態ははっきりしない。新しい方のJ-15A号住居址は確認面が下位過ぎたため、ほとんど遺物分布は不明である。しかし、風倒木中には有尾・諸磯段階の遺物が多量含まれているため、本来は多量の遺物が覆土中に存在したとみられる。

J-16号住居址 この住居址には諸磯b段階のS-4・6号集石土壌が重複しているため、住居址本来の時期である有尾段階の遺物と、諸磯b段階の遺物が出土している。分布状態をみると、西側に偏って、土器・礫・石器類とも重なって分布している。

J-17号住居址 浅い住居址であるため、遺物量は少ない。分布状態をみると、住居址全体に散在するように分布する。土器・礫・石器類ともに同じ傾向を示す。このうち、礫は少ない。

J-18号住居址 J-12号住居址と重複関係にある。土器は上層では北東部にまとまり、下層では南東部にまとまる傾向を示す。礫は上層では南東部にまとまる。そして、石器は上層では北西部にまとまり、下層では南東部にまとまる傾向を示す。このように、それぞれが異なった分布状態を示している。

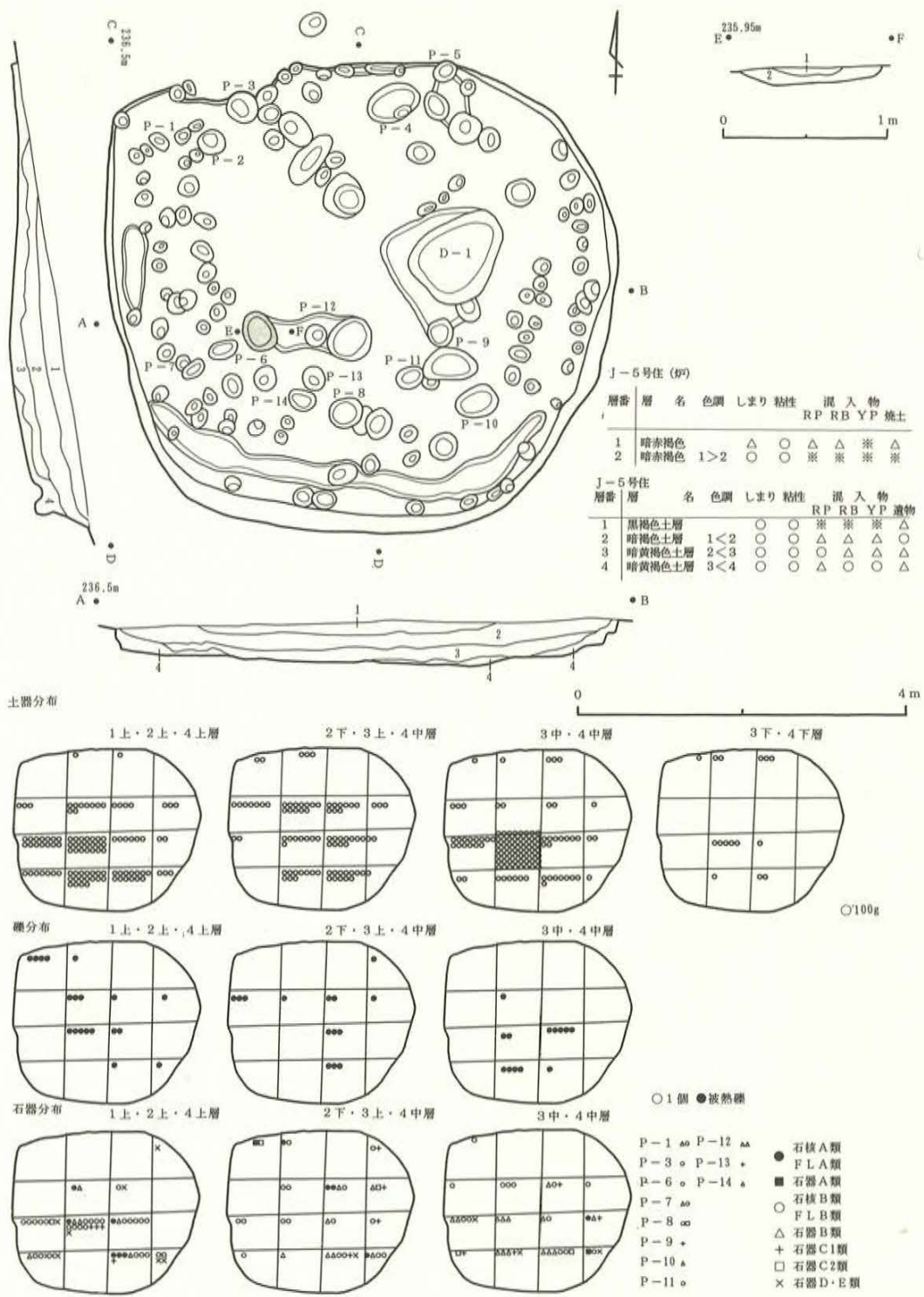
J-20号住居址 掘り込みが浅かったため、確認面が床面となってしまう、壁溝及びピット中より少量遺物が検出されたのみである。

J-21号住居址 この住居址も掘り込みが浅いため、確認がほとんど床面近くになってしまった。そのため壁溝・ピット中より少量遺物が検出されたのみである。

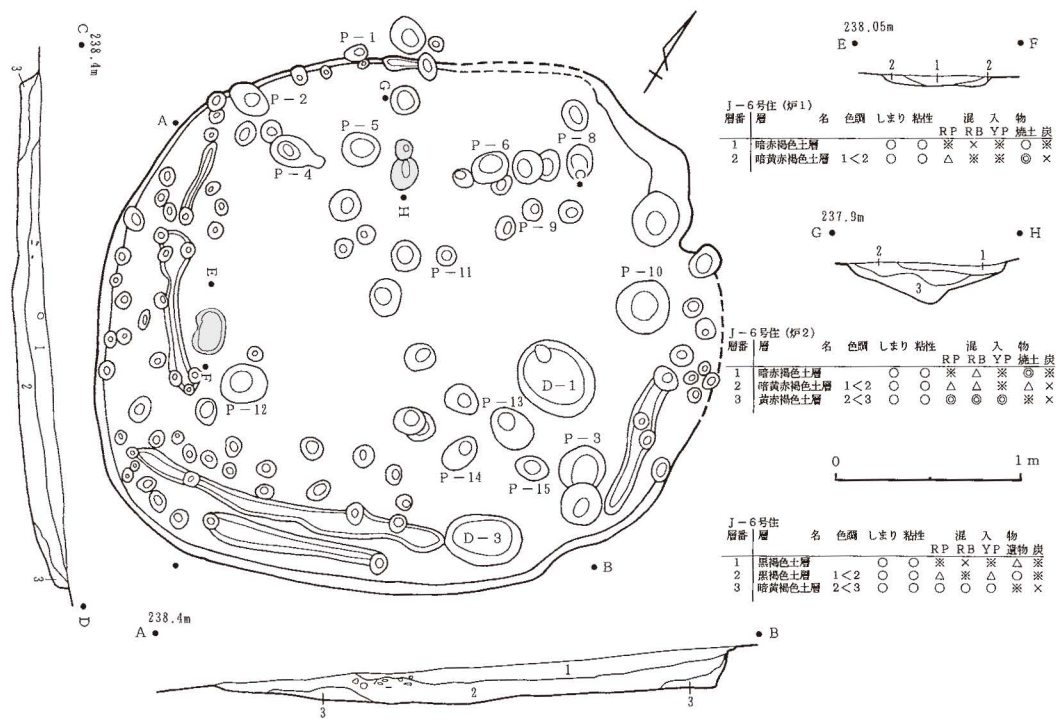
以上のように、各住居址の遺物出土状態について述べてきたが、これらの住居址の出土状態の傾向について、若干まとめておきたい。

まず、掘り込みの深い住居址は遺物出土量が多い傾向がある。これらの住居址では土器・礫・石器類がほぼ同じ分布傾向を示す場合が多く、これらの遺物が一緒に住居址内に入り込んだ状態を示している。遺跡は全体が北に傾斜しているが、これらの住居址では南に偏って遺物が集中しており、比較的小さな遺物の場合、自然に流れ込んだ可能性もある。しかし、大形の土器片や礫・石器類が渾然一体となって分布する様相と、上層から下層までほぼ同じ時期の遺物が出土することは、単なる流れ込みで生ずる現象とは考え難い。したがって、こうした状態は人為的な廃棄行為により形成されたものであると考えることが妥当であろう。

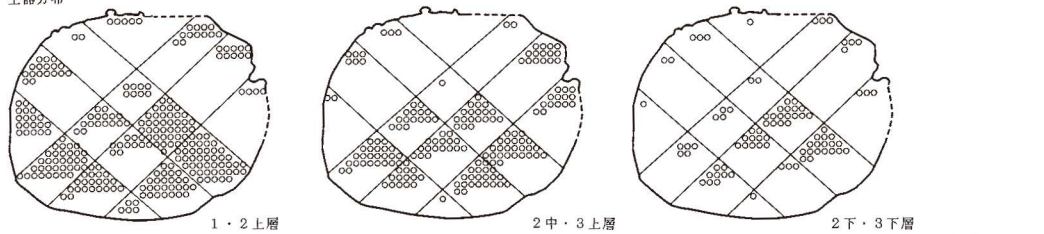
また、浅い住居址での遺物の出土状態は、はっきりしない部分が多いが、J-14号住居址のように、離れて単独で存在する住居址でも複数個体の破片類が出土しており、単なる廃棄以外の要



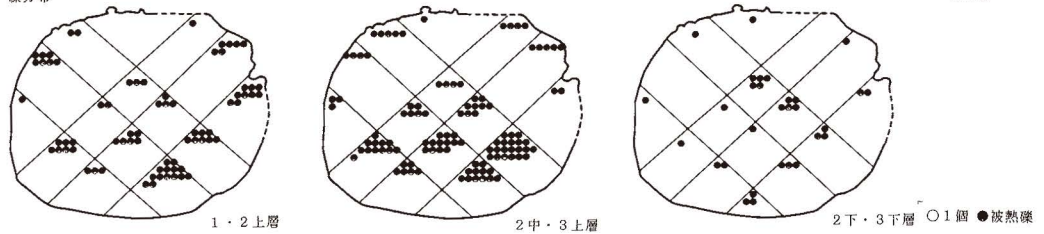
第33図 J-5号住居址実測図



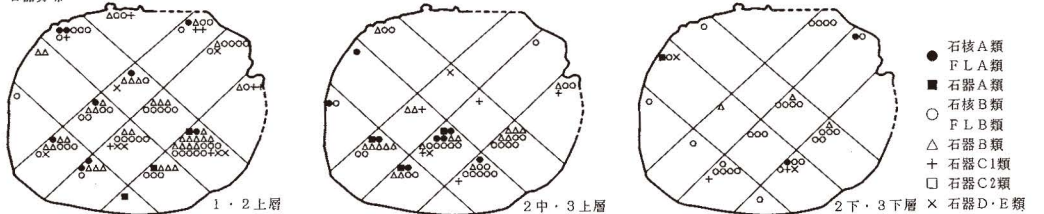
土器分布



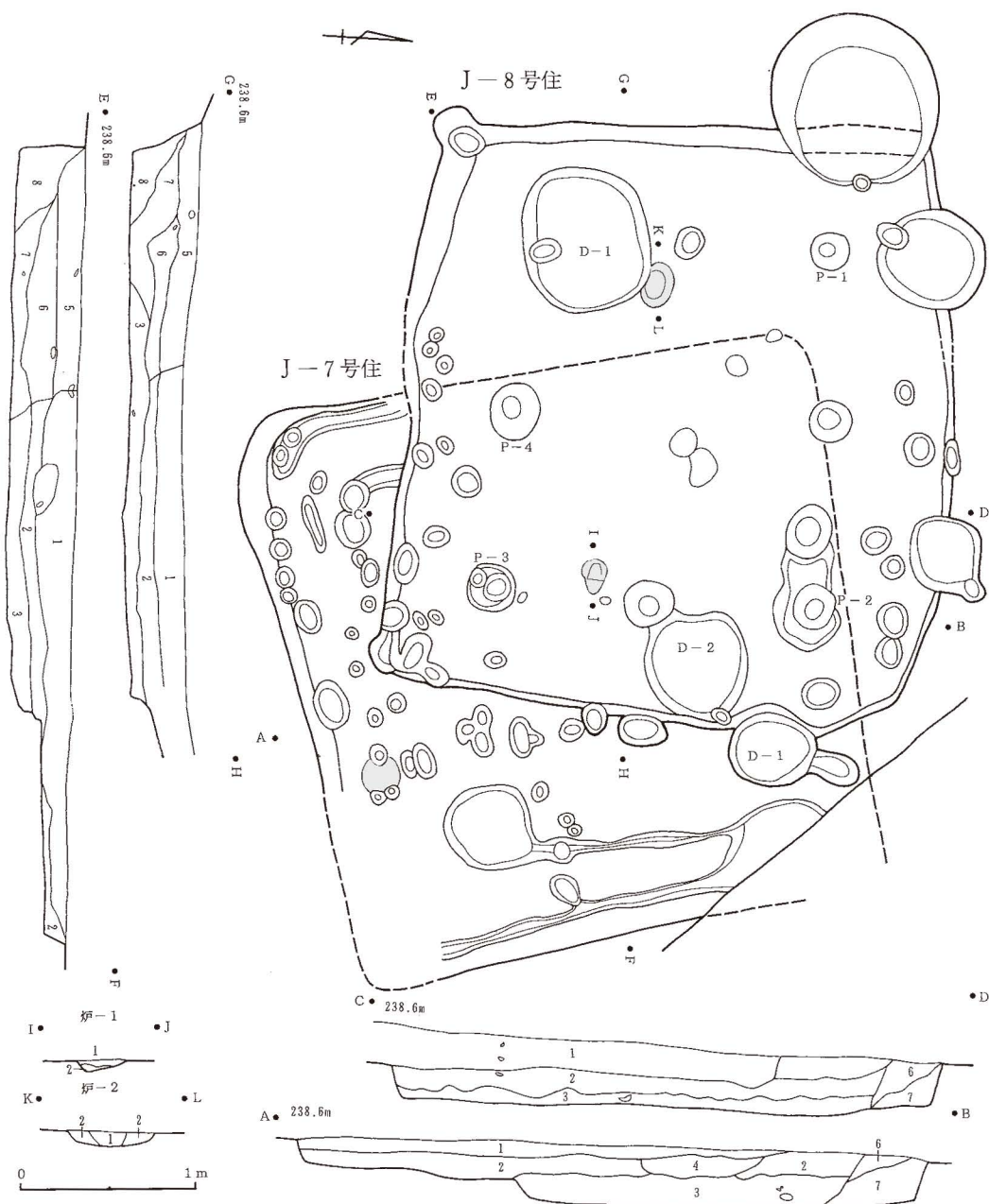
縄分布



石器分布



第34図 J-6号住居址実測図



J-8号住 (伊1)

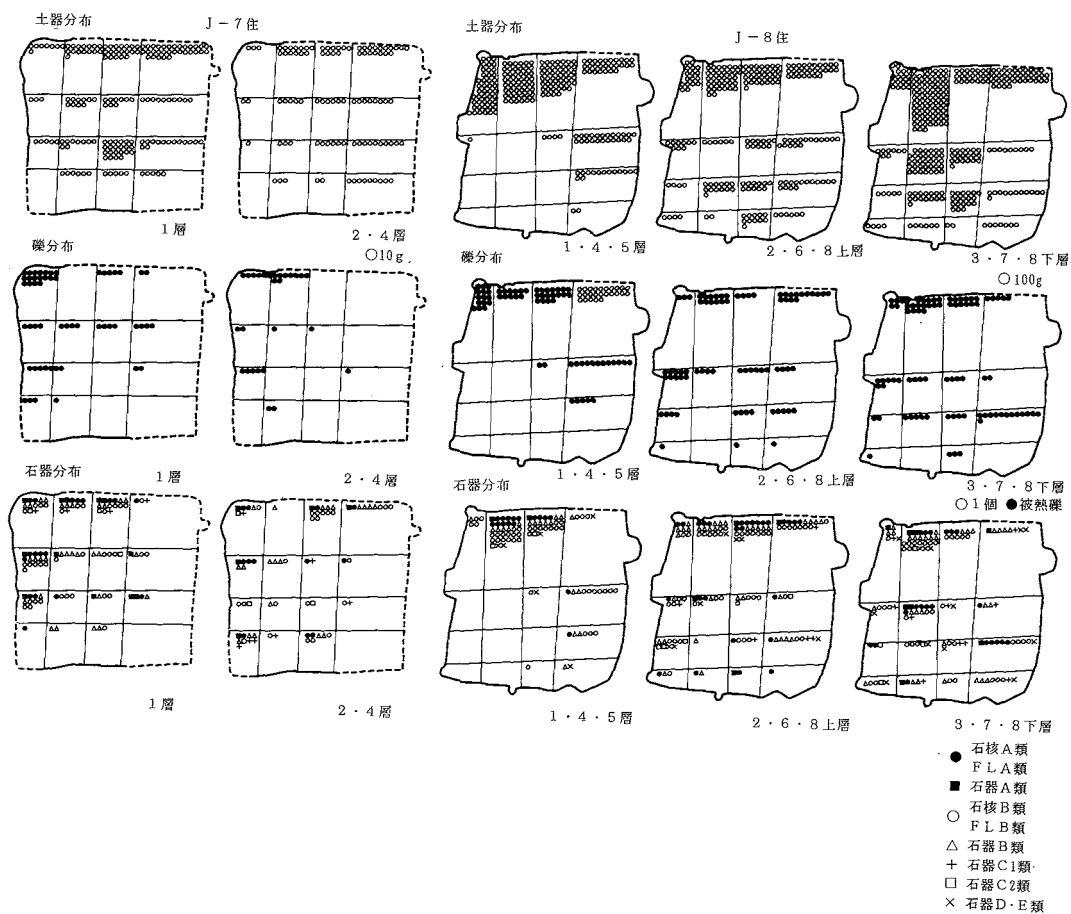
層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物	備考
					RP RB YP 焼土 炭	
1	暗褐色土層		△	○	△ △ ※ ※ ※	
2	暗黄褐色土層	1<2	△	○	○ ○ ※ ※ ※	

J-8号住 (伊2)

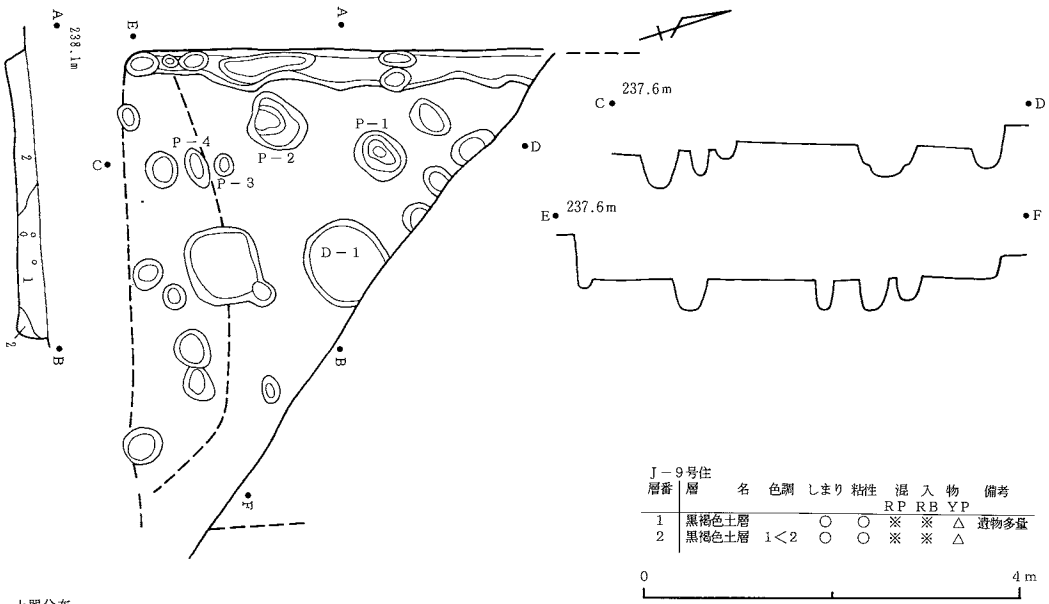
層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物	備考
					RP RB YP 焼土 炭	
1	暗褐色土層		○	○	△ △ ※ △ ※	
2	暗黄褐色土層	1<2	○	○	○ ○ ※ △ ※	

層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物	備考
					RP RB YP 焼土 炭	
1	黑褐色土層		○	○	※ ※ ※ ※	J-7号住覆土
2	黑褐色土層	1<2	○	○	※ ※ △ △ △	※ J-7号住覆土・床面
3	暗黄褐色土層	2<3	○	○	◎ △ △ △ △	J-7号住覆土
4	暗黄褐色土層	3<4	○	○	◎ △ △ △ △	
5	黑褐色土層	4>5	○	○	※ ※ ※ ※	※
6	暗褐色土層	5<6	○	○	△ △ △ △	※
7	暗黄褐色土層	6>7	○	○	△ △ △ △	※
8	暗黄褐色土層	7<8	○	○	△ △ △ △	※

第35図 J-7・8号住居址実測図(1)



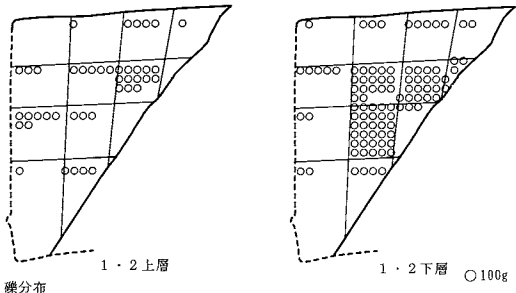
第36图 J-7·8号住居址遺物分布图



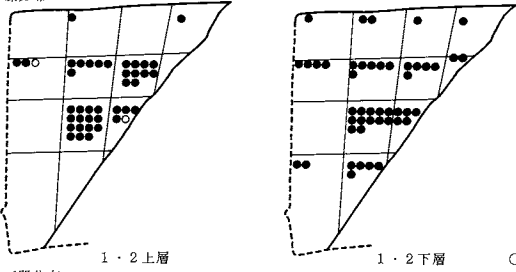
J-9号住

層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物	備考
					RP RB YP	
1	黒褐色土層		○	○	※ ※	△ 遺物多量
2	黒褐色土層	1<2	○	○	※ ※	△

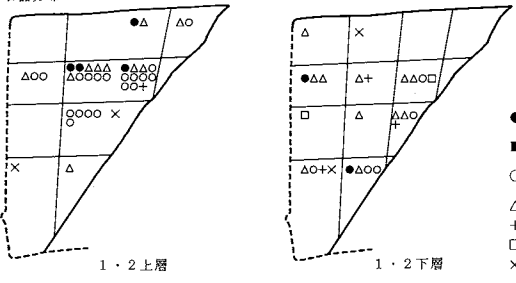
土器分布



礫分布

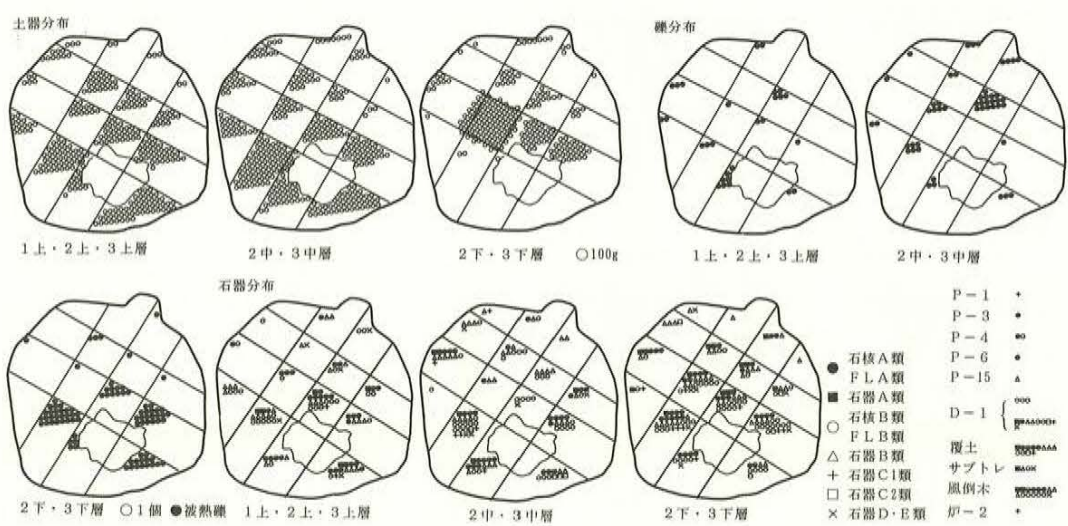
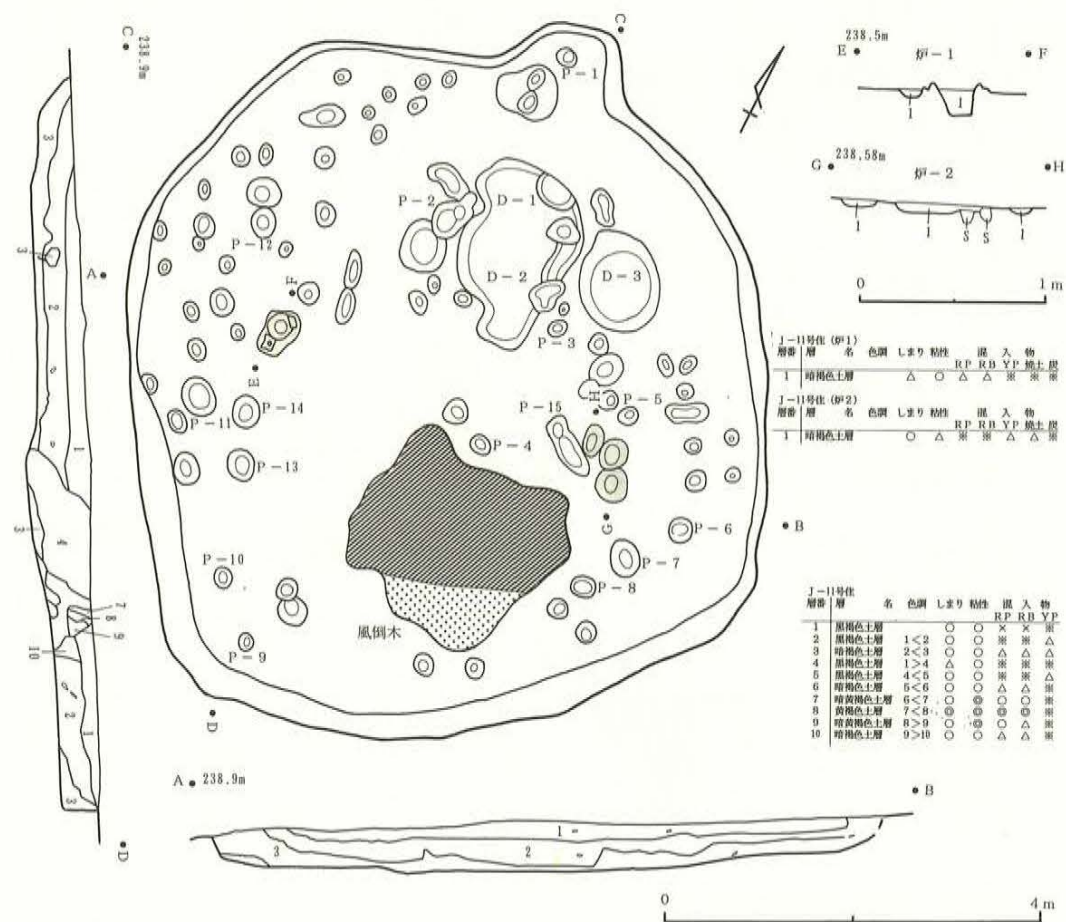


石器分布

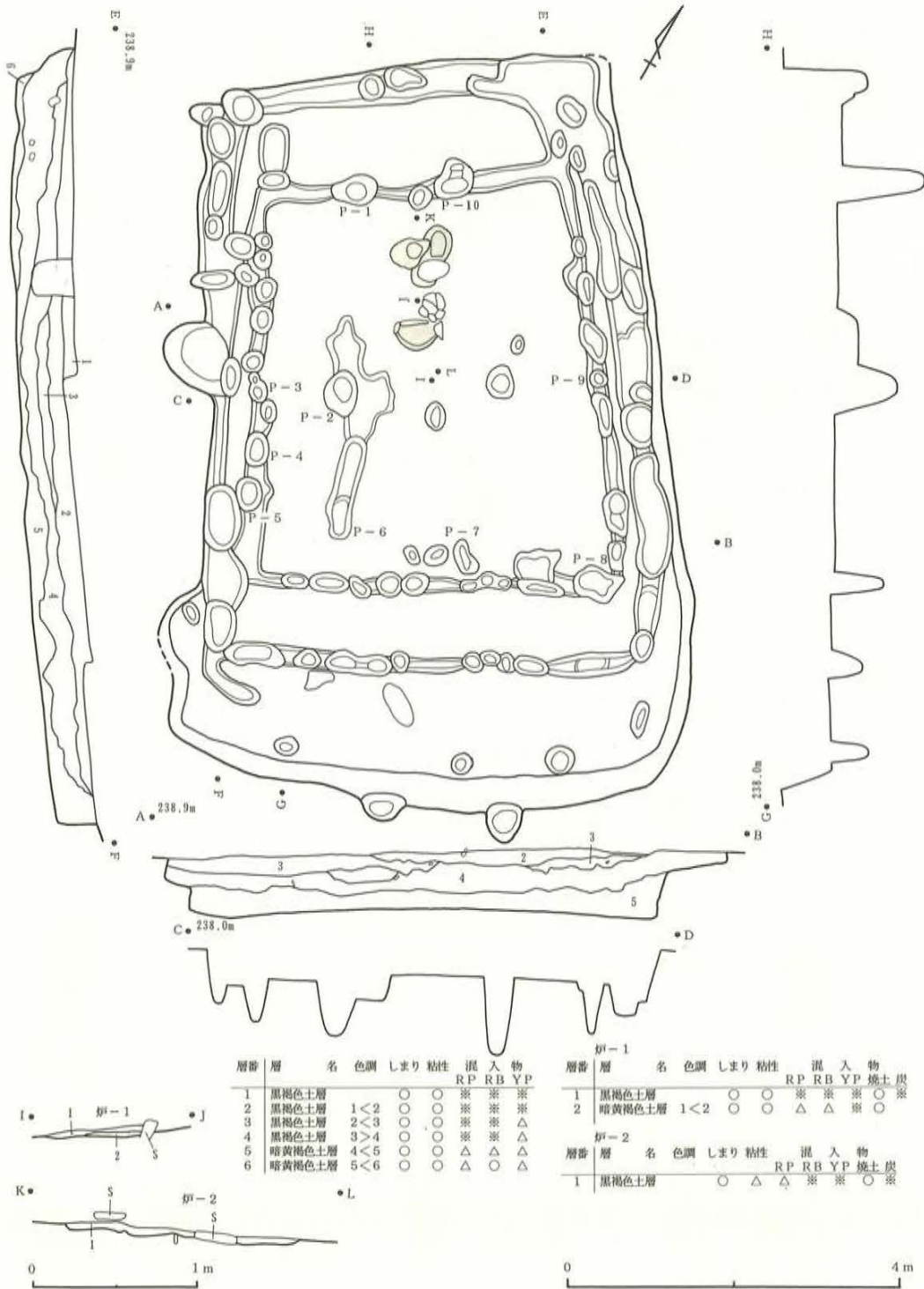


- 石核A類
- FLA類
- 石器A類
- 石核B類
- FLB類
- △ 石器B類
- + 石器C1類
- 石器C2類
- × 石器D・E類

第37図 J-9号住居址実測図

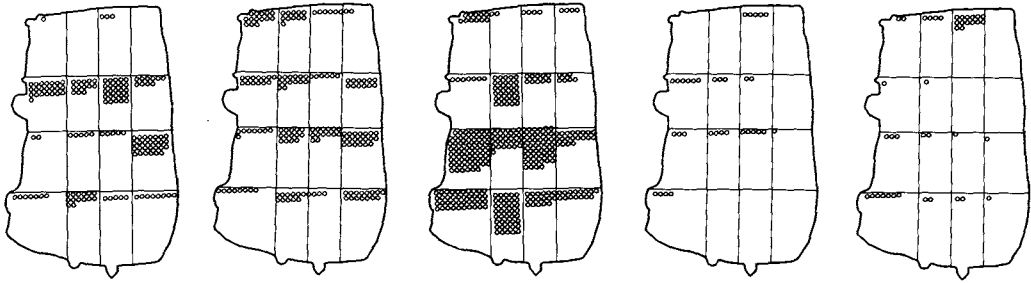


第38図 J-11号住居址実測図



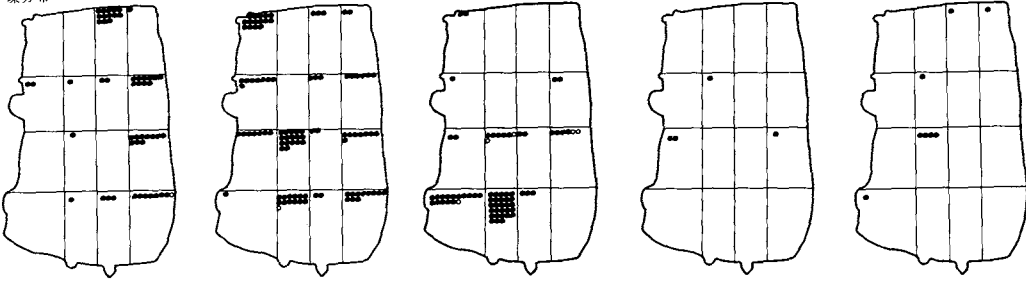
第39図 J-12号住居址実測図(1)

土器分布



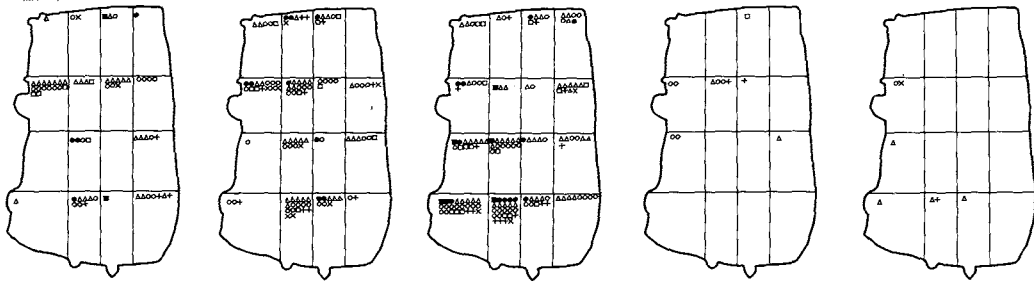
1・2上・4上・5上層 2下・3・4中層 4中・5中層 5下層 5下・6層 ○100g

礫分布



1・2上・4上・5上層 2下・3・4中層 4中・5中層 5下層 5下・6層
○1個 ●被熱礫

石器分布

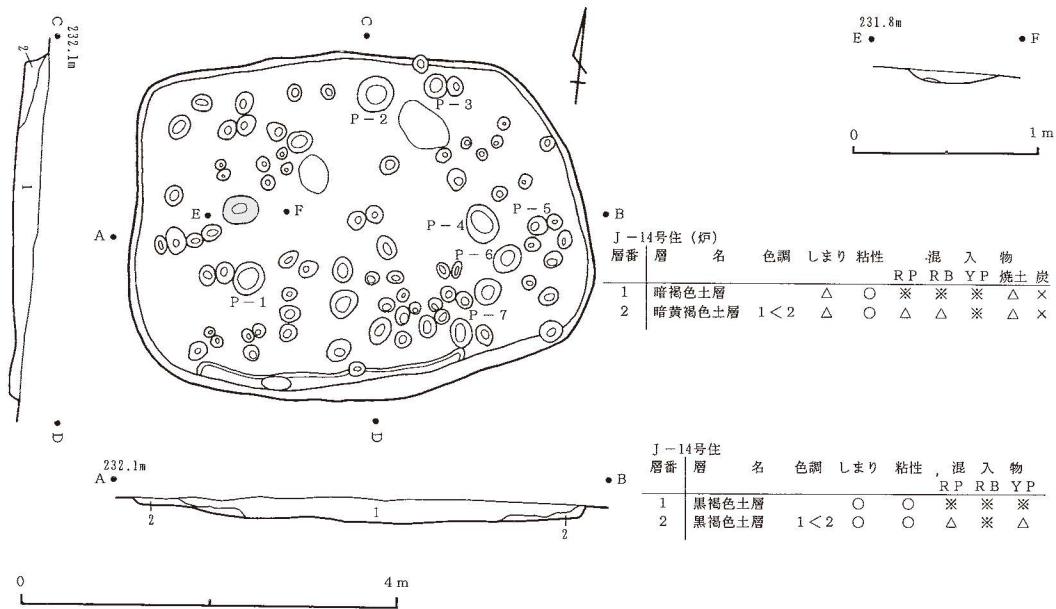


1・2上・4上・5上層 2下・3・4中層 4中・5中層 5下層 5下・6層

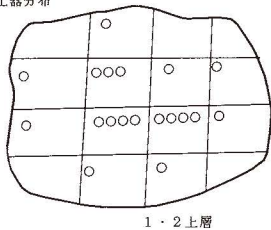
P-2 △△ 埴-2 ■ 16区溝 △△△△
 P-3 △△△ P-12 + 不明 □
 P-4 △△△△ 1区溝 ○○ P-11 △
 P-5 ● 8区溝 ○○○+
 P-8 ○ 13区溝 △△△△△△+
 P-9 × 15区溝 ○+

● 石核A類
 ■ F.L.A類
 ■ 石器A類
 ■ 石器B類
 ○ F.L.B類
 △ 石器B類
 + 石器C1類
 □ 石器C2類
 × 石器D・E類

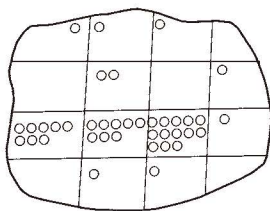
第40图 J-12号住居址遺物分布图



土器分布

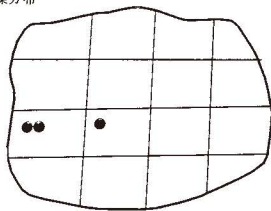


1・2上層

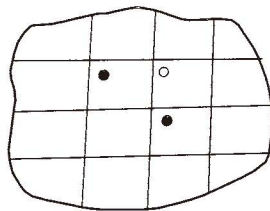


1・2下層 ○100g

礫分布

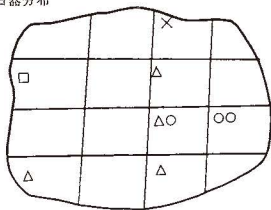


1・2上層

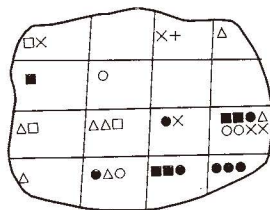


1・2下層 ○1個 ●被熱礫

石器分布



1・2上層

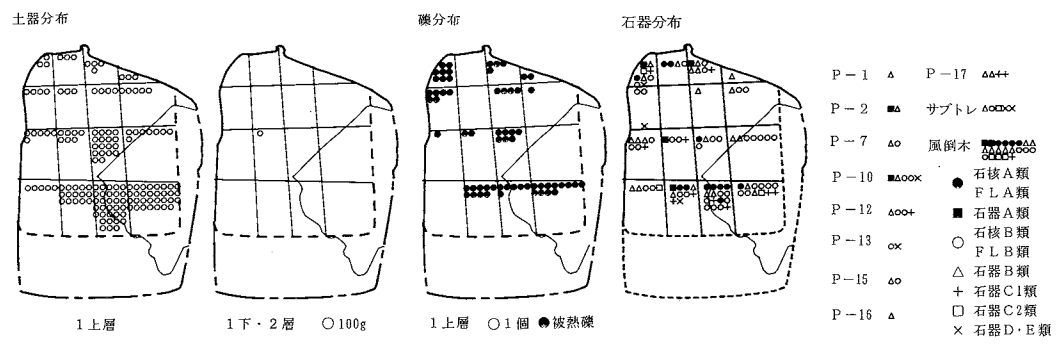
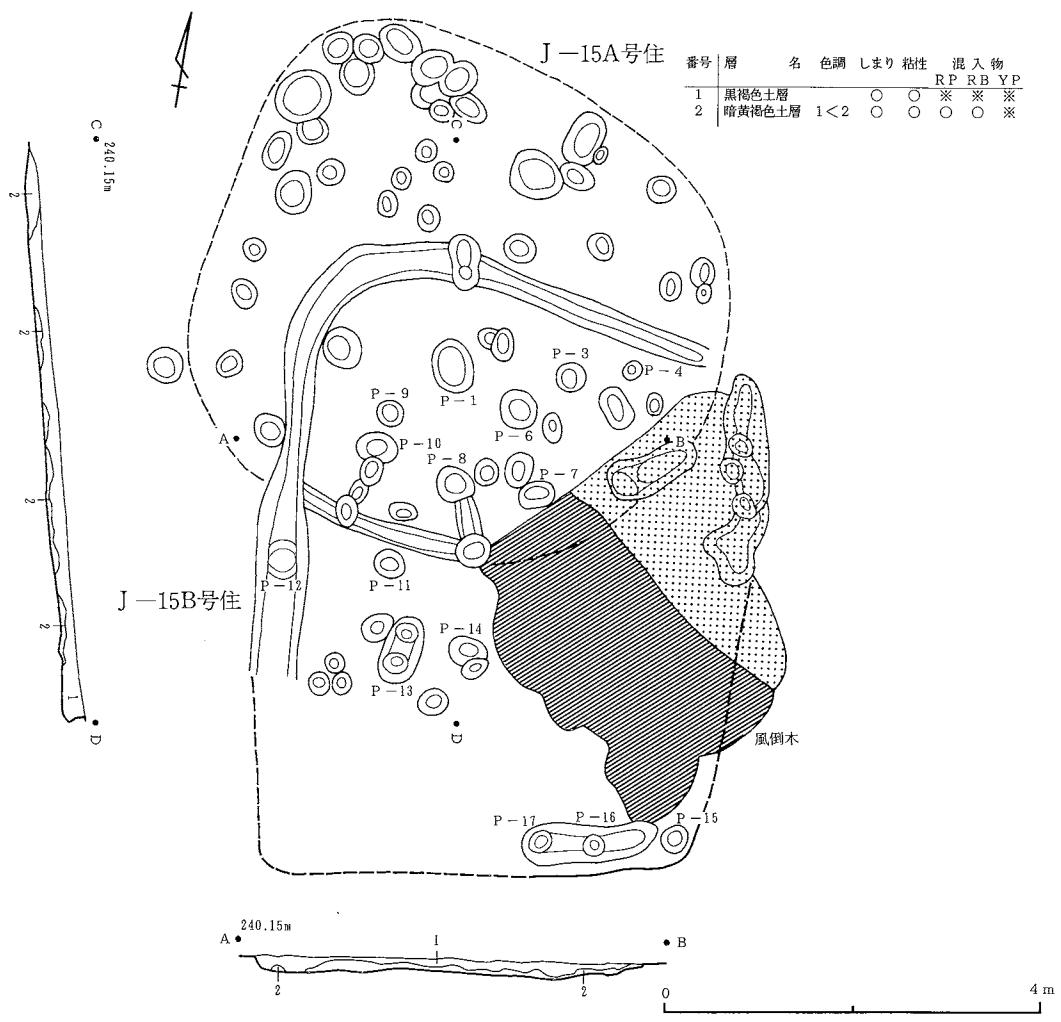


1・2下層

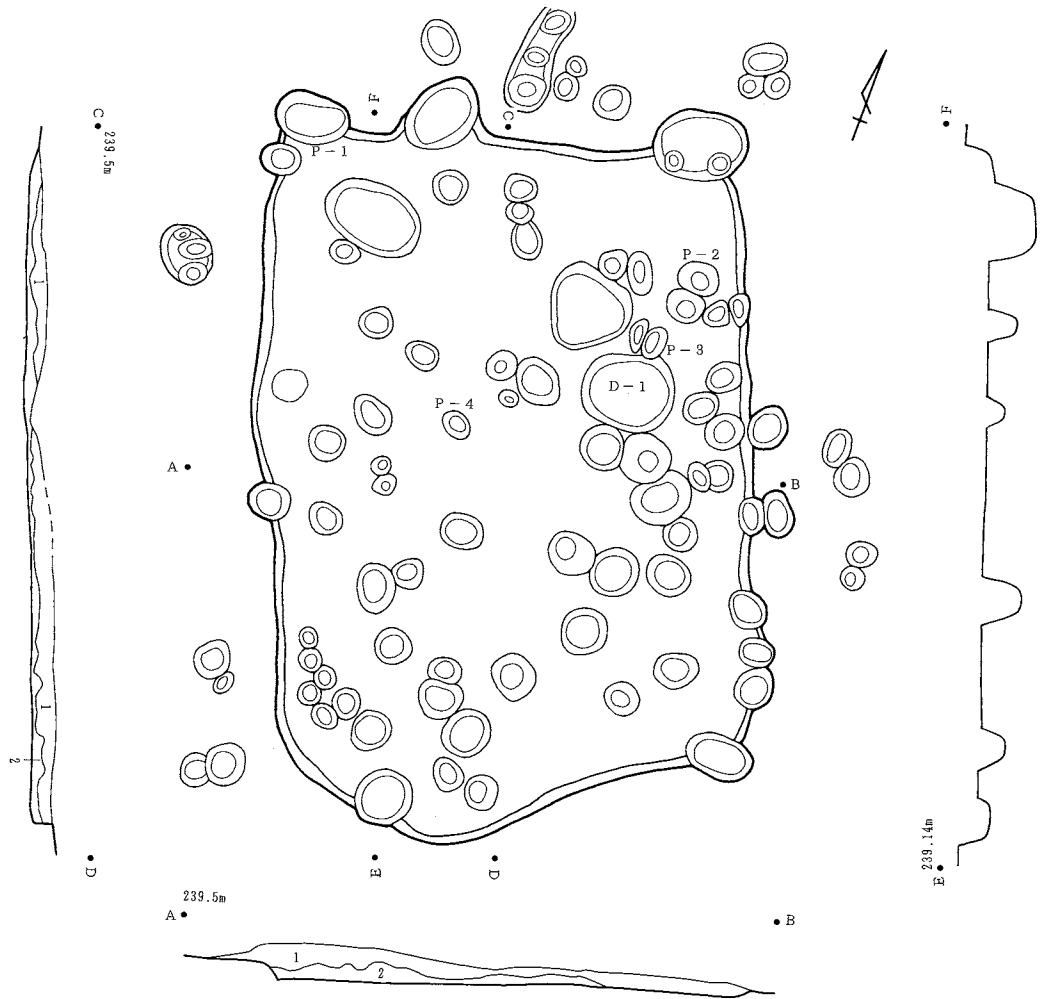
P-1 △
P-3 △×
P-6 △
P-7 ■■

● 石核A類
FLA類
■ 石器A類
石核B類
○ FLB類
△ 石器B類
+ 石器C1類
□ 石器C2類
× 石器D・E類

第42図 J-14号住居址実測図



第43図 J-15号住居址実測図



J-16号住

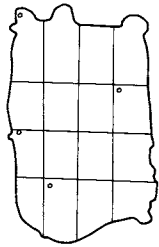
番号	層	名	色調	しまり	粘性	混入物
						R P R B Y P
1		黒褐色土層	△	○	×	× ※
2		暗黄褐色土層	1<2	○	○	△ △ ※

0 4 m

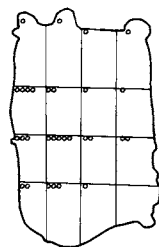
土器分布

藤分布

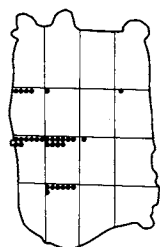
石器分布



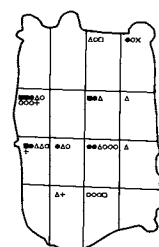
1上層 ○100g



1下・2層



1上層 ○1個 ●被熟藤 1上層



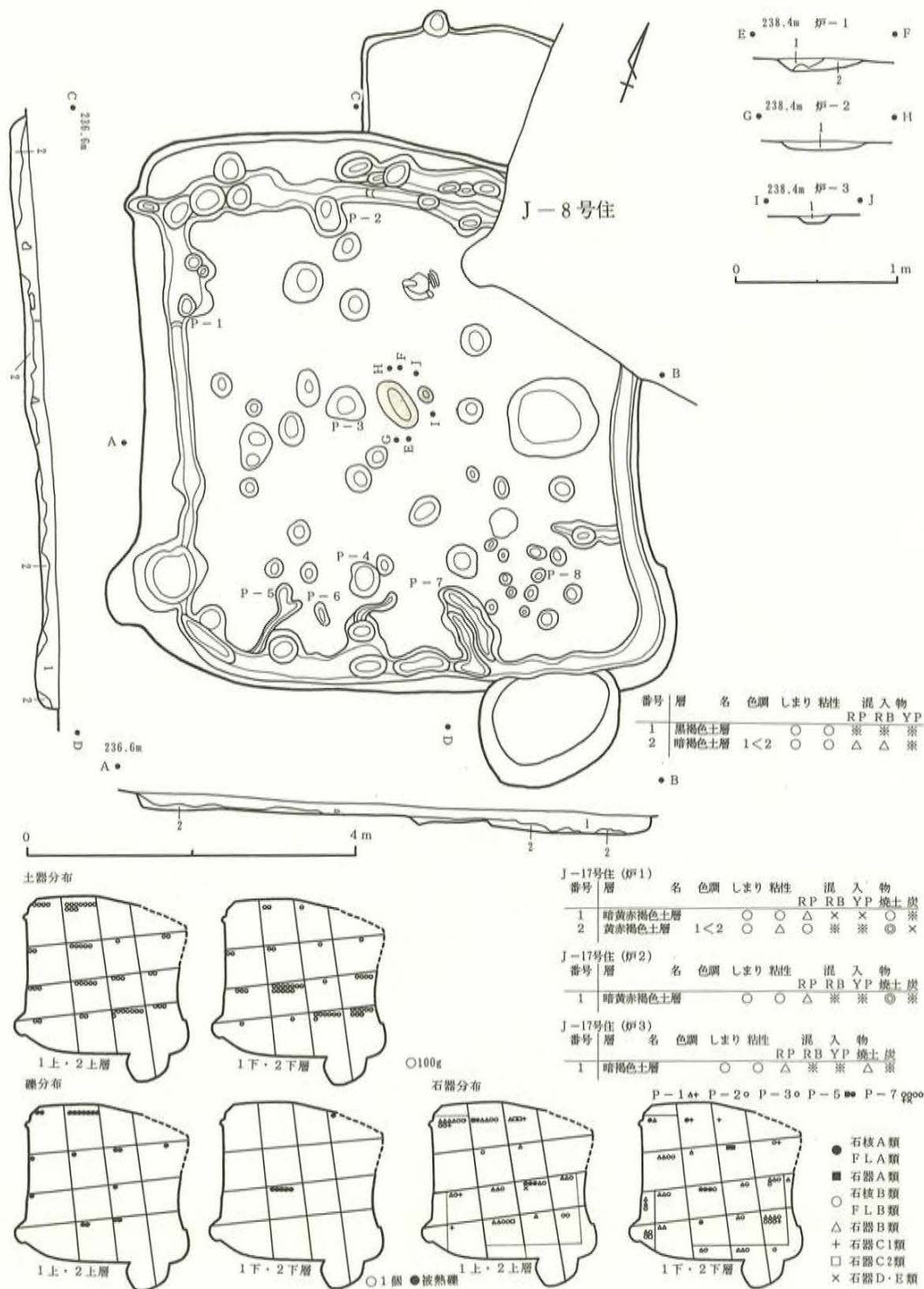
P-2 ●

P-3 ×

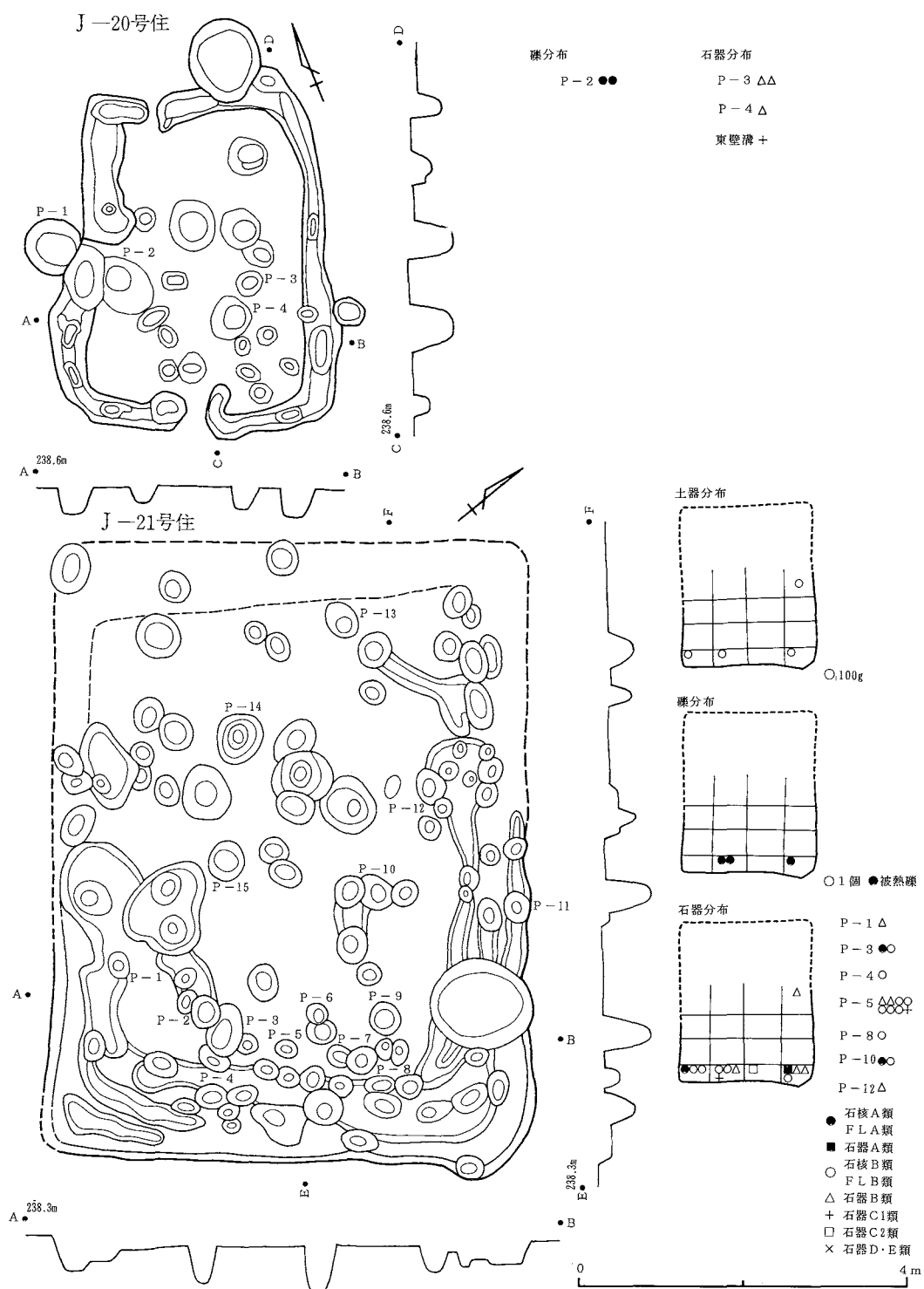
- 石核A類
- FLA類
- 石器A類
- 石核B類
- △ FLB類
- △ 石器B類
- + 石器C1類
- 石器C2類
- × 石器D・E類

1下・2層

第44図 J-16号住居址実測図



第45図 J-17号住居址実測図



第46图 J-20·21号住居址実測図

因についても考える必要がある。しかし、浅い住居址の場合でも明らかに遺棄と判断される例は1例もなく、住居址は廃絶後そのまま放置され続けることはなく、その後も何らかの人為的行為が加えられ続けたものと考えられる。
(和田宏子 金井京子 大工原豊)

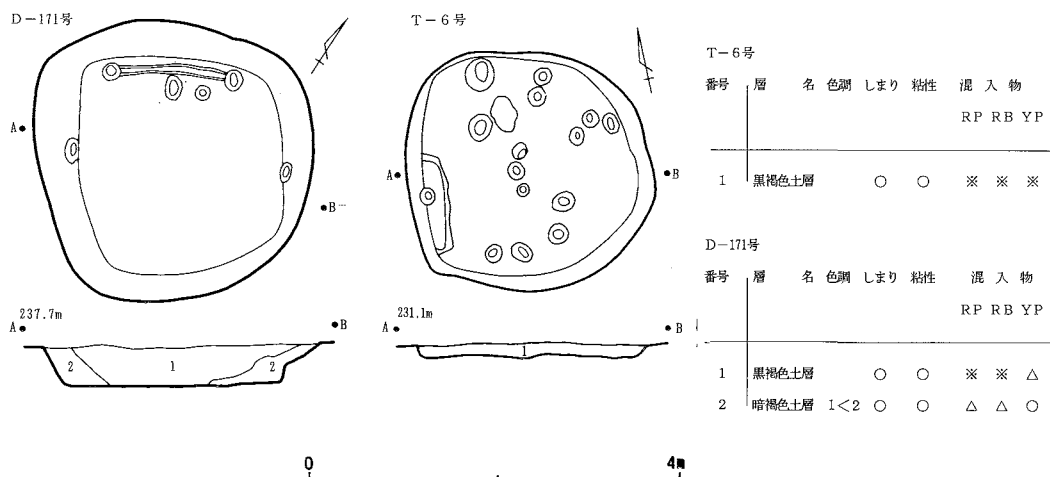
竪穴状遺構 (第47図)

この遺構は「小型円形竪穴」とも呼称されるもので、前期には少ないながらもしばしば検出される遺構であり、本遺跡においては2基検出された。この遺構は住居址の可能性もある遺構であるが、規模が2m程度と非常に小形であり、遺物もほとんど検出されないことから、通常の住居址とは異なる遺構と考えられる。

形態・規模等は第19表のとおりである。

T-6号は北部に焼土により赤化した地床炉のような部分が確認された。また、遺物はほとんど検出されなかったが、炉体土器と推定される内面に炭化物が付着した深鉢形土器の底部が1個検出された。この遺構は出土土器から、諸磯b期のもものと推定される。また、D-171号は焼土は検出されなかったが、若干の土器片と磨製石斧(破片)、リタッチド・フレイクB類、剥片B類が検出された。土器から有尾・黒浜段階のものと思われる。

これらは、いずれも単独で集落のはずれに存在しており、原田昌幸氏が指摘する「比較的安定した、時には広場を有する集落址内に、1基のみ異質な小型円形竪穴が存在する例」(原田1982)に該当する事例とみられる。同様な様相は中野谷松原遺跡でも確認されており、この時期の大規模集落に存在する施設と考えることができる。しかし、この遺構がどのように利用されたものであるかは、現段階では判然としない。



第47図 竪穴状遺構実測図

土壙（第48図～第55図）

本遺跡では、前期及び中期前半段階の土壙が181基検出された。このうち、中期（五領ヶ台式）の土壙は5基のみであり、これらの土壙は大部分前期中葉から後葉にかけての時期のものである。そして、諸特徴は第11表～第15表のとおりである。なお、図示するにあたり、原則として時期別分類し、有尾・黒浜段階（第48図・第49図）、諸磯段階（第50図～第55図）、五領ヶ台式（第55図下段）として示したが、諸磯段階のものの中には一部有尾・黒浜段階のものが混在してしまっている。

これらの土壙は基本的には平面形態から次の6形態に分類できる。

大形円形（直径1 m以上）	26基
小形円形（直径1 m未満）	29基
大形楕円形（長軸1 m以上）	35基
小形楕円形（長軸1 m未満）	47基
隅円長方形（長軸1 m以上）	26基
不定形	13基

これらはさらに、断面形（皿状、椀状、袋状）、堆積状態、遺物出土状況等により細分できる。以下述べてみたい。

大形円形では、いずれの土壙も断面形は椀状で、掘り込みは比較的深い。土層を観察すると、レンズ状堆積で、連続的な堆積状態がみられるものが多い。また、小形円形も大形円形と同様の傾向を示す。しかし、大形楕円形は円形とは異なり、断面形は皿状であり、掘り込みは比較的浅い。そして、土層堆積状態をみると、一度に堆積した状態を示す例が多い傾向がある。なお、円形土壙のような堆積状態のものも多少存在する。一方、小形楕円形では椀状、皿状、袋状の断面形があり、堆積状態も様々であり、特別な傾向は認められない。そして、隅円長方形では、断面形はすべて皿状であり、掘り込みは浅い。土層は一度に堆積した状態を示している。また、不定形では断面形、掘り込みは浅く、土層堆積は複雑なものが多く認められる。

次に、各形態における遺物出土状況について調べてみる。

大形円形では、少量または多量の土器片が出土した土壙と、土器片以外に2種類以上の石器（狭義）及び剥片・礫が検出されたものが存在する。また、小形円形は大形円形と類似した遺物出土状態である。

これに対し、大形楕円形では遺物の出土量は比較的少ない。土器片も少なく、石器は1～2種類が出土している。また、礫の出土も少量である。そして、中には立石を有する例（D-179）が認められる。T-9号土壙のように完形に近い深鉢形土器と丸石・打製石斧・礫がまとまって中央底部から検出される例や、D-111号土壙のように凹石と礫がまとまって底部から検出される例

も認められる。

小形楕円形も土器・石器・礫とも出土量は少ない。この形態の土壙2基（D-12・184）からは黒曜石の原石が出土している。また、立石を有する例（D-46）も存在する。

一方、隅円方形では他の形態に比べ遺物出土量が非常に少ない。遺物が出土している例では、石器が1～2種類検出されるものが認められる。T-8b号土壙では、有孔浅鉢・石皿・多孔石・凹石が底部からまとまって検出されている。そして、T-8c・D-54号土壙では、石皿が底部中央に置かれたような状態で検出された。そして、D-146号土壙のように、立石を有する例もある。

しかし、不定形土壙においては、遺物量は極めて少なく、特別の傾向は認められない。

以上のように、土層堆積状態と遺物出土状態から、これらの土壙は3つのグループにまとめることが可能である。すなわち、大形円形・小形円形の土壙、大形楕円形・小形楕円形・隅円方形の土壙、不定形の土壙の3つのグループである。

大形円形・小形円形の土壙は、土器・石器・礫が一体となって出土しており、住居址や廃棄場所の遺物出土状態（廃棄パターン）とほぼ同じである。したがって、これらの土壙は本来の用途は別として、最終的には不用物の廃棄用に用いられたと推定され、約50基がこれに該当する。

これに対して、大形楕円形・小形楕円形・隅円方形の土壙では、上部施設として、墓標と考えられる立石が存在したり、副葬品とみられる有孔浅鉢・深鉢などの完形土器ないし、小形石器などが検出されている。また、抱石と推定される石皿・丸石・多孔石・凹石等が検出されるものも認められる。そして、堆積状態も廃棄パターンとは異なっている。したがって、これらの土壙は墓壙と推定され、約100基がこれに該当する。

また、不定形のもの、特定の機能・用途は不明で一群である。これらの土壙の中には自然の営力によるものも含まれていると考えられる。

次に、遺跡内での土壙の分布状態をみると、前期の住居址がまとまって存在する調査区中央部に集中していることがわかる。さらに詳細にみると、いくつかのまとまりをもつことがわかる。そこで、これまでの分析結果から明かになった3つのグループがどのように分布しているか、検討してみたい。

まず、廃棄パターンを示す土壙であるが、これらはJ-18号住居址とJ-17号住居址の間から北方向に伸びて土壙群を形成する。また、J-20号住居址の西側、J-15号住居址の東側にも数基ずつまとまって分布している。

墓壙と推定される約100基存在する。これらの土壙は、Y-2号住居址の北東部分、Y-1号住居址南部分、J-13号住居址北東部分にそれぞれ土壙群を形成する。これらの土壙群は密集し、しばしば重複している。

これに対し、不定形のものには用途が明確な土壌群とは分布域を異にしている。調査区南半分のピット集中部分に多く存在するが、はっきりした集中部分を持たず散漫な分布状態を示す。

このように、ある程度用途が特定された土壌は分布上もそれぞれまとまりを有しており、集落内での用途別に空間利用が行われていたことが推定される。(和田宏子 大工原豊)

土壌番号	規模(上端)		規模(下端)		深さ	平面形態	断面形態	土器	出土遺物		剝片等	礫	時期	
	WE	NS	WE	NS					石器	石				
J-11・D-1	122	184	100	170	26	小形楕円	皿状	◎	SCA・SCB・RFB・凹石・砥石		○	◎	諸磯c	
J-11・D-2	130	64	110	58	20	小形楕円	皿状	△					諸磯b	
J-11・D-3	94	100	66	82	19	小形円	皿状							
J-13・D-1	110	74	80	52	82	小形楕円	椀状	△	SCB・凹石・多孔石・砥石・蔽石		△	○	有尾	
J-16・D-1	110	80	92	68	24	小形楕円	皿状							
J-17・D-1	120	100	80	60	70	小形円	皿状	△			△	○	有尾	
J-7・D-1	90	100	70	80	30	小形楕円	椀状	△	SCB				○ 諸磯b	
J-8・D-1	170	140	150	120	20	大形楕円	皿状	◎	石匙・RFB・凹石・砥石		△	◎	諸磯c	
J-8・D-2	120	120	110	100	12	大形楕円	皿状	△					諸磯b	
J-9・D-1	100	90	90	70	30	小形楕円	皿状	◎	打斧・SCB・RFB・凹石		△	◎	有尾	
T-10	294	250	250	120	24	大形楕円	皿状					○		
T-11	190	170	84	70	88	小形円	椀状	II C	打斧		△	○	諸磯b	
T-12	140	98	93	100		大形円	皿状	△	立石				有尾	
T-13	224	130	206	112	26	隅円方形	皿状	△				○	諸磯b	
T-14	240	160	200	110	50	大形楕円	皿状	△	棒状礫(立石状)				諸磯b	
T-15	162	198	124	148	28	不定形	皿状							
T-16	90	160	80	130	32	大形楕円	皿状	△			△		中期	
T-17	90	182	140	62	22	大形楕円	皿状	△			△	◎	中期	
T-18	222	—	164	—	32	隅円方形	皿状	△	原石(O b)		△			
T-19	196	140	180	125	18	隅円方形	皿状	△	SCB		△		諸磯b	
T-20	488	332	468	280	30	不定形	皿状	△	SCA				中期	
T-21	250	220	192	170	30	大形楕円	皿状	△	打斧		△		有尾	
T-22	220	132	184	98	20	隅円方形	皿状	△			△		有尾	
T-24	170	160	120	110	30	大形楕円	皿状	△	SCB・RFB		△	○	有尾	
T-25	190	218	150	160	34	大形円	皿状	II A	打斧・SCB・RFB		◎	◎	諸磯b	
T-26	266	210	205	184	60	大形楕円	椀状							
T-27	180	190	130	156	40	大形楕円	椀状							
T-7	279	250	214	102	38	大形楕円	皿状							
T-8						隅円方形	皿状	II C・ 小形浅鉢	凹石・石皿・多孔石					諸磯b

※土器：◎>1000g, ○>500g, △>1g 剝片等：◎>10個, ○>5個, △>1個 礫：◎>5個, ○>1個

第11表 土壌観察表

土壌番号	規模(上端)		規模(下端)		深さ	平面形態	断面形態	土器	出土遺物		剥片等	時期	
	WE	NS	WE	NS					石器	礫			
T-9	280	290	200	250	46	大形橢円	皿状	II C	打斧・RFB・丸石		○	諸磯b	
D-9	161	148	146	132	52	大形橢円	椀状	◎	SCB		○	○	諸磯b
D-10					16			△	RFA				有尾
D-11	100	80	70	62	48	小形橢円	椀状	△	SCB・磨石		△	○	有尾
D-12	130	116	100	90	32	小形橢円	皿状	△	原石 (Ob)				諸磯b
D-13	100	120	84	96	22	小形橢円	皿状	△	RFA		△	○	諸磯b
D-14	190	188	150	134	72	大形橢円	椀状	◎	石匙B・SCB・RFA		△	◎	諸磯b
D-16	90	86	66	64	22	小形円	皿状	△	SCB		△	◎	諸磯b
D-17	154	160	134	140	34	大形円	皿状	◎	SCB		○	○	諸磯b
D-18	240	160	200	130	50	大形橢円	皿状	△	SCA・RFA・SCB・凹石		△		有尾
D-19	100	100	80	90	22	小形円	皿状						
D-20	158	154	130	128	18	大形円	皿状				△		
D-21	218	198	180	162	21	大形橢円	皿状		SCB		△		
D-22	160	140	121	98	36	大形橢円	皿状				△		
D-23	90	90	68	58	44	小形円	椀状	△	石匙A・RFB		△		諸磯b
D-24	150	120	114	80	36	大形橢円	皿状	△			△		諸磯b
D-27	130	128	106	106	50	大形円	椀状	△			△		有尾
D-28	134	180	118	140	52	大形橢円	椀状	△	RFA				有尾
D-29	154	146	130	120	50	大形円	椀状	○					有尾
D-30	94	100	50	58	38	小形円	碗状						
D-31	76	74	58	50	40	小形円	椀状						
D-32	80	110	60	92	46	小形橢円	椀状						
D-33	120	90	110	80	60	小形橢円	袋状	II A	凹石				諸磯b
D-35	110	138	76	100	22	小形橢円	皿状	△					有尾
D-36	84	100	62	76	28	小形橢円	皿状	△			△		有尾
D-37	46	55	35	45	20	小形橢円	皿状	△					有尾
D-38	190	174	150	140	58	大形円	椀状	△	RFB・磨石・石皿		○		有尾
D-39	120	140	100	120	33	不定形	皿状		SCB・RFB				
D-41	80	110	60	90	22	小形橢円	皿状						
D-42	160	104	140	90	20	大形橢円	皿状						
D-43	120	116	104	98	18	大形円	皿状	小形深鉢	打斧		○		有尾
D-46	90	100	60	90	26	小形橢円	皿状		棒状礫				
D-47	120	90	100	70	20	大形橢円	皿状						
D-48	160	140	144	118	28	大形橢円	皿状	△					前期+
D-49	116	84	100	84	50	大形橢円	袋状	○	垂飾未成品		△		有尾
D-50	240	220	236	210	20	大形橢円	皿状		立石・石皿				

※土器：◎>1000g, ○>500g, △>1g 剥片等：◎>10個, ○>5個, △>1個 礫：◎>5個, ○>1個

第12表 土壌観察表

土壌番号	規模(上端)		規模(下端)		深さ	平面形態	断面形態	土器	出土遺物 石器	剥片等	礫	時期
	WE	NS	WE	NS								
D-51	100	—	78	—	20	小形橢円	皿状	△	RFB・砥石			諸磯b
D-52	78	—	60	—	20	小形橢円	皿状					
D-53	144	98	124	70	14	隅円方形	皿状					
D-54	140	90	128	60	30	隅円方形	皿状		砥石			
D-54B	158	110	136	90	16	隅円方形	皿状		石槍			
D-56	114	98	86	80	50	小形円	椀状					
D-61	150	124	124	116	34	大形円	皿状			△		
D-62	68	116	48	90	42	小形橢円	椀状				○	
D-65	—	—	—	—	—	不定形						中期
D-66	98	126	70	100	30	大形橢円	皿状	I B	凹石・石皿	△		有尾
D-68	70	86	50	54	40	小形橢円	椀状	△				有尾
D-70	108	54	82	46	38	小形橢円	椀状	△		△		中期
D-71	126	114	80	46	50	小形橢円	椀状					
D-72	110	120	70	80	22	小形円	皿状					
D-73	112	74	80	45	13	小形橢円	皿状	△				諸磯b
D-75	90	132	62	110	22	大形橢円	皿状					
D-76	116	96	108	78	48	不定形	椀状	◎	打斧末・凹石	○	○	有尾
D-77	124	110	82	66	54	小形橢円	椀状	◎	打斧・SCB・石皿	△	○	有尾
D-78	102	128	210	114	42	大形橢円	袋状	○	打斧・SCB・砥石	△	○	中期
D-79	150	80	130	40	22	不定形		△		△	○	有尾
D-80	110	88	90	70	40	小形橢円	椀状	△	石錐・RFA	△		有尾
D-81	48	24	32	10	50	小形橢円	椀状	△				有尾
D-85	100	116	70	94	14	小形橢円	皿状					
D-86	100	102	80	78	32	小形円	袋状	I B				諸磯b
D-87	110	100	40	50	30	小形円	皿状	△	SCA・凹石・原石Ob	△		諸磯c
D-88	86	68	62	44	24	小形橢円	皿状	△	SCB			諸磯b
D-89	110	170	80	50	26	小形橢円	皿状					
D-90	120	130	78	110	50	大形橢円	皿状	△				有尾
D-91	90	186	62	152	30	大形橢円	皿状					
D-92	138	190	110	160	40	不定形	椀状					
D-93	120	100	70	60	30	小形円	皿状					
D-95	90	80	70	50	20	隅円方形	皿状		石匙B		○	
D-97	84	130	64	90	26	小形橢円	椀状	△				有尾
D-99	112	130	100	100	24	大形円	皿状					
D-100	124	112	100	92	38	大形円	椀状	△		△		有尾
D-101	116	180	80	160	30	隅円方形	皿状	△				諸磯b
D-102	90	88	74	72	16	小形円	皿状	△				有尾

※土器：◎>1000g, ○>500g, △>1g 剥片等：◎>10個, ○>5個, △>1個 礫：◎>5個, ○>1個

第13表 土壌観察表

土壙番号	規模(上端)		規模(下端)		深さ	平面形態	断面形態	土器	出土遺物		剥片等	礫	時期
	WE	NS	WE	NS					石器	石			
D-103	100	120	80	94	52	小形楕円	袋状	I B	SCB		△	○	有尾
D-104	96	84	60	64	24	不定形	皿状						
D-105	96	98	60	98	38	不定形	椀状						
D-106	88	66	62	46	24	小形楕円	皿状						
D-107	110	140	84	110	30	大形楕円	皿状						
D-108	50	80	36	66	14	小形楕円	皿状	△				○	有尾
D-111	150	164	124	140	40	不定形	皿状	○	凹石		△	○	諸礫
D-112	172	151	56	71	39	小形楕円	皿状	△	SCB		△		諸礫b
D-113	130	100	110	68	20	隅円方形	皿状	△	SCB				諸礫b
D-114	70	50	50	50	20	小形円	皿状						
D-115	148	130	110	90	38	大形楕円	皿状	△	SCB・RFB		△		諸礫b
D-117	128	100	100	82	28	大形楕円	皿状	△				○	有尾
D-118	140	150	90	92	30	大形円	皿状	○	打斧・SCB		△		有尾
D-119	130	130	80	64	28	小形楕円	皿状	△				◎	諸礫b
D-120	90	140	60	92	30	小形楕円	皿状	△					諸礫b
D-121	90	90	70	70	18	小形円	皿状						
D-123	100	118	80	88	68	小形円	椀状	◎	凹石			○	有尾
D-124	130	120	110	102	44	大形円	椀状	△					諸礫b
D-125	158	134	118	112	78	大形円	椀状	○	△			○	有尾
D-126	122	108	72	72	62	小形円	椀状	○	△			○	有尾
D-127	156	176	132	142	34	大形円	皿状	○	RFB・石皿・磨石		△		諸礫
D-128	156	140	120	110	28	大形円	皿状	△			△		有尾
D-129	150	158	100	90	40	大形円	皿状	△				○	有尾
D-130	130	120	94	80	38	小形楕円	皿状	△					有尾
D-131	122	112	70	80	68	小形円	椀状	○	SCB・RFB			○	有尾
D-132	220	144	180	120	40	大形楕円	椀状						
D-133	100	100	76	70	24	小形円	皿状	○	SCB		△	○	有尾
D-134	90	80	72	56	18	小形楕円	皿状	△					諸礫b
D-135	118	80	90	58	32	小形楕円	皿状	△			△		有尾
D-136	152	140	120	110	24	大形円	皿状	○					有尾
D-137	180	160	144	134	38	大形円	椀状		凹石				
D-137	100	80	68	44	20	小形楕円	皿状						
D-138	90	80	70	60	24	小形円	皿状		棒状礫				
D-139	90	60	60	40	18	小形楕円	皿状						
D-140	270	200	196	160	32	大形楕円	皿状	△					諸礫b
D-141	60	50	40	20	12	小形楕円	皿状	△	凹石				中期
D-142	100	80	82	70	14	小形円	皿状	○	石皿・磨斧		△		有尾

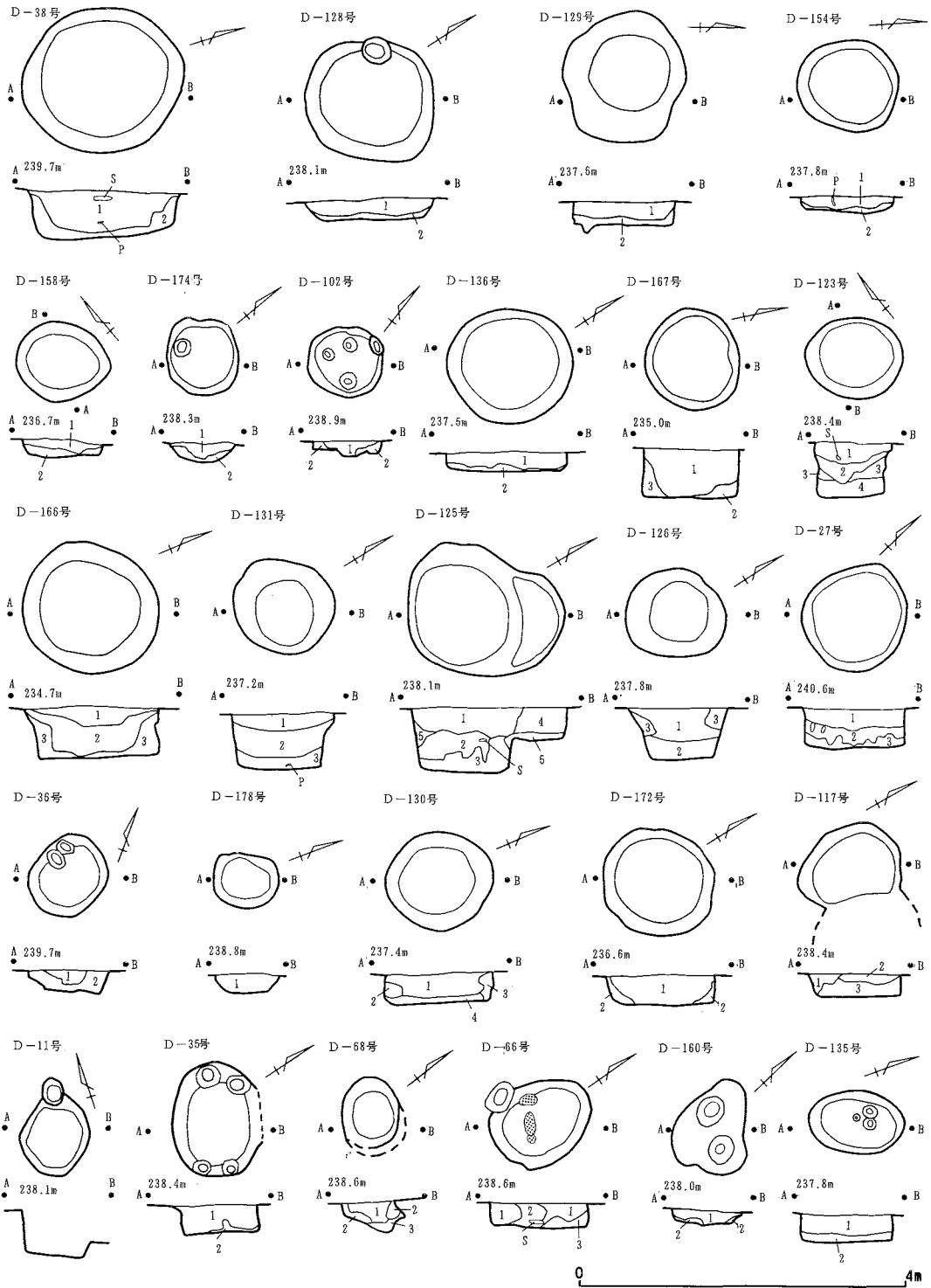
※土器：◎>1000g, ○>500g, △>1g 剥片等：◎>10個, ○>5個, △>1個 礫：◎>5個, ○>1個

第14表 土壙観察表

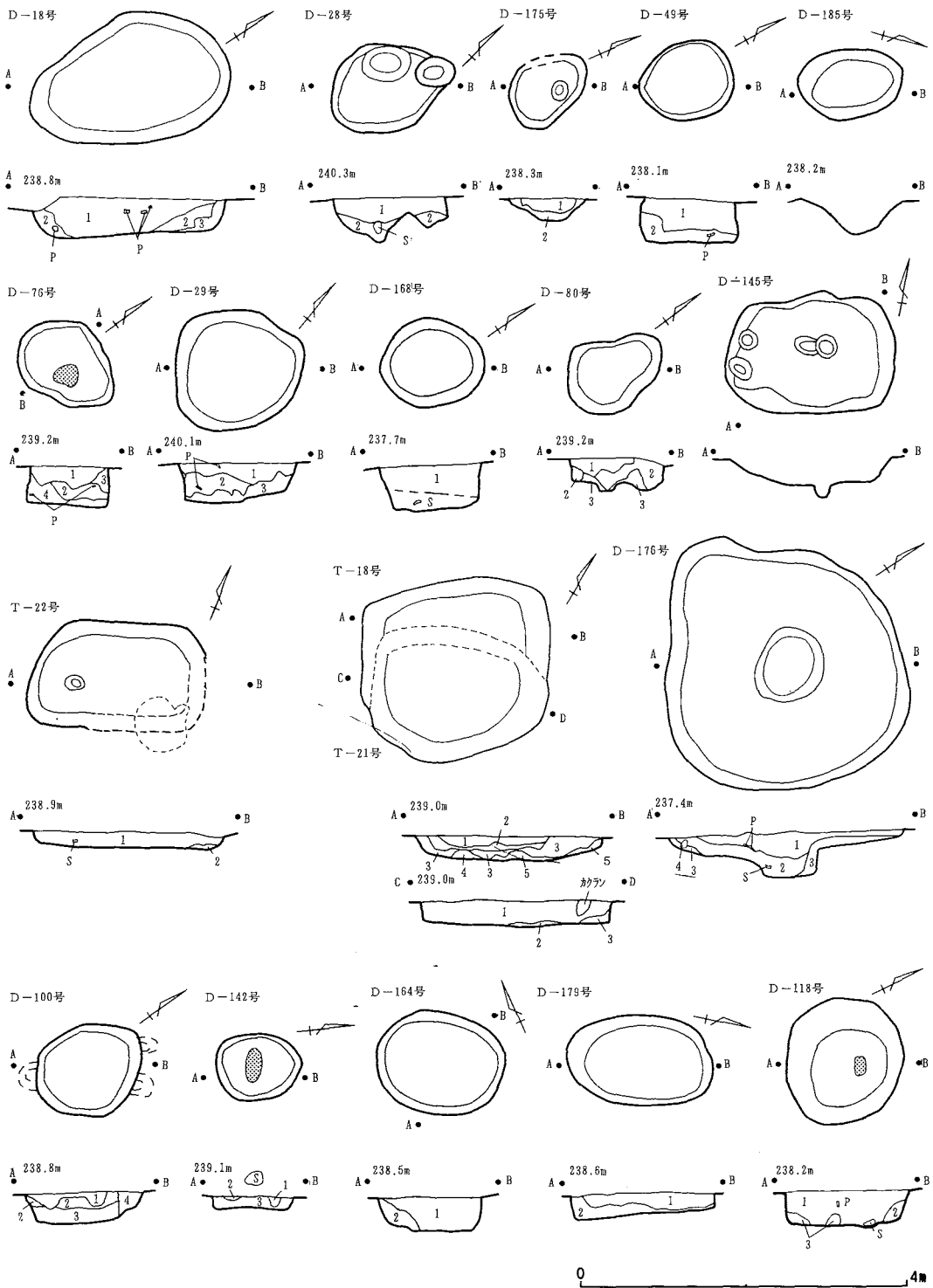
土壙番号	規模(上端)		規模(下端)		深さ	平面形態	断面形態	土器	出土遺物		剝片等	礫	時期
	WE	NS	WE	NS					石器	石 器			
D-143	150	180	114	160	30	大形楕円	皿状	△	石鏃		△	○	諸磯b
D-144	130	146	140	120	68	大形楕円	椀状	◎	RFB・石皿		△	○	諸磯b
D-145	150	220	130	170	48	隅円方形	皿状	△	SCB		△		有尾
D-146	110	200	90	180	23	隅円方形	皿状		凹石				
D-147	162	150	116	111	40	大形円	椀状	△	RFA・砥石		△	◎	諸磯b
D-148	100	90	70	70	26	小形円	皿状	△					
D-149	114	238	130	210	20	隅円方形	皿状	△					諸磯b
D-150	—	—	—	—	30	不定形		△					諸磯c
D-152	110	100	70	60	32	小形円	皿状		SCB		△		
D-154	120	110	100	90	20	大形円	皿状	△					有尾
D-155	122	122	94	100	24	大形円	皿状	△	SCB		△		諸磯b
D-156	174	190	130	140	70	大形円	椀状	◎	石鏃・打斧・RFB		△	◎	諸磯b
D-157	140	90	90	58	28	隅円方形	皿状	○			△		諸磯b
D-158	100	114	64	88	24	小形楕円	皿状	△					有尾
D-159	76	70	50	48	38	小形楕円	椀状	△					有尾
D-160	88	114	47	90	20	不定形	皿状	△	凹石				有尾
D-161	140	130	82	78	42	大形円	椀状	II B	石匙A・砥石		△	○	諸磯b
D-163	184	124	160	100	24	隅円方形	皿状	△	打斧・凹石				諸磯b
D-164	128	112	102	132	40	小形楕円	椀状	△			△		有尾
D-165	220	122	190	92	30	隅円方形	皿状	△			△		有尾
D-166	162	160	120	110	62	大形円	椀状	△					有尾
D-167	114	122	96	102	60	大形円	椀状	△					有尾
D-168	124	110	100	80	54	大形楕円	椀状	△	打斧・磨斧		△		有尾
D-170	90	90	50	30	28	小形楕円	皿状						
D-172	134	128	106	100	40	小形円	皿状	△	打斧		△		有尾
D-173	150	154	90	110	40	大形楕円	椀状	II C	SCB・RFA・石核		△	◎	諸磯a
D-174	86	90	74	74	20	小形円	椀状	△	RFB			○	有尾
D-175	90	90	70	68	24	小形円	椀状	△	磨斧			○	有尾
D-176	272	288	256	264	50	大形円	皿状	I B			◎	◎	有尾
D-177	132	210	70	140	36	大形楕円	椀状	△	RFB		△	○	諸磯b
D-178	80	64	58	50	24	小形円	皿状	△					有尾
D-179	178	10	144	90	30	大形楕円	椀状	△	棒状礫		△		有尾
D-180	108	118	76	50	56	小形楕円	椀状	△					諸磯b
D-181	123	80	89	50	22	隅円方形	椀状	○					有尾
D-184	124	120	80	90	38	小形円	椀状	△	原石Ob・SCB		△		有尾
D-185	120	84	92	58	40	小形楕円	椀状	◎			△		有尾

※土器：◎>1000g, ○>500g, △>1g 剝片等：◎>10個, ○>5個, △>1個 礫：◎>5個, ○>1個

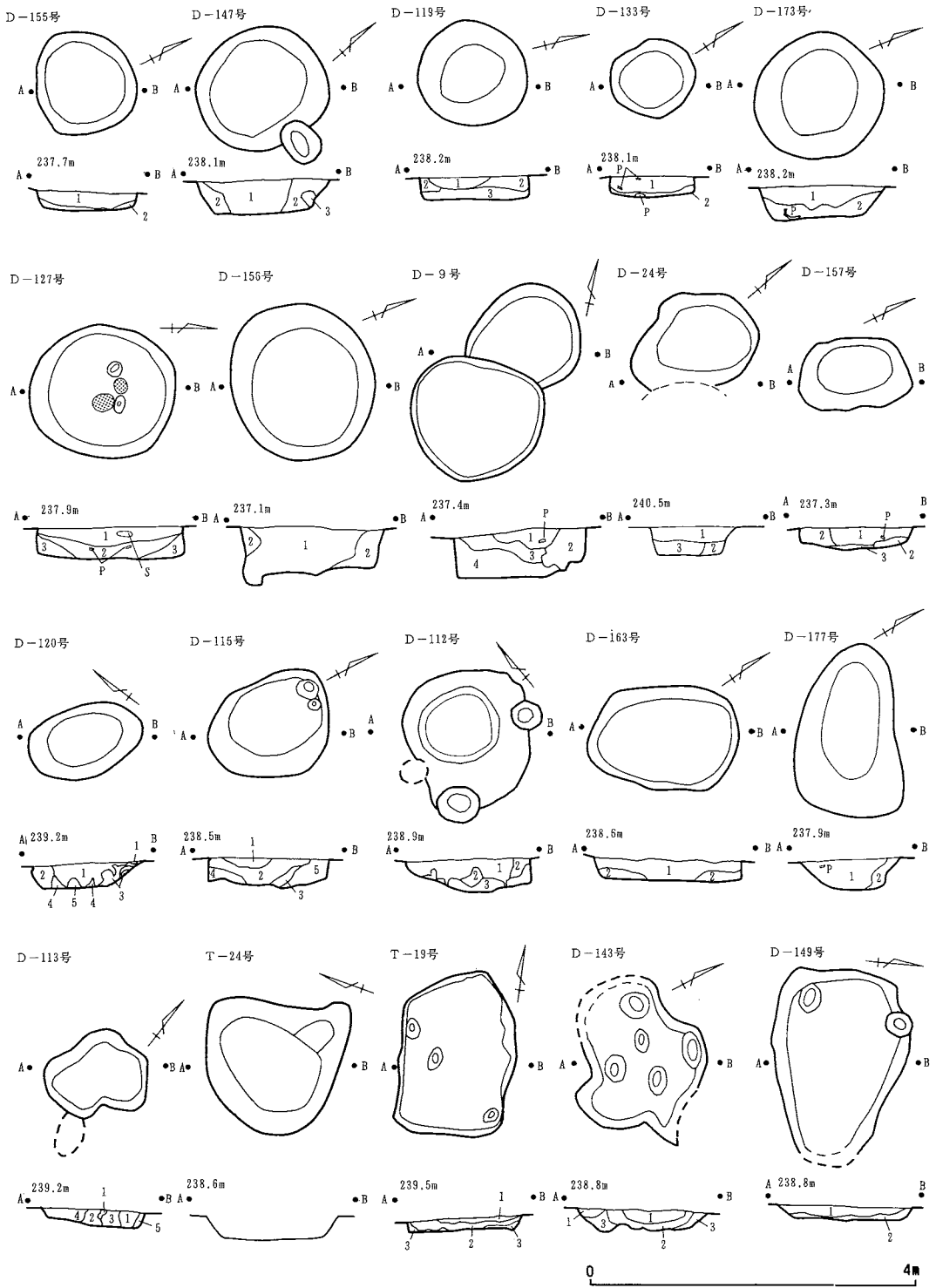
第15表 土壙觀察表



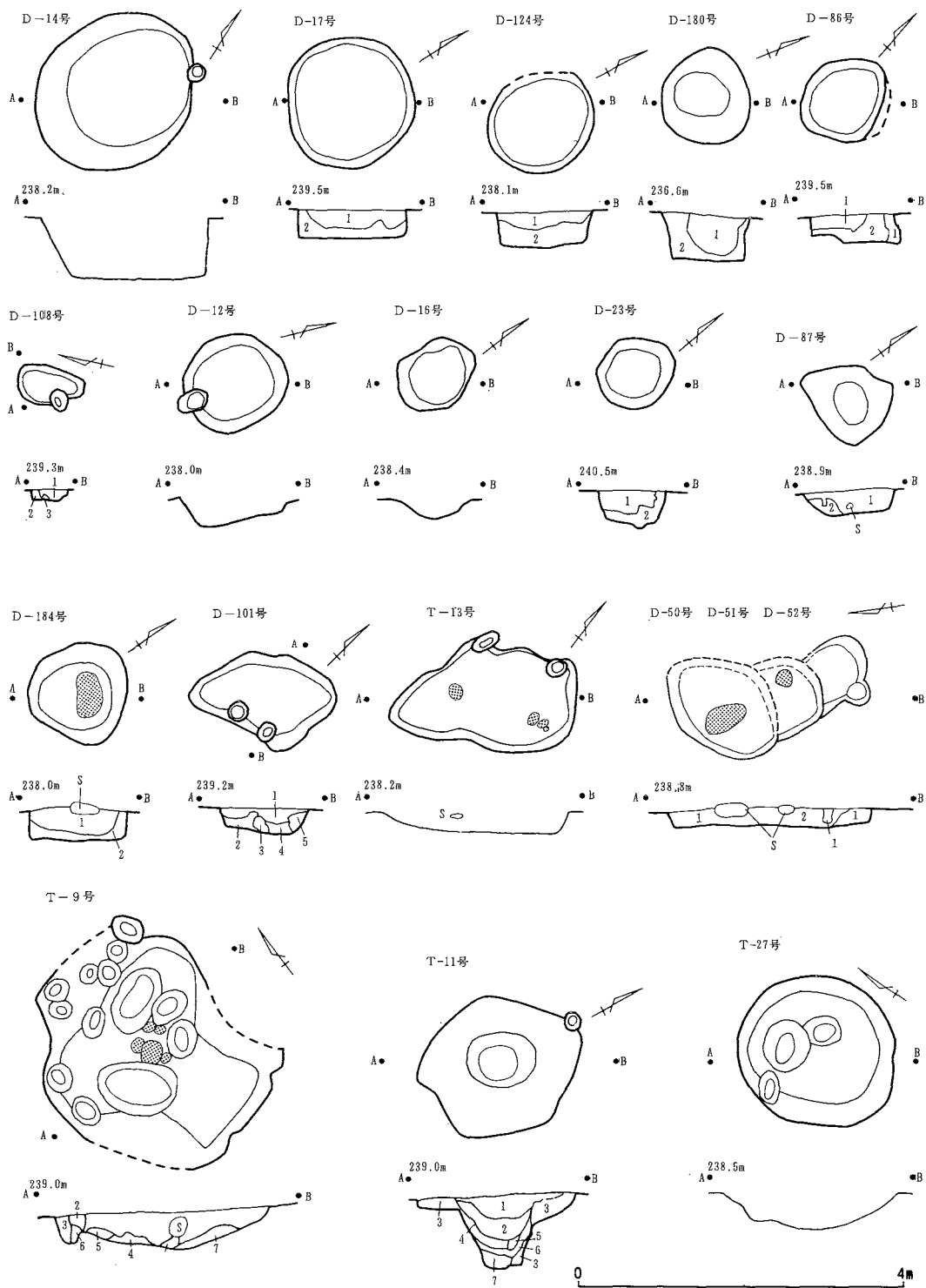
第48图 土壤实测图(1)



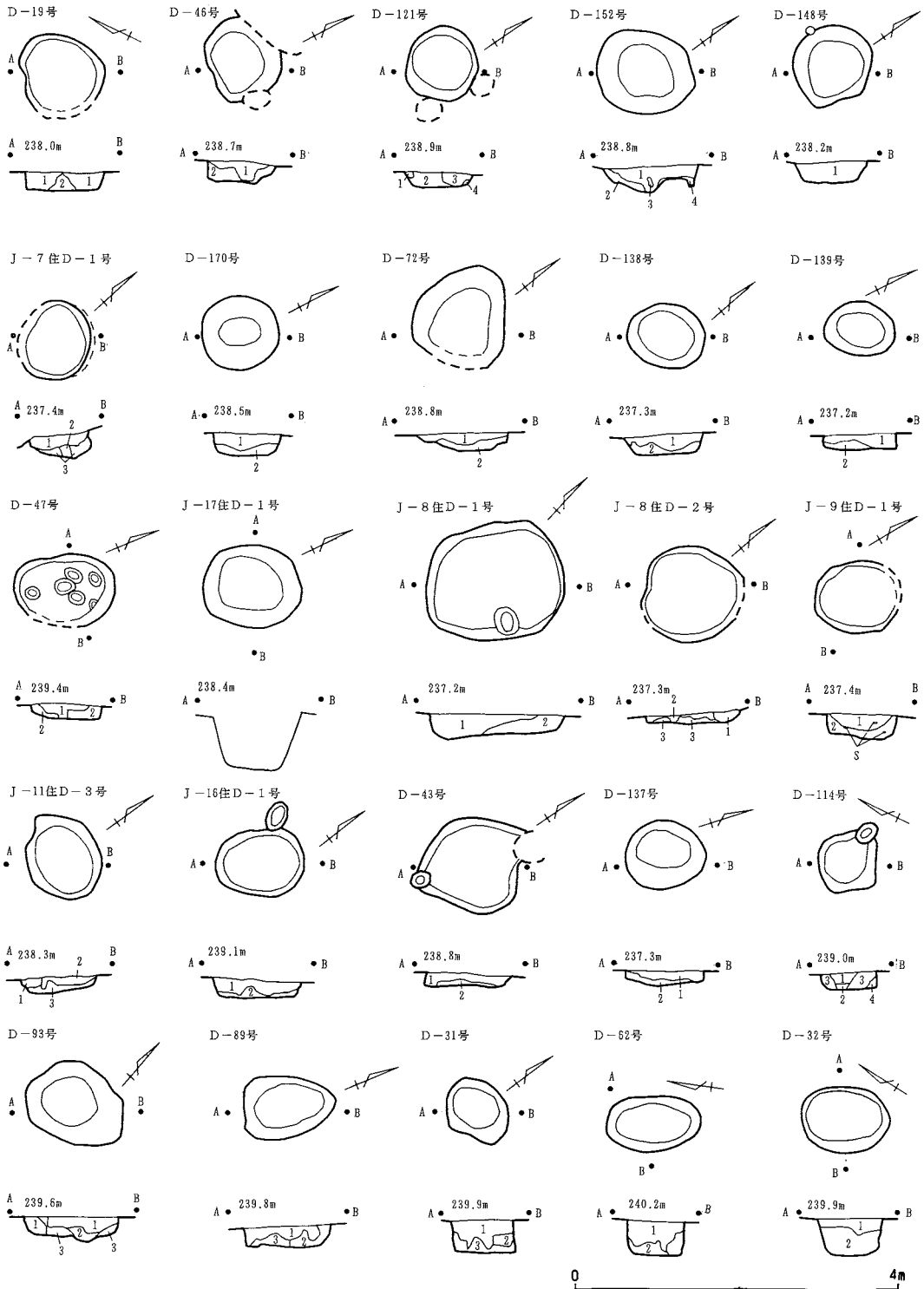
第49図 土壤実測図 (2)



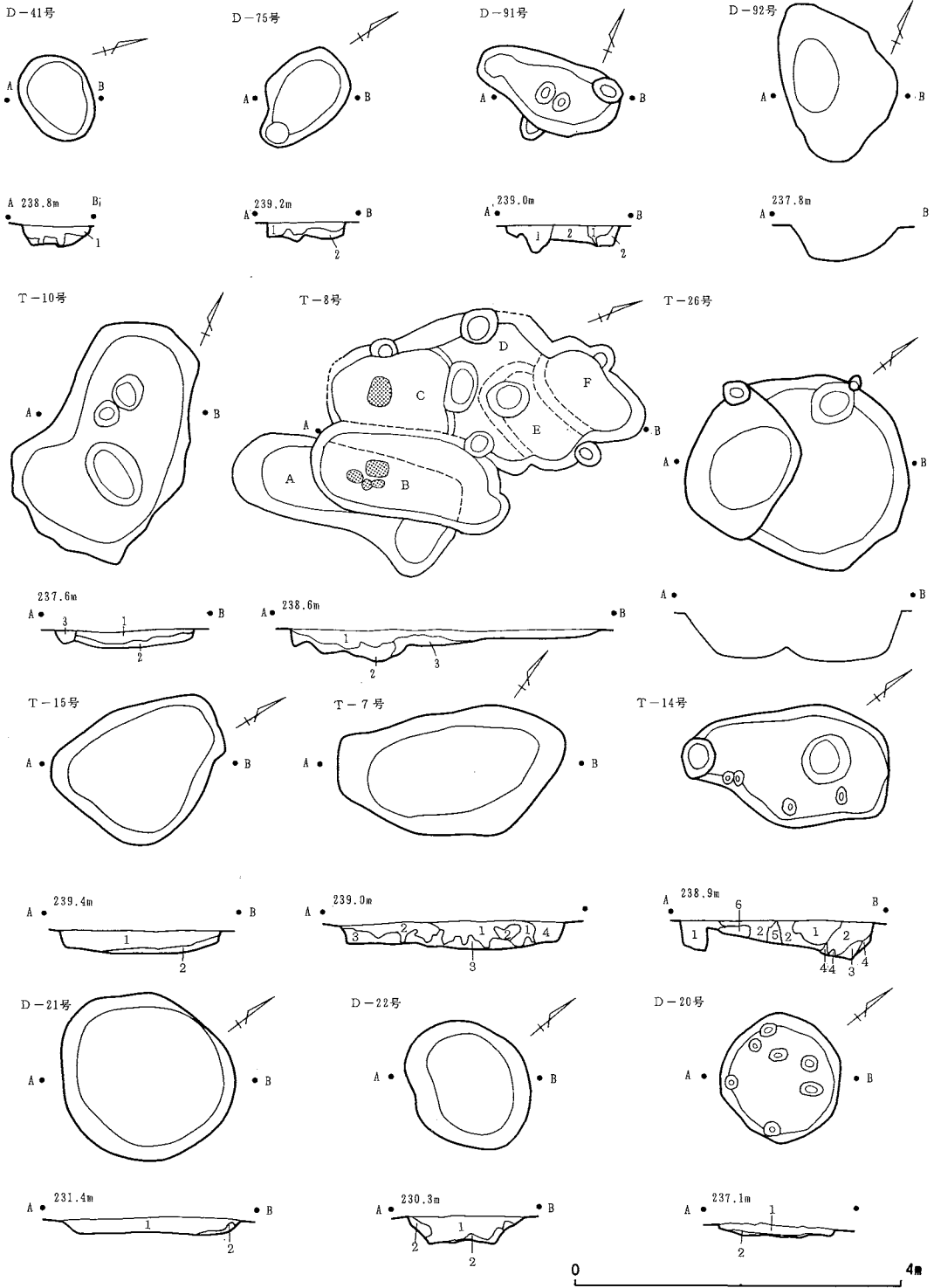
第50图 土壤实测图 (3)



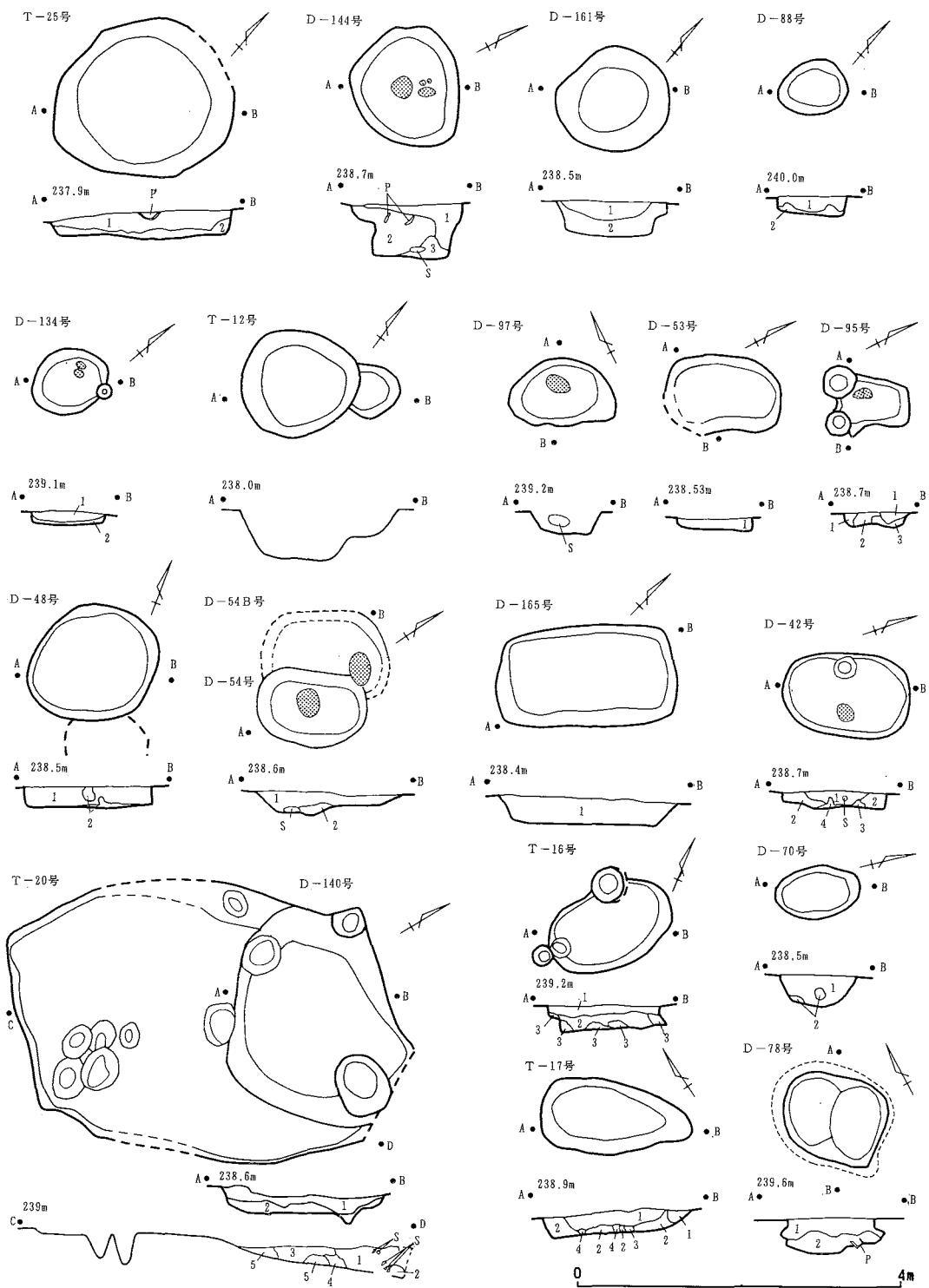
第51图 土壤实测图(4)



第53图 土壤实测图 (6)



第54图 土壤实测图 (7)



第55图 土壤实测图(8)

番号	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物				番号	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物			
						RP	RB	YP	炭							RP	RB	YP	炭
D-38	1	黒褐色土層			○	○	※	※	※	D-76	1	黒褐色土層			○	○	※	※	※
	2	暗褐色土層	1<2		○	○	△	△	△		2	黒褐色土層	1<2		○	○	※	※	※
D-128	1	黒褐色土層			○	○	※	※	※		3	暗褐色土層	2<3		○	○	△	△	△
	2	暗黄褐色土層	1<2		○	○	※	△	△		4	暗褐色土層	3<4		○	○	△	○	△
D-129	1	黒褐色土層			○	○	※	※	※	D-29	1	黒褐色土層			○	○	○	○	※
	2	暗黄褐色土層	1<2		○	○	※	△	※		2	黒褐色土層	1<2		○	○	※	※	△
D-154	1	暗褐色土層			○	○	△	※	※		3	暗褐色土層	2<3		○	○	△	△	※
	2	暗黄褐色土層	1<2		○	○	△	○	※	D-168	1	暗褐色土層			○	○	△	△	○
D-158	1	暗褐色土層			○	○	△	△	△	D-80	1	黒褐色土層			○	○	○	○	※
	2	暗黄褐色土層	1<2		○	○	○	○	△		2	黒褐色土層	1<2		○	○	※	※	※
D-174	1	暗褐色土層			○	○	△	△	△		3	暗黄褐色土層	2<3		△	△	○	△	※
	2	暗黄褐色土層	1<2		○	○	○	○	※	D-145	1	黒褐色土層			○	○	※	※	△
D-102	1	黒褐色土層			○	○	※	※	△		2	黒褐色土層	1<2		○	○	※	※	○
	2	暗褐色土層	1<2		○	○	△	△	△		3	暗褐色土層	2<3		○	○	△	△	△
D-136	1	暗褐色土層			○	○	△	※	△	T-22	1	暗褐色土層			○	○	○	○	△
	2	暗黄褐色土層	1<2		○	○	△	△	△		2	暗黄褐色土層	1<2		○	○	○	○	△
D-167	1	暗褐色土層			○	○	※	△	○	T-18	1	黒褐色土層			○	○	○	○	※
	2	暗褐色土層	1<2		○	○	※	○	※		2	暗褐色土層	1<2		○	○	△	×	△
	3	暗褐色土層	2<3		○	○	△	△	△		3	暗黄褐色土層	2>3		○	○	※	※	※
D-123	1	黒褐色土層			○	○	※	※	△		4	暗黄褐色土層	3<4		○	○	○	△	※
	2	黒褐色土層	1<2		○	○	※	※	△		5	黄褐色土層	4<5		○	○	△	○	※
	3	暗褐色土層	2<3		○	○	○	△	△	T-21	1	暗褐色土層			○	○	○	△	◎
	4	暗褐色土層	3<4		○	○	△	△	○		2	黒褐色土層	1>2		○	○	※	※	◎
D-166	1	黒褐色土層			○	○	※	※	※		3	黄褐色土層	2<3		○	○	※	※	◎
	2	黒褐色土層	1<2		○	○	※	※	○	T-25	1	黒褐色土層			○	○	○	○	※
	3	暗褐色土層	2<3		○	○	△	△	△		2	暗褐色土層	1<2		○	○	△	△	△
D-131	1	黒褐色土層			○	○	△	※	△	D-100	1	黒褐色土層			○	○	○	○	※
	2	暗褐色土層	1<2		○	○	※	△	△		2	暗黄褐色土層	1<2		○	○	○	△	○
	3	暗黄褐色土層	2<3		○	○	※	△	※		3	暗黄褐色土層	2<3		○	○	○	○	◎
D-125	1	黒褐色土層			○	○	△	※	×		4	暗黄褐色土層	3<4		○	○	○	○	◎
	2	黒褐色土層	1<2		○	○	×	×	×	D-142	1	黒褐色土層			○	○	○	○	※
	3	暗褐色土層	2<3		○	○	◎	×	×		2	暗黄褐色土層	1<2		○	○	○	○	※
	4	暗褐色土層	1<4		○	○	○	×	×		3	暗黄褐色土層	2<3		○	○	○	○	△
	5	暗褐色土層	4<5		○	○	○	×	×	D-164	1	暗褐色土層			○	○	○	△	△
D-126	1	黒褐色土層			○	○	△	×	×		2	暗黄褐色土層	1<2		○	○	○	△	△
	2	黒褐色土層	1<2		○	○	△	×	×	D-179	1	黒褐色土層			○	○	○	○	※
	3	暗褐色土層	2<3		○	○	○	×	○		2	暗褐色土層	1<2		○	○	○	△	△
D-27	1	黒褐色土層			○	○	※	※	※	D-118	1	黒褐色土層			○	○	○	○	※
	2	黒褐色土層	1<2		○	○	※	※	△		2	暗黄褐色土層	1<2		○	○	△	△	△
	3	黄褐色土層	2<3		○	○	◎	◎	△		3	暗黄褐色土層	2<3		○	○	○	△	△
D-36	1	黒褐色土層			○	○	※	※	△	D-176	1	黒褐色土層			○	○	○	○	※
	2	暗褐色土層	1<2		○	○	△	△	△		2	黒褐色土層	1<2		○	○	○	○	○
D-178	1	暗黄褐色土層			○	○	○	○	※		3	暗褐色土層	2<3		○	○	△	△	○
D-130	1	黒褐色土層			○	○	※	×	※		4	黄褐色土層	3<4		○	○	※	×	◎
	2	暗褐色土層	1<2		○	○	※	△	△	D-144	1	黒褐色土層			○	○	○	○	※
	3	暗黄褐色土層	1<3		○	○	△	△	△		2	暗褐色土層	1<2		○	○	△	△	△
	4	暗褐色土層	1<4		○	○	○	△	※		3	暗黄褐色土層	2<3		○	○	○	△	△
D-172	1	黒褐色土層			○	○	※	※	○	D-161	1	黒褐色土層			○	○	○	○	※
	2	暗褐色土層	1<2		○	○	※	△	△		2	黒褐色土層	1<2		○	○	○	△	△
D-117	1	黒褐色土層			○	○	※	※	※	D-135	1	暗褐色土層			○	○	○	△	△
	2	黒褐色土層	1<2		○	○	※	△	△		2	暗黄褐色土層	1<2		○	○	○	△	△
	3	暗黄褐色土層	2<3		○	○	○	○	※	D-134	1	暗褐色土層			○	○	○	○	△
D-35	1	黒褐色土層			○	○	※	※	△		2	暗黄褐色土層	1<2		○	○	○	○	○
	2	暗褐色土層	1<2		○	○	△	△	△	D-53	1	黒褐色土層			○	○	○	○	※
D-68	1	黒褐色土層			○	○	※	※	※	D-95	1	黒褐色土層			○	○	○	○	※
	2	暗褐色土層	1<2		○	○	△	△	△		2	暗褐色土層	1<2		○	○	△	△	△
	3	暗黄褐色土層	2<3		○	○	○	○	※		3	暗褐色土層	2>3		○	○	○	○	△
D-66	1	黒褐色土層			○	○	※	※	△	D-48	1	黒褐色土層			○	○	○	○	※
	2	暗褐色土層	1<2		○	○	△	△	△		2	暗黄褐色土層	1<2		○	○	○	○	△
	3	暗黄褐色土層	2<3		○	○	○	○	○	D-54	1	黒褐色土層			○	○	○	○	※
D-160	1	黒褐色土層			○	○	※	△	△		2	暗褐色土層	1<2		○	○	○	○	※
	2	暗黄褐色土層	1<2		○	○	○	○	△	D-165	1	黒褐色土層			○	○	○	○	△
D-88	1	黒褐色土層			○	○	※	※	※	D-42	1	暗褐色土層			○	○	○	○	※
	2	黒褐色土層	1<2		○	○	※	※	△		2	暗黄褐色土層	1<2		○	○	○	△	○
D-18	1	黒褐色土層			○	○	※	※	△		3	黒褐色土層	2>3		○	○	△	×	○
	2	暗褐色土層	1<2		○	○	△	△	△		4	暗黄褐色土層	3<4		△	△	△	○	△
	3	暗黄褐色土層	2<3		○	○	○	○	※	T-19	1	黒褐色土層			○	○	○	○	※
D-28	1	黒褐色土層			○	○	※	※	※		2	暗褐色土層	1<2		○	○	○	○	△
	2	黒褐色土層	1<2		○	○	※	△	△		3	暗褐色土層	2<3		○	○	△	△	△
	3	暗黄褐色土層	2<3		○	○	○	○	※		4	暗黄褐色土層	3<4		○	○	○	○	△
D-175	1	黒褐色土層			○	○	※	※	※		5	暗黄褐色土層	4<5		○	○	△	△	○
	2	暗褐色土層	1>2		○	○	△	△	△	T-20	1	黒褐色土層			○	○	○	○	△
D-49	1	黒褐色土層			○	○	※	※	※		2	暗黄褐色土層	1<2		○	○	△	△	○
	2	暗褐色土層	1<2		○	○	△	△	△										

第16表 土壌土層説明表

番号	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物				番号	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物			
						RP	RB	YP	炭							RP	RB	YP	炭
D-70	1	黒褐色土層			○	○	※	※	※	D-120	1	暗褐色土層			○	○	△	○	※
	2	暗褐色土層	1 < 2		○	○	△	△	○		2	暗黄褐色土層	1 < 2		○	○	○	○	※
D-141	1	暗褐色土層			○	○	△	△	○		3	暗黄褐色土層	2 > 3		○	○	×	○	△
T-17	1	暗黄褐色土層			○	○	○	○	※		4	黄褐色土層	3 < 4		○	○	○	○	※
	2	暗黄褐色土層	1 < 2		○	○	○	○	※	D-115	5	黄褐色土層	4 < 5		○	○	○	○	△
	3	暗黄褐色土層	2 > 3		○	○	○	○	※		1	黒褐色土層	1 < 2		○	○	○	○	※
	4	暗黄褐色土層	3 > 4		○	○	△	△	※		2	暗褐色土層	1 < 2		○	○	○	○	○
D-13	1	黒褐色土層			△	○	※	※	△		3	暗褐色土層	2 < 3		○	○	△	△	※
	2	暗黄褐色土層	1 < 2		△	○	△	△	※		4	暗褐色土層	3 < 4		○	○	△	△	△
D-17	1	黒褐色土層			○	○	※	※	※	D-112	5	暗黄褐色土層	4 < 5		○	○	○	○	△
	2	暗褐色土層	1 < 2		△	○	△	△	※		1	暗褐色土層			○	○	△	△	※
D-124	1	黒褐色土層			○	○	×	※	※		2	暗褐色土層	1 < 2		○	○	○	△	△
	2	暗褐色土層	1 < 2		○	○	△	△	△	D-163	3	暗黄褐色土層	2 < 3		○	○	○	○	△
D-180	1	黒褐色土層			○	○	※	※	※		1	黒褐色土層			○	○	△	△	△
	2	暗褐色土層	1 < 2		○	○	△	○	○		2	暗褐色土層	1 < 2		○	○	○	△	△
D-86	1	暗褐色土層			○	○	△	△	※	D-177	1	黒褐色土層			○	○	△	△	△
	2	暗黄褐色土層	1 < 2		○	○	◎	△	○		2	暗黄褐色土層	1 < 2		○	○	○	△	△
D-108	1	黒褐色土層			○	○	※	※	△	D-113	1	黒褐色土層			○	○	○	△	△
	2	暗褐色土層	1 < 2		○	○	△	△	△		2	暗黄褐色土層	1 < 2		○	○	○	△	△
	3	暗黄褐色土層	2 < 3		○	○	○	○	※		3	暗黄褐色土層	2 < 3		○	○	○	○	△
D-23	1	黒褐色土層			○	○	※	※	※		4	黄褐色土層	3 < 4		○	○	◎	◎	※
	2	黒褐色土層	1 < 2		○	○	※	※	△	T-19	5	黄褐色土層	4 < 5		○	○	○	○	◎
D-87	1	黒褐色土層			○	○	※	※	△		1	黒褐色土層			○	○	○	○	◎
	2	暗褐色土層	1 < 2		○	○	△	△	△		2	暗褐色土層	1 < 2		○	○	○	○	◎
D-184	1	黒褐色土層			○	○	※	※	※	D-143	3	暗褐色土層	2 < 3		○	○	○	○	◎
	2	暗褐色土層	1 < 2		○	○	△	△	△		1	黒褐色土層			○	○	△	△	△
D-101	1	黒褐色土層			○	○	※	※	△		2	暗黄褐色土層	1 < 2		○	○	○	○	△
	2	暗黄褐色土層	1 < 2		○	○	○	○	◎	D-149	3	暗黄褐色土層	2 < 3		○	○	○	○	△
	3	暗黄褐色土層	2 > 3		○	○	※	△	◎		1	暗褐色土層			○	○	△	△	△
	4	暗黄褐色土層	3 > 4		○	○	○	○	◎	D-19	2	暗褐色土層	1 < 2		○	○	○	○	△
	5	暗黄褐色土層	4 < 5		○	○	△	△	◎		1	暗黄褐色土層	1 < 2		○	○	○	○	△
D-51	1	黒褐色土層			○	○	※	※	△	D-46	2	暗黄褐色土層	1 < 2		○	○	○	○	△
	2	黒褐色土層	1 < 2		○	○	※	※	△		1	黒褐色土層			○	○	○	○	△
T-9	1	黒褐色土層			○	○	※	※	※	D-121	2	暗褐色土層	1 < 2		○	○	○	○	△
	2	黒褐色土層	1 < 2		○	○	※	※	※		1	黒褐色土層			○	○	○	○	△
	3	黒褐色土層	2 > 3		○	○	※	※	※		2	暗褐色土層	1 < 2		○	○	○	○	△
	4	暗褐色土層	3 < 4		○	○	△	△	※		3	暗褐色土層	2 < 3		○	○	○	○	△
	5	暗褐色土層	4 > 5		○	○	△	△	△	D-152	4	暗黄褐色土層	3 < 4		○	○	○	○	◎
	6	暗黄褐色土層	5 < 6		△	○	○	○	○		1	黒褐色土層			○	○	○	○	△
	7	暗黄褐色土層	6 < 7		○	○	○	○	○		2	暗褐色土層	1 < 2		○	○	○	○	△
T-11	1	黒褐色土層			○	○	※	※	※	D-148	3	暗黄褐色土層	2 < 3		○	○	○	○	△
	2	暗褐色土層	1 < 2		○	○	△	△	△	J-7-D-1	4	暗黄褐色土層	1 < 4		△	○	○	○	◎
	3	暗褐色土層	2 < 3		○	○	○	○	※		1	黒褐色土層			○	○	○	○	△
	4	暗褐色土層	3 > 4		△	○	△	△	△		1	暗褐色土層			△	△	△	△	△
	5	暗黄褐色土層	4 < 5		△	○	○	○	○	D-170	2	暗黄褐色土層	1 < 2		○	○	○	○	△
	6	暗黄褐色土層	5 > 6		△	○	○	○	△		3	暗黄褐色土層	2 < 3		○	○	○	○	△
	7	暗黄褐色土層	6 < 7		△	○	○	◎	◎	D-172	1	暗褐色土層	1 < 2		○	○	○	○	△
D-155	1	黒褐色土層			○	○	※	△	△	D-138	2	暗褐色土層	1 < 2		○	○	○	○	△
	2	暗黄褐色土層	1 < 2		○	○	△	△	△		1	暗褐色土層			○	○	△	△	△
D-147	1	黒褐色土層			○	○	※	※	×	D-139	2	暗黄褐色土層	1 < 2		○	○	○	○	△
	2	暗黄褐色土層	1 < 2		○	○	△	△	△		1	黒褐色土層			○	○	○	○	△
	3	黄褐色土層	2 < 3		○	○	×	×	◎	D-47	2	褐色土層	1 < 2		○	○	○	○	△
D-119	1	黒褐色土層			○	○	※	※	※	J-17-D-1	1	黒褐色土層			○	○	○	○	△
	2	黒褐色土層	1 < 2		○	○	※	※	△		2	暗褐色土層	1 < 2		○	○	○	○	△
	3	暗黄褐色土層	2 < 3		○	○	△	○	△	J-8-D-1	3	暗褐色土層	2 < 3		○	○	○	○	△
D-133	1	黒褐色土層			○	○	※	※	△	J-8-D-2	1	暗黄褐色土層	1 < 2		○	○	○	○	△
	2	暗黄褐色土層	1 < 2		○	○	△	○	△		2	暗黄褐色土層	1 < 2		○	○	○	○	△
D-173	1	黒褐色土層			○	○	※	※	△	J-9-D-1	3	暗黄褐色土層	2 < 3		○	○	○	○	△
	2	暗褐色土層	1 < 2		○	○	△	△	△		1	黒褐色土層			○	○	△	△	△
D-127	1	黒褐色土層			○	○	×	※	※	J-11-D-3	2	暗褐色土層	1 < 2		○	○	○	○	△
	2	黒褐色土層	1 < 2		○	○	×	※	※		1	暗褐色土層			○	○	○	○	△
	3	暗褐色土層	2 < 3		○	○	※	※	△	J-16-D-1	2	暗黄褐色土層	1 < 2		○	○	○	○	△
D-156	1	黒褐色土層			○	○	※	※	○		3	暗黄褐色土層	2 < 3		○	○	○	○	△
	2	暗褐色土層	1 < 2		○	○	△	△	△	D-43	1	黒褐色土層			○	○	○	○	△
D-9	1	暗褐色土層			○	○	※	※	※		2	暗褐色土層	1 < 2		○	○	○	○	△
	2	黒褐色土層	1 < 2		○	○	※	※	※		1	黒褐色土層			○	○	○	○	△
	3	暗黄褐色土層	2 < 3		○	○	△	△	○		2	暗黄褐色土層	2 < 3		○	○	○	○	△
	4	暗黄褐色土層	3 < 4		○	○	○	○	○		3	暗黄褐色土層	3 < 4		○	○	○	○	△
D-24	1	黒褐色土層			○	○	※	△	△		1	黒褐色土層			○	○	○	○	△
	2	暗褐色土層	1 < 2		○	○	△	△	△		2	暗褐色土層	1 < 2		○	○	○	○	△
	3	暗黄褐色土層	2 < 3		○	○	△	△	△		1	黒褐色土層			○	○	○	○	△
D-157	1	黒褐色土層			○	○	※	△	△		2	暗褐色土層	1 < 2		○	○	○	○	△
	2	暗褐色土層	1 < 2		○	○	△	△	※		1	黒褐色土層			○	○	○	○	△
	3	暗黄褐色土層	2 < 3		○	○	○	○	※		2	黒褐色土層	1 < 2		○	○	○	○	△

第17表 土壌土層説明表

番号	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物				番号	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物			
						RP	RB	YP	炭							RP	RB	YP	炭
D-137	1	暗褐色土層			○	○	△	△	※	J-11·D-2	1	暗褐色土層			○	○	※	※	※
	2	暗黄褐色土層	1<2		○	○	△	○	※		2	暗褐色土層	1<2		○	○	△	△	※
D-114	1	黒褐色土層			○	○	※	※	○		3	暗黄褐色土層	2<3		○	○	△	△	※
	2	黒褐色土層	1<2		○	○	※	※	○	J-13·D-1	1	黒褐色土層			○	○	※	※	○
	3	暗黄褐色土層	2<3		○	○	△	△	◎		2	黒褐色土層	1<2		○	○	△	△	○
	4	暗黄褐色土層	3<4		○	○	△	△	○		3	暗黄褐色土層	2<3		○	○	◎	◎	○
D-89	1	黒褐色土層			○	○	※	※	○		4	黄褐色土層	3<4		△	△	◎	◎	○
	2	暗黄褐色土層	1<2		○	○	○	○	△	D-61	1	黒褐色土層			○	○	○	○	※
	3	黄褐色土層	2<3		○	×	○	◎	◎		2	暗黄褐色土層	1<2		○	○	○	○	○
D-93	1	暗褐色土層			○	○	※	△	◎		3	暗褐色土層	2>3		○	○	○	△	※
	2	暗黄褐色土層	1<2		○	○	△	△	※		4	黒褐色土層	3>4		△	△	※	※	×
	3	暗黄褐色土層	2<3		○	○	○	○	※	D-107	1	黒褐色土層			○	○	○	○	※
D-31	1	黒褐色土層			○	○	※	※	△		2	暗褐色土層	1<2		○	○	△	△	△
	2	暗褐色土層	1<2		○	○	△	△	※		3	黄褐色土層	2<3		○	○	※	※	◎
D-62	1	黒褐色土層			○	○	※	※	△	D-85	1	黒褐色土層			○	○	○	○	※
	2	暗黄褐色土層	1<2		○	○	○	○	※		2	暗黄褐色土層	1<2		△	△	△	△	◎
D-32	1	黒褐色土層			○	○	※	※	△	D-41	1	黒褐色土層			○	○	○	○	※
	2	暗褐色土層	1<2		○	○	△	△	◎	D-75	1	黒褐色土層			○	○	○	○	※
D-78	1	黒褐色土層			○	○	※	※	△		2	暗褐色土層	1<2		○	○	△	△	△
	2	暗褐色土層	1<2		○	○	△	△	※	D-91	1	黒褐色土層			○	○	○	○	※
D-30	1	黒褐色土層			○	○	※	※	△		2	暗黄褐色土層	1<2		○	○	○	○	※
	2	暗黄褐色土層	1<2		○	○	△	△	△	T-8	1	黒褐色土層			○	○	○	○	※
D-106	1	暗褐色土層			○	○	△	△	※		2	暗黄褐色土層	1<2		○	○	○	○	※
	2	暗黄褐色土層	1<2		○	○	○	○	△		3	暗黄褐色土層	2<3		○	○	○	○	※
	3	暗黄褐色土層	2<3		○	○	○	○	△	T-15	1	黒褐色土層			○	○	○	○	※
D-105	1	暗褐色土層			○	○	△	△	△		2	暗黄褐色土層	1<2		○	○	△	△	○
	2	暗黄褐色土層	1<2		○	○	○	○	△	T-7	1	黒褐色土層			○	○	○	○	※
	3	暗黄褐色土層	2<3		○	○	◎	◎	※		2	暗褐色土層	1<2		○	○	△	△	※
D-104	1	暗黄褐色土層			○	○	△	△	※		3	暗黄褐色土層	2<3		○	○	○	○	※
	2	暗黄褐色土層	1<2		○	○	○	○	※		4	暗黄褐色土層	3>4		○	○	○	○	※
D-99	1	黒褐色土層			○	○	※	※	◎	T-14	1	暗褐色土層			○	○	△	△	※
	2	黒褐色土層	1>2		○	○	※	※	◎		2	黒褐色土層	1>2		○	○	○	○	※
	3	黒褐色土層	2>3		○	○	※	※	※		3	暗褐色土層	2<3		○	○	△	△	※
	4	暗黄褐色土層	3<4		○	○	△	△	※		4	暗黄褐色土層	3<4		○	○	○	○	△
	5	暗褐色土層	4>5		○	○	○	△	△		5	暗褐色土層	4>5		○	○	○	△	△
	6	暗黄褐色土層	5<6		○	○	○	○	△		6	暗褐色土層	5<6		○	○	△	△	△
D-33	1	黒褐色土層			○	○	※	※	※	T-16	1	黒褐色土層			○	○	○	○	※
	2	黒褐色土層	1>2		○	○	※	※	※		2	暗褐色土層	1<2		○	○	△	△	○
	3	暗黄褐色土層	2<3		○	○	○	○	※		3	暗黄褐色土層	2<3		○	○	○	○	※
	4	暗褐色土層	3>4		○	○	△	△	※	T-10	1	黒褐色土層			○	○	○	△	○
D-71	1	黒褐色土層			○	○	※	※	△		2	暗黄褐色土層	1<2		○	○	○	△	△
	2	黒褐色土層	1<2		○	○	○	○	△		3	暗黄褐色土層	2<3		○	○	○	○	※
	3	暗褐色土層	2<3		○	○	△	△	△	D-21	1	黒褐色土層			○	○	○	○	×
	4	暗黄褐色土層	3<4		○	○	○	○	※	D-22	1	黒褐色土層			○	○	○	○	※
	5	暗褐色土層	4>5		○	○	△	△	※		2	暗黄褐色土層	1<2		○	○	○	◎	△
D-77	1	黒褐色土層			○	○	※	※	△	D-20	1	黒褐色土層			○	○	○	○	※
	2	黒褐色土層	1<2		○	○	※	※	△		2	暗褐色土層	1<2		○	○	△	△	※
	3	暗褐色土層	2<3		○	○	△	△	△										
	4	暗黄褐色土層	3<4		○	○	○	○	△										
D-103	1	黒褐色土層			○	○	※	※	△										
	2	黒褐色土層	1<2		○	○	※	※	△										
	3	暗褐色土層	2<3		○	○	○	○	△										
	4	黒褐色土層	3<4		○	○	※	※	○										
D-81	1	暗褐色土層			○	○	△	△	△										
	2	暗褐色土層	1<2		○	○	△	△	○										
	3	暗黄褐色土層	2<3		○	◎	◎	△	△										
D-56	1	黒褐色土層			○	○	※	※	△										
	2	暗褐色土層	1<2		○	○	△	△	※										
D-90	1	黒褐色土層			○	○	※	※	△										
	2	暗褐色土層	1<2		○	○	△	△	※										
	3	暗褐色土層	2<3		○	○	△	△	※										
D-111	1	黒褐色土層			○	○	※	※	△										
	2	黒褐色土層	1<2		○	○	※	※	△										
	3	暗褐色土層	2<3		○	○	※	※	△										
	4	暗褐色土層	3<4		○	○	※	△	○										
	5	暗黄褐色土層	4<5		○	○	△	△	○										
	6	暗黄褐色土層	5>6		○	○	△	○	※										
	7	暗褐色土層	6>7		○	○	※	△	※										
	8	暗黄褐色土層	7<8		○	○	△	○	※										
	9	黄褐色土層	8<9		○	○	◎	◎	※										
D-132	1	暗褐色土層			○	○	※	×	※										
	2	暗黄褐色土層	1<2		○	○	×	×	※										
J-11·D-1	1	黒褐色土層			○	○	※	※	※										
	2	黒褐色土層	1<2		○	○	※	※	※										
	3	暗褐色土層	2<3		○	○	△	△	△										

第18表 土壌土層説明表

集石土壙（第56図・第57図）

集石土壙は4基検出された。形態・規模等は第20表のとおりである。S-5号は調査区の北端部に存在するが、他の3基は住居址と重複または近接して存在する。同様な傾向は吉田原遺跡・細田遺跡などの前期の他の遺跡でも確認されており、集石土壙が居住域に構築される傾向があることを示している。また、集石に用いられる礫はすべて表面が褐色の安山岩であり、磨石・凹石とは見た目が全く異なり、容易に識別できる石材である。

S-4からは諸磯b期の土器片とスクレイパーB類・石皿・敲石などが検出されたが、S-4・S-6号はJ-16号住居址（有尾・黒浜段階）と重複しており、いずれも住居廃絶後に形成されたことが確認された。この状態は吉田原遺跡J-2号住居址と同様であり、住居廃絶後もその場所が他の場所と異なった状態にあったことにより、こうした遺構の重複が生じると推測される。

配石遺構・埋設土器（第57図）

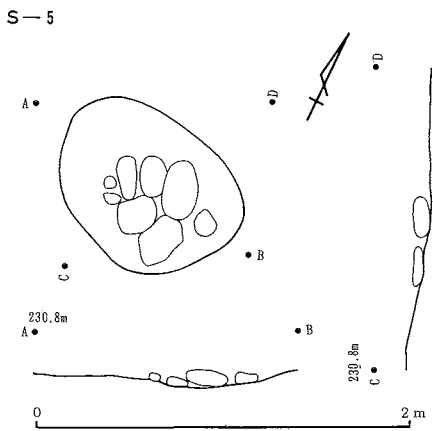
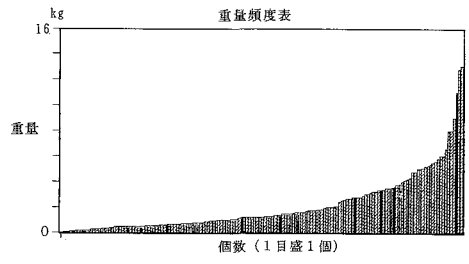
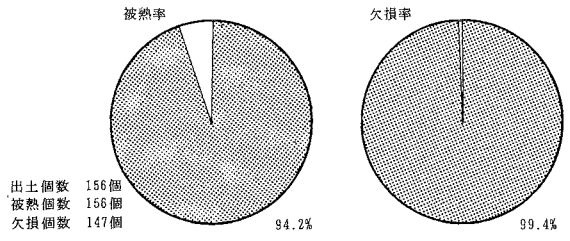
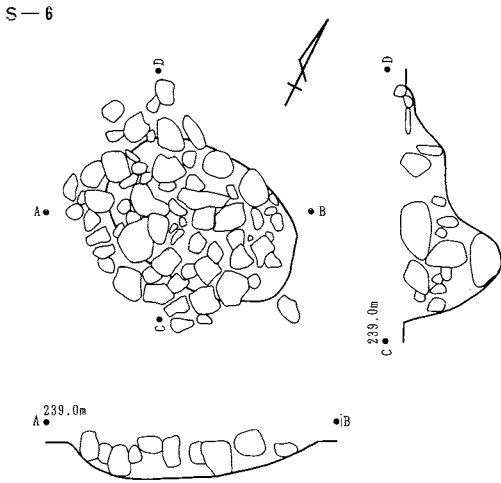
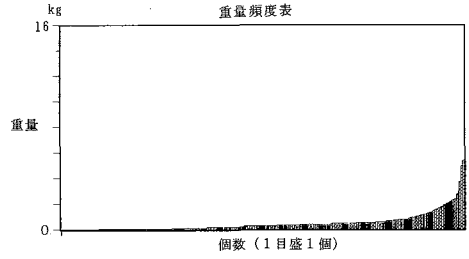
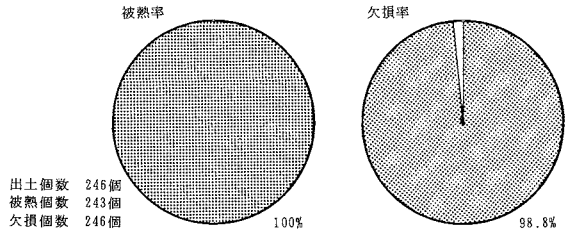
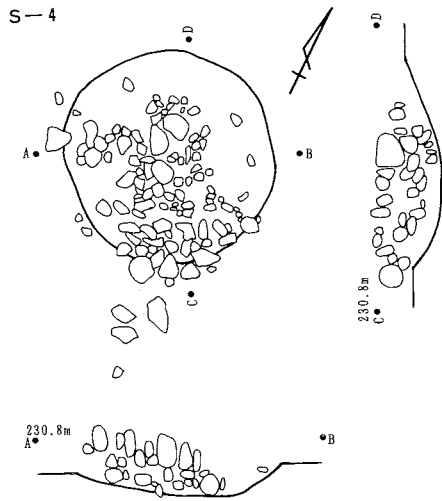
S-8号配石遺構1基が検出された。この遺構は偏平な大形の礫によって埋設土器を囲むように構築されている。現況では長さ1.1幅0.8mの楕円形に配石が置かれ、その内側に埋設土器が1基設置された状態であった。配石の周囲には礫が散乱した状態で検出され、一部の礫は隣接するY-3号住居址の覆土中に散在していた。したがって、本来はこれらも配石を構成する礫であったと判断される。埋設土器（第92図1）は正位で設置され、口辺部及び底部は欠落していた。埋設土器から中期後半（加曾利E期）のものと判断される。

また、U-4、U-5号埋設土器が西に隣接して並んでおり、時期もほぼ同じであることから、関連性があると推定される。配石中には石皿2点、丸石1点が組み込まれていた。また、打製石斧1点が付近から検出された。この遺構は埋設土器や丸石が伴うことから、祭祀遺構の可能性はある。

U-2号～5号埋設土器が検出された。これらの埋設土器は深鉢形土器が2個体ずつ並んで存在する。U-2、U-3号は約40cmの間隔で逆位の状態で検出された。胴過半部は欠落しているが、遺構確認の際損失したものと推定される。掘り込みは本来あった可能性があるが、調査時にはほとんど確認できなかった。

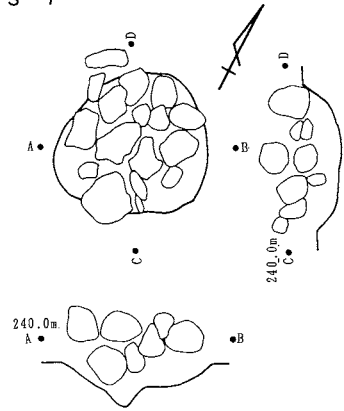
また、U-4、U-5号も逆位で約10cmの間隔で並んで検出された。埋設土器の下部には非常に浅い掘り込みが確認された。この2基の埋設土器はS-8号配石遺構の西に隣接した位置に存在する。胴過半部は欠落しているが、遺構確認時に損失したと考えられる。

これらの埋設土器は関東系の加曾利E式（U-3・4）と信州系の曾利式（U-4・5）の土器が対となって並んでおり、特異な状態を呈している。これらの土器は同時期のものであり、S-8号配石遺構も含め、ほぼ同時期に構築された遺構と判断される。本地域は加曾利E式と曾利

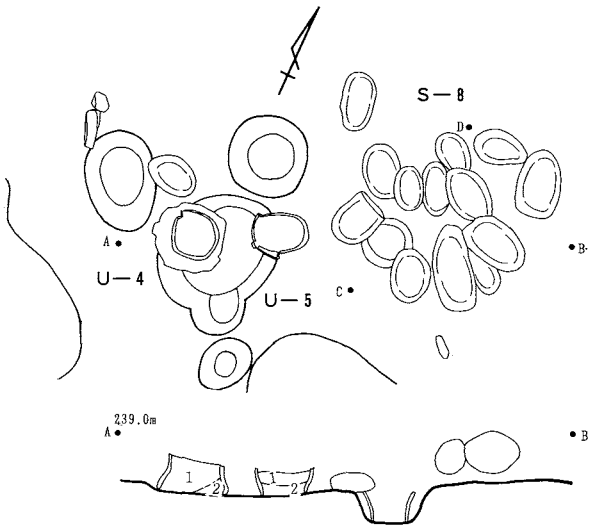
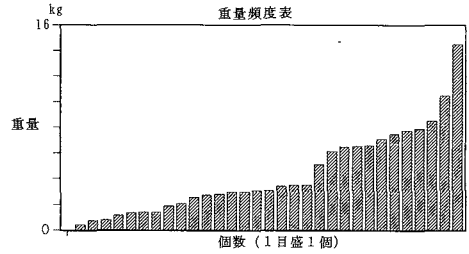
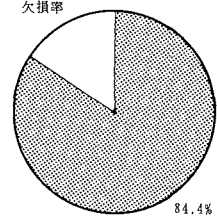
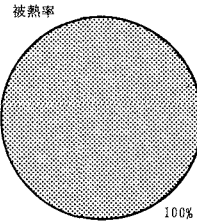


第56図 S-4・6・5号集石土壤実測図

S-7

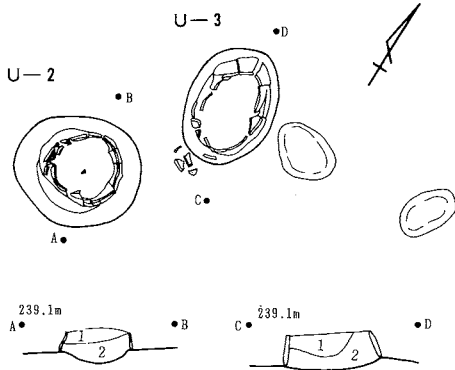


出土個数 32個
 被熟個数 32個
 欠損個数 27個



U-4号		色調	しまり	粘性	混入物		
層番	層名				RP	RB	YP
1	黒褐色土層	△	○	※	※	※	
2	黒褐色土層	1<2	△	○	※	※	

U-5号		色調	しまり	粘性	混入物		
層番	層名				RP	RB	YP
1	黒褐色土層	○	○	※	※	※	
2	黒褐色土層	1<2	○	○	※	※	



U-2号		色調	しまり	粘性	混入物		
層番	層名				RP	RB	YP
1	黒褐色土層	△	○	※	※	※	
2	黒褐色土層	1<2	△	○	※	※	

U-3号		色調	しまり	粘性	混入物		
層番	層名				RP	RB	YP
1	黒褐色土層	△	○	※	※	※	
2	黒褐色土層	1>2	△	○	※	※	
3	黒褐色土層	2<3	△	○	※	※	

0 ————— 2m

第57図 S-7号集石土壙・S-8号配石遺構・U-4・5・2・3号埋設土器実測図

式の分布の境界地域に当たり、興味深い例である。また、生業に直接関連する遺構とは考えられず、祭祀等の遺構の可能性がある。

遺構名	規模 WE	(上端 NS	規模 WE	(下端 NS	深さ	平面形態	土器	石器	剥片等	礫	時期
T-6	300	290	220	230	60	隅田方形	○	不明	不明	不明	諸磯b
D-171	260	250	228	226	10	円形	◎	磨斧・RFB	△		有尾

第19表 竪穴状遺構観察表

番号	規模(EW×NS)	出土数	平均長	平均幅	平均厚	平均重量	被熱率	欠損率	石材
S-4	1.12m×1.09m	246	8.71cm	6.6cm	4.6cm	0.5kg	100.0%	98.8%	安山岩
S-6	1.14m×0.69m	157	14.5cm	10.6cm	7.3cm	2.4kg	94.2%	99.4%	安山岩
S-7	0.82m×0.79m	32	18.4cm	13.9cm	9.5cm	4.3kg	100.0%	84.4%	安山岩
S-5	1.06m×0.76m	8	—	—	—	—	—	—	安山岩
S-8 (配石)	1.25m×1.16m	14	—	—	—	—	—	—	安山岩

第20表 集石土壙・配石遺構観察表

b 遺物

土器

住居址出土の土器（第58図～第84図）

大下原遺跡から検出された縄文時代住居址の土器は、前期中葉の含織維羽状縄文系土器群と前期後葉の竹管文系土器群の二つに大別される。これらの大別された住居址においても、時間的推移が見られる。本項では、出土土器を概観することによって、各住居址の時間的推移を追ってみたい。

【前期中葉の土器】 本遺跡検出の当該期の住居址は、J-9、J-12、J-13、J-15B、J-16、J-17、J-18、J-20、J-21号住居址がある。出土土器からの時間的推移は、次のように考えられる。すなわち、J-12・20・21→J-9・13・16・17・18→J-15Bと三段階に変遷すると推定される。

Ⅰ a 段階 関山Ⅱ式土器から有尾式土器櫛歯状工具による施文の段階

本段階の住居址はJ-12、J-20、J-21号住居址の3軒である。J-12号住居址からは、関山Ⅱ式土器の特徴である半截竹管による平行沈線で鋸歯状・菱形に施文し、口縁部文様帯を構成する土器が出土している。しかし、文様の施文方法などが本来の関山Ⅱ式土器よりも崩れた形をとることや、地文の縄文に組み紐等を施文する土器が他に見られないことから、関山Ⅱ式土器の新しい傾向を示すと考えられる。

また、櫛歯状の工具による刺突によって口縁に縦方向や菱形に施文する文様構成をとる土器が出土している。縄文地文については、羽状縄文で菱形を構成する。これらの土器は、有尾式土器でも古い部分に相当する事から本住居址は関山Ⅱ式の新段階から有尾式土器の古い段階に相当すると考えられる。縄文原体は、直前段合摺り(正反の合)、附加状1種、2種、結束等が見られる。J-20、J-21号住居址は、出土土器が少なく不確定的であるが、柱穴等から結束縄文の土器、直前段合摺りの土器、上げ底の土器が出土していることから、この時期に該当すると考えられる。

Ⅰ b 段階 有尾式土器の文様体に爪形文による菱形構成の段階

本段階の住居址は、J-9・13・16・17・18号住居址の5軒である。J-9号住居址は、本段階の爪形文による菱形構成の土器と、平行沈線による菱形構成の土器が出土している。また、Ⅰb段階よりやや新しい傾向を示すものも含まれる。J-13号住居址からは、口縁部文様帯に半截竹管による爪形文で菱形を構成する土器、縄文地文が羽状縄文により菱形を構成し、縄文の施文単位ごとに粘土紐がはみ出す土器が出土している。

J-16号住居址は、出土遺物は多くない。その中で、爪形文による菱形構成の土器、縄文地文を羽状施文し菱形を構成する土器などが出土しているなど、J-13号住居址と出土した土器の傾向が類似する。

また、J-17号住居址は、前述の住居址と同様に、口縁部文様帯を爪形文によって菱形に構成する土器が出土している。縄文地文の土器も羽状縄文で菱形に構成される。J-18号住居址は爪形文による菱形構成の土器とともに、沈線による乱雑な斜め格子状の黒浜式土器も共伴している(第83図10)。この段階の縄文は、前段階同様羽状縄文で菱形を構成するのであるが、縄文原体は単節や無節を主体に使用している点で前段階と異なる傾向を示す。

第1 c 段階 有尾式土器の文様体に平行沈線による菱形構成の段階

本段階の住居址は、J-15B号住居址の1軒である。炉体土器から判断して、本段階の口縁部文様帯が半截竹管による平行沈線で菱形がくずれ、山形を構成する土器群を主体とする時期とした。J-15B号住居址出土土器は、平行沈線による山形や、横位の施文が多くなる。また、菱形施文も残るが、菱形施文の文様幅が狭くなる傾向をもつ。黒浜式土器の平行沈線で縦位に波形に施文している土器(第80図10)も出土している。

本段階の縄文地文も前段階同様単節、無節の原体により羽状縄文により菱形構成をする。

上記のとおり、前期中葉の住居址については、2軒、5軒、3軒のグループに分けることができた。出土土器の型式的変遷からみて、住居址の時間的推移を追うことができた。しかし、各住居址には、重複等により他の段階の土器が混在している場合がしばしば認められた。

【前期後葉の土器】 当該期の住居址は、J-5・6・7・8・11A・11B・14・15A号住居址である。出土土器からJ-6→J-5→J-14・J-15A・J-11A・J-8→J-7・J-11B号と変遷すると考えられる。

II a 段階 諸磯b式土器爪形文を主体とする段階

本段階の住居址はJ-6号住居址である。本住居址からは、諸磯a式土器にみられる平行沈線による木の葉文や、肋骨文、波状文等が出土している。これらの原体は、やや太めのものを使用しており、諸磯b式土器の爪形文の原体に共通するものがあることから新しい段階に相当すると考えられる。本住居址の主体となる土器は、爪形文による弧状、渦巻状の文様施文の土器である。また、本住居址では、諸磯a式土器が共伴し、浮線文の土器が伴わないことから諸磯b式でも古い段階と考えられる。

II b 段階 諸磯b式土器爪形文土器と浮線文土器の供伴する段階

本段階の住居址は、J-5号住居址である。本住居址からは、前段階の平行沈線による波状文の土器、爪形文による弧状、渦巻状の土器が出土しているが、爪形文による文様を浮線に置き換えた土器も出土している。これらのことからJ-6号住居址より新しい段階と考えらる。

なお、本住居址からは、近年新潟方面で注目されている格子目文土器(第59図35)が共伴している。今後、この土器についての編年の位置付けに注意したい。

II c 段階 諸磯b式土器浮線文土器と沈線文土器の供伴する段階

本段階の住居址は J-8・11A・14・15A 号住居址が相当する。J-8 号住居址は大部分を J-7 号住居址と重複しているため、諸磯 c 式土器が混入してしまっているが、炉体土器（第65図56）から本段階と判断される。炉からは、繊維を含まず単節 RL の斜行縄文施文の土器が出土している。また、覆土中に浮線文土器が出土していることから諸磯 b 式土器でも後半段階と考えられるので本段階とした。浮線文土器については、前段階のやや太めの浮線による文様施文を踏襲したものから、扁平な浮線による文様が多くなる傾向にある。J-11A 住居址は、口縁部文様体に平行沈線による渦巻状、弧状の文様を持つ土器や浮線の扁平化した土器が出土している。J-14・15A 号住居址についても、浮線の扁平化や浮線による文様を沈線に置き換えた土器が出土している。また、獣面把手が瘤状の把手（第80図35）に置き換えられる。

II d 段階 諸磯 c 式土器を主体とする段階

本段階の住居址は J-11B 号住居址である。本住居址からは、前段階の土器も出土しているが、炉体土器（第72図73～76）は諸磯 c 式土器であることから本段階と判断される。本住居址からは、興津式土器も供伴している。諸磯 b 式土器の沈線施文の土器（第70図1～6）も出土しているが、この土器と諸磯 c 式土器との間には、形式的な隔たりを感じる。このように、時期の異なる土器群が出土する原因は、前段階の住居址が重複していたことによると推定される。

前期後半では、1 軒、1 軒、4 軒、2 軒のグループに分けることができた。出土土器の形式的変遷から見ると、II c 段階と II a 段階に土器型式変遷の隔たりが見られ、住居址においてもこの間（II b 段階）に空白期間があったと考えられる。 （関根慎二）

土壙・ピット出土の土器（第85図～第89図）

土壙・ピット出土の土器も住居址出土の土器と同様、前期中葉～後葉にかけての土器群が主体を占める。また、中期前半段階のものが若干出土している。以下、代表的なものについて、述べてみたい。

【前期中葉の土器】 住居址出土の土器群と同じ段階のものが出土している。

I a 段階 D-38（第85図3）、D-86（同17）、D-103（同18）の各土壙より出土のものが、この段階に該当する。D-103号土壙出土のものは注口土器であり、平行沈線による鋸歯文が施文される。

I b 段階 D-63（第85図8・9）、D-81（同16）、D-181（第86図26）、D-176（同30・31）の各土壙出土のものが、この段階に該当する。D-176号土壙出土のもの（30）は半截竹管による菱形文が施文される。また、それ以外のは半截竹管の連続刺突による菱形文が施文される。

I c 段階 D-77（第85図15）、D-125（同19～21）、D-145（第86図22）の各土壙及び、P-133号ピット出土例などが、この段階に相当する。D-125号土壙例は半截竹管による菱形文が崩れ山形になるものである。

[前期後葉の土器] この段階のものも住居址出土の土器群と同じ様相を示す。

II a 段階 D-9 (第87図42~44)、D-173 (第86図32~37)、T-25 (第89図68)、D-161 (第86図38) の各土壙が、この段階に相当する。

D-173号土壙出土の37は斜線肋骨文が施文された例である。また、波状文の例(34・36)や、半截竹管の連続刺突文が施文された例(33・35)などが存在する。

T-25号土壙のものは2単位の大波状口縁を有する例であり、半截竹管による連続刺突文により入り組み木の葉文のやや崩れた文様が施文される。D-161号土壙出土例は半截竹管による格子目文が施文されたもので、J-5号住居址出土例と同じく、新潟方面の系譜を引く土器である。

II b 段階 D-14 (第87図45・46)、T-9 (第88図62)、T-13 (同64) の各土壙のものが、この段階に相当する。これらの例では厚みのある浮線文が施文された土器の一群である。

II c 段階 J-8号住D-1 (第87図41)、D-25 (同56)、D-33 (同55)、T-8 (第88図59・60)、D-144 (同58) などがこの段階に相当する。D-25・T-8号土壙出土の例は扁平な浮線文が施文されたものである。また、J-8号住D-1・D-33・144号土壙の例は沈線文により施文されたものである。D-33号土壙のものは、口縁上部に突出した獣面把手が付けられている。

[中期前半の土器] (第93図9~23・25~27) これらの土器は五領ヶ台式の一群として捉えることができる。

集石土壙出土の土器 (第92図1~7)

J-16号住居址の上部に重複して構築されたS-4号集石土壙から出土した土器である。いずれもII b 段階に相当する土器群である。

配石遺構出土の土器・埋設土器 (第92図)

これらの遺構出土の土器は中期後半のもので、ほぼ同一時期のものとみられる。S-8号配石遺構出土のもの(1)は加曾利E3式である。また、U-3号埋設土器(5)・U-4号埋設土器(6)も同じ段階である。そして、U-2号埋設土器(2)・U-5号埋設土器(3)は文様構成は加曾利E式と同じであるが、地文が綾杉文となっており、曾利IV式に相当するとみられる。これらの土器は共伴関係にあり、両型式の時間的並行関係が窺える資料である。

調査区出土の土器 (第90図・第91図)

調査区より出土した土器は、遺構出土の土器とほぼ同じ段階の土器群が出土している。遺構同様前期中葉~後葉にかけてのものが主体を占める。以下、代表的な例について述べる。

[前期中葉の土器]

I c 段階（第90図1～9） 有尾・黒浜式の有繊維土器の一群である。4・9の2例は出土位置からみて、本来はJ—18号住居址の覆土上層のものと考えられる。平行沈線と刺突による菱形が崩れ、山形になったものである。

[前期後葉の土器]

II a 段階（第91図10～12・21・23・24） 10は本遺跡でしばしば検出されている格子目文土器である。23・24は単節斜縄文が施文された薄手の土器である。それ以外は半截竹管による連続刺突を施した爪形文土器である。

II b 段階（第91図13・14・16～18） 厚みのある浮線文が施文された一群である。

II c 段階（第91図15・19・20） 沈線文が施文された一群である。

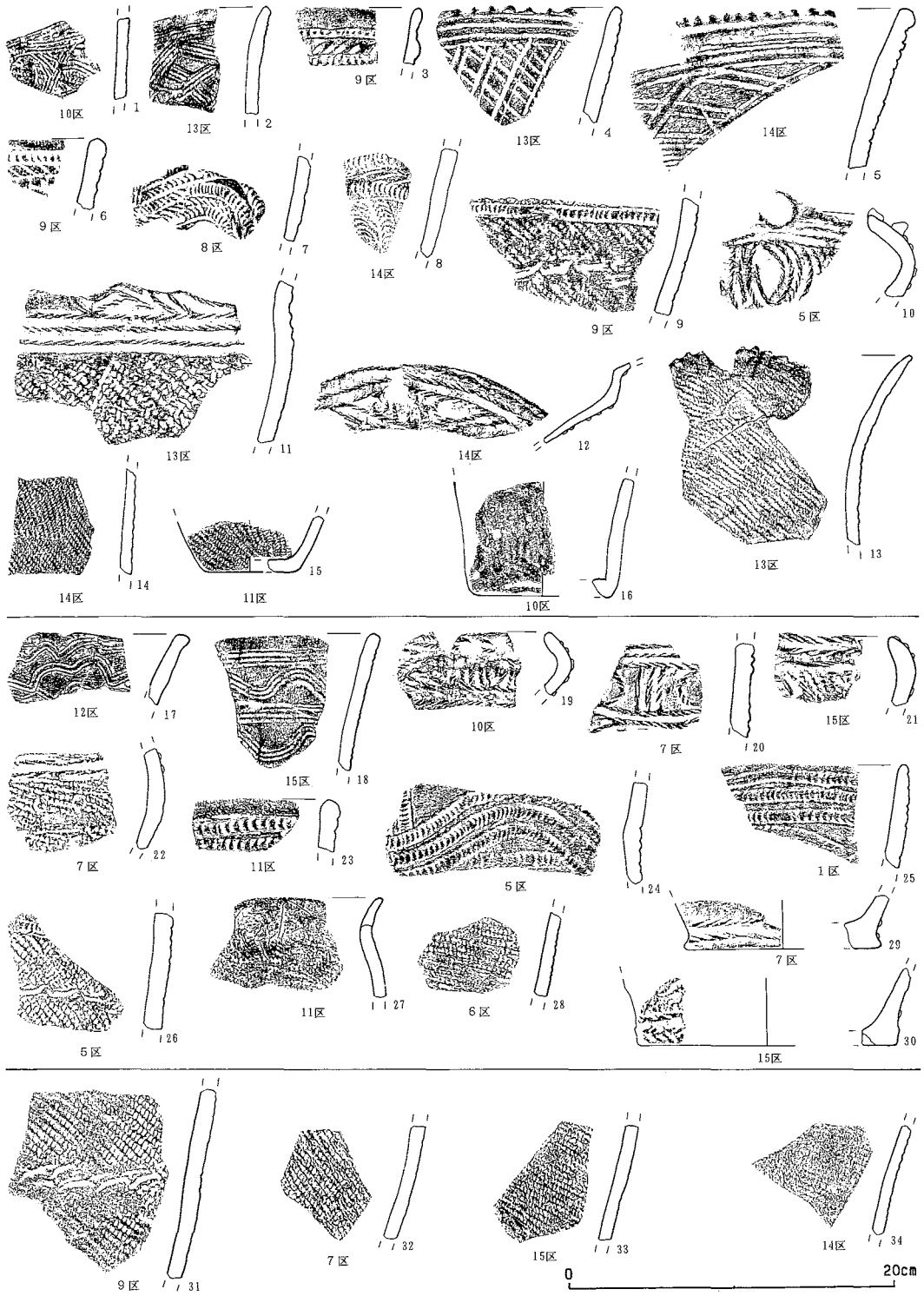
II d 段階（第91図25・26） 集合沈線と貼付文により施文された諸磯c式の一群である。

[中期前半の土器]（第93図1～8・24・28） 28は人面もしくは獣面が施文された中期前半の土器である。また、それ以外は五領ヶ台式の一群である。 (金井京子)

土製円盤（第93図1～3）

これらの土製円盤はすべて中期前半段階のものであり、前期のものは確認されていない。

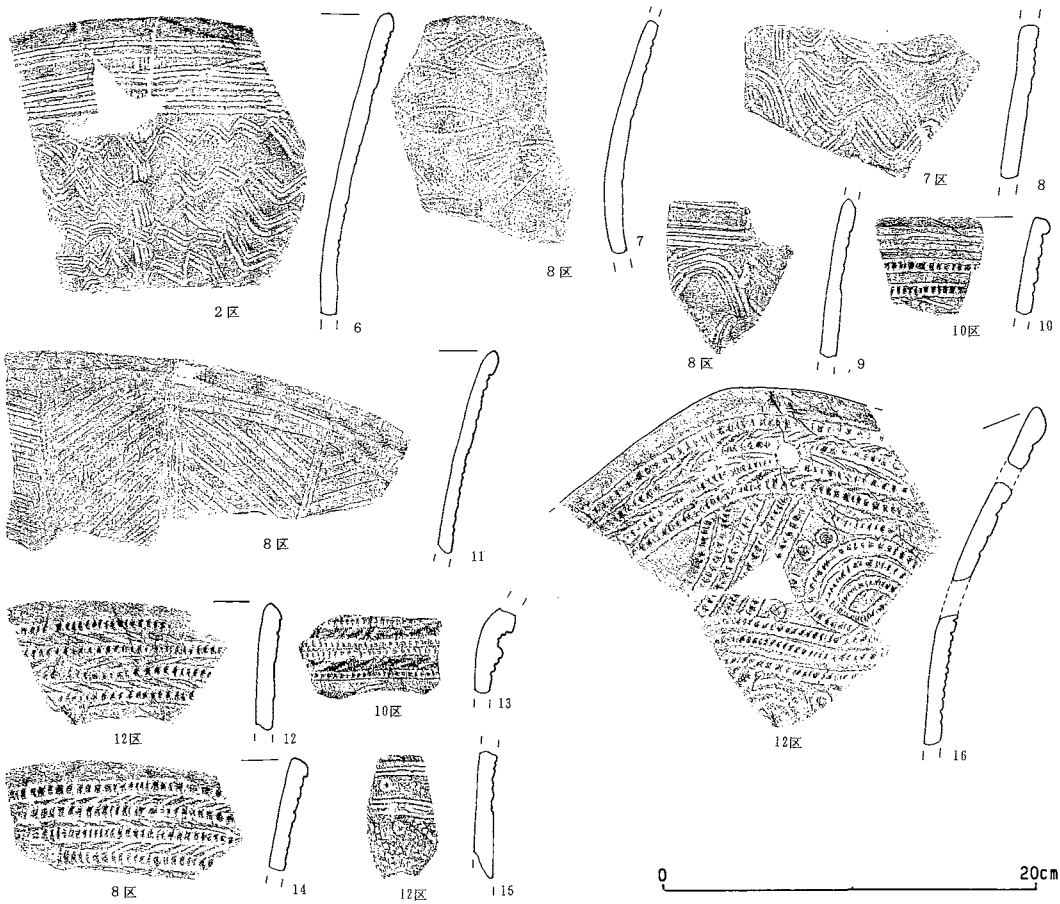
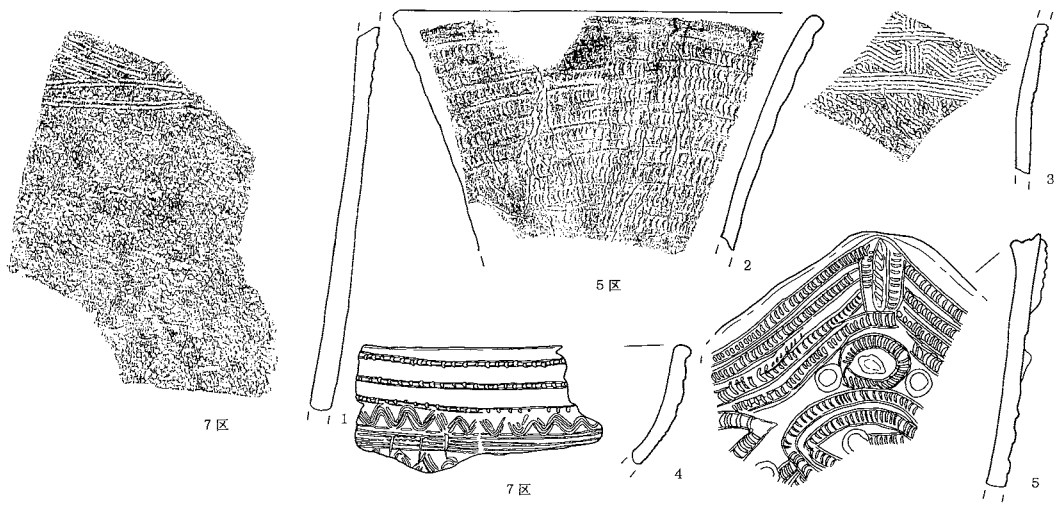
(金井京子)



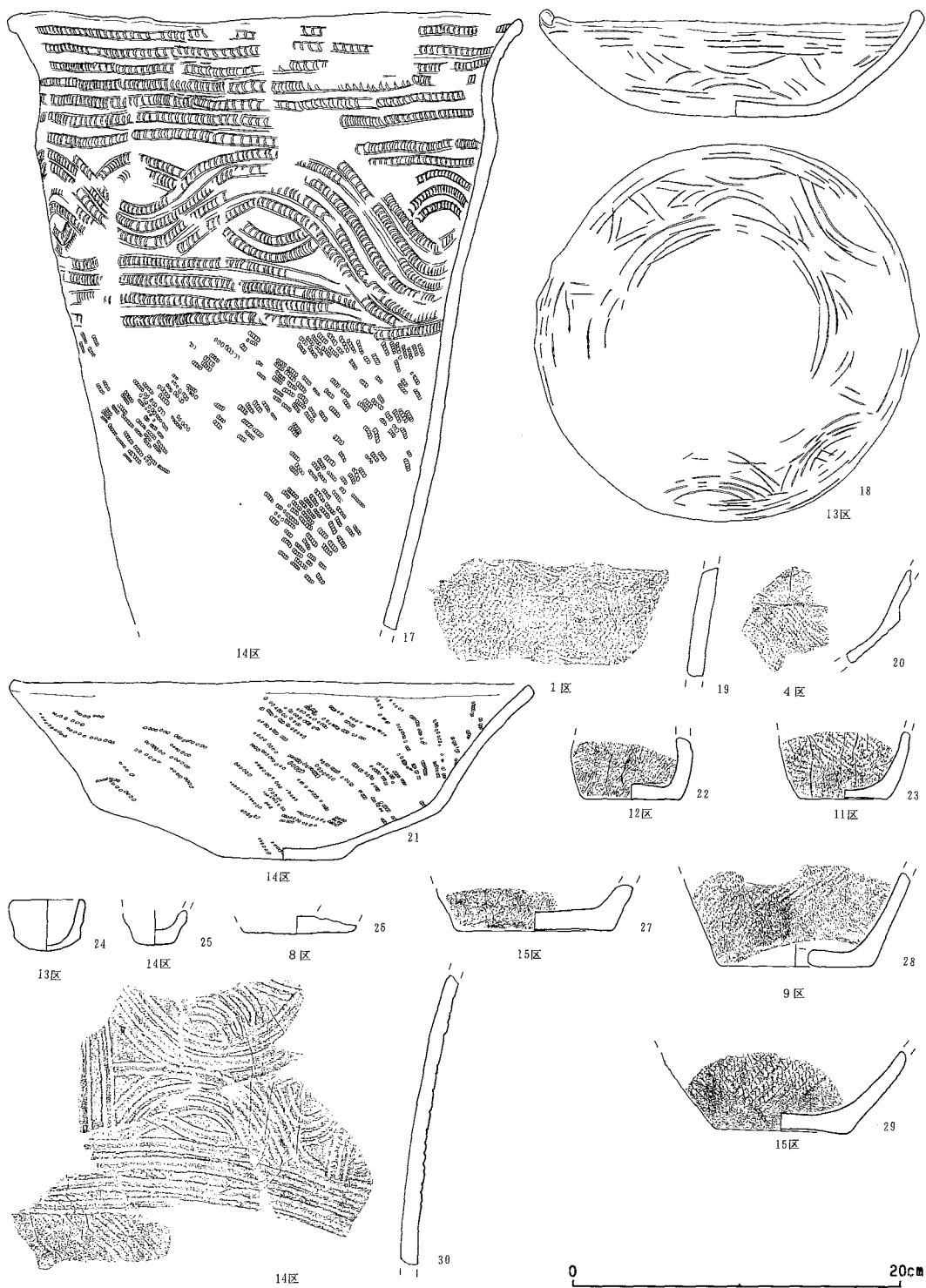
第58図 J-5号住居址出土の土器(1)



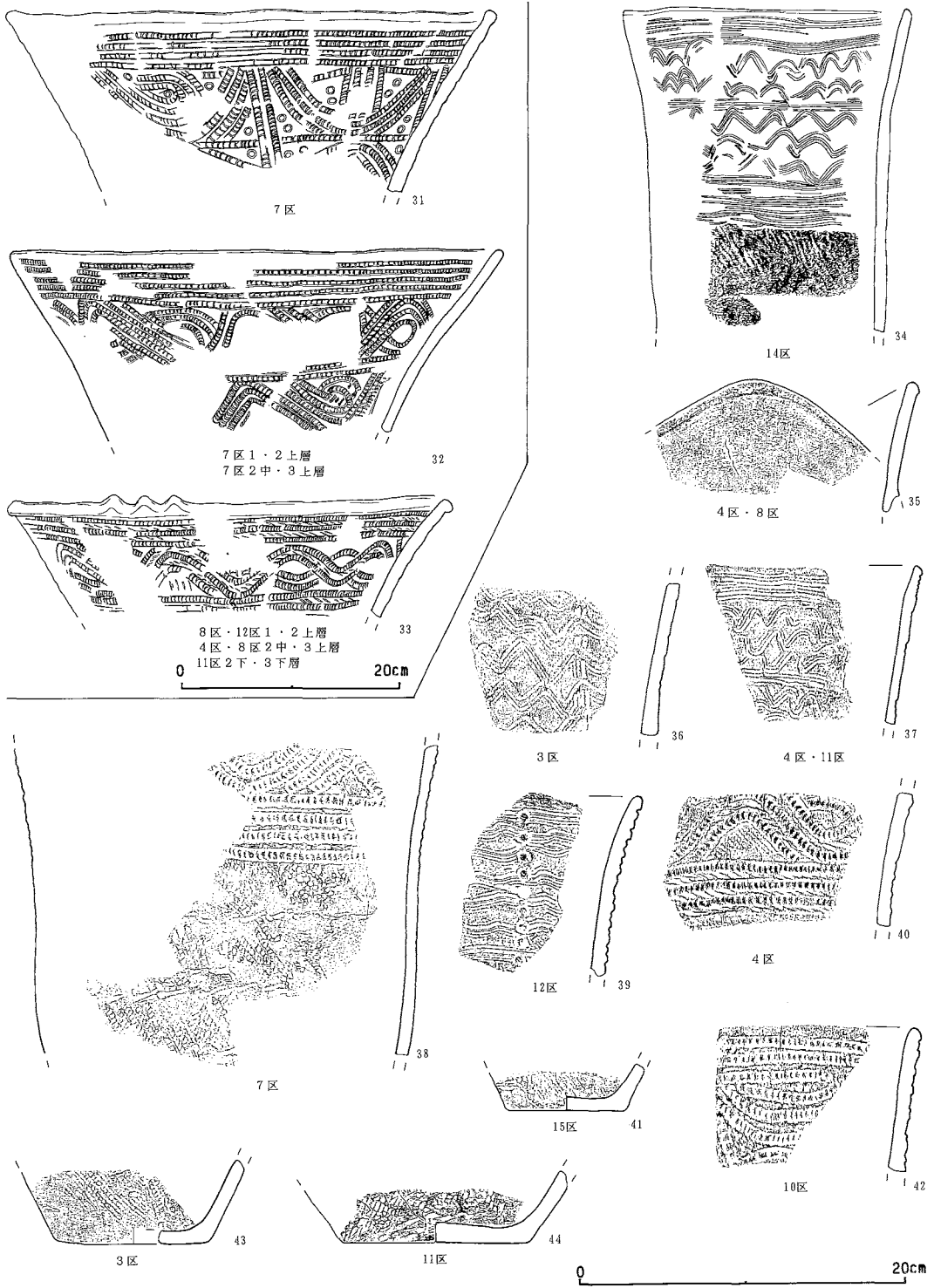
第59図 J-5号住居址出土の土器(2)



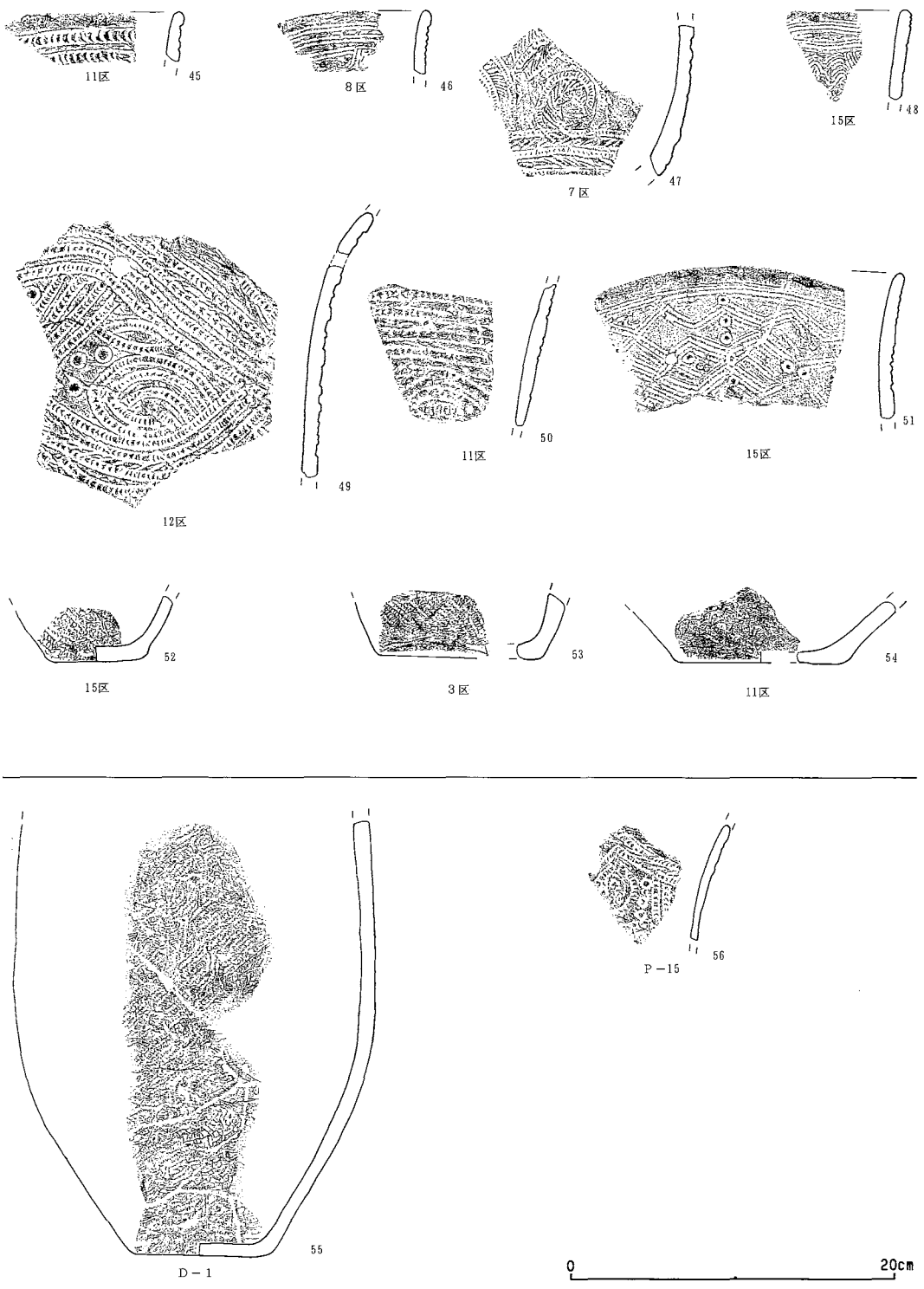
第60図 J-6号住居址出土の土器(1)



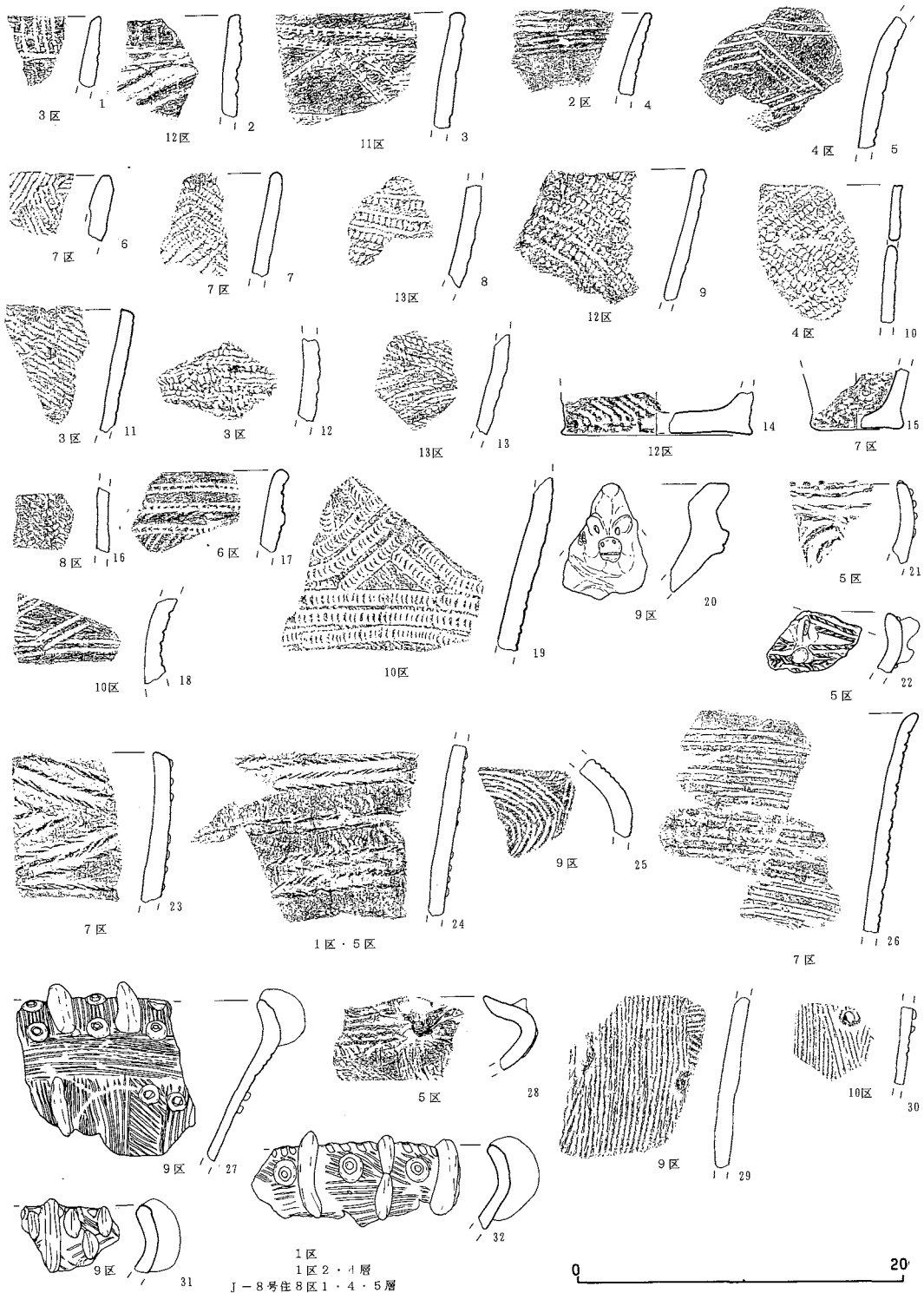
第61図 J-6号住居址出土の土器(2)



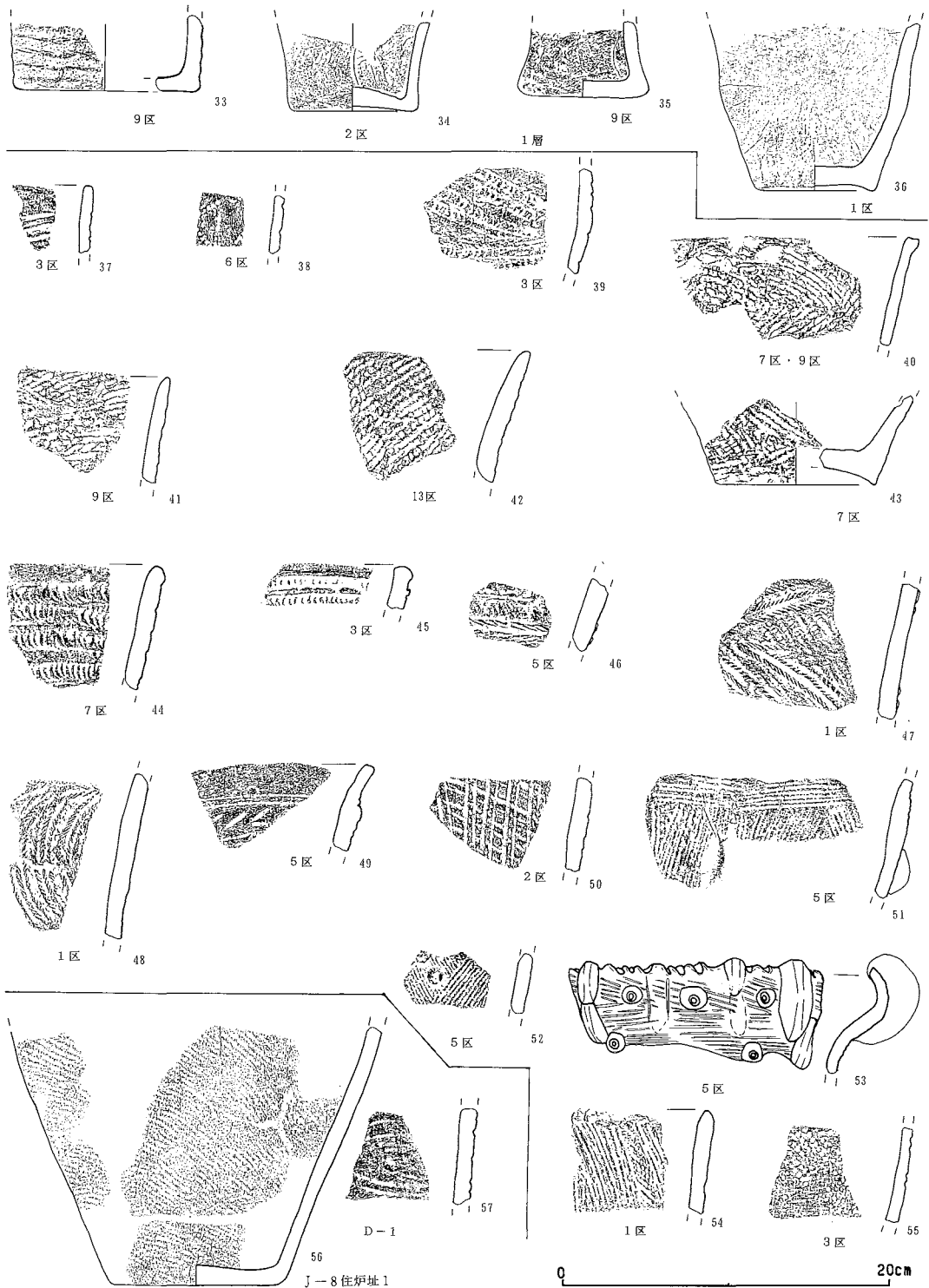
第62図 J-6号住居址出土の土器(3)



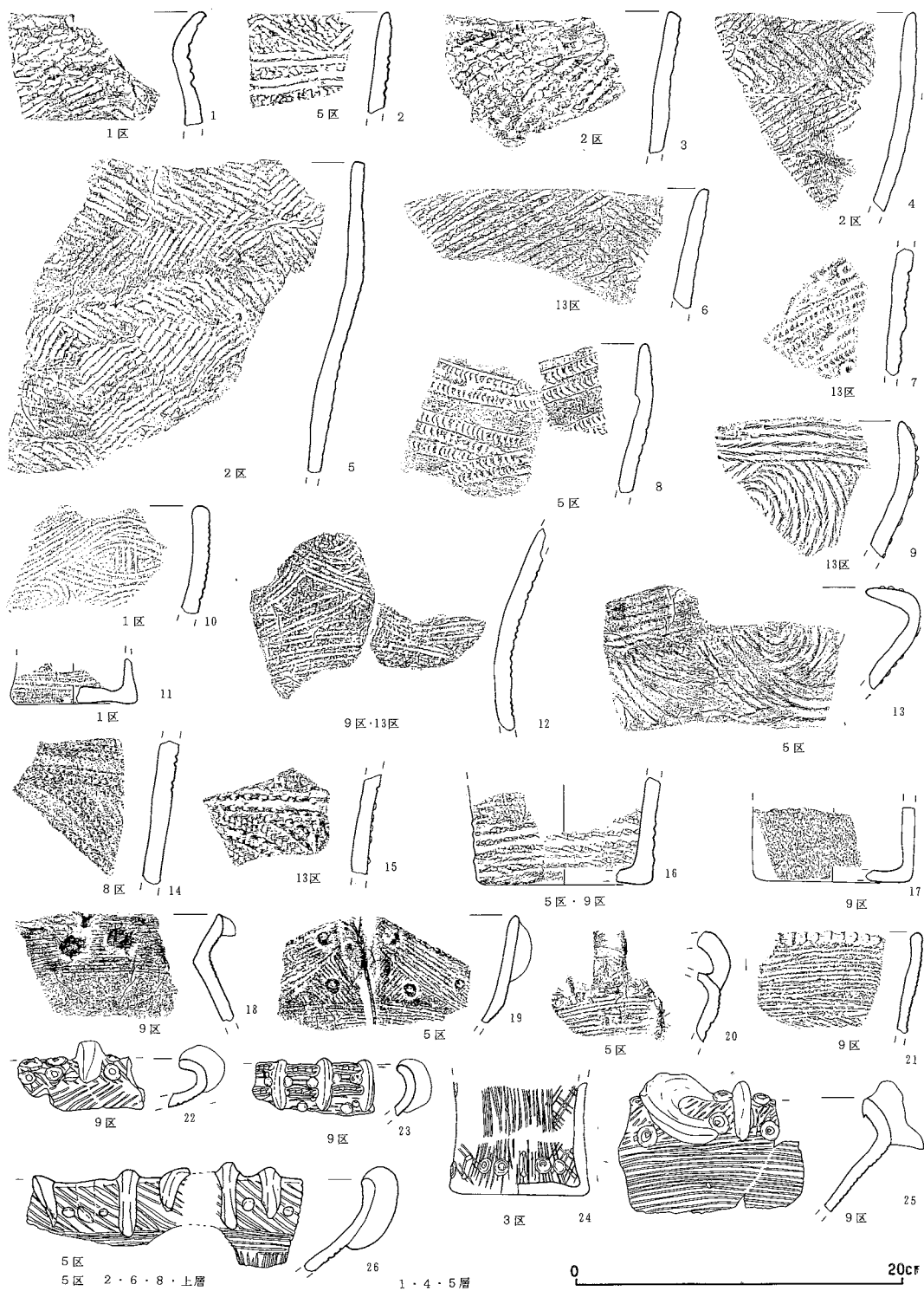
第63図 J-6号住居址出土の土器(4)



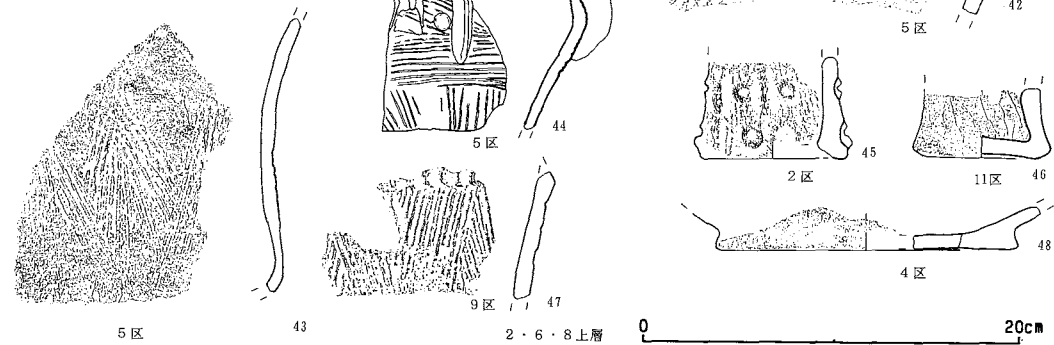
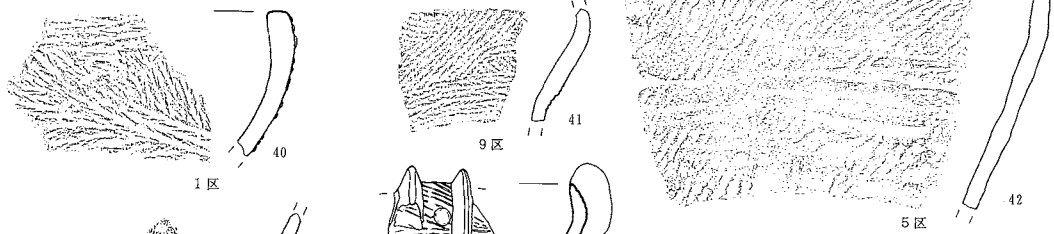
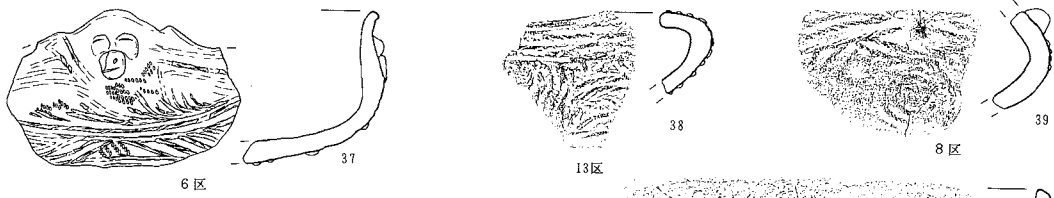
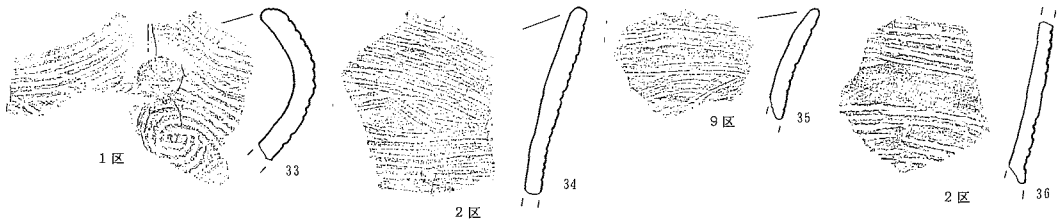
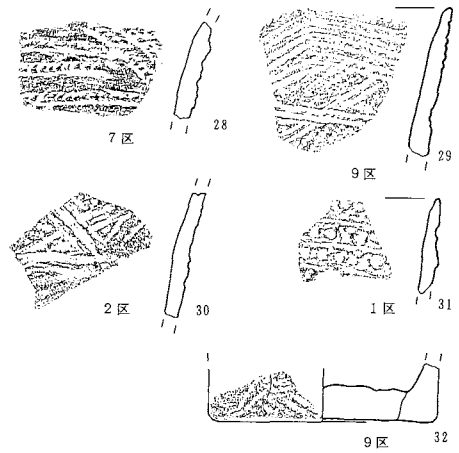
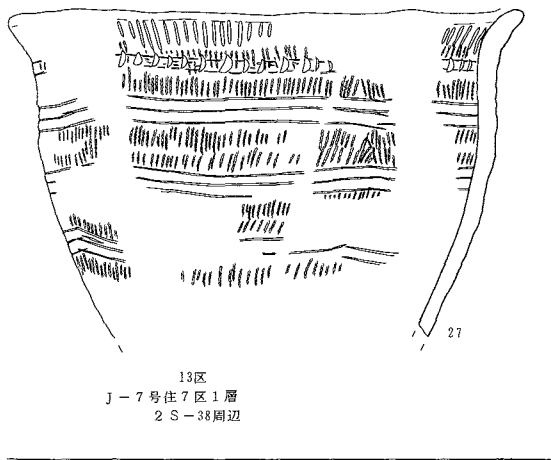
第64図 J-7号住居址出土の土器(1)



第65図 J-7号住居址出土の土器(2)

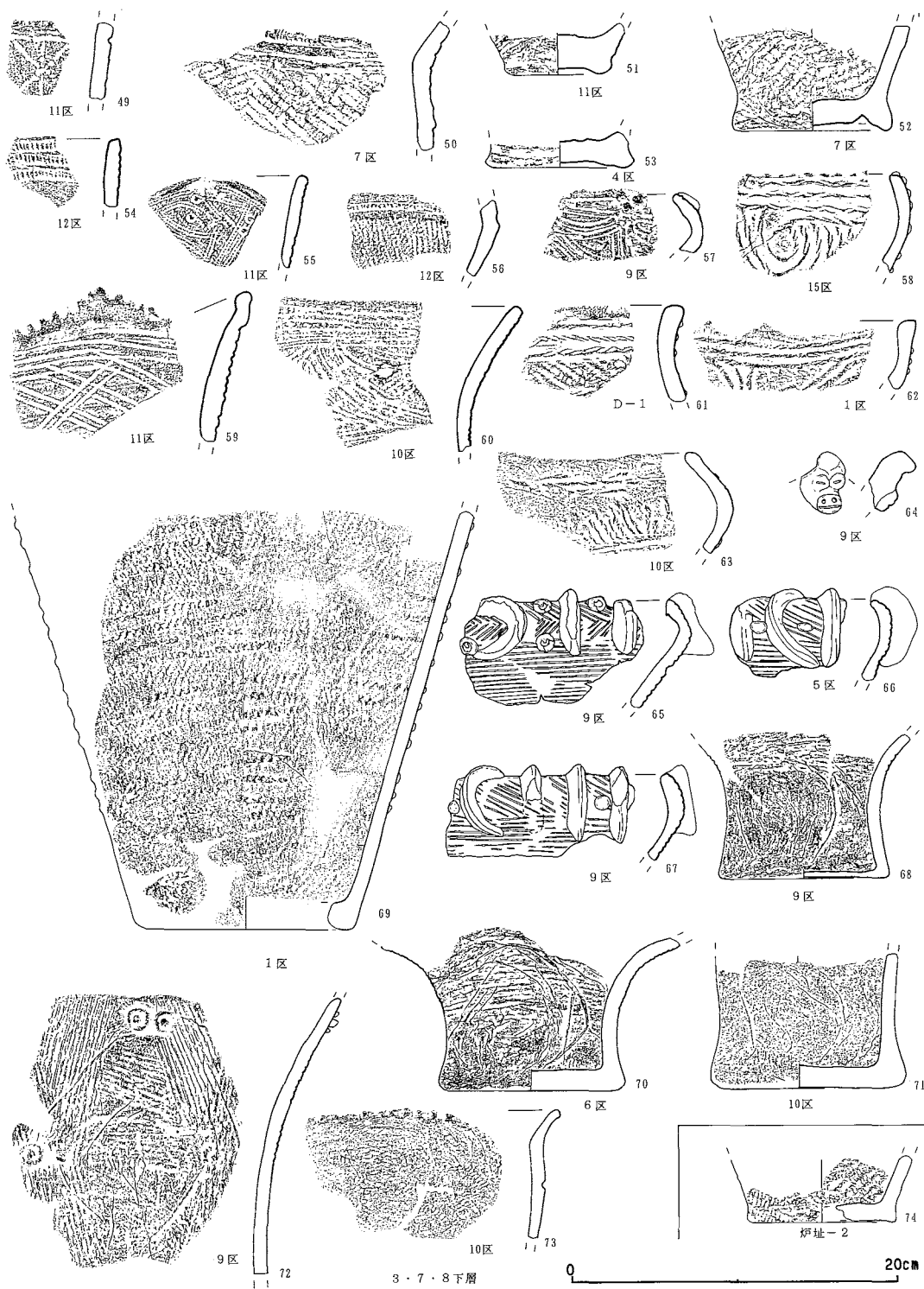


第66図 J-8号住居址出土の土器(1)

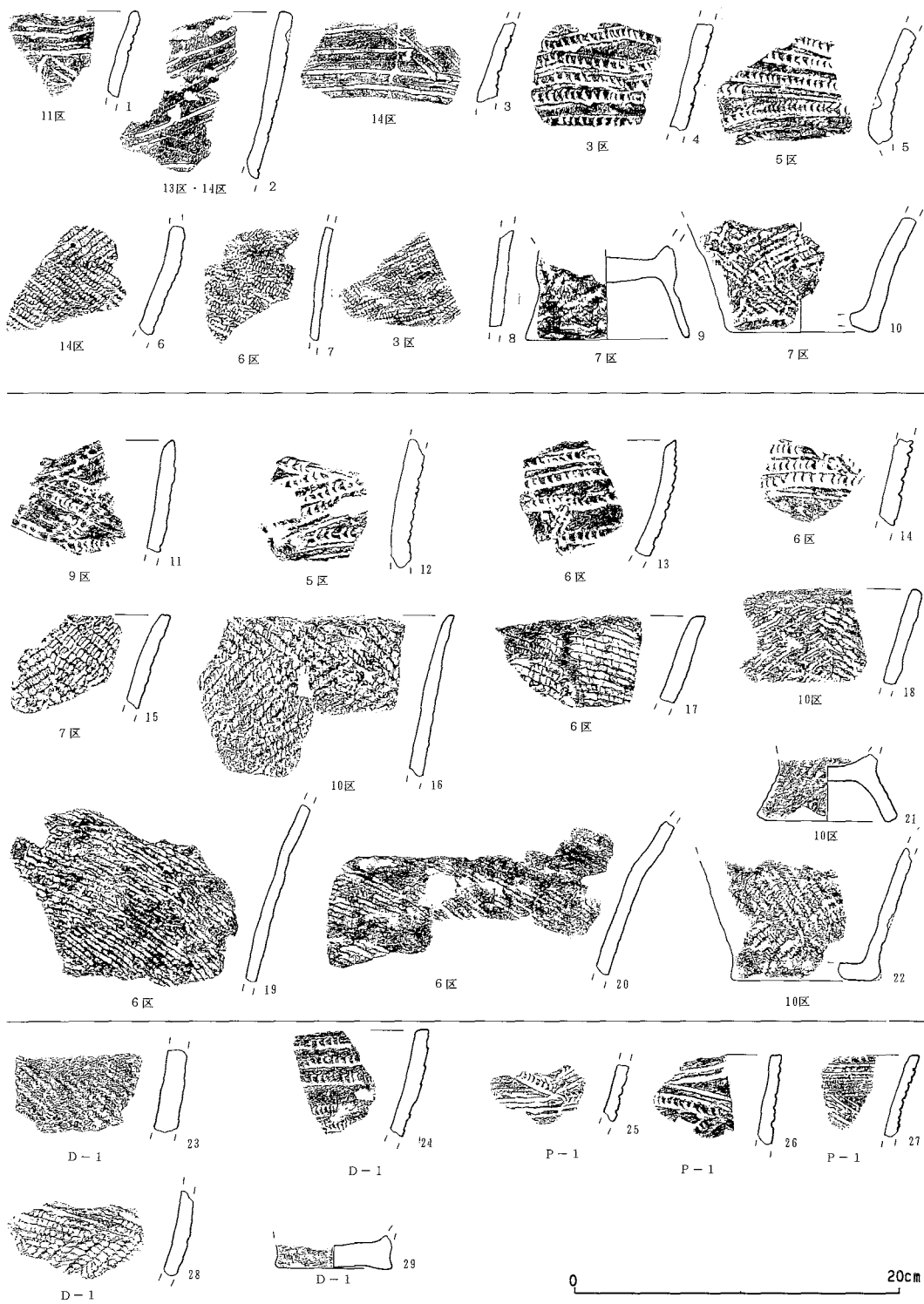


2・6・8上層 0 20cm

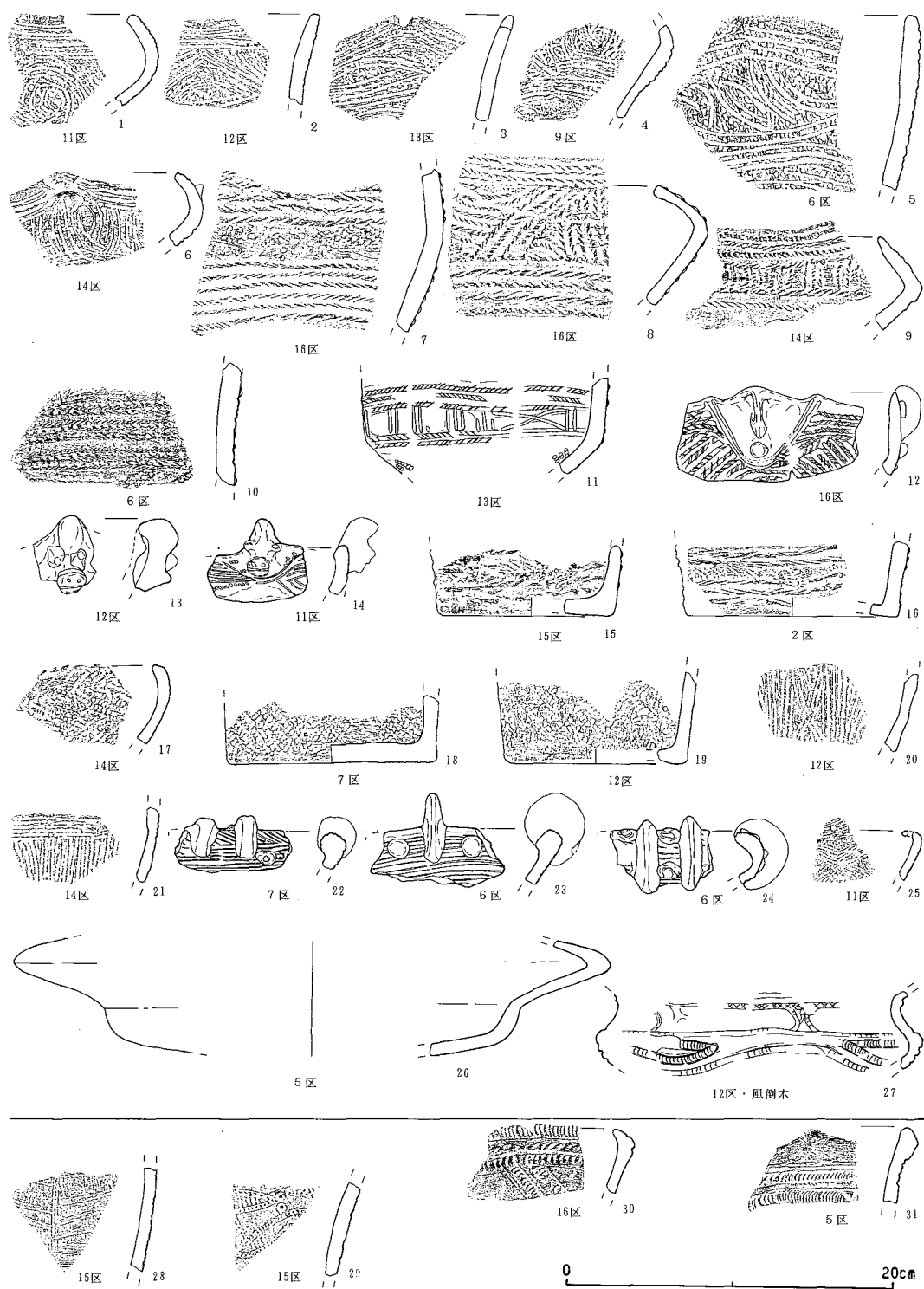
第67图 J-8号住居址出土の土器(2)



第68図 J-8号住居址出土の土器(3)



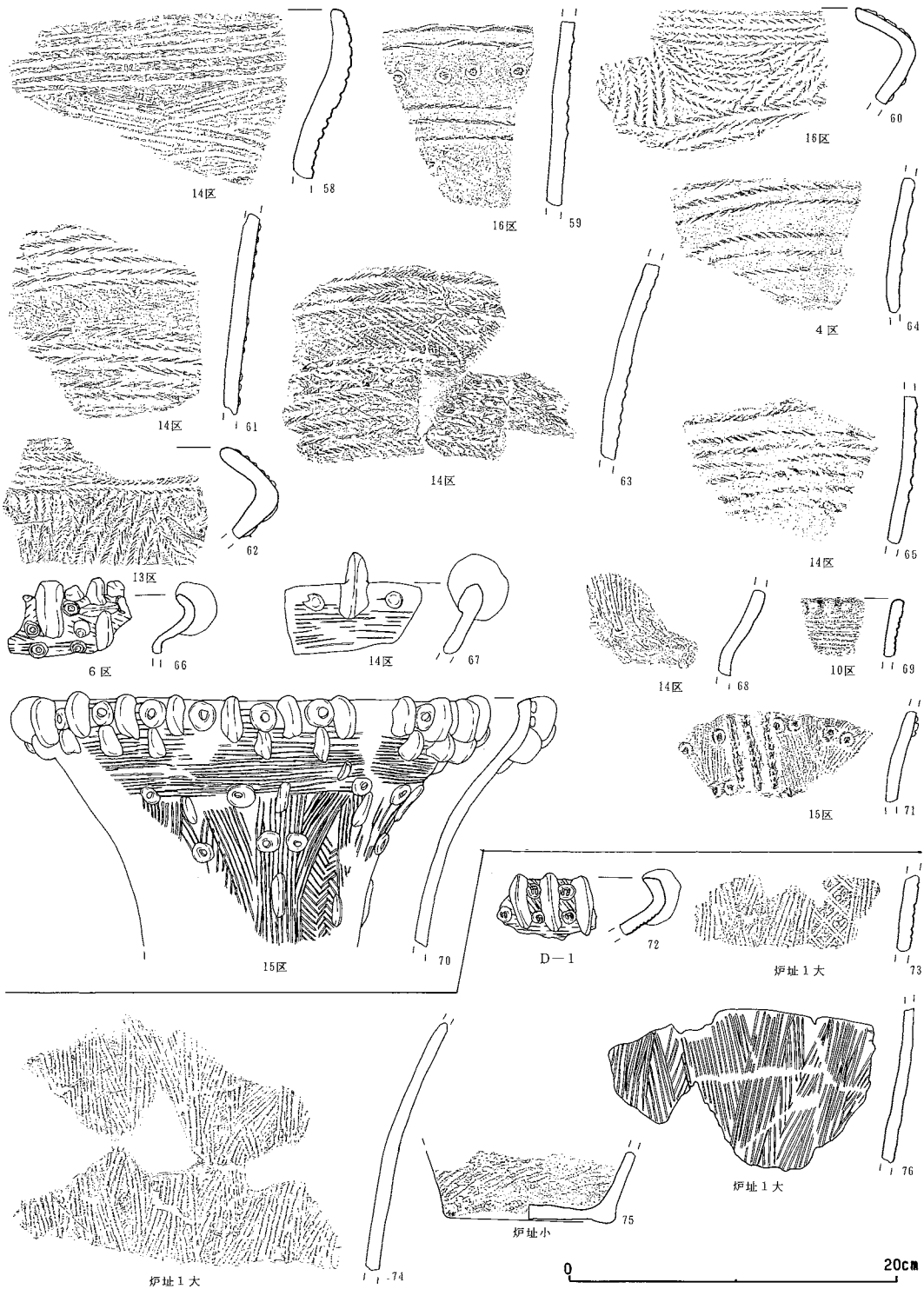
第69図 J-9号住居址出土の土器



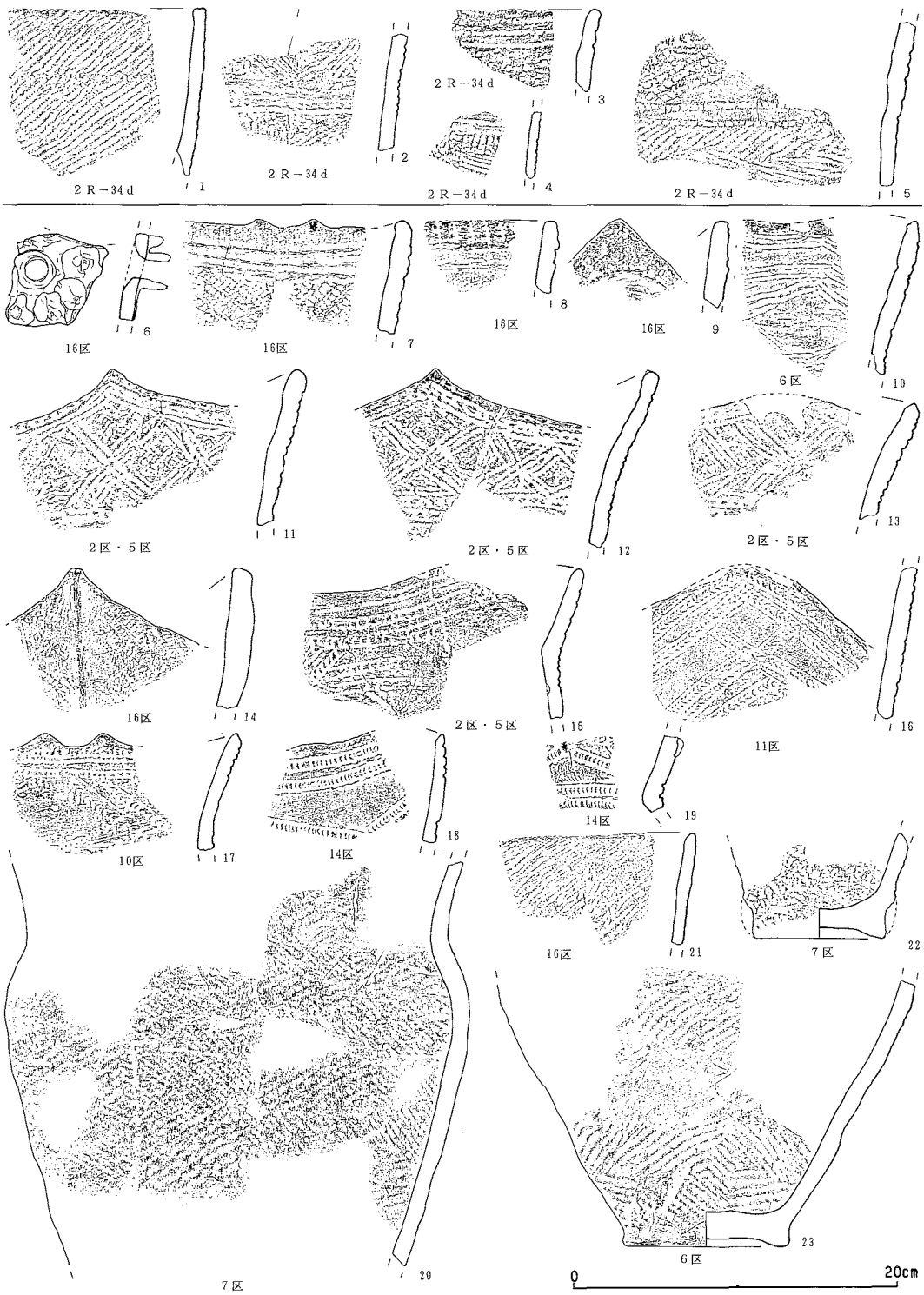
第70図 J-11号住居址出土の土器(1)



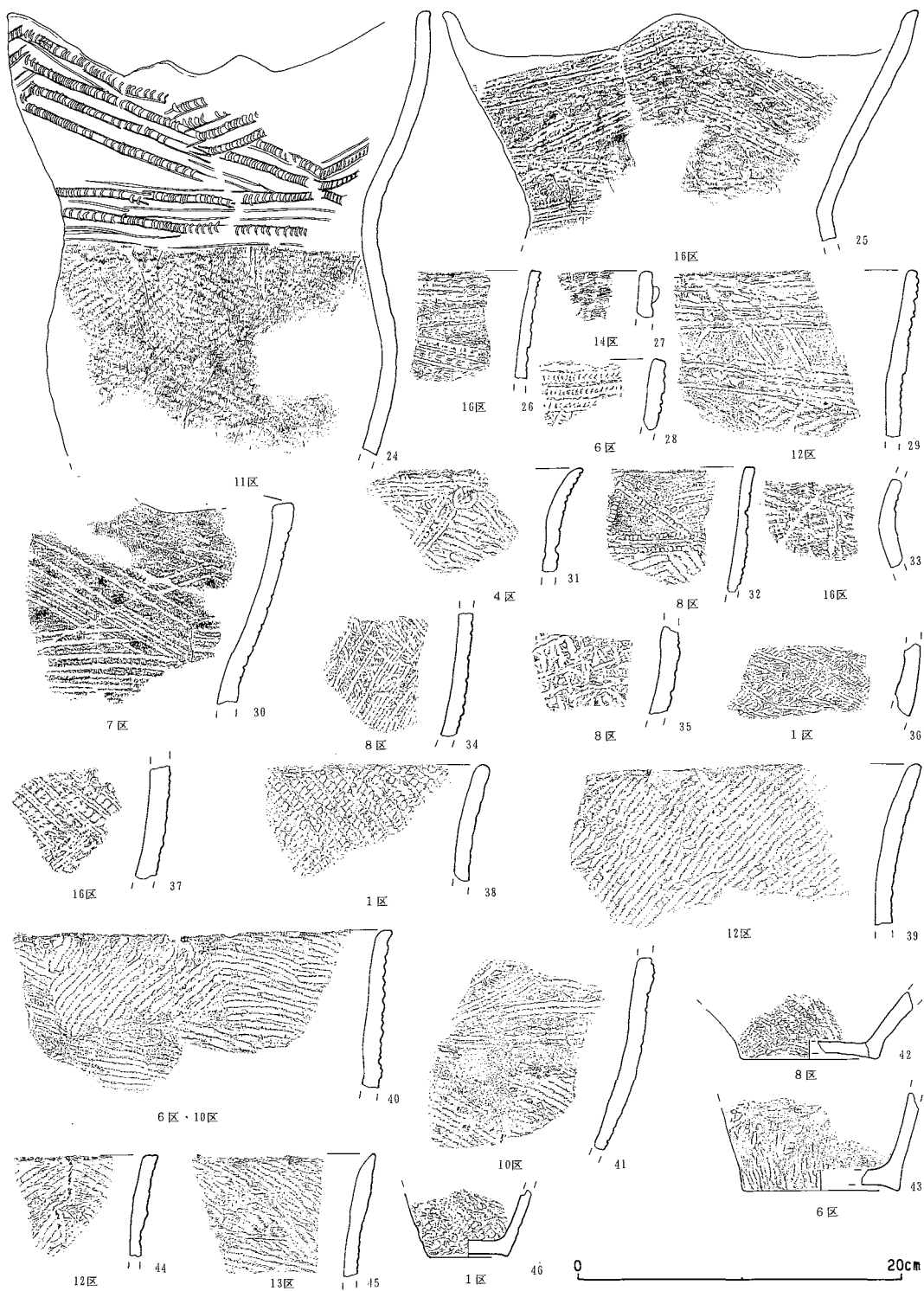
第71図 J-11号住居址出土の土器(2)



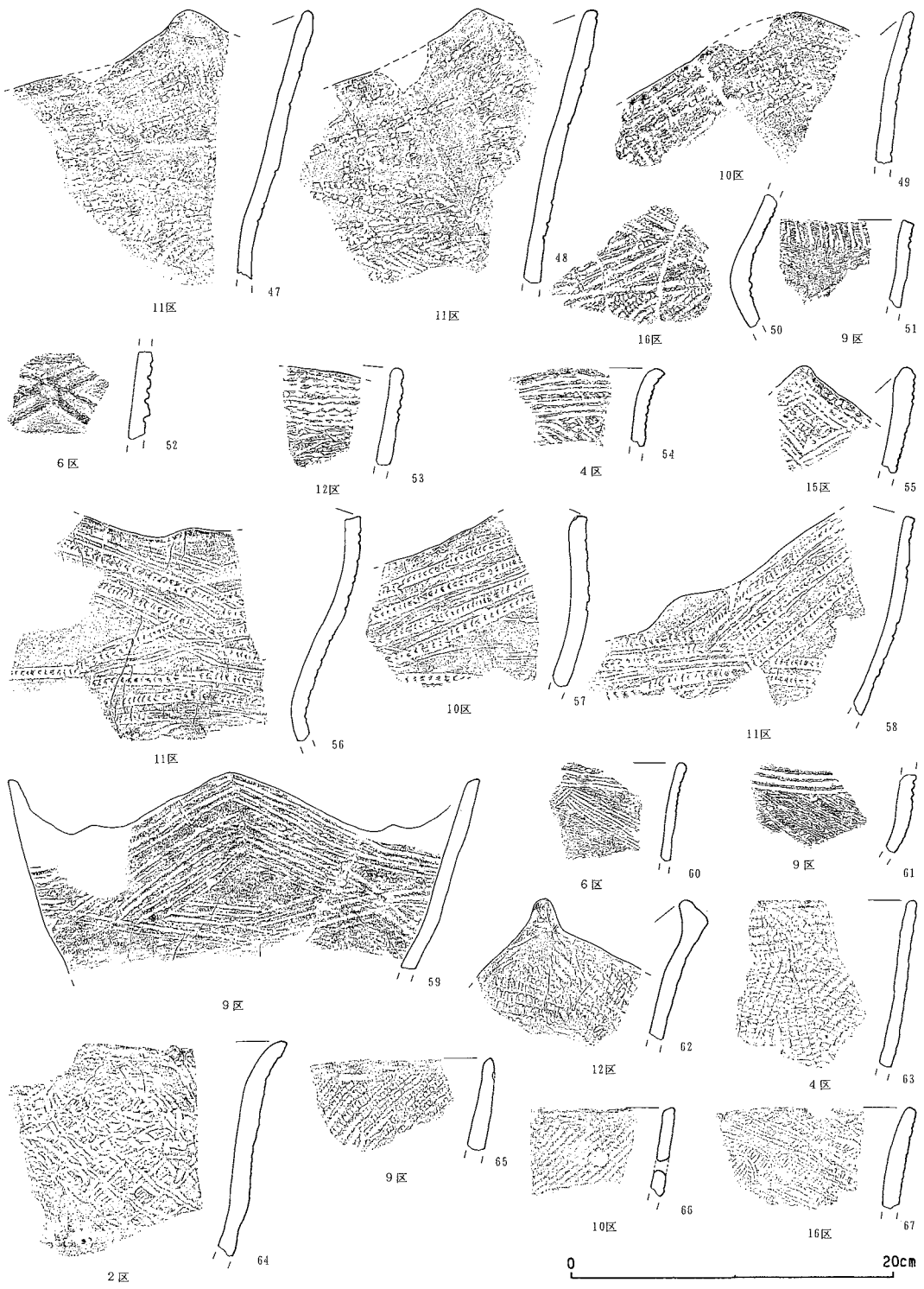
第72図 J-11号住居址出土の土器(3)



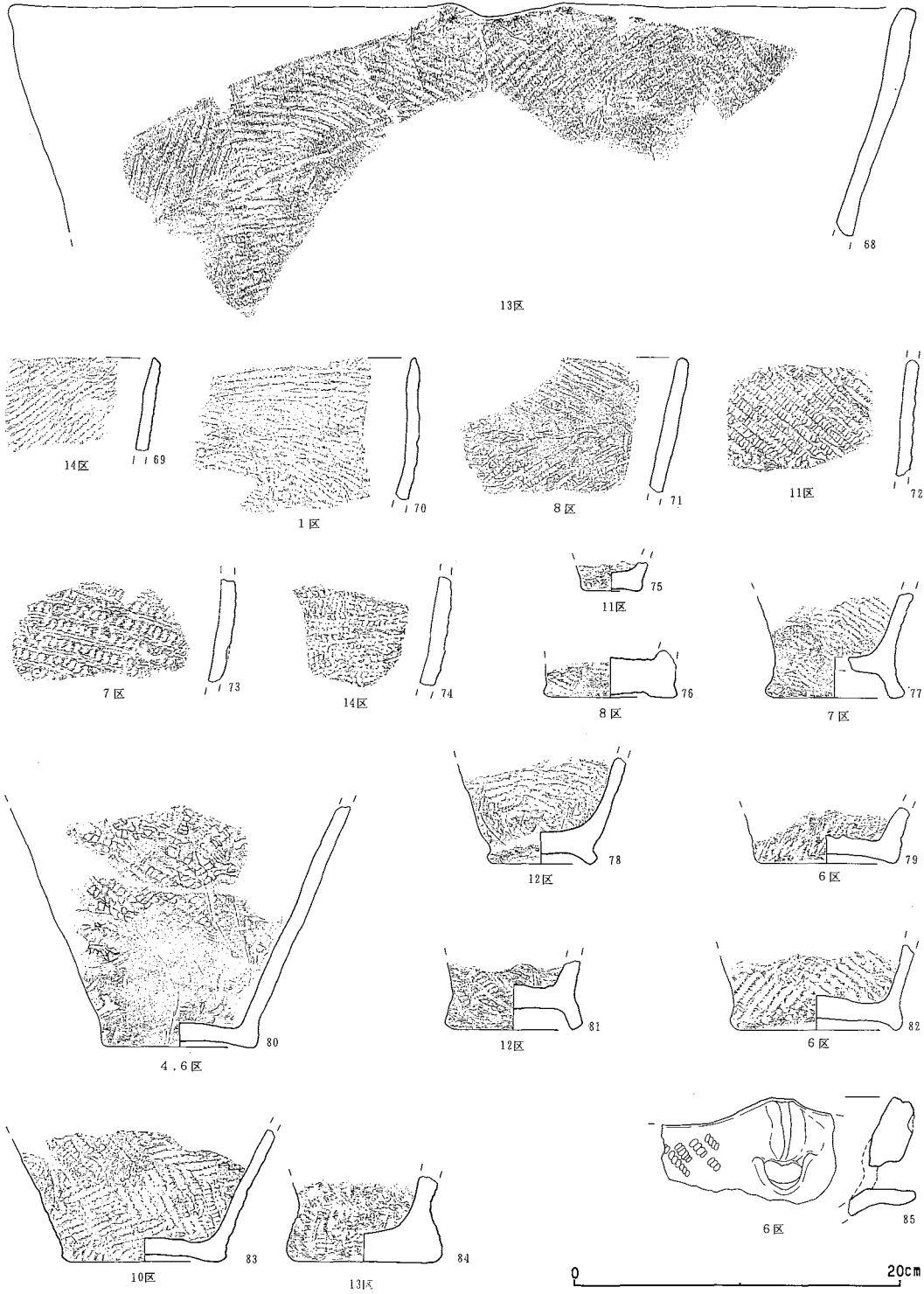
第73図 J-12号住居址出土の土器(1)



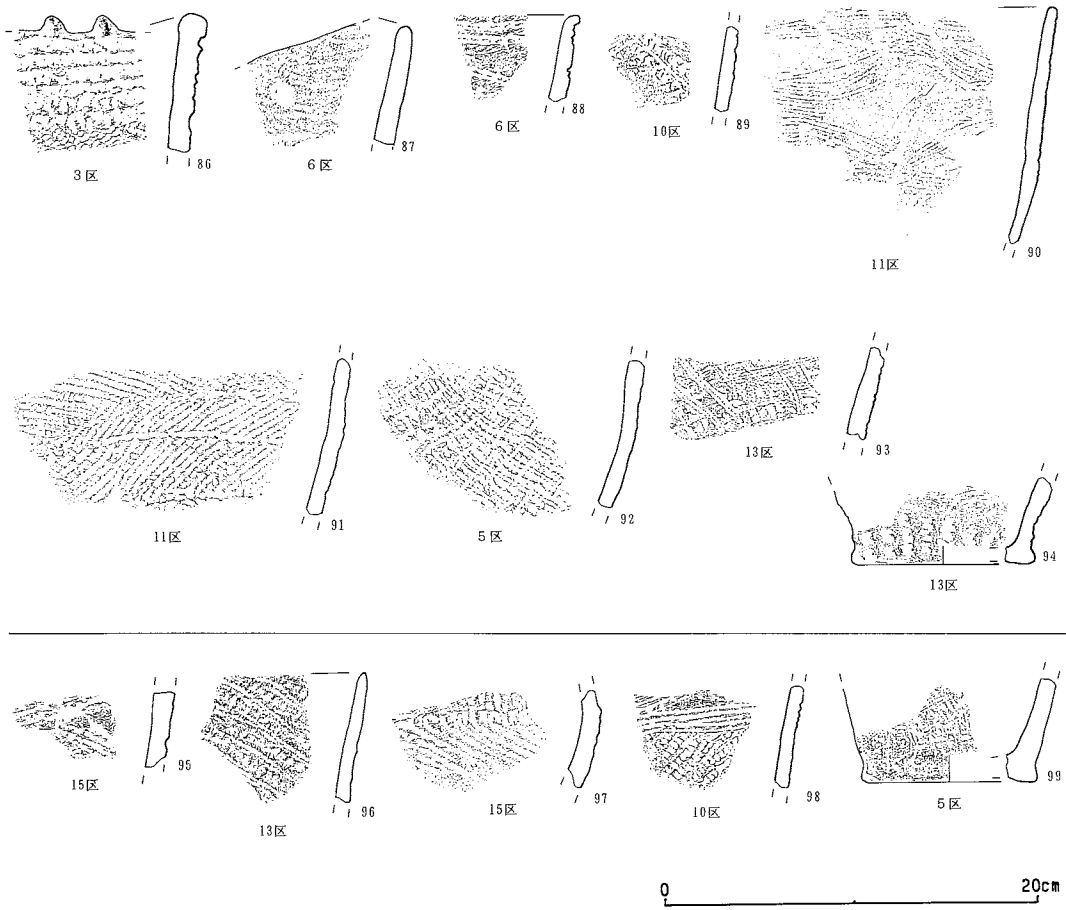
第74図 J-12号住居址出土の土器（2）



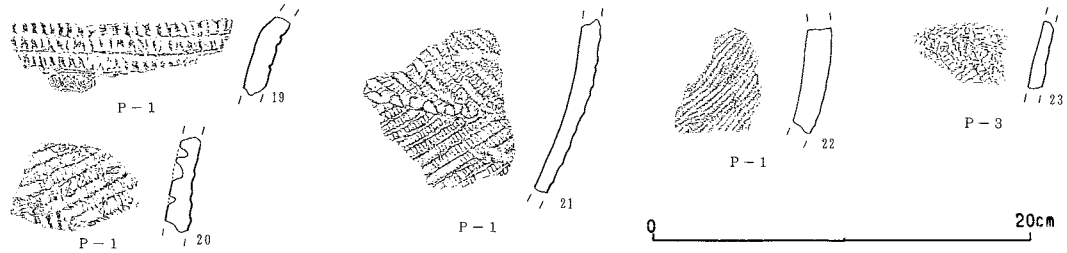
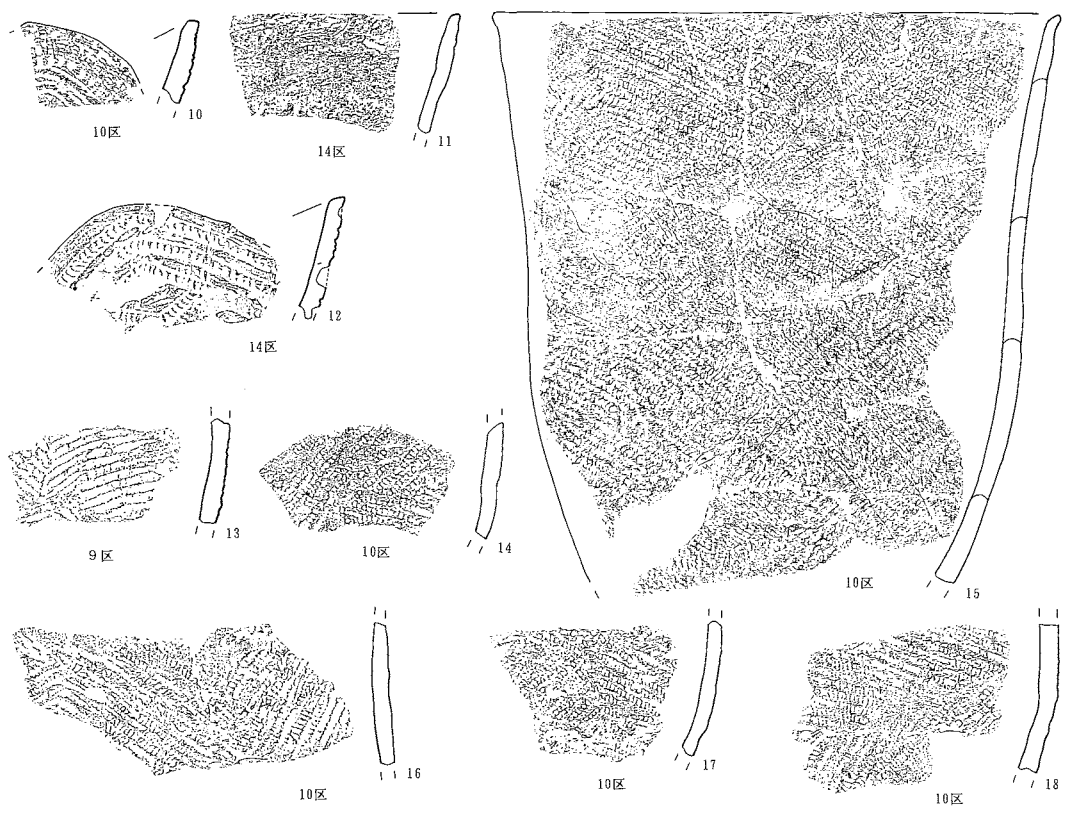
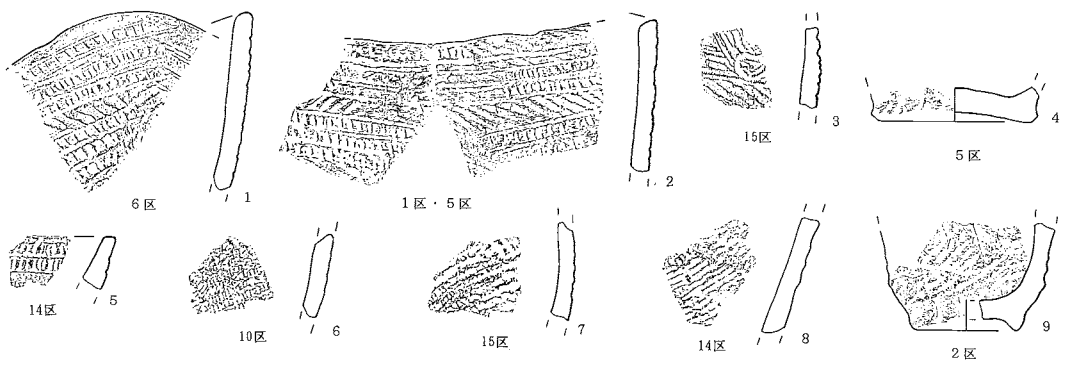
第75図 J-12号住居址出土の土器(3)



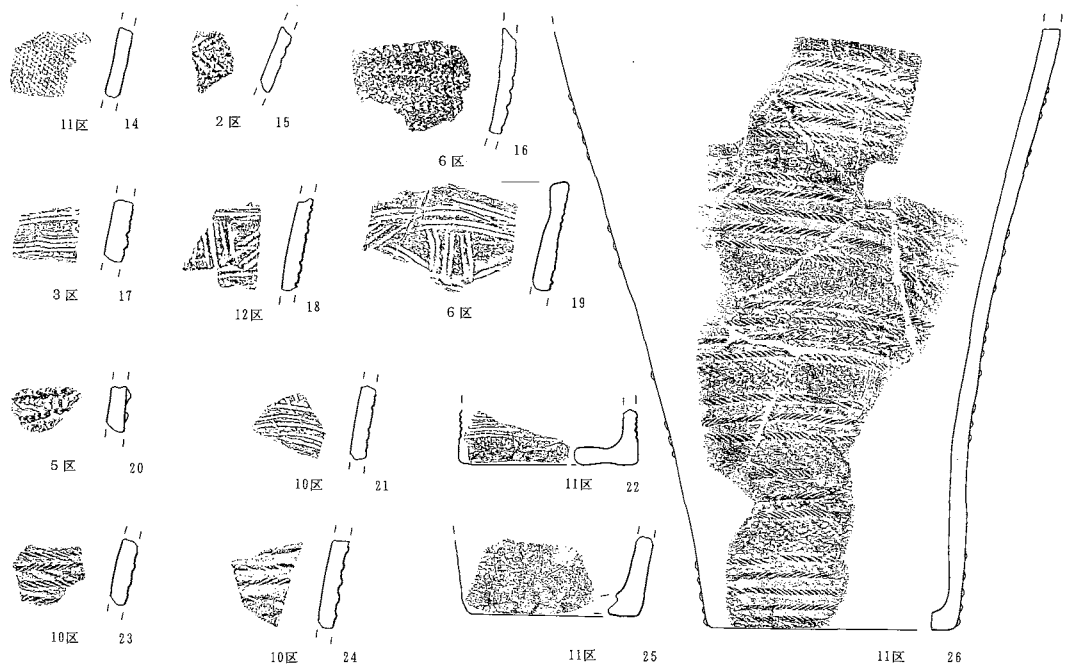
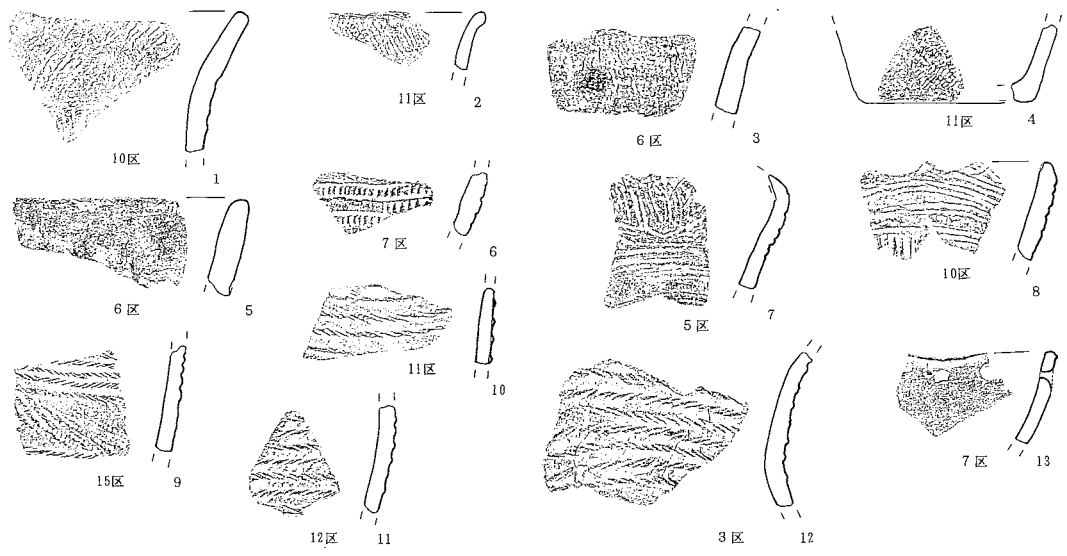
第76図 J-12号住居址出土の土器（4）



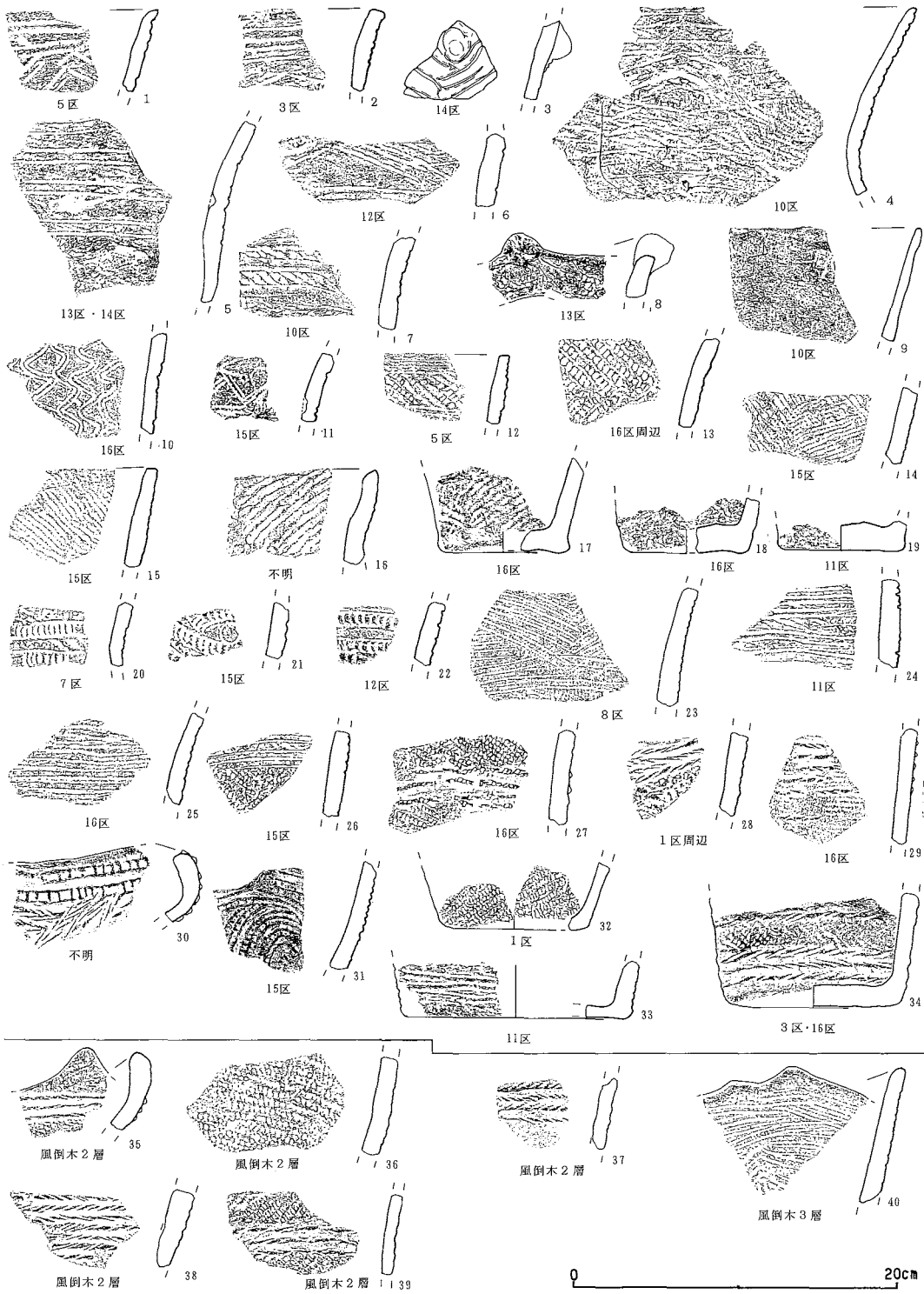
第77図 J—12号住居址出土の土器（5）



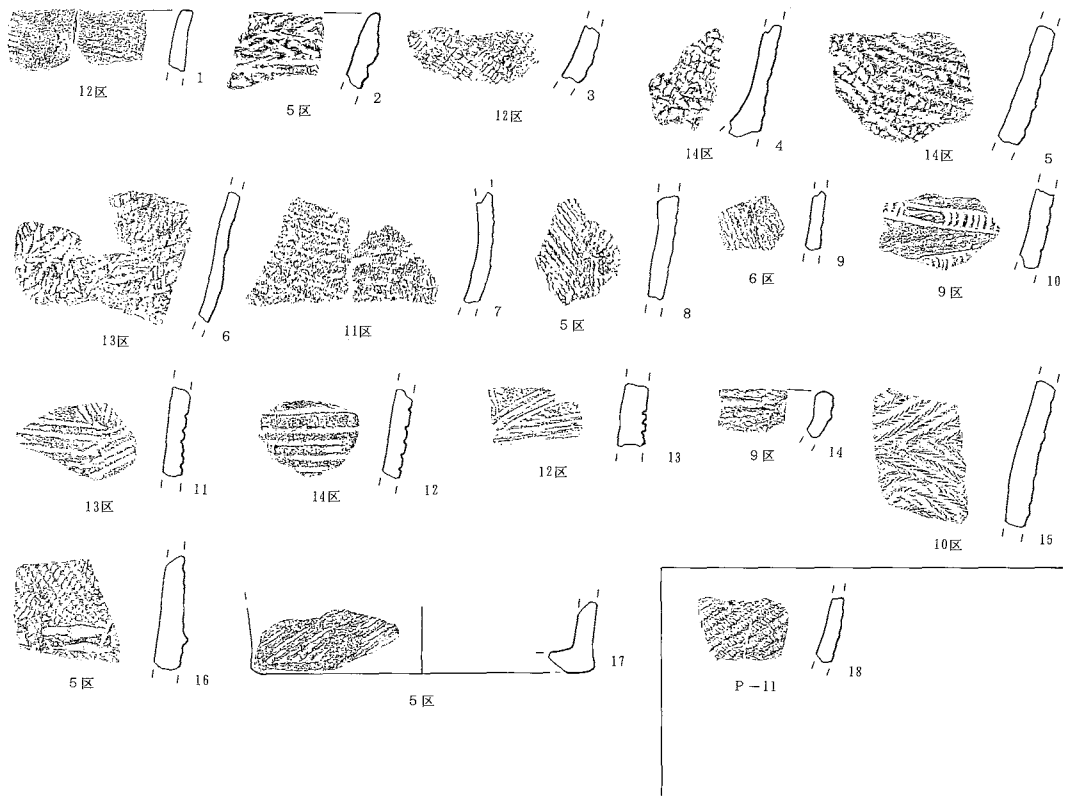
第78図 J-13号住居址出土の土器



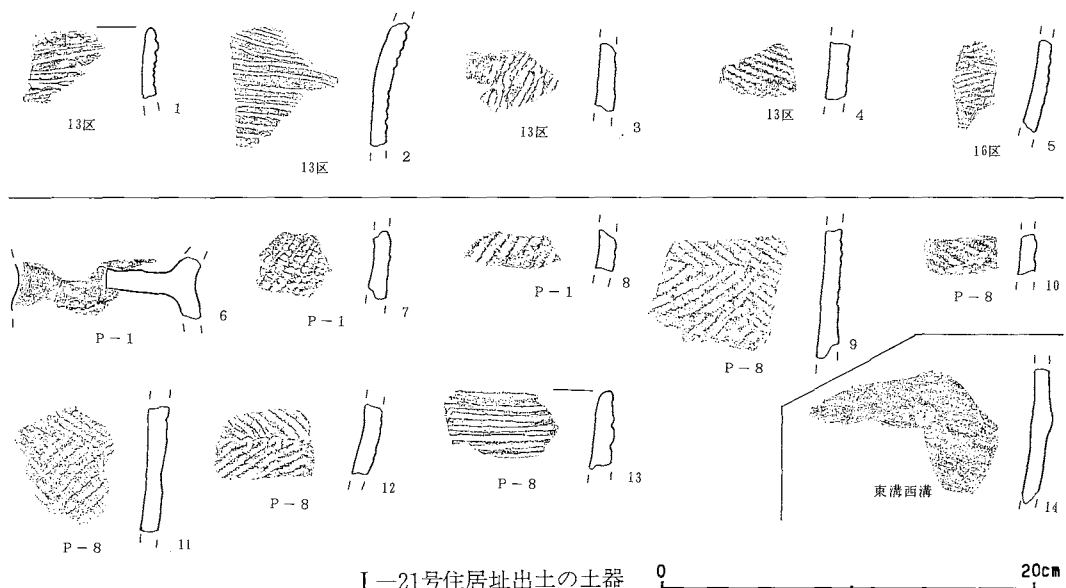
第79図 J-14号住居址出土の土器



第80図 J-15号住居址出土の土器

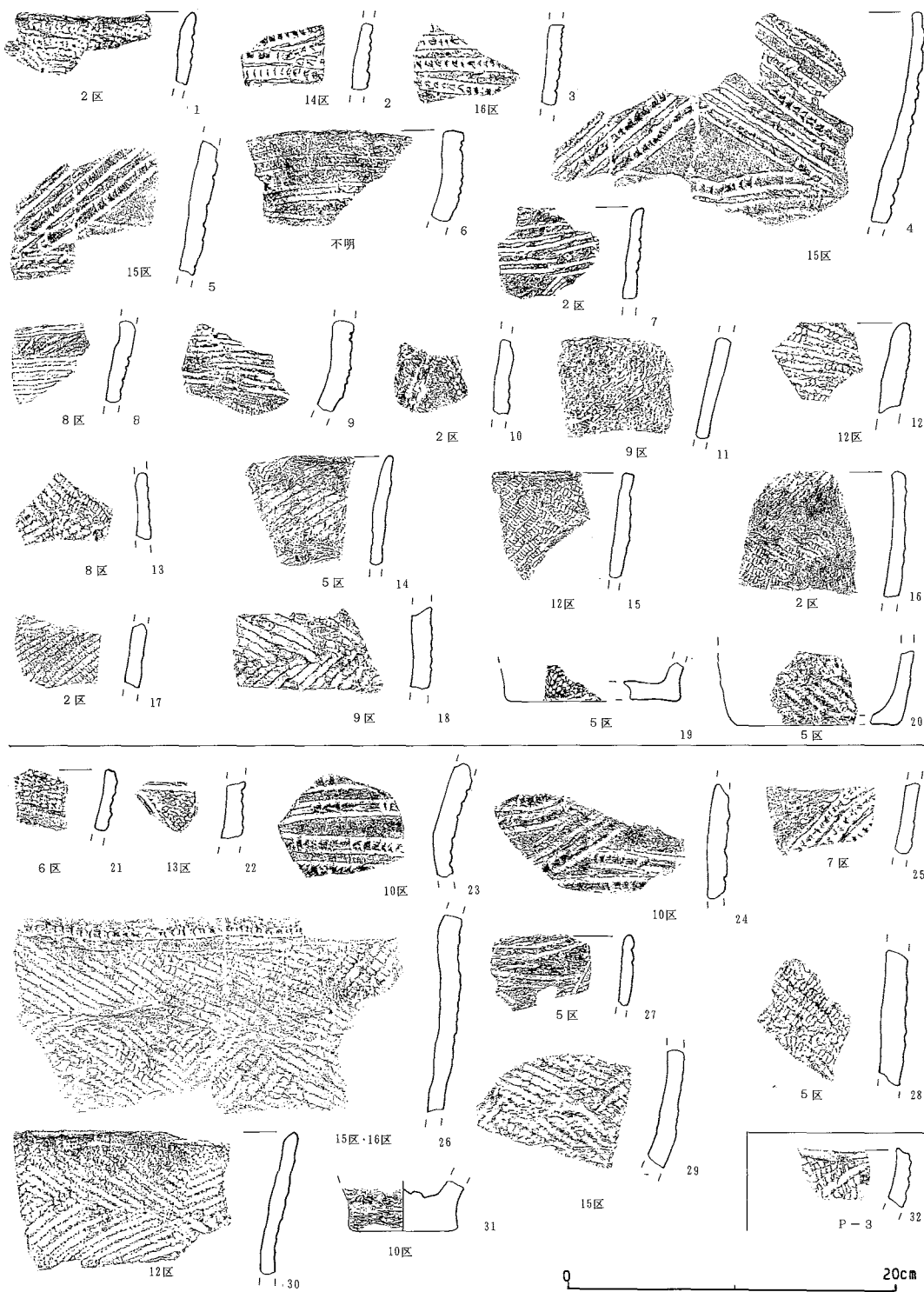


J-16号住居址出土の土器

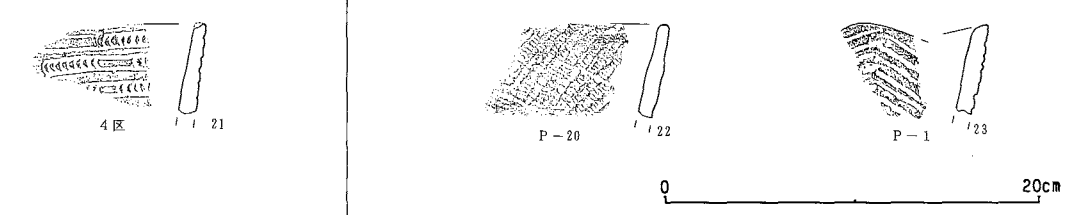
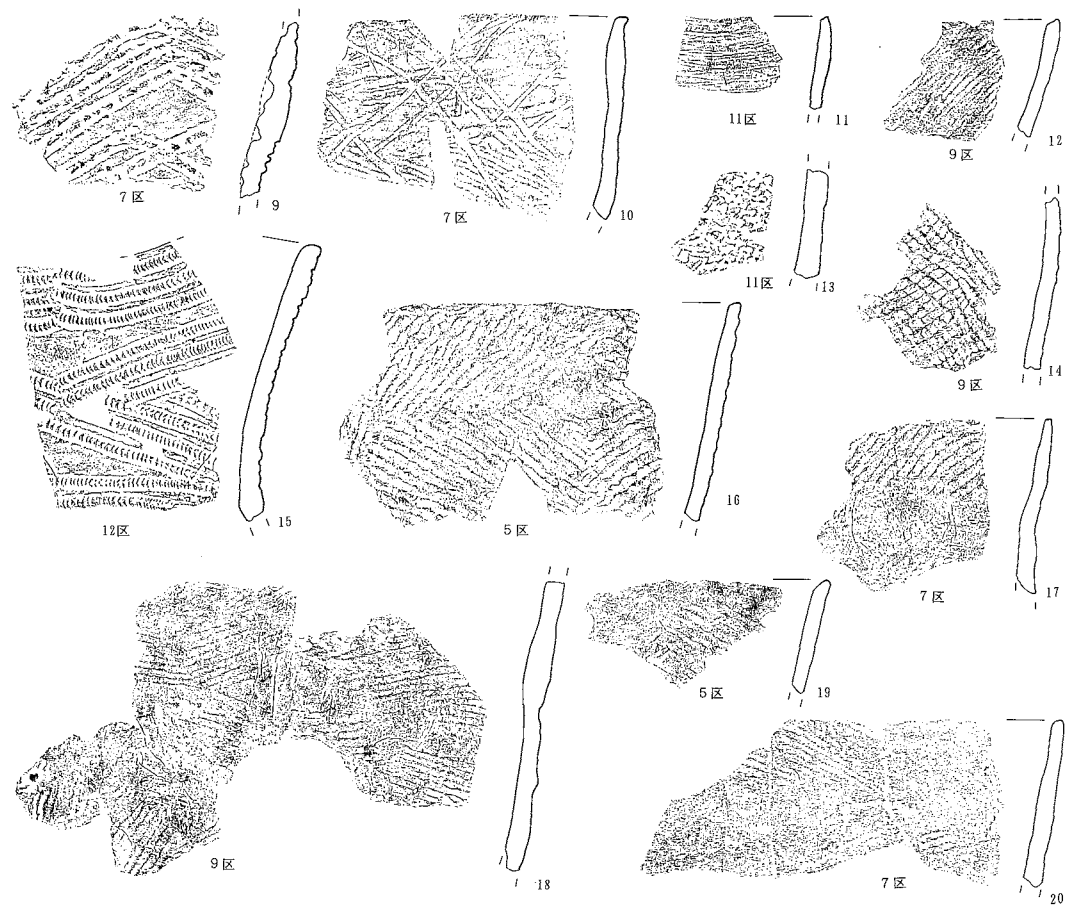
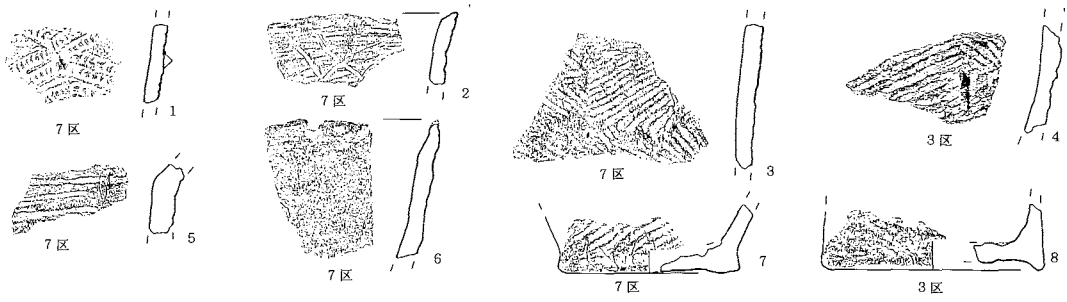


J-21号住居址出土の土器

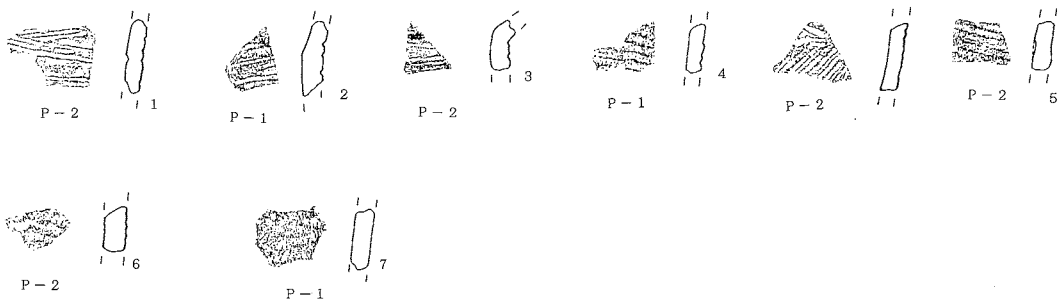
第81図 J-16・J-21号住居址出土の土器



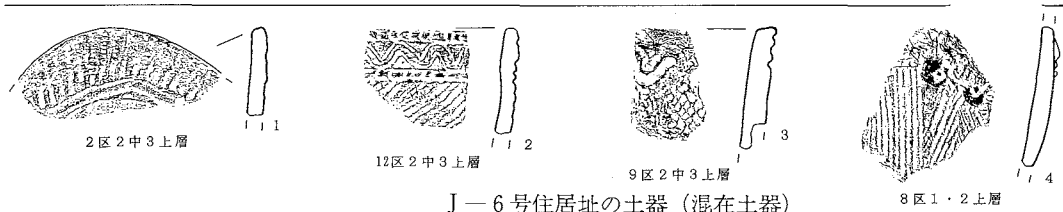
第82図 J-17号住居址出土の土器



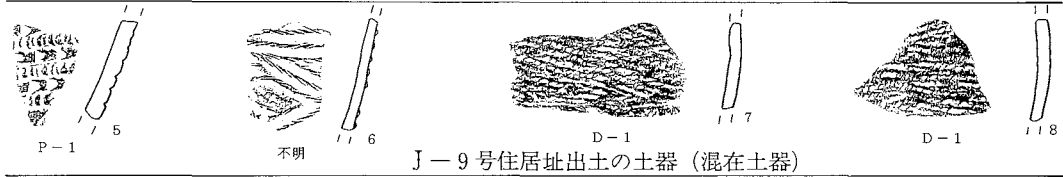
第83図 J-18号住居址出土の土器



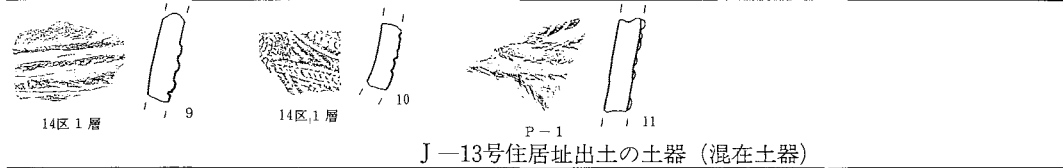
J-20号住居址出土の土器



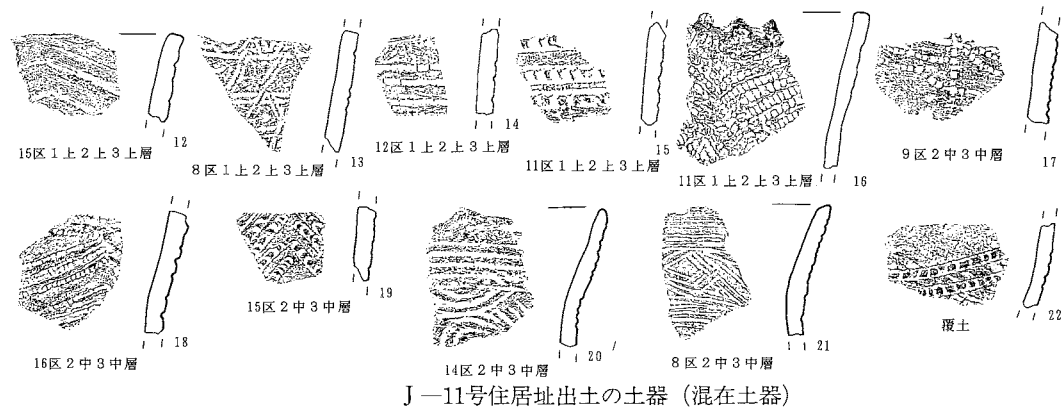
J-6号住居址の土器 (混在土器)



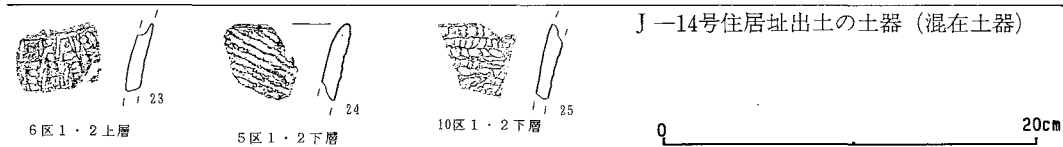
J-9号住居址出土の土器 (混在土器)



J-13号住居址出土の土器 (混在土器)

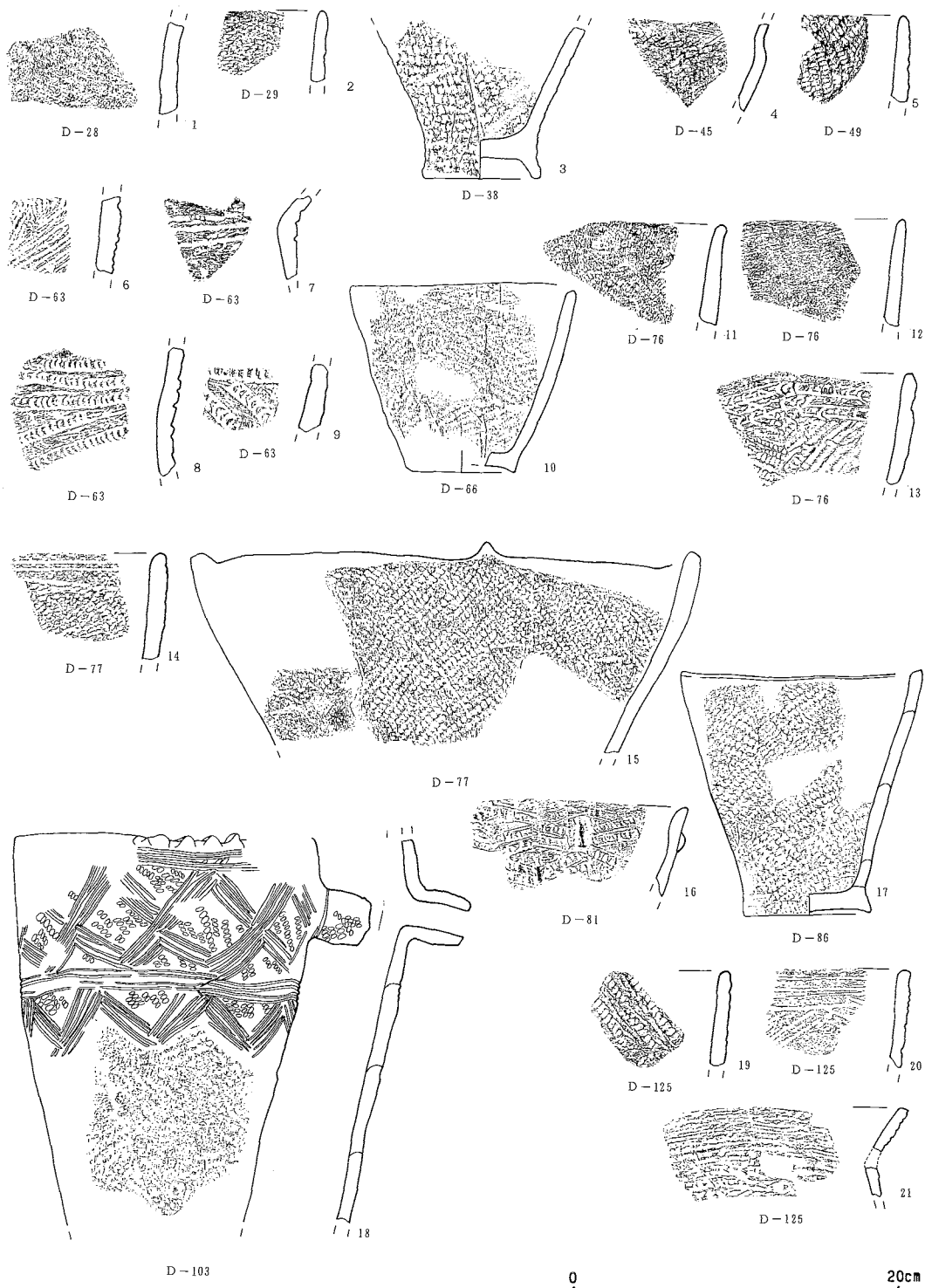


J-11号住居址出土の土器 (混在土器)

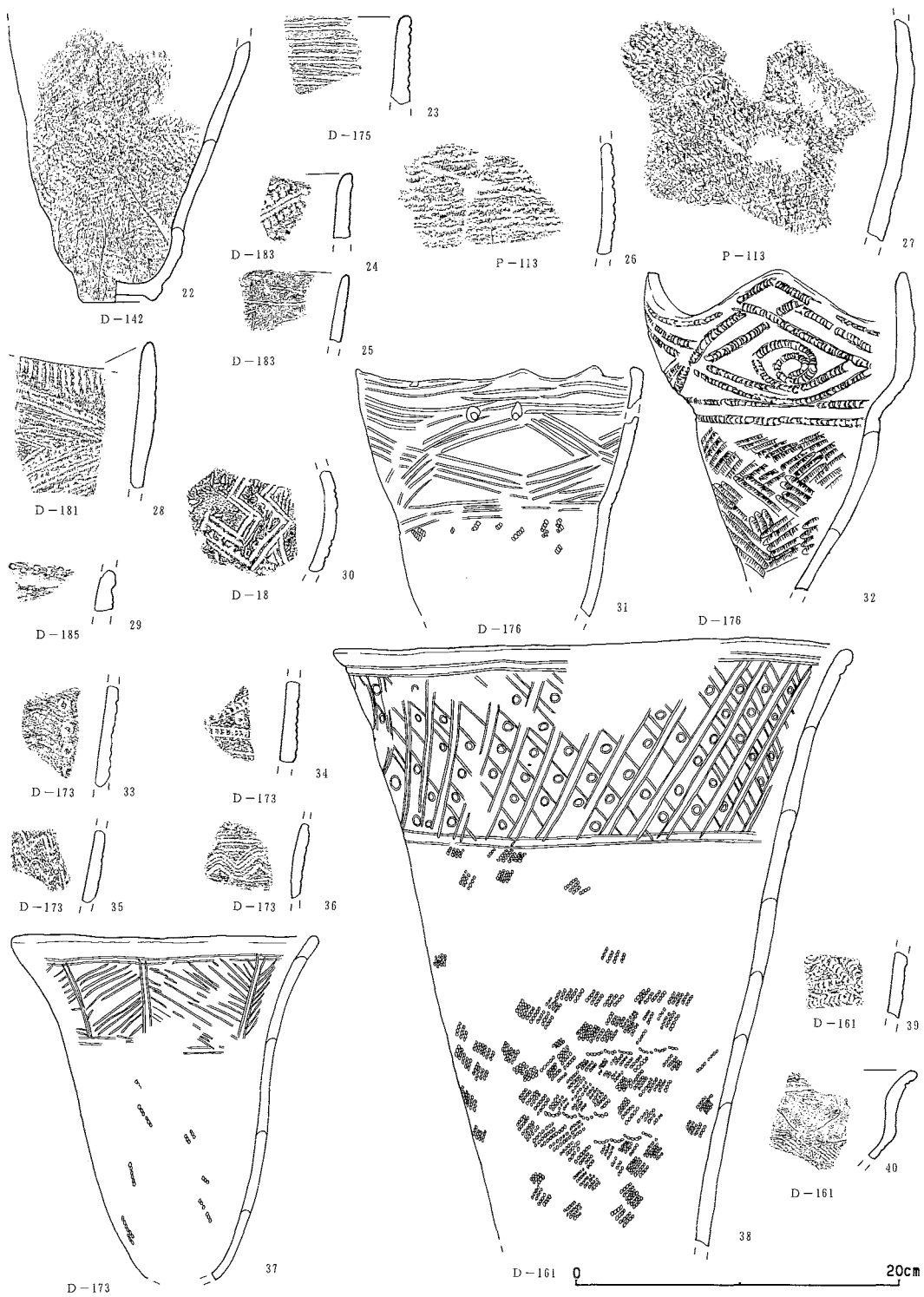


J-14号住居址出土の土器 (混在土器)

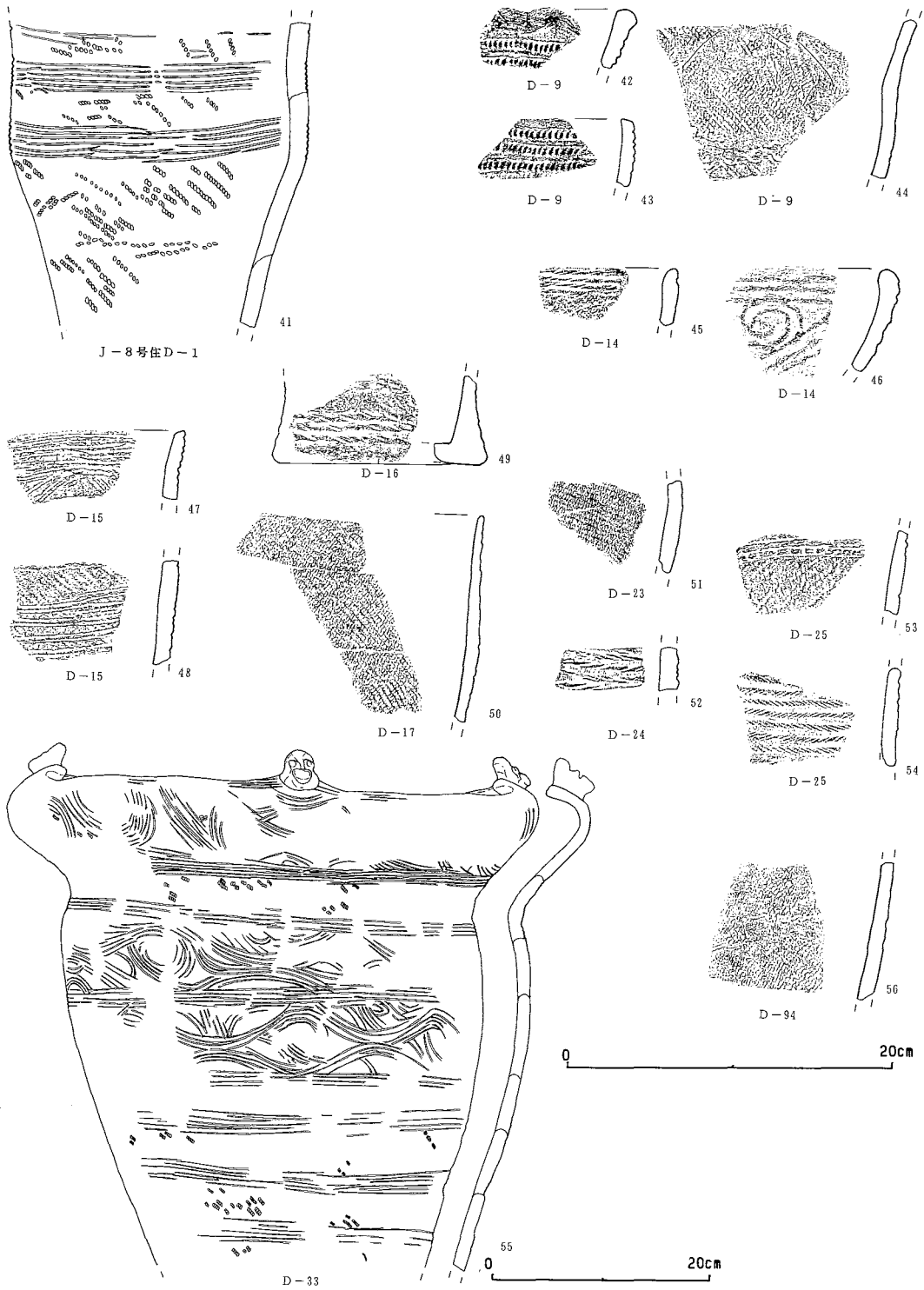
第84図 各住居址出土の土器 (混在土器)



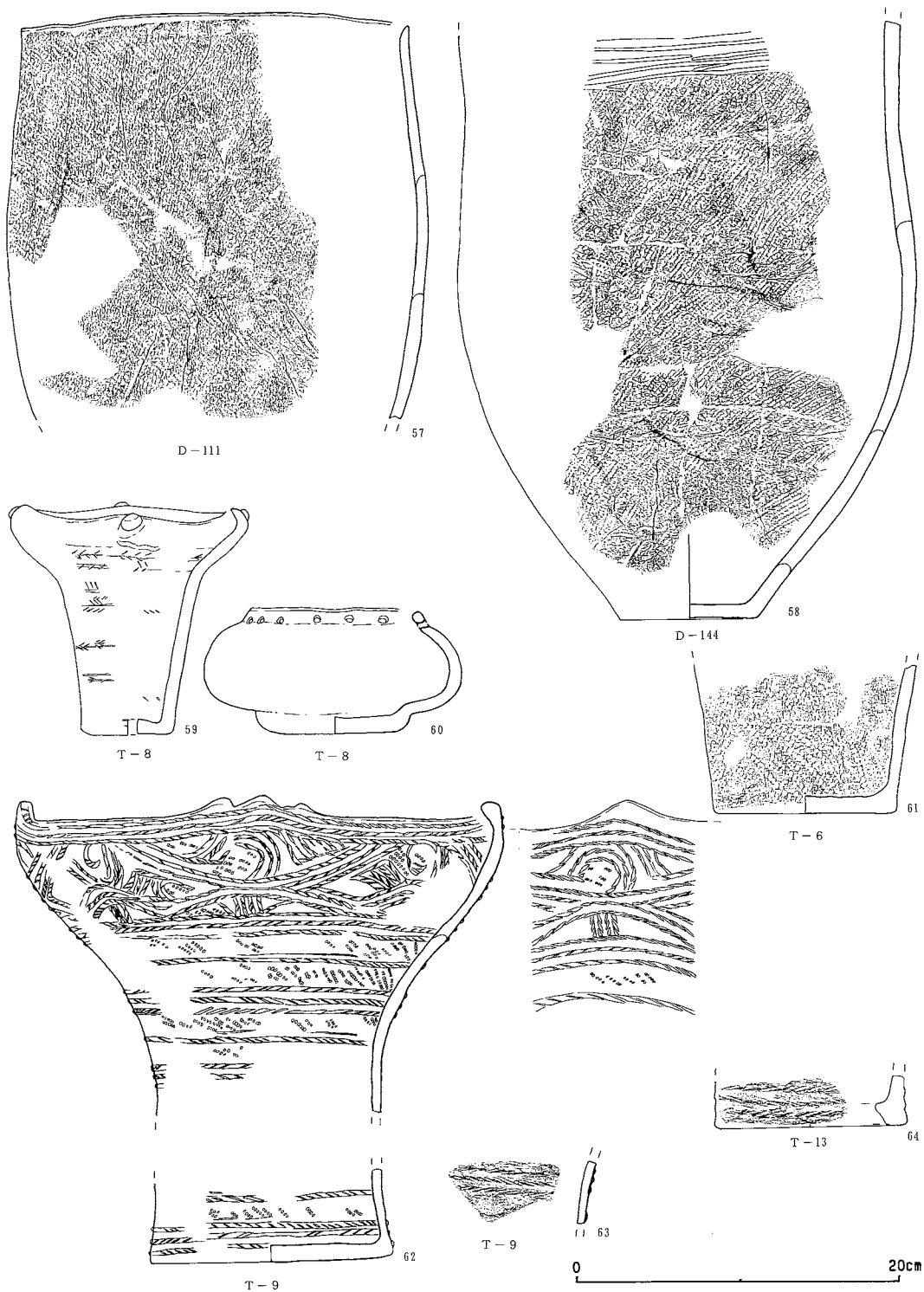
第85図 土壙出土の土器 (1)



第86図 土壙出土の土器（2）



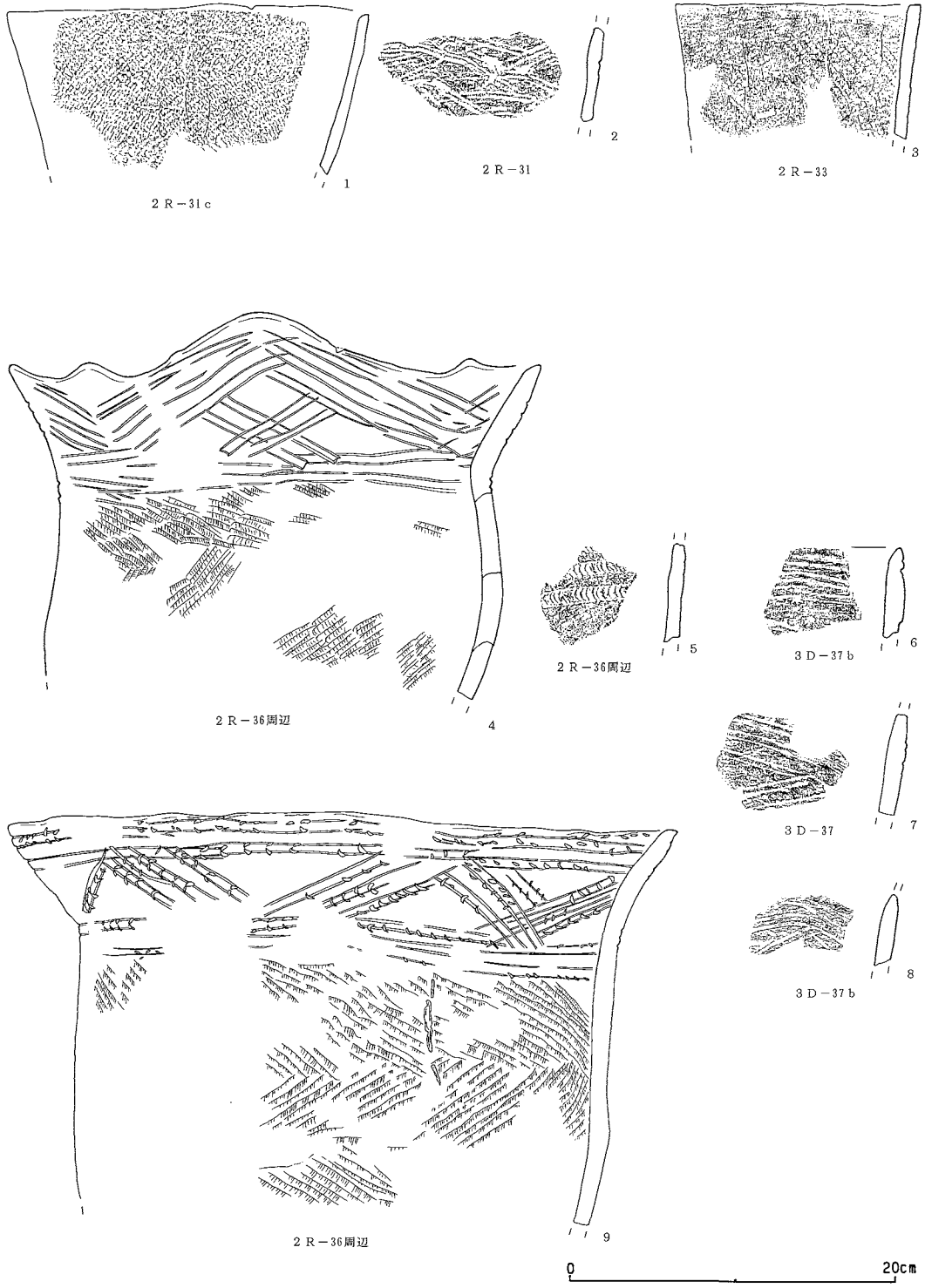
第87図 土壌・ピット出土の土器 (3)



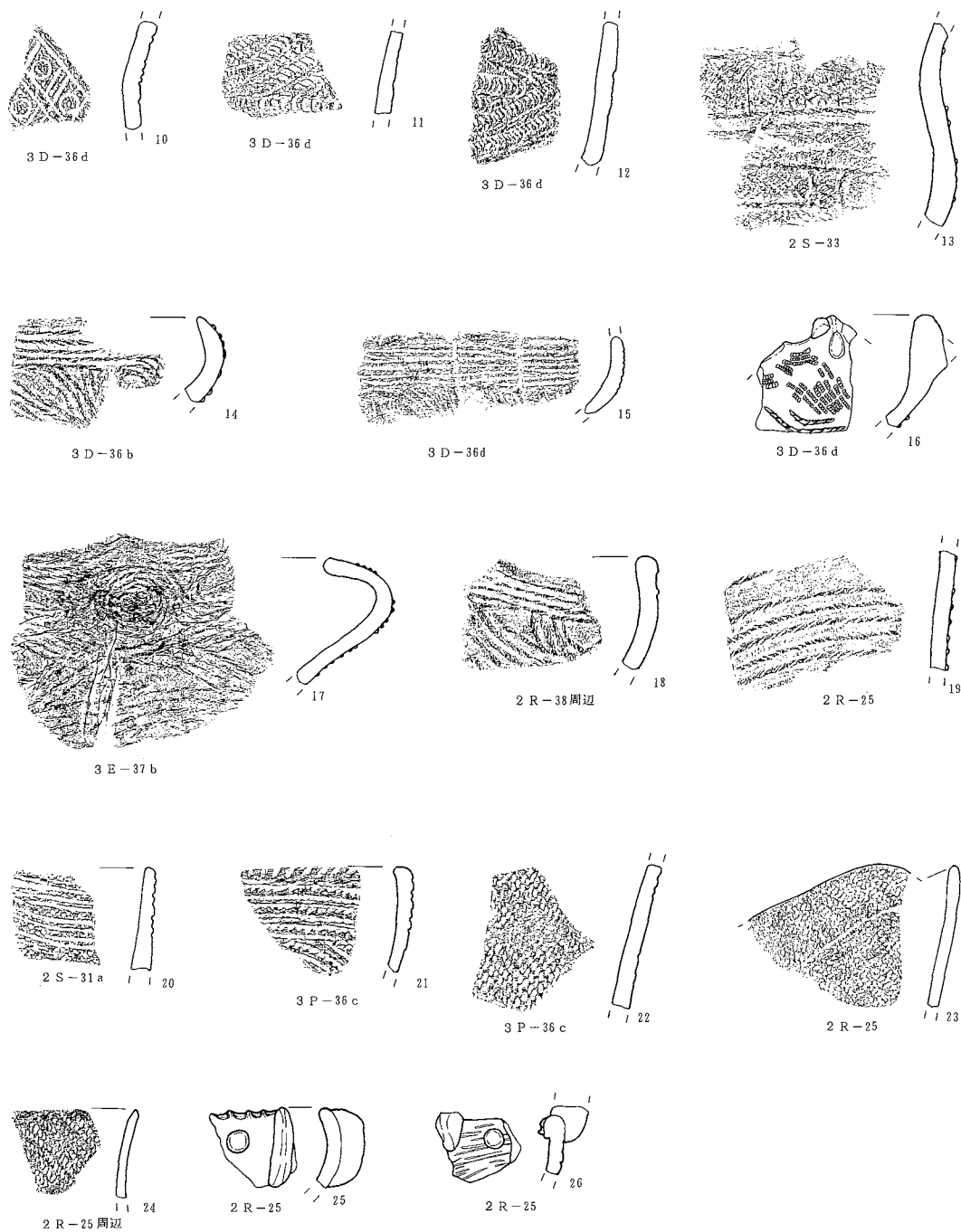
第88図 土壙出土の土器 (4)



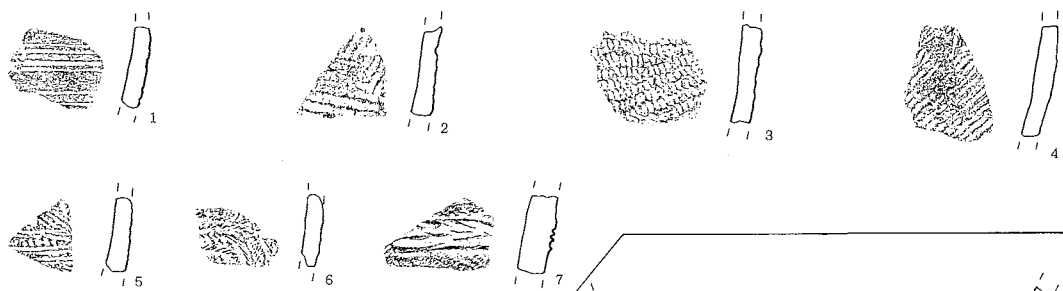
第89図 土壇・ピット出土の土器 (5)



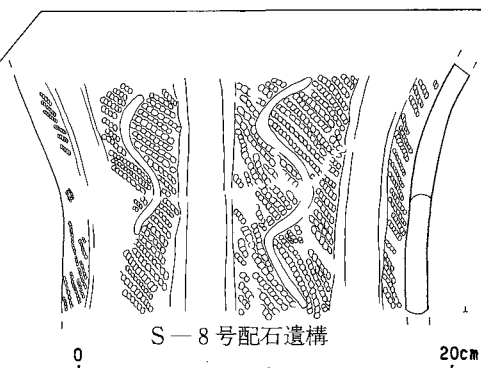
第90図 グリッド出土の土器 (1)



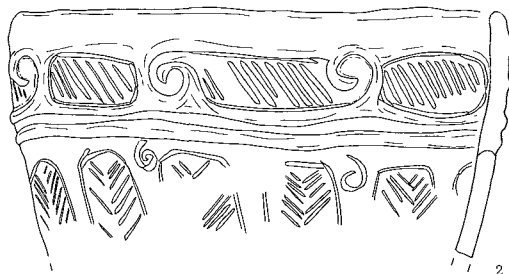
第91図 グリッド出土の土器 (2)



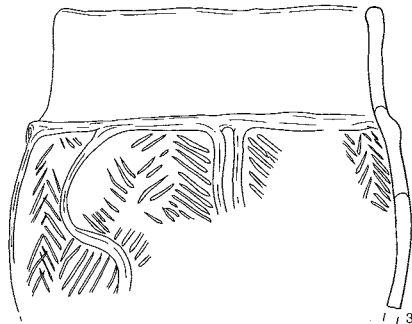
S-4号集石土壙



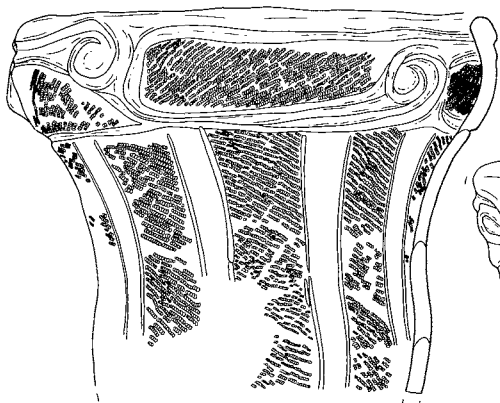
S-8号配石遺構



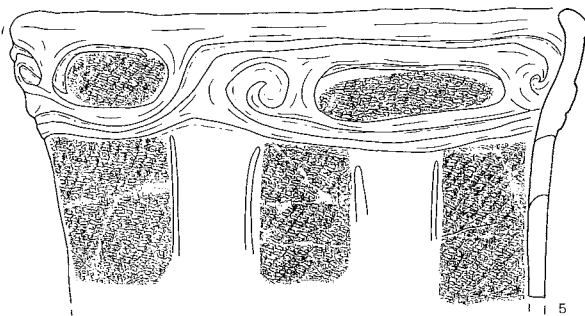
U-2号



U-5号



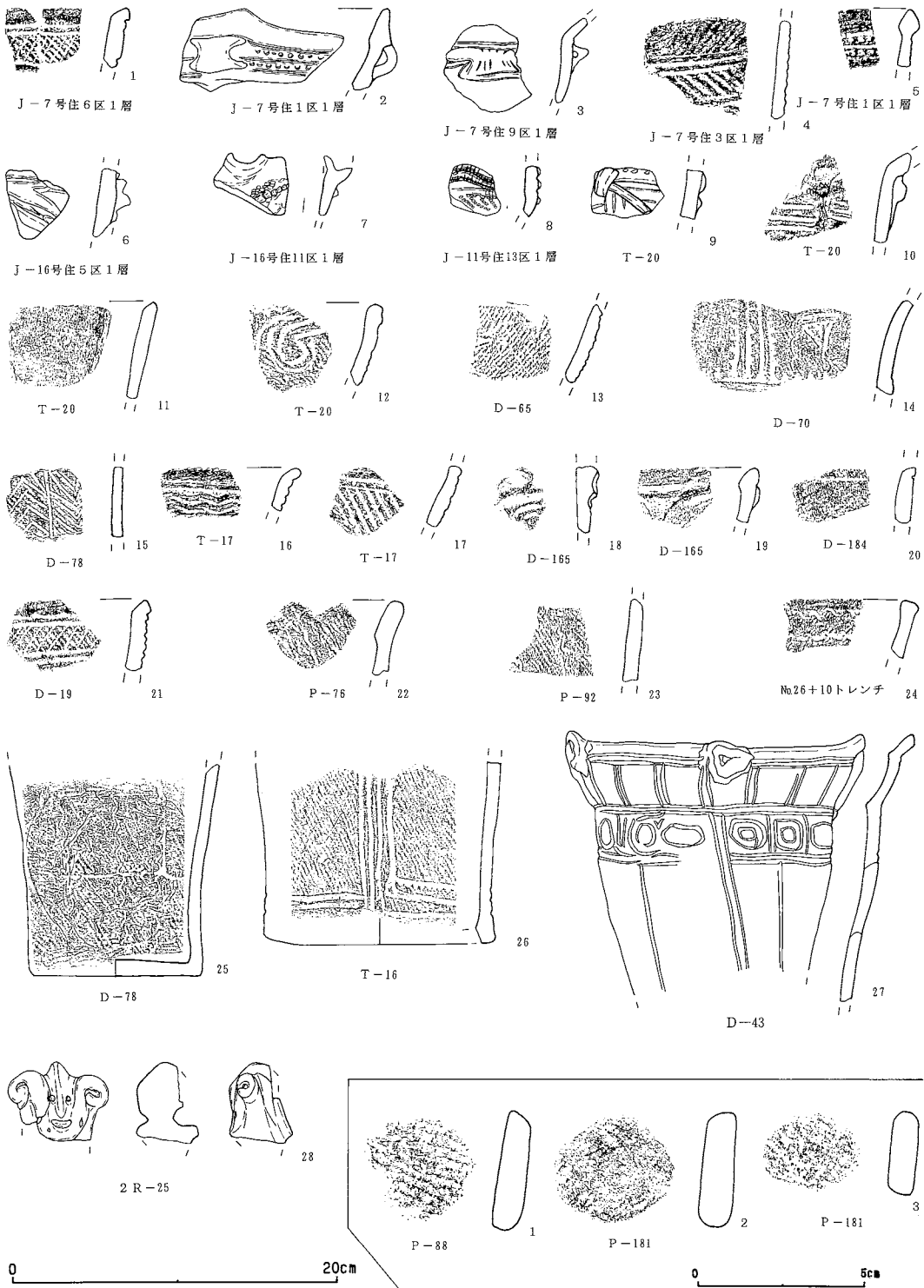
U-4号



埋設土器

U-3号

第92図 集石土壙・配石遺構出土の土器・埋設土器



第93図 中期の土器・土製製品

石器

【石器組成】 遺跡から出土した石器の種別組成と器種組成は第94図～第101図のとおりである。住居址は遺物出土状況の項で検討したとおり、最後には廃棄場所として利用されている。したがって、住居址出土の石器はその住居で使用された石器ではなく、そこへ石器を廃棄した別の住居(群)の住人たちの生業活動を反映していると考えられる。そこで、集落内での生業と廃棄に一定のパターンが存在するかどうか調べてみることにする。

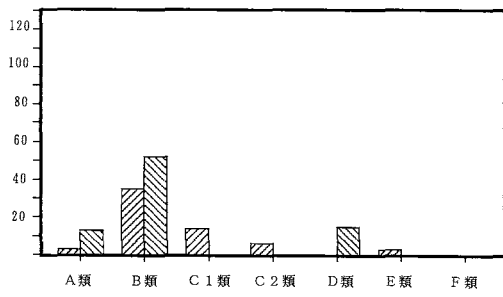
種別組成の各類の分類は分析方法の項で述べたとおりであり、参照してもらいたい。分析のひとつの側面として、種別組成ではA類・B類の石器(狭義)と剥片類の量比に着目した。石器が多いほど石器消費的活動が盛んであったことを示し(石器製作的パターン)、剥片類が多ければ石器製作的活動が活発であったことを示している(石器製作的パターン)。また、直接的生業活動に不可欠なA類・B類・C1類が山型を作る標準的生業パターンが存在することが理解される。そして、C2類～F類は特殊性を有する生業活動を反映し、住居によって異なった様相を示している。このような視点に立ち、若干の検討を加えてみたい。

住居址の石器組成

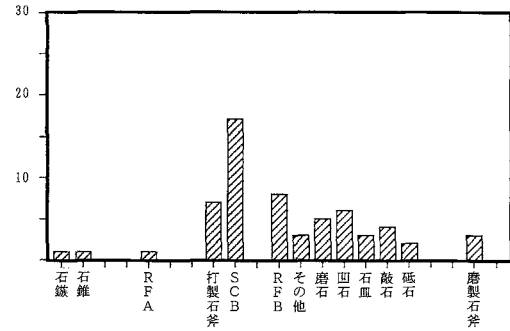
まず、第一に浅い住居址(J-13・14・16・20・21)では石器の数量が少なく、深い住居址(J-6・8・11・12)では多いといった傾向が認められる。これは、住居址に対しての廃棄行為の継続期間と関係があると推定される。廃棄行為は継続的に短期間で収束する場合と、土器型式の異なる程期間をおいて再三にわたり断続的に繰り返し行われる場合がある。

残念ながら、大部分の住居址は後者であり、時期の異なる石器が混在してしまっている。しかし、前者の場合廃棄行為が直接的に生業活動を反映している可能性が高いと推定され、同時期の一括遺物として重要な意味を持つ。こうした例としては、J-6・14・17号住居址がある。J-6号住居址は石器製作的パターンであり、標準的生業パターンの組成を持つ。詳しく器種組成をみると砥石が比較的多い傾向が認められるものの、きわめて標準的様相を示している。J-17号住居址はA類のみ石器製作的パターンを示し、標準的生業パターンである。石鏃が欠落する点、打製石斧が少ない点がやや特異である。これに対し、J-14号住居址ではB類・D類が石器消費的パターンを呈し、組成も特殊である。この住居址では巨大な台石(第129図1)が存在し、砥石が多いなど工具的石器が目立つ。このJ-14号住居址は位置・形態とも標準的ではなく、特殊な住居址であった可能性が高い。

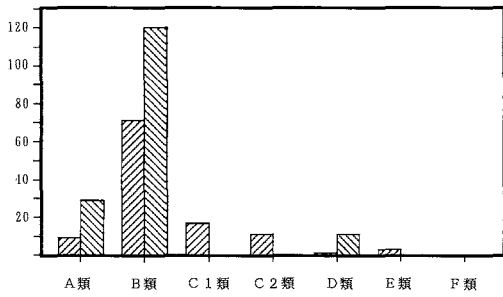
次に、継続的な利用が認められる住居址について、様相を概観してみたい。J-5・8・15号住居址ではA類・B類とも石器製作的パターンであるが、J-11号住居址ではA類のみが石器製作的活動パターンである。これに対し、顕著な石器消費的パターンを呈する例はJ-14号住居址のB類のみであり、J-12・13・18はA類では石器製作的パターン、B類では多少石器消費的パ



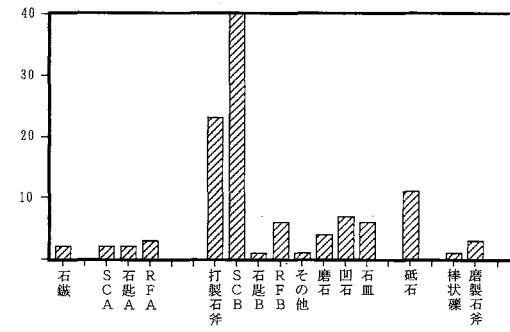
J 5号住居址種別組成



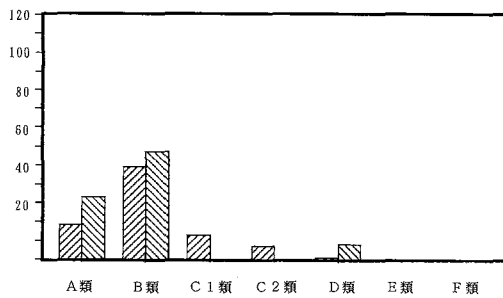
J 5号住居址器種組成



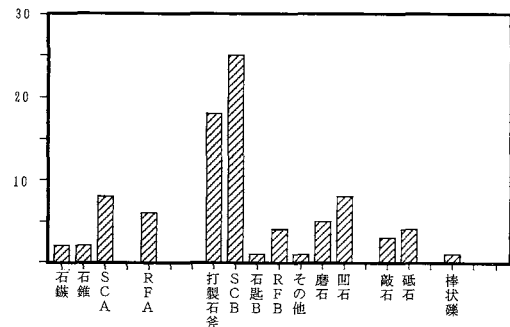
J 6号住居址種別組成



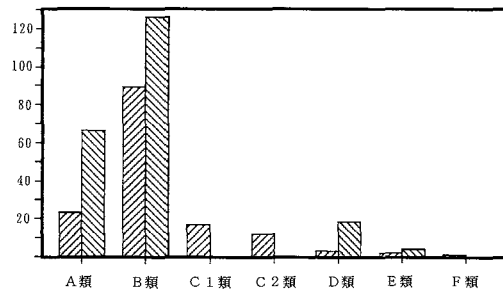
J 6号住居址器種組成



J 7号住居址種別組成

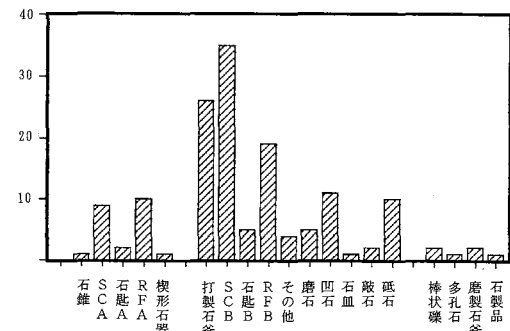


J 7号住居址器種組成



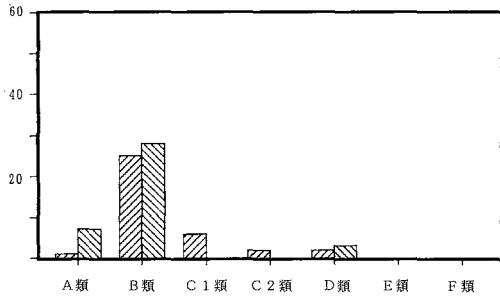
▨ 石器 ▨ 剥片・石核・原石

J 8号住居址種別組成

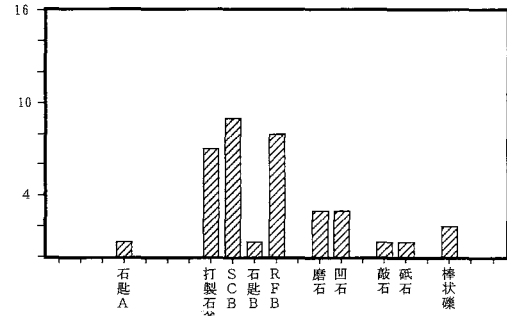


J 8号住居址器種組成

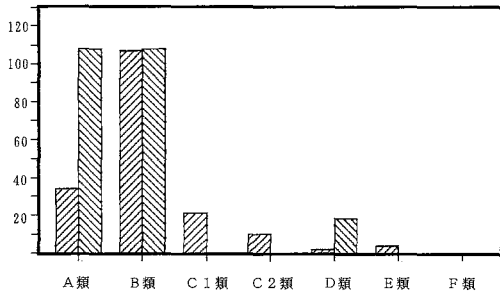
第94図 住居址石器種別・器種組成 (1)



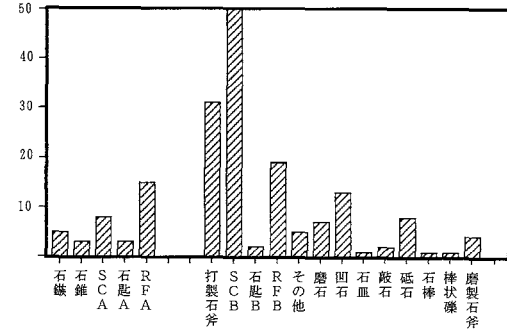
J 9号住居址種別組成



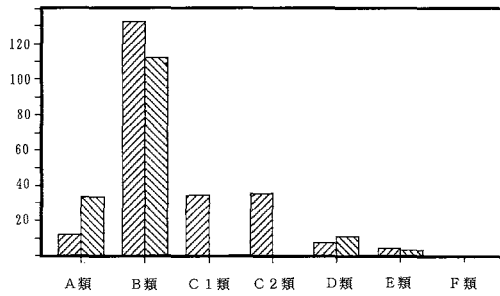
J 9号住居址器種組成



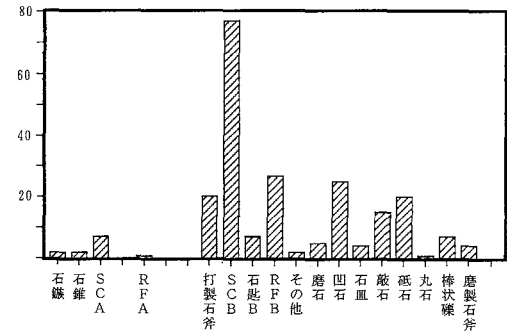
J 11号住居址種別組成



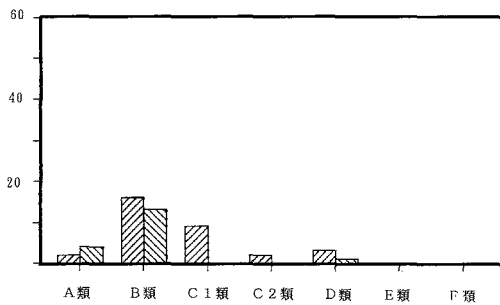
J 11号住居址器種組成



J 12号住居址種別組成

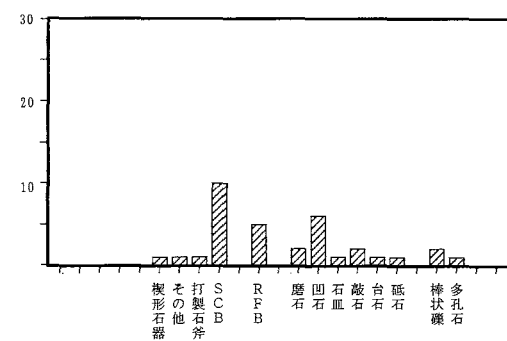


J 12号住居址器種組成



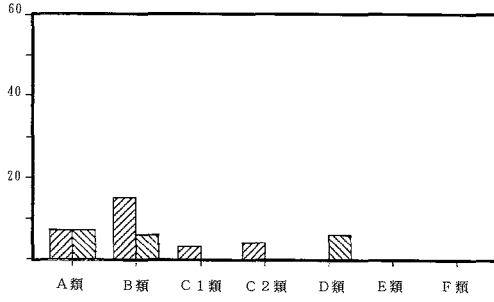
▨ 石器 ▨ 剥片・石核・原石

J 13号住居址種別組成

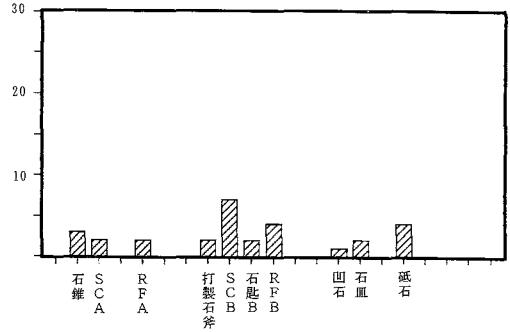


J 13号住居址器種組成

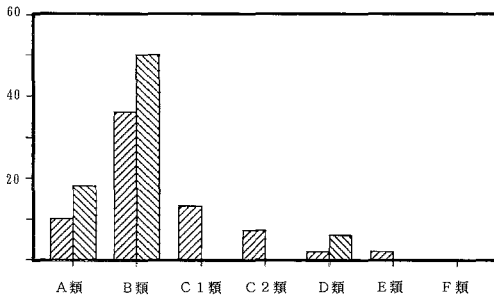
第95図 住居址石器種別・器種組成 (2)



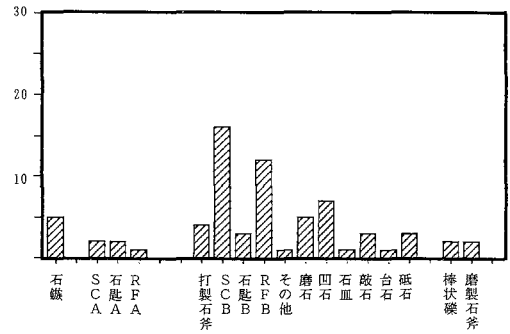
J14号住居址種別組成



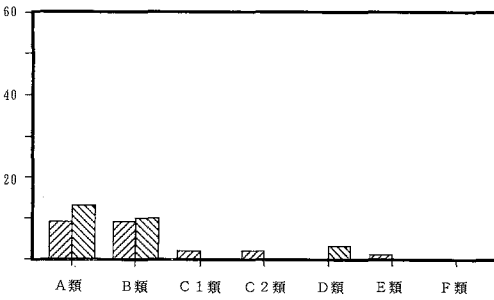
J14号住居址器種組成



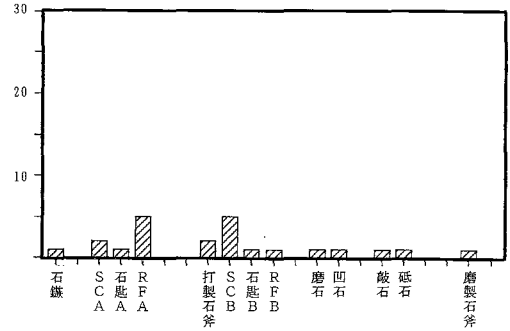
J15号住居址種別組成



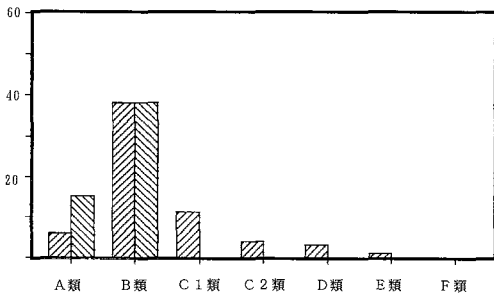
J15号住居址器種組成



J16号住居址種別組成

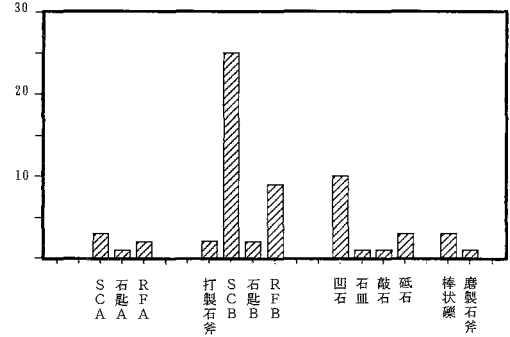


J16号住居址器種組成



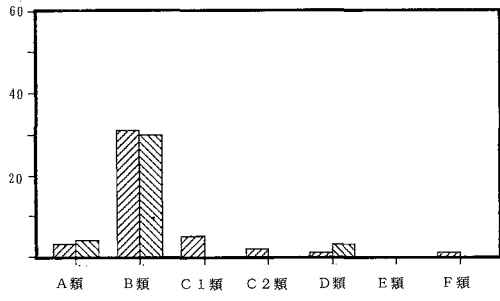
▨ 石器 ▨ 剥片・石核・原石

J17号住居址種別組成

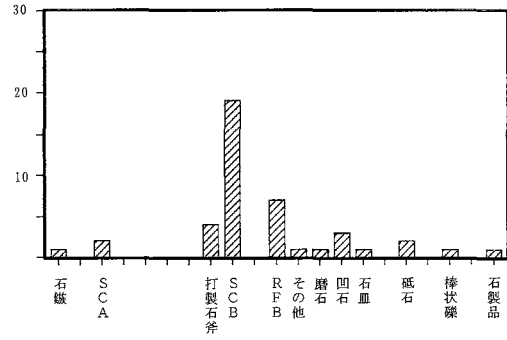


J17号住居址器種組成

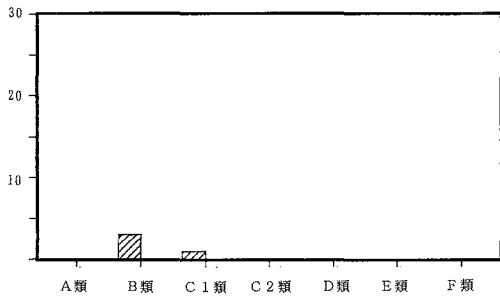
第96図 住居址石器種別・器種組成 (3)



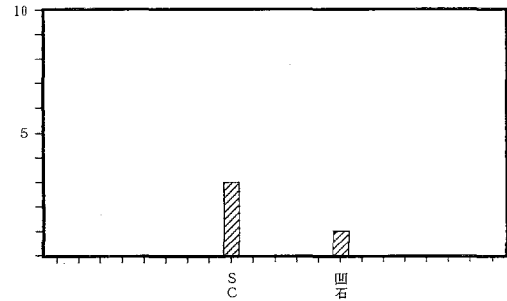
J18号住居址種別組成



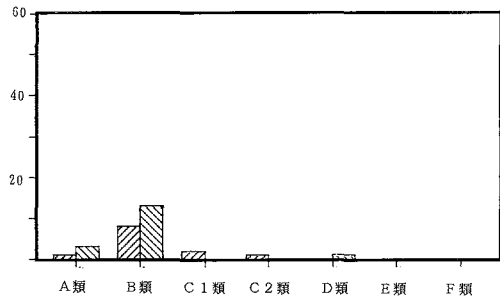
J18号住居址器種組成



J20号住居址種別組成

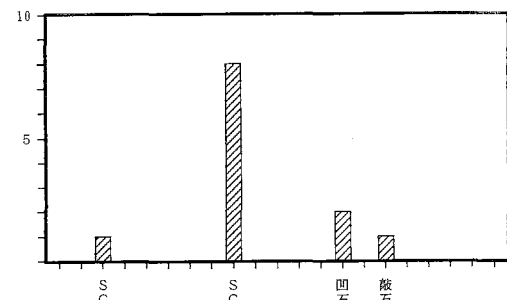


J20号住居址器種組成



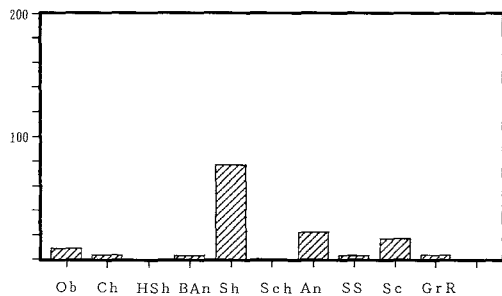
J21号住居址種別組成

□ 石器 ▨ 剥片・石核・原石

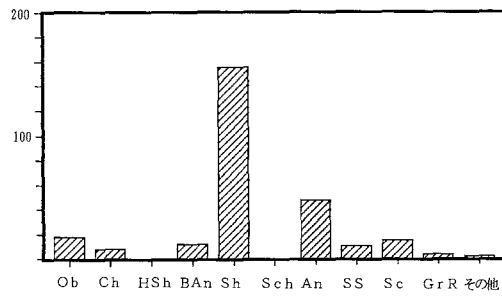


J21号住居址器種組成

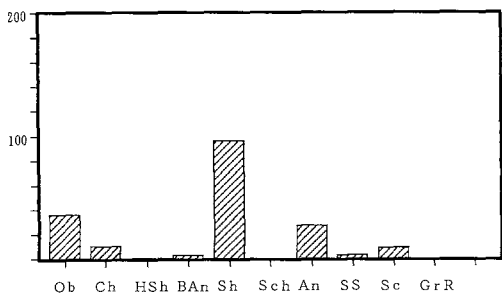
第97図 住居址石器種別・器種組成 (4)



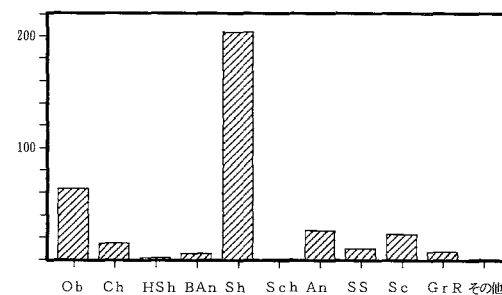
J 5号住居址石材組成



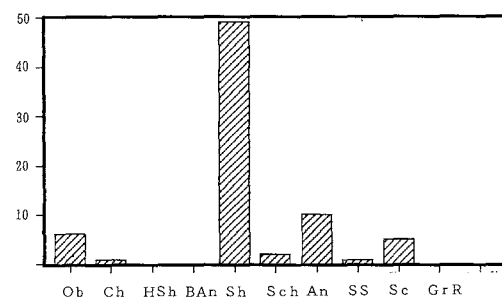
J 6号住居址石材組成



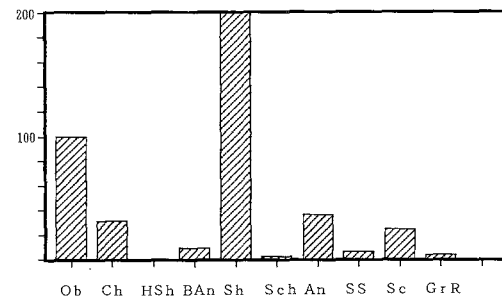
J 7号住居址石材組成



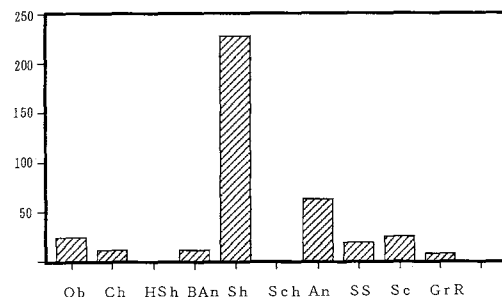
J 8号住居址石材組成



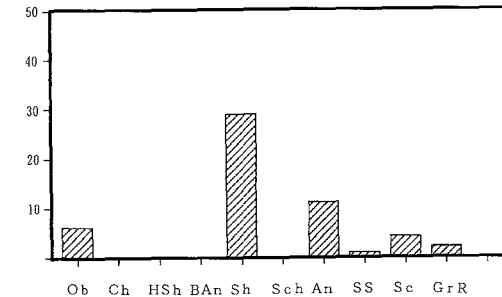
J 9号住居址石材組成



J 11号住居址石材組成

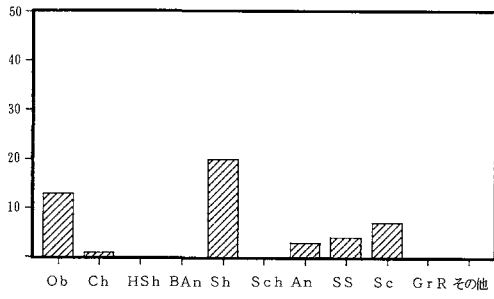


J 12号住居址石材組成

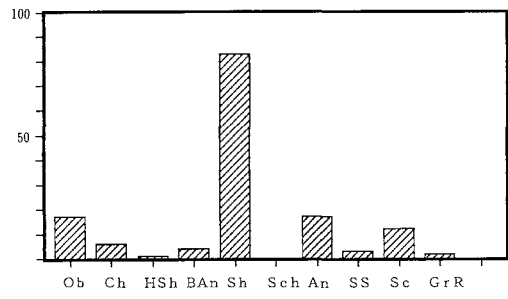


J 13号住居址石材組成

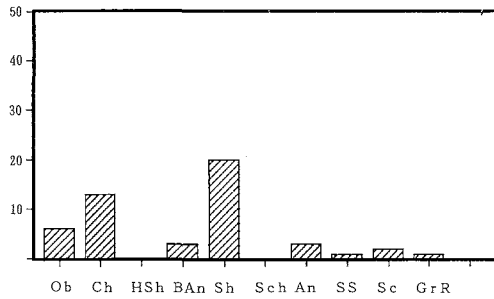
第98図 住居址石材組成 (1)



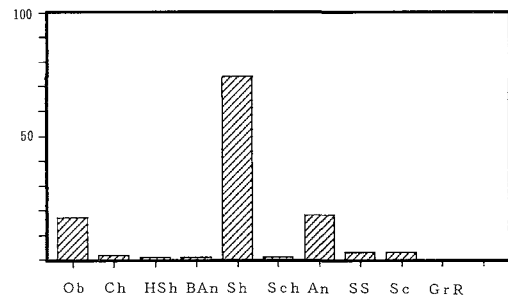
J14号住居址石材組成



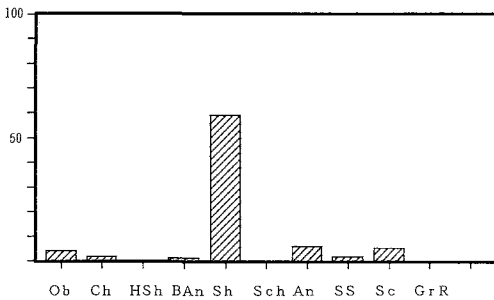
J15号住居址石材組成



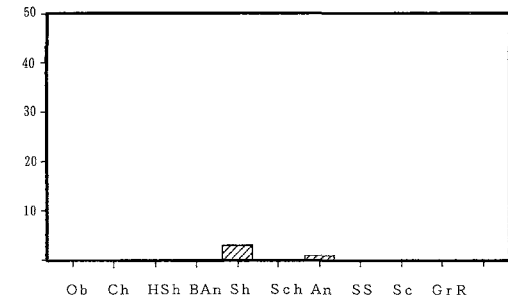
J16号住居址石材組成



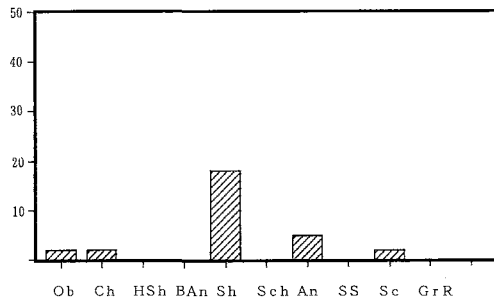
J17号住居址石材組成



J18号住居址石材組成



J20号住居址石材組成



J21号住居址石材組成

第99図 住居址石材組成 (2)

ターンを示している。この3軒の住居址は重複関係にあり、遺物の混在が類似した様相の要因の一つと推定される。しかし、J-12号住居址のみC2類の砥石・敲石が卓越しており、やや特異な生業パターンを示し、単純な遺物の混在ではないことが確認される。

器種組成の上では時期に関係なく、スクレイパーB類が非常に多い。打製石斧や凹石は住居址により量比に大きなばらつきがあり、特にJ-12・13・15・17・18号住居址では打製石斧が過小である。

また、B類石器全体として石器（狭義）と剥片・石核の比率をみた場合、剥片・石核の数量の割には石器の比率が全体的に高い傾向が認められる。これは、石器製作の全工程が遺跡（集落）内で行われていなかったことによる。すなわち、石器製作は通常集落に原石を搬入して行っていなかったものと推定される。

石材組成ではすべての住居址で頁岩が圧倒的に多い傾向を示す。頁岩は打製石斧・スクレイパーB類等のB類石器の主要素材である。

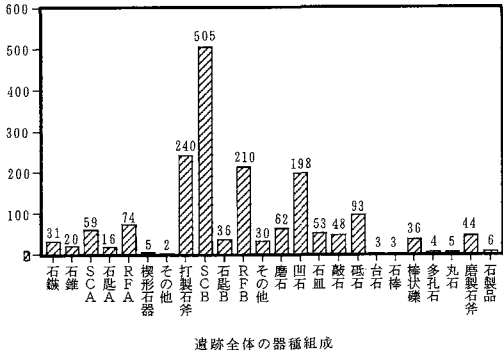
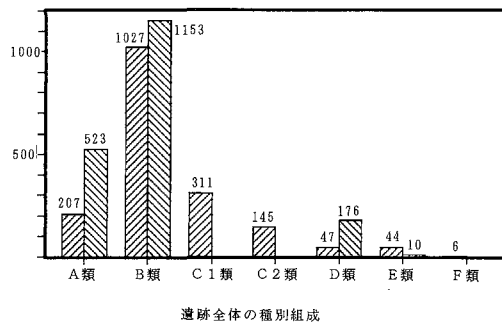
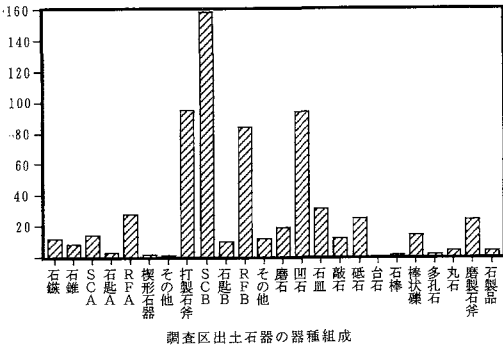
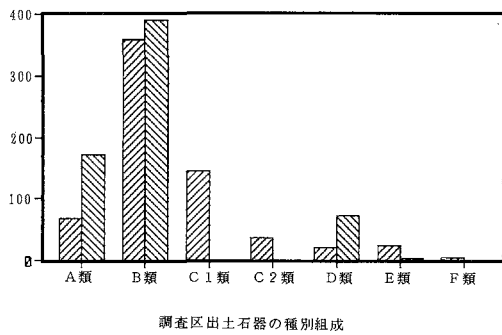
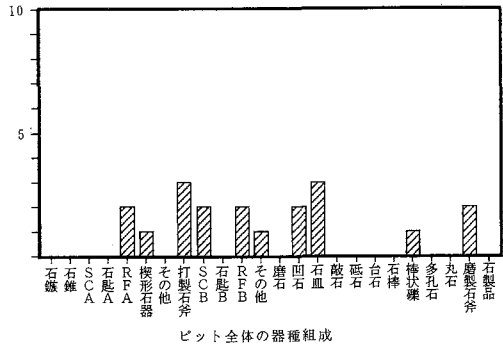
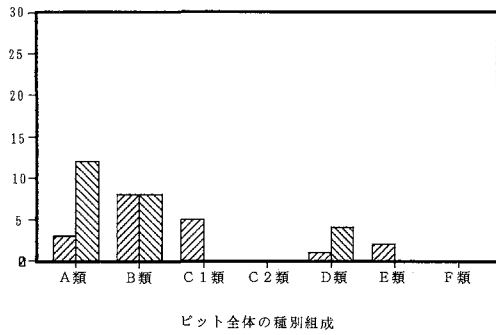
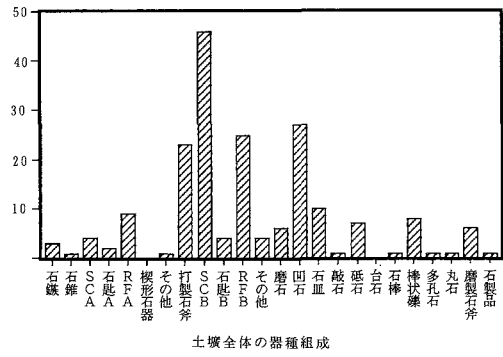
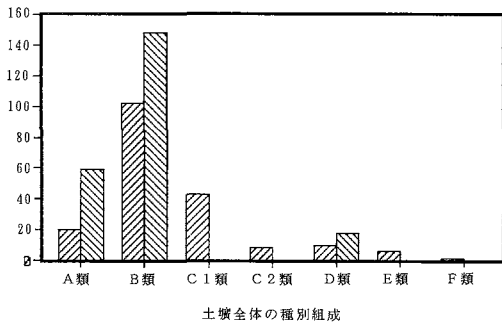
また、石鏃の主要素材である黒曜石はほとんどの住居址から検出されているが、多い住居址と少ないものがある。J-8・11号住居址は非常に多いが、J-5・6・9・12・18号住居址では少ない。多くの黒曜石が検出される住居址は石器製作的活動パターンを呈し、石鏃の製作が盛んに行われたことが窺える。また、大部分の住居址では、I類石材の中で黒曜石が多く、チャートが少量である。これはI類石材が多用されるA類石器における傾向と同じである。しかし、J-16号住居址ではチャートが黒曜石よりもかなり多く、全く違う傾向を示している。これは、黒曜石の欠乏により、代用石材であるチャートが使用されたことによると考えられる。

安山岩の比率は個数ではそれほど多くないが、重量でみた場合は最も大きな値となる。また、砥石の主要素材である牛伏砂岩や、石皿・棒状礫の主要素材である結晶片岩は量はさほど多くないものの、ほとんどの住居址から出土しており、生活に不可欠な石材であったと判断される。磨製石斧の主要素材である緑色岩類は過半数の住居址から少量出土しており、恒常的に多くは必要としない石材であることが窺える。

土壌・ピットの石器組成

土壌の石器組成は第100図に示されるように住居址と同じ標準的生業パターンであり、本遺跡の住居址では多数を占める石器製作的パターンを呈する。しかし、「墓壇」と推定される土壌では少量の遺物が検出されるのみであり、こうした状態は組成上にはほとんど反映されない。したがって、多量の遺物が検出されるパターンの廃棄行為が行われたと判断される土壌の組成が直接土壌群全体の組成に表れていると考えられる。

土壌の石材組成は第101図のとおりであり、基本的には住居址の組成とほぼ同じ傾向を示すが、チャートや黒色安山岩が全く存在しない点が異なる。一方、ピットの石材組成では、黒曜石が多



▨ 石器 ▨ 剥片・石核等

第100図 遺跡石器種別・器種組成

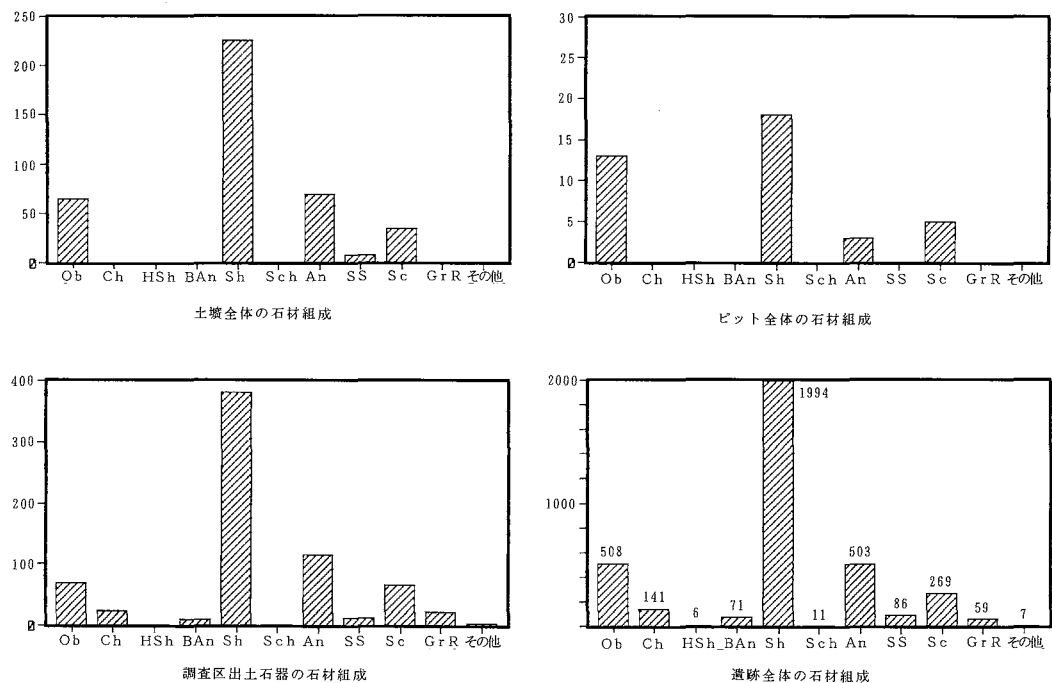
い傾向を示している。これは小さな黒曜石製の剥片が混入することが多かったことによると考えられる。

調査区の石器組成

調査区出土石器の組成は第100図のように示され、住居址最上層の遺物も多く含まれている。したがって、住居址の組成や土壌全体の組成に近似した様相を呈している。種別組成では標準的生業パターンを示す。この中で特徴と言える点は凹石と磨製石斧が比較的多いことである。特に磨製石斧は詳しくみると住居址覆土最上層に該当する位置から出土しており、住居址の場合でも上層から出土する例が多い。これは遺物廃棄行為の最後の段階で磨製石斧が廃棄されることが多かったことを示している。すなわち、集落を放棄する段階で欠損等により不用になった磨製石斧は廃棄されていったものと考えられる。

遺跡全体の石器組成

遺跡全体の石器組成は第100図のように示される。全体では約3,650点と膨大な量の石器が出土している。狭義の石器だけでも約1,790点を数える。これらの石器のほとんどは前期中葉～後葉の段階に属するものであり、この段階の本遺跡で行われた生業を直接的に反映した石器組成である。全体の組成では標準的生業パターンを呈する。個別にみると、A類では石器制作的活動パターンが看取され、B類では僅かながら石器制作的活動パターンを示す。この状態は住居址、土壌、調査区ともほぼ同じであり、全体でも個々の住居址でも石器組成上は大きな違いが認められないこ



第101図 遺跡石器・石材組成

とが明かとなった。このように、どの部分の組成もほぼ同じ傾向を示すのは、この遺跡で繰り返し同じ活動が行われたことにより、全体の組成が均質化したものと考えられる。

全体の石材組成は住居址の組成と同じ傾向を示しており、すでに住居址のところで述べているのでここでは省略する。その他の石材とした少量存在する石材としては、メノウ、軽石などがある。

【石鏃】（第102図） 凹基無形鏃（I形態）と平基無形鏃（II形態）が存在する。数量的にはI形態が圧倒的に多く、II形態は少ない。また、I形態では黒曜石の占有率が高いのに対し、II形態はすべてチャート製である。

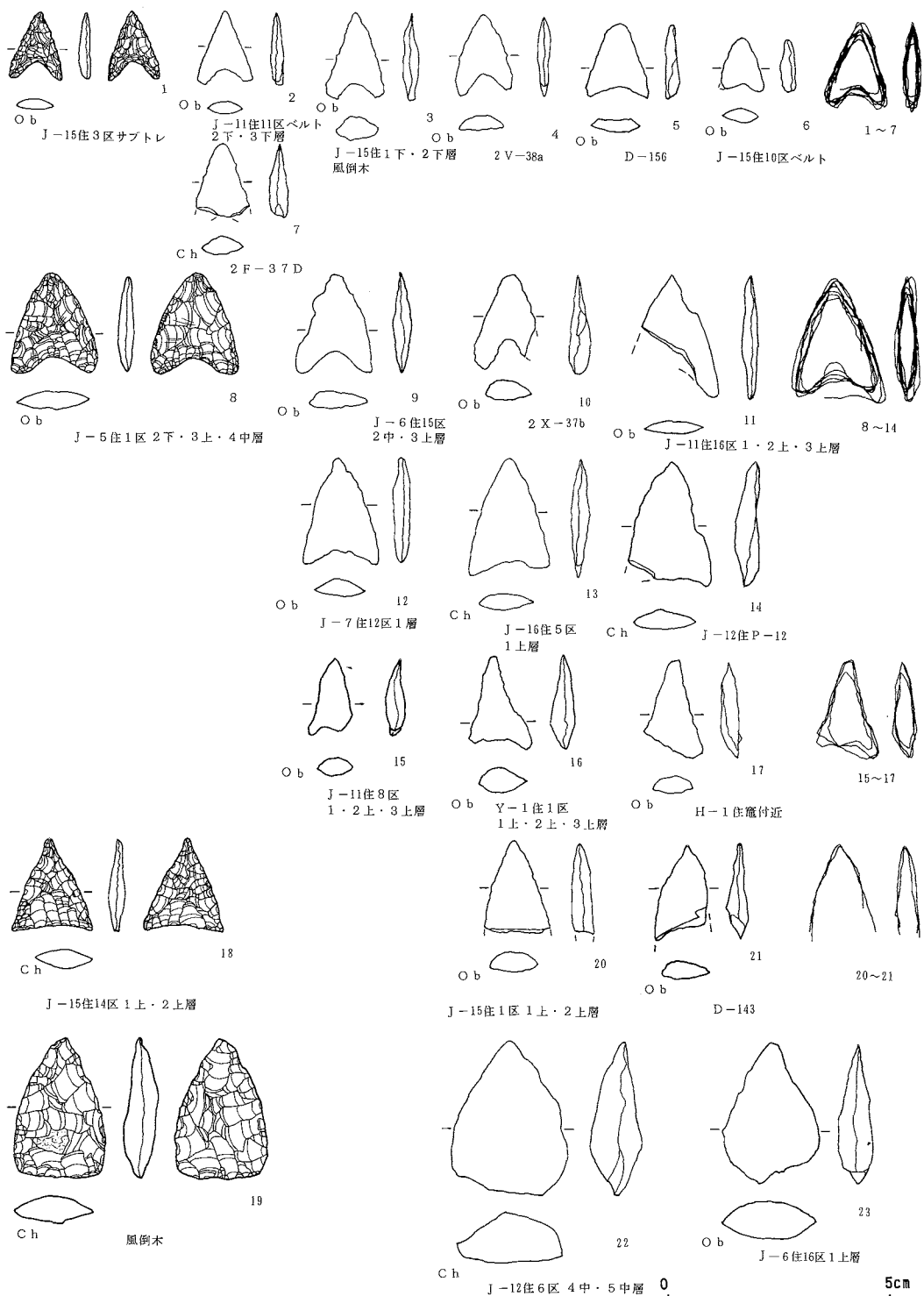
I形態では小形（1～7）、大形（8～14）、方脚（15～17）の3群に分類できる。小形のものは強い範型を有しているが、大形では範型が弱く、さらにいくつかの小群に細分可能である。また、方脚のものも比較的強い範型を有しているようである。それ以外の形態については、個数が少ないので範型の強度は判然としない。

石鏃未成品は大形で剥片剥離工程の途中で放棄されたもの（22・23）と、形状のはっきりしない小形のものが存在し、今回図示しなかったが、小形のものが多い。未成品8点で石鏃と比較して、それほど多くない。

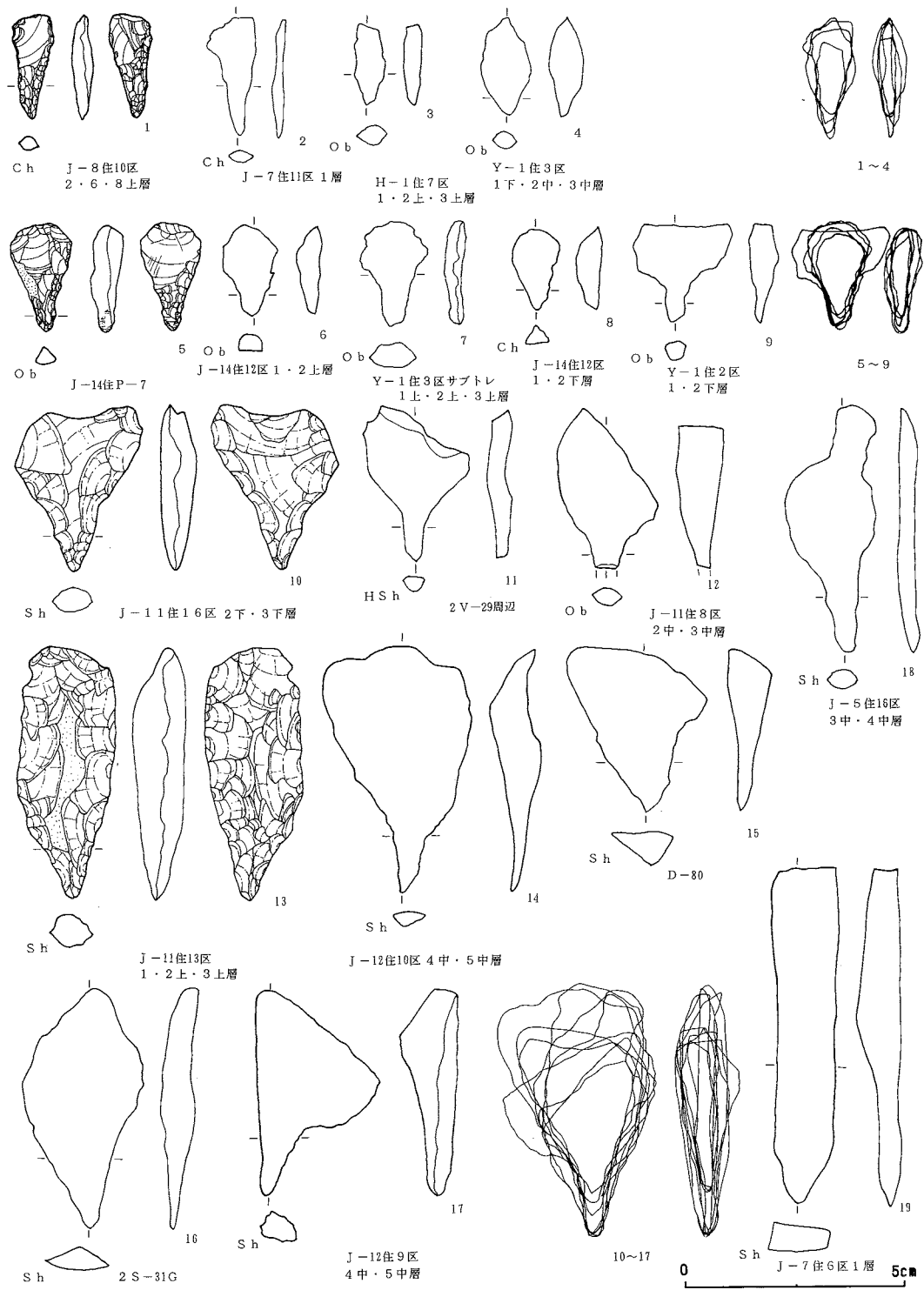
【石錐】（第103図） 小形で摘みのないI a形態（1～4）、小形で摘みのあるII a形態（5～9）、大形で摘みのあるII b形態（10～18）、錐部のみを先端に作出したII c形態（19）に分類することができる。錐部II a形態は比較的強い範型を有しているが、他の形態の範型は弱い。石錐は錐部の太さに第一義的意味を有している器種であるので、平面形状での形態分類はあまり有効ではないようである。

小形のI a形態・II a形態では黒曜石・チャート多用されるのに対し、II b形態では頁岩が多用され、大きさによる石材の選択性が認められる。また、機能部位の太さもI a形態・II a形態はほぼ同じであることから、摘みの有無に関わらず類似した用途に用いられた可能性が高い。

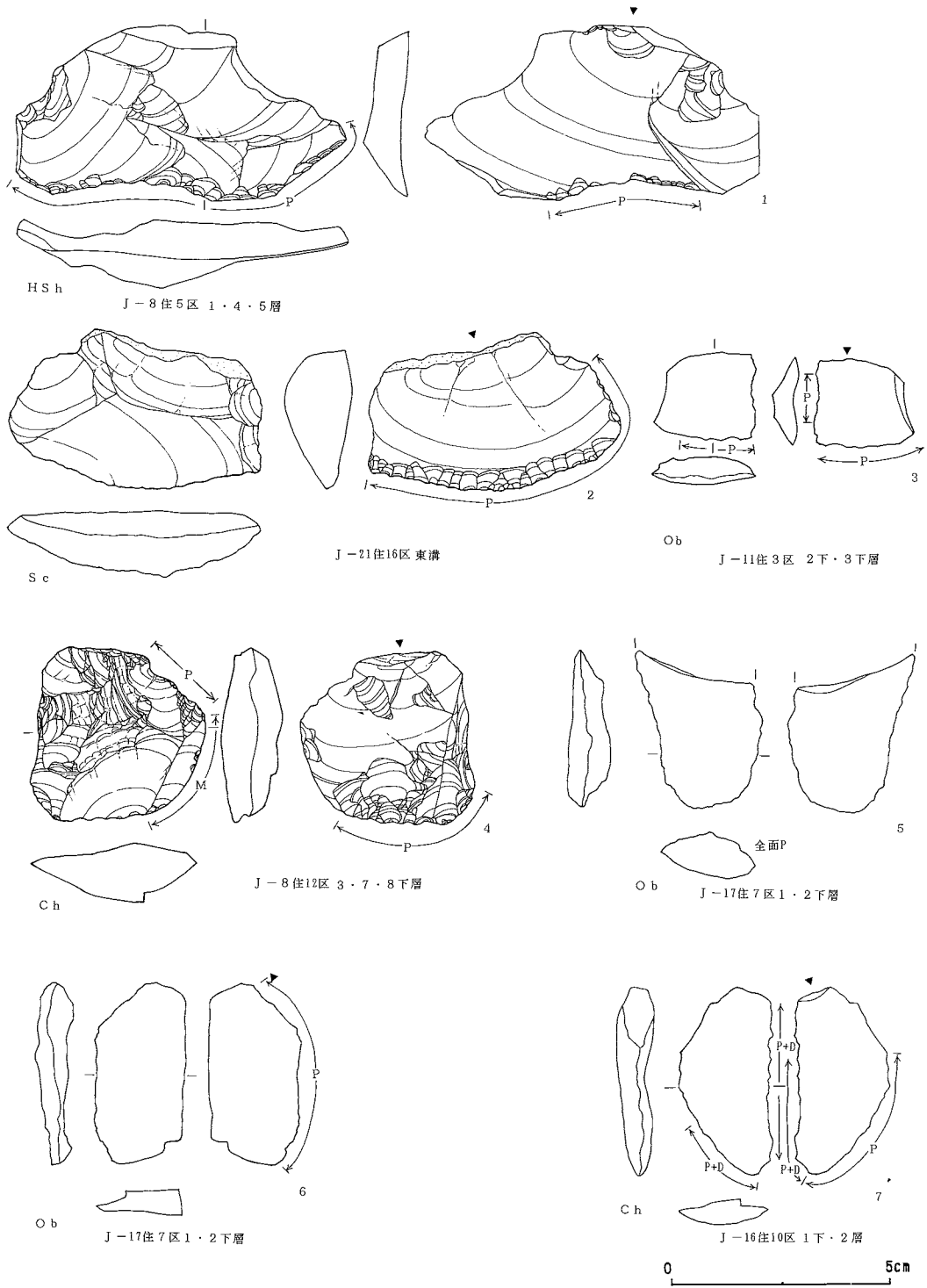
【スクレイパーA類】（第104図・第105図1～9） この器種は石鏃・石錐・石匙A類と石材を共用するものであり、61点検出された。形態分類は第3表（P.12）のとおりである。第106図のように、長幅比1：1を中心にかなりバラつきがあるが、5 cm以上の大形のものと、5 cm以下の小形のものに分かれる。また、形態別に傾向をみると、小形の中でIII形態は最も小さく2～3 cmにややまとまる。これに対し、I a・I b形態はそれよりもやや大きく3～4 cmの範囲にまとまる。また、大形ではII・III形態が多い。そして、石材を検討すると、小形のIII形態では黒曜石が圧倒



第102図 石鋸実測図



第103図 石錐実測図



第104図 スクレイパーA類実測図

的に多く、大形のII・III形態では黒色安山岩が多い。これらの石材はそれぞれ石鏃と石匙A類の素材と共通するものである。

また、小形でも2cm以下の例は全く存在せず、この大きさの剥片は石鏃の素材として最適であり、スクレイパーが製作される前に消費し尽くされてしまっていたことが推察される。以上のことから、小形のI a・I b・III形態は石鏃製作の余りを利用して作られたものの可能性が高い。また、大形のII・III形態（一部I a形態を含む）は石匙A類の素材と共通したものの中から作られたものと考えられる。

以下、各形態の特徴について述べる。

I a形態（第104図1～6） 押圧剥離により

調整が施されたものであり、比較的大形のもの（1・2）は横長剥片を素材とすること、チャートや硬質頁岩を利用すること、刃部の位置など、石匙A類との類似性が強い。また、比較的小形のものには黒曜石を素材とするものが多く、石鏃との関連性が強い。

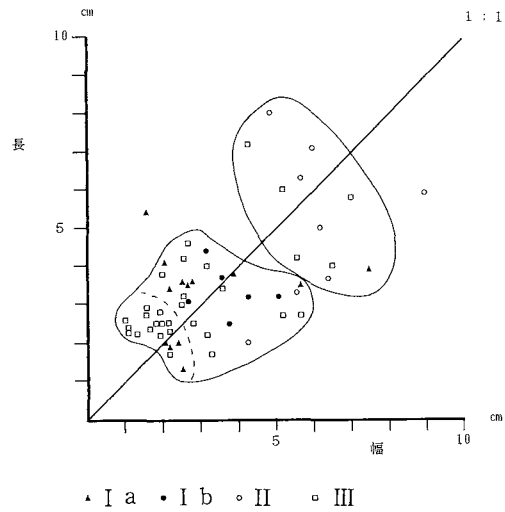
I b形態（第104図7・第105図8） この形態はすべて小形であり、チャートと黒色安山岩のみで、黒曜石は全く使用されていない。

II形態（第105図7・9） すべて黒色安山岩製であり、大形のものが圧倒的に多い形態である。石匙と素材剥片に共通性が認められる。

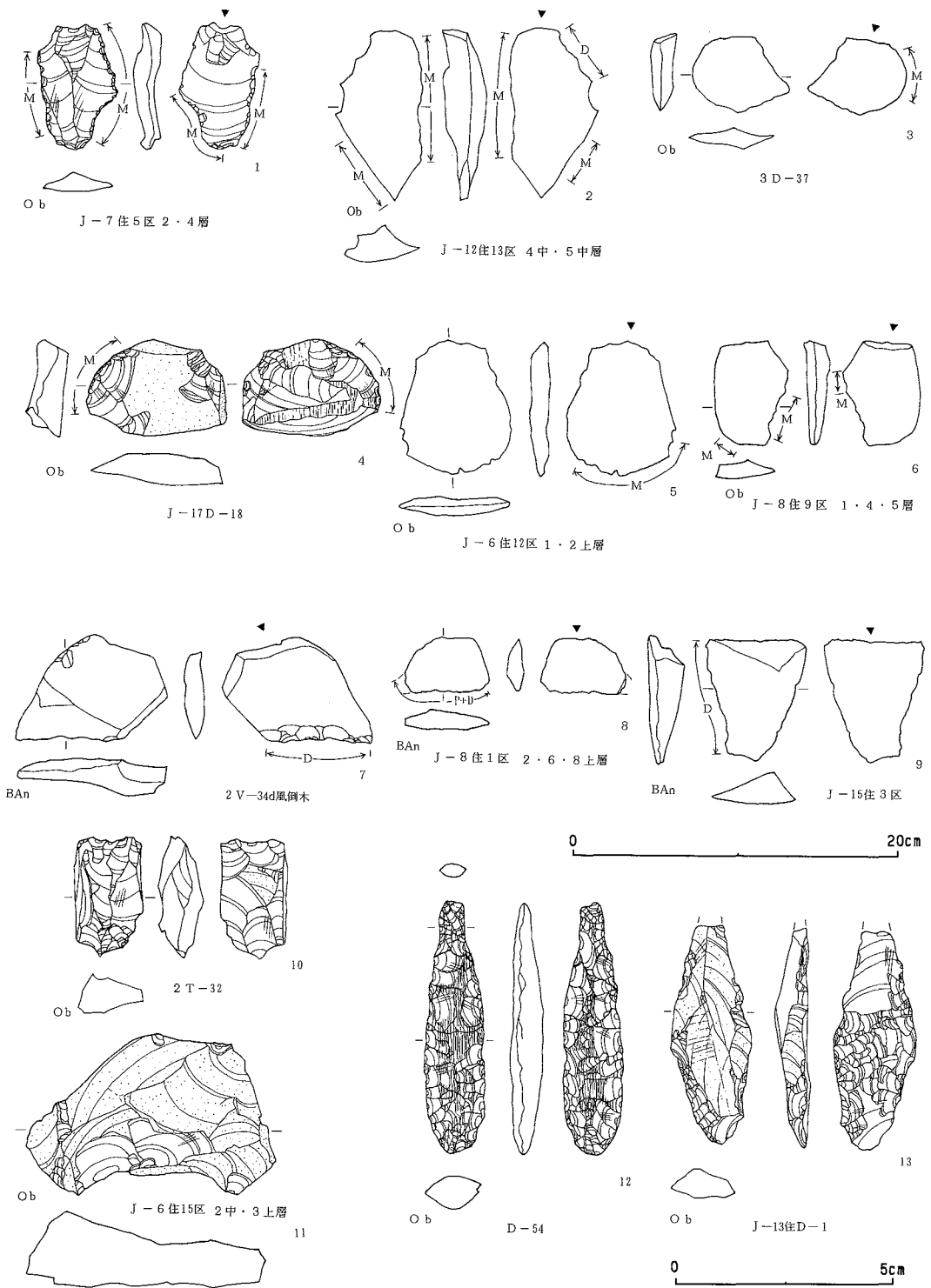
III形態（第105図1～6） この形態は意図的に刃部を作出したものではなく、使用により刃こぼれしたと推定されるものが多い。小形と大形に二分される傾向がある。小形（1～6）では黒曜石・チャート製のものが多い。大形では黒色安山岩製のものが多い。

【リタッチド・フレイクA類】 報告書では図示しなかったが、形状はスクレイパーに比べて不定形のものが多い。全部で74点検出された。スクレイパーA類III形態と同じように、刃こぼれが生じたものが大部分である。石材は黒曜石71.6%、チャート21.6%、黒色安山岩5.4%であり、黒曜石が大きな割合を占めている。この傾向もスクレイパーA類と同様である。

【楔形石器】（第105図10） 5点検出されているのみであり、数量的にも少ない。



第106図 スクレイパーA類の長幅比



第105図 スクレイパーA類・楔形石器等実測図

【黒曜石原石】(第105図11) 黒曜石原石は8点検出された。11は最も大きな例であり、27gであり、石鏃の素材剥片を剥離することが可能である。しかし、それ以外のものは10.3~2.1gであり、困難である。また、形状を観察すると、すべて角礫状で表面は風化した剥離面であり、転石は存在しない。したがって、原産地露頭近辺で採集されたものである可能性が高い。

【旧石器再利用品】(第105図12・13) 12は黒曜石製の槍先形尖頭器の先端に再加工を施し、摘み部を作出した小形石器である。摘み部のみ剥離面が新しく、風化度合いが異なる。また、器面全体を研磨している。この石器は墓壙と推定される土壙中から検出されたもので、最終的には副葬品として用いられたとみられる。同様のものは中野谷松原遺跡において、やはり土壙墓から検出されており、当期の特徴とみられる。

13はナイフ形石器と推定される。剥離面は全体に風化しており、稜や縁辺には微細な剥離が認められる。また、先端部は欠損している。黒曜石製である。土壙中から有尾期の遺物と一緒に検出された。

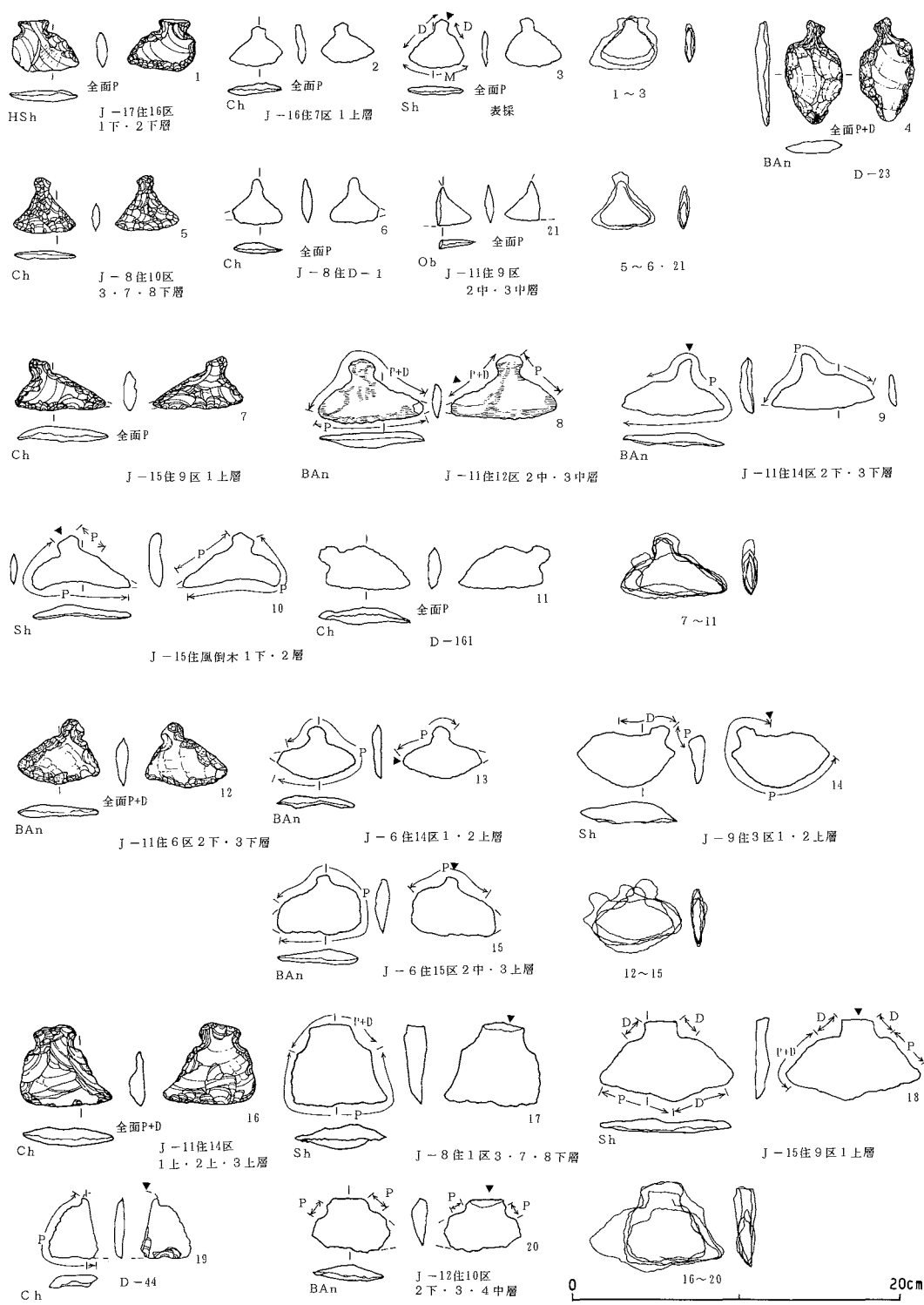
前期後半段階に、旧石器を再利用したとみられる黒曜石製の石器は本遺跡以外でも北東・堤下遺跡、中野谷松原遺跡において検出されている。しかし、いずれの遺跡でも下部に旧石器時代の遺跡の存在した可能性は少ない。また、これらの石器は古い風化面を残している点で共通しており、黒曜石の入手に際し、長野方面から搬入された可能性がある。このような現象は現在のところ前期後半に限られており、黒曜石入手に関わる時期的様相と推定される。

【石槍】(第122図10) この石器は旧石器時代の三稜尖頭器に類似した槍先状を呈する石器であり、とりあえず石槍とした。1点検出されたのみなので本来的な石槍かどうかははっきりしない。頁岩製である。

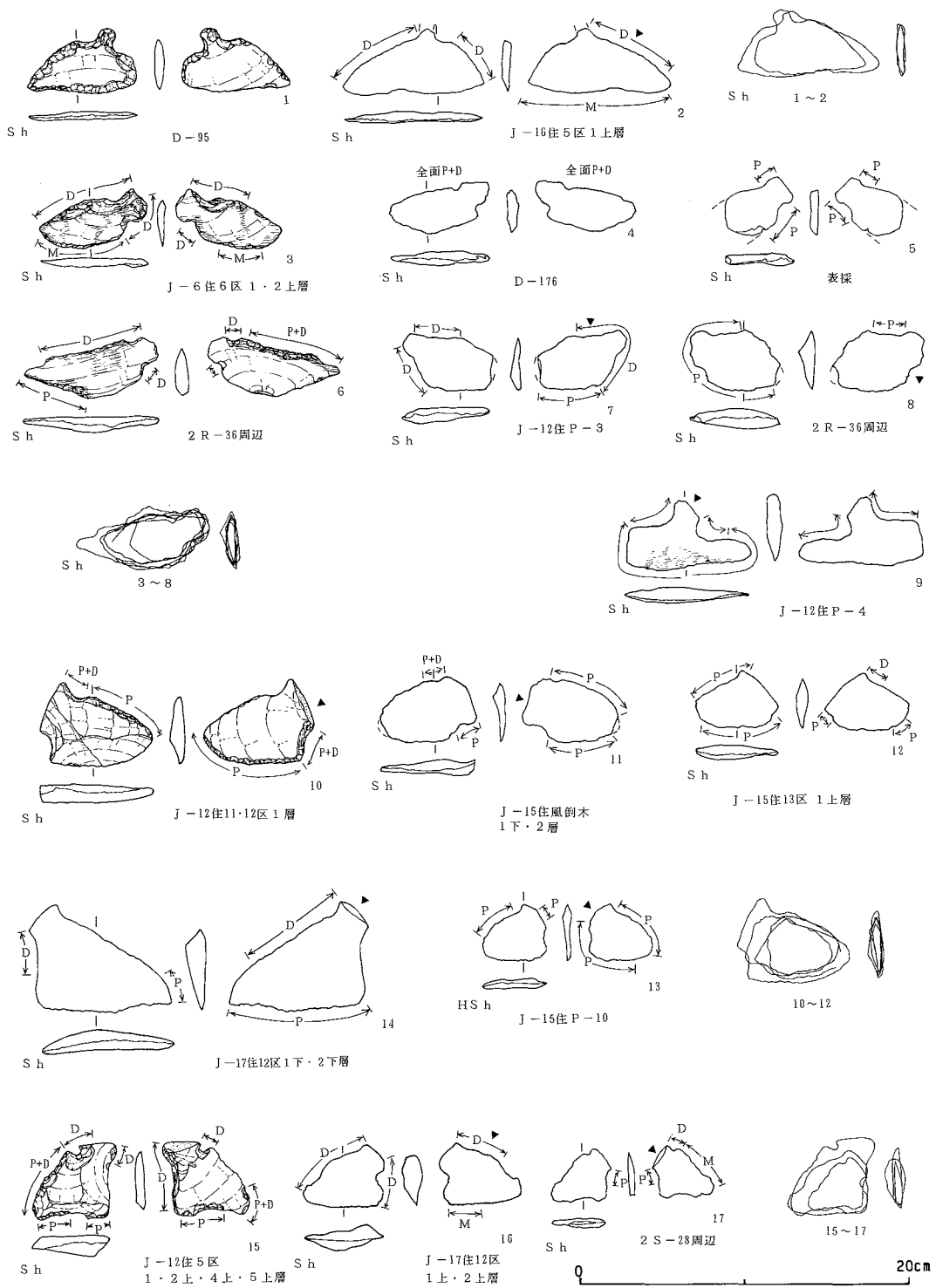
【石匙A類・B類】(第107図~第109図) 石匙という呼称は古くから用いられているが、共通点は摘み部が作出されていることであり、形態・大きさ・刃部などは個体により、著しく個となっている。このように「石匙」は別々の機能・用途を持った複数の器種を包括的に扱った用語であり、多くの矛盾を抱えており、むしろ「摘み付きスクレイパー」とでも呼称した方が良いと考えられる。

ここでは、スクレイパーの分類規準を準用し、押圧剥離により摘み部が作出されているか否か、硬質で粘度の少ない石材が用いられているか否かにより、A類とB類に大別することにした。

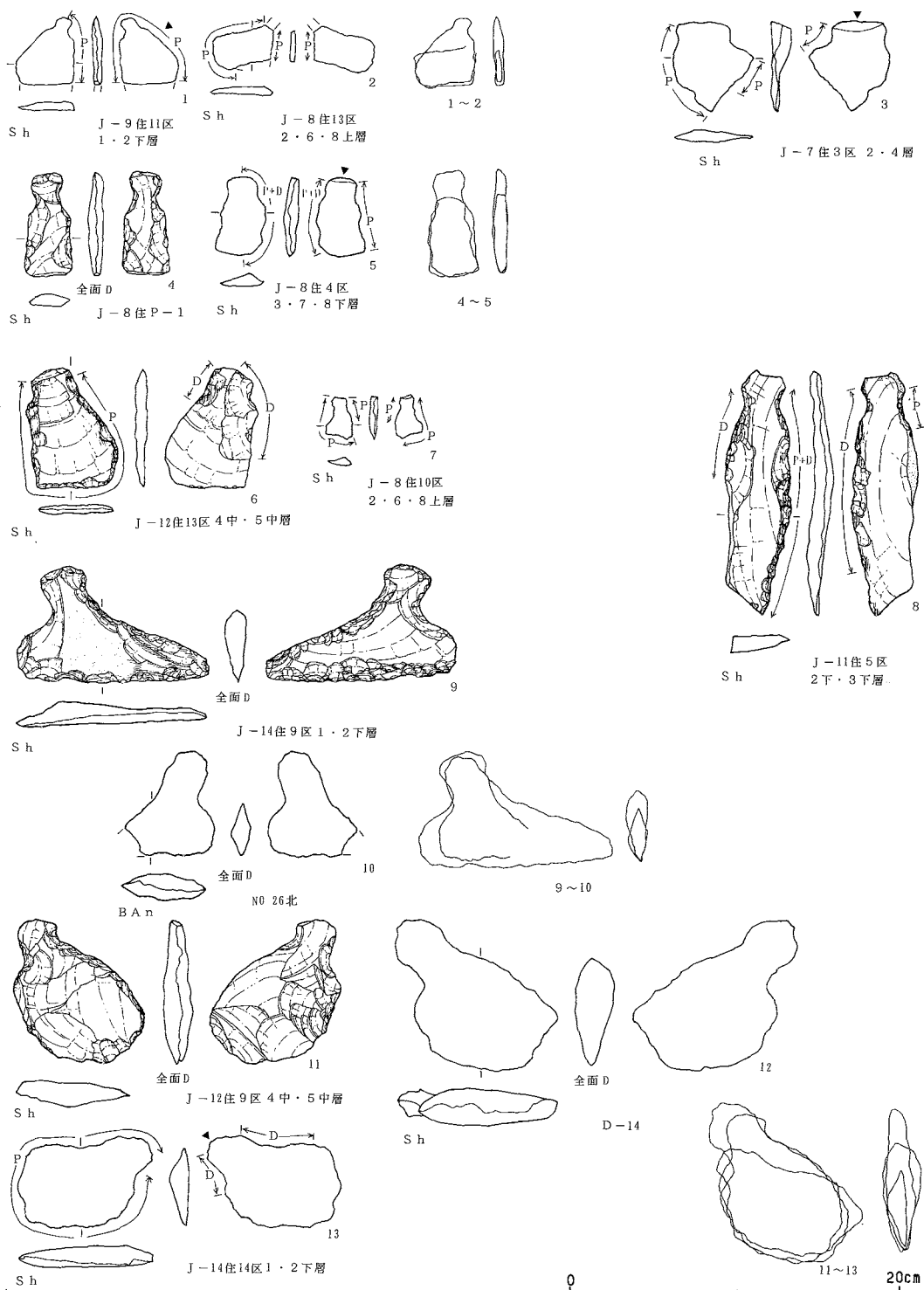
石匙A類は押圧剥離により摘み部が作出されてのものであり、原則として硬質で粘度の少ない石



第107図 石匙A類・石匙B類実測図



第108图 石匙B類実測图(2)



第109图 石匙B類実測图(3)

材が用いられているものとした。これに対し、石匙B類は直接打撃により簡単な摘み部を作出したものとした。

石匙A類

15点検出されたが、4を除きすべてII a形態である。4も典型的なI aとはいえない。II a形態では、少なくとも4種類の範型が認められる。a(第107図1～3)、b(5・6)、c(7～11)、d(12～15)である。この中で範型a・bはチャートが多く用いられ、黒色安山岩は全く用いられないのに対し、範型c・dでは黒色安山岩が多用される傾向が強い。

範型a・bは範型が比較的強く、特にbは画一的である。また、範型cは11を除き画一性が強く、8では使用による擦痕が認められる。範型dは緩やかなまとまりであり、雑多な形状のものを一括した感が強い。複数の範型が含まれている可能性が高い。

石匙B類

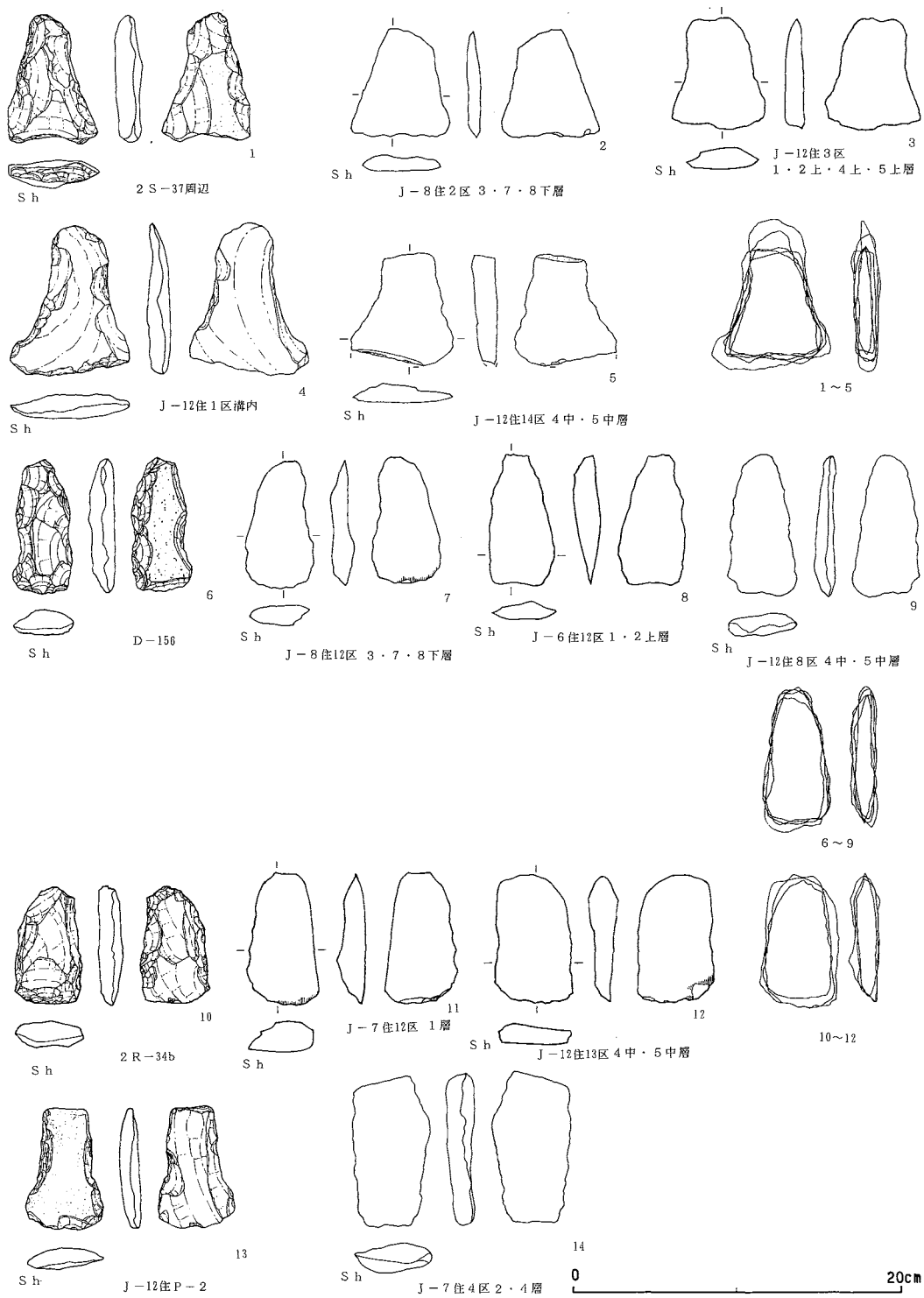
36点検出されており、少なくとも9種類の範型が認められる。また、それ以外にも単独の形のものはいくつかの存在しているので、さらに多くの範型が存在すると推定される。縦形のI a形態は範型k(同4・5)、第109図3・6～8と少ない。横形のII a形態は範型e(第107図16～20)、f(第108図1・2)、g(同3～8)、h(同10～13)、i(同15～17)、j(第109図1・2)であり、最多である。大形のII b形態は範型l(同9・10)、m(同11～13)がある。この形態は打製石斧と技法上の共通性が認められ、他の石匙とは全く異なった機能・用途が考えられる。

範型f・g・l・mは形状と大きさの両方で強い規制が存在している。そして、範型gでは刃部磨痕を有する例も2例認められ、機能・用途面での親和性がある。しかし、範型e・h・iは形状は同じでも大きさは多少異なる。

また、石材をみると、大部分頁岩製であり、打製石斧やスクレイパーB類と共通している。ただし、範型eではチャート・黒色安山岩が多用されており、他の範型とは差異が認められる。この傾向は石匙A類に連なるものであり、石匙B類との中間的な範型とみなすことが可能である。

【打製石斧】(第110図～第115図) 直接打撃により作出された斧形の形状を呈した石器である。この器種には、実際に木材などを切る「斧」と、土を掘る「土掘具」が含まれている。縄文時代前期では「斧」的機能を有するものも安定して存在することが認知されている。

従来、打製石斧については、その最終形状から短冊形、撥形、分銅形の3形態に分類される。だが、実際には分銅形は後期の特徴として検出されることが多く、前期を主体とする本遺跡からは、短冊形と撥形の2形態が多く認められる。そこで、形状からだけでなく、大きさや調整の方法をも含めた上で、前期に特徴的な小形の撥形で、急角度調整・方刃の「斧」的なものをI形態、短冊形や撥形でも両面調整により、両刃の「土掘具」的なものをII形態として大別した。さ



第111图 打製石斧実測图(2)

らに、細部の違いにより I 形態 8 種類、II 形態 9 種類に細分した。また、これ以外にもどの分類にも該当しない個体もいくつか存在し、さらに多くの形態が認められる。以下、代表的な形態の諸特徴について述べることにする。

I a 形態 (第110図 1～8) 撥形で直刃片刃を呈し、刃部角は急角度である。刃部の裏面側に使用痕と推定される小剥離が認められる。同一の形状を意識して製作されていると考えられ、この形態は形態ではバラつきがあるが、調整方法と刃部形状では強い斉一性が認められる。こうした点に規制が働いた範型が存在している。14点と I 形態では最多であり、すべて頁岩製である。

I b 形態 (第110図 9・10) 円刃で刃部角が急角度であり、まるで円形搔器の刃部のようなものである。刃部裏面に小剥離痕が認められるものもある。この形態はスクレイパー B 類 I a 形態の搔器と刃部に共通性が認められる。図示した 2 点のみで、頁岩製である。

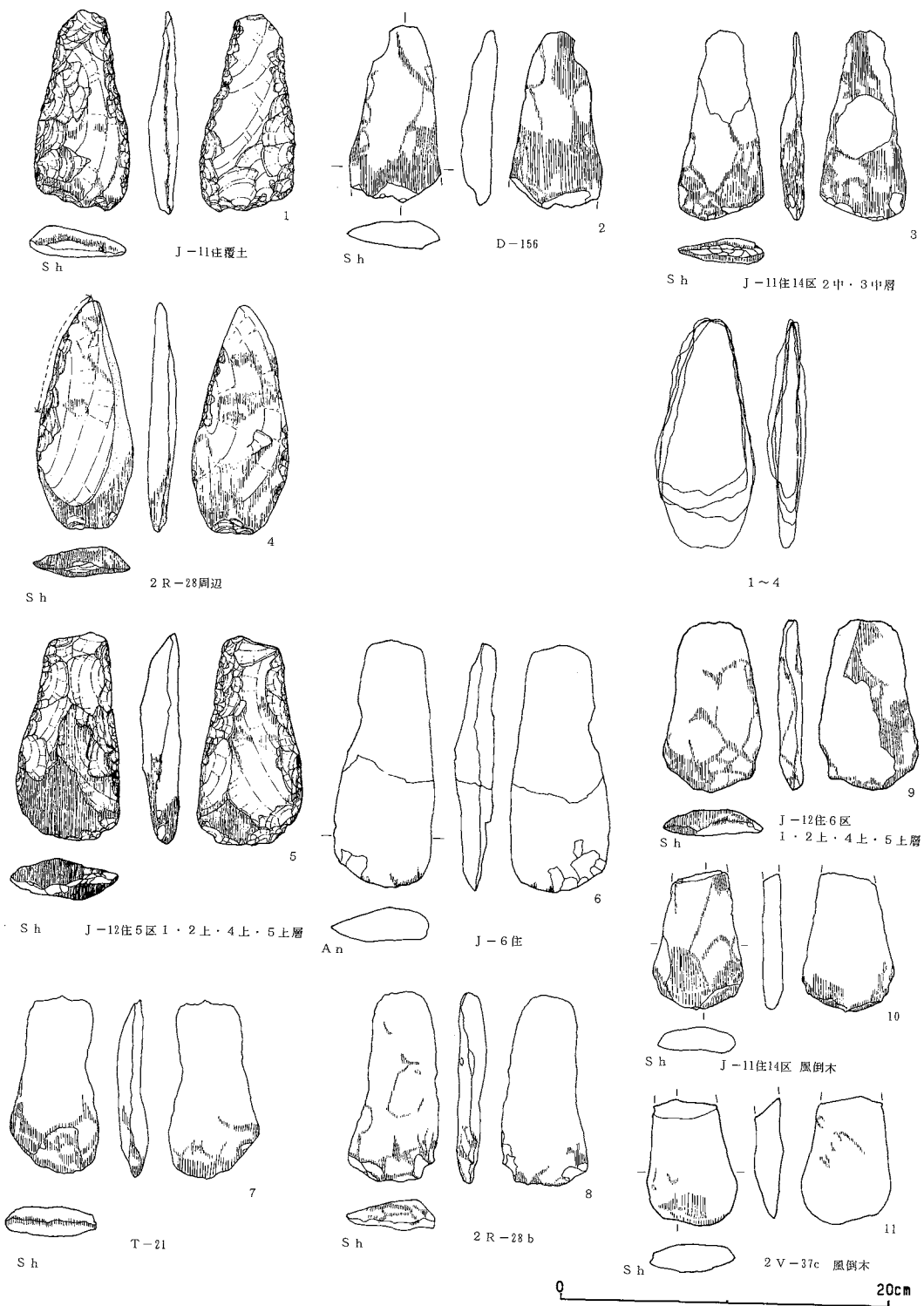
I c 形態 (第110図 11～13) 幅広の撥形を呈し、直刃で刃部角が急角度である。11では刃部は両面調整であるが、他の個体は片面調整である。また、12では刃部の裏面側に剥離面が認められる。3 点検出されているが、形態・調整方法でも類似し、内 2 点は同一住居址から検出されている。範型は比較的強い。

I d 形態 (第111図 1～5) 撥形を呈し、側縁部が外反し、一方の刃部がやや突出した形状である。両面調整により断面型はレンズ状を呈する。刃部は直刃で、ほぼ直角に近い急角度のものが多い。全体の調整は II 形態に近いが、刃部は I 形態特有の片刃の一群である。刃部の裏面側に使用痕が認められるものもある。8 点検出されている。石材はすべて頁岩であるが、風化により鉄分の凝集の著しい頁岩が 2 点存在する。この種の頁岩は河川調査の際には鑛川ではほとんど見あたらず、他地域から搬入された可能性がある。石材も含め、厳密であったと推定される。

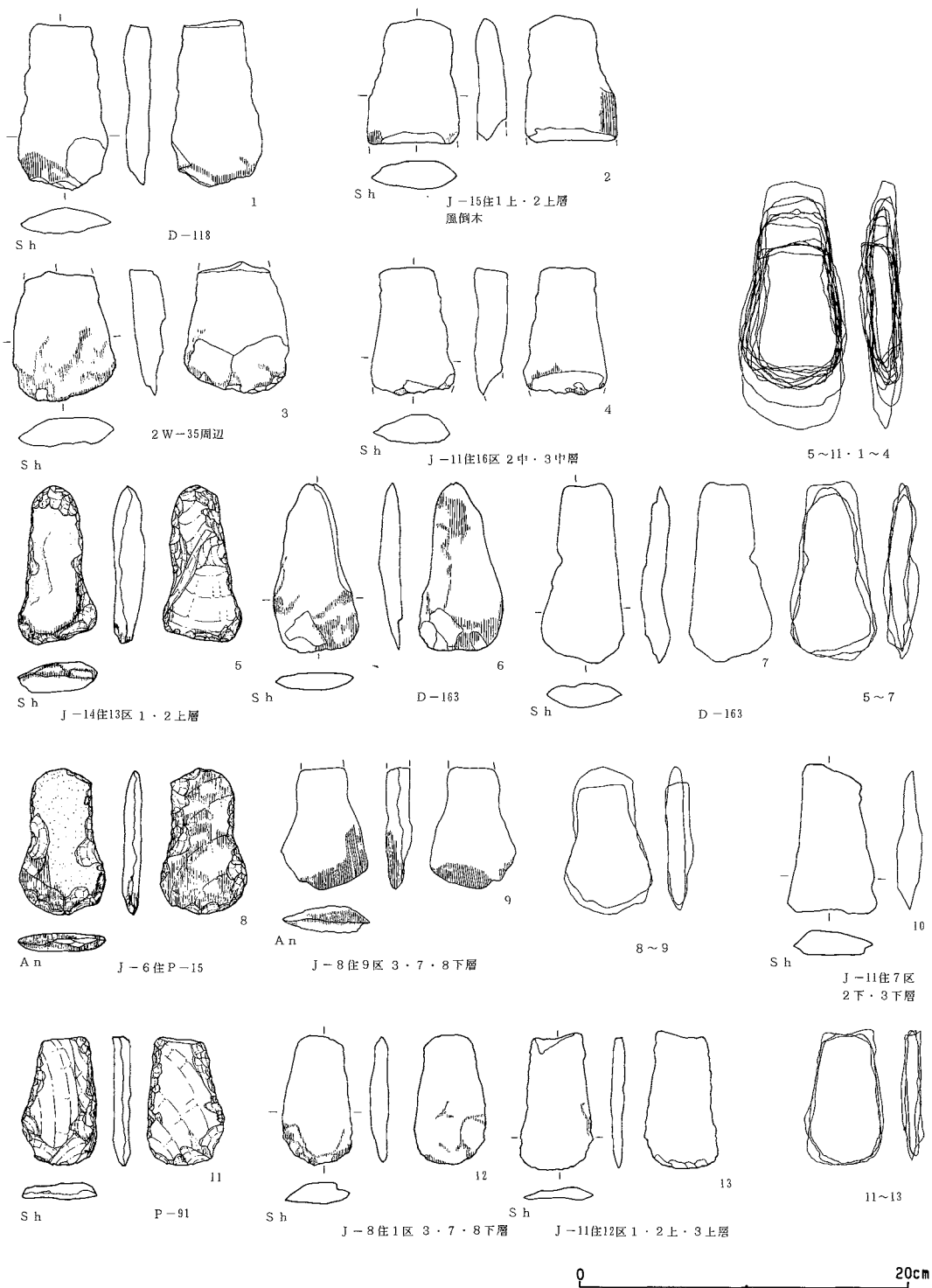
I e 形態 (第111図 6～9) 細身の撥形で刃部は直刃である。身部の調整は両面調整による。刃部は基本的には片刃であるが、刃部裏面に先端方向からの調整があり、あたかも両刃状を呈しているかのように見えるもの (6) や、素材剥片の縁辺をそのまま刃部とする例 (8) も存在する。刃部には小剥離痕と共にわずかに擦痕が認められるもの (7) も存在する。5 点存在し、3 点は頁岩であるが、安山岩も 2 点あり多用されている。範型は全体形状では斉一性が認められるが、刃部形状には個体差が大きい。

I f 形態 (第111図 10～12) 短冊形に近い小形の撥形で、刃部は直刃で刃部角が急角度であり、刃部に直交する擦痕や小剥離痕が認められる。個体差がやや大きく、範型は比較的緩やかである。11 点存在し、すべて頁岩製である。

I g 形態 (第111図 13) 刃部が張り出す撥形で、ほぼ直刃であり、刃部角は緩角度である。身部は両面調整による。また、刃部の裏面側には小剥離痕が認められる。3 点存在し、2 点は頁岩、



第112図 打製石斧実測図(3)



第113図 打製石斧実測図(4)

1点は安山岩製である。

I h 形態（第111図14） 短冊形に近い形状であり、片面調整と両面調整により作出されている。刃部は直刃片刃である。2点存在し、頁岩製である。この2点は形状は類似するが、大きさは大小異なっている。

II i 形態（第112図1～4） 大形の撥形であり、両面調整により断面形はレンズ状を呈する。基部はやや尖る。刃部は円刃両刃である。刃部には使用による擦痕と剥離痕が顕著に認められる。そして、刃部は斜めに片減りしているものが数点認められる。装着痕と考えられる擦痕も身部に顕著に認められる例が多い。また、基部は特徴的で識別できるためか、基部破片が多い。範型は比較的厳密である。使用により刃部が減り、形状が変化してしまっていることがよく解る形態である。16点存在するが1点を除き安山岩製である。

II j 形態（第112図5～11、第113図1～4） 大形の撥形を呈する一群で、ほぼ中央部からやや張り出し、刃部は幅広の直刃両刃となる。基部は幅広で角張っている。断面形はレンズ状を呈する。II i 形態同様に、刃部及び身部に使用による擦痕が顕著に認められる。また、刃部には使用による剥離痕も顕著であり、剥離痕の上に再び擦痕が残されものも多い。この形態は最も個数が多く、25点存在する。使用によるリダクションにより、長さが徐々に寸詰まりになって行く状態がよく解る形態である。安山岩4点を除き頁岩製である。範型は形状的にも技法的にも比較的強い一群である。

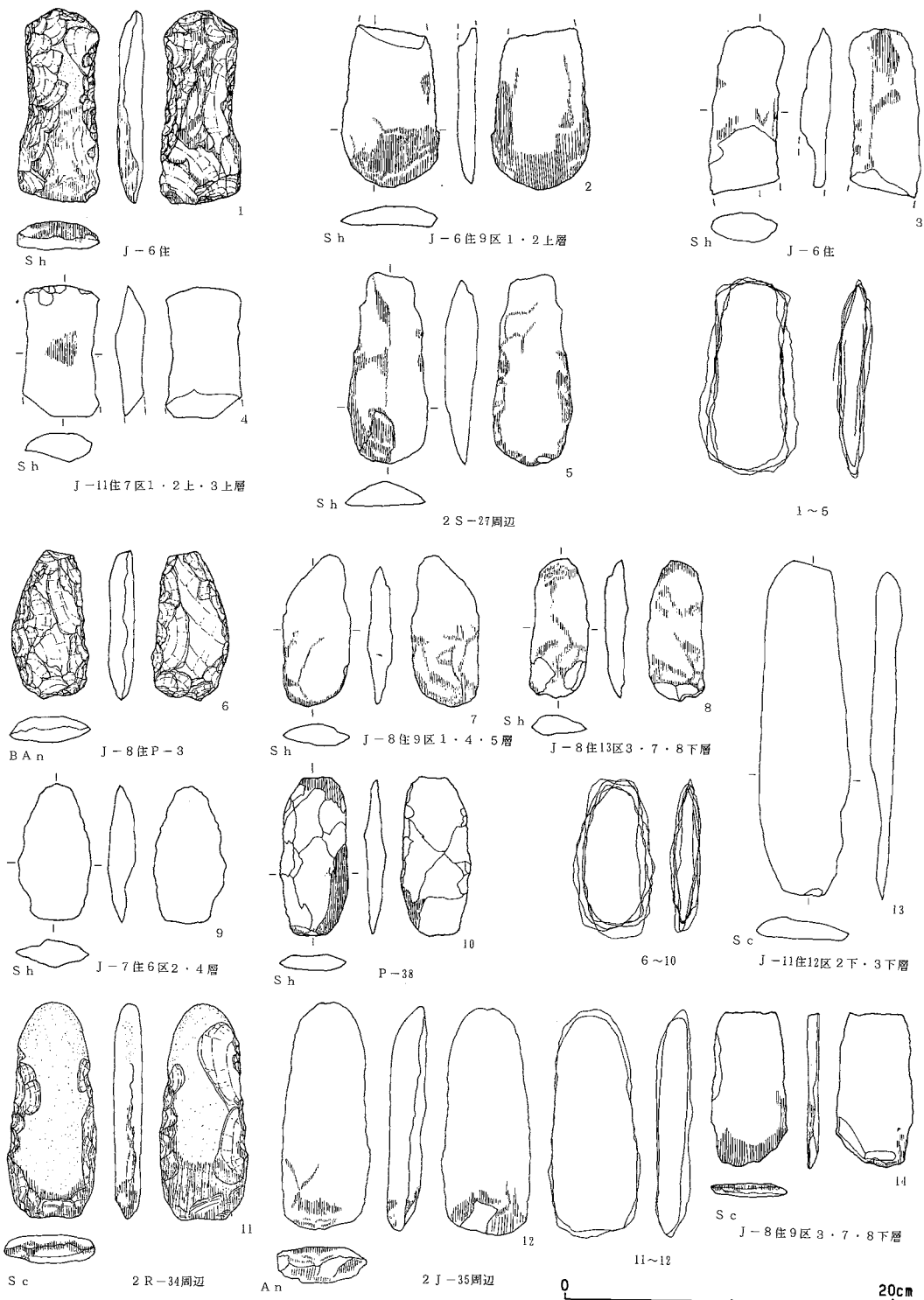
II k 形態（第113図5～7） 細長くやや小振りな撥形で、断面形はレンズ状を呈し、基部はやや尖るものが多い。そして、刃部は両刃で円刃または直刃である。刃部には使用による擦痕や剥離痕が顕著に認められる。長軸に対してやや斜めに刃部が片減りした例が数点認められる。

II l 形態（第113図8～9） 小形の撥形で、中央部から刃部にかけてやや張り出し、「しゃもじ」状を呈する。刃部は円刃両刃で擦痕が顕著に認められる。また、身部には装着によると推定される擦痕も観察される。2点とも安山岩製であり、安山岩に対する依存度が高い。強固な範型の存在が窺える。

II m 形態（第113図10） 撥形であり、側縁がほぼ直線的である。刃部は直刃両刃を呈する。3点存在しすべて頁岩製である。このうち1点には使用による刃部擦痕・剥離痕が観察される。範型は比較的強い。

II n 形態（第113図11～13） やや小形の短冊形で側縁がわずかに外側に張り出し、比較的薄身である。そして、刃部はやや円刃となる両刃である。刃部には擦痕がわずかに認められる。また、剥離痕も観察される。5点存在し、すべて頁岩製である。範型は比較的強い。

II o 形態（第114図1～5） やや大形の短冊形の一群である。刃部は円刃両刃を基本とするが、使用により摩耗し直刃状に変形したものも見受けられる。また、刃部及び身部には顕著な擦痕が



第114图 打製石斧実測図(5)

認められる例が多い。基部がやや曲がったものも存在する。全部で19点存在するが、4点は磨製石斧からの転用である。したがって、石材は多用で、頁岩のほか、結晶片岩2点、緑色岩類2点、安山岩1点である。範型はリダクション例も存在するため、やや緩やかなものとなっている。

II p 形態 (第114図6~10) やや小形の短冊形で、側縁がやや膨らんだ形状を呈する。刃部は直刃両刃である。刃部に擦痕や剝離痕の観察される例も多い。この形態には10のように他形態から再生された例も含まれており、範型はやや緩やかである。15点存在し、結晶片岩1点を除き、すべて頁岩である。

II q 形態 (第114図11~12) 大形の短冊形の一群である。素材の石材の形状を利用し、側縁部から刃部に調整を施す。刃部はやや円い直刃両刃をなす。刃部を中心に擦痕が認められる。7点存在するが4点は安山岩製であり、安山岩への依存度が高い形態である。

II r 形態 図示しなかったが、小形で寸詰まりの短冊形を呈する一群である。刃部にはほとんど使用による擦痕が認められず、II形態の中では特殊である。4点存在し、すべて頁岩製である。

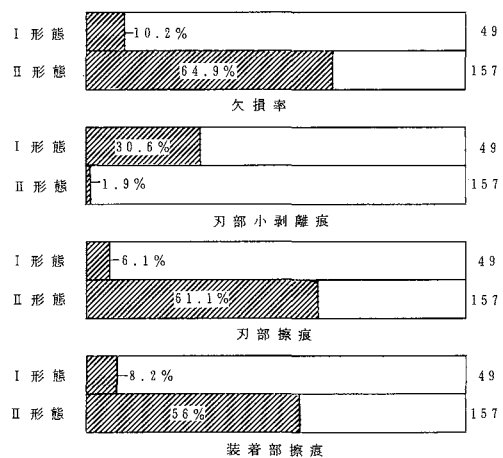
II s 形態 図示しなかったが、小形の短冊形の一群である。すべて欠損しており、全体形状はやや不明確である。基部破片が非常に多い。刃部には多少擦痕が認められるが顕著ではない。11点存在し、砂岩1点を除きすべて頁岩製である。

結晶片岩製の一群 (第114図13~14) この石材の一群は片理により短冊形を呈してしまうため、形態分類からあえて除外した。この中で13はII q 形態に近く、14はII o 形態に近い。全部で5点存在する。

打製石斧の使用痕は第115図のとおりである。欠損率を調べてみると、I形態では10.2%と低率であるのに対し、II形態では64.9%と高率である。細分形態を特定できない小破片はすべてII形態であり、使用による欠損が多いことが解る。

次に、使用痕を調べてみると、I形態では小剝離痕が認められる例が30.6%と多数認められるのに対し、II形態では1.9%と非常に低率である。また、II形態的な両面調整が施されたI e・I f形態では小剝離痕と共にわずかな擦痕が認められる例が存在し、同じI形態の中でも用途に差異があったと推定される。

II形態では61.1%のものに刃部擦痕が認められるのに対し、I形態では6.1%と非常に少ない。このうち、II i・II j・II l・II o形



第115図 打製石斧の使用痕

態などは著しいが、II n・II r・II s 形態ではあまり顕著ではない。したがって、II 形態の中でも用途に違いがあったと考えられる。特に、II r 形態は楔形石器に類似した形態であり、用途は他の形態とはかなり異なったものであったと考えられる。

また、装着による身部擦痕は I 形態8.2%であるが、II 形態では56.0%と刃部擦痕と同じ傾向を示す。そして、装着痕は刃部擦痕が顕著なものほど多く、両者の間に強い相関関係が認められる。

以上の結果から、I 形態とII 形態は同じ打製石斧でも明らかに機能・用途が異なっていたことが理解できる。前者は「斧」的用途、後者は「土掘具」的用途に利用された道具であったと推定される。しかし、I 形態が木材を対象とした「斧」であるならば、磨製石斧との競合が生じてしまい、同一用途に製作技法が全く異なる器種が併存する点で不合理である。さらに、磨製石斧では欠損・再生が著しく、木材を対象としていたならば、当然 I 形態もこうした状態であればならないが、すでに述べたように、I 形態はほとんど欠損・再生は行われておらず、木材以外の用途に用いられていた道具と考えられる。具体的対象物については、今後の検討課題である。

石材については、頁岩が85.8%と圧倒的に多い。この石材は鑛川で採取可能であり、これが用いられている (VI章参照)。そして、安山岩・結晶片岩などが少量用いられる。また、特定の形態に特定の石材が用いられる例がある。例えば、I d 形態では鉄分の付着した特徴的な頁岩が多用されるが、この頁岩は在地のものではない可能性がある。また、II 1・II 9 形態では安山岩が多用される傾向がある。

そして、少量存在する黒色頁岩は本遺跡周辺で手軽に採集できる在地系の石材ではなく、利根川流域の石材であることから、中距離間での交換等によりもたらされた可能性がある。

また、再生による刃部の作り出しなどをみた場合、前記したような当初の目的に合わせた形状を意識して製作していることから、いわゆる範型による製作意識のうえでの規制が働いていたものと考えられる。

初めにも述べたように、従来の分類では石器の最終使用段階での形状を基礎としているために、使用途中であれ、使用後の破棄された状態の資料であっても、同様に分類の対象としていたが、今回は形状の外郭ラインを重ね合わせることにより、当初の製作段階で意図した範型の有無とその強度について検討を行ってみた。その結果、打製石斧にも範型が存在し、その強度は形態により差異が認められることと、用途が異なっていることが判明した。また、打製石斧も磨製石斧と同様、使用により徐々に形態が変化し、場合によっては別の形態へ再生されることも明らかとなった。したがって、こうした基礎作業を踏まえた上で、より有意の分析単位を抽出し、型式学的方法により分析を試みることにより、土器型式に準じた時空的位置付けを可能にすることができよう。

(麻生敏隆・大工原豊)

【スクレイパーB類】(第116図～第122図) 全体で505点検出されており、本遺跡で最も多い点

数が出土した器種である。多様な形態と多様な技法により作出されたものである。小礫から直接加工された数点の資料を除き、剥片を素材としており、素材剥片自体の形状を著しく変えるような二次加工を施さないものが大部分を占める。石材は硬砂岩の2点と結晶片岩の1点及び安山岩の10点を除き頁岩を用いており、打製石斧と素材石材が共通であり、両者の製作工程は密接な関係があることが推測される。

押圧剥離を主体とした精緻な調整によるI a形態は64点である。この形態はさらに、横長形(第116図1～6)、幅広形(同7～11)、縦長形(同12～16)、鋸歯状(第117図1・2)、円形搔器状(同3・4)などに細分可能である。この中では横長形の例が多い。また、縦長形では比較的形状が整っている例が多く見受けられるのが、I a形態の特徴のひとつである。

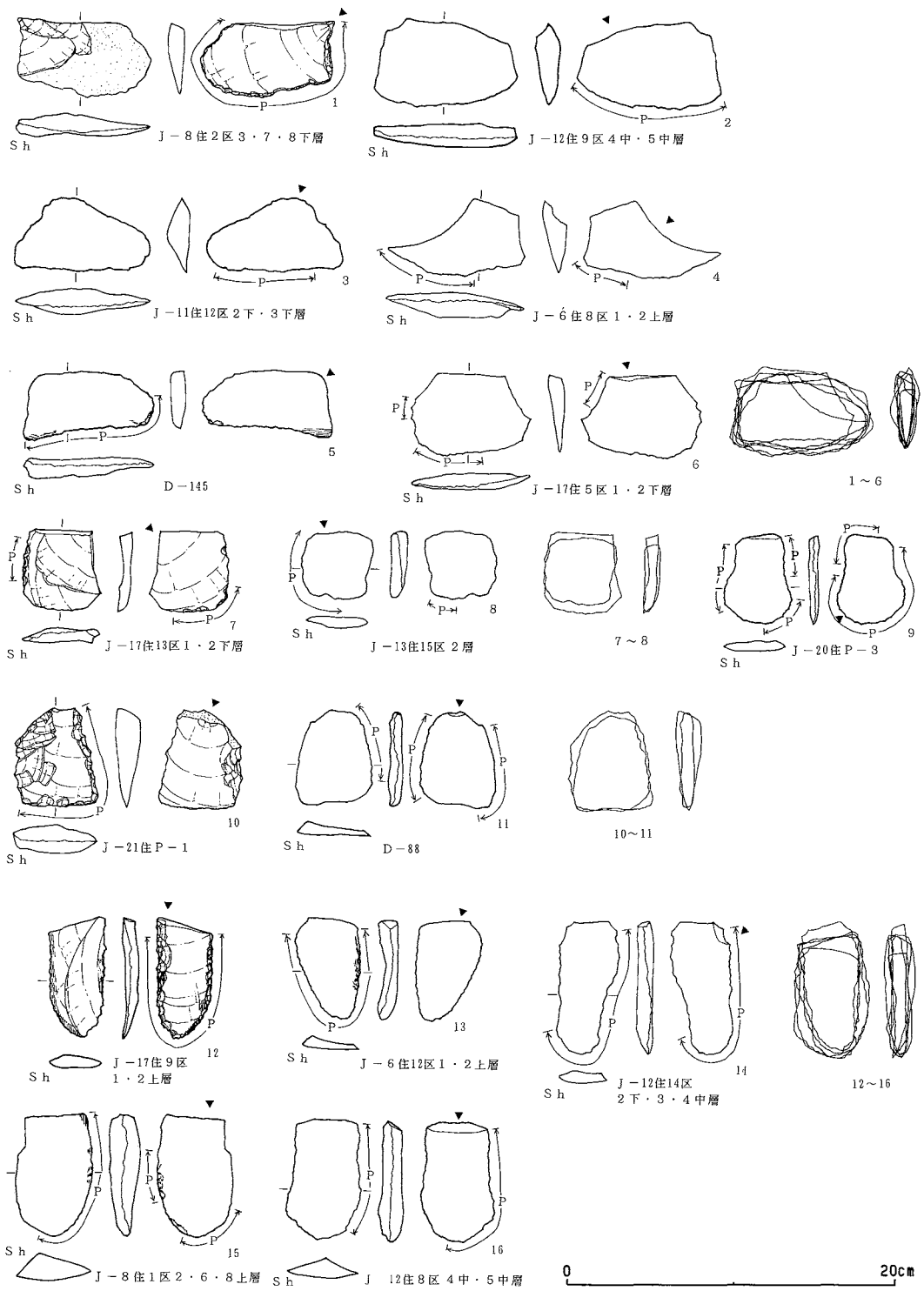
粗雑な押圧剥離と細かい直接打撃の調整によるI b形態は85点検出された。横長形(第117図5～11)、幅広形(第118図1～6)、縦長形(同7～11)、円形搔器状(同12)などに細分可能である。また、剥片上端を錐としても用いた例も存在する。縦長形はほとんど寸詰まりで、尖刃形を呈するものが多い。

直接打撃の調整によるII形態は202点存在する。この中で、調整加工が粗雑で調整剥片の可能性のあるもの55点をII'形態として細分した。また、これ以外のものは横長形(第119図1～9・12)、鎌形(同10・11)、幅広形(第120図1～6)、円形(同7)、曲刃状(同8～10)、尖刃形(同12・13)などの形態に細分可能である。このうち、横長形では他の形態に比べて大形のものが多い。また、広義の横長形に含まれる刃部が湾曲した鎌形はこの形態のみに存在する。円形の例はI a・I b形態では搔器であったが、II形態では搔器ではなく削器である。

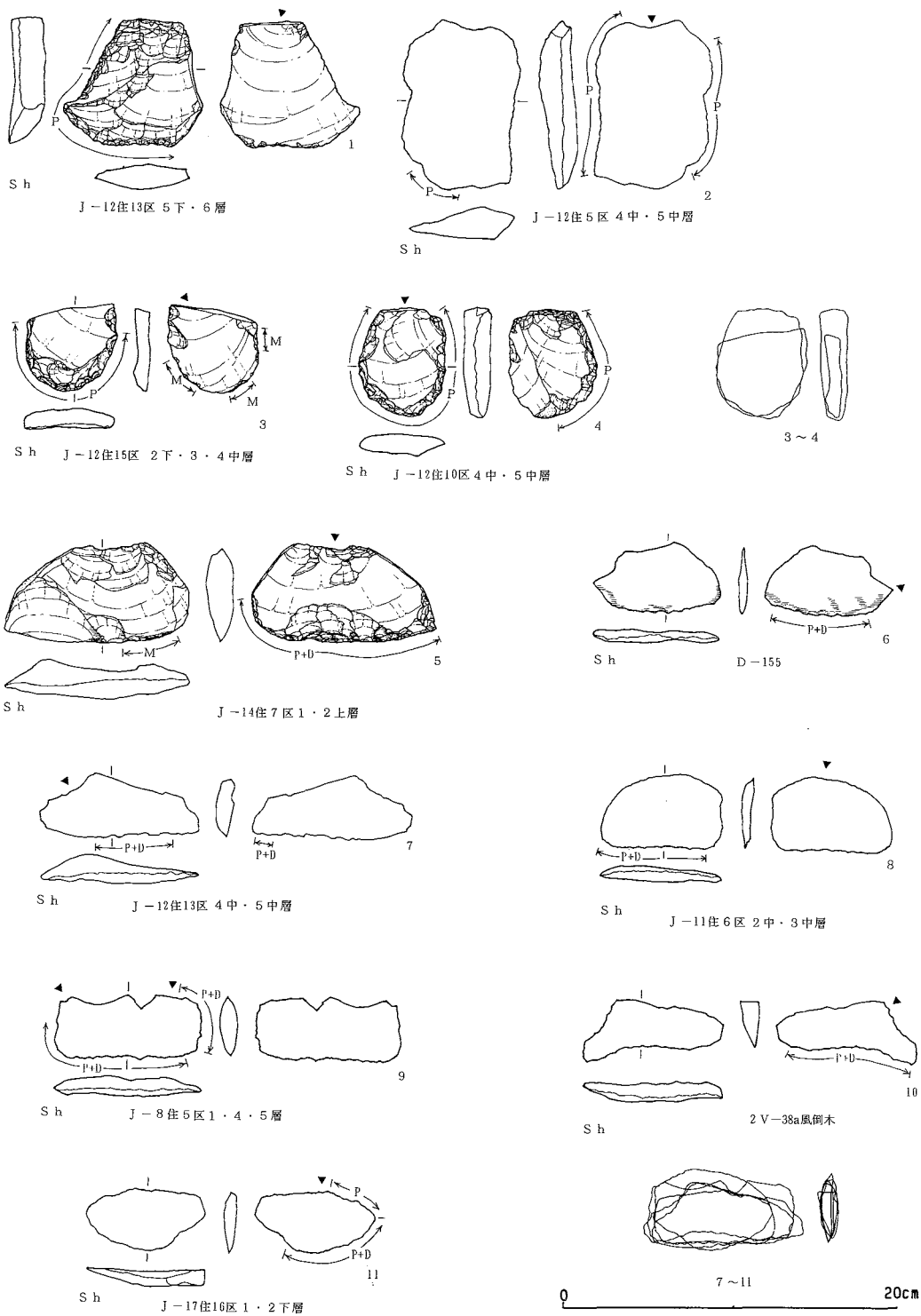
一辺の1/2以上に微細な剥離がみられるIII形態は154点検出された。この形態も、さらに細分される。横長形(第121図1～3)、幅広形(同4～5)、小形横長形(同6～16)、縦長形(第122図1～9)などが存在する。III形態では横長形が少なく、小形横長形が多数を占める点の特徴である。

数量的には、II形態(II'形態を除く)・III形態が多く、I a形態・II'形態が少ないという傾向がみられるが、大別ではI形態149点、II形態(II'形態含む)202点、III形態154点となり著しい差異は認められない。

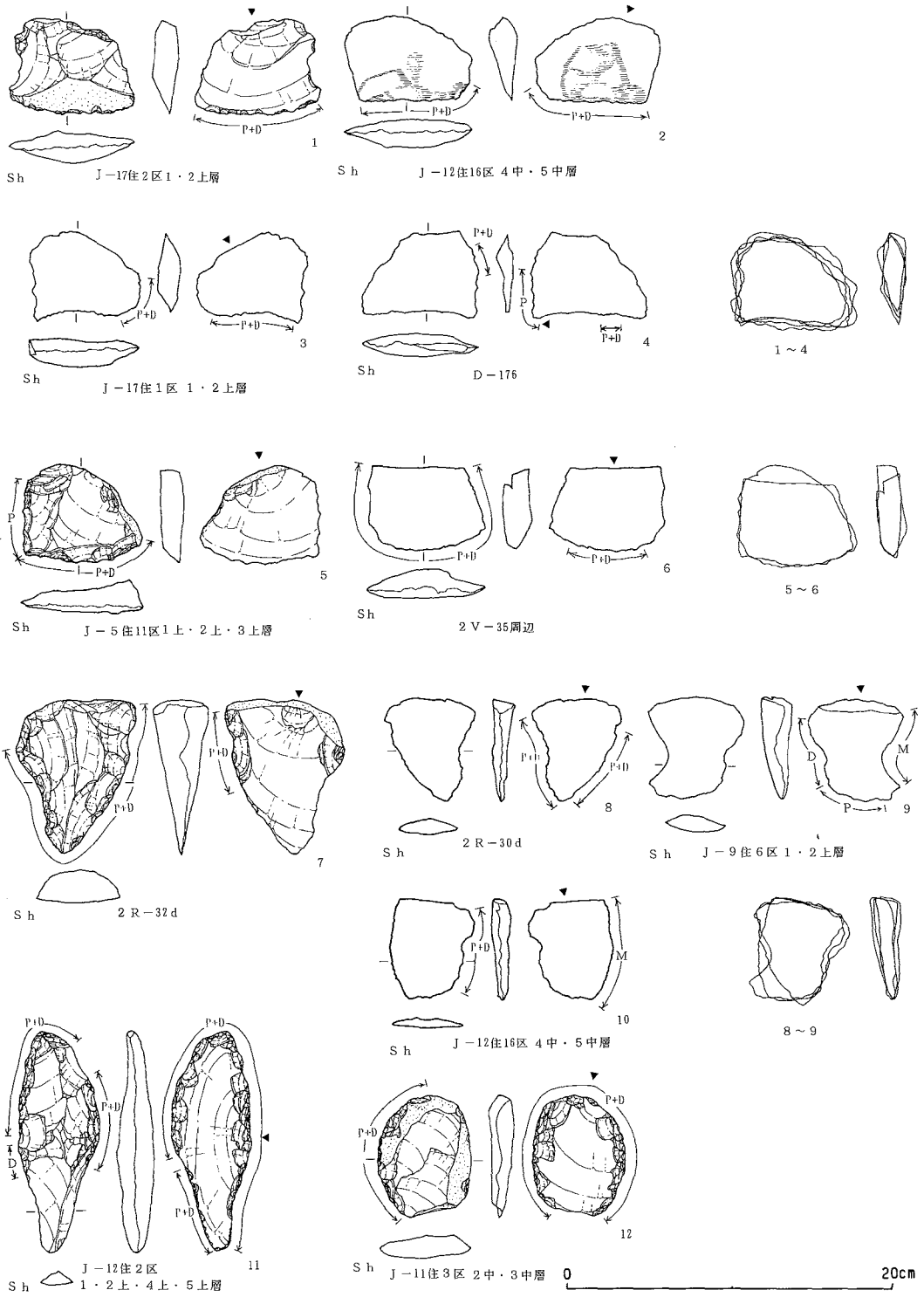
大きさ、形状は第123図のグラフのとおりである。これを見ると、各形態ともに3～8 cm程度のものが多く、長幅比1:1を中心として密集する。さらに詳細にみると、II・III形態では1:1と1:2の間に分布の中心が存在しており、横長形が多く存在していることを示している。また、各形態とも3 cm以下のものがほとんど存在しない点が注目される。II形態(II'形態を除く)に大形のものも多く、I b・II'・III形態に小形のものやや多くみられる。その中でもII'形態は横長で小形の傾向を示しており、II形態と分離される。



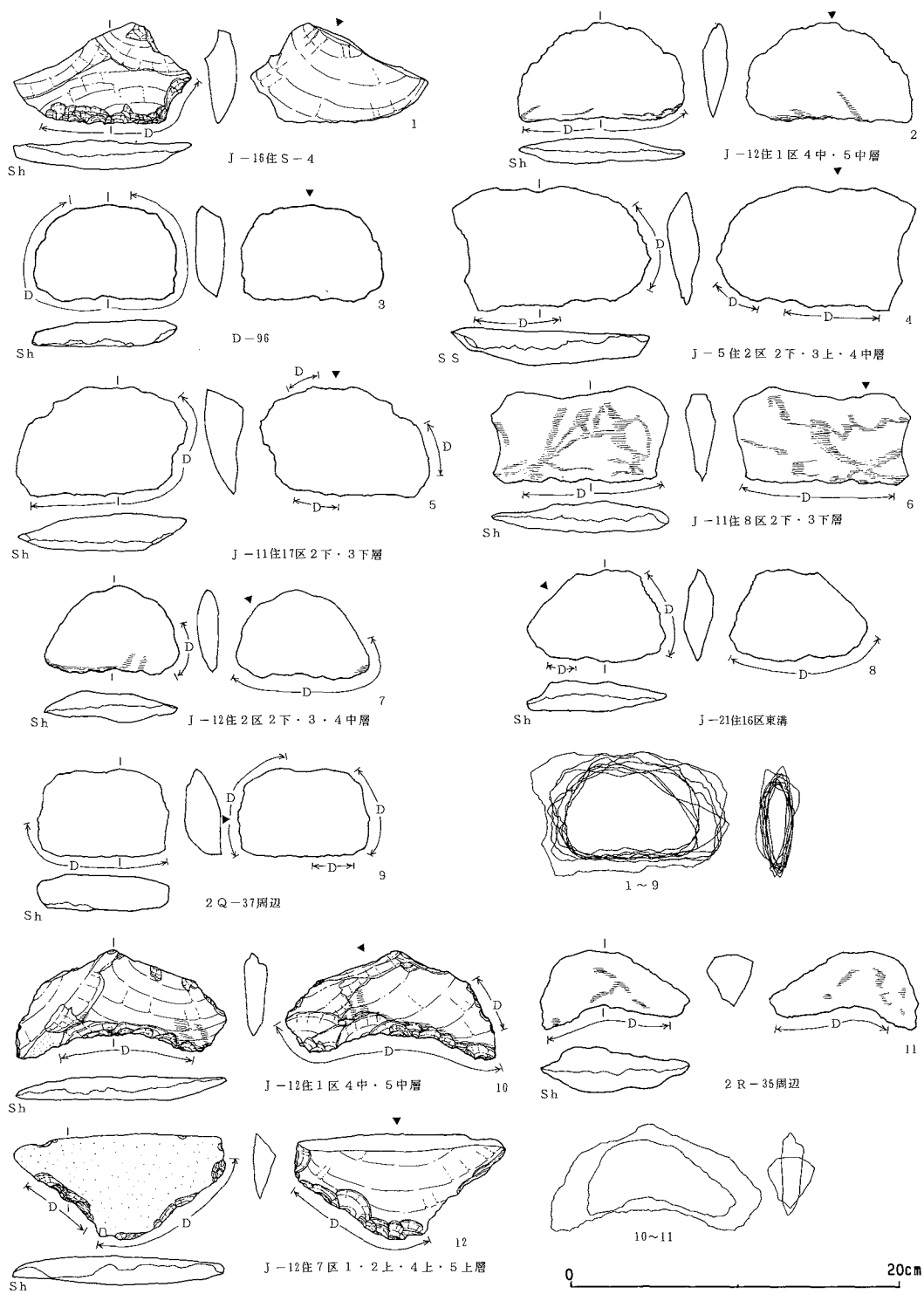
第116図 スクレイパーB類実測図(1)



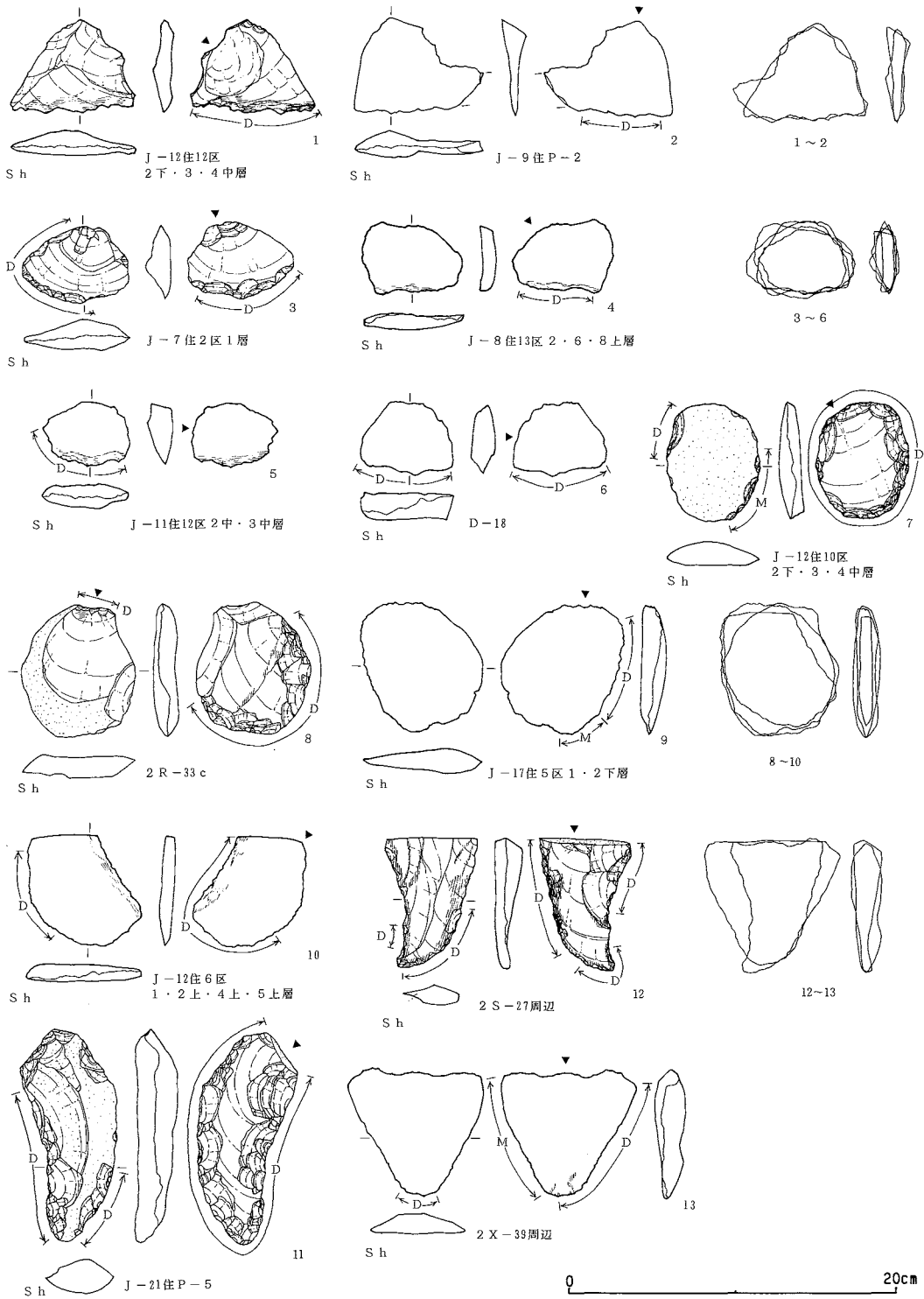
第117図 スクレイパーB類実測図(2)



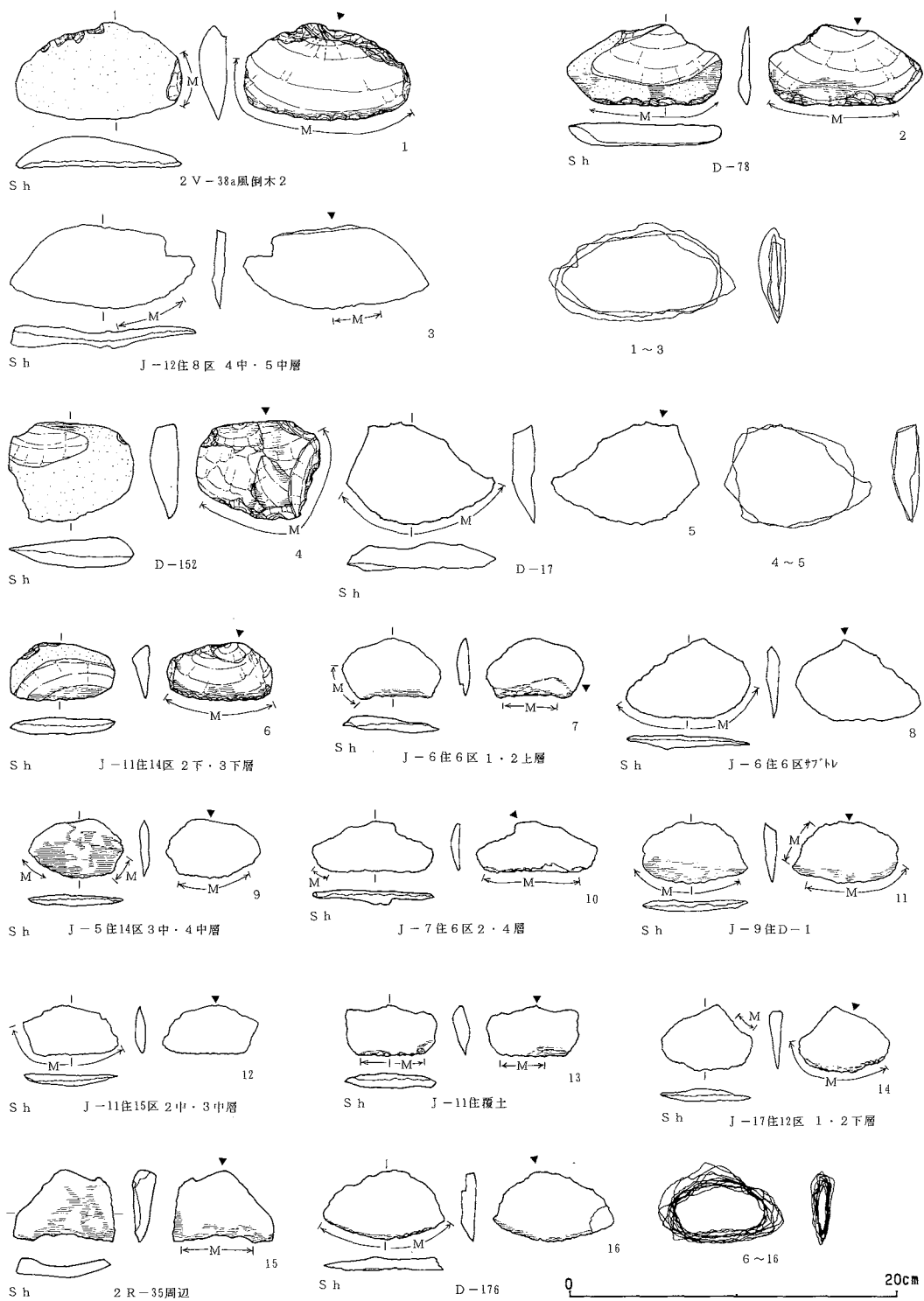
第118図 スクレイパーB類実測図(3)



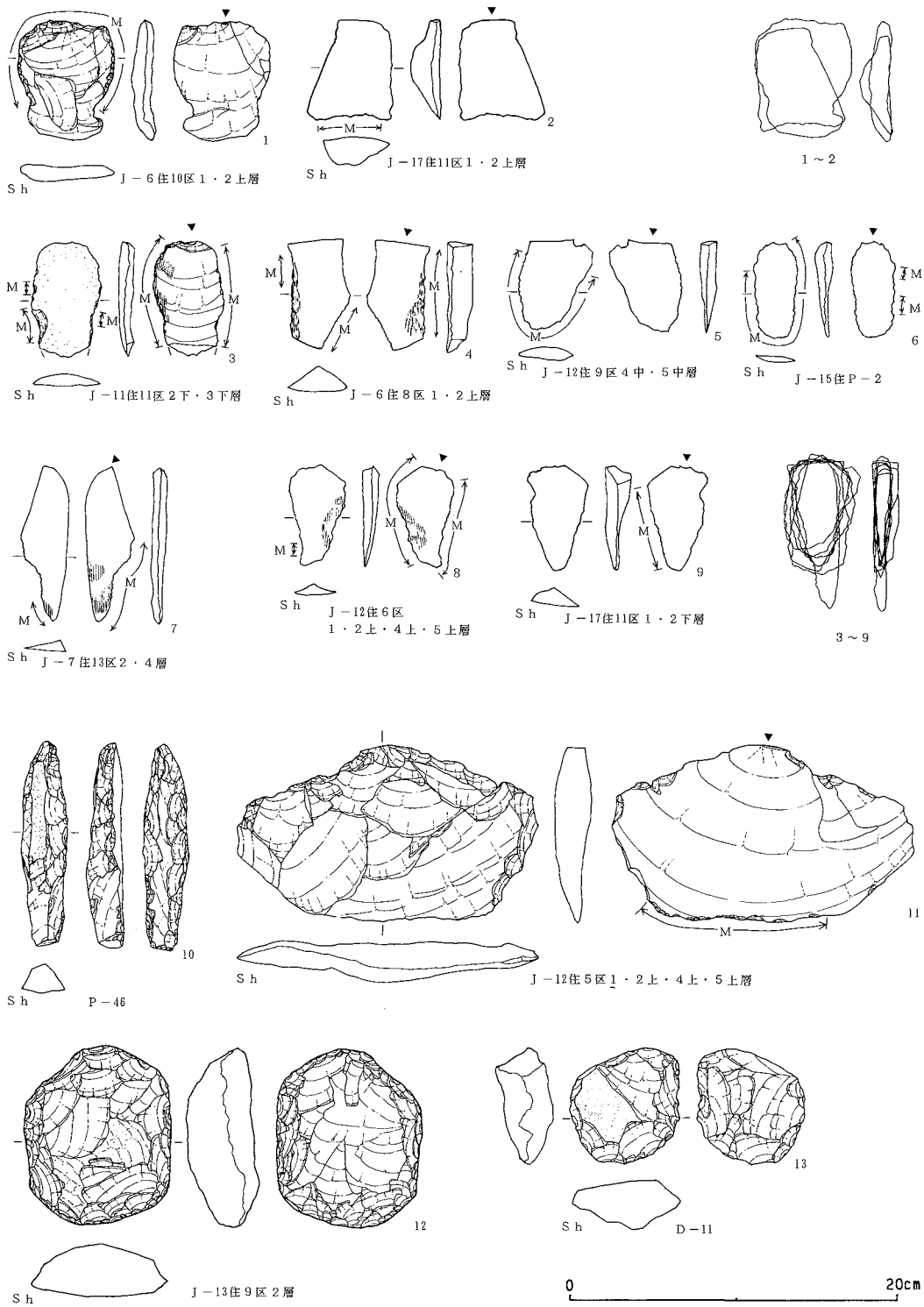
第119図 スクレイパーB類実測図(4)



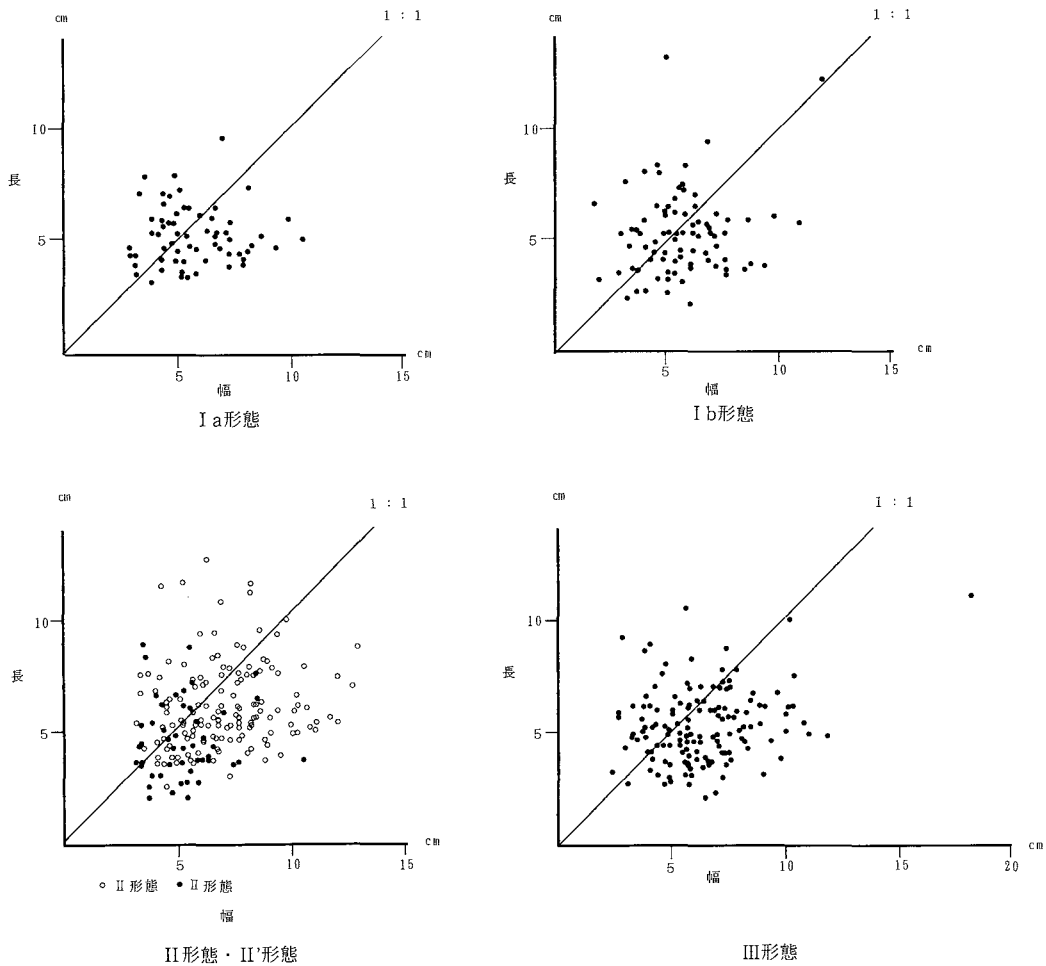
第120図 スクレイパー-B類実測図(5)



第121図 スクレイパーB類実測図(6)



第122図 スクレイパーB類・石槍・石核B類実測図



第123図 スクレイパーB類の長幅比

また、技術的側面から検討すると、横長で楕円形を呈した剥片がスクレイパーB類の素材として用いられる傾向が大きい。そして、この剥片の多くは打製石斧（特にII形態）の製作過程で大量に作出されると推定されるものである。したがって、スクレイパーB類は、打製石斧の製作と密接に連動しているものと考えられる。

これ以外に、礫面を剥片の打面部（刃部に対する背）として残すものが全体の約28%にみられる。形態別では、I a形態が37.5%・III形態が約34%と打面部に礫面を残すものの割合が高く、II'形態が約18%・II形態が約22%と低い割合となっている。この剥片は打製石斧製作の初期段階の剥片の可能性と、スクレイパーB類の製作を目的とした剥片剥離作業による可能性があるが、後者の可能性が高い。すなわち、打製石斧の製作とは別にスクレイパーB類を製作することも行われていたと考えられる。

また、全体の25.3%に使用による磨痕を観察することができ、形態別ではI形態25.5%(I a形態約19%、I b形態30.6%)、II形態16.8%(II形態21%、II'形態約5.5%)、III形態約36.4%であり、形態別に若干の差が認められる。II'形態に磨痕が観察される割合は低く、調整剥片が多く含まれているとみなされる。このように、直接打撃により刃部的な調整が施されたものが、スクレイパーに分類されてしまうことは、石器の分析の中では避けられない。また逆に実際にはスクレイパーとして使用されていたものが単なる剥片と分類されてしまう場合もあるので、ある程度こうした分析技術的側面を考慮し、全体的な傾向を統計的に分析することが適当と考えられる。

(中島 誠・大工原豊)

[リタッチド・フレイクB類] この器種は図示しなかったが全部で214点検出されている。頁岩が圧倒的多く、安山岩などが少量存在する。この器種はスクレイパーB類III形態に準ずるものであり、スクレイパーB類の項でも言及したように、ある程度調整剥片を含んでいることが想定される。全体の傾向はスクレイパーB類と同じで、やや横長の幅広剥片が素材として用いられているが、より不整形のものが多く含まれている。使用痕の観察される例はスクレイパーB類よりもかなり少ない。

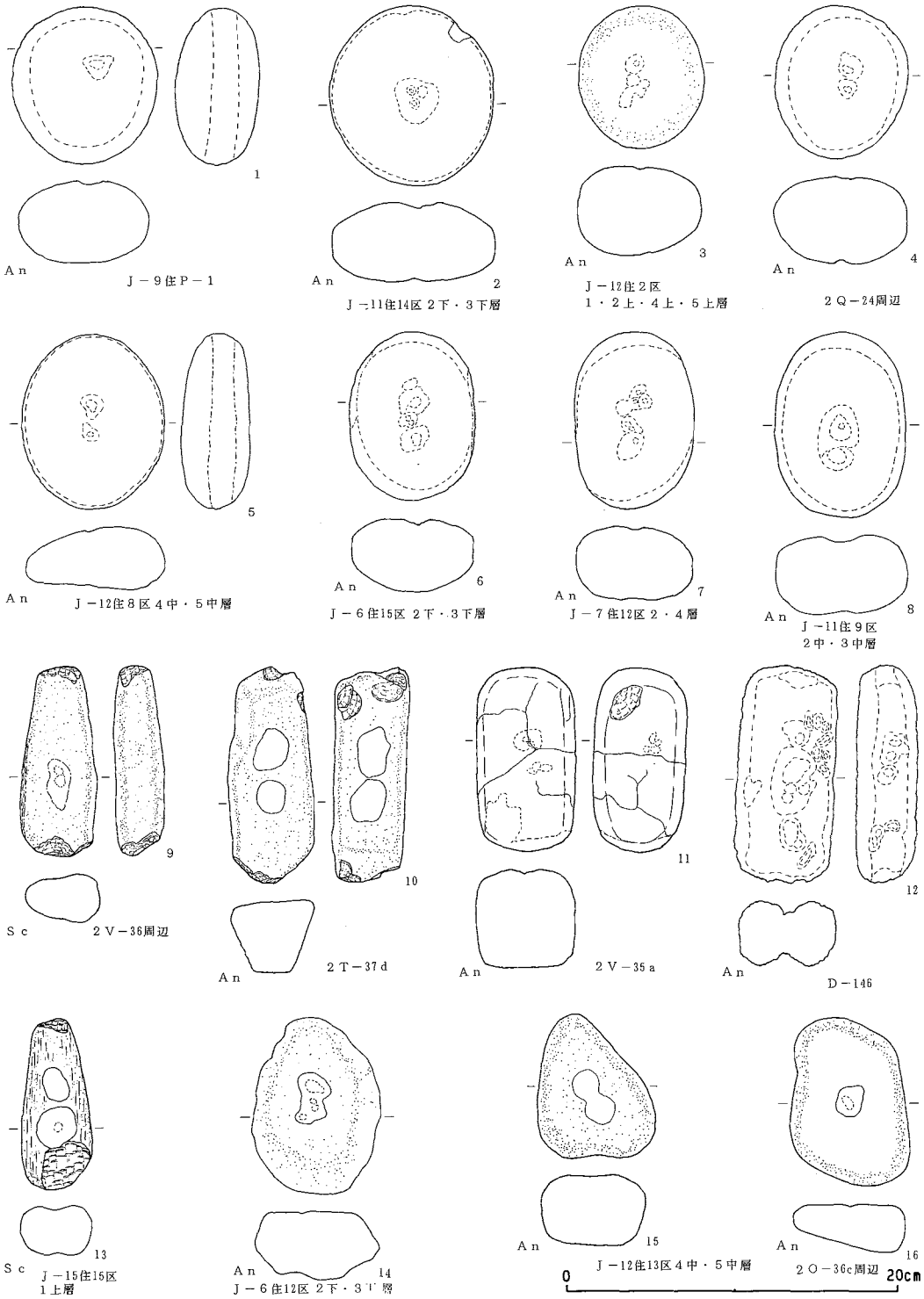
[石核B類] (第122図12・13) 石核B類は打製石斧・スクレイパーB類の製作と密接に関連している。狭義の石器ではないが、図示することにした。ここに図示したものは、スクレイパーB類の製作に関連したものとみられる。この石核から作出された剥片は、幅広形・小形横長形などの比較的小形の剥片と考えられる。また、石核の個数はさほど多くないことと、石核の大きさから、スクレイパーの素材剥片がすべて遺跡内で作出されたものでないことは明かである。しかし、こうした石核が存在することから、遺跡内においても石器製作が行われていたと判断される。

また、第122図11のスクレイパーB類は特別大形のものである。こうした状態で遺跡内へ搬入されたとすれば、打製石斧の一部も遺跡内で製作されたと推定される。

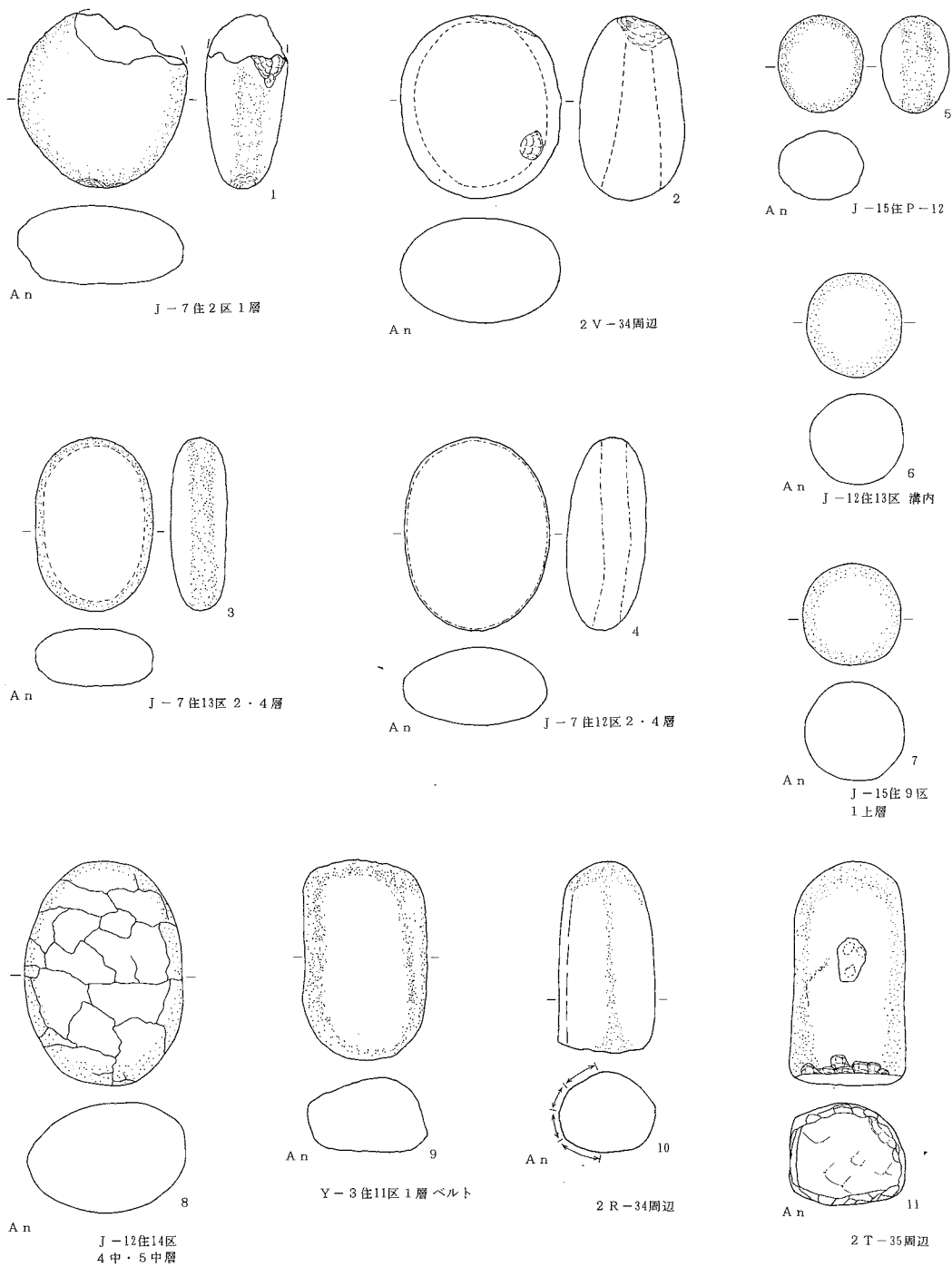
[凹石] (第124図) 全部で198点検出された。C 1 類石器の中では最多の器種である。形態別の諸特徴は第4表のとおりである。ここで図示したのはI b形態(1~4)、II b形態(5~8)、III b形態(9)、III c形態(10・13)、IV b形態(11・12)、V a形態(14~16)のみである。

形態別ではII b形態(楕円形・凹→磨)が50%を占め、最も多い。そして、II a形態(楕円形・磨→凹)、II c形態(楕円形・凹のみ)を含めたII形態全体では約70%であり、楕円形のものが機能的に最も適していたことが解る。

欠損率は全体では約30%である。しかし、II a形態は約7%と低率である。このII a形態は被



第124图 凹石实测图



第125図 磨石実測図

熱率も0%であり、II b形態とは区別されるものであったことが推定される。こうした傾向は遺跡内での出土状態でも表れており、住居址覆土最上層に集中している。これは、II a形態が集落を放棄する段階で廃棄されたものであり、その時点の様相を反映したものと考えることができる。同様な傾向は磨製石斧においても認められる。

石材は圧倒的に安山岩が多く、97%を占める。それ以外は、結晶片岩・頁岩・蛇紋岩が極少量用いられているに過ぎず、石材選択性が顕著である。凹石と一緒に使用される石皿が結晶片岩が多いのに対し、対照的な様相を呈している。

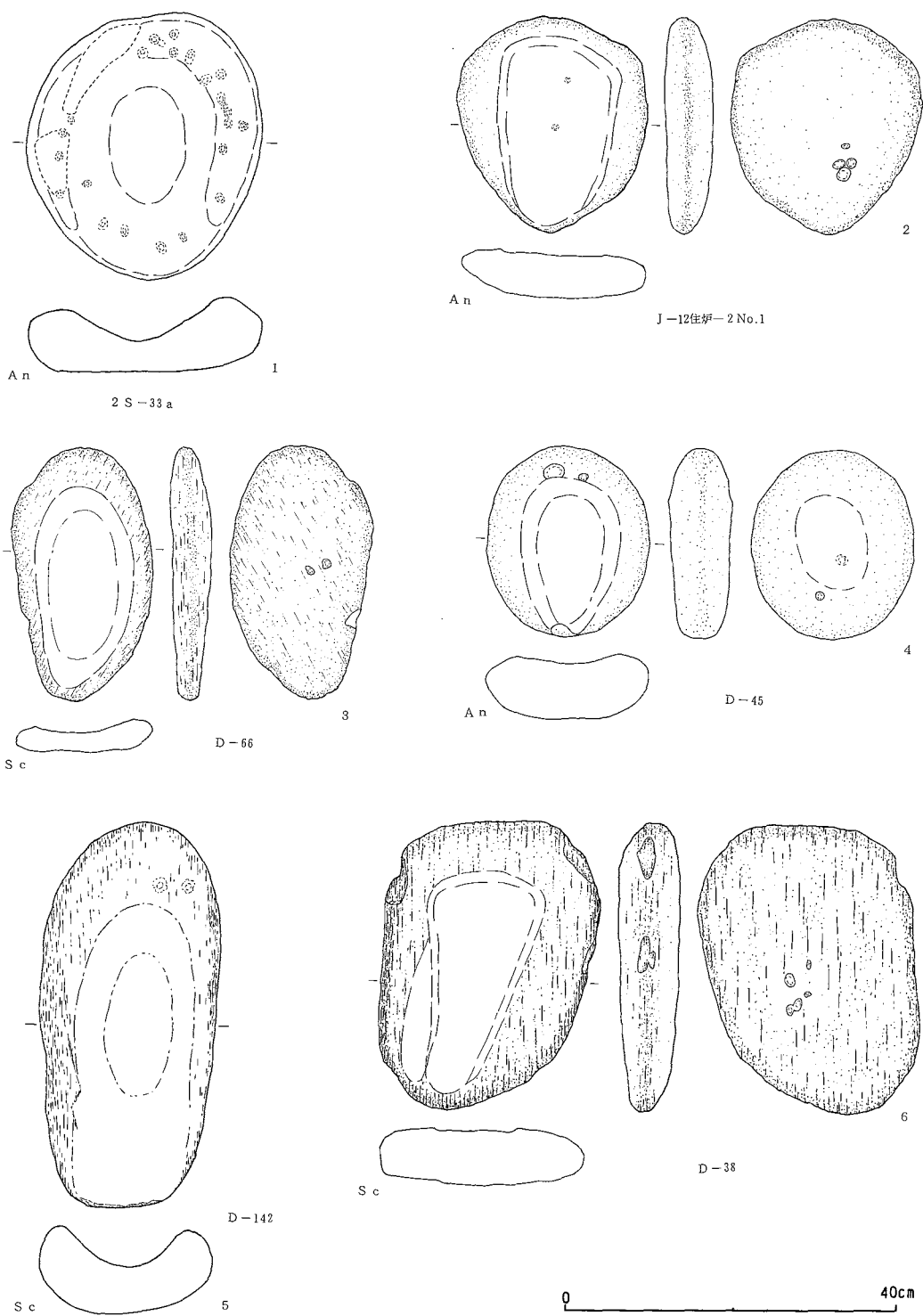
【磨石】（第125図） この器種は凹石に比べ少なく、58点が検出されたのみである。I形態（円形）は標準的な大きさのもの（1・2）と、小形のもの11点（5～7）が存在する。II形態（楕円形：3・4・8・9）が最も多く、29点存在する。この中にはI形態同様に小形のもの4点含まれる。III形態（棒状）は4点と少なく、V形態（不定形）は9点存在する。また、IV形態（四角形）は存在しない。

II形態が最多である傾向は凹石と同様である。しかし、凹石では存在しない小形のもの多数存在する点で違いがみられる。また、欠損率はI形態は7.1%と低いが、II形態では31%と凹石と同様な傾向を示している。また、全体の被熱率は19.3%である。石材は凝灰岩1点を除き、安山岩である。

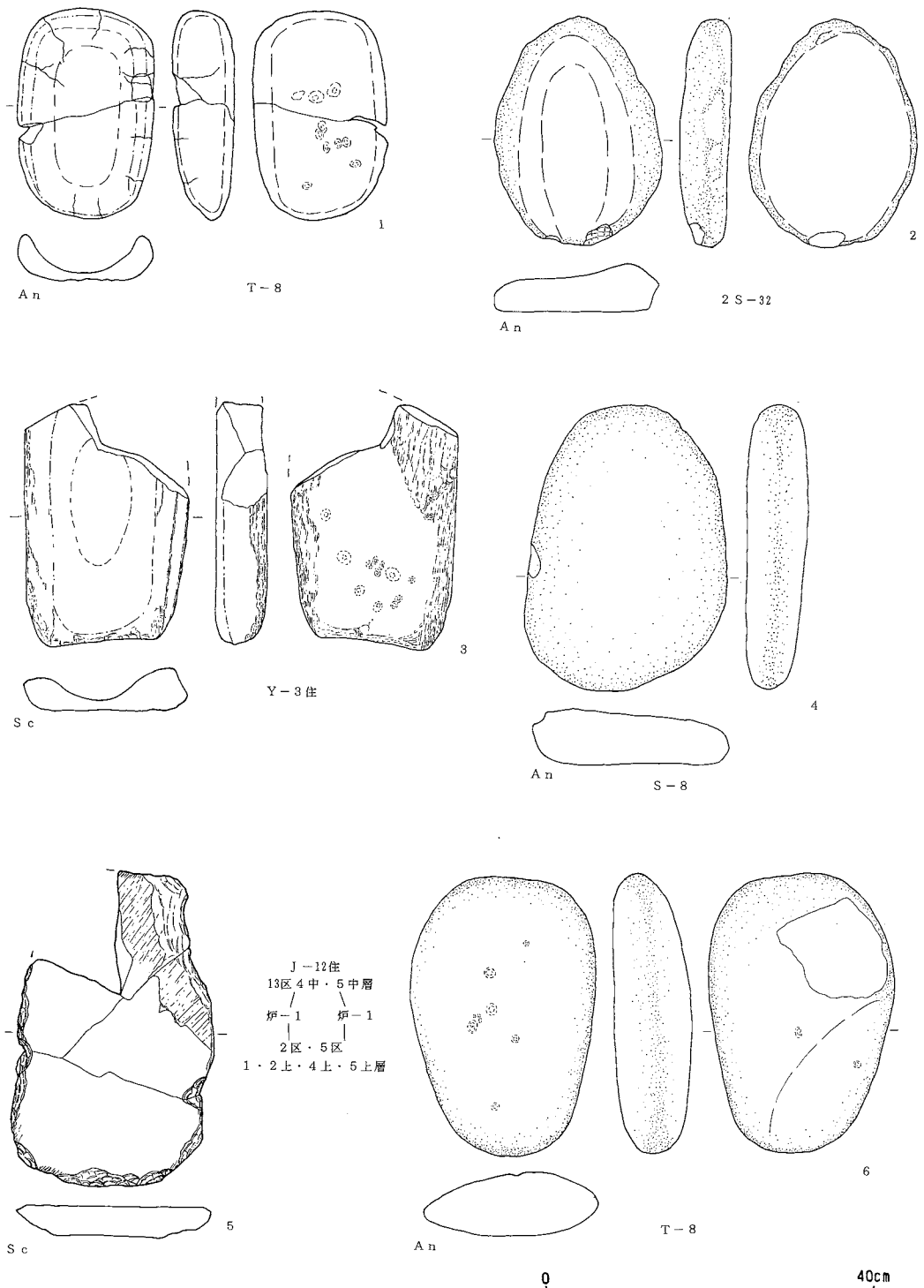
【特殊磨石・スタンプ形石器】（第125図10・11） 特殊磨石（10）は2点検出された。安山岩製で、2点とも欠損している。また、スタンプ形石器（11）は1点検出された。安山岩製である。

これらの器種は早期段階のものと考えられる。3点中2点には凹があけられていることと、本遺跡では早期の遺構・遺物はまったく検出されていないことから、凹石としての転用も考えられる。ちなみに、付近に存在する早期の遺跡は、中原遺跡（押型文）・金井谷戸遺跡（押型文）である。

【石皿】（第126図・第127図） 全部で58点検出された。偏平な河原石をそのままの形状で利用したものが大部分であり、円形（I形態）・楕円形（II形態）・不定形（III形態）のものが存在する。そして、それぞれ作業面が凹面のもの（a）と、平坦なもの（b）に細分される。第126図2・6は予め作業面を敲打により浅く窪ませた、使用開始直後のものであり、石皿の製作方法がよく解る例である。そして、第126図5・第127図3のように長時間使用され、凹面が深いものも存在する。こうした例から、一般的には凹面の深さは使用頻度により異なると推定される。しかし、第127図1のように製作当初から丁寧に凹面を成形したと推定される例も存在する。また、作業面が



第126图 石皿実测图(1)



第127图 石皿実測图(2)

平坦或いは、やや凸面のものも存在するが、これらの形態が同じ用途に用いられたかどうかは不明である。第127図5は平坦な例が分割されて、炉石に転用された例である。

凹穴があけられた例は全体の16%と少なく、凹の数も数個と少ない。また、凹穴が表面の縁に存在するものや裏面に存在するものがあり、一貫性は認められない。

石材としては、安山岩と結晶片岩がほぼ半々用いられている。また、欠損率は約80%と多いが多くは結晶片岩製のもので、これらの中には砥石（仕上砥）も含まれていると推定される。しかし、完形のもは中期以降に比べて比較的多い。

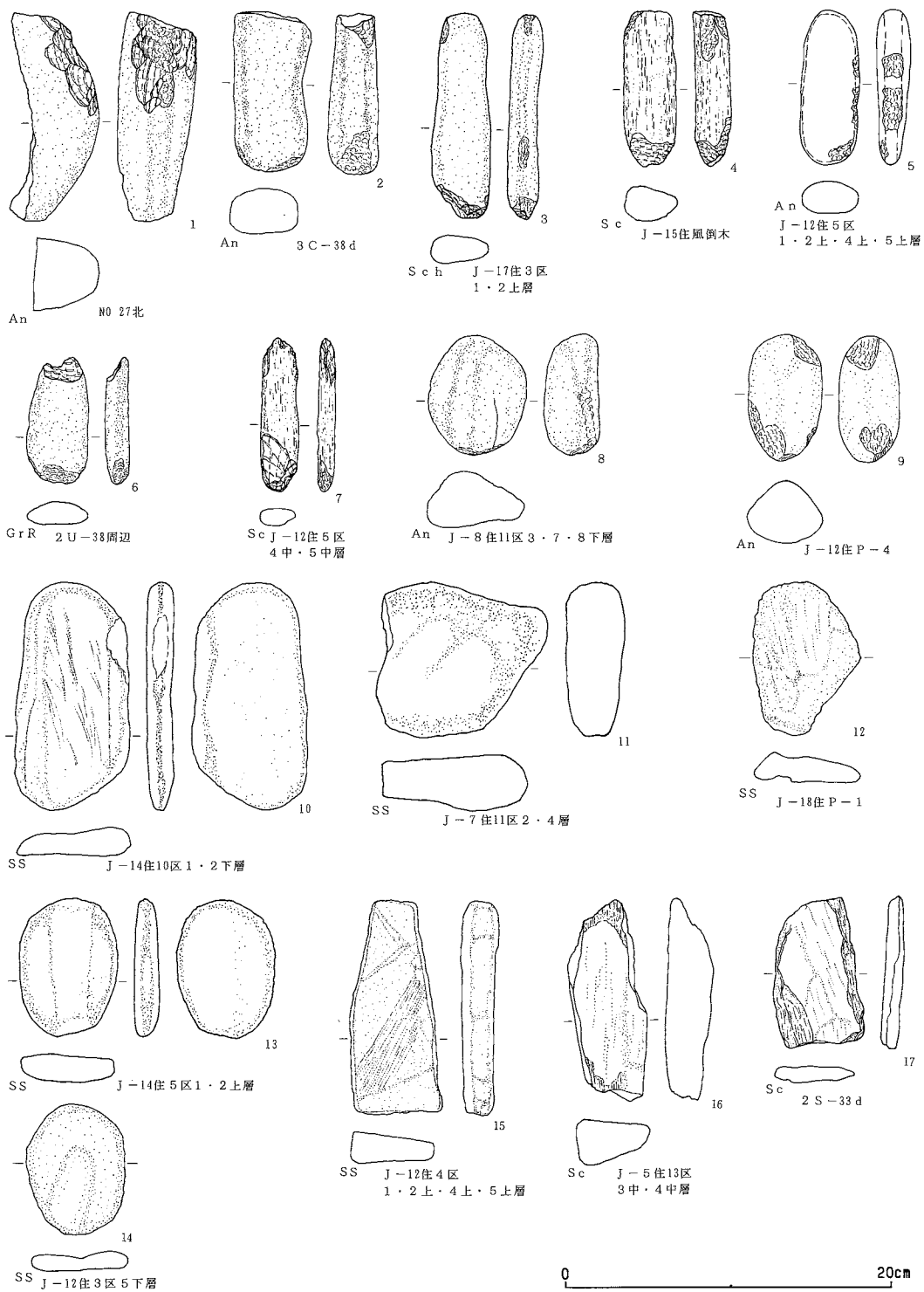
【敲石】（第128図1～9） この器種は調理用具的な磨面を有しない工具的色彩の強い石器である。48点検出された。Ⅲ形態（棒状：2～7）は54.1%と最も多い。この形態では両端部側面に敲打痕が顕著に観察されるものが多い。また、欠損率も高い傾向を示す。そして、Ⅲ形態では様々な大きさのものが存在するが、小形のものが多い。石材は安山岩・結晶片岩・緑色岩類・チャート・頁岩と多様である。特に、他の形態には存在しない結晶片岩がこの形態では26.9%と比較的大きな比率である。以上の観察所見から、この形態はB類を主体とした打製石器の直接打撃用ハンマーとして用いられた可能性が高い。

これに対し、Ⅰ形態（円形：8）やⅡ形態（楕円形：9）は敲打痕が面的に観察されるものがしばしば認められる。また、こうした例は石材も安山岩が多用されており、60%以上を占める。このように、Ⅲ形態とは異なる点が多く、使用対象も違っていと推定される。Ⅴ形態（1）は安山岩製の大型円礫の破片を利用したもので、Ⅱ形態に近い機能部を有している。

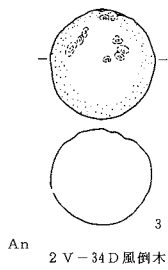
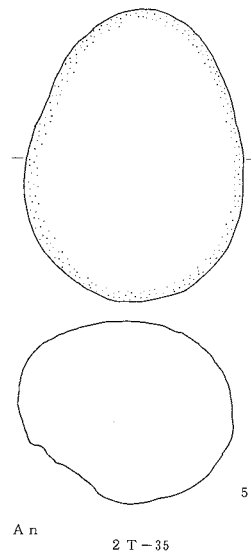
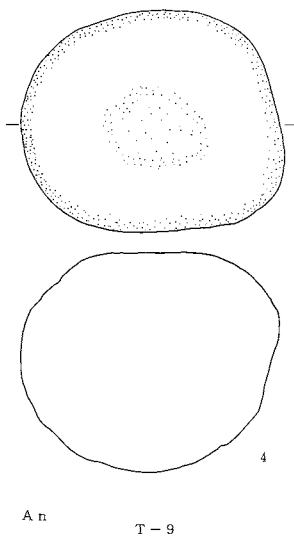
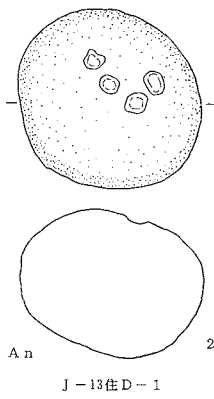
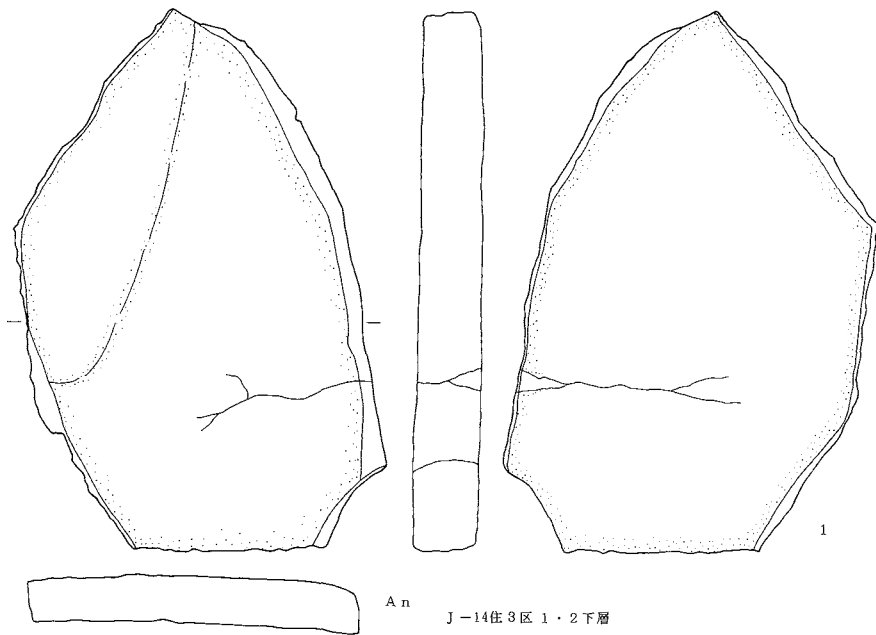
【砥石】（第128図10～17） 全体で95点検出された。牛伏砂岩製の荒砥（Ⅰ形態：10～15）、砂岩・結晶片岩製の中砥（Ⅱ形態：16）、結晶片岩製の仕上砥（Ⅲ形態：17）に分類可能である。85%はⅠ形態であり、研磨痕が観察される例が認められ、長軸に対して斜めに研磨痕が観察される例が多い。また、砥石の大きさ、研磨痕の幅・深さ多様であり、複数の対象物に対して用いられたことが推定される。Ⅱ形態やⅢ形態は少ないが、一部石皿に分類されたものの中に含まれていると推定され、もう少し多いと思われる。

【台石】（第129図1） 台石は3点検出された。すべて安山岩製である。1は表裏とも研磨面が観察され、石皿あるいは砥石の可能性もある大型のものである。これ以外の台石は敲打痕が一部に観察されるものであり、金床石のような形状のものが存在する。用途は不明である。

【石棒】（第130図1～3） 石棒は3点検出された。1は全体に敲打痕が観察される。全体に加



第128図 敲石・砥石実測図



0 40cm

第129図 台石・多孔石・丸石実測図

工を施し、形状を整えている。石材は結晶片岩である。また、2は先端部の破片である。横位に刻みを施しているが、研磨痕は観察されない。石材は結晶片岩である。3は大形の石棒であり、研磨により整形している。D-146号土壙の上部から検出され、墓標として立てられていたと推定される。いずれの石棒も出土位置からみて、前期後半のものとして推定され、石棒としては初源的なものと考えられる。

【棒状礫】(第130図3～26) 棒状礫は多数前期の遺構から検出されている。3は安山岩製の大型のもので、3は土壙墓と推定される土壙から検出されており、墓標の可能性はある。多少研磨されて形状が整えられている可能性がある。4も同様な形状であるが、加工痕は全く認められない。

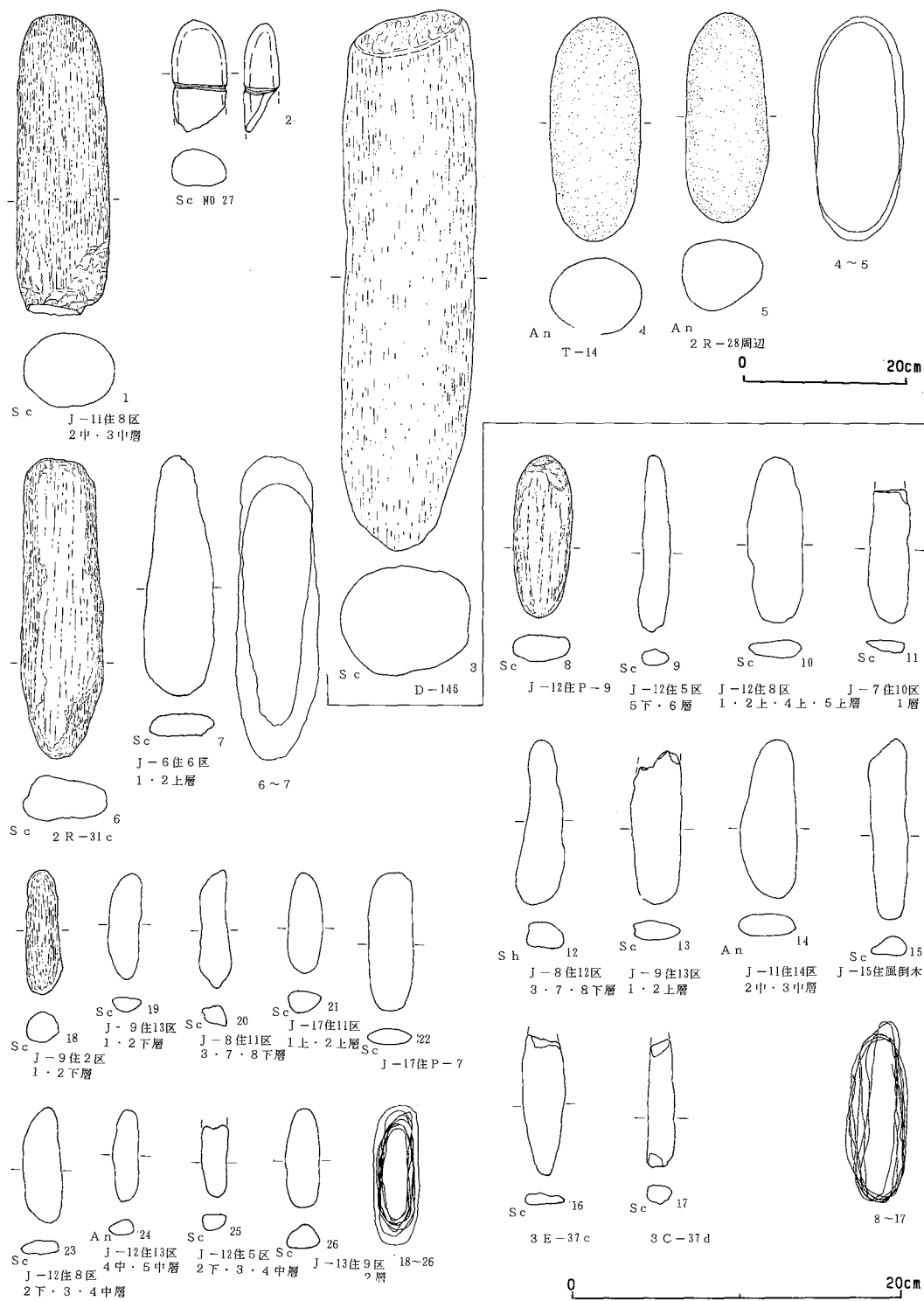
また、中形・小形の棒状礫は大きさから中形(6～7)、小形(8～17)、超小形(18～26)の3群に分類することができる。加工痕は全く観察されず、頁岩製の数点を除き大部分結晶片岩製である。欠損しているものも多少あるので、敲石として用いるために搬入された可能性もあるが、結晶片岩に対する強い選択性が認められるので、石棒的機能を有していた可能性がある。

【多孔石】(第129図2・3) 全部で4点検出され、すべて安山岩製である。大形で丸石の表面に凹穴がつけられたもの(2)と、やや小形で球状を呈するもの(3)が存在する。後者は1点のみで、多孔質の安山岩製である。墓と推定される土壙内から検出された例が1例認められた。

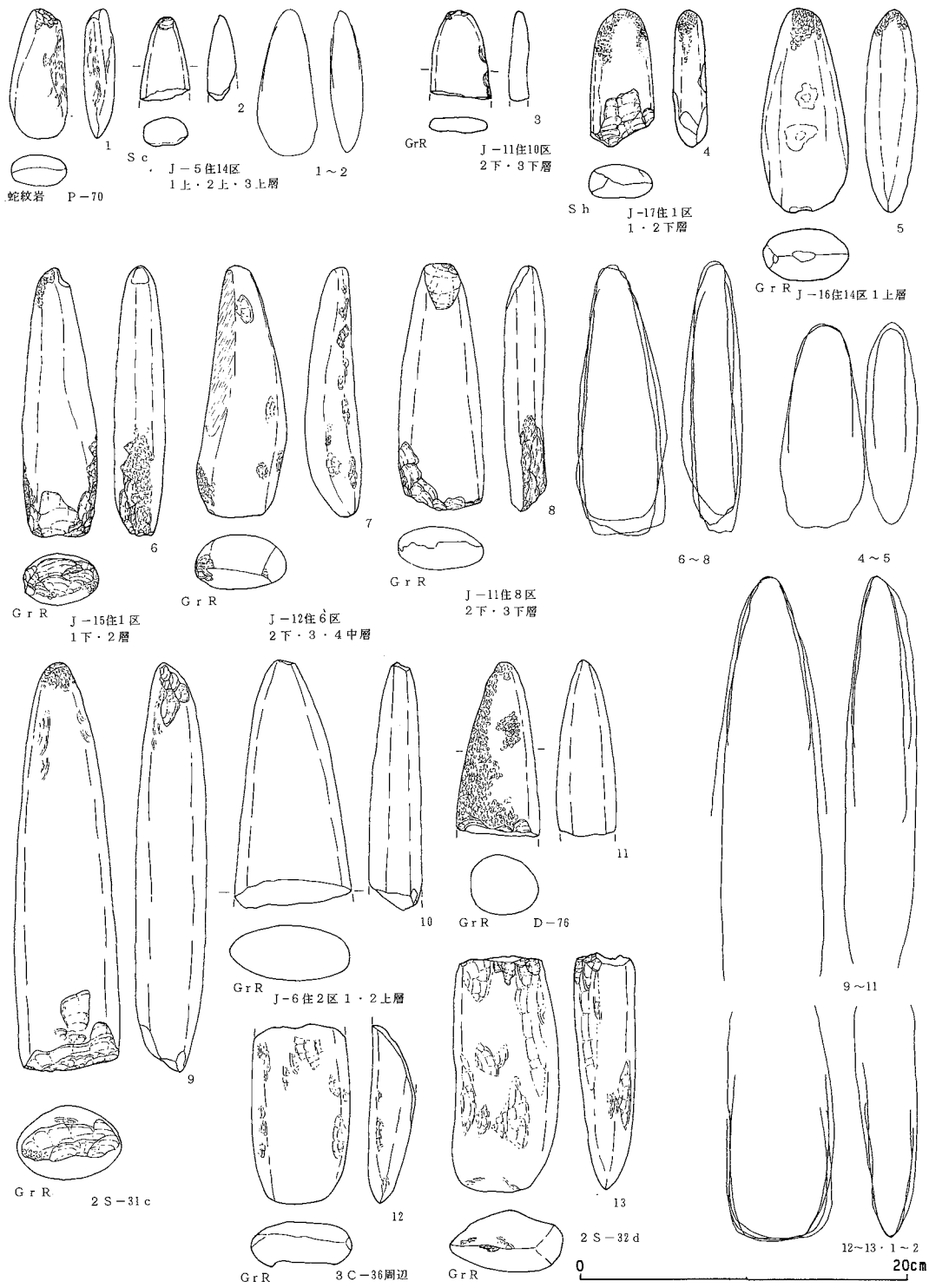
【丸石】(第129図4・5) 4点存在し、すべて安山岩製である。研磨して形を整えている。3は墓と推定される土壙(T-9)の中心に置かれていたものである。

【磨製石斧】(第131図、第132図1・2) 破片も含め、全部で44点検出された。定角式(b)のものは、わずかで大部分は断面楕円形を呈する形態(a)である。大きさにより、I a形態(第131図1～5)、II a形態(同6～8)、III a形態(同9～13・第132図1・2)に分類可能である。緑色岩類が多用され、結晶片岩・頁岩は少ない。また、欠損率は非常に高い。多くのものに剥離痕や敲打痕が認められ、敲石に転用されたことが窺える。また、打製石斧に転用されたものも存在している。磨製石斧は住居址最上層から検出されたものが多い傾向がある。

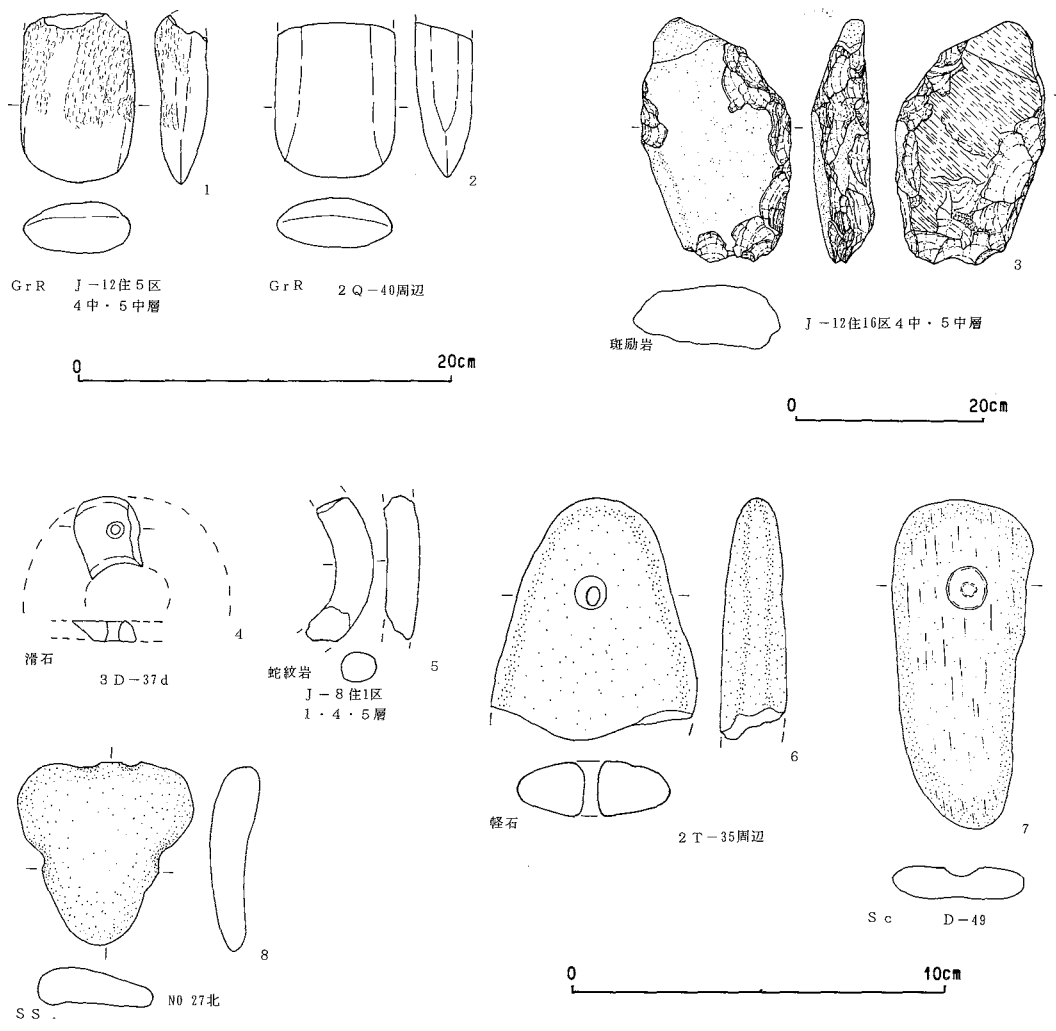
【石核E類】(第132図3) この石核は緑色岩類(斑斕岩)製であり、剥片2点が接合する。周囲を粗く調整しており、大きさから判断して、磨製石斧の荒割り段階のものと考えられる。遺跡内では緑色岩類の剥片は少量しか出土していないことから、遺跡内で磨製石斧の製作が行われて



第130图 石棒·棒状砾实测图



第131图 磨製石斧実測図



第132図 磨製石斧・石核E類・石製品実測図

いたとは判断し難い。しかし、このような例が遺跡内に存在することから、磨製石斧の一部は遺跡内で製作されていた可能性がある。

〔石製品〕（第132図4～8） 全部で6点検出された。玦状耳飾1点、垂飾1点、垂飾未成品1点、岩偶状石製品1点、用途不明石製品1点、部分研磨礫2点が検出された。

玦状耳飾（4）は滑石製であり、大部分が失われている。補修孔が穿孔されている。垂飾（6）は軽石製であり、下部が欠損している。垂飾未成品は表面から穿孔しかけた状態のものであり、結晶片岩製である。墓と推定されるD-49号土壙中から出土した。用途不明石製品は湾曲した棒状を呈しているが、欠損しているため全体形状ははっきりしない。本来は環状を呈していたと推定される。蛇紋岩製で光沢があり、装身具と思われる。

図示しなかったが、これ以外に小礫の一部を研磨した石器が2点検出された。これらの石器は早期段階の遺物である可能性がある。

（3）弥生時代の遺構と遺物

a 遺構

住居址（第133図～第134図）

弥生時代後期（樽式期）の住居址が3軒検出された。形態及び遺物出土状態は図示したとおりである。

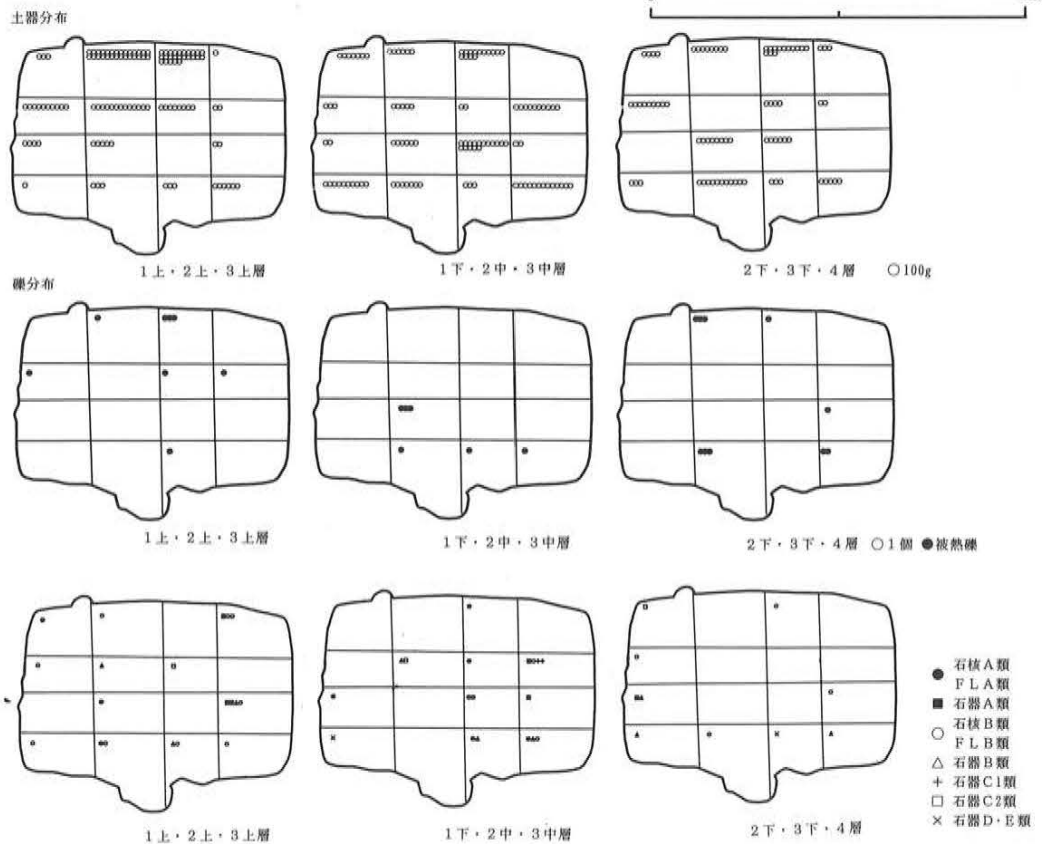
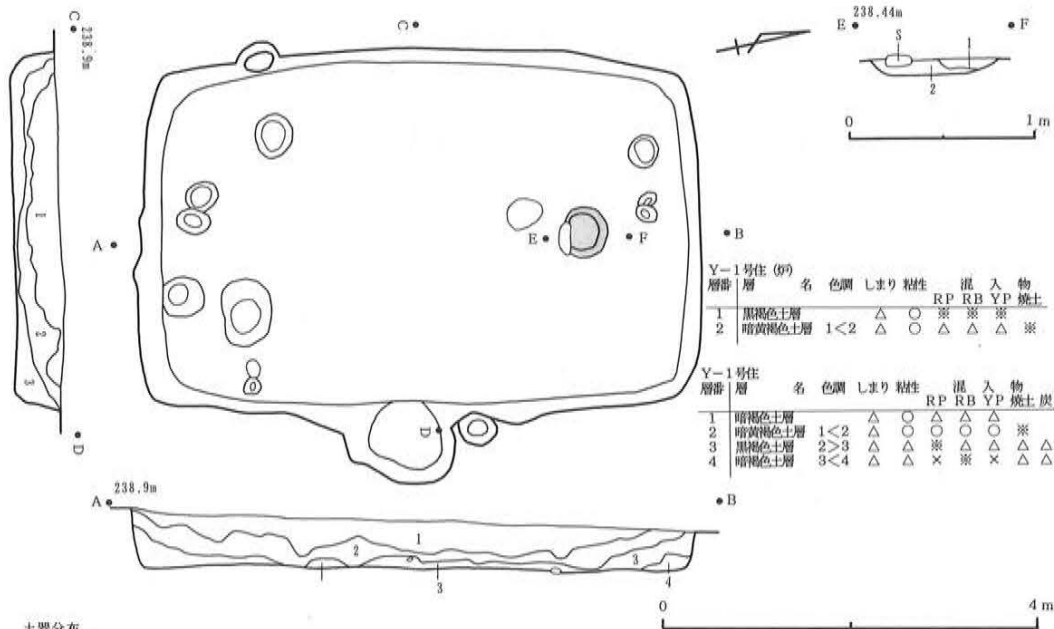
いずれの住居址も平面形は長方形で比較的深い掘り込みをもつ。支柱穴はY-1号住居址では3本確認されたが、本来は4本と推定される。また、Y-2号住居址は長軸中心線上に2本存在し、Y-3号住居址でも2本である。以上のように、いずれの住居址も比較的簡単な上部構造であったことが窺える。そして、いずれも地床炉でY-2号住居址以外は枕石をもつ。特殊な遺構では、Y-2号住居址の南東壁際で、周囲に土手状の高まりをもった深いピットが検出された。

縄文時代の遺物が流れ込んでいる以外は、いずれの住居址も出土した遺物は少ない。Y-3号住居址ではS-8号配石遺構の礫の一部が流れ込んでいる。

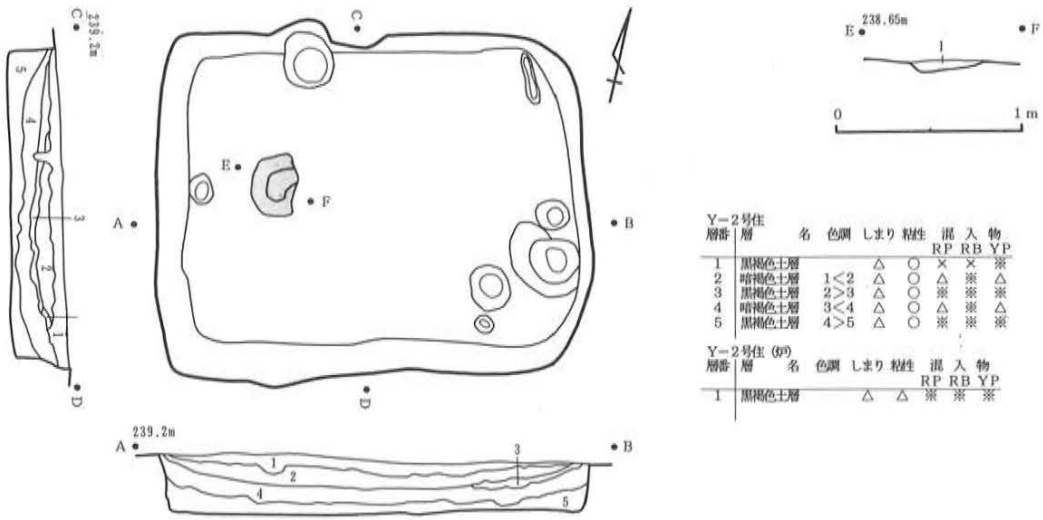
これらの住居址は当期のものとしては、中形以下の規模である。このうち、中央に存在するY-1号住居址が最も大きく、次いで西に存在するY-2号住居址、東に存在するY-3号住居址の順である。また、3軒の住居址は主軸方向は異なるものの、東西に直線状に等間隔で並んでおり、遺物も同時期であることから、同時併存していた可能性もある。

b 遺物（第135図上段）

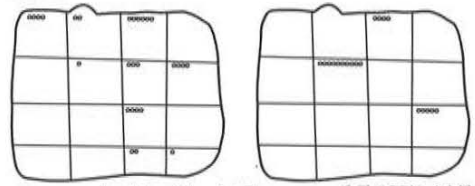
いずれの住居址も出土した遺物は非常に少ない。Y-1号住居址からは壺の胴下半部（1）と



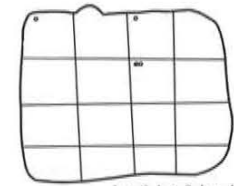
第133図 Y-1号住居址実測図



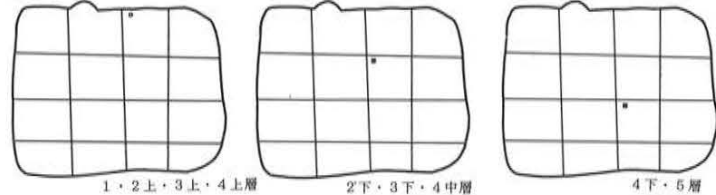
土器分布



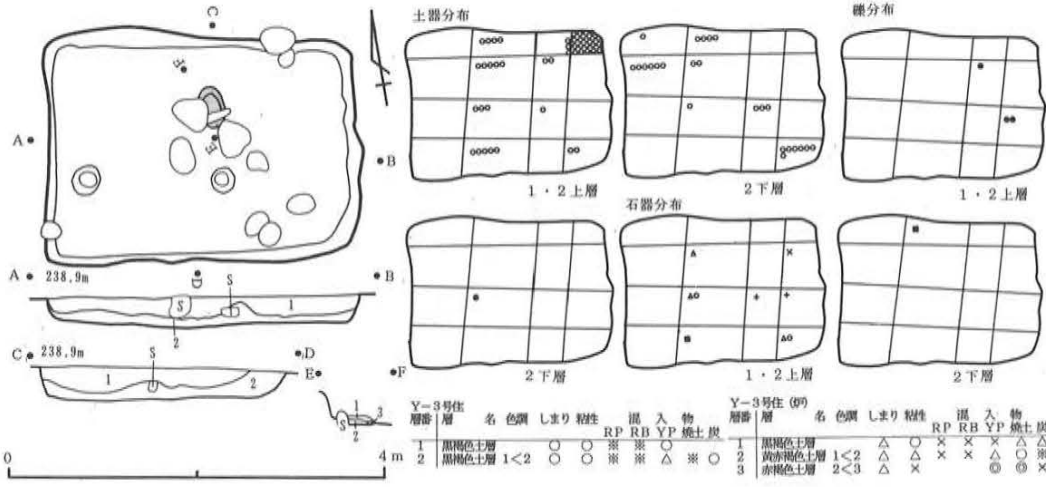
礎分布



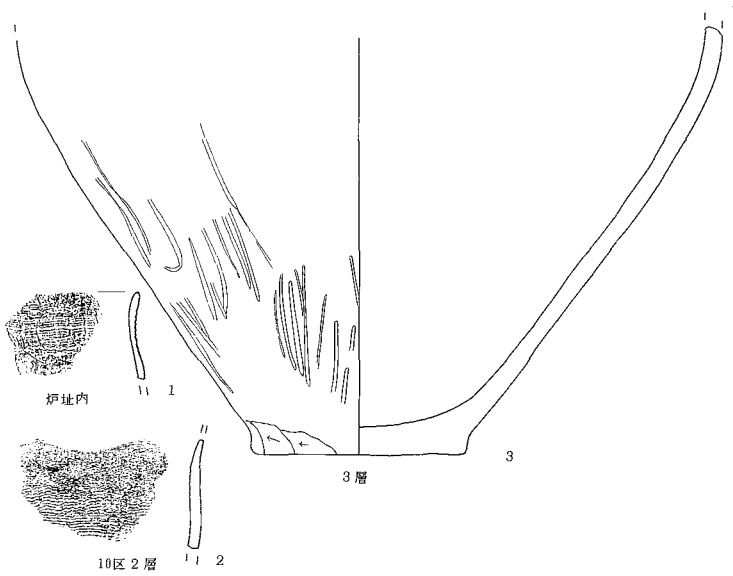
石器分布 1・2上・3上・4上層 2下・3下・4中層 4下・5層 ○100g ○1個 ●被熱燻



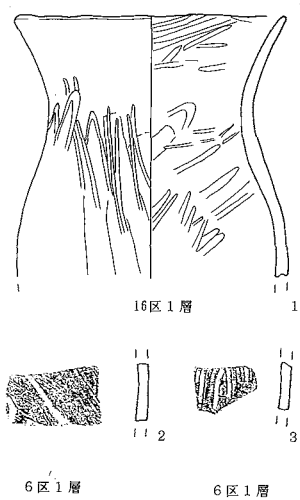
- 石核A類
- F.L.A類
- 石器A類
- 石核B類
- F.L.B類
- △ 石器B類
- +
- 石器C1類
- 石器C2類
- × 石器D・E類



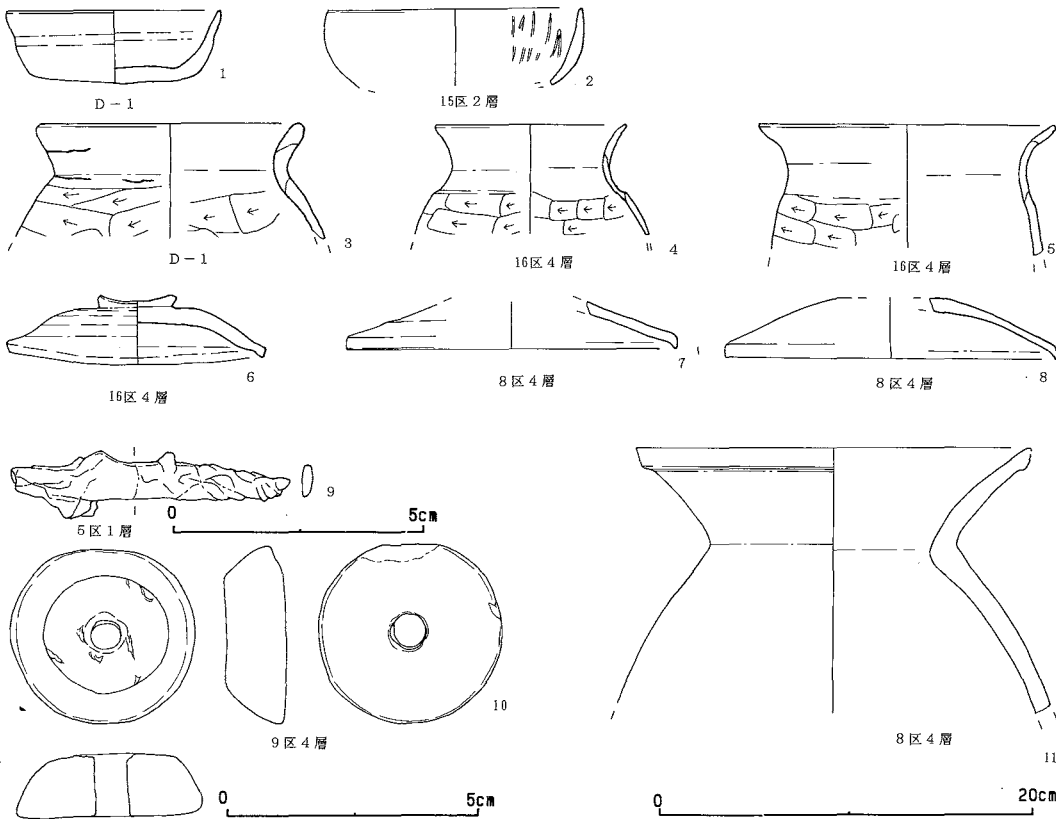
第134図 Y-2・3号住居址実測図



Y-1号住居址出土の土器

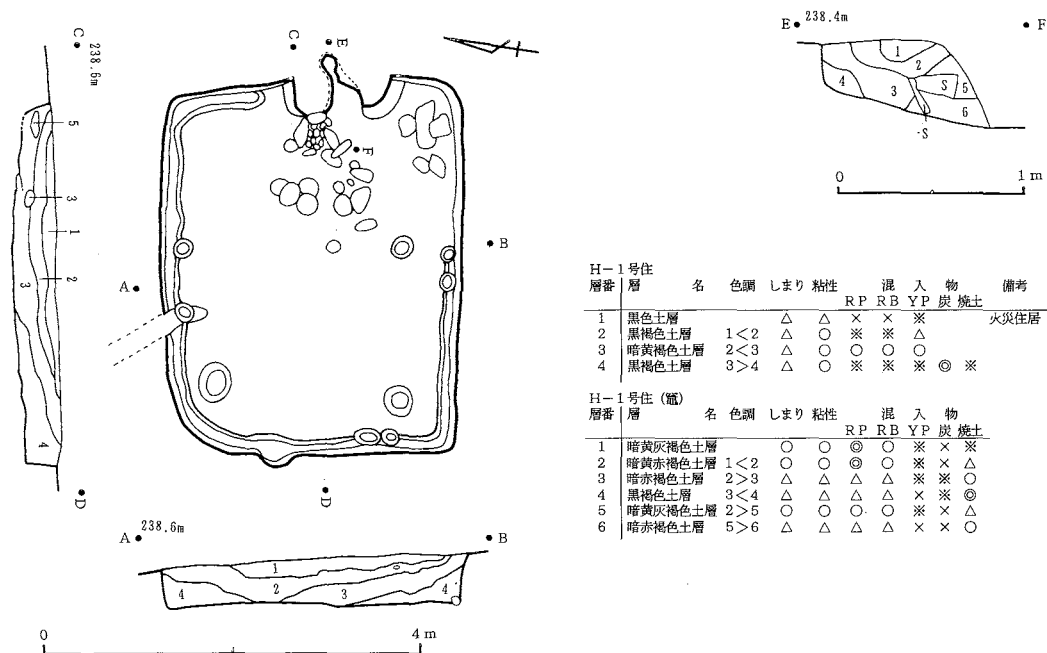


Y-3号住居址出土の土器



H-1号住居址出土の土器

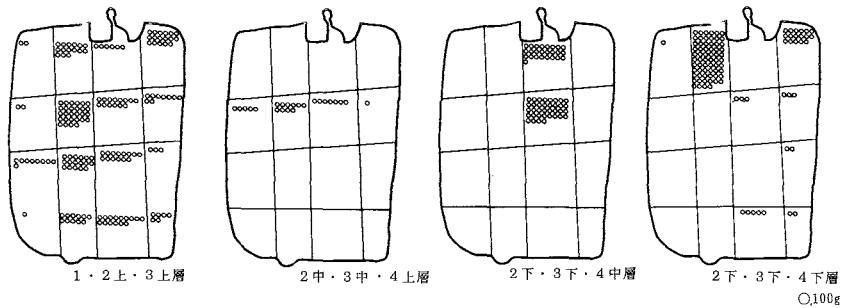
第135図 Y-1号・Y-3号・H-1号住居址出土の土器



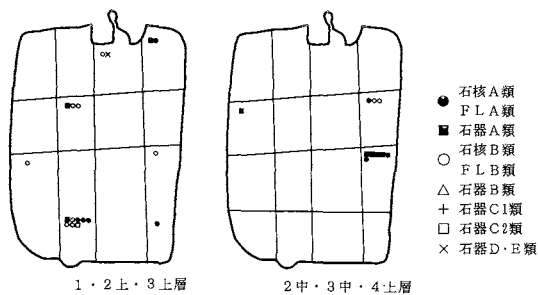
H-1号住		名	色調	しまり	粘性	混入物			備考
層番	層					RP	RB	YP	
1	黒色土層			△	△	×	×	※	火災住居
2	黒褐色土層	1<2	△	△	○	※	※	△	
3	暗黄褐色土層	2<3	△	○	○	○	○	○	
4	黒褐色土層	3>4	△	△	○	※	※	※	

H-1号住(箱)		名	色調	しまり	粘性	混入物			備考
層番	層					RP	RB	YP	
1	暗黄灰褐色土層			○	○	◎	○	※	×
2	暗黄赤褐色土層	1<2	△	△	◎	○	※	×	△
3	暗赤褐色土層	2>3	△	△	△	△	※	※	○
4	黒褐色土層	3<4	△	△	△	△	×	※	◎
5	暗黄灰褐色土層	2>5	△	△	○	○	△	×	△
6	暗赤褐色土層	5>6	△	△	△	△	×	×	○

土器分布



石器分布



第136図 H-1号住居址実測図

甕の口辺部破片（2・3）が検出された。2・3は頸部に簾状文と波状文が施文される。また、Y-3号住居址では甕（1）が検出されている。これらは、いずれも樽式である。

しかし、同じY-3号住居址からは、沈線文と細密条痕文が施文された小破片（2・3）が検出されている。これらの土器は中期のものと推定される。

（4）奈良・平安時代の遺構と遺物

a 遺構

住居址（第136図）

H-1号住居址1軒が調査区の東端で検出されたのみである。形態は中形縦長方形を呈するものである。掘り込みは比較的深く、細い壁溝が存在する。主柱穴は明確ではない。竈は東壁やや南寄りに構築されている。竈の構築材は袖部はローム混じりの褐色土と凝灰岩製の板状礫を用いている。そして、天井石は凝灰岩の礫を用いている。南東隅には凝灰岩製の板状礫により蓋をされた土坑が存在する。

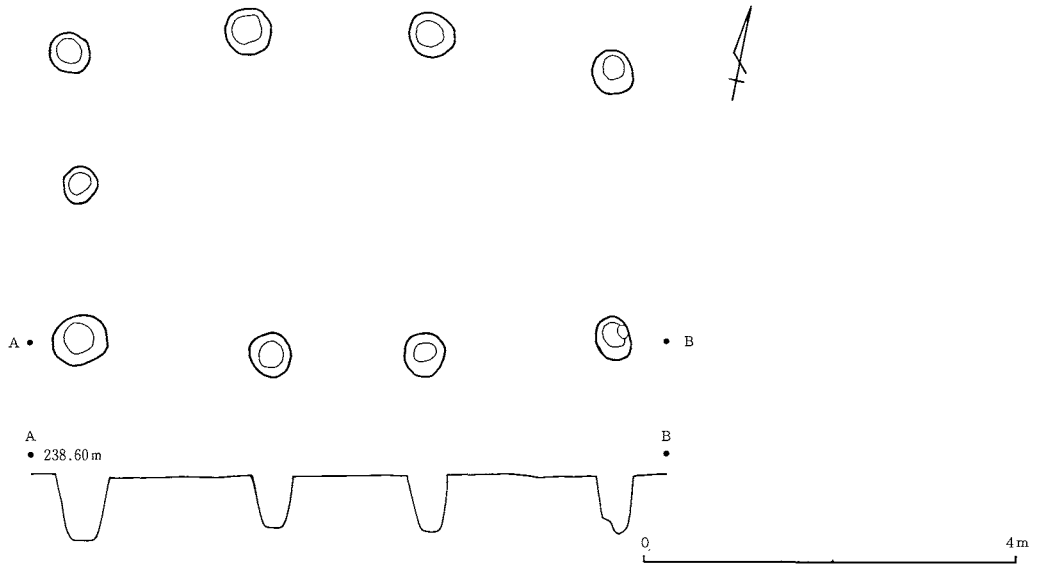
この住居址は火災を被った形跡があり、遺物の遺存状態は比較的良好であった。竈周辺には大形の河原石（安山岩）が集中して検出された。いわゆる「竈封じ」が行われたと推定される。

掘建柱建物址（第137図）

HT-1号掘建柱建物址が1軒検出された。この建物址は2軒×4軒であり、柱間距離で東西5.7m・南北3.4mの規模をもつ。この建物に伴う遺物は全く検出されなかったが、H-1号住居址の北東部に位置しており、同時期のものである可能性が高い。

b 遺物（第135図下段）

この時期の遺物はすべてH-1号住居址から出土したものである。遺物としては土師器坏（1・2）、土師器甕（3～5）、須恵器蓋（6～8）、須恵器甕（11）、鉄製刀子（9）、石製紡錘車（10）が存在する。これらの遺物は8世紀末～9世紀初頭のものとして推定される。（金井京子）



第137图 HT-1号 掘立柱建物址实测图

(5) 小結

a 遺構と遺物の関係

本遺跡は縄文時代前期を主体とし、他の時期の遺構・遺物は少なく、相互関係を分析する内容に乏しい。よって、ここでは縄文時代前期を中心とした遺構と遺物の関係について、分析を行うことにする。

〔住居址と土器群の関係〕 住居址と土器群の関係を整理すると、第138図・第139図のように表すことができる。図中の丸は出土土器を検討し、住居の使用されたと推定される時期を表したものである。また、丸は炉体土器から判断して、住居の使用推定時期を示した。また、それと共に各段階の特徴と、その段階に該当する代表的な土器を図示した。このように、かなりの時間幅をもった土器群が住居址から検出されていることが解る。そして、住居址の使用時期以降の遺物が検出される場合は、住居廃絶後の廃棄活動や、流れ込みの結果として理解することができる。しかし、使用時期以前の遺物がすべての住居址から検出されている。例えば、本遺跡では最古のJ-12号住居址の場合3回拡張が行われており、拡張以前の土器が混在していると考えられる。しかし、拡張・重複が確認されない住居址でも、こうした現象は普遍的に認められる。この要因としては、廃棄活動の際、前段階の遺物も含めて廃棄が行われていたことが推定される。

また、住居址の重複関係をみると、時期が隔たっている場合と、時期が近接している場合がある。前者の場合は土器の分離は容易であるが、後者の場合は土器の出土状態によりある程度確認できるものの、完全に分離することはできなかった。ただし、時間的推移の傾向については把握可能な状態であった。

本遺跡の場合、I b段階とII c段階に住居址が多く構築されている。しかし、II a前半段階(諸磯a期)とII b段階では住居址が途切れており、集落は連続的なものではなく、一時断絶していたことが判明した。

こうした、出土遺物と重複関係から、住居址の形態と変遷について示したのが、第140図である。形態等については、住居址の項ですでに詳細について述べているので、ここでは簡単に触れるにとどめる。すなわち、土器による段階と住居形態の関係は以下のとおりである。

I a 段階 1 形態

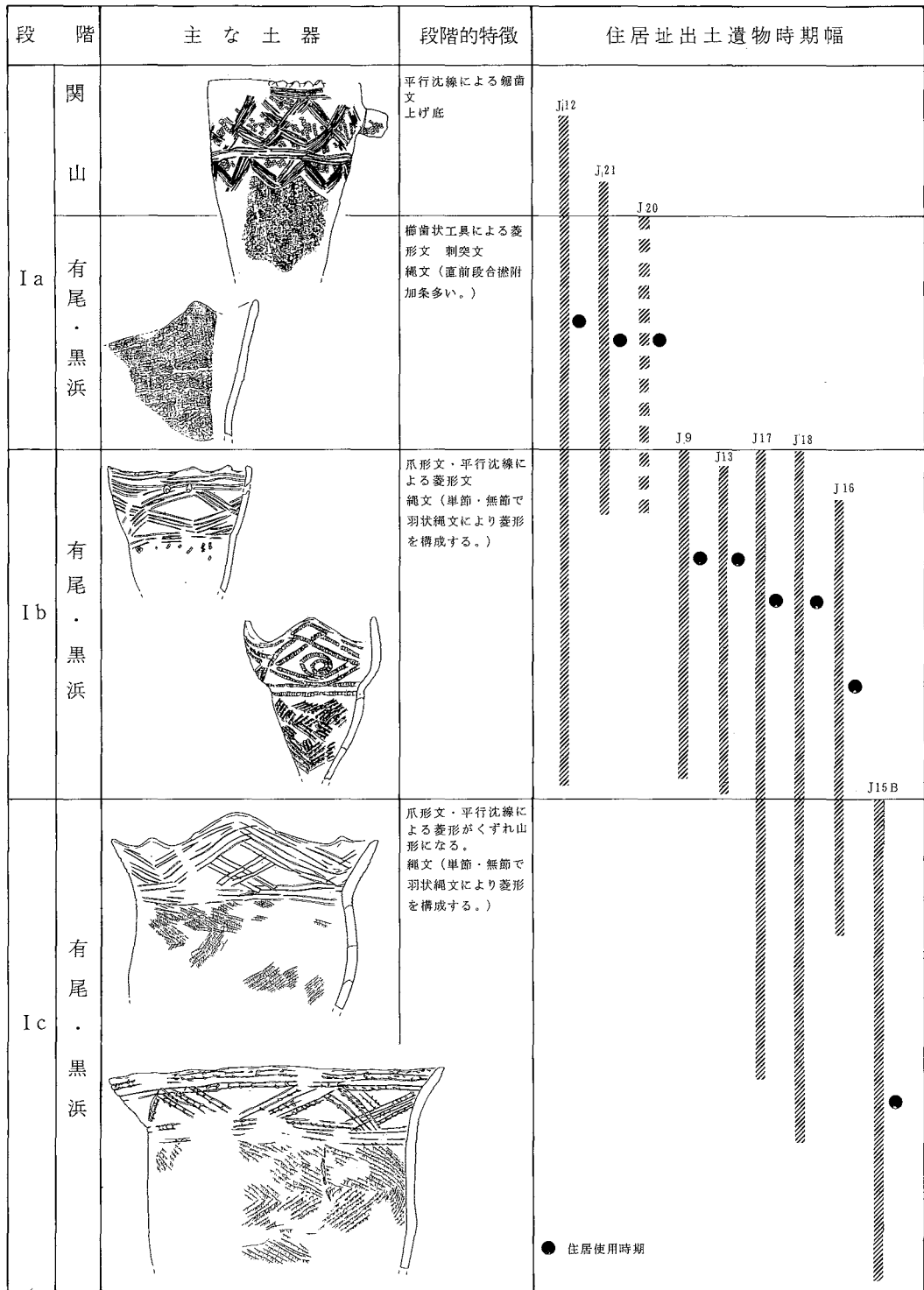
I b 段階 2 形態・3 形態

I c 段階 3 形態

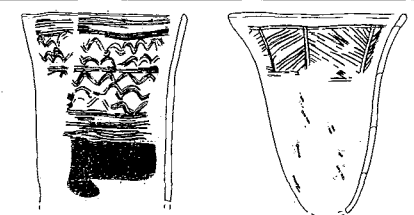

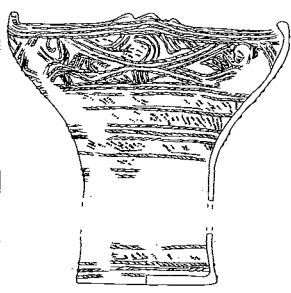
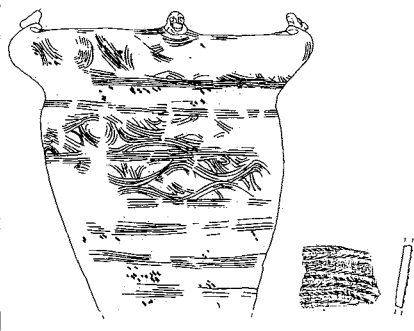
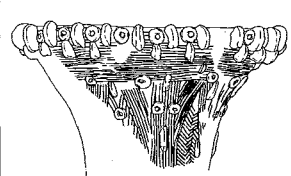
II a 段階 4 形態

II b 段階 4 形態

II c 段階 5 形態・6 形態



第138図 住居址出土土器変遷図（1）

段 階	主 な 土 器	段 階 的 特 徴	住 居 址 出 土 遺 物 時 期 幅
IIa	諸 磯		竹管による肋骨文 木葉文 波状文 J6 J5
	b		巾広爪形文 ●
IIb	諸 磯		浮線（肉厚） 平行沈線 ●
	b		
IIc	諸 磯		浮線 偏平になる 平行沈線 J14 J15A J11A J8 ●
	b		★
II d	諸 磯		集合沈線による施文 貼付文 ●
	c		J11B J7 ★ ●

第139図 住居址出土土器変遷図（2）

II d 段階 5 形態・7 形態

このように、土器による段階と住居形態の変遷は大枠において、整合性を有していることが理解できる。換言すれば、土器と同様に住居址も型式を有していると言うことができる。

〔土壙と遺物の関係〕 土壙は廃棄パターンを有する円形のもの、墓壙と推定される楕円形・隅円長方形のものに大別できることが、これまでの検討結果として明かになっている。

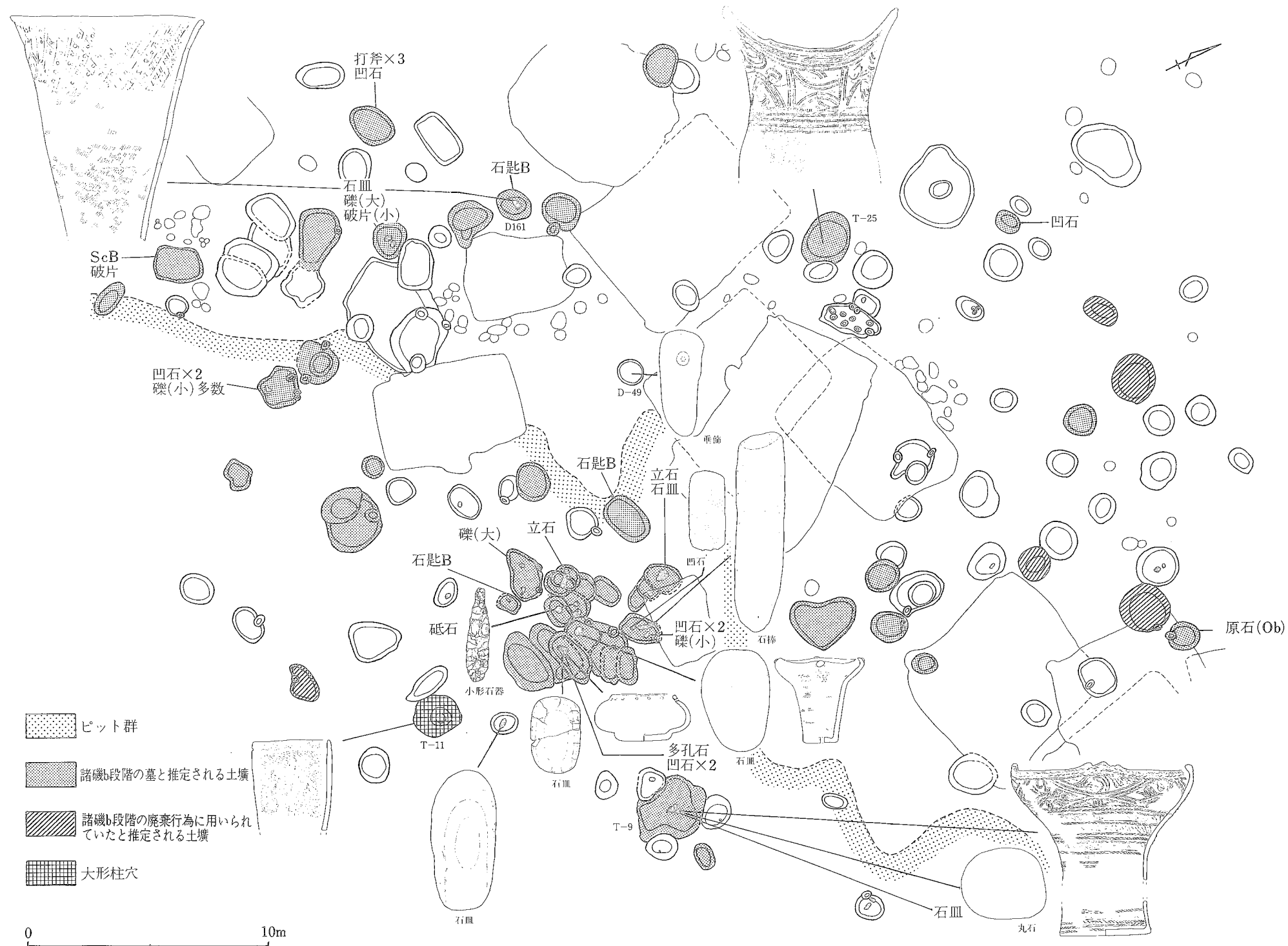
廃棄パターンを示す土壙の場合、特定の遺物との相関関係は認められない。しかし、墓と推定される土壙では、特定の遺物との関係が認められる。

第141図はII a～II b 段階に形成された墓壙と推定される土壙群と遺物の関係を示したものである。この土壙群は長軸約30m、短軸約20mの楕円形に土壙が配列している。そして、さらに北側の土壙群も一見すると、これらと混同してしまいそうであるが、これらの土壙は「廃棄パターン」を示しており、墓壙とは異なる。また、この土壙群が形成される前段階（I a～I c 段階）でも、この部分は廃棄パターンを呈する土壙が集中し、土壙群を形成していた場所であり、廃棄場所として本段階においても認識されていた可能性がある。

次に、この土壙群の形成された時期であるが、出土土器が少ないので、ややはっきりしない点もあるが、II a 段階～II b 段階にかけて継続して形成されていったと推定される。一部はI b～I c 段階に形成された土壙（墓）群と重なっており、さらに以前から継続的に利用されていたことも明かである。環の中心部に存在するI c 段階のD-49号土壙からは垂飾未成品が出土しており、この場所の特殊性が窺える。

さて、土壙群は南東に位置するT-8号土壙を中心とした密集部分と、環状に疎に巡る部分に分けることができる。密集部分の南側には特殊な大形柱穴が存在しており、この部分の特殊性を示している。そして、石棒・大形棒状礫が立石として存在するものが3例認められる。また、小形石器・石匙B類・石皿・凹石・多孔石・砥石と有孔浅鉢・小形深鉢（ミニチュア）が出土している。石棒は「墓標」、石皿・凹石・多孔石は「抱石」、それ以外の遺物は「副葬品」と推定される。これらの遺物はほとんどが、これまでの分析でも、それぞれの器種の中で特殊なものとして存在していたものである。

これに対して、環状に巡る部分では、凹石・石皿・打製石斧・スクレイパーB類・黒曜石原石と深鉢形土器などが出土している。また、礫がまとまって出土している例も存在する。凹石・石皿は「抱石」と推定され、それ以外は「副葬品」と推定される。このうち、石器では特別のものはほとんど存在せず、一般的なものや欠損品である。ところが、土器では新潟系の格子目文土器（D-161）や、大波状口縁大形深鉢形土器（T-25）といった特殊なものが出土している。それぞれ、底部が欠損している点でも共通性が認められる。なお、これらの土器が出土した位置は東



第141図 IIa~IIc段階の土壌群と出土遺物

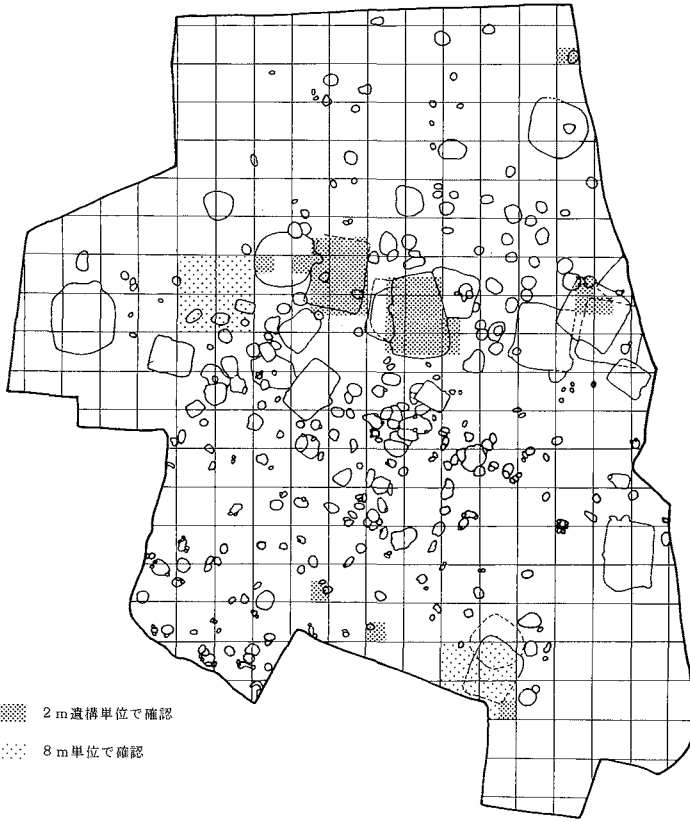
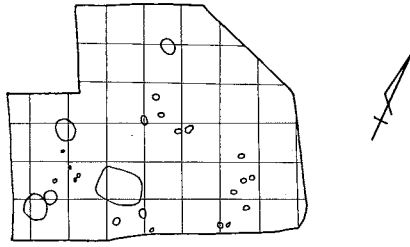
の密集部分の反対側にあたる場所であり、この部分はI b～I c段階の墓壙集中部分にあたる。また、これ以外に密集部分の東に存在するT-9号土壙は丸石・石皿・深鉢形土器が出土している。丸石・石皿は底面近くでまとまって検出されており、抱石と推定される。しかし、深鉢形土器は欠損部分も多く、本来完形であったかどうかは疑問の余地のある資料である。



以上のように、墓壙と推定される土壙群では、中心的な密集部分と、周囲を環状に巡る部分とでは出土遺物に差異が認められることが明かである。また、これまでは出土遺物を検討したが、この土壙群の中で、副葬品と推定される遺物を伴う例は非常に少なく、大部分は抱石が存在するのみである。こうした要因としては、被葬者間に何らかの違いが存在していたことが考えられる。この土壙群の場合、T-8号土壙を中心とする部分が、より上位の位置を占めていたと推定される。これに対し、異系統の土器を伴うものなどは遠く離れた位置が与えられていたものと思われる。このように、土壙間の格差は、この段階の社会組織の構成と密接に関連していると考えられよう。

また、墓壙と推定されるものでは、石皿・凹石などの特定の遺物が伴うことも判明した。例えば、土壙出土石器の器種組成(第100図)をみると、住居址に比べ凹石の比率が高い。これは凹石が土壙に伴い出土する傾向が高いことを意味している。

【遺物分布と遺構の関係】 縄文時代前期から中期にかけての、調査区内の大まかな分布傾向を時期別に示したのが、第142図～第147図である。この分布図をみると、それぞれの段階の遺構と遺物分布域は重なる部分が多いことが理解される。しかし、完全に分布域が一致することはなく、先に住居址と土器群の分析の項でも述べたが、新しい段階の廃棄行動により、それ以前の段階の遺物がかなり動かされており、前段階での様相を困難にしている。特に、I b～I c段階のものが、II a～II c段階の廃棄行動により動かされている状態が顕著であり、遺物分布も両段階で重なる部分が多い。しかし、詳細に検討すると、I b～I c段階では北寄りに分布域が広がっているのに対し、II a～II c段階ではやや南寄りに分布域が広がり、微妙に分布状態が異なっていることが窺える。

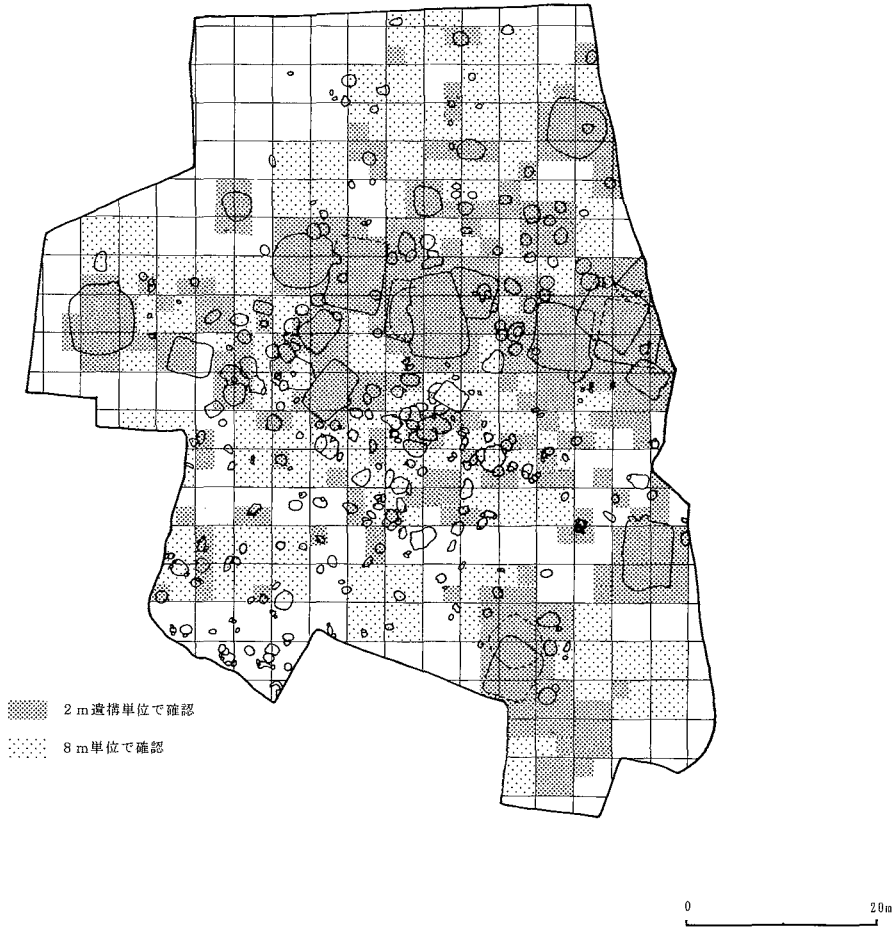
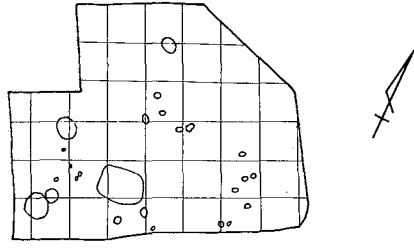
【ピット群と遺物の関係】 調査区南部には約2,000基のピットが集中する部分が存在する。この部分はII章でも述べたが、IV層とV層が攪拌された状態の遺物包含層が厚く堆積し、ちょうど遺構の覆土が面的に広範囲に広がっている状態であった。この包含層の下部で検出されたピット群は遺物分布状態から大部分前期中葉～後葉にかけての集落に伴う遺構と判断される。このようなピット群が集中する住居址群の内側部分については、「中央広場」としてこれまで認識されてきた。そして、集落の社会性をもった「場」として機能していることも、広く認識されている。本遺跡



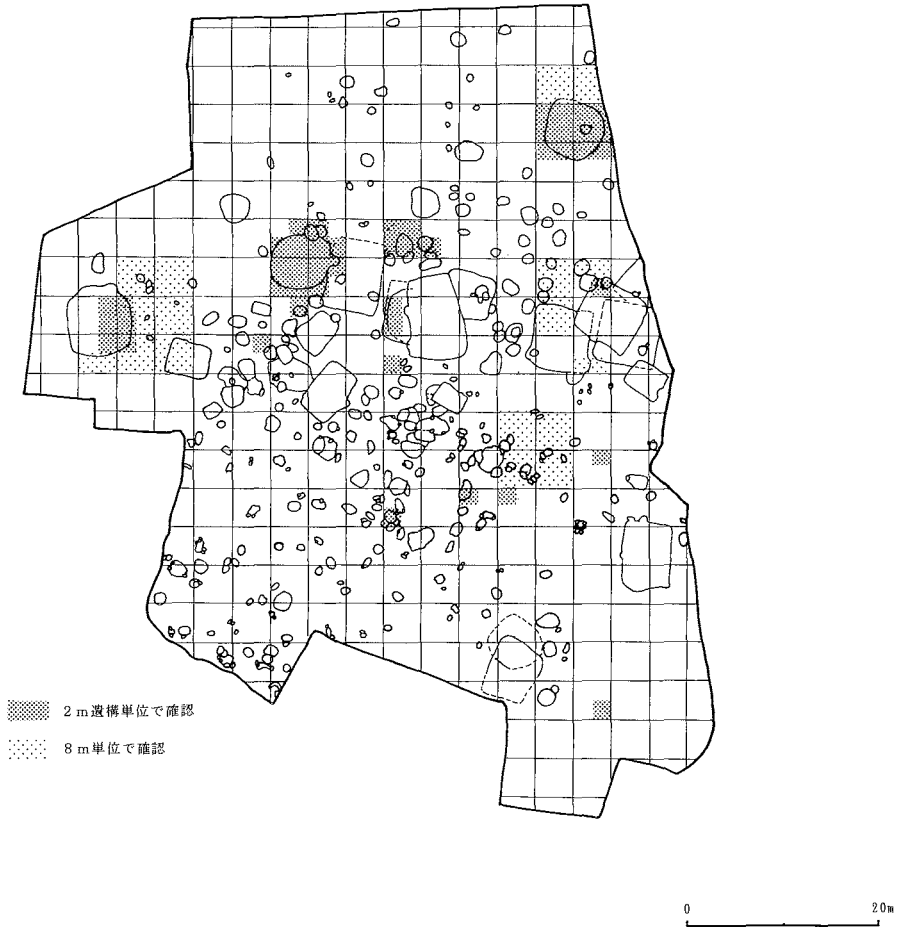
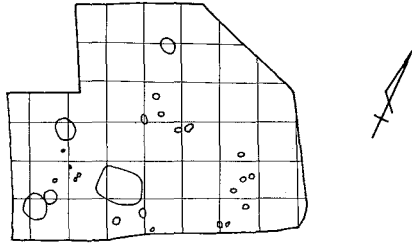
 2 m 遺構単位で確認
 8 m 単位で確認

0 20m

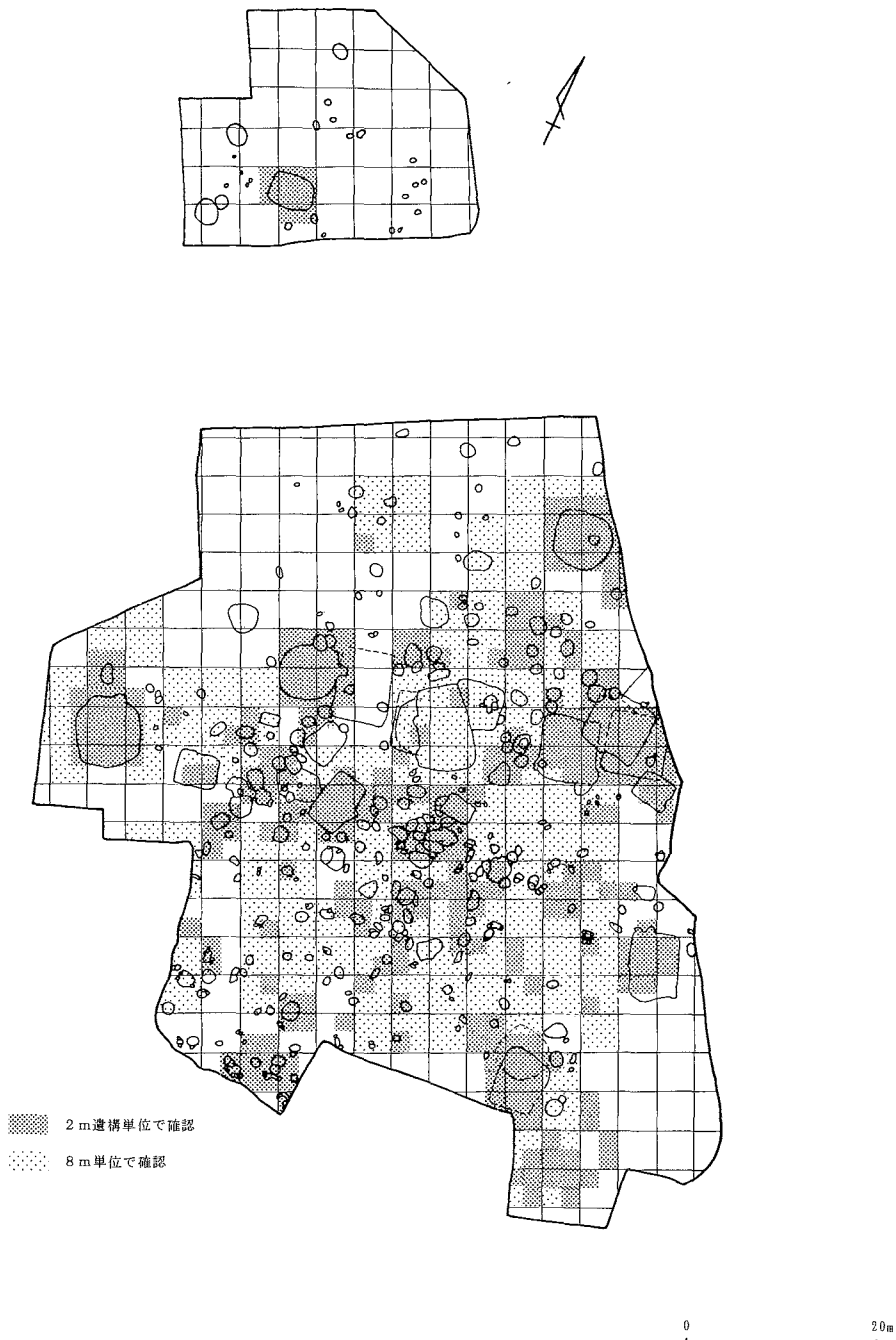
第142図 I a段階の土器分布図



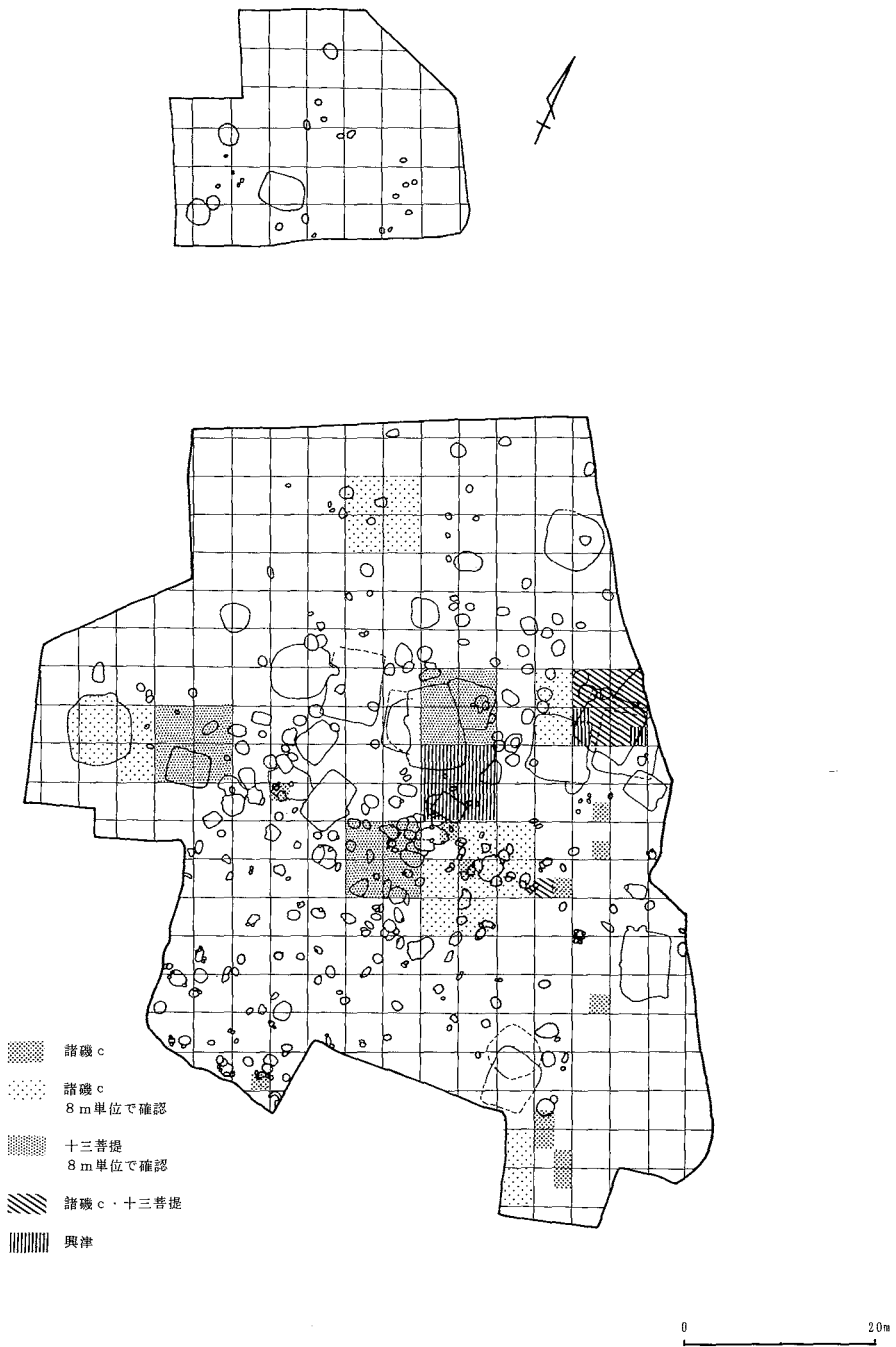
第143図 I a・I b・I c段階の土器分布図



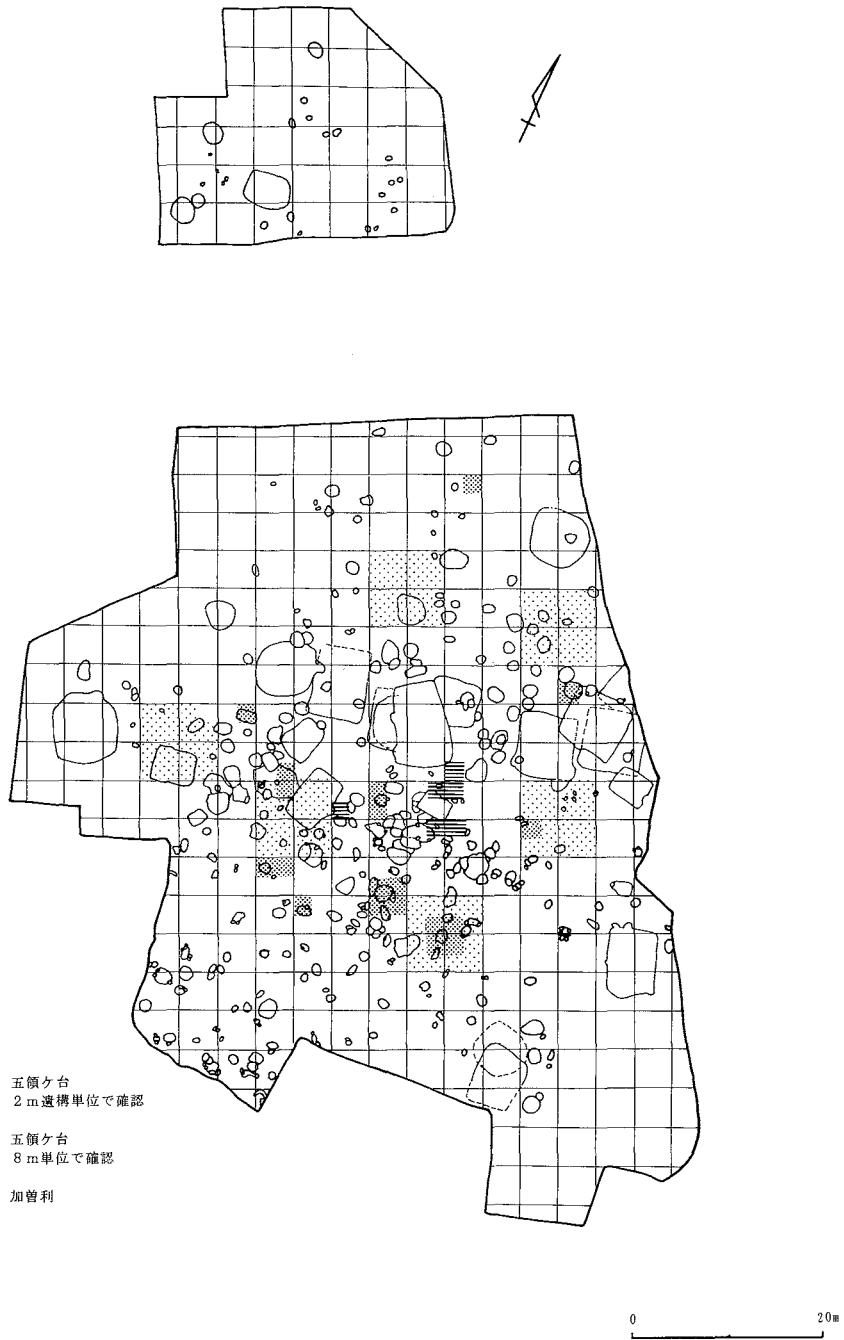
第144図 IIa段階（諸磯a）の土器分布図



第145図 IIa・IIb・IIc段階の土器分布図



第146図 II d段階の土器分布図



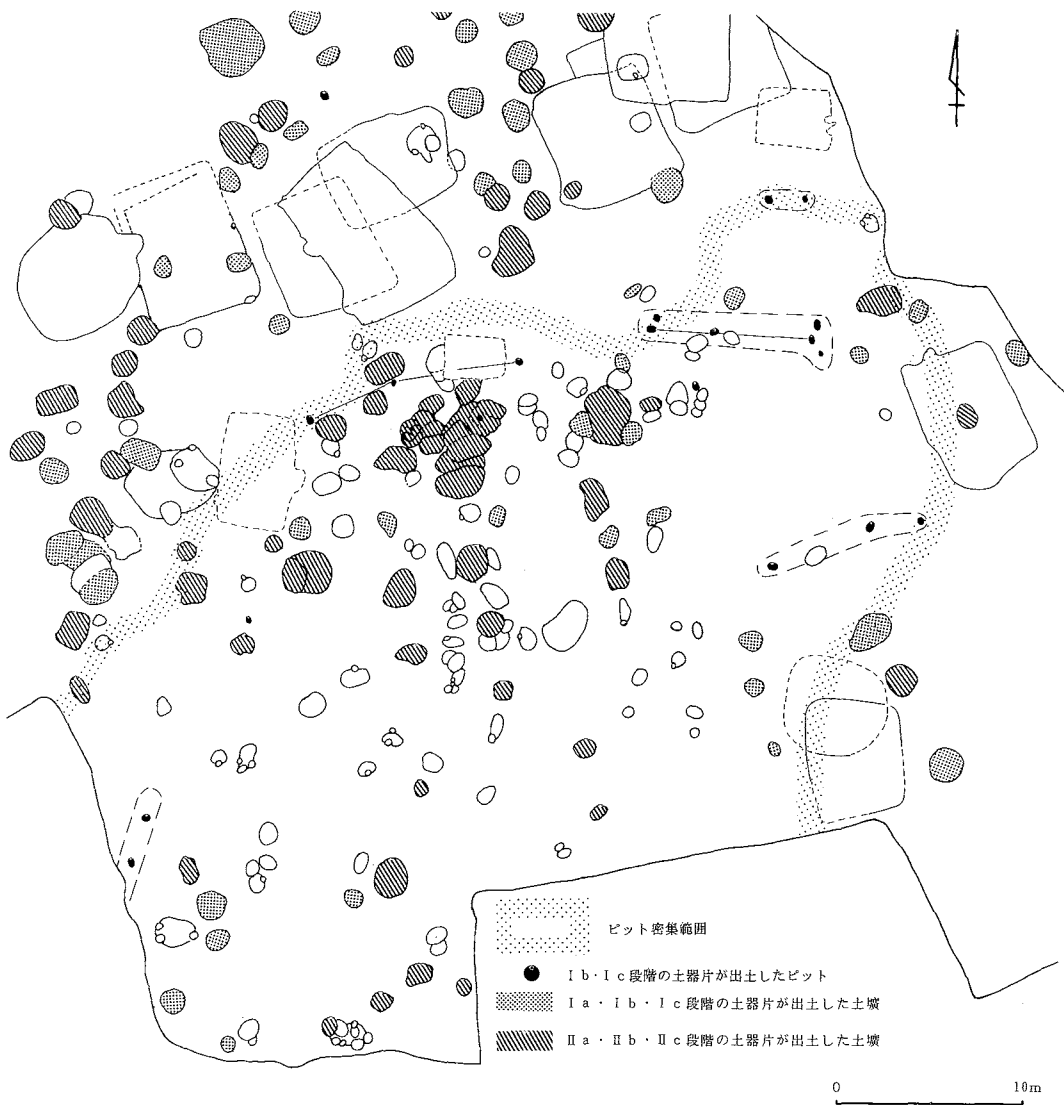
第147図 中期の土器分布図

の「中央広場」の場合、繰り返し簡易な構造物が作られていた場所であることが判明した。

遺物は広範な包含層中からは多量検出されている。しかし、そのみでは構造物の配列と時期的様相がはっきりしないので、土器・石器が検出されたピットの分布状態を調べることにする。

I b～I c 段階の土器が検出されたピットの分布は第148図のとおりである。これを詳細に検討すると、I b 段階のピットは中央広場北部にほぼ一列に並んだピット列が認められる。これに対し、I c 段階のピットは広場西側に存在するものと、広場北東に分布するものに分かれる。

次に、II b～II c 段階では第149図のように広場北東部に多く分布し、南部にもまとまりが認め



第148図 I b・I c段階の土器出土ピット分布

られる。分布域は I b ~ I c 段階とは異なっている。さらに詳細に検討すると、II b 段階のピットが大部分を占め、広場北東部と中央部の 2 カ所に集中する傾向が認められる。また、大形柱穴の周囲にも散漫に分布する。広場南部ではピットが平行して 2 列に配列しており、掘立柱建物址の存在する可能性がある。その規模は南北 10 m 以上・東西 2 m である。また、北東部に存在するピットは特別の配列は認められない。そして、II c 段階では広場東部にまとまる傾向があるが、はっきりしない。

石器・剥片等の出土したピットの分布は第 150 図のとおりである。広場北東部に集中する部分が



第149図 IIb・IIc段階の土器出土ピット分布

れる。このピット列では、打製石斧・石皿・スクレイパーB類・剥片A類（黒曜石）がほぼ等間隔に並んだピットから検出されており、興味深い状態を示す。

また、北東部に存在するピット群で土器が共伴するものは、すべてI段階（I c段階の1例を除きI b段階）であり、この部分のピットはI段階のものが多い可能性がある。しかし、II段階のピット群と重なる部分も多く、一概に決定することはできない。

以上の結果をまとめると、次のようになる。

多数のピットの中で、遺物が検出されたものは非常に少ないが、時期及び遺物の種類により、偶然とは判断し難い分布を示すことが明かとなった。また、ピット群の上部には遺物包含層が存在しており、検出された遺物は元来ピットの中位から下位に存在していたものである。したがって、すべてを単なる流れ込みとして説明することはできない。ゆえに、これらの遺物の大部分は意図的にピット中に入れられたものであるとみなすことができる。

そして、このように意図的に遺物を入れられたと推定されるピットは平面的にも規則性を有した分布状態を示しており、柱穴列または簡易な掘立柱建物址が存在していた可能性が高い。また、常に意図的に遺物を入れる行為が行われていたとすれば、大部分のピットから遺物が検出されているはずであるが、こうして遺物が検出されたピットは76基であり、全体のピットの4%にも満たない。したがって、こうしたピットは特殊な機能・用途を有し、特別の行事の際に用いられたものと考えられる。

こうしたピット列が形成されるのは、主としてI b段階とII b段階である。この段階はいずれも集落規模が拡大する時期に当たる。そして、位置と土壙墓群との関係を見ると、I b段階では特別な関係は認められない。しかし、II b段階では土壙墓群の東にまとまる。石器も同様な傾向を示している。

そして、石器が入るII段階のピット列は、大形柱穴より西南西へ延びており、両者間に関連性が認められる。

【石器と土器群の関係】 これまでの土器群及び遺構に分析結果から、石器と土器群の関係について検討を行うことにする。石器の分析の結果、石器にも器種によっては範型が存在することが明かとなった。こうした範型から型式へと止揚することが可能であるかどうか、いくつかの器種について、調べてみたい。

石鏃 I形態小形はII b～II c段階、I形態中形では黒曜石製のものはII a～II c段階、チャート製のものはI a～I b段階、II形態・大形未成品もI a～I b段階にそれぞれ該当する可能性が高い。チャート製のものはI段階に多く、II段階では黒曜石製のものが多い傾向が窺える。

石錐 I a形態はII c～II d段階、II a形態はII b段階にそれぞれ該当する可能性が高い。II b

形態はさまざまな段階に存在し、時期を決定できない。

石匙A類 II a形態範型 a は I b 段階、II a 形態範型 b は II c 段階、II a 形態範型 c は II c 形態、II a 形態範型 d は II a ~ II c 段階にそれぞれ該当する可能性が高い。この器種では範型の強度が強い場合、時期も限定される傾向が強く、弱い場合は時期が幅をもつ傾向が認められる。

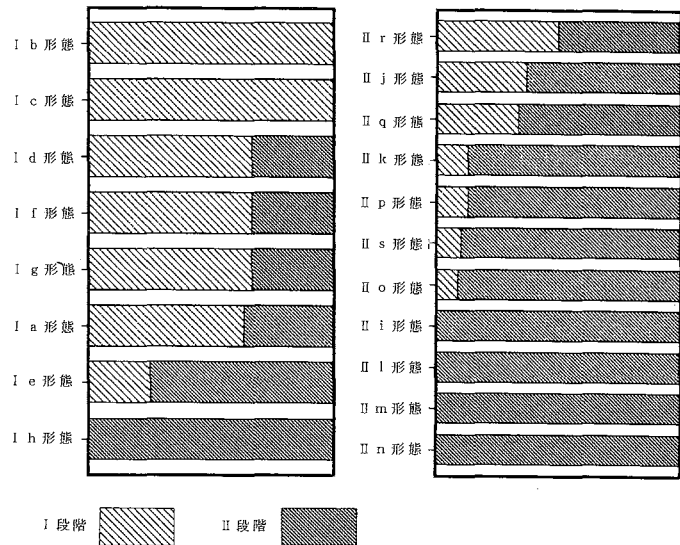
石匙B類 II a 形態範型 h は I b ~ I c 段階、II a 形態範型 i は I a ~ I b 段階に該当すると推定される。しかし、この器種の場合、時期が限定されない範型も多く存在し、石匙A類とは様相を異にする。

打製石斧 形態と段階との関係は第151図のように示される。すなわち、I a 形態は I a ~ I b 段階、I b 形態は I 段階、I c 形態は I b 段階、I e 形態は II 段階、I h 形態は II 段階に該当する可能性が高い。このように、I 形態では典型的な撥形を呈した I a · I b · I c 形態は I 段階に相当し、やや短冊形に近い

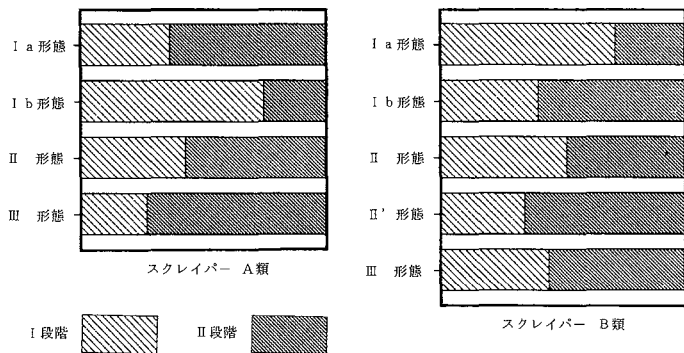
I e · I h 形態のものは II 段階に相当する。したがって、前者から後者へ型式が変化したことが読み取れる。

II i 形態 · II k 形態 · II l 形態 · II m 形態 · II n 形態 · II o 形態 · II p 形態 · II s 形態はすべて II 段階に該当する可能性が高い。また、II j 形態では I 段階と II 段階の両方に存在しており、I 段階から II 段階にかけて連続した形態と推定される。このように、II 形態では I 段階には II j 形態のみが存在していたのが、II 段階になると多くの形態に分化し、多用されたことが理解できる。

I 形態と II 形態は使用痕



第151図 打製石斧の形態と時期の関係



第152図 スクレイパーA類・B類の形態と時期の関係

の分析においても、全く異なる機能・用途が推定されており、単なる型式ではなく器種（形式）レベルでの違いと考えた方が妥当である。

スクレイパーA類 この器種はI b形態（直接打撃+押圧剥離）はI段階に多く、II段階に少ない。それ以外の形態は逆の傾向を示す（第152図）。このように、ある程度形態と時期との関係は認められるものの、石鏃・石錐のような顕著な状態ではない。

スクレイパーB類 第149図に示したような形態と時期との関係が認められる。I a形態（押圧剥離多用）はI段階にやや多い傾向が認められる。I a形態は片面加工のものに多く、両者の間に関連性がみられる。この傾向はスクレイパーA類I a形態とは正反対の状態である。また、I b・II'・III形態はII段階がやや多い傾向が認められる。

以上のように、押圧剥離を多様するA類石器である石鏃・石錐・石匙A類では、形態（範型）と時期との間に相関関係が認められた。また、打製石斧の場合も同様であった。したがって、これらの器種で抽出された範型は主体的な型式を有していると考えられることができる。

しかし、スクレイパーA類・スクレイパーB類は前者では石鏃・石匙A類、後者では打製石斧の製作にそれぞれ依存した主体性の乏しい器種であることが理解できよう。この中において、スクレイパーA・B類ともI a形態は時期と関連性を有していることが確認された。また、それ以外の形態でも多少形態と時期との間に一定の傾向を認めることはできる。

しかし、スクレイパーB類に認められる片面加工の傾向は、この段階に圧倒的に多い打製石斧I形態に顕著な加工方法であり、打製石斧と製作との関連性が強い。このように、スクレイパーB類の場合、形態的特徴が少なく、厳密な範型は認められず、打製石斧の製作に依存した存在であることに変わりない。したがって、ある程度は型式を有するような様相が認められた場合でも客体的な存在であるとみなされよう。

また、C1類石器（磨石・凹石・石皿）は使用により石器と認定される器種は入手段階の選択性により形態が規定されてしまうため、特定の器種を除き型式を保持しているものは存在しないと考えられる。C2類石器（敲石・砥石）も同様な傾向があることと、再加工により形状変化が著しいことから型式の存在する可能性は極めて少ない。

そして、E類石器（磨製石斧）は型式を保持している可能性が高いが、再加工・器種変換（リダクション）が激しく、検討することが困難である。

石器の場合、型式学的に検討を行うことは困難と漠然と考えられていたが、このように出土遺構及び共伴する土器群とのクロスチェックを行った結果、石器単独でも、主体的型式を有する器種では、型式学的方法により時期を決定することが可能である見通しが立ったと言えよう。

b 集落の景観と変遷

遺構と遺物の分析の結果、本遺跡における集落の景観と変遷は次のとおりである。

1 期 縄文時代前期中葉（I a～I c 段階：関山II期～有尾・黒浜期）

この時期の集落は、I a 段階の住居址が調査区中央部に造られることから始まる。J-12・20・21号住居址の3軒が1カ所に集中し、拡張が2～3回繰り返される。したがって、これらの住居址が同時並存していた可能性は低く、一時期に存在した住居址は1軒であったと推定される。調査区外にこうしたまとまりが複数存在している可能性もあり、当初の集落規模ははっきりしない。次に、I b 段階になると、等高線に沿って弧状に5軒の住居址（J-13・18・17・9・16）が構築される。この時期の場合もJ-13号住居址とJ-18号住居址は重複関係にあり、すべての住居址が同時並存していたものではない。また、同様な分布状態で調査区外にも住居址が存在した可能性が高い。このように、I b 段階に集落規模は拡大する。しかし、I c 段階になると住居址はJ-15B号住居址が1軒調査区南東部に造られるのみであり、集落規模は縮小する。

また、特殊な意味をもつと推定される小形竪穴状遺構は北西部に1軒のみ存在する。

そして、土壙群が4カ所に形成される。西群と中央群は土壙墓群と推定され、東群は最終的に廃棄用に利用される土壙群であるが、本来は貯蔵穴群であった可能性もある。また、南群も同様である。これらの土壙群の形成は一時期のものではなく継続的なものであるが、大部分はI b 段階に形成される。また、集石土壙1基がJ-16号住居址の部分に存在する。

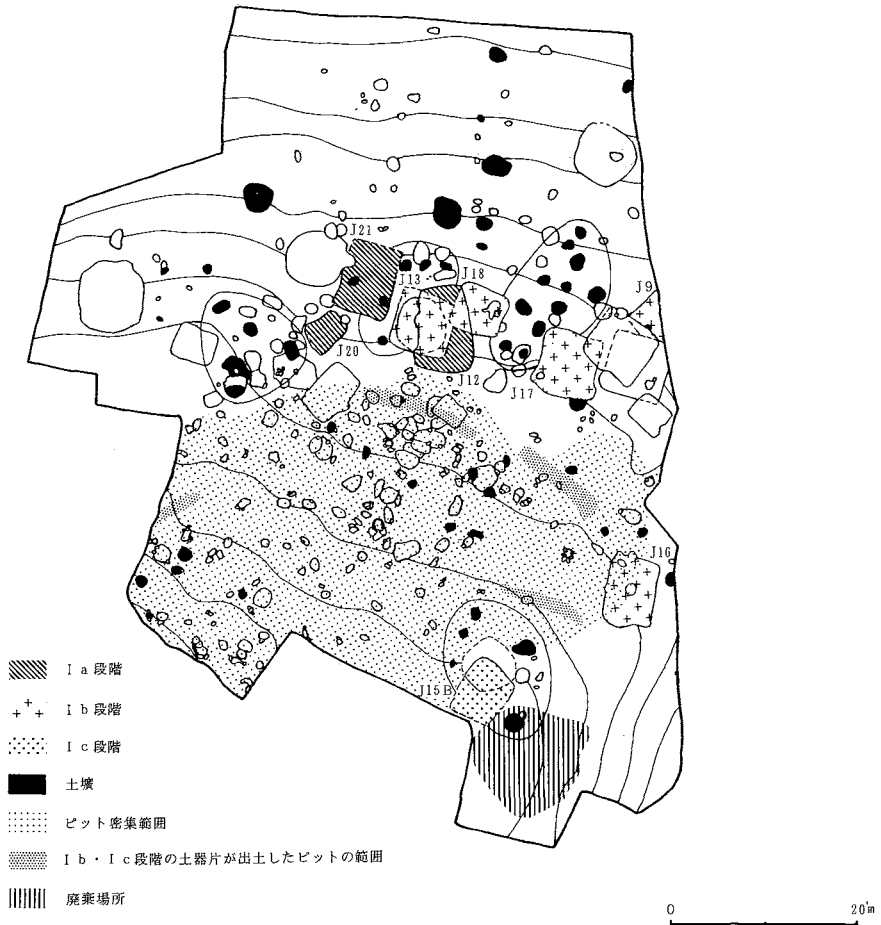
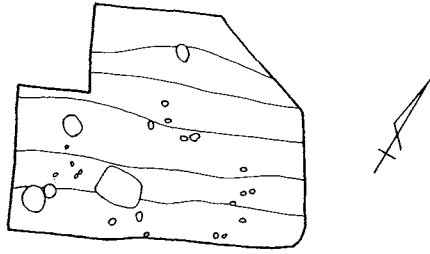
集落の内側の「中央広場」にはピット群が形成される。I a 段階にはピット群はほとんど存在しなかったと推定され、I b 段階に集中的に形成されたとみられる。ピット群の外縁部には、土器や石器を入れる特殊なピット群が形成される。このピット群の一部は、柱穴列を構成し、特殊な構築物の存在が推定される。また、多数のピット群も簡易構造物が繰り返し構築された結果と推定される。

そして、調査区南東部には廃棄場所が存在し、遺物集中部が形成される。

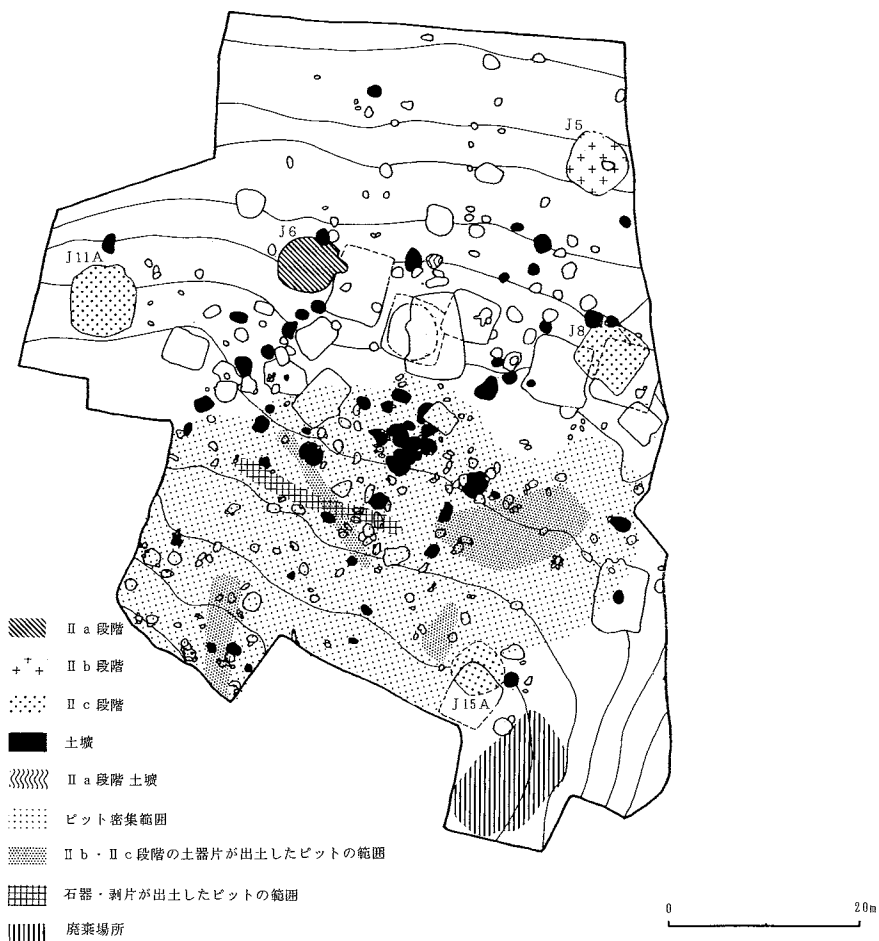
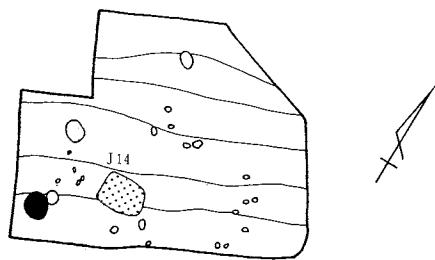
2 期 縄文時代前期後葉（II a～II c 段階：諸磯 a 期～諸磯 b 期）

この時期の最初のII a 段階の住居址はJ-6号住居址1軒のみである。また、I c 段階との間には住居址が形成されない空白期があり、この間集落は断絶していたと考えられる。

II b 段階でもJ-5号住居址1軒のみである。そして、II c 段階には4軒（J-11A・8・15A・14）となる。どの段階も住居址の軒数は調査区内では少ないが、調査区外にも住居址は多数存在していることが確認されており、集落規模は大きなものである。また、J-14号住居址及びT-6号小形竪穴状遺構は集落から北に離れて存在し、特殊な意味を有する遺構と推定される。



第153図 I a・I b・I c段階の遺構分布図



第154図 II a・II b・II c段階の遺構分布図

土壙群は調査区中央に楕円形の環状に形成される。この土壙群はⅠ a 段階から形成され始め、Ⅰ c 段階まで継続する。この土壙群は土壙墓群と推定され、南東部に立石を有する中心的部分が認められる。この位置からの正面（短軸方向）は浅間山方向を向いている。また、中心的部分の南の位置にⅡ b 段階には大形柱穴が存在する。この柱穴には標識となるような大きな木柱（マーカールポール）が立っていたことが推定される。

中央広場にはⅠ b 段階同様、ピット群が存在する。そして、この場所には繰り返し簡易構築物が造られていたと推定される。また、1 期と同じく遺物を入れたピット群が規格性をもって配列する。このピット群は特殊な構築物と推定されるが、広場北東部と中央部の 2 カ所に存在する。北東部のピット群は土壙墓群の背後に位置する。

中央部の遺物を入れたピット群は調査区の端に位置するため、全体像は不明瞭であるが、掘立柱建物址の存在が推定される。また、この場所にはⅡ c 段階の大形深鉢形土器（第87図55）が検出された大形柱穴群も存在しており、大形掘立柱建物址が存在していた可能性もある。

そして、1 期同様調査区南東部には廃棄場所が形成される。なお、この段階の遺物の廃棄行為はほとんどの場合、住居址に対して行われており、これ以外の位置には廃棄場所は存在しない。

3 期 縄文時代前期後葉（Ⅱ d 段階：諸磯 c 期～十三菩提期）

2 期に引き続き住居址（J-7・11B）が構築される。これらの住居址は諸磯 c 期のものであり、十三菩提期では住居址は存在しない。そして、この時期の集落は土壙・ピットもほとんど存在しない。また、遺物の分布域も狭まり、集落規模の縮小は著しい。

この時期では、東関東系の興津式も存在しており、広範な活動が予想される。

4 期 縄文時代中期初頭（五領ヶ台期）

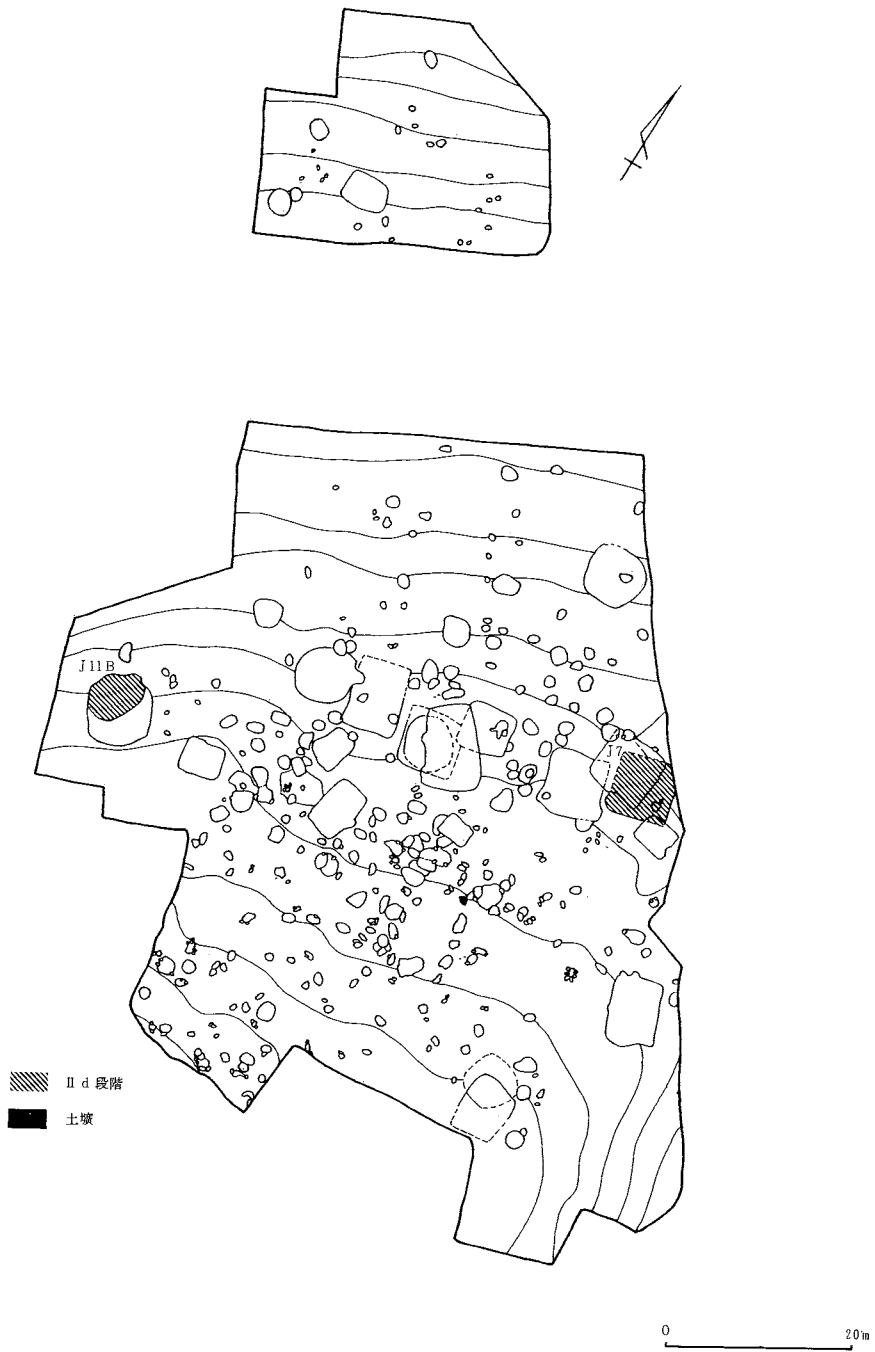
この時期では住居址は存在しない。数基の土壙が調査区中央部に存在するのみである。3 期集散菩提期と同じ様相を呈する小規模な集落と推定される。

5 期 縄文時代中期後葉（加曾利 E 期）

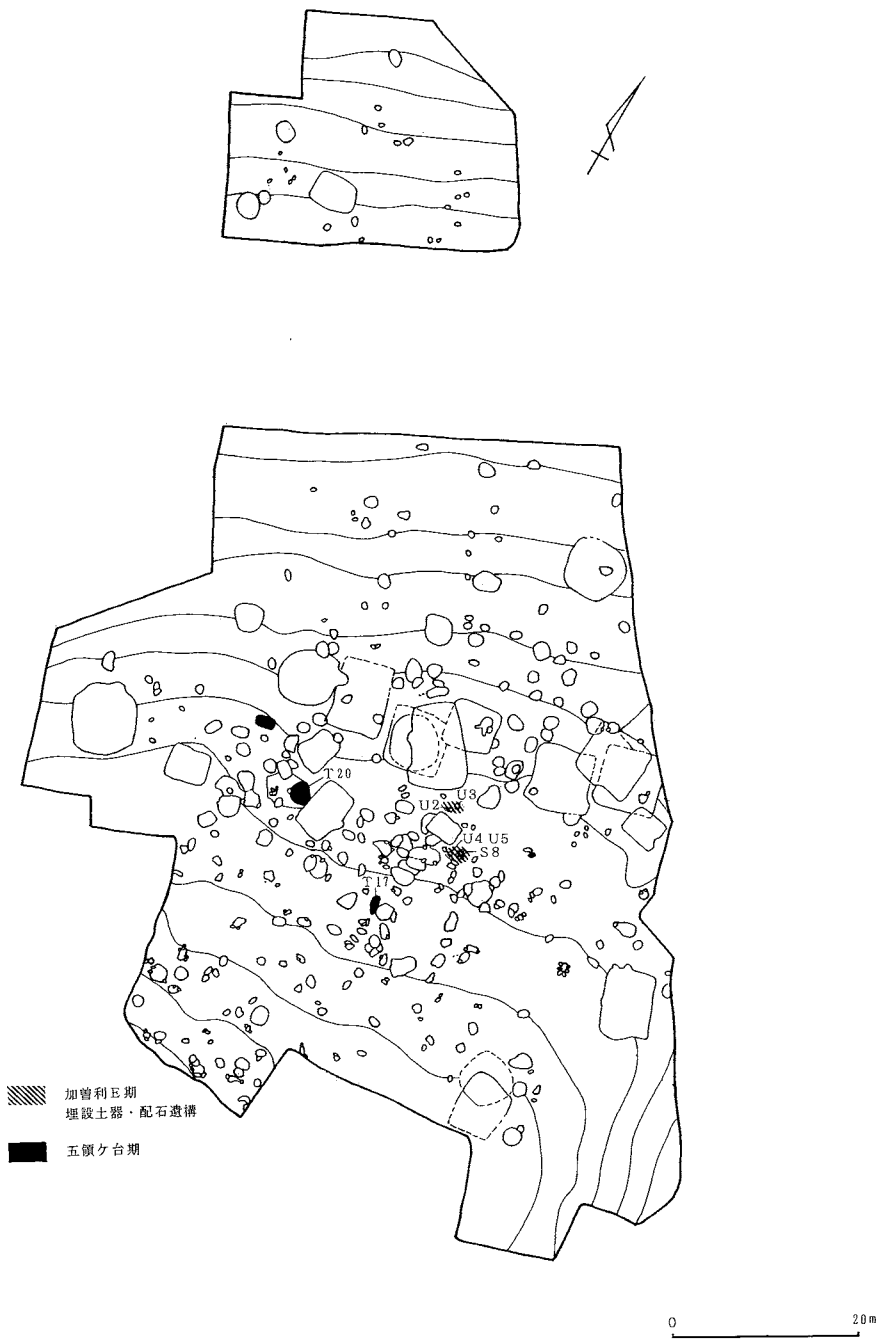
調査区中央部に配石遺構と埋設土器が存在する。これらの遺構はほぼ同時期であり、一時期に形成された可能性のある。加曾利 E 式土器と曾利式土器が伏せられて並ぶ特殊な施設である。長野方面と関東との交流を示す特別な意味をもった行為が行われた場所と推定される。

6 期 弥生時代後期（樽期）

調査区中央部に住居址が 3 軒、等間隔に並んで構築される。真ん中の Y-1 号住居址が大きく、



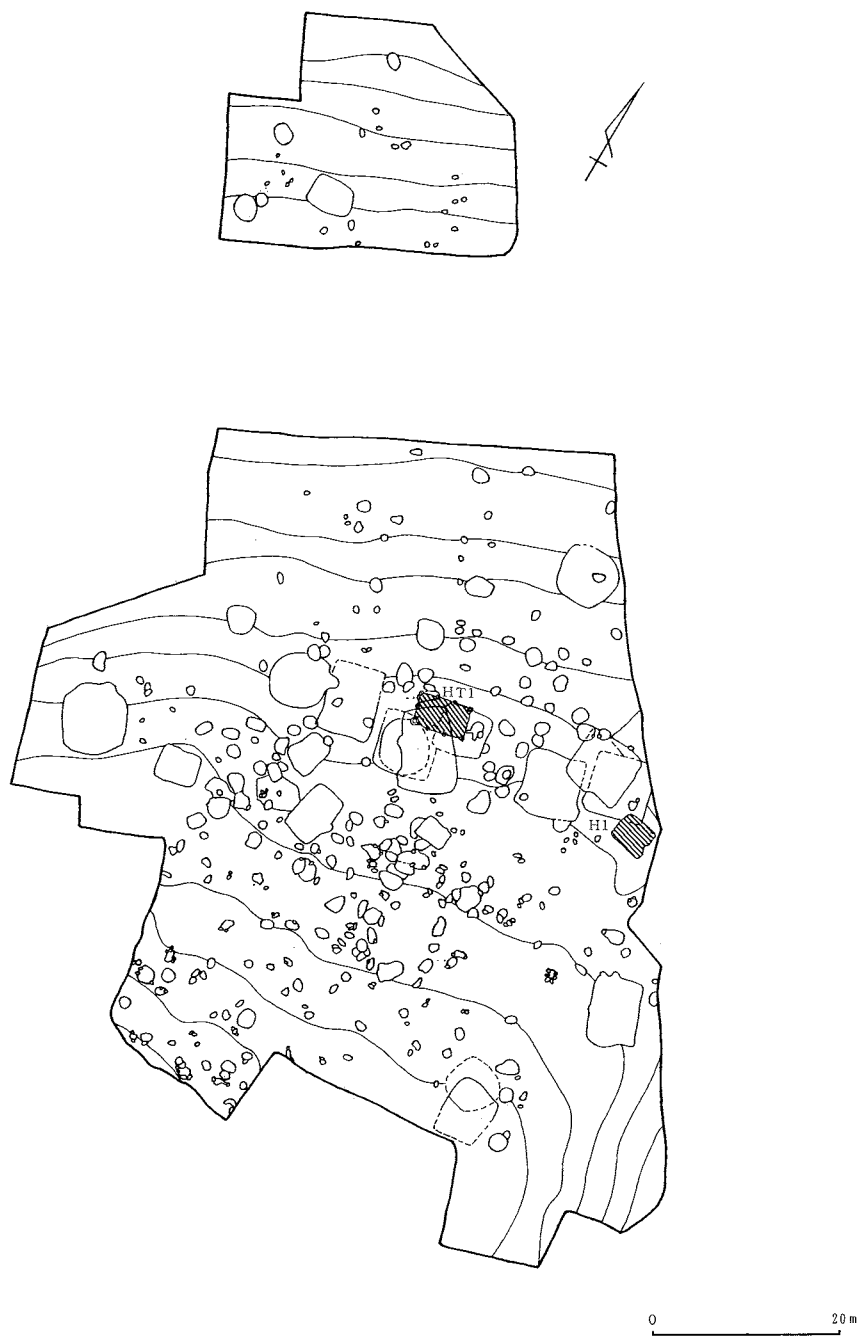
第155図 II d段階の遺構分布図



第156図 中期の遺構分布図



第157図 弥生時代の遺構分布図



第158図 奈良・平安時代の遺構分布図

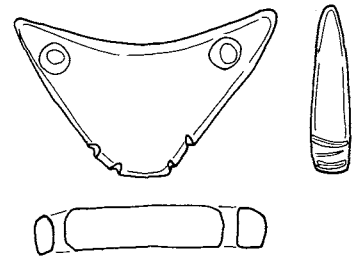
両脇の住居址が小さく、象徴的である。同時期に並存していた可能性が高い。また、Y-3号住居址では中期の遺物（小破片）が2点検出されており、この時期にも人間活動があった可能性もある。

7期 奈良・平安時代（8世紀末～9世紀初頭）

住居址1軒と掘立柱建物址1棟が存在する。H-1号住居址は一般的な住居址である。両遺構は同時並存していた可能性が高く、継続時期も短期間と推定される。

大下原遺跡では、以上のような集落変遷を辿る。縄文時代前期の集落では、I a・I c・II d段階が小規模な集落であり、住居址と少数の土壇・ピットが存在するのみである。いずれの段階も短期間、滞在した集落とみなすことができる。

これに対し、I b・II a～II c段階は中央広場を中心に住居址が巡る大規模な集落であり、土壇墓群を有する点でも共通している。試掘調査により調査区の南西部に広く住居址等の遺構が分布することが確認されており、本遺跡の場合、円



第159図 垂飾

形を基調としながらも、地形の制約で楕円形を呈する環状集落と考えられる。その際の集落規模は200m×100mと推定される。第159図は試掘調査の際、本集落南部から出土した垂飾である。こうした「第二の道具」が検出される点からも、集落規模の大きさの一端を窺い知ることができる。

また、墓域はI b段階では単なる土壇墓群を形成しているだけであるのに対し、II a～II c段階では集落の形態と同じ楕円形の環状に土壇墓群が形成されており、より計画性をもつようになったと考えることができる。そして、立石を有する土壇墓や、副葬品の在り方をみても、より充実しており、墓制の発達を看取することができる。また、大形木柱の出現や、浅間山に対する土壇墓群の方向性などから、墓制の発達に伴う葬送儀礼の発達を窺い知ることができる。

このような大規模集落と、小規模集落が一つの場所で時期により波状に形成される現象は、居住と移動といった縄文社会の動態を反映しているものと考えられる。

磨製石斧・凹石の分析により、こうした大規模な集落を放棄する際、磨製石斧と凹石II a形態（楕円形・磨→凹）が廃棄されるパターンが存在することが判明した。磨製石斧が廃棄される現象は新しい集落の建設に関係するものと推定される。そして、この形態の凹石は堅果類の殻割り作業の段階のもので、まだ粉碎作業の前の段階と推測される。この推測が正しければ、この集落を放棄して、新しい集落へ移動する季節はいつも堅果類の殻割り後、粉碎作業開始前段階、すなわち、晩秋から初冬の頃であった可能性が高い。

以上、大下原遺跡における縄文時代前期の集落は、小林達雄氏の集落分類（小林1980）でのパターンAに該当する大規模な集落が営まれた時期（I b・II a～II c）と、パターンCに該当する小規模な集落が営まれた時期（I a・I c・II d）が交互に繰り返される状態で使用される場所であり、恒常的に特定のパターンとなることはない。このように、同じ立地環境で交互に集落様相が転換する現象がどのような要因によるのか、現段階では明確に説明することは難しい。両者の間に生業活動の顕著な差を示すような石器組成も認められておらず、単なる生業活動の場の違いとも言えず、今後とも十分に検討を行う余地がある。

中期前半段階の集落様相も小規模なものでありパターンCに近い状態（住居址は検出されていないので、パターンCより規模が小さい状態）が、前期終末からしばらくの間は継続していたことが解る。そして、中期後半段階にはおそらく一時的にパターンEの状態で行われたのみで、もはや生活の場としての利用は停止状態にあったと考えられる。そして、その後、縄文時代にはこの場所は全く生活の場として利用されることはなくなったとみられる。しかし、東に隣接する注連引原遺跡・同II遺跡では中期・後期にパターンF（一時的なキャンプ地のような状態）として利用されており、同じ地域内では人間活動の痕跡が断続的に認められる。

弥生時代の集落も短期的に営まれたものであることが判明した。また、奈良・平安時代においても同様であり、本遺跡の場所は弥生時代以降も長期に及ぶ集落適地ではなかったと言える。

そして、その後近世以降は共有林としての利用が行われてきており、集落として利用されることは現在に至るまでなかったと推定される。

本報告では、これ以上の集落景観の復元と変遷について分析することはできなかったが、今後集落研究の進展により、さらに具体的な状態が明かになるものと考えられる。

V 成果と問題点

1 出土土器の編年的位置付けについて

吉田原・大下原遺跡出土のⅠ段階とした土器は、いわゆる関東地方の関山・黒浜式土器と長野県の神ノ木・有尾土器である。群馬県域ではこれらの土器は、近年の発掘調査で資料の増加がみられた。特に神ノ木・有尾式土器について、赤城山麓の関越自動車道関係の発掘調査による良好な資料が見られ、いくつかの編年案が出された。本項では、この編年案の中から谷藤（1986）・関根（1986）による編年案を通して本遺跡の神ノ木・有尾式土器の編年的位置付けをしたい。

神ノ木・有尾式土器の文様の特徴は、次のようになる。

- （1） 櫛歯状工具による縦位・横位の刺突（連続刺突）、菱形・三角形・渦巻、及び同工具による菱形・三角形・渦巻の条線
- （2） 半截竹管による平行線による・菱形・三角形・渦巻の文様を爪形施文。
- （3） 半截竹管による平行・菱形・三角形の沈線による施文。

縄文原体の特徴

- （1） 無節の縄文（撚りがきつく、一見0段多条に似たものも多く含む）及び0段多条。
- （2） 無節の縄文
- （3） 前々段反撚り
- （4） 附加条（第1種）

以上が、神ノ木・有尾式土器の主な文様構成としてあげることができる。口縁部に施文される文様は、1～4の組み合わせで行われ、胴部の縄文については、これらの縄文によって羽状縄文を施し全体に菱形を構成する。なお縄文原体では、神ノ木式土器に「束の縄文」が見られることが知られているが、県内での発見例は少ない。

さて、本遺跡出土の当該期の土器を各段階別に記述したい。（第138図 住居址出土土器変遷図1参照）

Ⅰa段階前半 住居址変遷図においては関山・有尾と二段階に分けている。これは、本段階の関山式土器と有尾式土器において時期的な変遷が認められたためである。関山式土器に伴うと思われる神ノ木式土器は、J-12号住居址7、8に見られるように櫛歯状連続刺突文により口縁部に垂直に施文される。器形は、平縁と緩やかな波状口縁を持つものがある。小突起を持つものもある。胴部には、各種縄文原体による菱形構成をする整った羽状縄文を施す。ループ文を施すものや、前述の「束の縄文」が見られる。また、関山式土器に見られる直前段合撚り、附加条縄文も見られる。

Ⅰa期後半 器形は、ほとんど口縁が外反し頸部でくびれ胴部が膨らむ形を呈し、口縁には平・

波状口縁があり、小突起を有するものもある。底部は、上げ底あるいは、上げ底風になるものがある。文様は、口縁部文様態と胴部文様態に区画を行う。口縁部文様態には、縦位に楯歯状工具による刺突文を口縁に平行、垂直方向や、菱形、鋸歯状に施文する。胴部には各種縄文原体による菱形構成をする整った羽状縄文を施す。ループ文、直前段合摺りの縄文原体も多い。

I b 段階 器形は、ほとんど口縁が外反し頸部でくびれ胴部が膨らむ形を呈し、口縁には平・波状口縁があり、小突起を有するものもある。底部は、平底が主体である。文様は、平行沈線、爪形刺突による施文方法で、口縁部文様態に菱形文様を四単位に割り付けし、菱形区画内を渦巻、円形、鋸歯状に施文する。胴部縄文は整った菱形構成の羽状縄文を施すが、単節の縄文原体によるものが多く、前段階より縄文原体は、シンプルなものとなっている。

I c 段階 器形は、口縁が外反し、頸部でくびれ胴部が膨らむが前段階より胴部の膨らみが少ないものもある。平口縁と四単位の波状口縁になるものが多いが、波状口縁部の波頂部が丸みをおびてくる。底部は平底が主体である。文様は、前段階同様平行沈線、爪形刺突による施文方法で、口縁部文様態にくずれた菱形が主となり区画内を鋸歯状に施文する。波状口縁の土器では、波状部が四単位になることから口縁部文様も四単位になるが平口縁の土器では、口縁部文様体が四単位の文様構成をとらなくなるものもある。胴部の縄文原体は、菱形を構成する羽状縄文が主体をなすが、前段階より崩れた羽状縄文で口縁部文様体と同様に菱形構成も崩れ、斜行縄文も多くなる。

以上、本遺跡出土の神ノ木・有尾式土器の変遷について概観した。

次にII段階とした土器についての変遷であるが、この段階とした土器群は、いわゆる諸磯式土器出ある。本遺跡からは、諸磯b式土器を主体として、諸磯c式土器が出土している。本遺跡では、主体となる諸磯b式土器を中心に変遷過程を追ってみた。諸磯b式土器は、三細分案（今村1982）、あるいは、四細分案（鈴木敏昭1980）さらに、五細分（鈴木敏昭1992）等が出されているが、本遺跡から出土している土器を今村の三細分案により準じて編年的位置付けをし、三段階に分けた。さらに、諸磯c式土器を加えてII段階の土器を四段階に分けることにした。なお、当市の榎木畑遺跡発掘調査報告書には諸磯b式土器の編年案が記載されているが、その段階分けの基準があいまいであるのと、各段階間の時間的幅にばらつきがあり、整合性に欠けることから今村編年案を借用した。

II段階の各段階の文様変遷を概観すると、次のようになる。（第139図住居址出土土器変遷図2参照）

II a 段階 器形は平口縁、2単位、4単位の波状口縁、小突起を持つものもある。2単位の大波状口縁の土器には、大形のものがあり古墳時代の短甲に似た器形のものがある。頸部でくびれ胴部は若干膨らむ。文様帯は、頸部の横位に区画する線によって分けられる。口縁部に集中し、胴

部文様帯を持つものもある。文様施文は、半截竹管による平行沈線によって木の葉状入り組み文、波状文、肋骨文が施文される土器。爪形文により木の葉状入り組み文から変化したと思われる文様を施文した土器。従来、肋骨文や木の葉文については、諸磯a式土器と捉えられてきたのであるが、施文具である半截竹管の幅が広いものについては、幅広竹管文の諸磯b式との施文具の類似性から諸磯b式土器の古い段階とした。

II b段階 器形は、口縁で膨らみを持つキャリパー形で、4単位の波状口縁や、小突起を持つものがある。平口縁は、少なくなる傾向にあり、獣面把手などの何らかのアクセントを口縁部に持つ。文様帯は、口縁部文様帯と胴部文様帯があり、胴文様帯は多段化する傾向にある。

文様は、浮線文を主体とするが平行沈線によるものもある。浮線文は、やや太めで浮線状に刻みを持つ。浮線・沈線で表現する文様は、渦巻や入り組み状の弧線、曲線等が表現される。平行沈線によるものも浮線同様の文様を構成する。

II c段階 器形は、全段階と同様である。波状口縁の波頂部に添付された獣面把手が瘤状の粘土になる。口縁の波頂部がいわゆる靴先状になる波状口縁を持つものも現れる。文様帯は、口縁部の屈曲上部と口頸部、胴部文様帯に分かれるものがある。文様は、浮線によるものと半截竹管による平行沈線によるものがある。本段階になると、浮線は偏平化し、半截竹管による沈線が集合沈線化したものが多くなる。文様は、全段階同様曲線や、渦巻、風車状の文様である。

II d段階 器形は、平口縁で大きく開き胴部につらなる。文様帯は、口縁部と胴部に分かれる。文様は、半截（多截）竹管による集合沈線によって、口縁部は横位に胴部は、縦位区画の間を（）状の弧線文を施文する。また沈線施文の後、棒状、耳たぶ状、円形の粘土瘤を添付する。粘土瘤には、竹管の刺突が加えられるものもある。

以上II段階について各段階を概観した。さらに、各段階を二細分できると考えるのであるが、本遺跡出土の土器からは、四段階に分け集落の変遷を考えた方が妥当であろうと考え上記の段階分けとした。

本項では、土器から住居址の段階分けをしたものについて、段階分けの基準を提示した。この段階分けについては、必ずしも各期の段階がスムーズに変遷するのではなく、各段階において若干の時間的間隙があると考え。特に、II段階とした段階では、群馬県内の他遺跡出土土器を比較すると、各段階間に組み入れることのできる土器がある。今後、これらの土器を取り入れた編年を考えたい。また、本項では段階分けに終始し、型式の持つ本来のもう一つの意味である地域差、地方差というものには、触れることができなかった。I段階では、関山式土器と神ノ木式土器、黒浜式土器と有尾式土器、II段階では、諸磯b式土器と浮島式土器、格子目文土器等の当地方における状況については今後の課題としたい。付記するならば、I段階の黒浜式土器と有尾式土器の分別の一つとしては、縄文原体の観察が一つの課題となると考える。また、II段階の新潟

地方に見られる格子目文土器が当遺跡では、諸磯b式土器に伴っている。今後、これが諸磯b式土器のどの部分と関わってくるのか課題として残った。

2 住居址への土器の廃棄について

大下原遺跡・吉田原遺跡では前期中葉～後葉にかけいの住居址が22軒検出された。そして、各住居址の出土状態についてはすでに前章で述べたとおりであり、これらの住居址では、多量の遺物が検出される「廃棄パターン」が一般的であることが判明した。では、どのようなプロセスでどのくらいの量の土器が住居址へ廃棄されるのか、検討してみたい。

(1) 土器の形態別割合の推定

本遺跡では大量の土器が出土しているが、接合作業により完形に復元できた個体数は少ない。また、推定復元可能な個体にしても口径は計測可能であるものの、底部が欠損しているため器高を計測できるものは非常に少ない。そこで、今回は器形から推定することにより、口径と器高を求めた。また、各個体の重量の計測はさらに難しいが、土器片から単位面積当たりの重量を計測し、表面積に乗じて算出して重量を推定した。

まず、大きく有尾・黒浜段階と諸磯段階に分け、時期別に器高と口径の関係を示したのが第 図である。有尾・黒浜段階では15個体が分析可能であり、口径25～45cm・器高30～40cmのA形態と、口径10～20cm・器高10～25cmのB形態に分離されることが解る。また、諸磯段階期では、18個体が分析可能であり、口径40～55cm・器高40～60cmのA形態と口径30cm・器高35～45cmのB形態、口径10～30cm・器高10～30cmのC形態、口径10～30cm・器高5～10cmのD形態に分離されることが理解される。

このように、有尾・黒浜段階では大小2形態の深鉢形土器を保有している。諸磯段階ではこれに加え、大形の深鉢形土器と浅鉢形土器を保有し、器種が4種類に増加している。また、有尾段階の形態別の比率はA形態10個、B形態5個であり、諸磯段階ではA形態6個、B形態2個、C形態7個、D形態3個であった。

これらを10個体当たり、5個体当たりの推定個体数で検討すると、有尾段階は上段の表のような比率になる。すなわち、A形態：B形態=6.7：3.3の比率である。また、諸磯段階は下段の表のようなになる。すなわち、A形態：B形態：C形態：D形態=3.3：1.1：3.9：1.7となる。

以上のように、この時期では同じ深鉢形土器でも大きさにより2～3形態が区別されて製作・使用されていたと推定される。そして、有尾・黒浜段階では単純な器種構成であったのが、諸磯

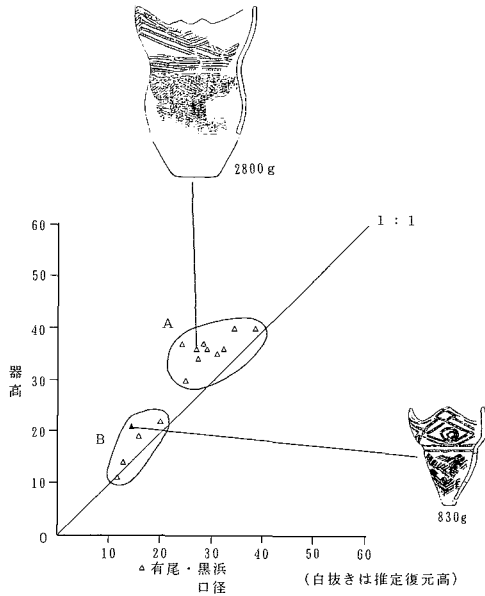
	A形態	B形態
10個体当たりの 推定個体数	6.7	3.3
5個体当たりの 推定個体数	3.3	1.7

形態別推定個体数

住居址	土器総重量	総重量/B形態	総重量/①
J-1	5,820	7.01	0.55
J-2	975	1.17	0.09
J-3	2,060	2.48	0.19
J-4	5,567	6.71	0.52
J-10	24,950	30.06	2.34
J-9	10,183	12.27	0.96
J-12	82,854	99.82	7.78
J-13	3,723	4.49	0.35
J-16	1,870	2.25	0.18
J-17	7,968	9.60	0.75
J-18	4,862	5.86	0.46
J-15	10,012	12.06	0.94

$$\text{①} = (A \times 3.3) + (B \times 1.7) = 10,651 \text{ g}$$

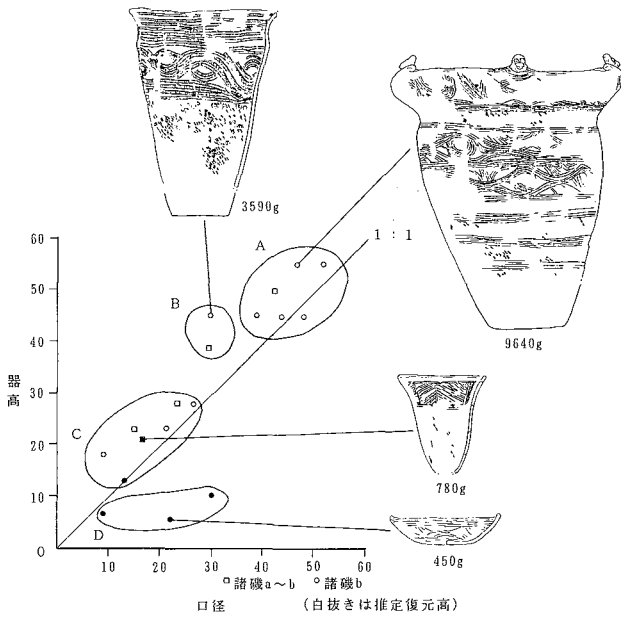
黒浜・有尾期の各住居址推定個体数



黒浜・有尾期の土器の形態と法量

	A形態	B形態	C形態	D形態
10個体当たりの 推定個体数	3.3	1.1	3.9	1.7
5個体当たりの 推定個体数	1.7	0.6	1.9	0.8

形態別推定個体数



住居址	土器総重量	総重量/C形態	総重量/②
J-5	27,964	35.85	1.37
J-6	48,455	62.12	2.38
J-11	81,169	104.06	3.98
J-14	4,220	5.41	0.21
J-7	26,407	33.86	1.30
J-8	65,931	84.53	3.23
J-15	10,012	12.84	0.49

$$\text{②} = (A \times 1.7) + (B \times 0.6) + (C \times 1.9) + (D \times 0.8) = 20,384 \text{ g}$$

諸磯期の各住居の推定個体数

諸磯期の土器の形態と法量

第160図 土器の形態と住居址推定出土個体数

段階になると、器種の数が増加したことが明かとなった。特に、浅鉢形土器が組成に加わったことは大きな意味を持つと推定される。

(2) 廃棄された個体数の推定

次に、各住居址に廃棄された土器の個体数を推定してみたい。復元個体から標準的な形態の重量を計量した。そして、各形態で、最も残存率の高いものを、仮にその形態の標準個体とすることにした。それぞれの形態の標準個体とその重量は図示されたとおりである。

そして、有尾・黒浜段階ではB形態、諸磯段階ではC形態を用い、標準個体が各住居址からどの程度出土しているか推定してみた。有尾・黒浜段階では1～100個体分、諸磯段階では5～104個体分出土している。このように、個体数では各段階ともほぼ同数が廃棄されていることが判明した。ただし、多くの住居址では、他段階の土器が混在している。例えば、諸磯段階のJ-5号住居址では14%、J-6号住居址では34%有尾・黒浜段階の土器が混在している。したがって、諸磯段階では個体数がもう少し少ないとみられる。

次に、1世帯が5個体の土器を保有していたと仮定し、何セット分廃棄されていたかについて、推定してみたい(註)。有尾・黒浜段階では各形態の標準個体5個体分の総重量は約10kgであり、0.1～7.8セット分の土器が存在していることが解る。これに対し、諸磯段階では総重量約20kgであり、0.2～4セット分の土器が存在している。

このように、各段階とも、住居址によって、大きく異なっているものの、全体としてはほぼ同じ傾向を示していることが判明した。見かけ上は、諸磯段階の方が多くの土器が廃棄されているとみられたが、個体数、セット数とも有尾・黒浜段階とほぼ同じ傾向を示し、同じような廃棄活動が行われていたと考えられる。

(3) まとめ

以上、住居址に廃棄された土器の様相について検討を行った結果を簡単にまとめておくことにする。

形態は中形・小形の2形態をもつ有尾・黒浜段階に対し、諸磯段階では大形深鉢と浅鉢が加わり、4形態に増加する。この現象は、この時期に器種(形式)分化が行われ、新しい器種組成へと変化したもの推定される。このような器種分化の背景には土器を用いた生業形態の変化が窺える。

廃棄された個体数・セット数は有尾・黒浜段階、諸磯段階とも大きな幅を有しているが、同じ傾向を示ことが判明した。

すでに、土器の廃棄については、いくつかのパターンが存在していることは知られている(小

林1972等)。このうち代表的な「吹上パターン」の場合、季節的な一括廃棄が行われていたと考えられている。本遺跡では、住居址に廃棄されたと推定される土器はすべて破損しており、完形に復元可能な個体は全く存在しない。したがって、土器の廃棄は一括ではなく、欠損する度に個別に行われていたものみられる。これはパターンC1とされているものに該当する(小林1972)。このように、土器が破損する度に少しずつ廃棄されたいったとすれば、土器の量は集落における滞在期間の長短を示す可能性がある。こうした視点から各段階の住居址を検討すると、有尾・黒浜段階では、各住居址に廃棄されている土器は平均0.67セットである(掘り込みが深く、拡張・重複が頻繁なJ-12住を除く)。これに対して、諸磯段階では2.13セットであり、諸磯段階の方が3.2倍である(位置・形態・石器組成から特殊な住居址と考えられるJ-14号住居址を除く)。ただし、有尾・黒浜段階では土壌に対しても廃棄が頻繁に行われており、実際にはもう少し比率は小さく、それにしても廃棄土器量は2倍以上である。したがって、この集落での滞在期間は有尾・黒浜段階より諸磯段階の方が長かったと推測される。

以上、土器の出土状態から派生する諸問題について、検討をおこなってきたが、こうした分析を時間的・空間的に拡大してゆくことにより、縄文時代の社会様相を解明する糸口となろう。

(金井京子・大工原豊)

(註)ここでは、各段階間の対比を容易にするため、社会構成が核家族的なものであったと仮定しているが、現実の社会がこうした構成であったかどうかは別問題である。

3 縄文時代前期中葉から後葉の石器群について

大下原遺跡・吉田原遺跡からは大量の石器が検出された。そして、大部分は前期中葉から後葉にかけてのものである。これらの石器群は前章までの分析により、解明された部分も多い。以下、簡単にまとめておくことにする。

(1) 器種と型式について

まず、石器と石材の関係であるが、特定の器種グループ(類)と石材類の結びつきがある。すなわち、A類石器とI類石材、B類石器とII類石材、C1類石器とIII a・IV類石材、C2類石器とIII b類石材、D類石器とIV・III a類石材、E類石器とV類石材といった関係である。こうした器種と石材との関係は縄文時代をとおして認められるものであるが、時期によって石材との紐帯関係は多少異なっている。本遺跡の石鏃ではI段階にはチャートが多いが、II段階ではほとんど黒曜石が用いられる。また、石錐ではI段階では頁岩が多いのに対し、II段階では黒曜石・チャ

ート・頁岩が用いられている。

次に、石器の形態と型式の問題であるが、打製石斧・石匙では強い範型を有する形態では、特定の時期に所属する傾向が認められた。このことは、範型を有する形態については、型式学的分析が可能であることを意味しており、今後の研究にあたっての重要な検討課題となると予想される。しかし、すべての器種にこのような関係が認められるものではない。すでに前章でも触れたところであるが、押圧剥離やコントロールされた直接打撃といった一定の製作技術と結びついた主体的存在の器種及び形態に顕著なものであり、他の器種の製作に依存していたり、素材の選択性に重点を置いた客体的な器種や形態でははっきりしない。例えば、石鏃とスクレイパーA類では、前者が主体的な器種であり、後者は客体的器種である。また、打製石斧とスクレイパーB類では前者が主体的な器種であり、後者が客体的な器種と言うことができる。

このように、同じ石材を用いたいくつかの器種はこうした結びつきを有していることが確認される。こうした器種の集合を「類」としてまとめて、類に含まれる器種を同時に分析して行くことが有効であろう。

(2) 石器群の変遷と特徴

それでは、中葉（I段階：有尾・黒浜）と後葉（II段階：諸磯b段階）に分けて、それぞれの時期の石器群の特徴について、若干まとめておくことにする。

中葉の石器群 石鏃は凹基無茎と平基無茎のものが存在する。チャート製が多い。石錐は大形で摘みのあるものが少量存在する。また、石匙A類はほとんど横形である。小形では摘み部が中心よりややずれて作出される。スクレイパーA類では押圧剥離と直接打撃を併用したものが多く。

打製石斧は「斧」的な撥形で片刃形態のものが多く、「土掘具」的な両面加工の撥形と短冊形の間形のものも存在する。また、石匙B類では多くは横形で、くびれの明確でない摘み部が斜めについたものが多く、幅広の縦形のもの存在する。また、大形で刃部が曲刃状のものも存在する。スクレイパーB類では押圧剥離を多用したものがやや多い。

後葉の石器群 石鏃はほとんど黒曜石製の凹基無茎で、小形と大形の2種類が存在する。石錐は黒曜石・チャート製の小形と、頁岩を多用した大形のものが存在する。石匙A類は小形では刃部が直線的で、中央に摘みを作出したものが存在する。また、やや大形で摘み部が中心からややずれたものが多く存在する。黒色安山岩・チャート製が多い。スクレイパーA類では押圧剥離を多用したものの、縁辺微細剥離を多用したものが多く傾向がある。

打製石斧では、片刃形態では細身小形で短冊形に近い形状となり、少数存在する。両刃形態は多様な形態に分化して多数存在する。石匙B類では横形・薄身で、刃部先端が鷲鼻状に曲がるも

のが存在する。また、粗雑な縦形のものが小数存在する。大形で横形のもの、大形で刃部が曲刃状のなた形のものが小数存在する。スクレイパーB類は万遍なく多様に形態のものが多数存在する。

中葉と後葉の器種の変化が著しいものは打製石斧である。中葉に存在する撥形で片刃形態のものは前葉から多く存在する形態である。しかし、本遺跡より新しい榎木畑遺跡ではすでに片刃形態のものは姿を消しており、諸磯a段階を境として、急速に消滅するものと考えられる。これら片刃形態の使用痕分析から単なる木材伐採具とは考えられず、石器の重量を必要としない竹材等の伐採加工具と推定される。これは、この時期を境とした住居形態の変化、すなわち細い支柱穴と深い壁溝の住居址から、太い支柱穴と浅い壁溝の住居址への変化と連動した現象であり、この変化を竹材多用住居から木材多用住居への変化と考えた場合、整合性が認められ、こうした観点からもこの変化の要因として、推測することが可能である。

(3) 石器の消費量について

前項で住居址へ廃棄された土器量を推定したが、これに伴い廃棄された石器の消費量を推定してみたい。第21表は天下原遺跡の主な住居址出土土器1セット（5個体分）に対応する石器の個数を示したものである。

前期中葉では、集落パターンCに相当するI a段階のJ-12号住居址は石器の消費量が約50点である。ところが、集落パターンAに相当するI b段階の住居址では148.5~173.9個と約3倍の石器消費量であり、集落パターンと石器消費量との間に一定の関係がある。

また、ここではJ-16号住居址を除外したが、この住居址は住居形態が他の同時期の住居址と全く異なっており、集石土壇が繰り返しこの場所に構築されていることも異質な存在である。そして、石器消費量をみると272.2個と極端に大きな値を示している。これは、この住居址に廃棄或いは遺棄された石器量が、土器に比べ大きかったことによるとみられる。したがって、この住居址の石器消費量の違いは、先の例とは異なりこの住居址の「場」としての機能差によると推定される。

住居址名	石器	剥片等	計
J-12	28.9	20.5	49.4
J-17	84.0	70.6	154.6
J-13	97.1	51.4	148.5
J-15	75.5	77.6	153.1
J-18	93.5	80.4	173.9
J-16	127.8	144.4	272.2
J-6	47.1	67.1	114.2
J-5	44.5	58.4	102.9
J-11	44.7	58.8	103.5
J-8	45.5	66.2	111.7
J-7	67.7	75.3	143.0
J-14	138.1	90.4	228.5

第21表 土器1セット当たりの石器個数

次に、前期後葉では、J-14号住居址を除き、

ほぼ同じ量の石器が消費されている。そして、このうち4軒は102.9~114.2個の範囲に収まり、非常によく似た状態であることが理解される。また、J-14号住居址は特殊な位置に存在する住居址であり、廃棄の状態もパターンC2である。この住居址は先にみたJ-16号住居址と同様に228.5個と、石器消費量が極端に大きい。この場合は、石器を用いた作業の場として用いられた可能性が高い。

このように、同じ時期の一般的な住居址では、土器と石器の消費量が一定の関係にあることが、非常によく理解できる。この現象は土器の廃棄と石器の廃棄が常に密接に関連して行われていたことによると考えることができる。すなわち、土器5個体の1セットが廃棄される間に中葉では約75~97点の石器が消費されるが、後葉では約45個程度の石器が消費される。石器の消費量は以外に少なく、各器種別にみれば、土器1セットが消費される間に1~3個程度しか消費されていない存在していなかったことになる。

この分析の結果、土器の廃棄と石器の廃棄は密接に関連した行為であり、時期により土器消費量と対応する石器消費量に差異が認められることが明かとなった。また、この関係は同時期に並存する集落のパターンの違いや、集落内における住居址の機能・用途の違いも反映していることも判明した。こうした分析を今後継続して行うことにより、集落内における人間行動や集落間の動態をより明瞭にすることが可能であろう。

引用文献・参考文献

- 相京建史他 1986 『三後沢遺跡・十二原II遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
赤澤威 1983 『採集狩猟民の考古学』 海鳴社
麻生優 白石浩之 1986 『縄文土器の知識I』 東京美術
新井和之 1986 「文様系統論—関山式土器—」『季刊考古学』17 雄山閣
新井順二・小野和之1985「碓氷川流域における弥生式土器の様相」『群馬考古通信』11群馬県考古学談話会
今村啓爾 1982 「諸磯式土器」『縄文文化の研究』3 雄山閣
今村啓爾 1988 「土坑性格論」『論争・学説日本の考古学』2 雄山閣
大井晴男 1966 『野外考古学』 東京大学出版会
柿沼恵介・右島和夫他 1986 『分郷八崎遺跡』 北橋村教育委員会他
可児道宏 1986 「施文原体の変遷—竹管文土器—」『季刊考古学』17 雄山閣
金子直行他 1990 『埼玉考古』 別冊3 埼玉考古学会
木村收 1992 「群馬県域における縄文時代前期後半の居住形態—諸磯b新~c式期を中心として—」『研究紀要』10 群馬県埋蔵文化財調査事業団
黒坂禎二 1989 「羽状縄文系土器様式」『縄文土器大観』1 小学館
黒岩文夫・富澤敏弘 1985 『中棚遺跡』 昭和村教育委員会
群馬県考古学研究所 1987 『縄文前期の諸問題』
小薬一夫 1991 「「住居型式」論からの視点—縄文時代前期の集団領域解明に向けて—」『研究論集X』 東京都埋蔵文化財センター
小林達雄 1980 「縄文時代の集落」『國史學』110・111合併号
小林達雄 1972 「縄文世界における土器の廃棄について」『國史學』93
小林達雄・小川忠博編 1989 『縄文土器大観』1 小学館

- 後藤和民 1988 「縄文集落論」『論争・学説日本の考古学』2 雄山閣
- 佐々木保俊他 1983 『打越遺跡』 富士見市教育委員会
- 笹沢浩編 1971~1973 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—原村その5—』長野県教育委員会
- 笹森健一 1981 「縄文時代前期の住居と集落 (I)」『土曜考古』3 土曜考古学研究会
- 笹森健一 1981 「縄文時代前期の住居と集落 (II)」『土曜考古』4 土曜考古学研究会
- 笹森健一 1982 「縄文時代前期の住居と集落 (III)」『土曜考古』5 土曜考古学研究会
- 下村克彦 1986 「施文原体の変遷—羽状縄文系土器—」『季刊考古学』17 雄山閣
- 白石竹雄編 1975 『飯山満東』 財団法人 千葉県都市公社
- 白石典之 1987 「『縄文中期の石器』に関する一試論」『行幸田山遺跡』 渋川市教育委員会
- 鈴木敏昭 1980 「諸磯b式土器の構造とその変遷 (再考)」『土曜考古』2
- 鈴木敏昭 1991 「土器群の変容—例えば、諸磯b式斧浮線文土器の場合—」『埼玉考古学論集』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 鈴木徳雄 1979 『白石城』 埼玉県遺跡調査会
- 関根慎二・谷藤保彦・新井悦子 1984 「群馬県における縄文時代前期の土器研究 (1)」
- 関根慎二・谷藤保彦 1986 『糸井宮前遺跡II』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 『群馬考古通信』10 群馬県考古学談話会
- 千田茂雄・大工原豊 1990 『榎木畑遺跡』 安中市教育委員会
- 大工原豊・中島誠 1987 『注連引原遺跡』 安中市教育委員会
- 大工原豊・若狭徹他 1988 『注連引原II遺跡』 安中市教育委員会
- 大工原豊 1989 「縄文時代の石器研究について—石器群研究史を中心として—」『群馬文化』220 群馬県地域分化研究協議会
- 大工原豊・千田茂雄 1990 『中野谷地区遺跡群発掘調査概報1』 安中市教育委員会
- 大工原豊 1990 「榎木畑遺跡における前期後半から中期中葉にかけての石器群について」『榎木畑遺跡』 安中市教育委員会
- 大工原豊・金井京子・和田宏子 1991 『新寺地区遺跡群』 安中市教育委員会
- 大工原豊 1991 『中野谷地区遺跡群発掘調査概報2』 安中市教育委員会
- 谷口康浩 1989 「諸磯式土器様式」『縄文土器大観』1 小学館
- 谷藤保彦 1986 「北関東地方における「有尾式土器」の変遷」『斎藤忠先生頌寿記念考古学叢考』下
- 谷藤保彦・関根慎二 1993 『縄文前期終末の諸様相』縄文セミナーの会
- 田村和之 1990 「縄文時代前期中葉の土器群の問題点—「組合せ鋸歯状」文土器群の成立と展開を中心として—」『埼玉考古』27
- 堤 隆他 1992 『城の腰遺跡』 御代田町教育委員会
- 長沢宏昌 1989 『花鳥山遺跡・水呑場北遺跡』 山梨県教育委員会
- 梁木誠他 1988 『聖山公園遺跡V』 宇都宮市教育委員会
- 文化庁文化財保護部 1966 『発掘調査の手びき』 国土地理協会
- 前原豊他 1985 『柳久保遺跡群I』 前橋市埋蔵文化財発掘調査団
- 村田文夫 1985 『縄文集落』 ニュー・サイエンス社
- 松田光太郎 1993 「諸磯a式土器の文様とその変遷」『古代文化』45-6 古代学協会
- 羽生淳子 1987 「諸磯b式土器」『季刊考古学』21
- 羽生淳子 1983 「稻荷丸北遺跡出土の縄文時代前期土器について」『稻荷丸北遺跡調査団』 稻荷丸北遺跡調査団
- 原雅信 1991 「群馬県における縄文時代前期の住居形態について」『研究紀要』8 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 原田昌幸 1982 「縄文時代前期の小型円形竪穴」『奈和』20 奈和同人会
- 藤森栄一 1963 「縄文中期に於ける石匙の機能的変化について」『考古学雑誌』49-3
- 松村和男 1985 「堤東遺跡出土の縄文時代遺物について」『群馬文化』203 群馬県地域分化研究協議会
- 渡辺誠編 1975 『桑飼下遺跡発掘調査報告書』 舞鶴市教育委員会

VI 自然科学的分析

1 テフラ分析

早田 勉 (古環境研究所)

1. はじめに

大下原遺跡の発掘調査では、火山灰土の良好な地層断面が作成された。そこで野外地質調査を行ってテフラの層相を記載するとともに、テフラ組成分析とテフラ検出分析を合わせて行って、起源が不明のテフラについて示標テフラを同定し、テフラ層序を明らかにした。

2. 地質層序

(1) ローム層中のテフラ

大下原遺跡では、黄灰色粘土層(層厚79cm)の上位に厚い火山灰土が形成されている。火山灰土は下位の厚いローム層と、上位の黒ボク土に区分される。ローム層の断面がよく観察されたB区深掘トレンチでは、野外地質調査によりローム層中に12層ものテフラが認められた(図1)。こ

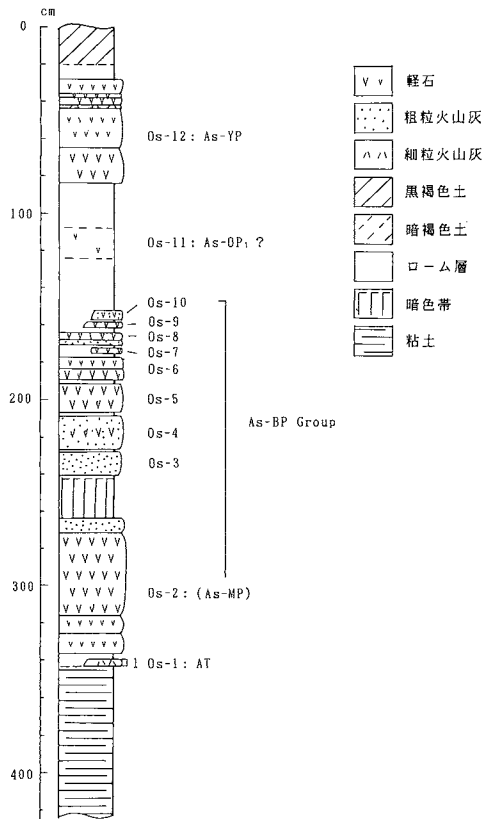


図1 大下原遺跡B区深掘トレンチの土層柱状図

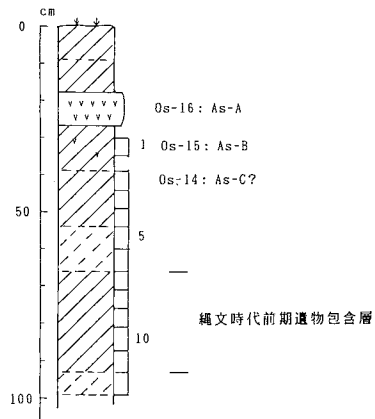


図2 大下原遺跡第20トレンチの土層柱状図
数字は、テフラ検出分析の試料番号

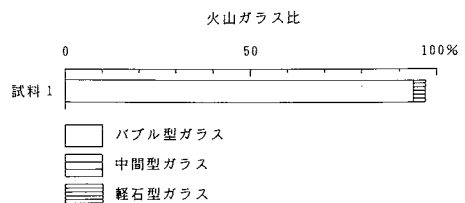


図3 大下原遺跡B区深掘トレンチのテフラ組成ダイヤグラム

これらのテフラを下位より大下原第1テフラ (Os-1) ~大下原第12テフラ (Os-12) と呼び、次に特徴を記載する。

大下原第1テフラ (Os-1) : 白色ガラス質細粒火山灰層。層厚4 cm。

大下原第2テフラ (Os-2) : 成層した軽石層。層厚73cmで下位より白色風化軽石層 (層厚: 11 cm、軽石の最大径: 8 mm、石質岩片の最大径: 2 mm)、白色風化細粒軽石層 (層厚: 9 cm、軽石の最大径: 11mm、石質岩片の最大径: 3 mm)、黄色軽石層 (層厚: 45cm、軽石の最大径: 21mm、石質岩片の最大径: 8 mm)、黄灰色細粒軽石層 (層厚: 8 cm、軽石の最大径: 7 mm、石質岩片の最大径: 2 mm) の連続からなる。

大下原第3テフラ (Os-3) : 黄色軽石混じり黄灰色粗粒火山灰層。層厚は13cm。軽石と石質岩片の最大径は、各々3 mmと2 mm。

大下原第4テフラ (Os-4) : 黒灰色石質岩片に富む黄橙色軽石層。層厚は18cm。軽石と石質岩片の最大径は、各々13mmと3 mm。

大下原第5テフラ (Os-5) : 橙色軽石層。層厚は15cm。軽石と石質岩片の最大径は、各々9 mmと2 mm。

大下原第6テフラ (Os-6) : 正の級化構造が認められる橙色軽石層。層厚は12cm。軽石と石質岩片の最大径は、各々8 mmと2 mm。

大下原第7テフラ (Os-7) : 黄橙色細粒軽石層。層厚は3 cm。軽石と石質岩片の最大径は、各々4 mmと2 mm。

大下原第8テフラ (Os-8) : 逆級化構造が認められる橙色軽石層。層厚7 cm。軽石と石質岩片の最大径は、各々14mmと4 mm。

大下原第9テフラ (Os-9) : 特に軽石に富む粗粒の橙色軽石層。層厚3 cm。軽石と石質岩片の最大径は、各々24mmと6 mm。

大下原第10テフラ (Os-10) : 黒灰色石質岩片に富む黄褐色細粒軽石層。層厚5cm。軽石と石質岩片の最大径は、各々3 mmと2 mm。

大下原第11テフラ (Os-11) : ローム層中に濃集する黄白色細粒軽石。軽石の最大径は、5 mm。

大下原第12テフラ (Os-12) : 成層した軽石層。層厚は54cm。下位より黄色粗粒軽石層 (層厚: 19cm、軽石の最大径: 42mm、石質岩片の最大径: 18mm)、黄色細粒軽石層 (層厚: 21cm、軽石の最大径: 7 mm、石質岩片の最大径: 2 mm)、桃色細粒火山灰混じり細粒軽石層 (層厚: 1 cm、軽石の最大径: 8 mm、石質岩片の最大径: 2 mm)、黄色細粒軽石層 (層厚: 4 cm、軽石の最大径: 11mm、石質岩片の最大径: 3 mm)、黄色粗粒軽石層 (層厚: 0.8cm、軽石の最大径: 18mm、石質岩片の

最大径：4 mm)、黄色細粒軽石層(層厚：8 cm、軽石の最大径：5 mm、石質岩片の最大径：2 mm)の連続からなる。

(2) 黒ボク土中のテフラ

第20トレンチでは、黒ボク土の良好な土層断面が観察された(図2)。野外地質調査とテフラ検出分析(後述)を合わせて行った結果、4層準にテフラが認められた。これらのテフラを下位より大下原第13テフラ(Os-13)～大下原第16テフラ(Os-16)と呼び、次に特徴を記載する。なお本地点においては、黒ボク土中最下位の暗褐色土の上位の黒褐色土から縄文時代前期の遺物が検出されている。

大下原第13テフラ(Os-13)：テフラ検出分析により検出された褐色バブル型火山ガラス。

大下原第14テフラ(Os-14)：テフラ検出分析により検出された白色軽石。

大下原第15テフラ(Os-15)：黒褐色土中に多く含まれる褐色軽石。

大下原第16テフラ(Os-16)：白色軽石層。軽石と石質岩片の最大径は22mmと4mm。

3. テフラ組成分析

(1) 分析試料と方法

B区深掘トレンチにおいて認められたOs-1について、火山ガラス比分析と重鉱物組成分析を合わせたテフラ組成分析を行い鉱物組成上の特徴を明らかにすることを試みた。分析の手順は、次の通りである。

- 1) 試料10gを秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3) 80℃で恒温乾燥。
- 4) 偏光顕微鏡下で250粒を検鏡し、火山ガラスの形態別組成を求める。
- 5) 偏光顕微鏡下で重鉱物250粒を検鏡し、重鉱物組成を明らかにする。

(2) 分析結果

分析結果をダイヤグラムにして図3に、その内訳を表1に示す。ただし重鉱物組成分析については、試料に含まれる重鉱物がほとんど認められなかったことから組成を明らかにするまでには至らなかった。ごく少量認められた重鉱物は斜方輝石や単斜輝石さらに角閃石などであるが他の層準から混入した可能性も否定できない。一方火山ガラスはとくに多く含まれており、その比率は粒子全体の97.2%にも及ぶ。とくに、平板状のバブル型ガラスが多く含まれている(粒子全体の94.0%)。また繊維束状に発泡した軽石型ガラスも少量認められる(3.2%)。火山ガラスの色調は、無色透明である。

4. テフラ検出分析

(1) 分析試料と方法

黒ボク土の良好な土層断面が作成された第20トレンチ壁面において、基本的に5cm連続で採取された試料のうち5cmおきの試料を中心とする合計7点についてテフラ検出分析を行い、テフラの検出同定を試みた。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表2に示す。特徴的な軽石が含まれている試料は、試料番号1および3の2試料である。試料番号1には、褐色の発泡の比較的良い軽石が多く含まれている。軽石の最大径は8.1mmである。軽石の斑晶には斜方輝石や単斜輝石が認められる。また試料番号3には、上述の褐色軽石のほかにスポンジ状によく発泡した白色軽石が含まれている。軽石の最大径は1.1mmと細粒である。ほかの試料には、発泡の良くない灰白色やスポンジ状や繊維束状にとくによく発泡した白色の軽石が含まれている。しかしとくに多く認められる試料はない。前者の最大径は3mm、後者の最大径は1mm程度である。

一方火山ガラスに注目すると、試料番号5に薄手の平板状のいわゆるバブル型ガラスがごく少量認められる。ただし量が非常に少ないために試料番号5を降灰層準と認定することはできない。ほかの試料には、いずれもスポンジ状や繊維束状に発泡した軽石型や透明のバブル型ガラスが比較的多く含まれている。ごく少量褐色の分厚い黒曜石が認められる。

表1 B区深掘トレンチのテフラ検出分析

試料	bw	md	pm	その他	合計
1	235	0	8	7	250

表2 第20トレンチのテフラ検出分析

試料	軽石			火山ガラス		
	量	色調	最大径	量	色調	形態
1	+++	褐	8.1	++	淡褐	pm>bw
3	+	褐>白	3.2, 1.1	++	透明>褐	pm>bw
5	+	灰白>白	1.9, 1.3	++	透明>褐	pm>bw
7	++	灰白>白	3.1, 0.9	++	透明>褐	pm>bw
9	++	灰白>白	1.2, 0.9	++	透明>褐	pm>bw
11	++	灰白>白	1.9, 1.2	++	透明>褐	pm>bw
12	++	灰白>白	2.1, 1.1	++	透明>褐	pm>bw

++++：とくに多い，+++：多い，++：中程度，+：少ない，-：認められない。最大径の単位は，mm。pm：軽石型ガラス，bw：バブル型ガラス。

5. 考察—示標テフラとの同定と遺物包含層の層位

大下原遺跡における野外地質調査とテフラ検出分析の結果、合計16層のテフラの存在が確認された。テフラ組成分析やテフラ検出分析によって明らかにされたテフラ粒子の特徴を合わせて示標テフラとの同定を試みると次のようになる。

Os-1：後述するように浅間—板鼻褐色軽石群 (As-BP Group) の直下にある透明のバブル型ガラスに富むテフラであることから、約2.1-2.2万年前に南九州の始良カルデラから噴出した始良Tn火山灰 (AT, 町田・新井, 1976) に同定される。

Os-2：テフラの層相から約1.6-2.1万年前に浅間火山から噴出した浅間—板鼻褐色軽石群 (As-BP Group, 新井, 1962, 町田ほか, 1984) の最下部の軽石に同定される。このテフラはその上位のテフラと区別して、浅間—室田軽石 (As-MP, 森山, 1972, 早田, 1990) と呼ばれることがある。

Os-3~Os-10：テフラ群の層相から、As-MPの上位のAs-BP Groupに同定される。ただしAs-BP Groupの噴出年代については、浅間—大窪沢第1軽石 (As-OP1) の噴出年代などから下限が若干古くなる (約1.7-2.1万年) 可能性もある。

Os-11：As-BPの上位にあり、浅間—板鼻黄色軽石 (As-YP, 後述) の下位にあることや大下原遺跡の位置とテフラの分布域などから、直下の泥炭層から16,880±130y.B.P. (中井ほか, 1992) の14C年代が得られている浅間火山起源の浅間—大窪沢第1軽石 (As-OP1, 中沢ほか, 1984, 早田, 1991) に由来する可能性が大きいと考えられる。ただしやはり浅間火山起源の浅間—大窪沢第2軽石 (As-OP2, 中沢ほか, 1984, 早田, 1991) に由来する軽石が含まれている可能性も完全には否定できない。なおAs-OP2の直下の泥炭層からは16,720±160y.B.P.の14C年代が得られている (中井ほか, 1992)。

Os-12：層相から約1.3-1.4万年前に浅間火山から噴出した浅間—板鼻黄色軽石 (As-YP, 新井, 1962, 町田ほか, 1984) に同定される。

Os-13：薄手の褐色のバブル型ガラスで特徴づけられることから、約6,300年前に南九州の鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰 (K-Ah, 町田・新井, 1978) に由来する可能性が大きい。前述のように火山ガラスの検出量が非常に少ないことから、その降灰層準を確定することは困難である。

Os-14：スポンジ状によく発泡した白色軽石で特徴づけられることから、4世紀中葉に浅間火山から噴出した浅間C軽石 (As-C, 新井, 1979) に由来する可能性が考えられる。

Os-15：比較的発泡のよい褐色の軽石であること、斑晶に斜方輝石や単斜輝石が認められることなどから、1108 (天仁元) 年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ (As-B, 新井, 1979) に由来

すると考えられる。

Os-16：層相から1783（天明3）年に浅間火山から噴出した浅間A軽石（As-A）に同定される。

大下原遺跡の発掘調査で検出された縄文時代前期の遺物包含層中にK-Ahに由来するものと考えられる火山ガラスが認められるが、その層位関係についてはK-Ahの降灰認定が困難であるために断定できない。

6. まとめ

大下原遺跡において野外地質調査、テフラ組成分析、テフラ検出分析を合わせて行った結果、火山灰土中に下位より始良Tn火山灰（AT，約2.1-2.2万年前）、浅間一板鼻褐色軽石群（As-BPGroup，約1.6-2.1万年前）に同定される9層のテフラ、浅間一大窪沢第1軽石（As-OP1，約1.6万年前）、浅間一板鼻黄色軽石（As-YP，約1.3-1.4万年前）、鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah，約6,300年前）に由来する可能性の大きい火山ガラス、浅間C軽石（As-C，4世紀中葉）に由来する可能性がある軽石、浅間Bテフラ（As-B，1108年）、浅間A軽石（As-A，1783年）の16層ものテフラを検出することができた。

文献

新井房夫（1962）関東盆地北西部地域の第四紀編年．群馬大学紀要自然科学編，10，p.1-79.

新井房夫（1979）関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層．考古学ジャーナル，no.157，p.41-52.

町田 洋・新井房夫（1976）広域に分布する火山灰—始良Tn火山灰の発見とその意義—．科学，

町田 洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫（1984）テフラと日本考古学—考古学研究と関係するテフラのカタログ—．古文化財編集委員会編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」，p.865-928..

森山昭雄（1971）榛名火山東・南麓の地形—とくに軽石流の地形について—．愛知教育大学地理学報告，36・37，p.107-116..

中井俊夫・辻誠一郎・竹本弘幸・池田晃子（1992）南軽井沢周辺のテフラ層序の加速器14C年代．日本第四紀学会講演要旨集，no.22，p.58-59.

中沢英俊・新井房夫・遠藤邦彦（1984）浅間火山，黒斑～前掛期のテフラ層序．日本第四紀学会講演要旨集，no.14，p.69-70.

早田 勉（1990）群馬県の自然と風土．群馬県史通史編，1，p.35-129.

2. 植物珪酸体分析

杉山真二（古環境研究所）

1. はじめに

植物珪酸体は、植物体内で形成されたガラス質の細胞であり、植物が枯れた後も微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定、および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，1987a）。

本章では、植物珪酸体分析を用いて、大下原遺跡における古植生・古環境の推定を試みた。

2. 試料

調査地点は、B区深堀トレンチと第20トレンチの2地点である（図1）。分析試料は、前者で14点、後者で8点の計22点が採取された。採取層準の詳細については第I章を参照されたい。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）」をもとに、次の手順で行った。

- (1) 試料の絶乾（105℃・24時間）
- (2) 試料約1gを秤量，ガラスビーズ添加（直径約40 μ m，約0.02g）
※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
- (3) 電気炉灰化法による脱有機物処理
- (4) 超音波による分散（300W・42KHz・10分間）
- (5) 沈底法による微粒子（20 μ m以下）除去，乾燥
- (6) 封入剤（オイキット）中に分散，プレパラート作成
- (7) 検鏡・計数

同定は、機動細胞珪酸体由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、この値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重，単位：10⁻⁵g）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。換算係数は、ヨシ属はヨシ、ウシクサ族はススキの値を用いた。その値はそれぞれ6.31、1.24である（杉山・藤原，1987）。タケ亜科については数種の平均値を用いて葉身重を算出した。ネザサ節の値は0.24、クマザサ属は0.22である（杉山，1987b）。

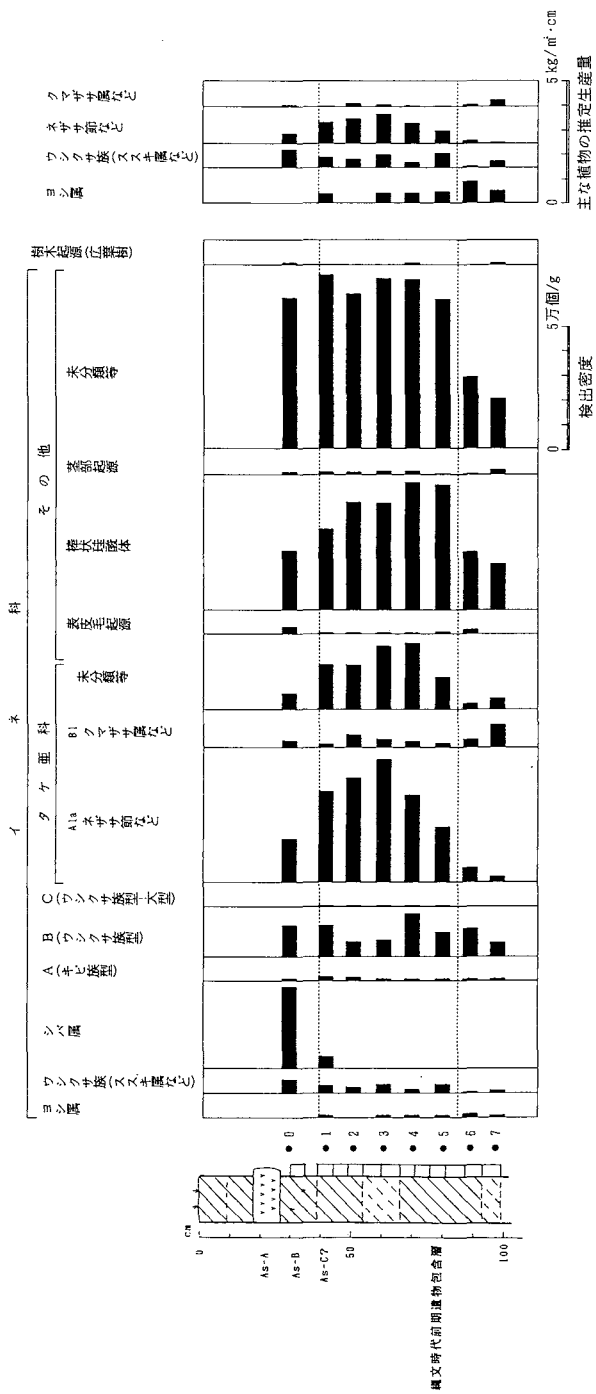


図2 安中市、大下原遺跡第20トレンチにおける植物珪酸体分析結果

表1 安中市、大下原遺跡の植物珪酸体分析結果

分類群	B区深堀トレンチ														No.20トレンチ								
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	0	1	2	3	4	5	6	7	
イネ科																							
ヨシ属							7					13				7		7	7	7	7	14	7
ウシクサ族(ススキ属など)															60	29	22	41	20	44	7	15	
シバ属															328	50							
Ala17*(キジ属型)												7	22		7	21	14	7	13	7	7	7	
B17*(ウシクサ族型)	8	15	8		7						7	59	74		134	136	65	68	175	102	113	52	
C17*(ウシクサ族型-犬型)											15				7	7	7	7	7	7			
タケ亜科																							
Ala17*(ネザサ節など)	8	22	7	8	8	7	7	7	15	7		59	74		179	364	418	500	351	212	57	22	
B17*(クマザサ属など)	30	786	1144	53	15	174	280	145	594	575	386	223	423	521	22	14	50	34	20	15	28	90	
未分類等	30	369	223	8	8	58	102	29	264	153	117	41	85	201	67	186	188	253	253	132	21	45	
その他のイネ科																							
表皮毛起源	23		37			7	14		7	7		39	15		30	7	7	7	7	15	21		
棒状珪酸体(維管束細胞起源等)	23	59	178			80	109	101	59	131	69	41	312	268	231	321	433	432	512	505	234	195	
葉部起源						15	7	14							7	7	7	14	13	7	7	15	
未分類等	53	525	431	30	8	312	307	174	235	364	345	278	508	566	612	700	627	699	694	615	284	209	
樹木起源																							
はめ糸バズル状(広葉樹)			7										7		7							7	
(海綿骨針)										7		7										7	
植物珪酸体総数	173	1773	2042	105	38	654	818	478	1159	1245	931	589	1503	1764	1687	1850	1839	2068	2090	1668	794	656	

(単位: ×100個/g)

表2 大下原遺跡における主な分類群の推定生産量

分類群	B区深堀トレンチ														No.20トレンチ							
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	0	1	2	3	4	5	6	7
イネ科																						
ヨシ属							0.43					0.82				0.45		0.43	0.43	0.46	0.90	0.47
ウシクサ族(ススキ属など)															0.74	0.95	0.27	0.51	0.25	0.54	0.09	0.19
タケ亜科																						
Ala17*(ネザサ節など)	0.02	0.95	0.02	0.02	0.02		0.02		0.02	0.03	0.02	0.14	0.18		0.43	0.87	1.00	1.20	0.84	0.51	0.14	0.05
B17*(クマザサ属など)	0.07	1.76	2.52	0.12	0.03	0.38	0.62	0.32	1.31	1.27	0.85	0.49	0.93	1.15	0.05	0.03	0.11	0.08	0.04	0.03	0.06	0.20

(単位: kg/m²・cm)

4. 分析結果

(1) B区深堀トレンチ

ローム層最上部のAs-YP直上層（試料1）からAT直下層（試料14）までの層準について分析を行った。その結果、全体的にタケ亜科B1タイプ（クマザサ属など）が多く見られ、その他の分類群は比較的少量であった。以下に、各層準ごとに植物珪酸体の出現状況を述べる。

最下位のAT直下層（試料14）では、タケ亜科B1タイプ（クマザサ属など）が5万個/g以上と多量に検出され、棒状珪酸体も比較的多く見られた。その他の分類群ではイネ科Bタイプ（ウシクサ族型）やタケ亜科A1aタイプ（ネザサ節など）などが見られたが、いずれも少量である。なお、イネ科以外にも樹木（広葉樹）に由来する植物珪酸体が少量検出された。AT直上層（試料13）では、ヨシ属が少量見られた以外は、AT直下層とほぼ同様の結果であった。

As-BPGroupの各ユニット間（試料4～12）でも、継続してタケ亜科B1タイプ（クマザサ属など）が検出された。このうち、中位の層準（試料9、10）では密度が約6万個/gとかなり高い値であるが、下位のAs-MP直上層（試料12）や上位の層準（試料4～6）などでは比較的少量となっている。

As-OP1直下層（試料3）では、タケ亜科B1タイプ（クマザサ属など）が11万個/gと極めて多量に検出され、圧倒的に卓越している。As-YP直下層（試料2）でも同分類群が約8万個/gと多量に検出されたが、As-YP直上層（試料1）では他の分類群とともに大幅に減少している。なお、As-BPGroup下部より上位の層準では、ウシクサ族（ススキ属など）やヨシ属などのイネ科植物はほとんど検出されず、タケ亜科A1aタイプ（ネザサ節など）もほとんど見られなかった。

(2) 第20トレンチ

黒ボク土層最下部（試料7）からAs-A直下層（試料0）までの層準について分析を行った。

その結果、最下位の試料7では、タケ亜科B1タイプ（クマザサ属など）が比較的少量検出され、ヨシ属やウシクサ族（ススキ属など）、タケ亜科A1aタイプ（ネザサ節など）なども少量見られた。縄文時代前期遺物包含層の下部（試料6）ではタケ亜科B1タイプ（クマザサ属など）はさらに減少し、かわってタケ亜科A1aタイプ（ネザサ節など）の増加傾向が認められた。同層上部（試料4、5）ではタケ亜科A1aタイプ（ネザサ節など）はさらに増加し、淡色黒ボク土に相当すると考えられる層準（試料3）では密度が5万個/gにも達している。なお、これらの層準ではヨシ属やウシクサ族（ススキ属など）も継続的に検出された。

このような状況は、As-C混層（試料1）まで継続されるが、As-A直下層（試料0）ではタケ亜科A1aタイプ（ネザサ節など）は大幅に減少し、かわってシバ属が多量に検出された。

5. 古植生および古環境の推定

以上の結果から、堆積当時の植生と環境について推定すると次のようである。

AT直下層からAs-YP直下層までのローム層の堆積当時は、クマザサ属が卓越するイネ科植生がおおむね継続されていたものと考えられ、その他のイネ科植物はほとんど見られなかったものと推定される。クマザサ属は比較的寒冷なところに生育していることから、当時は比較的寒冷な気候条件で推移したものと推定される。なお、AT直上層については調査地点もしくはその付近にヨシ属の生育する湿地的な部分も見られたものと推定される。

As-BPGroupの各ユニットは数cmから数十cm程度の層厚であるが、堆積当時はさらに厚かったものと思われる。このためテフラの堆積によって当時の植生は一時的に破壊されたと考えられるが、クマザサ属は比較的早い時期に再生して繁茂したものと考えられる。

黒ボク土の最下部では、クマザサ属は次第に減少し、縄文時代前期遺物包含層の下部ではネザサ節が優勢になったものと考えられる。ネザサ節は比較的温暖なところに生育していることから、この時期に寒冷から温暖への環境変化があった可能性が考えられる。なお、この当時は調査地点もしくはその付近にヨシ属の生育する湿地的な部分も見られたものと推定される。

その後、縄文時代前期遺物包含層の上部からAs-C混層にかけては、ネザサ節を主体とし、ススキ属やヨシ属なども見られるイネ科植生が継続されたものと推定される。とくに淡色黒ボク土に相当すると考えられる層準ではネザサ節の生育が旺盛であったものと考えられる。これらの植物は森林の林床では生育しにくいことから、当時の遺跡周辺は、森林で覆われたような状況ではなく比較的開かれた環境であったものと推定される。

As-A直下層では、なんらかの原因でネザサ節が減少し、シバ属が多く見られるようになったものと考えられる。

6. まとめ

以上のように、ローム層の堆積当時はテフラの度重なる堆積にも関わらずクマザサ属が卓越するイネ科植生が継続されたものと推定される。その後、ローム層と黒ボク土層との境では大きな植生変化が認められ、黒ボク土層下部ではネザサ節を主体としススキ属なども見られる草原植生に移行したものと推定される。

このように植生が大きく変化した原因として、1)この時期に寒冷から温暖への気候変化があったこと、2)この時期に森林植生が破壊されネザサ節やススキ属などの草原植生が維持されたことなどが考えられる。これと同様の植生変化は群馬県内およびその周辺でも認められており(杉山ほか, 1992・佐瀬ほか, 1987)、このような植生・環境変化が局所的なものではなく比較的広い地域における環境変化を反映しているものとして注目される。

なお、タケ亜科植物やススキ属などは、その有用性から燃料や道具、住居の屋根材や建築材、敷物などとして盛んに利用されていたものと考えられる。特に笹類は鹿などの草食動物の食料としても重要であったものと考えられる。

参考文献

- 佐瀬隆・細野衛・宇津川徹・加藤定男・駒村正治（1987）「武蔵野台地成増における関東ローム層の植物珪酸体分析」『第四紀研究』26：1-11.
- 杉山真二（1987a）「遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点」『植生史研究』第2号：27-37
- 杉山真二（1987b）「タケ亜科植物の機動細胞珪酸体」『富士竹類植物園報告』第31号：70-83.
- 杉山真二・藤原宏志（1987）「川口市赤山陣屋跡遺跡におけるプラント・オパール分析」『赤山—古環境編—』川口市遺跡調査会報告，第10集，281-298.
- 杉山真二・前原豊・大工原豊（1992）「植物珪酸体(プラント・オパール)分析による遺跡周辺の古環境推定」『日本文化財科学会第9回大会研究発表要旨集』14-15.
- 藤原宏志（1976）「プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—」『考古学と自然科学』9:15-29.
- 藤原宏志（1979）「プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)—福岡・板付遺跡（夜白式）水田および群馬・日高遺跡（弥生時代）水田におけるイネ（*O.sativa*L.）生産総量の推定—」『考古学と自然科学』12:29-41.

3 石器石材の分析

1. はじめに

安中市南部の横野台地には縄文時代の遺跡が広く分布している。今回発掘調査を実施した大下原遺跡、吉田原遺跡でも大量の土器、石器が出土している。横野台地周辺の群馬県西部地域には、石器石材に使用できる火成岩、堆積岩、変成岩が分布し、石材の地元供給を可能にしている。石器石材は岩石の種類や特徴、原礫面がみられることから鏑川流域で採集した可能性が高い。

そこで、大下原遺跡から出土した石器石材と、河川で採取した石器石材と類似した石材について、石質鑑定を行った。具体的には、全体の石材について肉眼観察を行い、その中から一般的な石材を抽出し、プレパラートを作成し、偏光顕微鏡を用いた観察によって鑑定する方法を採用した。また、河川及び露頭での現地観察、剥片剝離実験も並行して実施し、石材の入手先について検討を行った。なお、今回の分析は、本遺跡で量的に安定して存在する近・中距離圏に分布する、直接入手した可能性の高い石材に重点をおいて実施した。

2. 群馬県西部の地形と地質

石材の分析に先立ち、群馬県西部地域の地形及び地質について概観する。

群馬県西部地域は南を関東山地の一部の多野山地、西は長野県境の荒船山、八風山、矢ヶ崎山などの西部山地、北は榛名火山によって囲まれ、その内を北から烏川、碓氷川、鏑川が秋間丘陵、横野台地、鏑川段丘などをぬって東流している。

本地域に分布する地層や岩石は、一般的に南から北へ古い時代のものから新しい時代のものへと移り変わる（第1図）。

多野山地は秩父中・古生層、御荷鉾緑色岩類、三波川結晶片岩からなり、ほぼ同時代のものと考えられている（第2図）。秩父中・古生層は砂岩、粘板岩、チャート、輝緑凝灰岩、石灰岩及び準片岩で構成されている。そして、御荷鉾緑色岩類は玄武岩、輝緑岩、斑斕岩、かんらん岩や玄武岩質の火山砕せつ岩などが変成～変質したものである。また、三波川結晶片岩は緑色片岩、黒色片岩、珪質片岩、雲母片岩などからなり、点紋片岩と無点紋片岩に分けられる。

下仁田町付近には礫岩、砂岩、頁岩、珪質頁岩などからなる中生層が分布している。

中央部の鏑川、碓氷川流域には泥岩、砂岩、礫岩、凝灰岩などの新第三紀海成層が分布し、その最下部に下仁田泥岩層、牛伏砂岩層が位置する。

新第三紀海成層をおおうようにして、安山岩質の新第三紀火山堆積物が西部地域と北部地域に厚く堆積している。

北西部には新第三紀火山堆積物をおおって第四紀の鼻曲火山、榛名火山、浅間火山の噴出物が分布している。

南西部には、かんらん岩類、花崗岩類、ひん岩類、流紋岩類、安山岩類などの貫入岩がみられる。中央部の台地、河岸段丘、河川低地は、第四紀碎せつ堆積物によっておおわれている。

3. 器種と石材

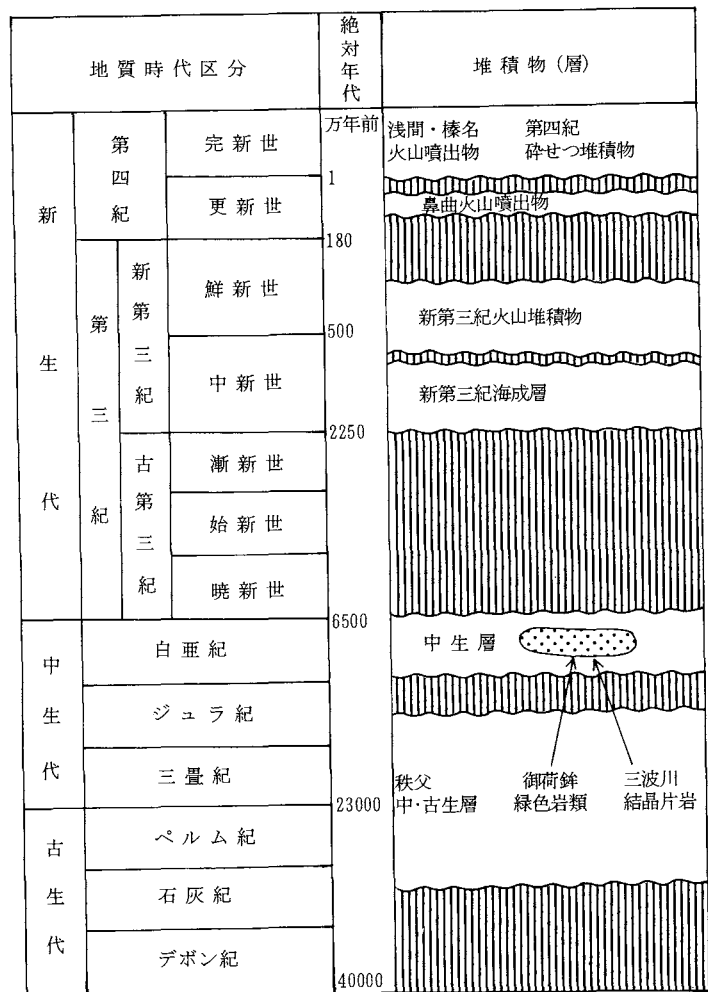
大下原遺跡から出土した石器のうち、出土量が多いものとしては石鏃、打製石斧、スクレイパーB類、磨石、凹石、石皿がある。そして、器種と石材の間に密接な結びつきがあることが明らかとなった。そこで、代表的な器種に用いられる石材について観てゆくことにする。

【石鏃】 硬く鋭い割れ口を持つ石材が用いられ、黒曜石とチャートが選択的に使用されている。特に、黒曜石の占有率が高い。

【スクレイパーA類】 硬く鋭い割れ口を持つ石材が用いられ、黒曜石、チャート、硅質頁岩、黒色安山岩などが使用されている。この器種では黒曜石の占有率はやや低下し、大形のものにはチャート、黒色安山岩が用いられる。

【石匙A類・B類】 硬く鋭い割れ口を持つ石材が用いられ、黒曜石、チャート、黒色安山岩、頁岩などが用いられている。特に、黒色安山岩は石匙A類に選択的に用いられる傾向があり、石匙B類には頁岩が多用される傾向がある。

【打製石斧・スクレイパーB類】 硬く割れ口の鋭い、比較的薄く割れる石材が用いられ、多くは新第三紀海成層中の硬い泥岩が用いられているが、より硬質の中生層中の



○御荷鉾緑色岩類、三波川結晶片岩は7000万年前頃の
変形作用によって、形成されたものと考えられている。

第2図 群馬県西部の地質層序

頁岩、珪質頁岩を使用したものもみられる。(註1)

【磨石・凹石】 丈夫で、均質で、丸い形態の礫になりやすい石材が用いられ、粗粒斑晶安山岩と多孔質安山岩が使用されている。

【石皿】 摩擦が大きく、大きな平らな面が得やすい石材が用いられ、粗粒斑晶安山岩と点紋片岩が使用されている。

【砥石】 粒子の大きさが均質で、石英粒子の多い石材が用いられ、褐色砂岩が用いられている。

【石棒・棒状礫】 緑色片岩、点紋片岩、絹雲母片岩などの結晶片岩が用いられている。

【磨製石斧】 丈夫で重く、粘りがあり、滑らかな表面が得やすい石材が用いられ、緑色岩類が多用されている。

4. 石材の原産地の推定

これまで本遺跡周辺の地質と遺跡出土資料について概観してきた。また、遺跡出土資料には原礫面が残っているものが多くみられることから、主要な供給地は河原と推定される。こうした事柄を踏まえ、遺跡出土の資料と河川の礫を対比して、それぞれの石材について検討し、産地と採取地点を推定してみたい。

【黒曜石】 本地域西部の矢ヶ崎山東方の流紋岩類の周縁に質の悪い黒曜石（ガラス質流紋岩）がわずかに産出するが、石材として使用できない。したがって、石鏃などに用いられる黒曜石(1)は他地域から供給されたものと推定される。

【チャート】 石鏃やスクレイパーA類に使用されている赤褐色、灰黒色チャート(3～5)は、鐮川上流に分布する秩父中・古生層中のチャートと推定される。この石材は鐮川の河原に転石として分布しており、容易に採集できる。地点の特定はできないが、鐮川流域で採取したものと推定される。また、赤色チャート(2)は鐮川中流域では転石としてほとんど確認されないが、本地域に分布する新第三紀火山堆積物中の赤色珪質岩と推定される。

【頁岩・泥岩】 打製石斧などに多用され、最も出土点数の多いものが頁岩・泥岩である。このうち黄緑色泥岩(13)は、新第三紀海成層最下部の下仁田層中の泥岩(26)と推定される。珪質あるいは石灰分を含む硬い泥岩の部分が石器石材として利用されているようである。また、遺跡出土資料中には珪質頁岩や灰黒色頁岩(10・12)も認められるが、それらは下仁田付近の中生層中のもの(27・28)と推定される。同じ石材群でも前者は西牧川、後者は南牧川流域に分布し、下仁田の合流点の下流域では両者が混ざりあって、転石として広範囲に分布している。そして、下流へ行くほどより硬質の中生層起源のもの比率が高くなる傾向が認められる。本遺跡の石材は下仁田層中のものが非常に多く用いられており、比較的上流域で採取された可能性が高い。

また、本地域には見られない黒色頁岩も少量出土しているが、これについては検討を要する。

【砂岩】 砥石として使用されている褐色砂岩（16・17）は、鑄川支流の天引川、大沢川から供給された新第三紀海成層最下部の牛伏層中の砂岩と判断される。この石材は富岡市域の鑄川にはまったく認められず、下流域の吉井町で採取されたものと判断される。

【安山岩】

磨石、石皿などに広く用いられている粗粒斑晶安山岩（14）は、輝石、斜長石の大きな斑晶が目立つ安山岩で西部山地に広く分布する新第三紀火山堆積物中のものである。碓氷川、鑄川の両河川流域に広範に分布している。

【黒色安山岩】 石匙A類やスクレイパーA類などに黒色安山岩（6～8）は用いられている。この石材では本地域では荒船山付近に分布する新第三紀火山堆積物中のものと、八風山付近のそれがある。肉眼では両者の区別は困難であるが、偏光顕微鏡による観察結果と、八風山起源のものは群馬県側にはほとんど転石として存在していないという現地調査の結果から、大部分は荒船山付近に分布する新第三紀火山堆積物中のもの推定される。この石材は鑄川上流域から中流域に広範囲に存在する（29）。しかし、同一地域に存在する後・晩期の天神原遺跡出土資料中には八風山起源と推定されるものも認められる。また、遺跡出土の黒色安山岩の中には遺跡周辺では見られない資料もあり、さらに検討を要する石材である。

【緑色岩類】 磨製石斧に選択的に用いられている緑色岩類（21～25）は、玄武岩、輝緑岩、斑斕岩、かんらん岩、火山砕せつ岩などが起源のもので、南部地域に分布する御荷鉾緑色岩類（30）と推定される。この石材は下仁田付近の鑄川河岸の露頭や河原には大量に分布している。そして、その下流域にあたる富岡市域の鑄川においても転石として多数認められる。したがって、下仁田から富岡にかけての鑄川流域で採取したものである可能性が高い。

【結晶片岩】 石棒、棒状礫、石皿に使用されている結晶片岩（18～20）は、多野山地に分布する三波川結晶片岩と判断される。鑄川本流に南から流れこむ支流の岩染川、下川、雄川から供給されたものであろう。したがって、合流点付近及びその下流域で採取されたものと推定される。

ちなみに、結晶片岩は河川の護岸工事に多く用いられており、現在では産出しない河川流域でも転石として存在しているので注意が必要である。

5. まとめ

遺跡周辺の主な河川を検討すると、碓氷川には安山岩、黄褐色泥岩、石英閃緑岩などの礫がみられ、磨石や石皿に使用されている粗粒斑晶安山岩があること、碓氷川は遺跡に近いことから、大部分の安山岩は碓氷川から採取してきたと考えられる。しかし、鑄川流域にも同種の安山岩は存在しており、一部はここからもたらされた可能性もある。

鑄川には頁岩、泥岩、砂岩、礫岩、粘板岩、チャート、輝緑凝灰岩、珪質頁岩、石灰岩、安山

岩、石英閃緑岩、緑色岩類、結晶片岩などがみられる。礫種も豊富で、石材として使用可能な岩石が多い。そして、遺跡から出土した石材と岩石学的に一致するものも多い。したがって、遺跡の多くの石材は鑄川から採取してきたものと考えられる。しかし、一方で石灰岩のように河川に多く分布しているにも関わらず、遺跡にはほとんど持ち込まれない石材もあり、単純に河川と遺跡の石材組成は一致しない。このような点に人為的な選択性を読みとることができるところがある。

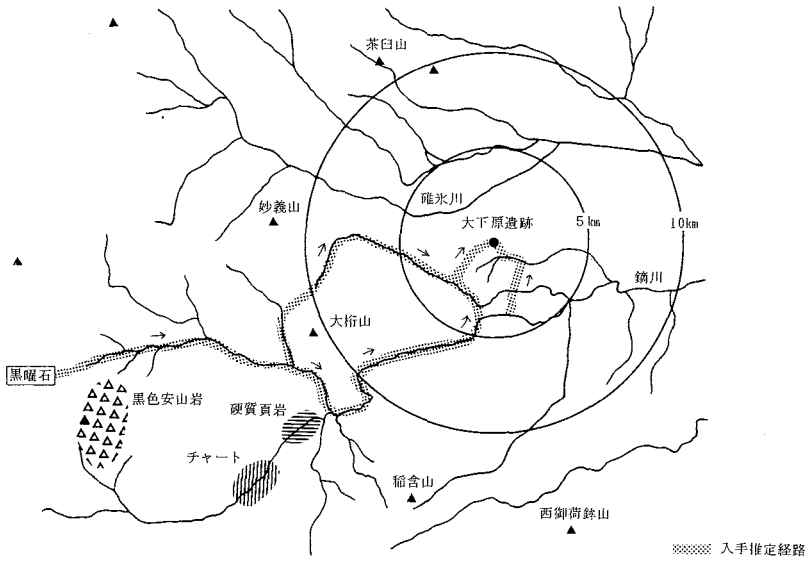
烏川には安山岩と熔結凝灰岩（秋間石）がみられるが、石器に使用されているような安山岩はみられないことなどから、烏川から石材を採取してきた可能性は極めて少ない。

以上の結果をまとめると次のようになる（第3図～第5図）。

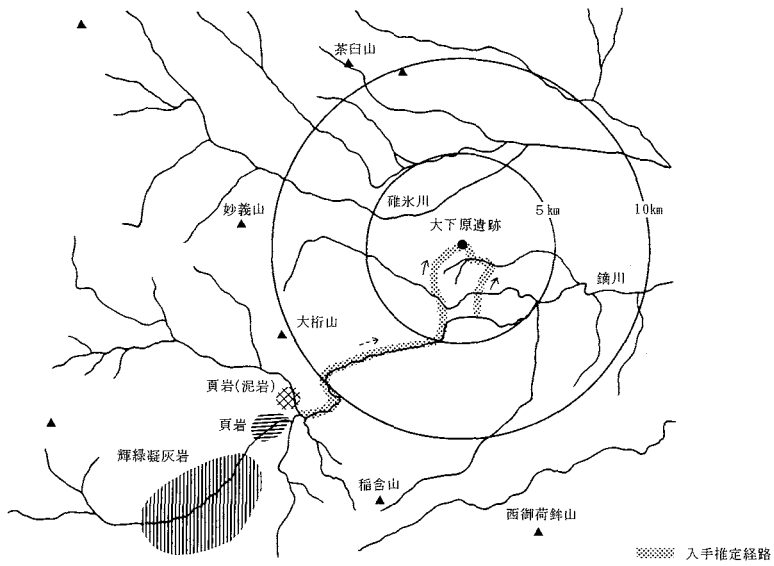
- 1 石材Ⅰ類のうち黒曜石は本地域以外の地域、おそらく長野県方面から搬入されたものである。しかし、チャート、硬質頁岩、黒色安山岩は鑄川流域から入手したものと推定される。
- 2 石材Ⅱ類（頁岩・泥岩、輝緑凝灰岩）はほとんど鑄川流域から入手したものと推定される。しかし、一部他地域から持ち込まれた可能性のあるものが存在している。
- 3 石材Ⅲa類（安山岩）は碓氷川流域と鑄川流域から入手したものと推定される。ただし、より近距離に位置する碓氷川から入手したものが多くを占めることが妥当であろう。
- 4 石材Ⅲb類（砂岩）は鑄川流域のうち、吉井町域から入手したものと推定される。
- 5 石材Ⅳ類（結晶片岩）は鑄川流域のうち、富岡市域から入手したものと推定される。
- 6 石材Ⅴ類（緑色岩類）は鑄川流域のうち、下仁田町域から富岡市域から入手したものと推定される。
- 7 石材Ⅵ類は本遺跡では軽石が1点存在するが、第四紀火山（浅間山・榛名山など）起源のもので、少なくとも鑄川流域には産出しない石材であり、本遺跡より北方ないしは西方から搬入したものと推定される。

この石材に関する分析は、筆者らと麻生敏隆氏との共同研究の成果の一部であり、現地踏査等の作業は共同で実施したものである。（磯貝基一・大工原豊）

（註1）頁岩と泥岩の名称については、従来考古学の分野では慣習的に「頁岩」の呼称が用いられることが一般的であったので、石器の説明の部分では頁岩と泥岩をまとめて「頁岩」の呼称を用いている。しかし、岩石学的記載では一般的に剥離性の発達した泥質岩を頁岩としており、考古学的に用いられる「頁岩」とは若干性質が異なっている。この節では便宜的に剥離性の乏しい新第三紀層中のものを「泥岩」とし、剥離性の発達した中生層中のものを「頁岩」として記載している。



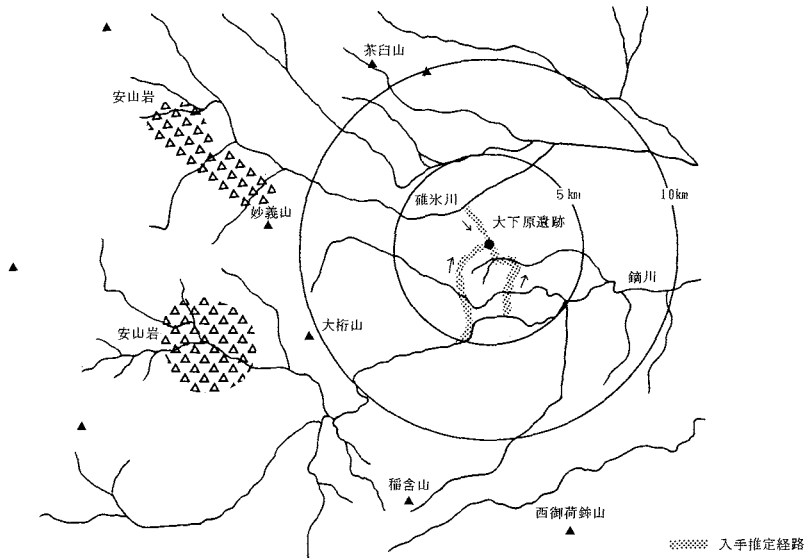
石材I類



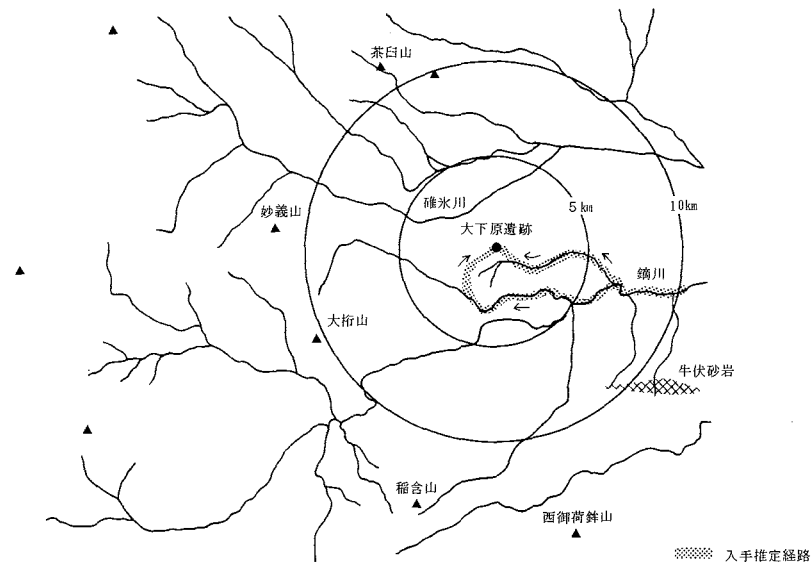
石材II類

0 10km

第3図 石材入手推定経路(1)



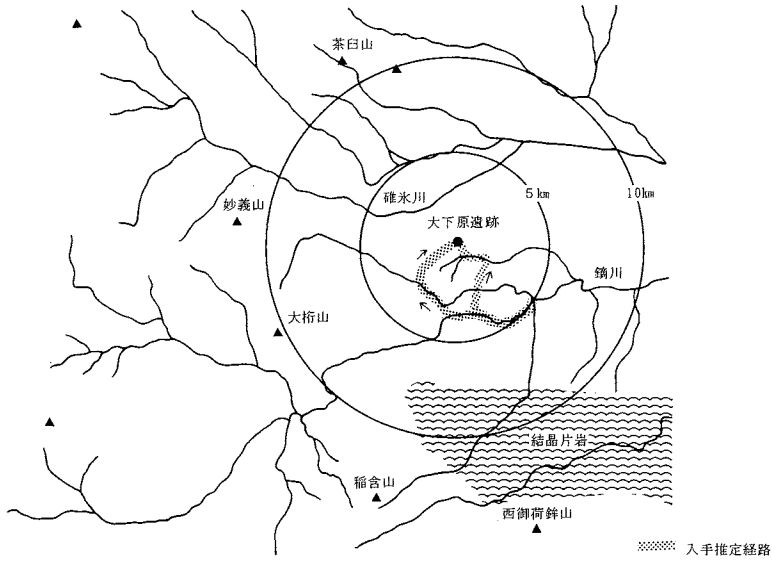
石材Ⅲ a類



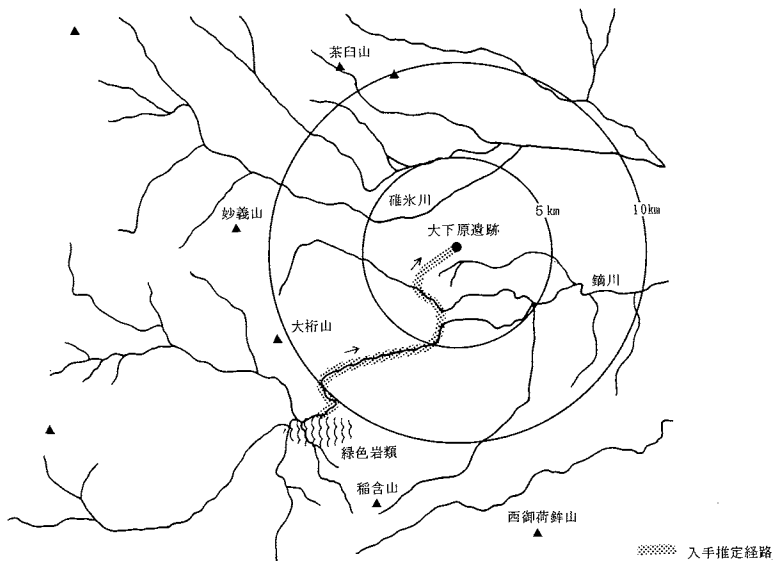
石材Ⅲ b類



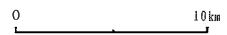
第4図 石材入手推定経路(2)



石材IV類



石材V類



参考文献

飯島静男 1987「群馬県の地質」『群馬県植物誌』 p.43-76

後藤和民・庄司克・新井重三 1984『縄文時代の石器—その石材交流に関する研究—』千葉県加曾利貝塚博物館

柴田 徹 1992「石器石材について」『堀之内貝塚資料図譜』市川考古博物館研究調査報告 5, p.86-110.

中東耕志・飯島静男 1984「群馬県における旧石器・縄文時代の石器・石材—黒色頁岩と黒色安山岩」『群馬県立歴史博物館年報』 5, p.28-36.

日本の地質編集委員会 1986『日本の地質 3—関東地方』共立出版

野村 哲・秋間団研グループ 1981「関東平野北西縁の地質」『地質学論集』 20, p.161-167.

山本 薫 1989「縄文時代の石器に使われた岩石および鉱物について—石器製作における石材の選択とその背景—」『地学雑誌』 98-7, p.79-101.

発掘調査報告書抄録

ふりがな	おおしもほらいせき よしだほらいせき
書名	大下原遺跡・吉田原遺跡
副書名	すみれ工業団地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	大工原豊・関根慎二・麻生敏隆・中島誠・金井京子・和田宏子・磯貝基一・早田勉・杉山真二
編集機関	安中市教育委員会
編集機関所在地	379-01 群馬県安中市安中1丁目 23-13
発行年	西暦1993年3月31日

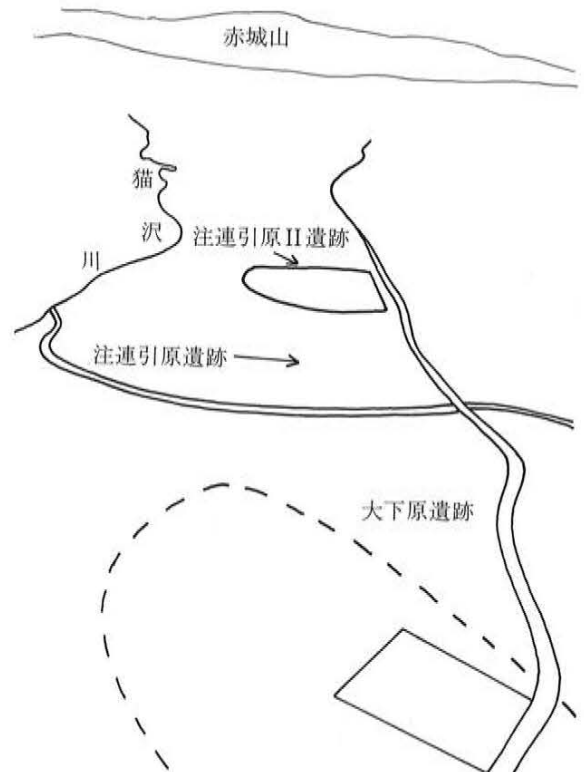
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北 緯 ° ' "	東 経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市 町 村	遺跡番号					
おおしもほらいせき 大下原遺跡	あんなかしなかの 安中市野 やあざおおしもほら 谷字大下原	102113	G15B・G15C	36° 16' 55"	138° 52' 30"	19910507- 19910812	4,590㎡	工業団地造成
よしだほらいせき 吉田原遺跡	あんなかしなかの 安中市野 やあざよしだほら 谷字吉田原		G15A	36° 16' 55"	138° 52' 30"	19910415- 19910618	1,520㎡	工業団地造成

所収遺跡名	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項	
大下原遺跡	集 落	縄文前期中葉～後葉	住居址	17	土器・石器・礫	大規模な集落で 広場及び土壌墓 群が存在する。
			土壌	約180	土器・石器・礫	
			集石土壌	4	土器・石器・礫	
			ピット	約2,000	土器・石器・礫	
		縄文中期前葉 縄文中期後葉	土壌	3	土器・石器・礫	
			配石遺構	1	土器・石器・礫	
			埋設土器	4	深鉢形土器 4	
			住居址	3	壺・甕	
弥生時代後期 奈良・平安時代	住居址	1	坏・甕・刀子・紡錘車			
	掘立柱建物址	1				
吉田原遺跡	集 落	縄文時代前期中葉	住居址	5	土器・石器・礫	
			集石土壌	2	土器・石器・礫	
			集石	2	土器・石器・礫	
			陥穴	1		

写真図版



大下原遺跡全景



大下原遺跡とその周辺（西上空から東を望む）



上空から見た調査前の大下原遺跡・吉田原遺跡（破線は遺跡の推定範囲）



吉田原遺跡（1）



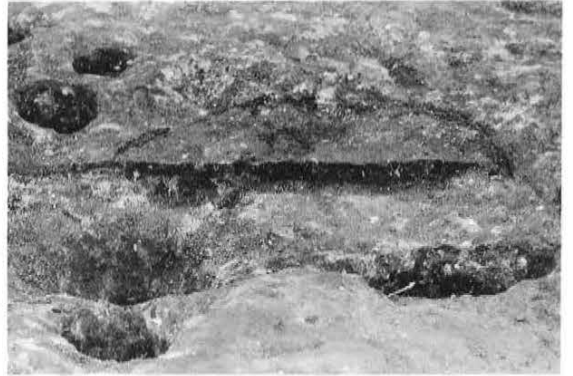
吉田原遺跡（2）



J-1 号住居址



J-1 号住居址炉址



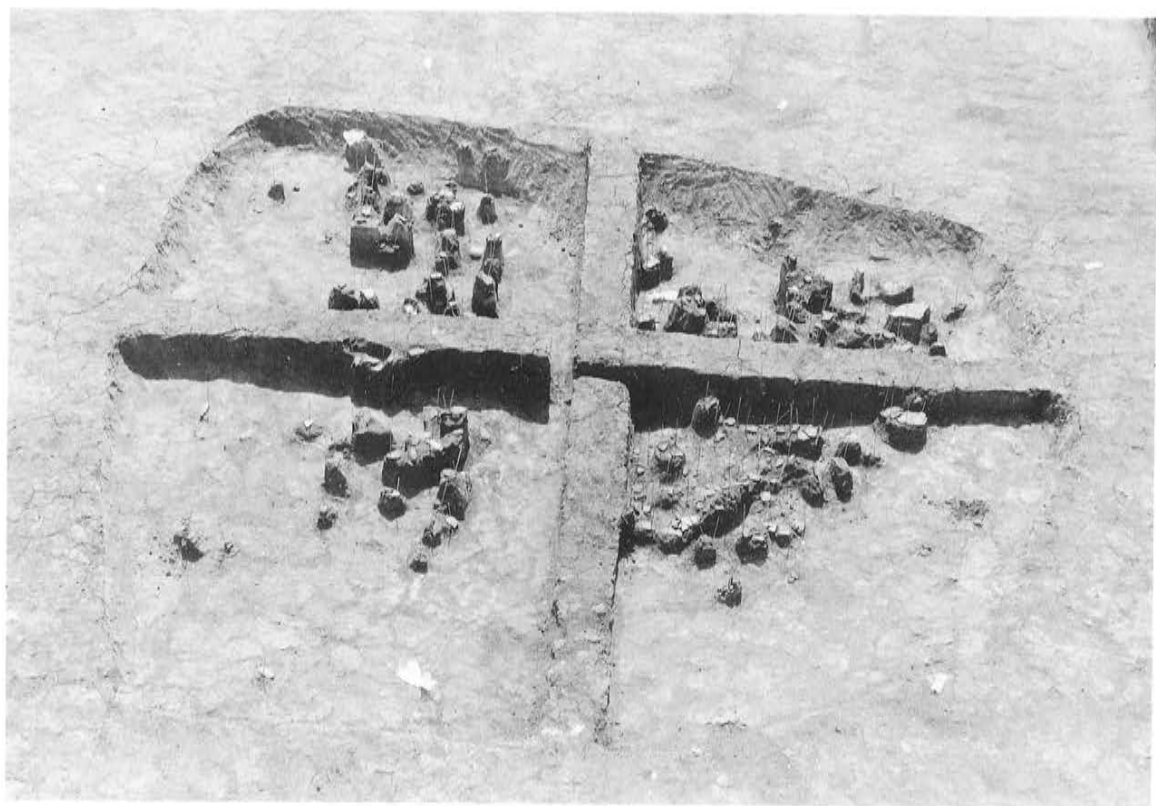
J-1 号住居址炉址土层断面



J-1 号住居址遺物出土狀況



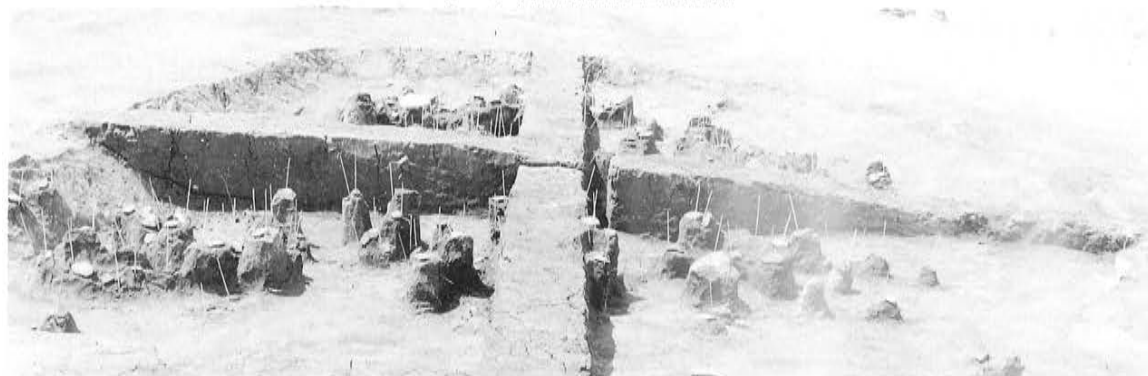
J-1 号住居址遺物出土狀況



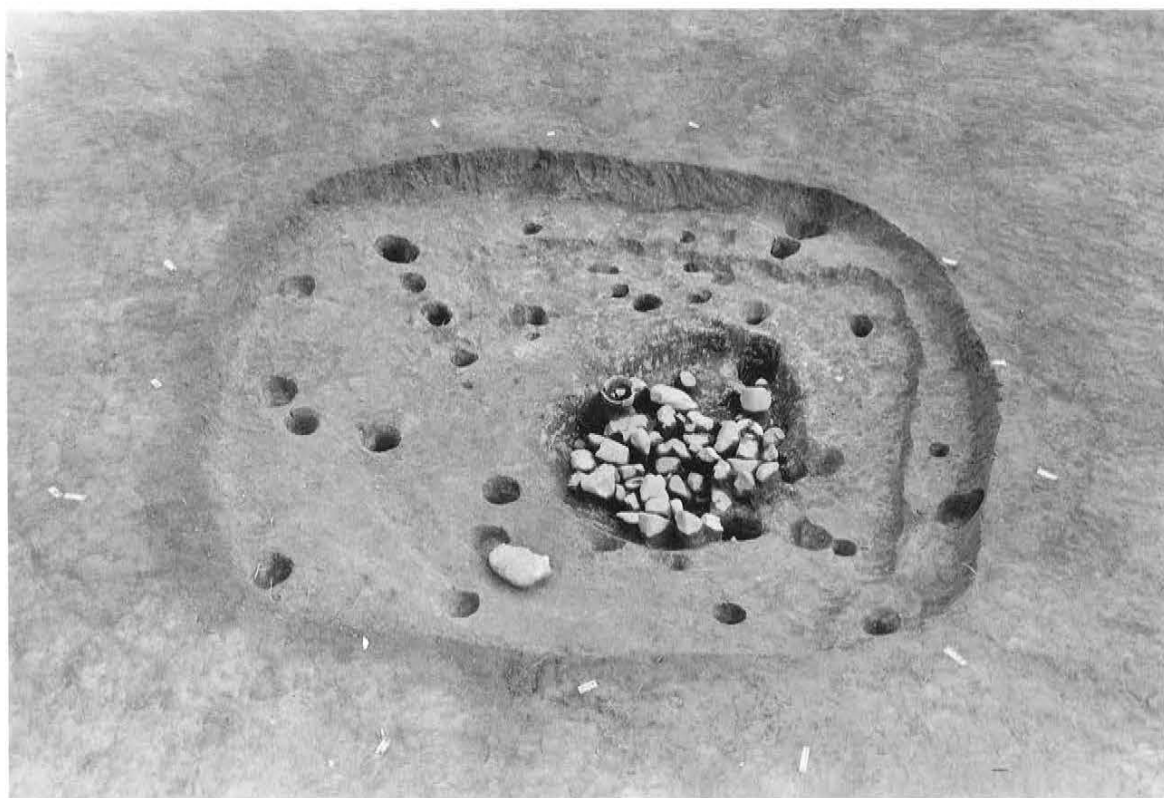
J-1号住居址遺物出土狀況



J-1号住居址東西土層断面



J-1号住居址南北土層断面



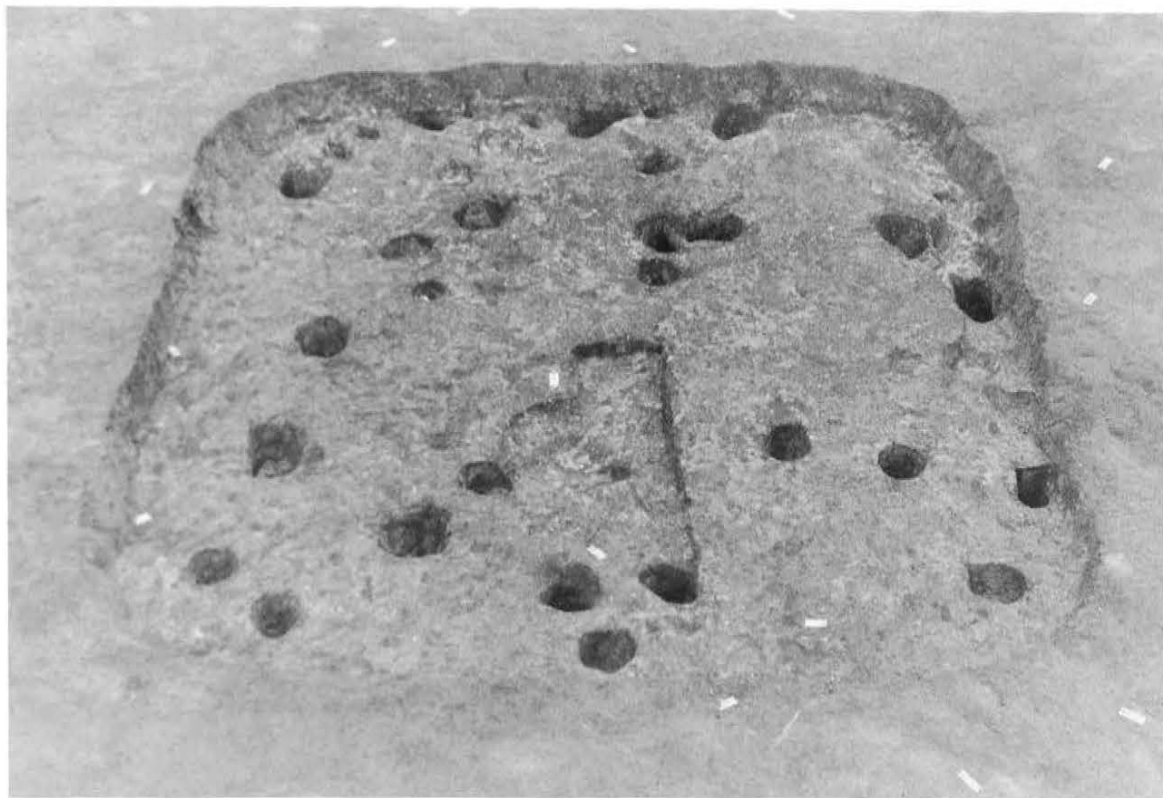
J-2 号住居址



J-2 号住居址东西土层断面



J-2 号住居址南北土层断面



J-3 号住居址



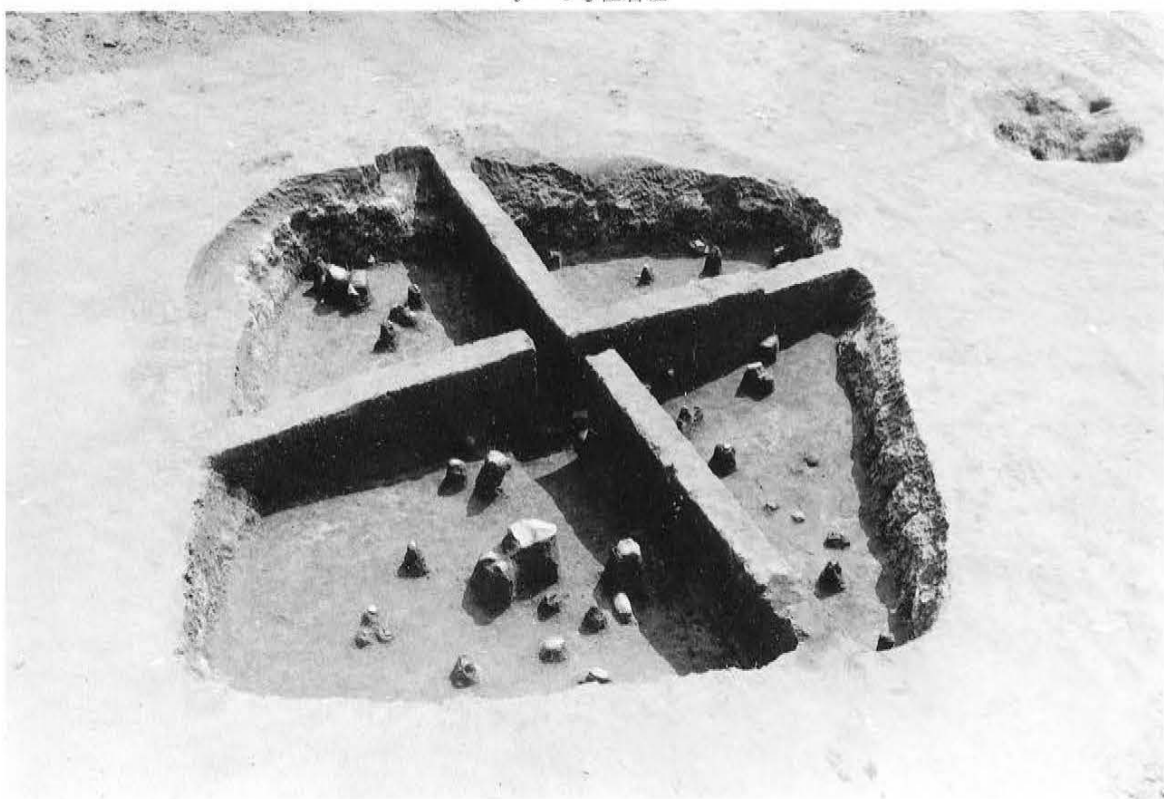
J-3 号住居址東西土層断面



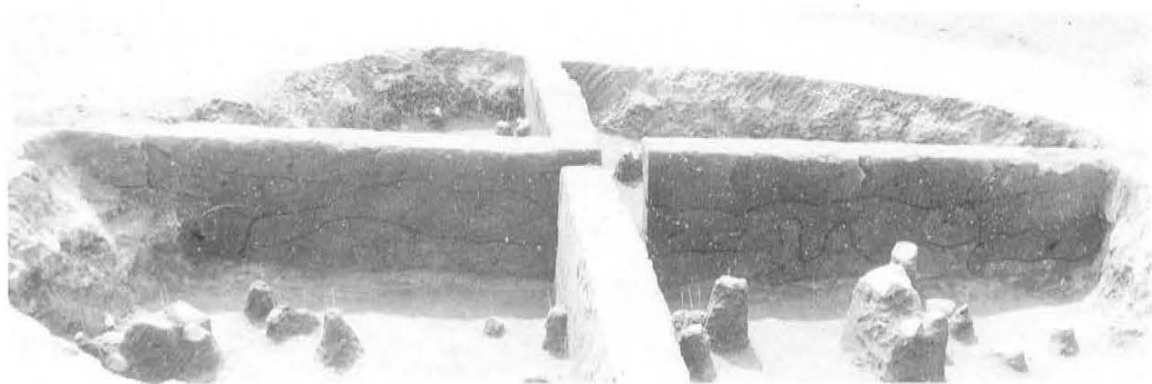
J-3 号住居址南北土層断面



J—4号住居址



J—4号住居址遺物出土狀況



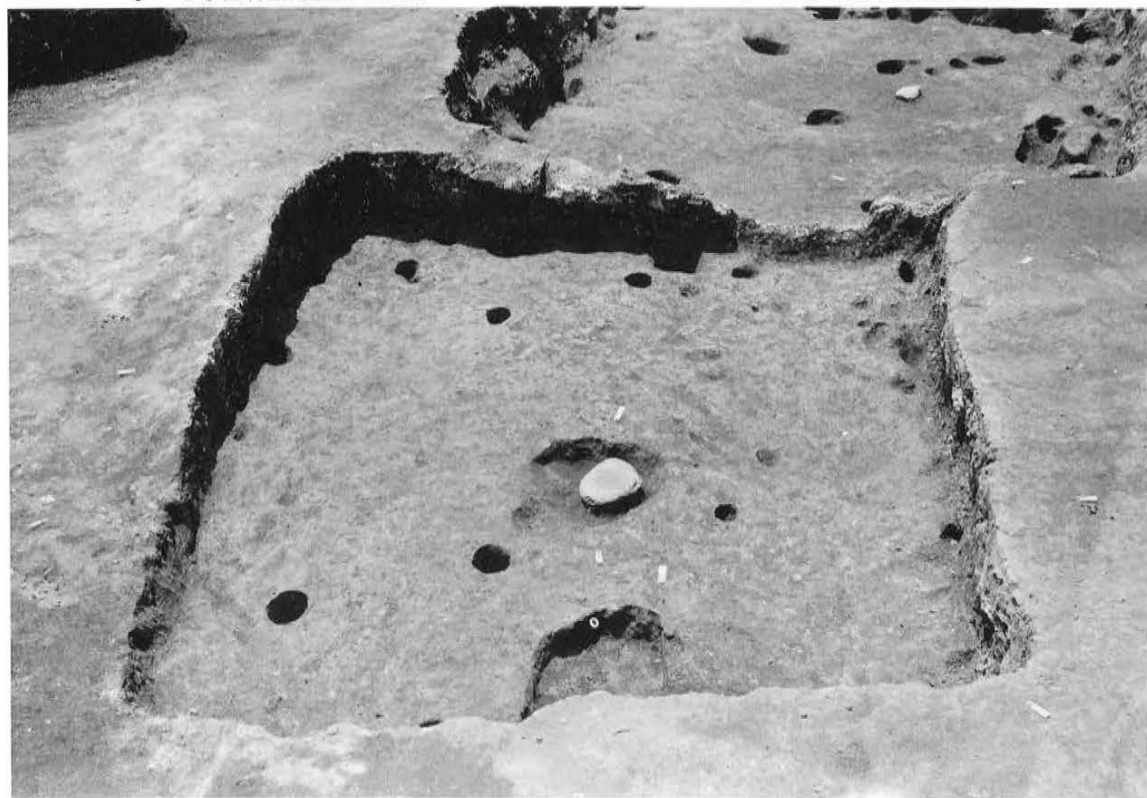
J-4号住居址南北土层断面



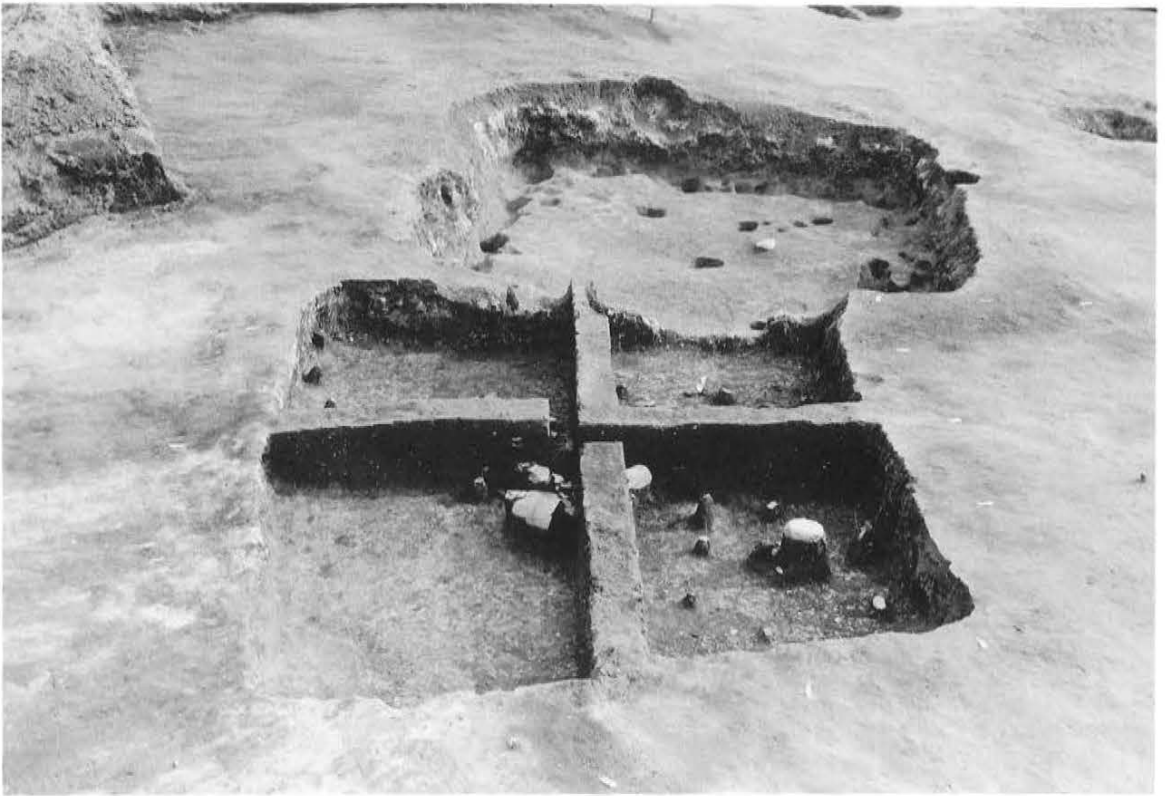
J-4号住居址遺物出土狀況



J-4号住居址遺物出土狀況



J-10号住居址



J-10号住居址遺物出土状況



J-10号住居址東西土層断面



J-10号住居址遺物出土状況



J-10号住居址炉址



J-2号住居址S-1号集石土城



J-2号住居址S-1号集石土城



S—1号集石



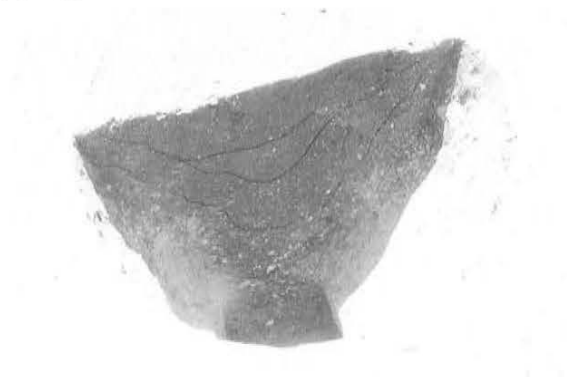
S—2号集石



S-3号集石土城



D-1号陷穴



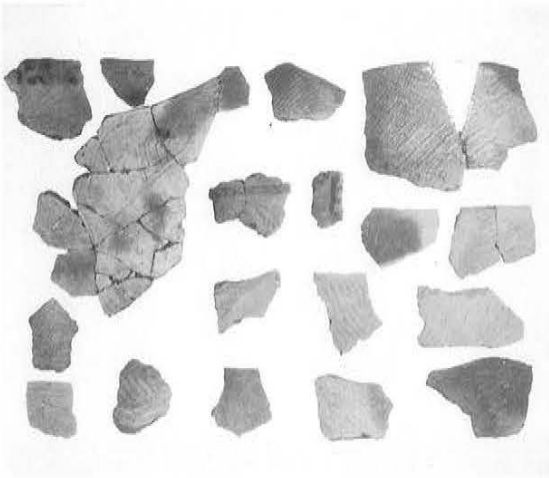
D-1号陷穴土层断面



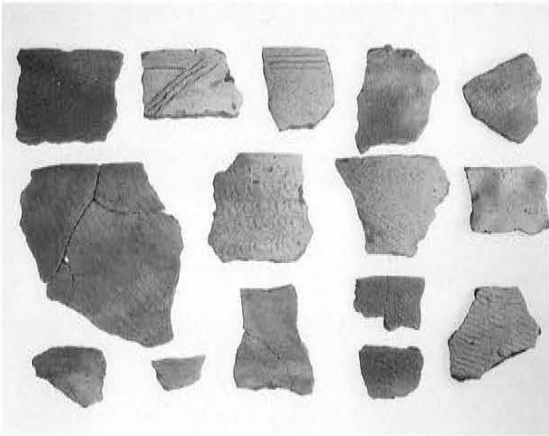
T-1·2号土城



T-1号土城南北土层断面



J-1号住居址出土の土器



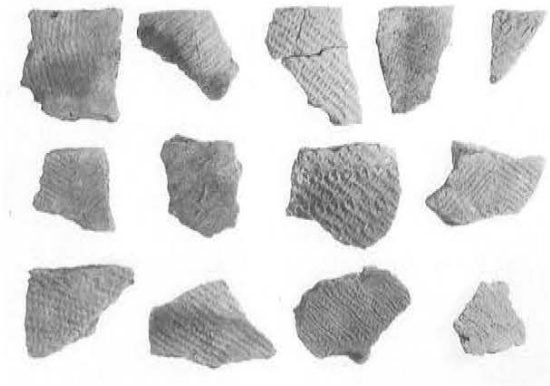
J-4号住居址出土の土器



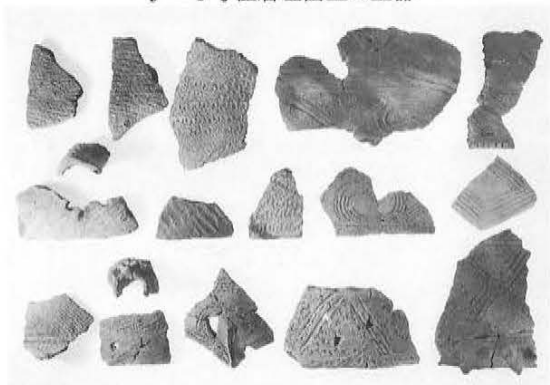
J-10号住居址出土の深鉢



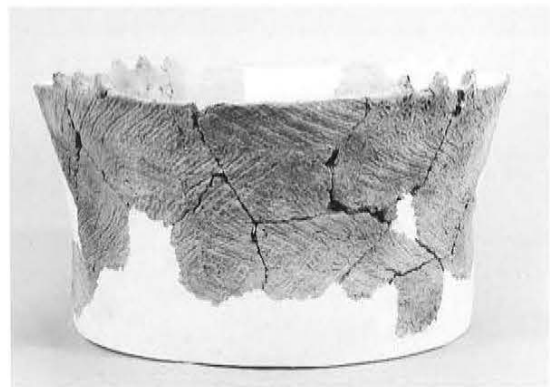
J-2号住居址出土の土器



J-3号住居址出土の土器



J-10号住居址出土の土器



J-10号住居址出土の深鉢

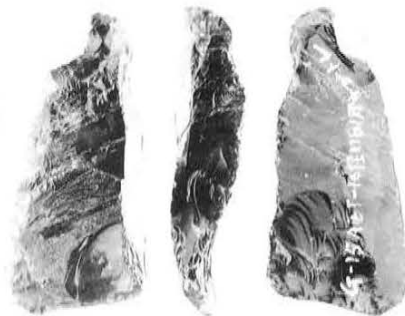


石 鏃 Ob

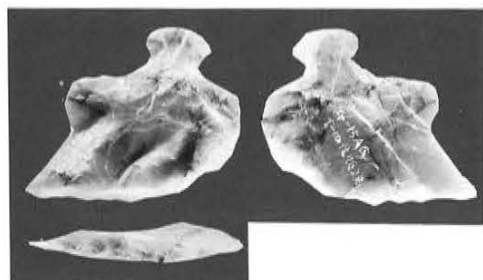
石 鏃 Ob



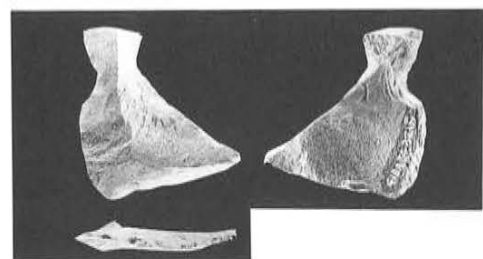
石 鏃 Ob



石 鏃 Ob



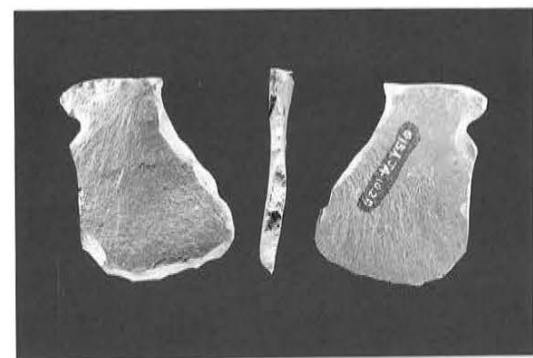
石 鏃 Ch



石 鏃 Sh



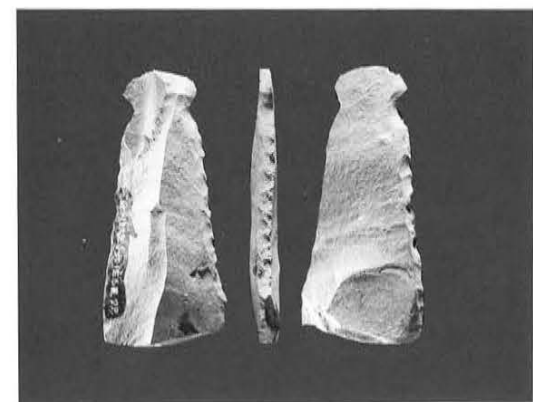
打 製 石 斧 Sh



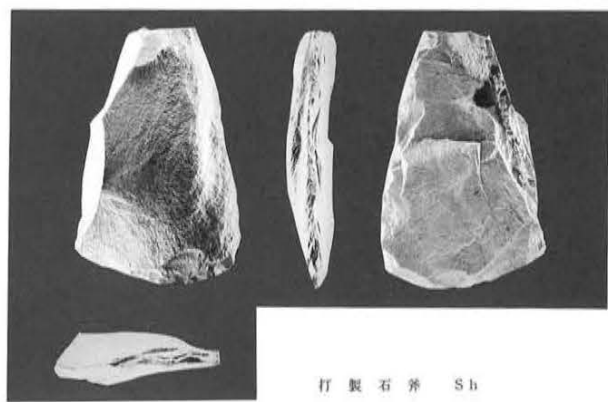
石 鏃 Sh



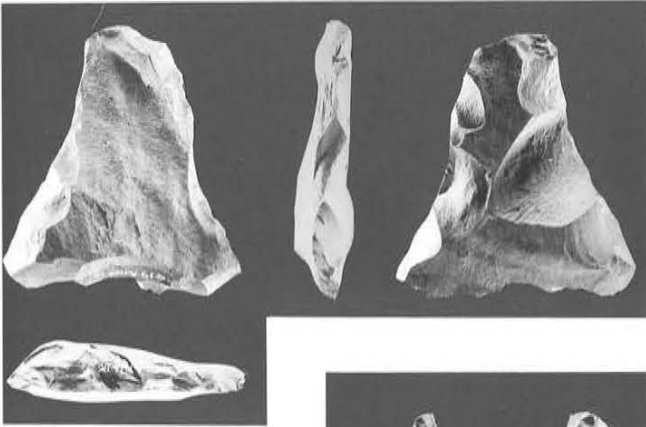
打 製 石 斧 Sh



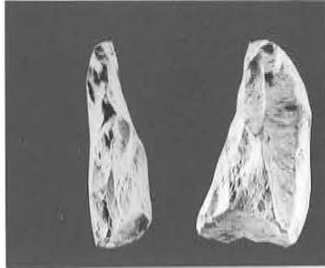
石 鏃 Sh



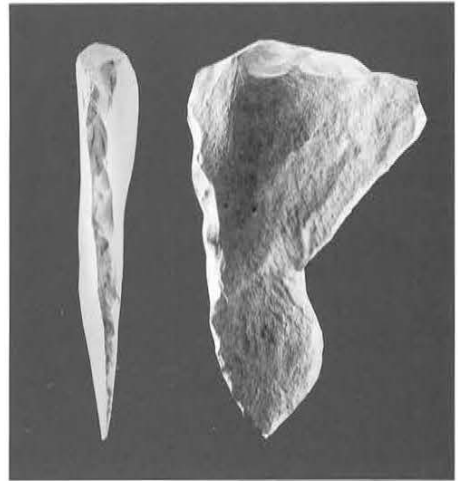
打 製 石 斧 Sh



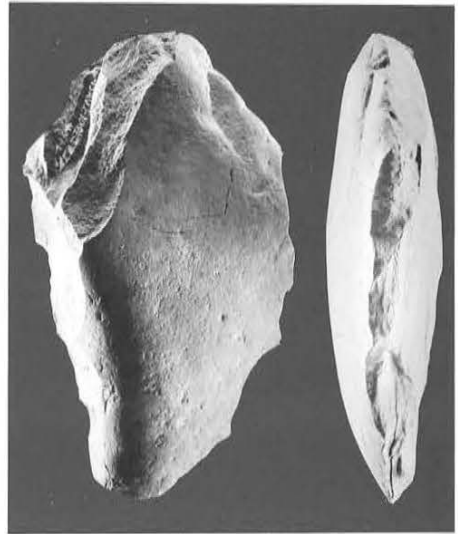
打製石筈 Sh



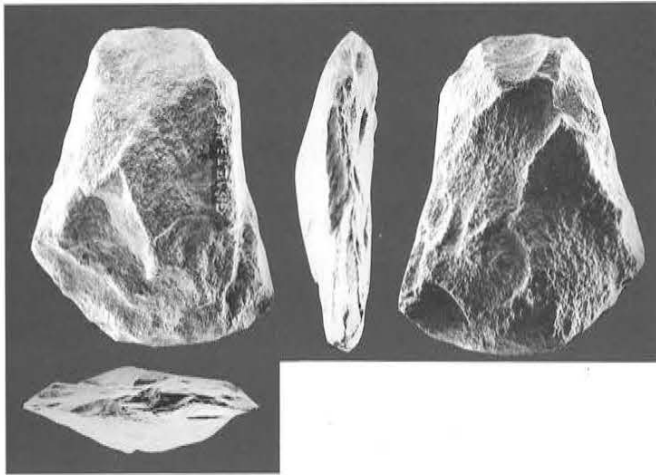
打製石筈 Sh



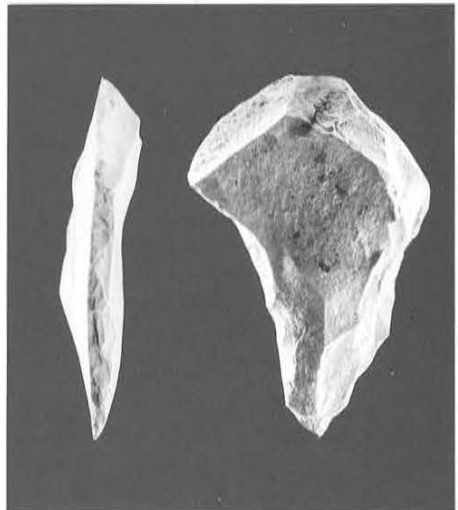
スクレイパー-B類 Sh



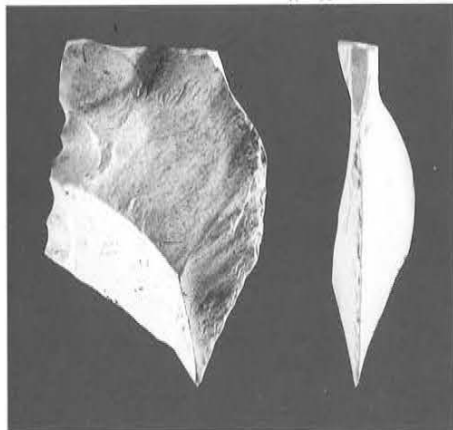
スクレイパー-B類 Sh



打製石筈 Sh



スクレイパー-B類 Sh



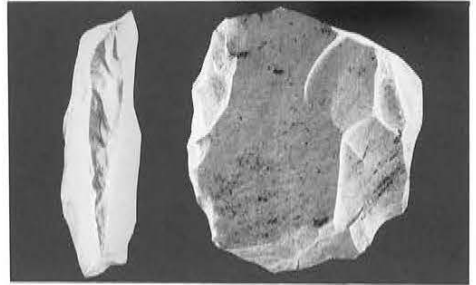
スクレイパー-B類 Sh



スクレイパー-B類 Sh



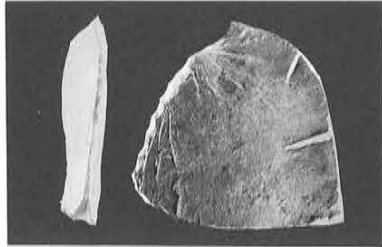
スクレイパー-B類 Sh



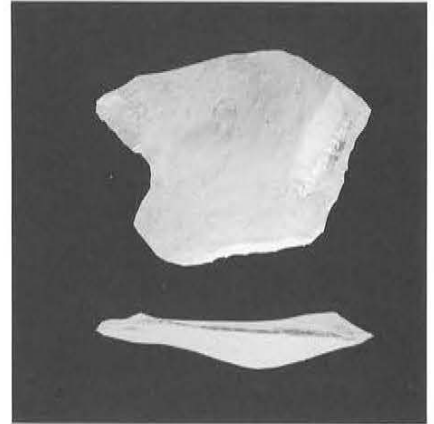
スクレイパー-B類 Sh



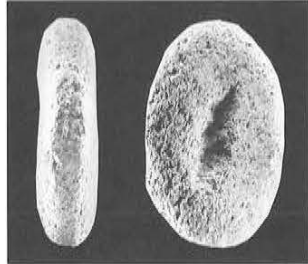
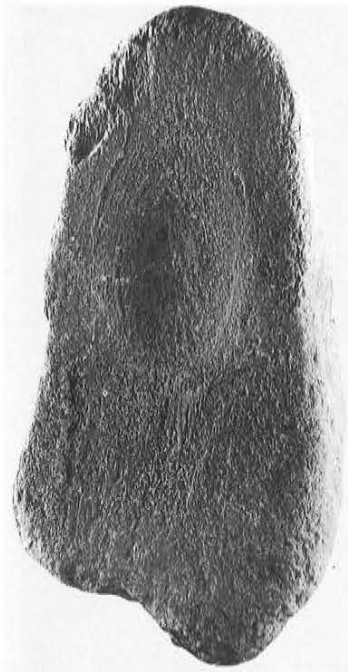
スクレイパー-B類 Sh



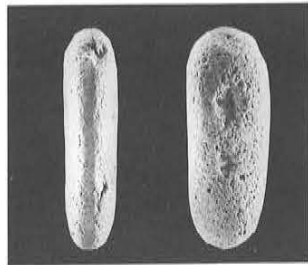
スクレイパー-B類 Sh



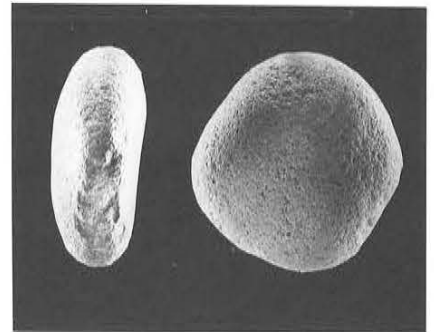
スクレイパー-B類 Sh



磨石 An



磨石 An

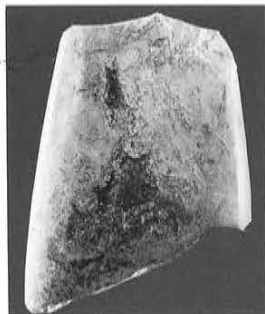


磨石 An

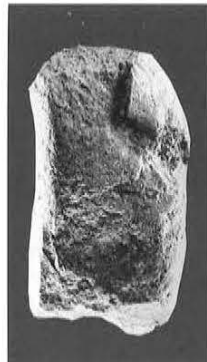
石皿 Sc



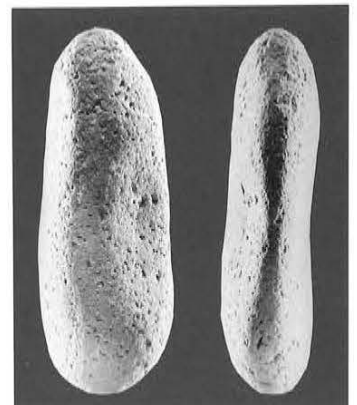
磨石 An



磨製石斧 蛇紋岩



磨石 An



磨石 An



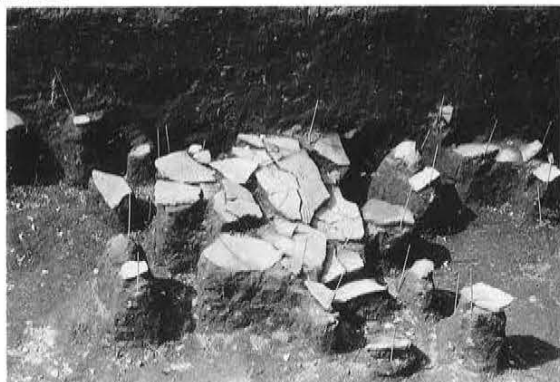
大下原遺跡全景



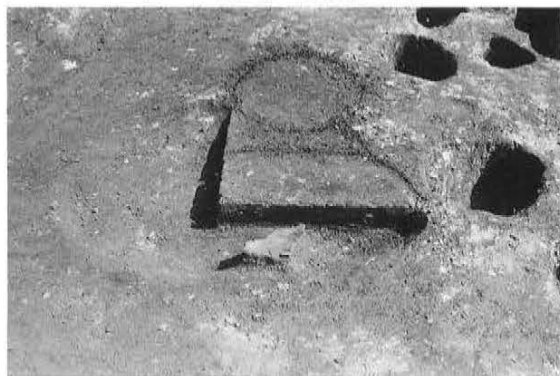
J—5号住居址



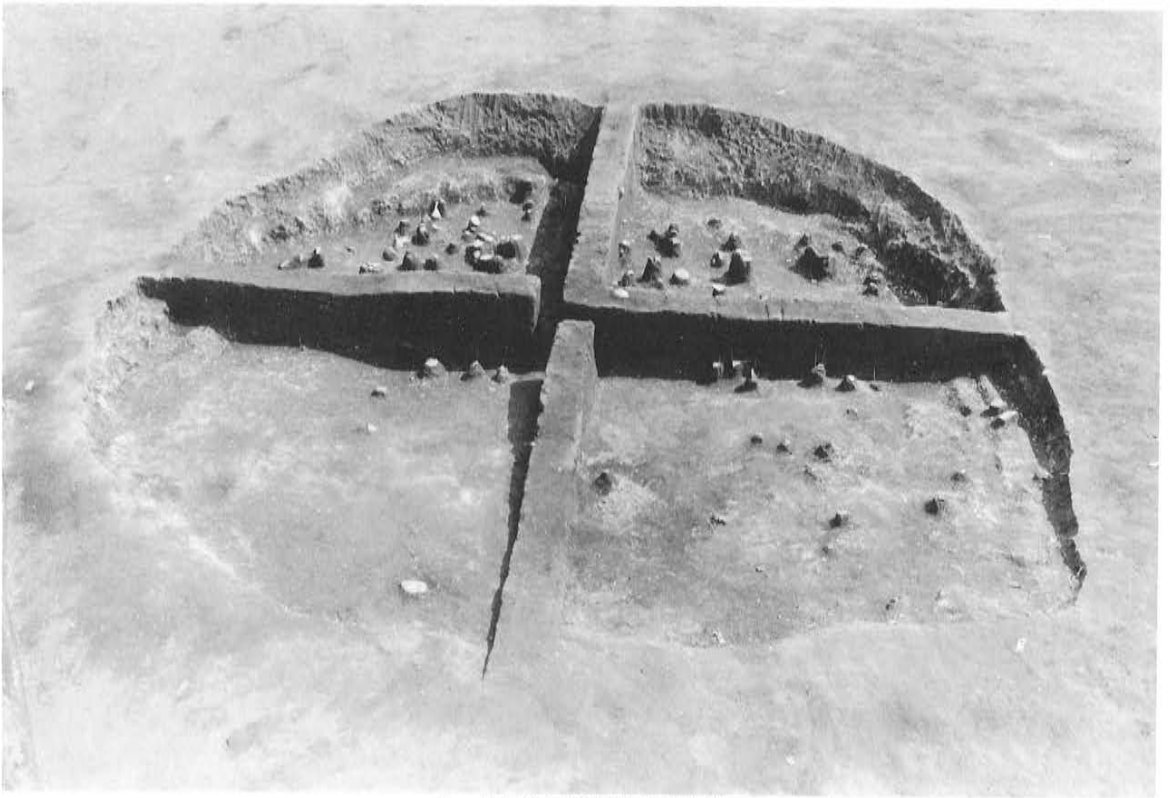
J—5号住居址南壁溝



J—5号住居址遺物出土状況



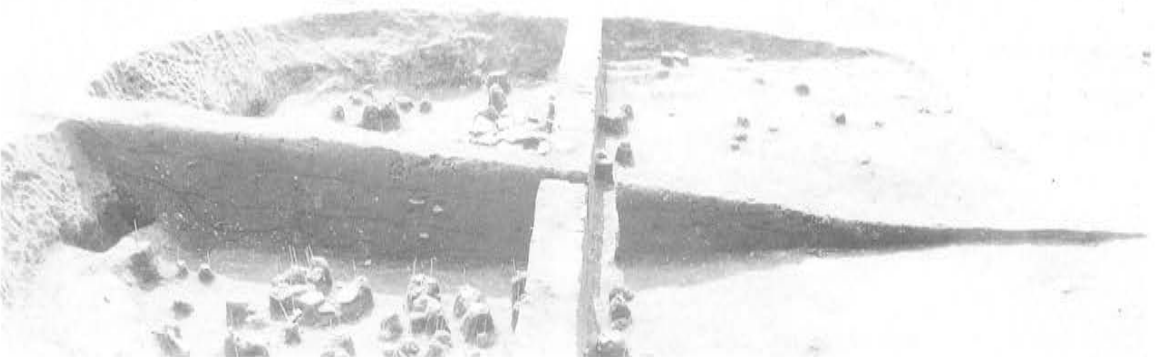
J—5号住居址炉址土層断面



J—5号住居址遺物出土狀況



J—5号住居址東西土層断面



J—5号住居址南北土層断面



J—6号住居址



J—6号住居址炉址



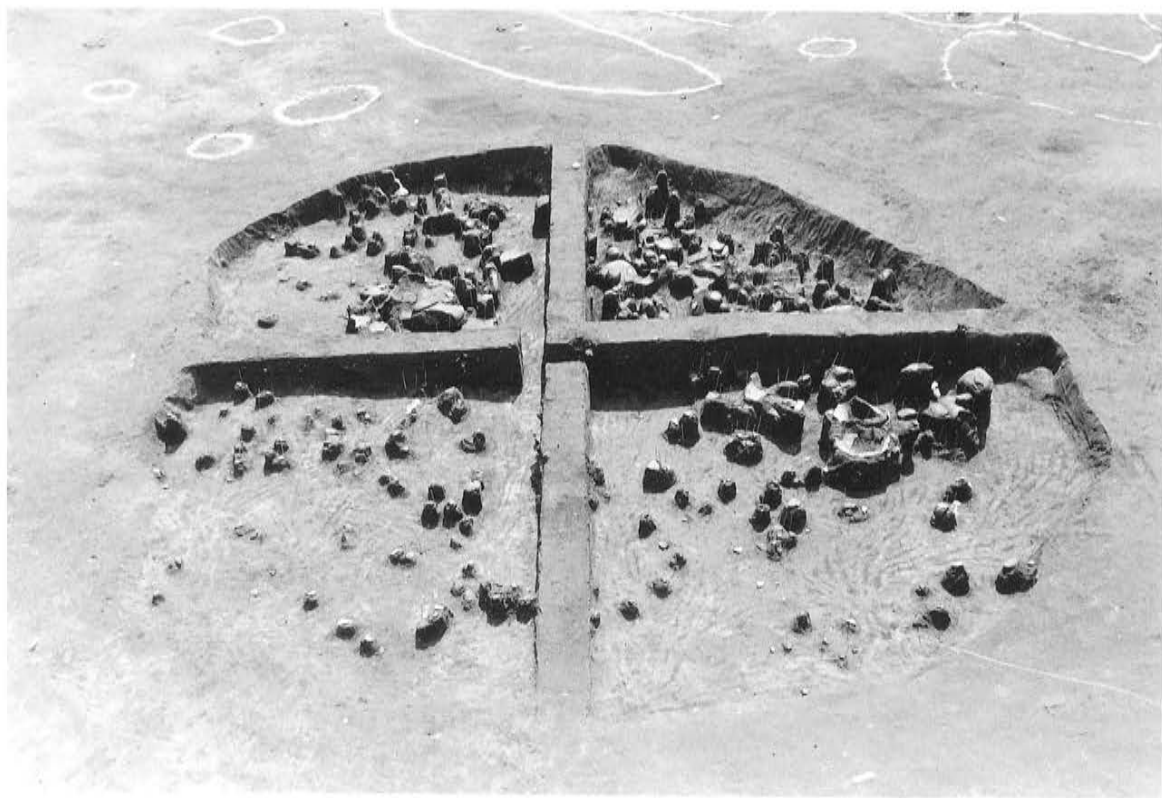
J—6号住居址炉址土层断面



J—6号住居址遺物出土狀況



J—6号住居址遺物出土狀況



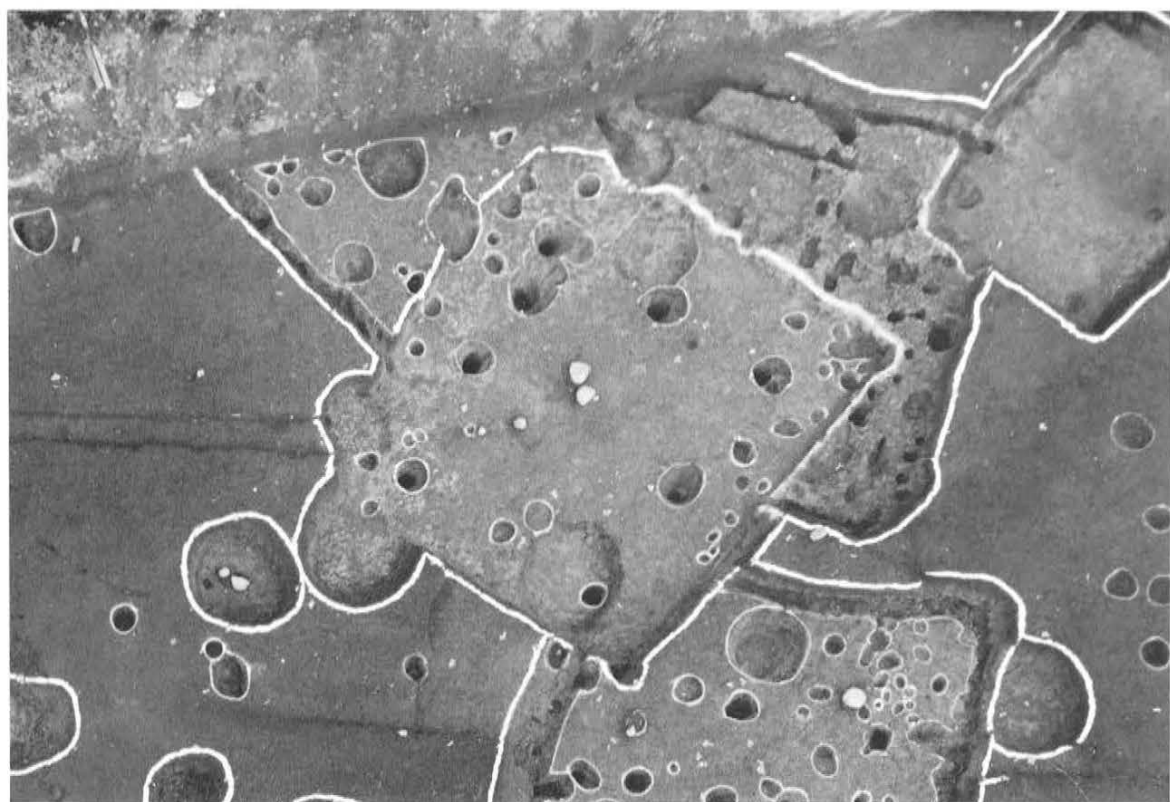
J—6号住居址遺物出土狀況



J—6号住居址東西土層断面



J—6号住居址南北土層断面



J-7·8·9·17·H-1号住居址



J-7·8号住居址



J—8号住居址遺物出土狀況



J—8号住居址遺物出土狀況



J—8号住居址炉址土層断面



J—9号住居址遺物出土狀況



J—9号住居址炉址土層断面



J-11号住居址



J-11号住居址炉址2号



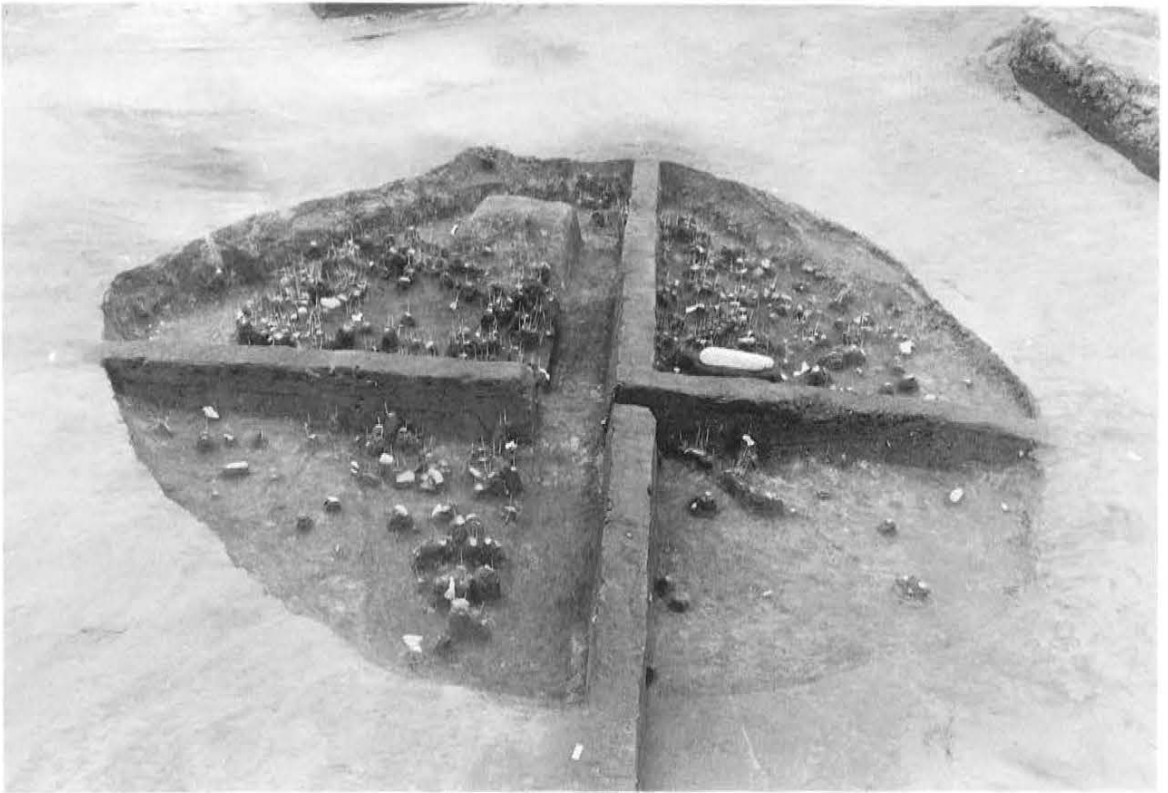
J-11号住居址炉址2号土层断面



J-11号住居址遺物出土狀況



J-11号住居址風倒木土层断面



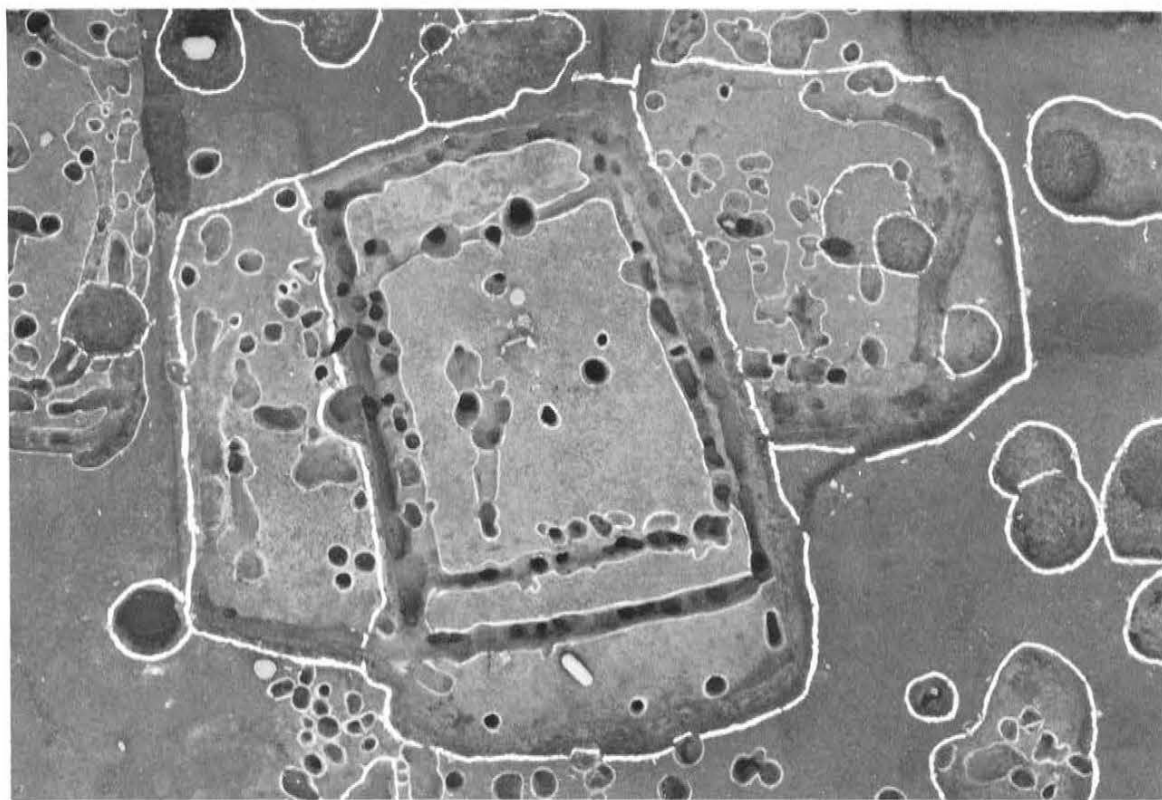
J-11号住居址遺物出土状況



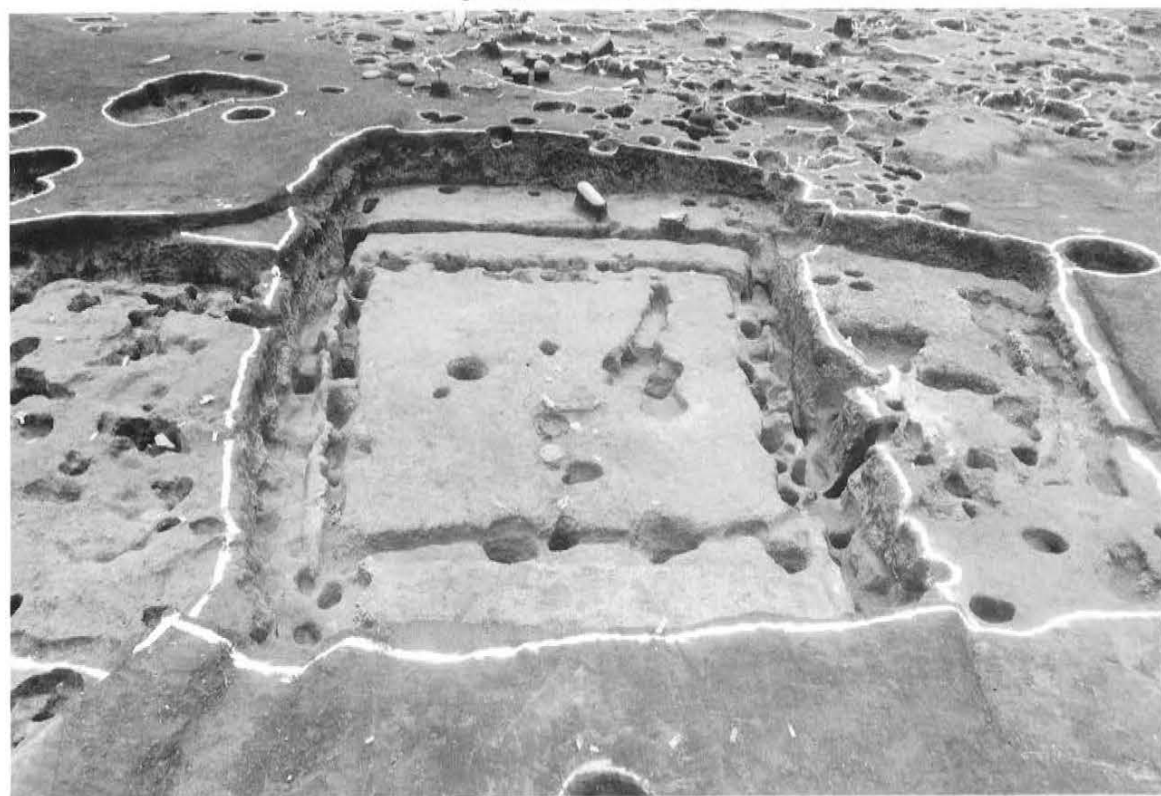
J-11号住居址東西土層断面



J-11号住居址南北土層断面



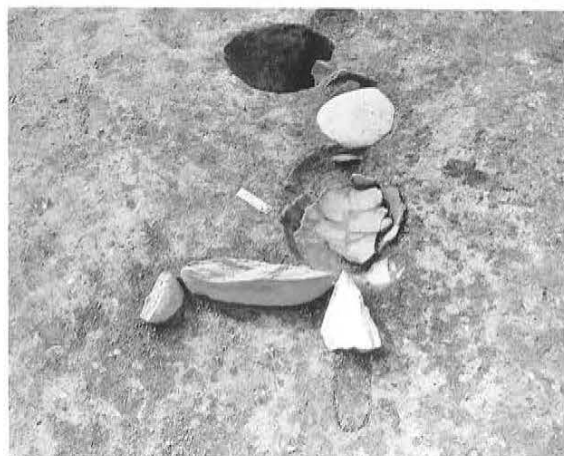
J-12·13·18号住居址



J-12号住居址



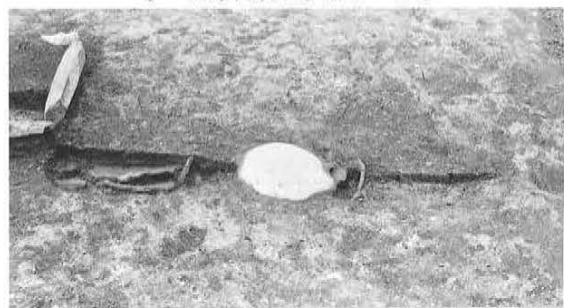
J—12号住居址遺物出土狀況



J—12号住居址炉址1~3号



J—12号住居址炉址1号土层断面



J—12号住居址炉址2·3号土层断面



J—12号住居址東西土层断面



J—12号住居址南北土层断面



J-13号住居址



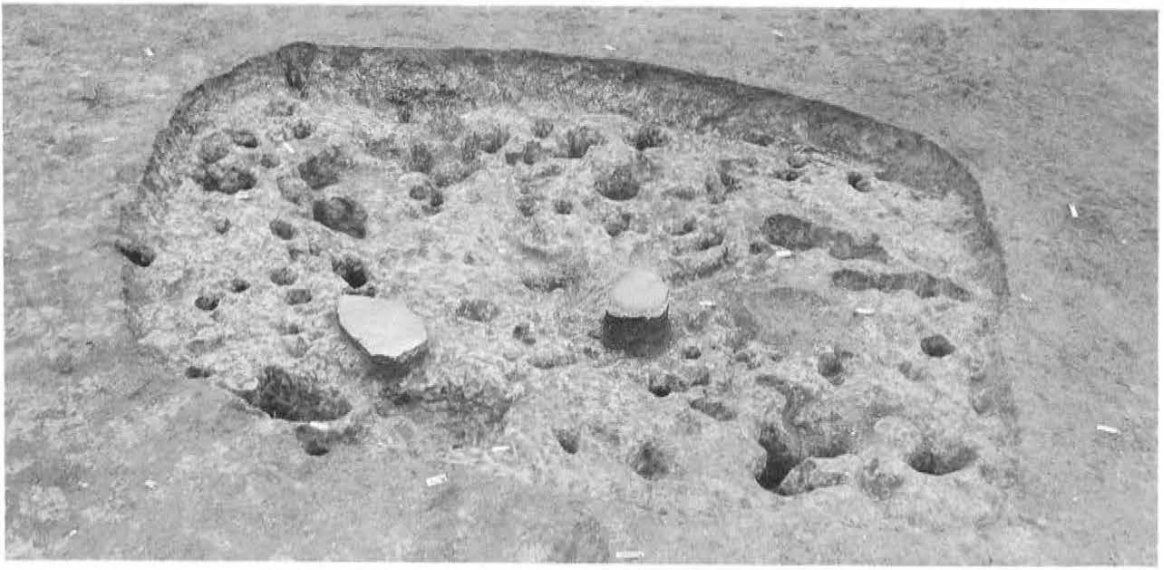
J-13号住居址遺物出土狀況



J-13号住居址D-1号土壙土層断面



J-13号住居址遺物出土狀況



J-14号住居址



J-14号住居址遺物出土狀況



J-14号住居址南北土層断面



J-14号住居址炉址



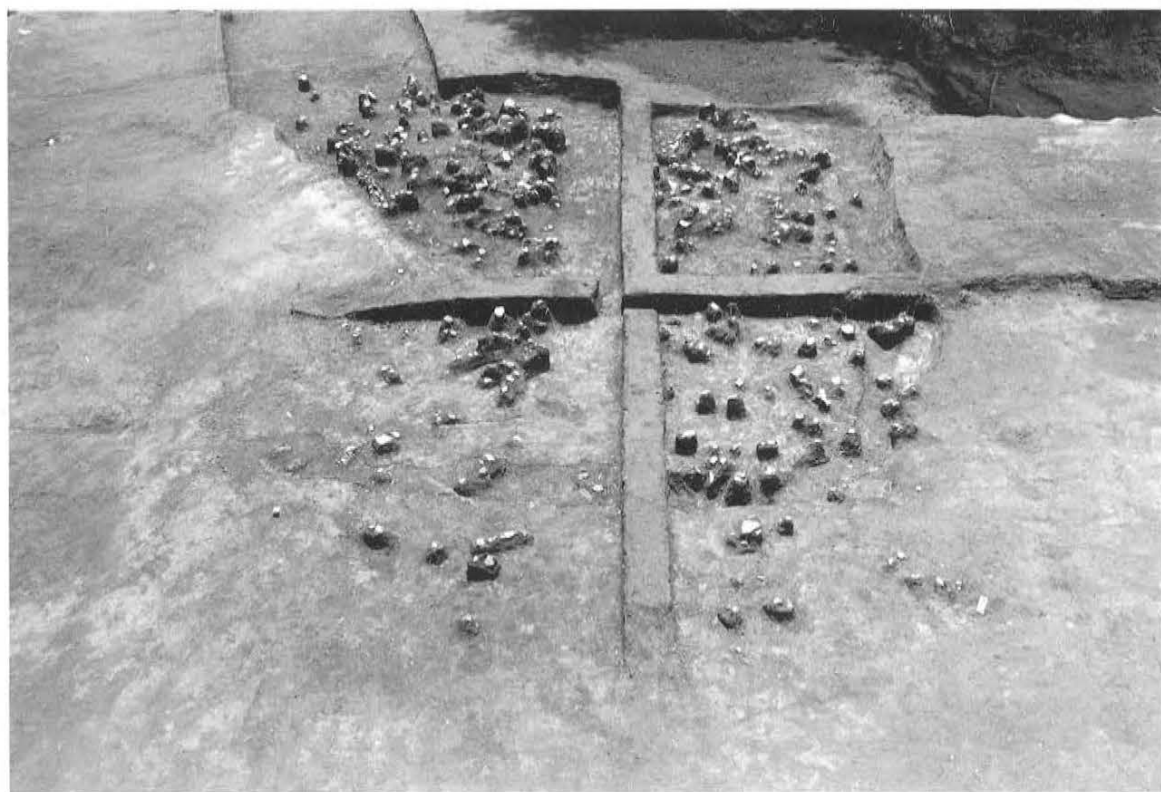
J-14号住居址炉址土層断面



J—15号住居址



J—15B号住居址 (手前)



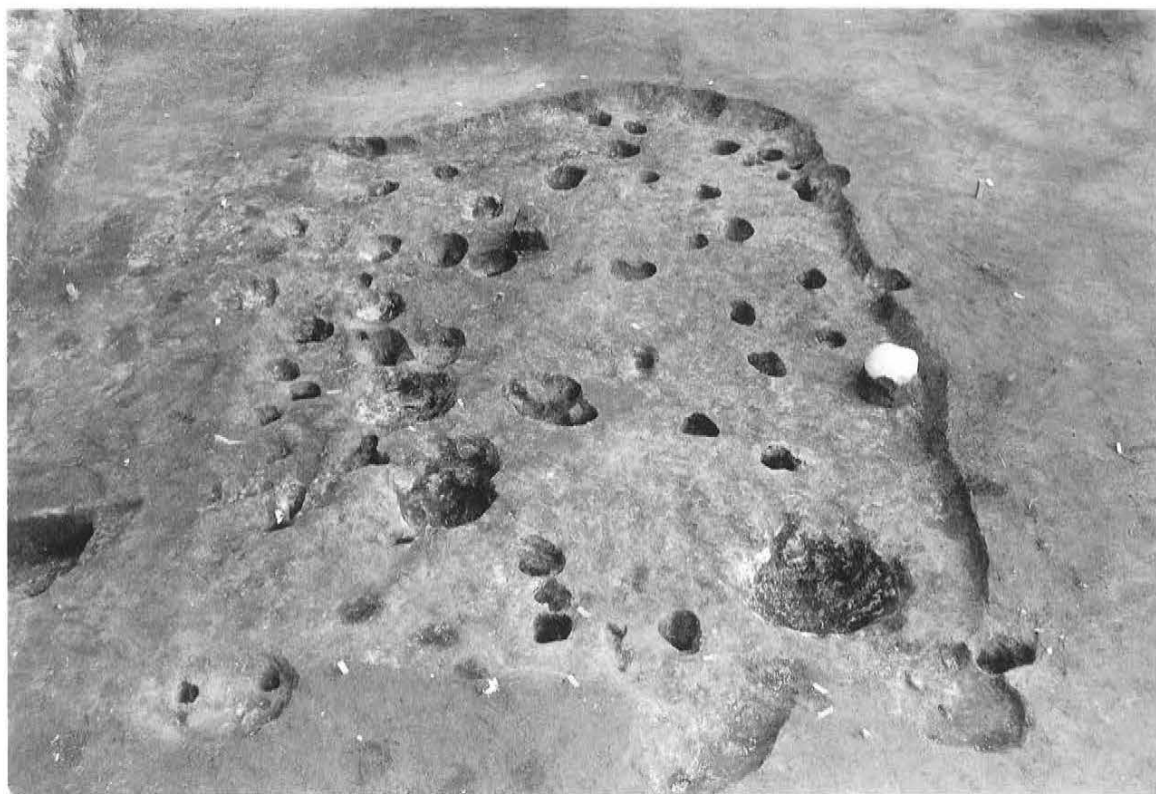
J—15号住居址遺物出土狀況



J—15号住居址東西土層断面



J—15号住居址南北土層断面



J—16号住居址



J—16号住居址东西土层断面



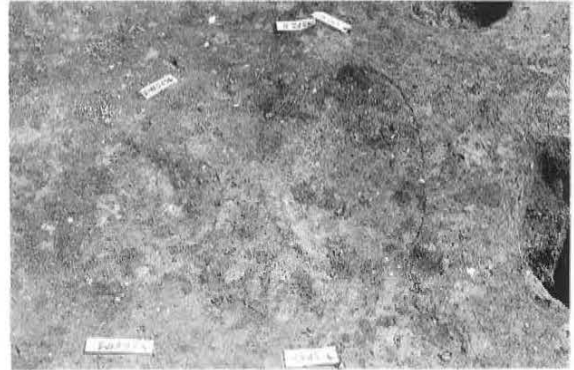
J—16号住居址南北土层断面



J—17号住居址



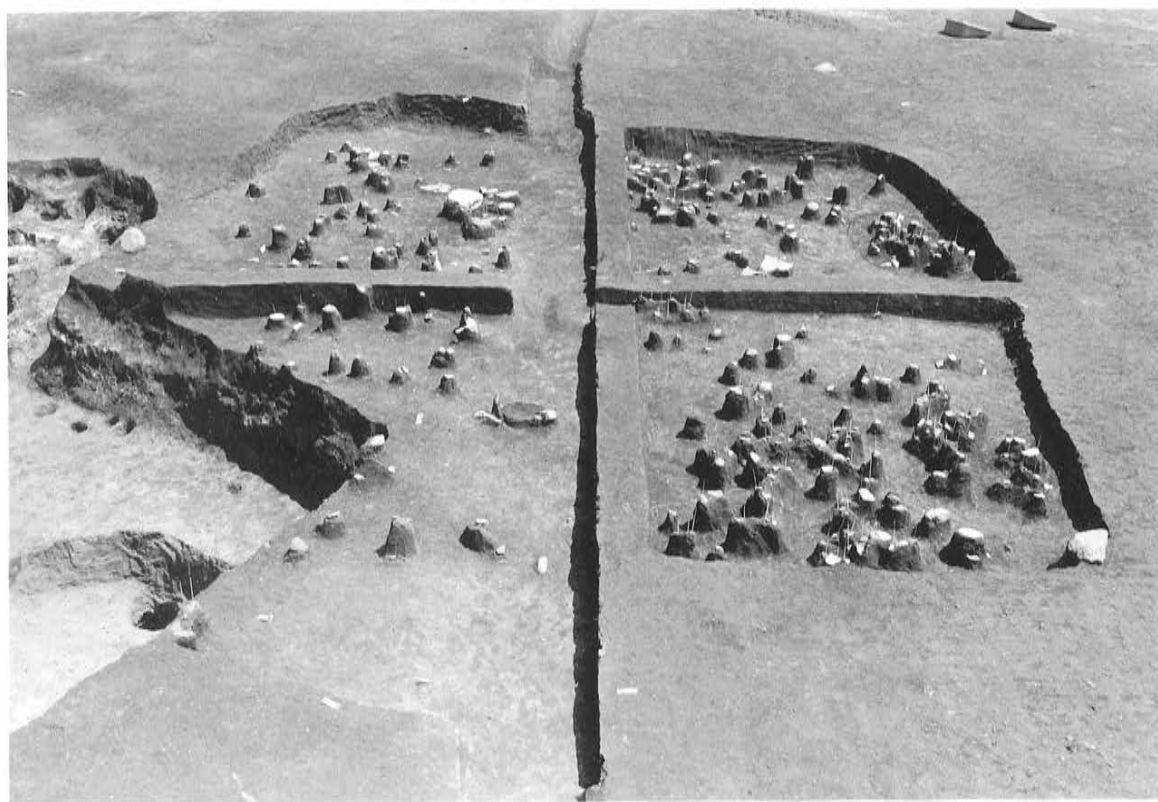
J—17号住居址南壁沟



J—17号住居址炉址 2·3号



J—17号住居址炉址 2·3号土层断面



J-17号住居址遺物出土狀況



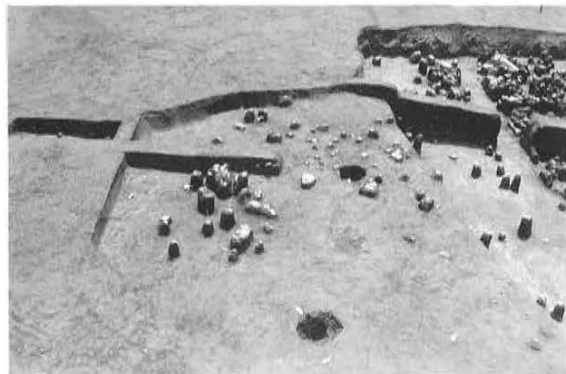
J-17号住居址東西土層断面



J-17号住居址南北土層断面



J-18号住居址



J-18号住居址遺物出土狀況



J-18号住居址遺物出土狀況



J-18号住居址東西土層断面



J—20号住居址



J—21号住居址



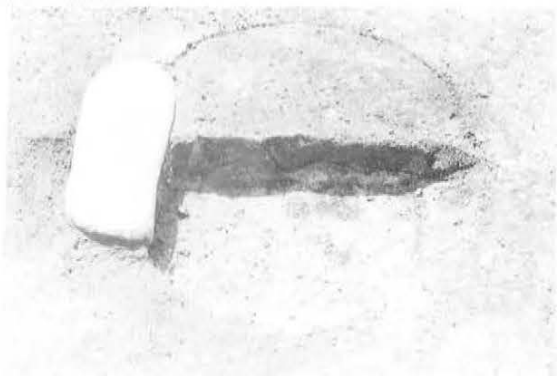
Y-1号住居址



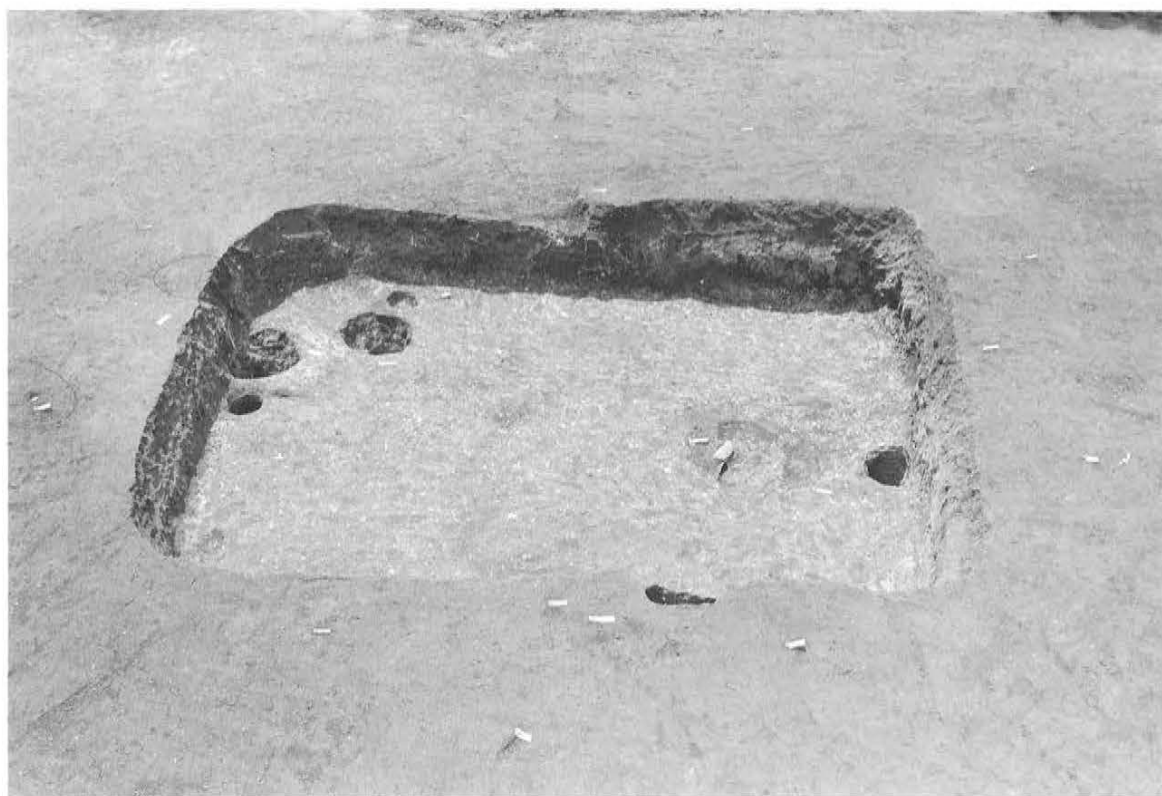
Y-1号住居址南北土层断面



Y-1号住居址炉址



Y-1号住居址炉址土层断面



Y—2号住居址



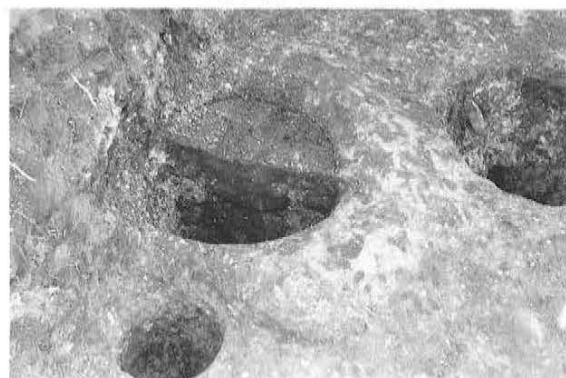
Y—2号住居址炉址



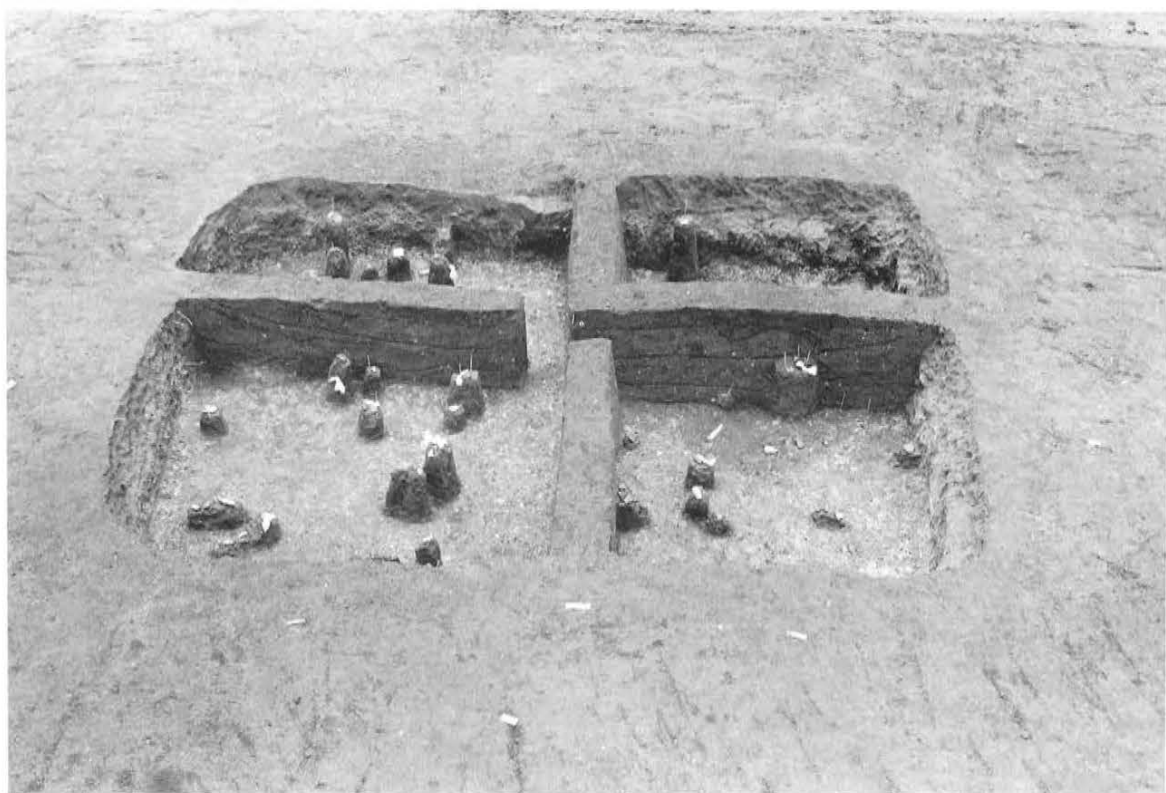
Y—2号住居址炉址土层断面



Y—2号住居址P—1号



Y—2号住居址P—1号土层断面



Y-2号住居址遺物出土狀況



Y-2号住居址東西土層断面



Y-2号住居址南北土層断面



Y—3号住居址



Y—3号住居址甕出土状况



Y—3号住居址炉址



Y—3号住居址炉址土层断面



Y-3号住居址遺物出土狀況



Y-3号住居址東西土層断面



Y-3号住居址南北土層断面



H-1号住居址



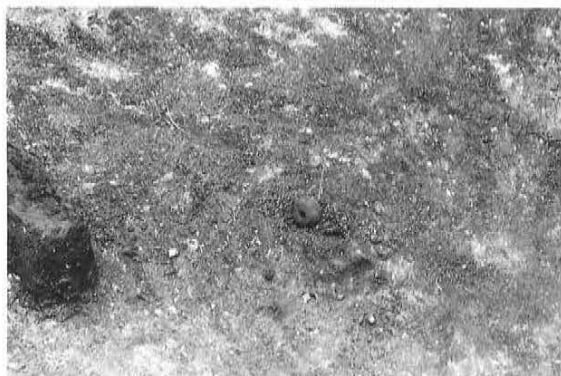
H-1号住居址窠全景



H-1号住居址土壙蓋石



H-1号住居址出土狀況



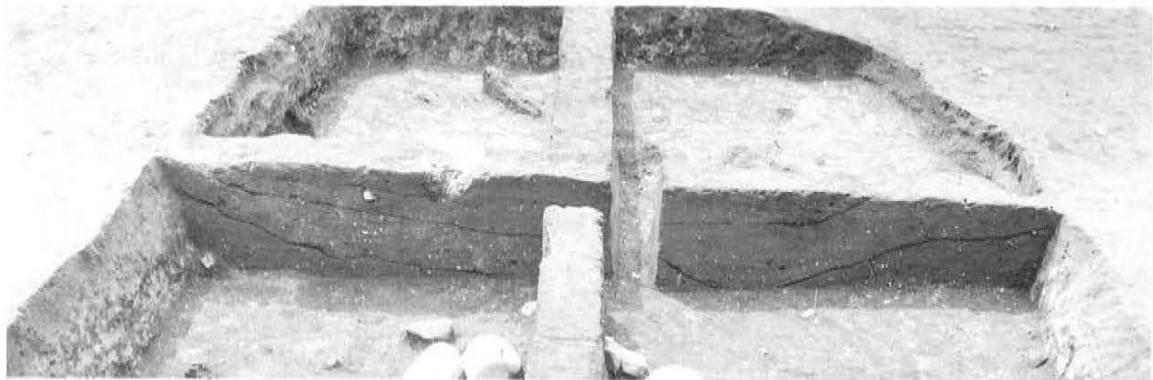
H-1号住居址紡錘車出土狀況



H-1号住居址遺物出土狀況



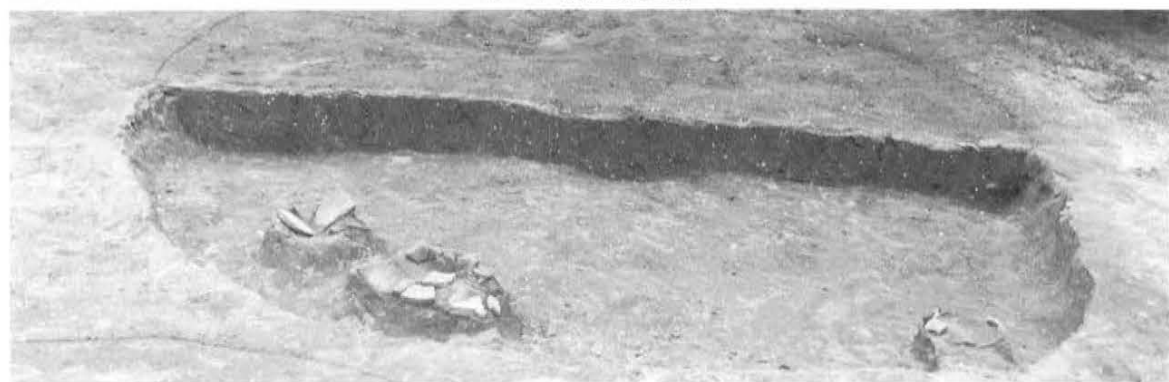
H-1号住居址東西土層断面



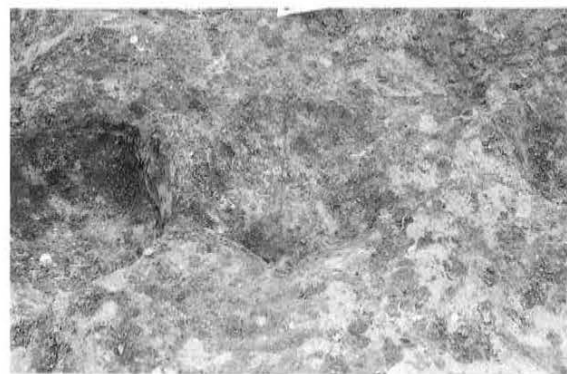
H-1号住居址南北土層断面



T-6号竖穴状遺構



T-6号竖穴状遺構土層断面



T-6号竖穴状遺構焼土部分



T-6号竖穴状遺構焼土部分



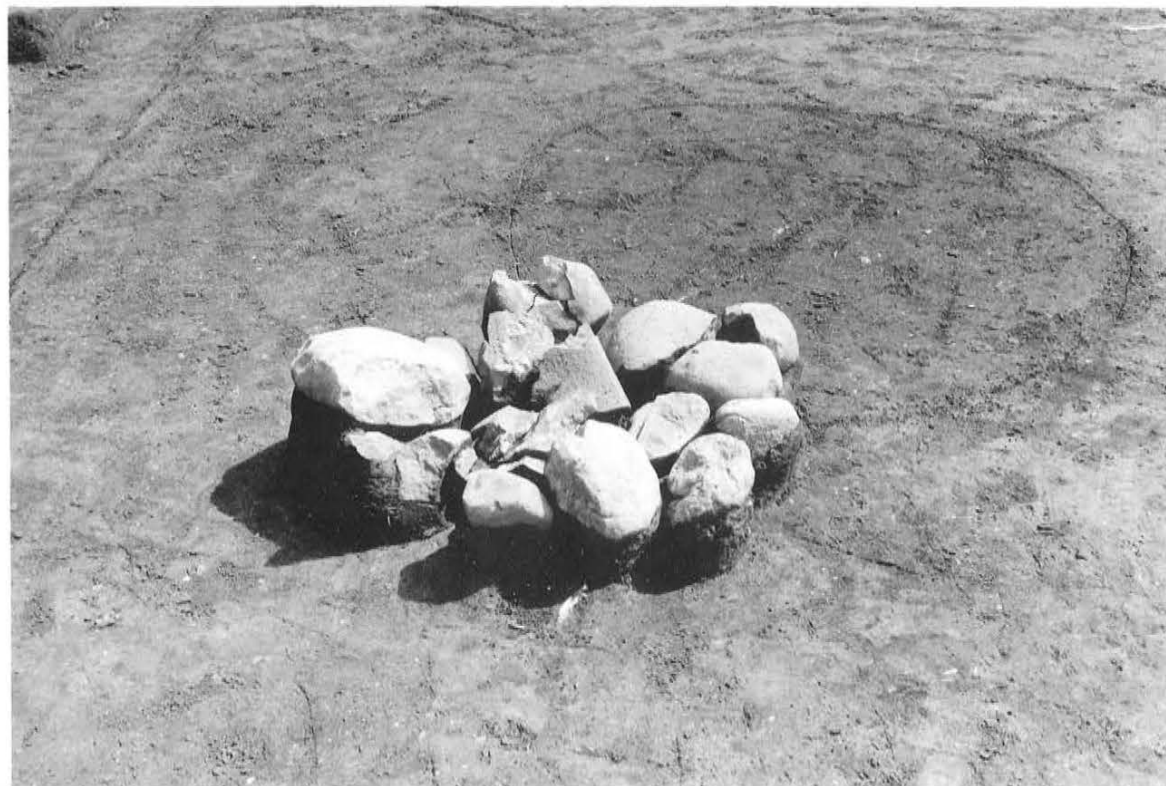
D-171号壁穴状遺構



S-4号集石土壇



S—6号集石土坑



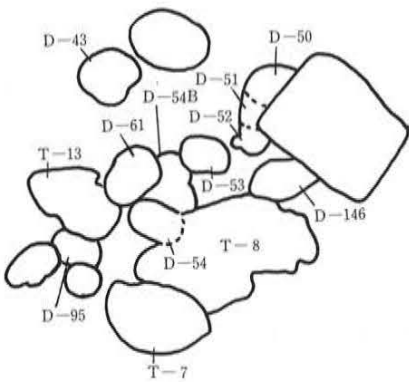
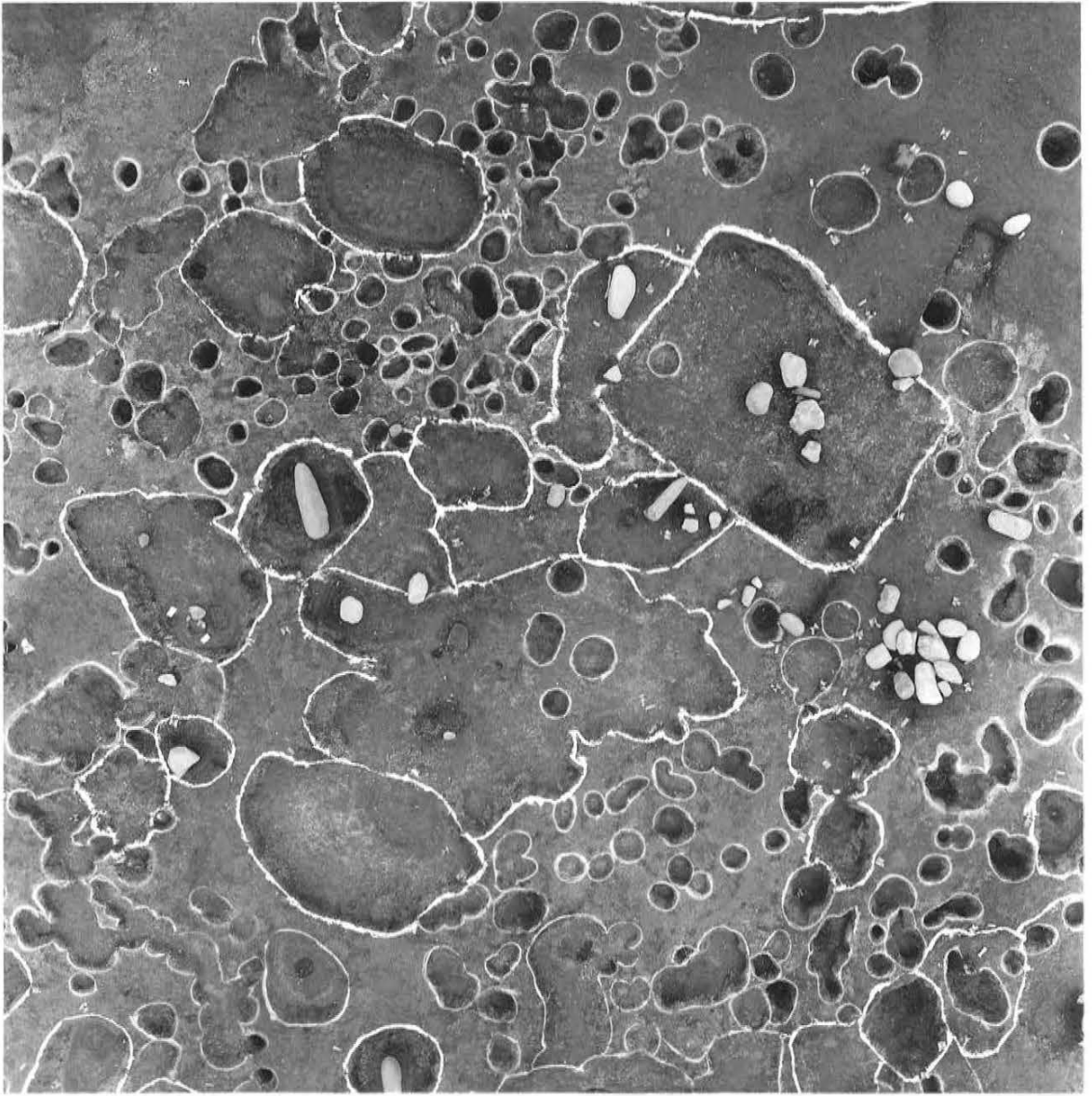
S—7号集石土坑



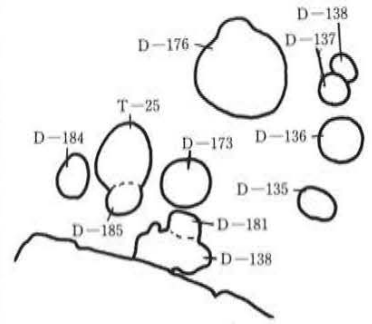
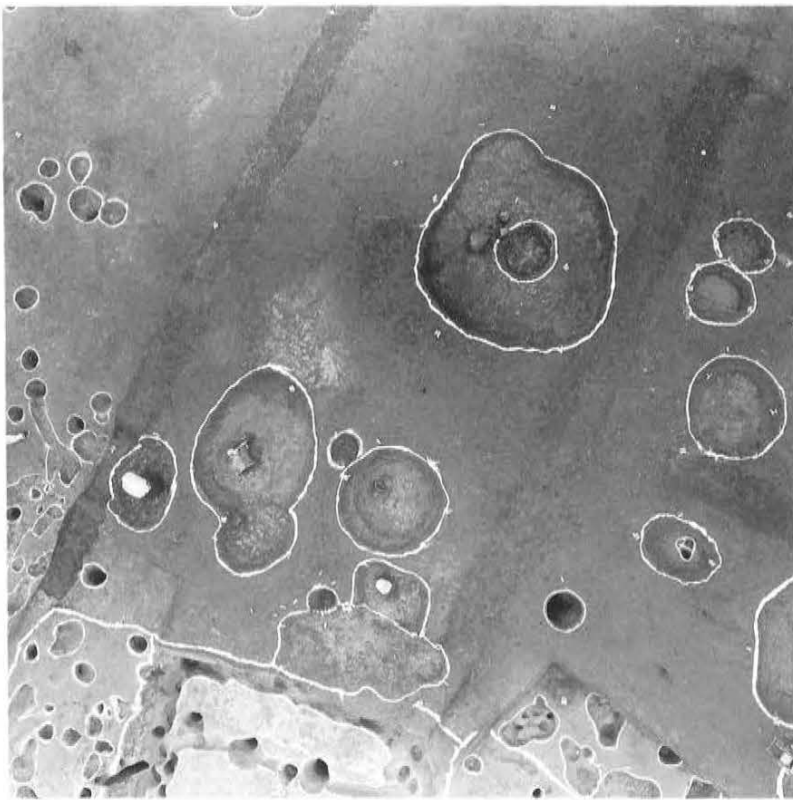
S—8号配石遺構



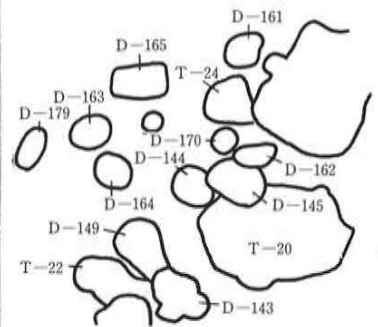
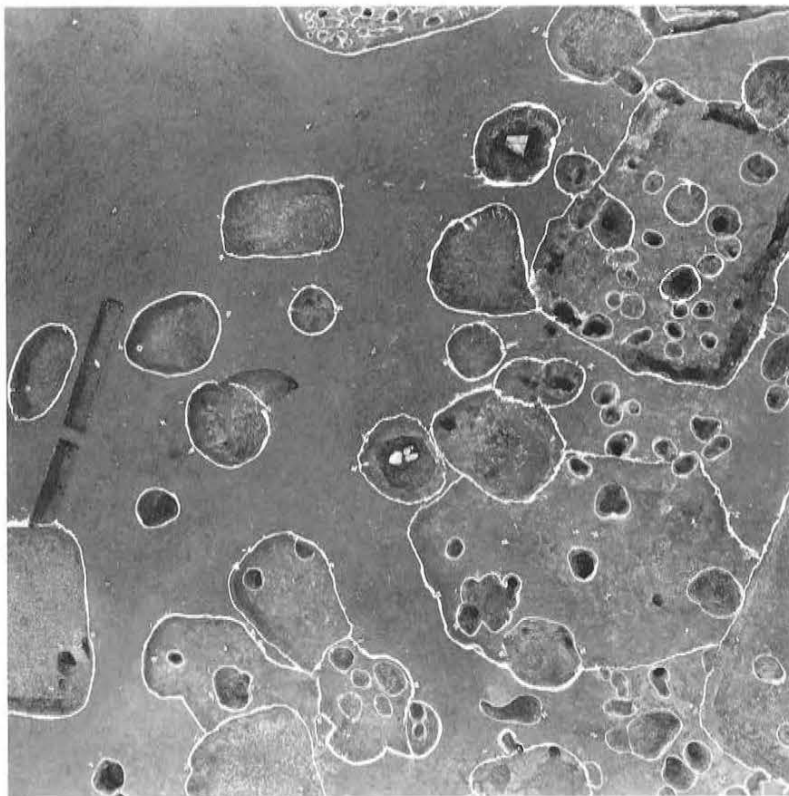
S—5号集石土城



土壤群 (1)



土壌群 (2)



土壌群 (3)



土坑群



T—25号土坑



D—173号土坑



D—9号土坑



D—184号土坑



D-176号土坑



D-176号土坑土层断面



D-161号土坑



D-161号土坑土层断面



D-144号土坑



D-144号土坑土层断面



D-141号土坑土层断面



T-16号土坑



T—13号土坑



D—54号土坑



D—61号土坑



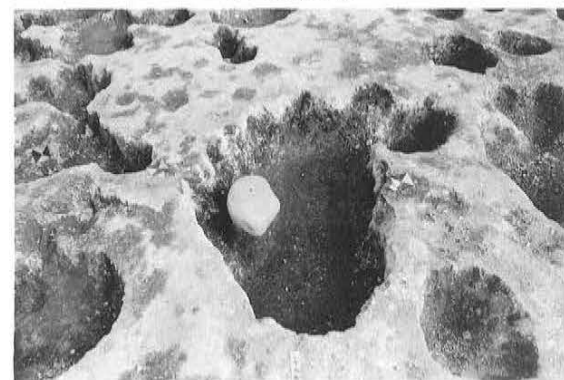
D—146号土坑



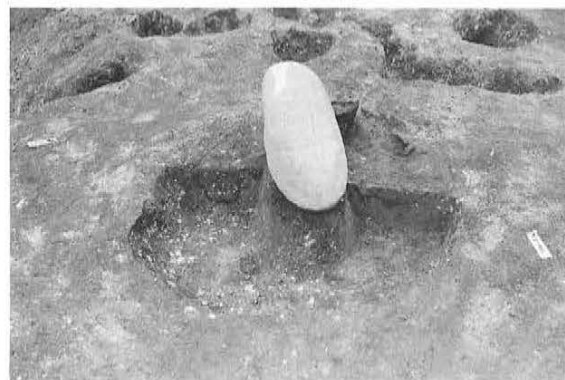
T—8号土坑



T—8号土坑



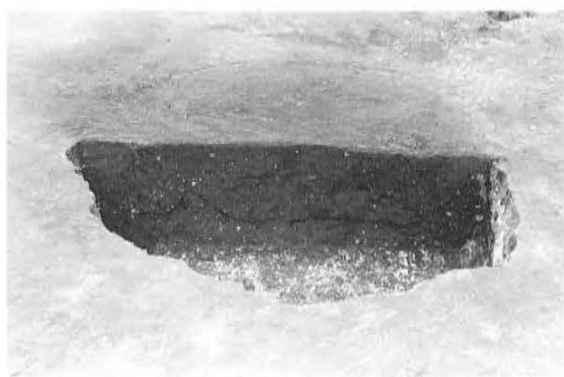
D—97号土坑



D—142号土坑



D—17号土坑



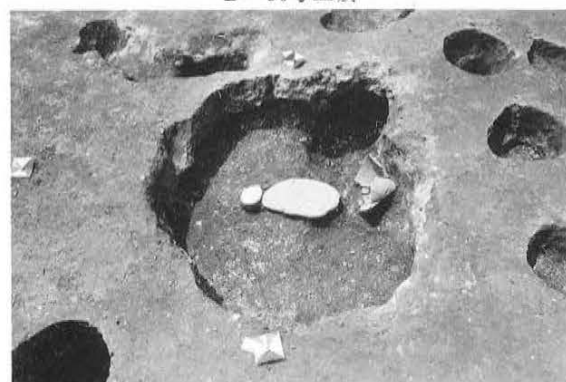
D—17号土坑土层断面



D—90号土坑



D—14号土坑土层断面



D—66号土坑



D—76号土坑



D—77号土坑



D—78号土坑



T-9号土坑



D-103号土坑



D-33号土坑土層断面



D-33号土坑出土状況



B区作業風景



風倒木2



試掘トレンチ



試掘トレンチ



U-2号埋設土器全景



U-2・3号埋設土器土層断面



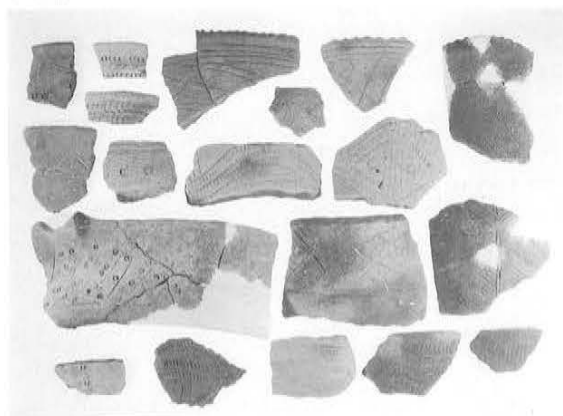
U-3号埋設土器全景



U-4・5号埋設土器全景



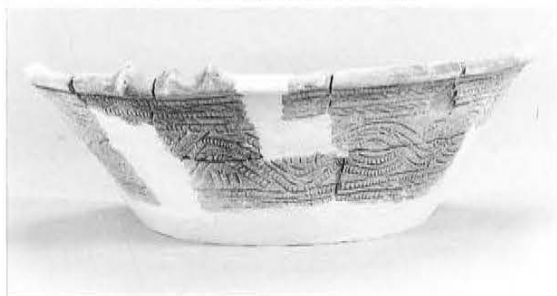
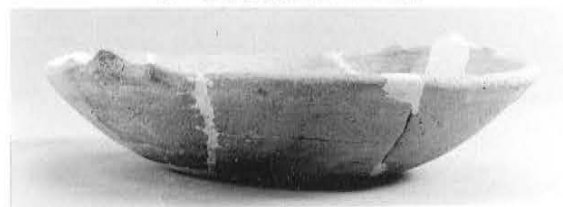
深掘部分土層断面



J-5号住居址出土の土器



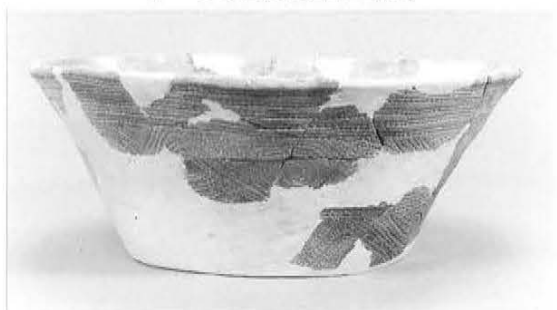
J-5号住居址出土の深鉢



J-6号住居址出土の深鉢



J-6号住居址出土の浅鉢



J-6号住居址出土の深鉢



J-6号住居址出土の浅鉢



J-6号住居址出土の深鉢



J-6号住居址出土の深鉢



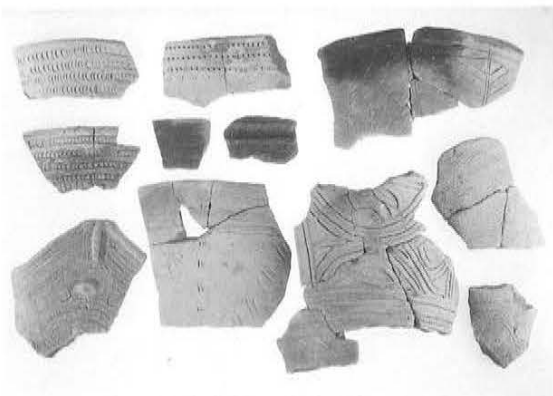
J-6号住居址出土の深鉢



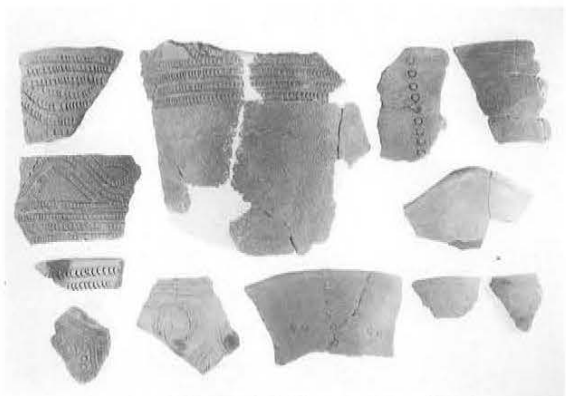
J-6号住居址D-1号土壙出土の深鉢



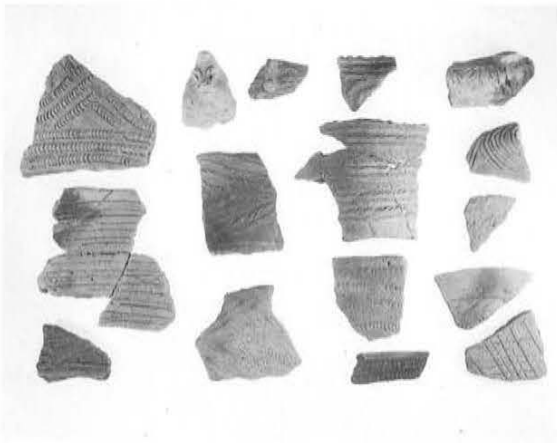
J-6号住居址出土の深鉢



J-6号住居址出土の土器（1層）



J-6号住居址出土の土器（2・3層）



J-7号住居址出土の土器



J-7号住居址炉1出土の深鉢



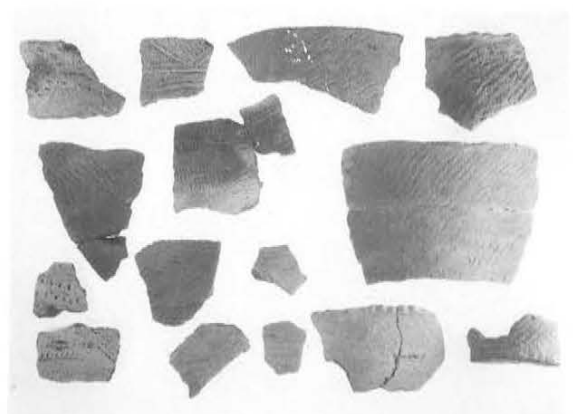
J-8号住居址出土の深鉢



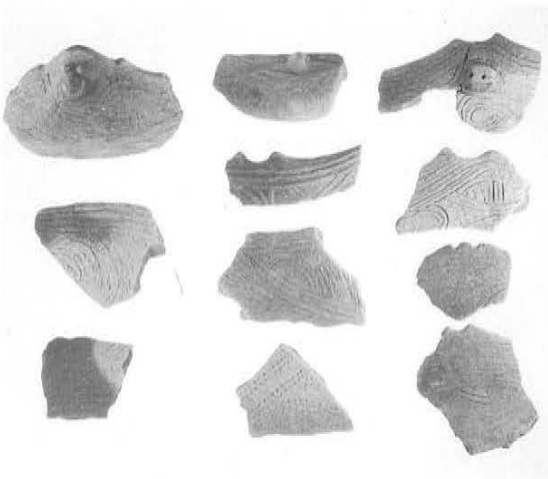
J-8号住居址出土の深鉢



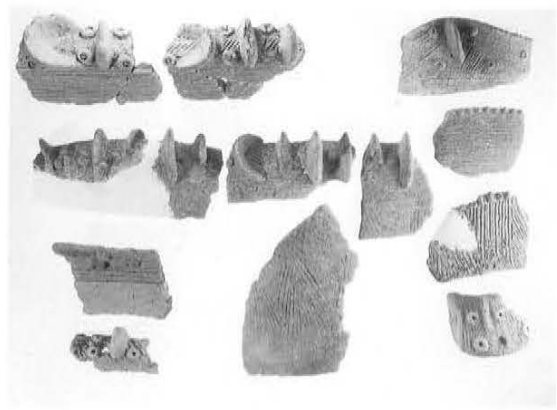
J-8号住居址出土の深鉢



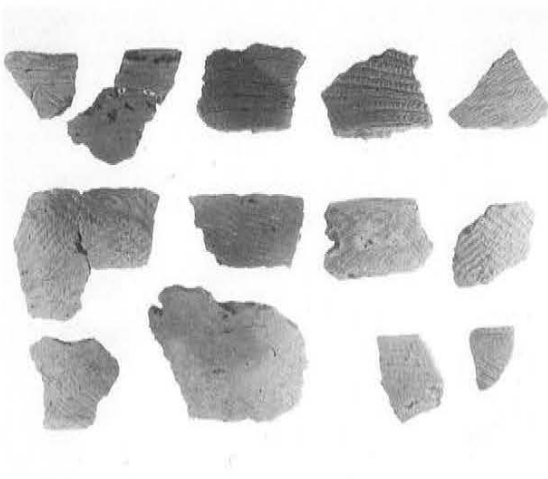
J-8号住居址出土の土器



J-8号住居址出土の土器



J-8号住居址出土の土器



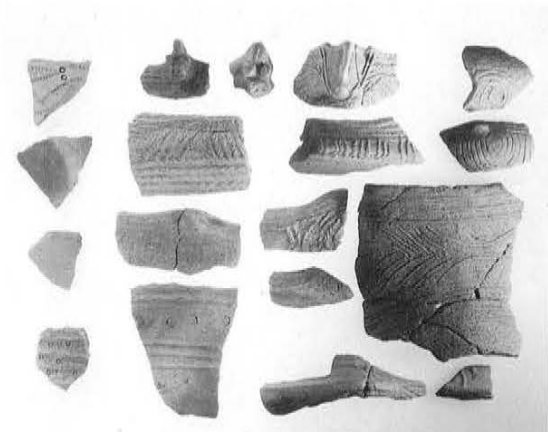
J-9号住居址出土の土器



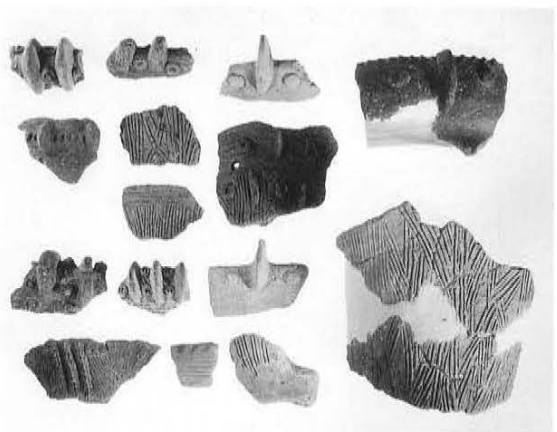
J-11号住居址出土の浅鉢



J-11号住居址出土の深鉢



J-11号住居址出土の土器



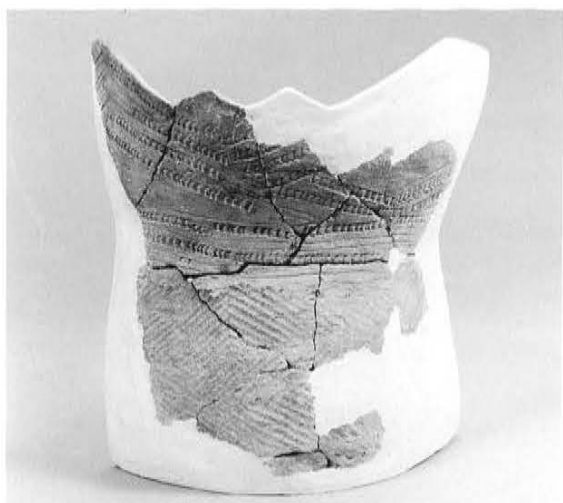
J-11号住居址出土の土器



J-12号住居址出土の深鉢



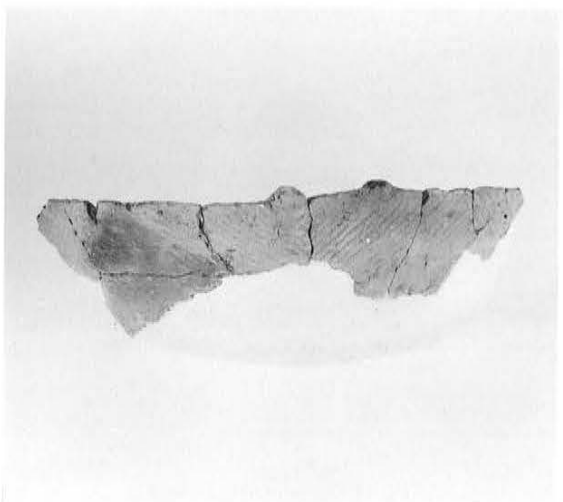
J-12号住居址出土の深鉢



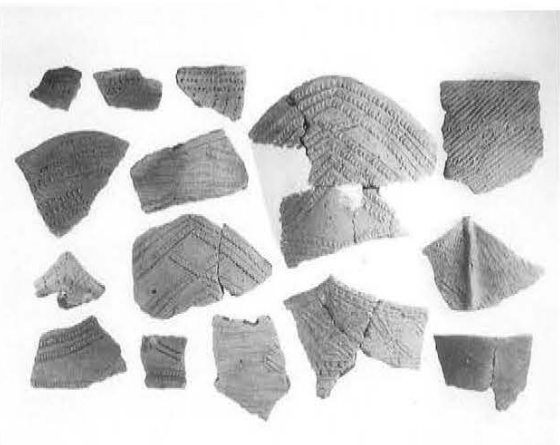
J-12号住居址出土の深鉢



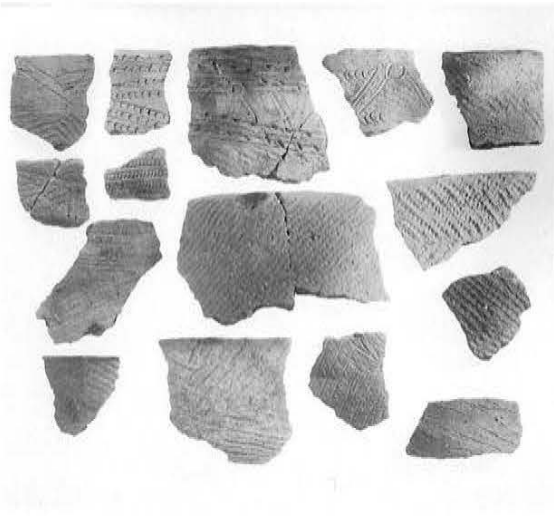
J-12号住居址出土の深鉢



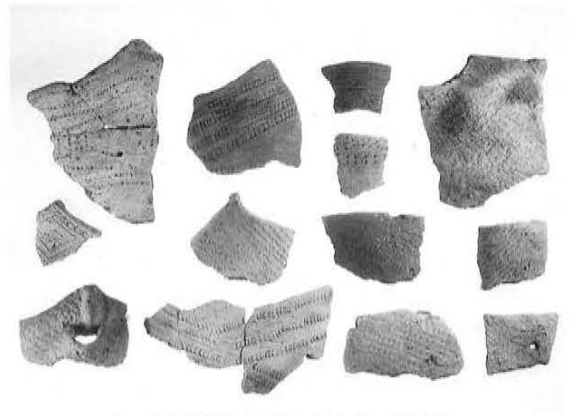
J-12号住居址出土の深鉢



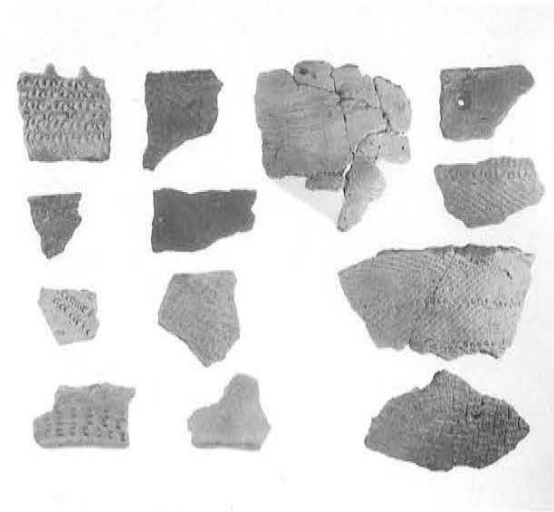
J-12号住居址出土の土器（1・2・3層）



J-12号住居址出土の土器（4・5層）



J-12号住居址出土の土器（5層）



J-12号住居址出土の土器（5・6層）



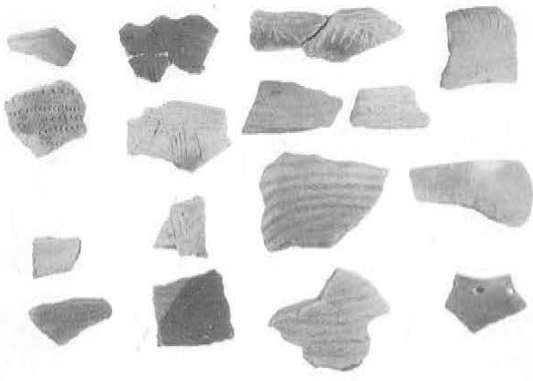
J-13号住居址出土の深鉢



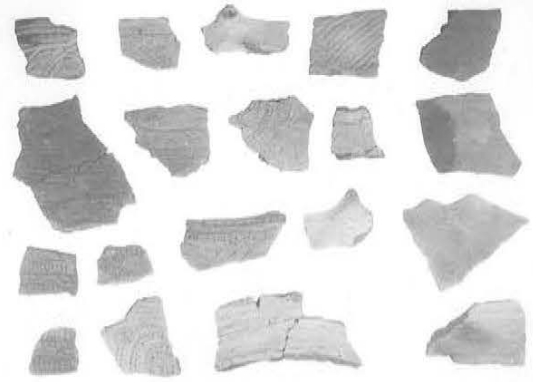
J-13号住居址出土の土器



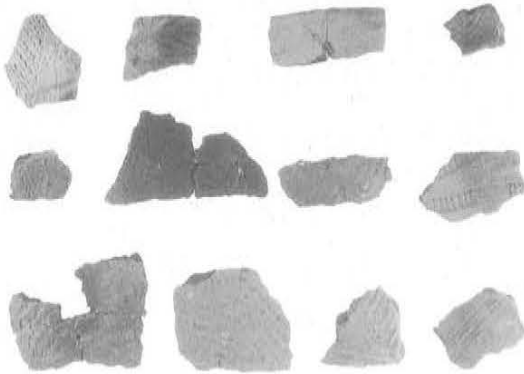
J-14号住居址出土の深鉢



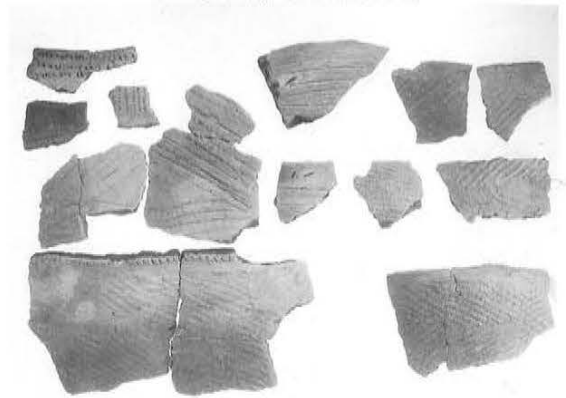
J-14号住居址出土の土器



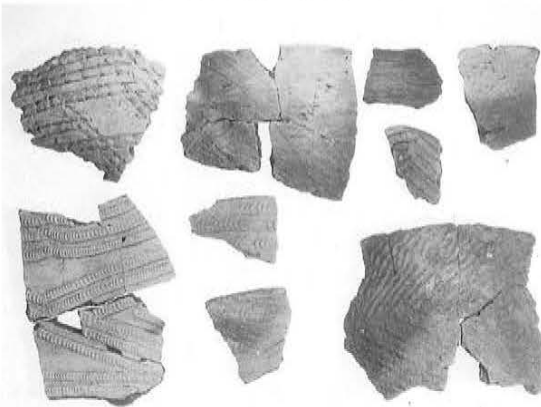
J-15号住居址出土の土器



J-16号住居址出土の土器



J-17号住居址出土の土器



J-18号住居址出土の土器



J-20号住居址出土の土器



J-21号住居址出土の土器



D-38号土壙出土の深鉢



D-66号土壙出土の深鉢



D-77号土壙出土の深鉢



D-86号土壙出土の深鉢



D-103号土壙出土の深鉢



D-142号土壙出土の深鉢



D-176号土壙出土の深鉢



D-176号土壙出土の深鉢



D-173号土壙出土の深鉢



D-144号土壙出土の深鉢



D-111号土壙出土の深鉢



D-161号土壙出土の深鉢



T-25号土壙出土の深鉢



D-33号土壙出土の深鉢



T-6号土壙出土の深鉢



T-8号土壙出土の浅鉢



T-8号土壙出土の深鉢



T-9号土壙出土の深鉢



T-11号土壙出土の深鉢



J-8号住居址D-1号土壙出土の深鉢



D-78号土壙出土の深鉢



S-8号配石遺構出土の深鉢



U-2号埋設土器



U-3号埋設土器



U-4号埋設土器



U-5号埋設土器



調査区内出土の深鉢



調査区内出土の深鉢



調査区内出土の深鉢



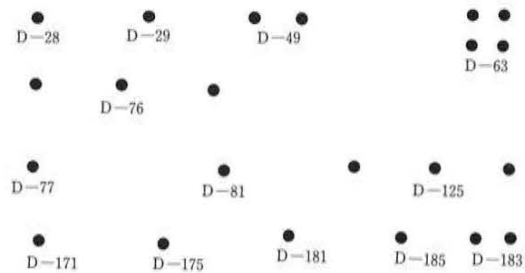
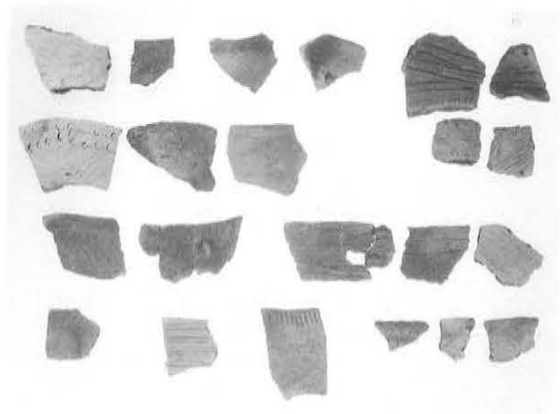
調査区内出土の深鉢



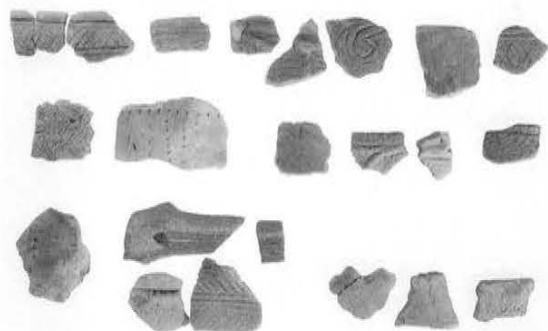
調査区内出土の深鉢



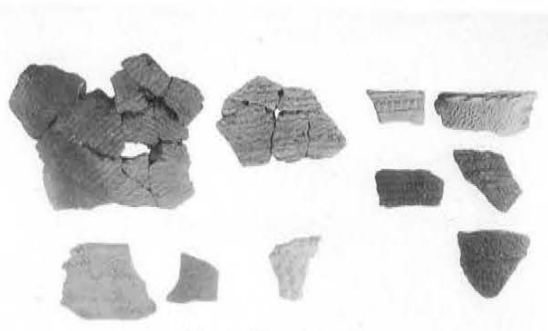
調査区内出土の人面把手



土壙出土の土器



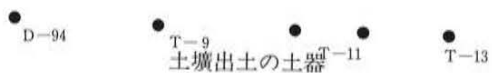
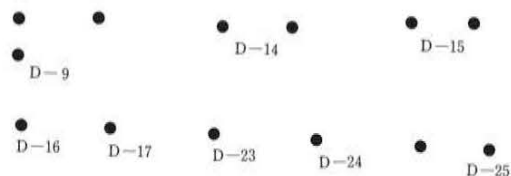
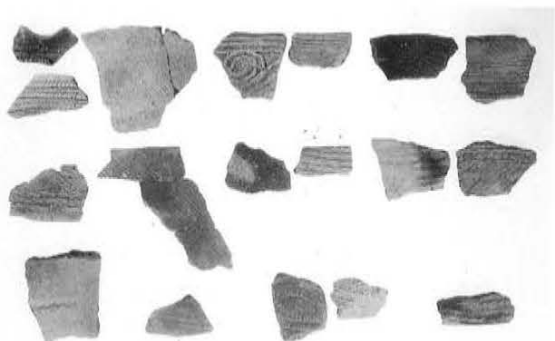
調査区内出土の土器 (中期)



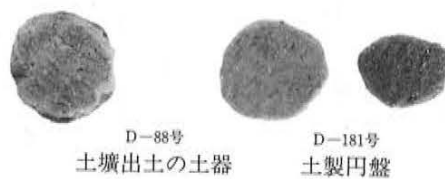
ピット出土の土器



土壙出土の土器

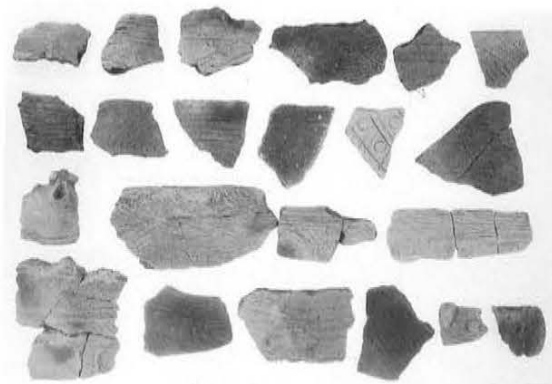


土壙出土の土器

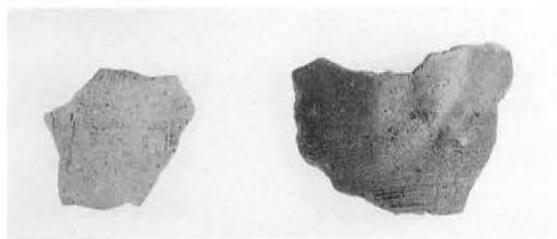


D-88号
土壙出土の土器

D-181号
土製円盤



調査区出土の土器



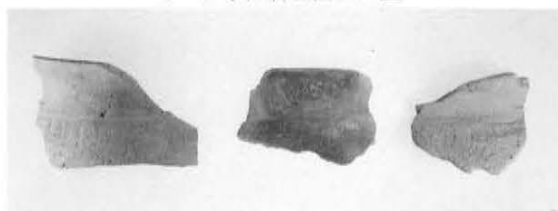
Y-1号住居址出土の土器



Y-3号住居址出土の壺



Y-3号住居址出土の甕



H-1号住居址出土の甕



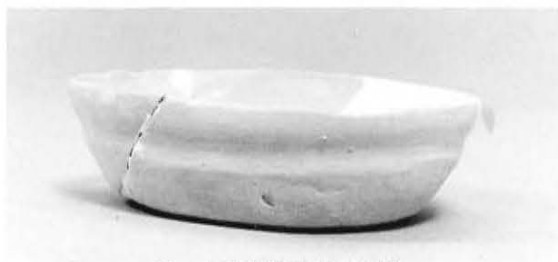
H-1号住居址出土の蓋



H-1号住居址出土の蓋



H-1号住居址出土の甕



H-1号住居址出土の坏



H-1号住居址出土の刀子



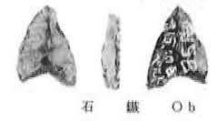
石 鏃 Ob



石 鏃 Ob



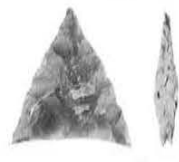
石 鏃 Ob



石 鏃 Ob



石 鏃 Ob



石 鏃 Ch



石 鏃 Ch



スクレイパーA類 Ob



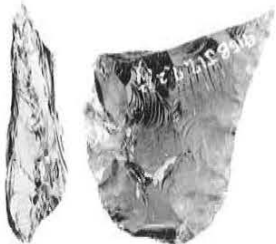
石 鏃 Ch



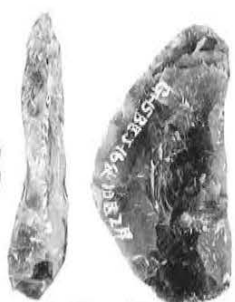
スクレイパーA類 Ch



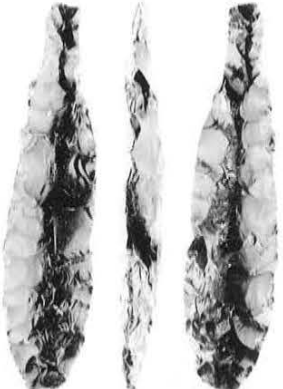
石 鏃 Ch



スクレイパーA類 Ob



スクレイパーA類 Ch



槍先形尖頭器再利用品 Ob



ナイフ形石器再利用品 Ob



スクレイパーA類 Ob

図版一72



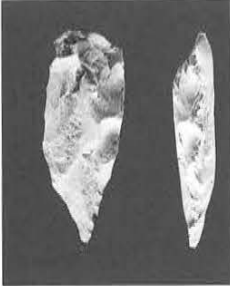
石 錐 Ch



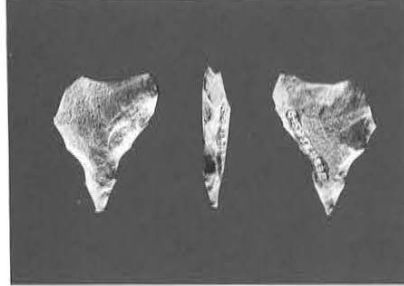
石 錐 Ob



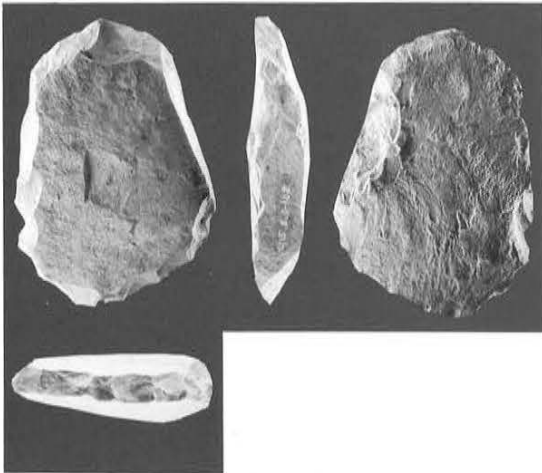
石 槍 Sh



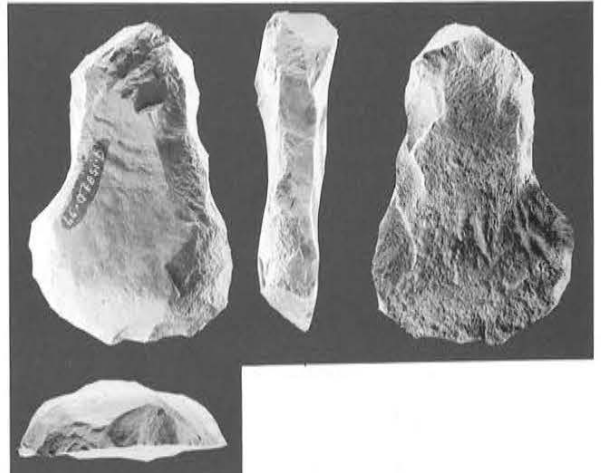
石 錐 Sh



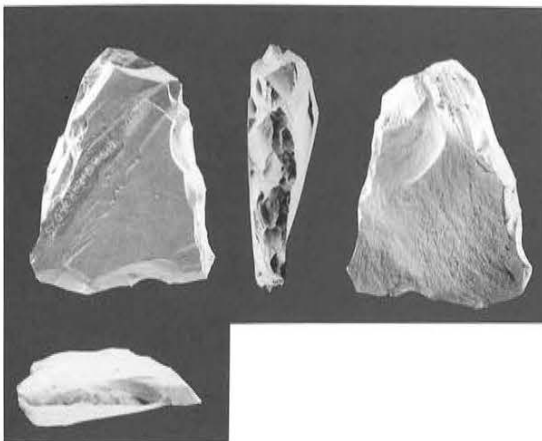
石 錐 Sh



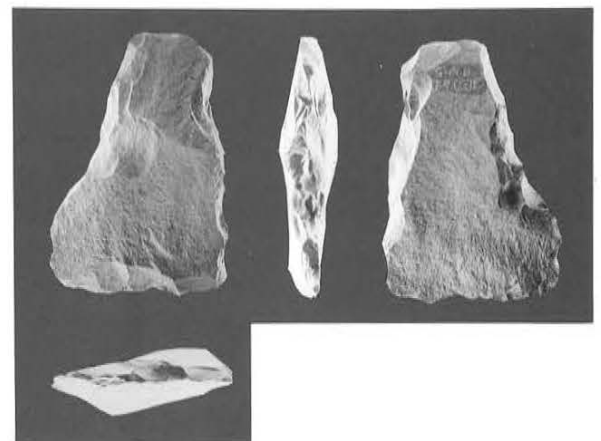
打製石斧 Sh



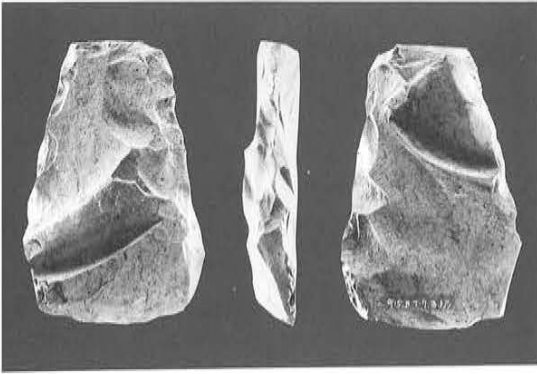
打製石斧 Sh



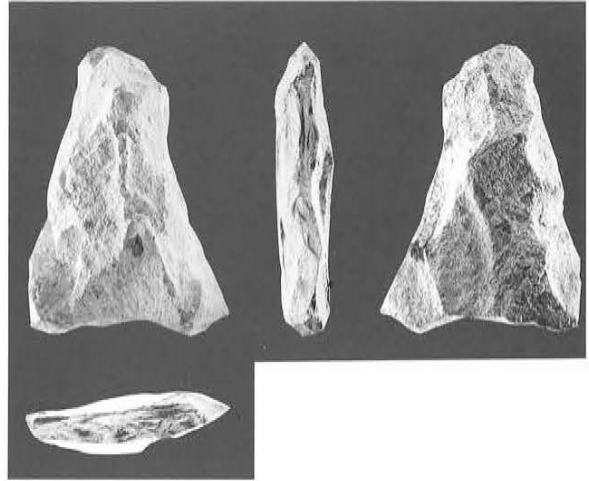
打製石斧 Sh



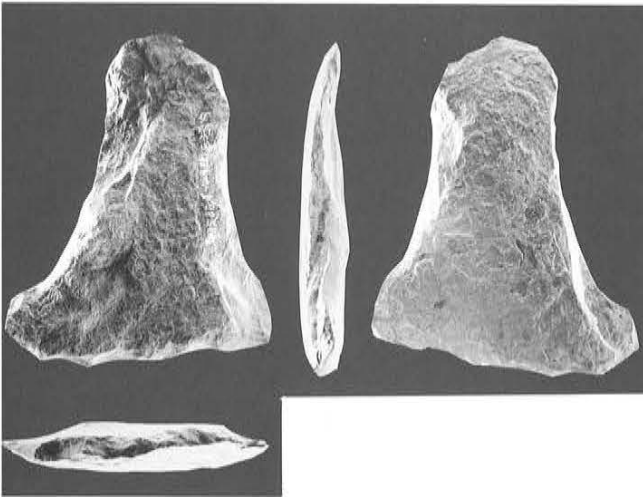
打製石斧 Sh



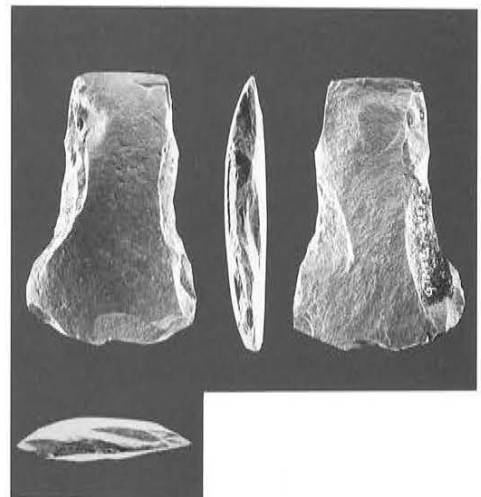
打製石斧 Sh



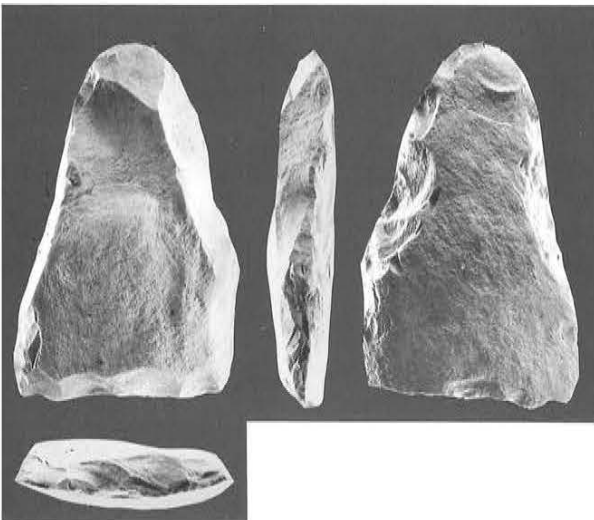
打製石斧 Sh



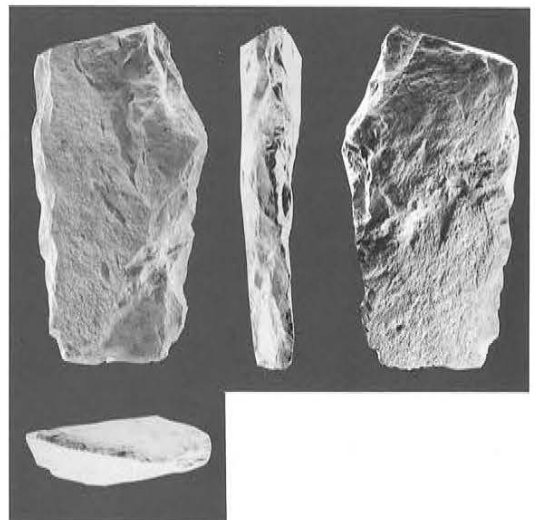
打製石斧 Sh



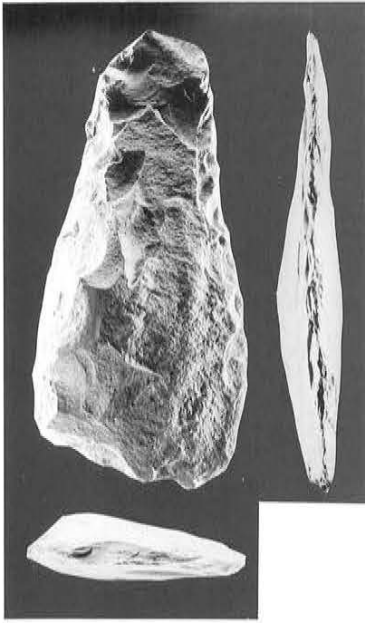
打製石斧 Sh



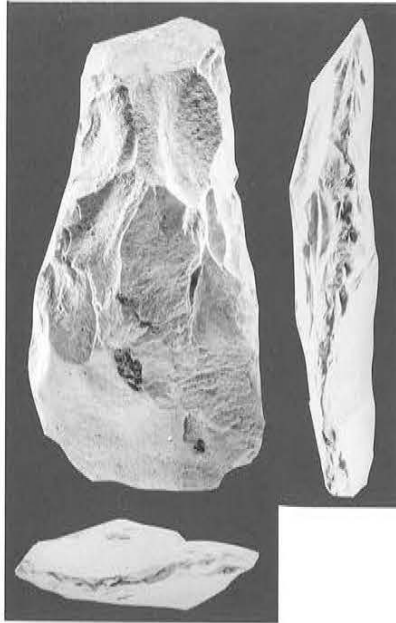
打製石斧 Sh



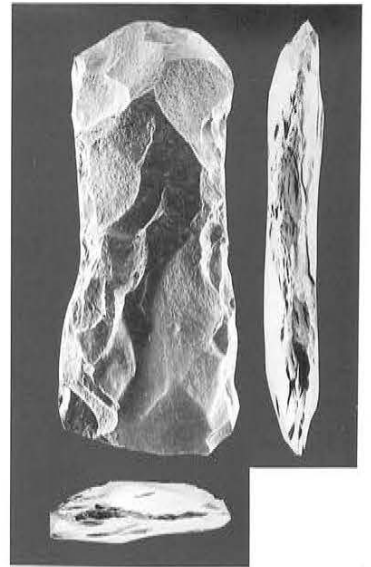
打製石斧 Sh



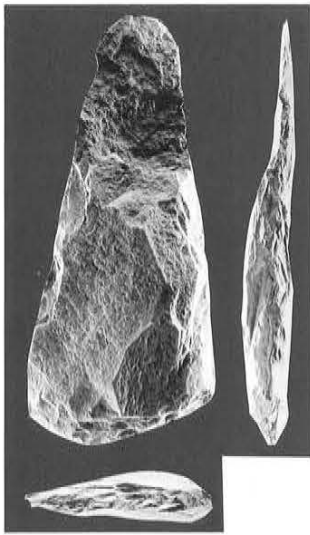
打製石斧 Sh



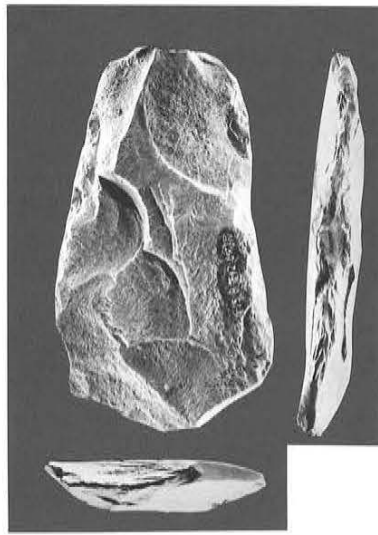
打製石斧 Sh



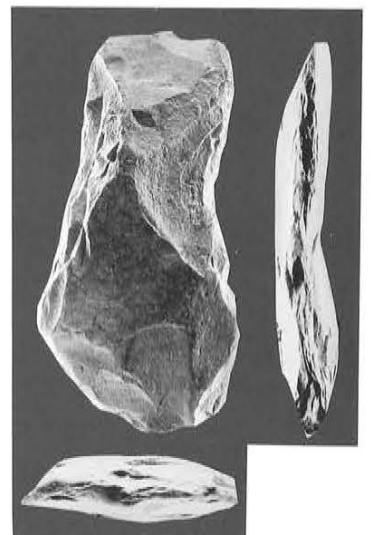
打製石斧 Sh



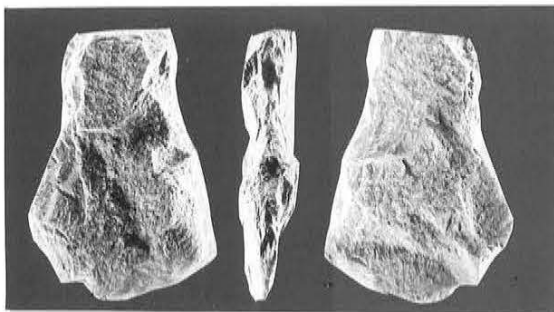
打製石斧 Sh



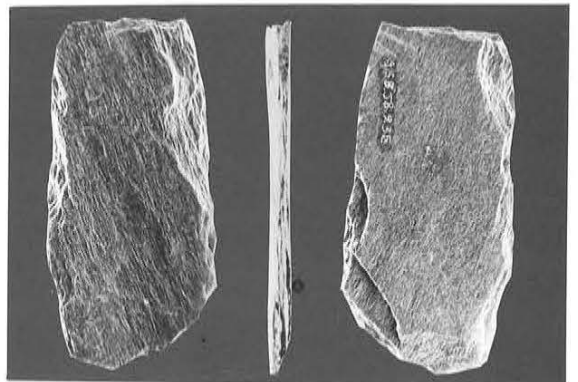
打製石斧 Sh



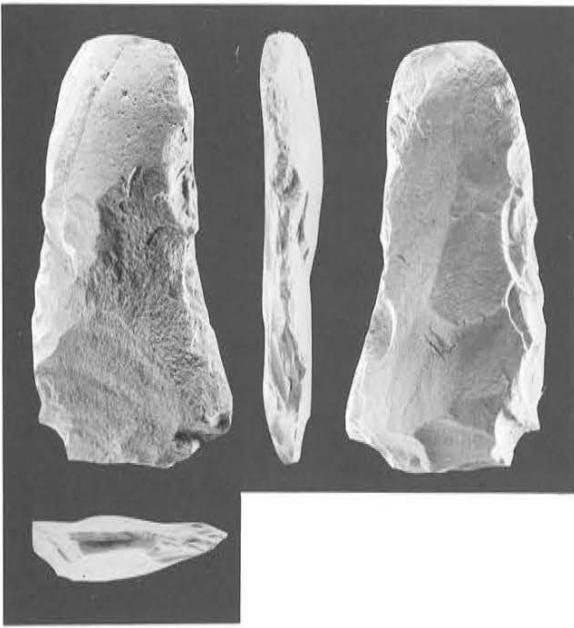
打製石斧 Sh



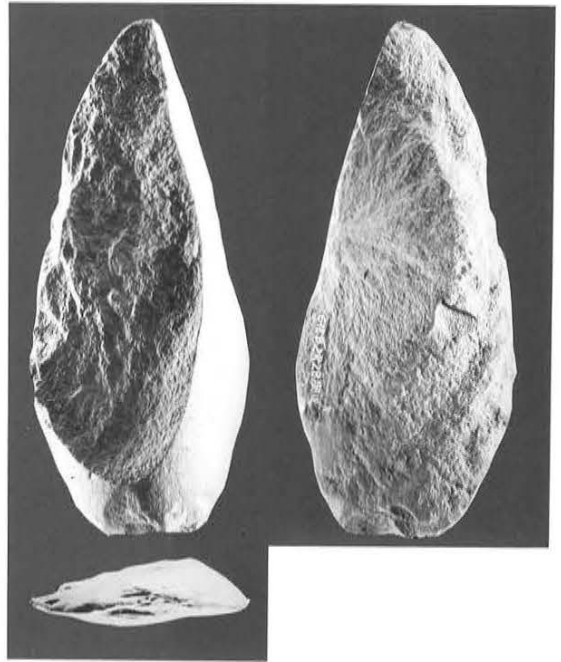
打製石斧 An



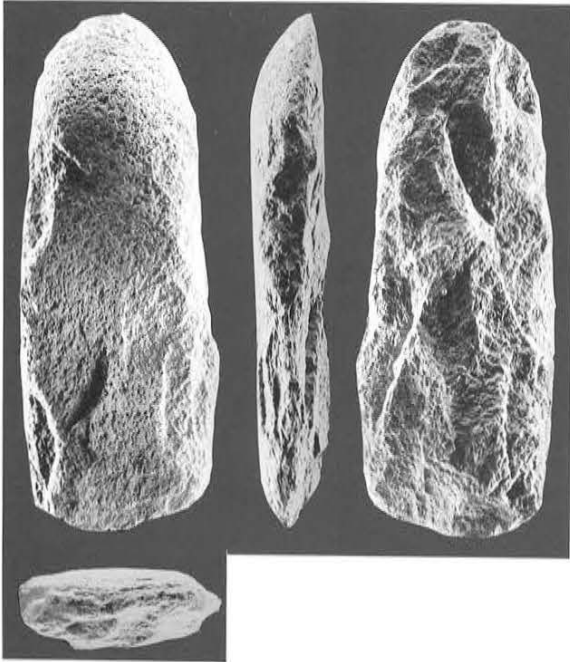
打製石斧 Sc



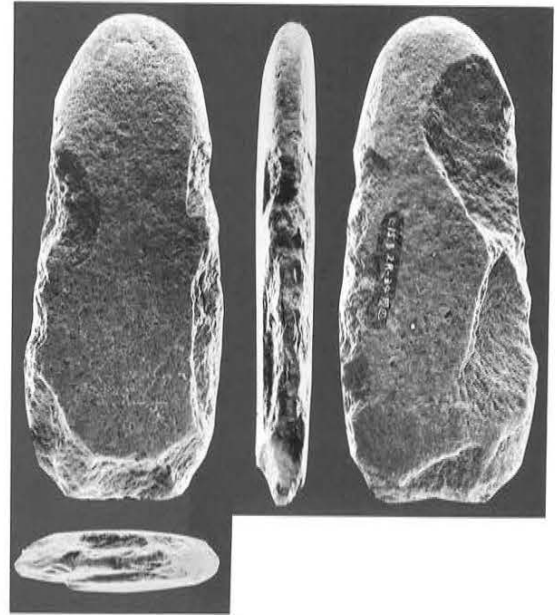
打製石斧 Sh



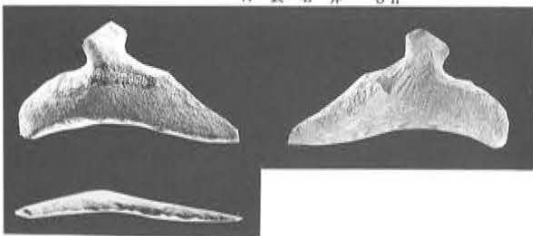
打製石斧 Sh



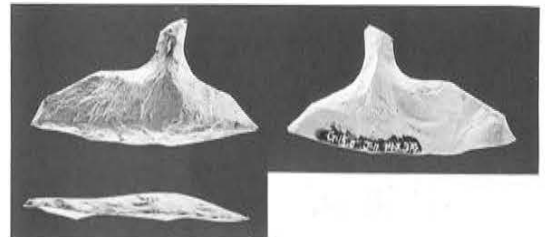
打製石斧 Sh



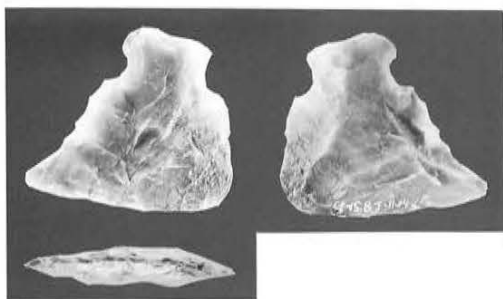
打製石斧 Sh



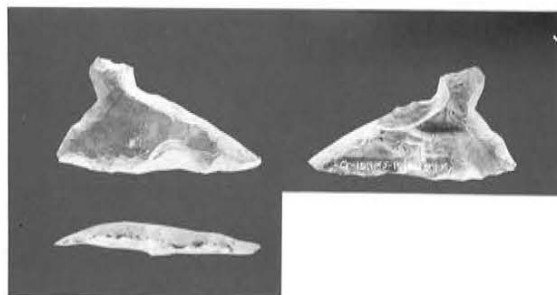
石匙 Sh



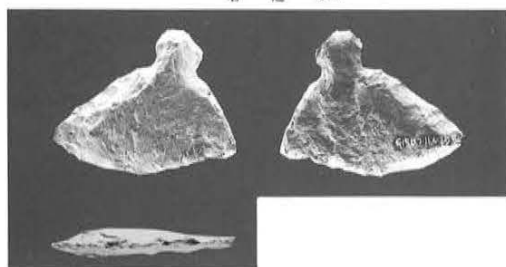
石匙 BAn



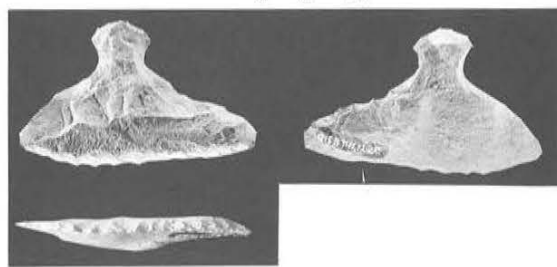
石 匙 Ch



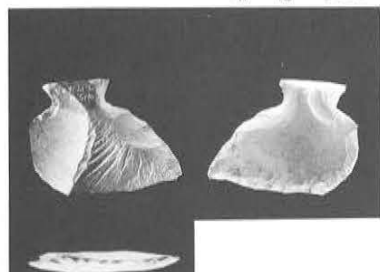
石 匙 Ch



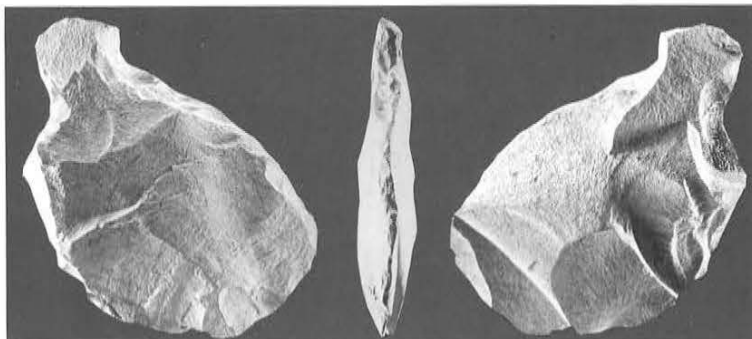
石 匙 GAn



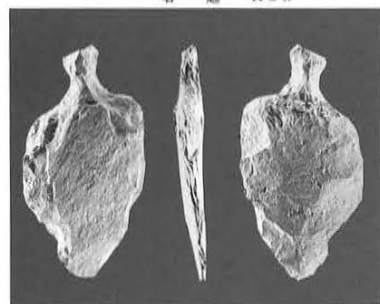
石 匙 Sh



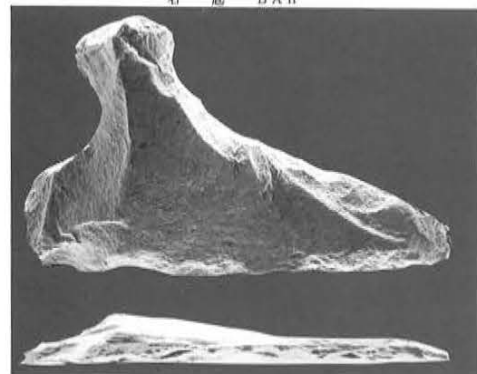
石 匙 HSh



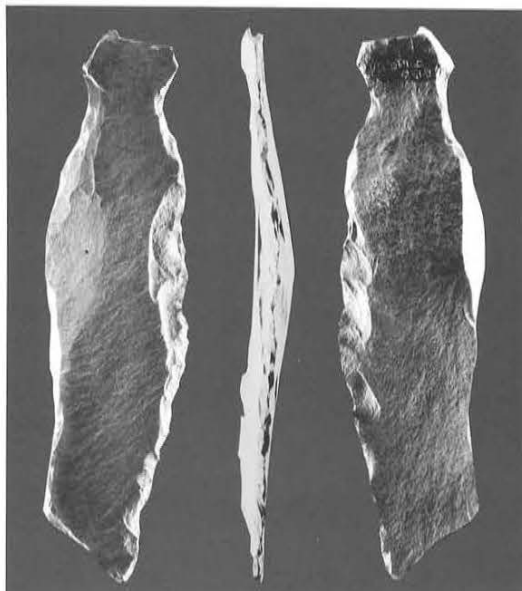
石 匙 Sh



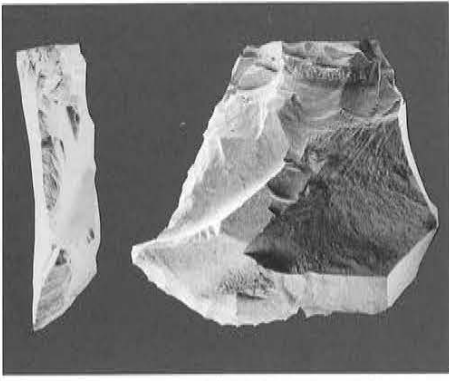
石 匙 BAn



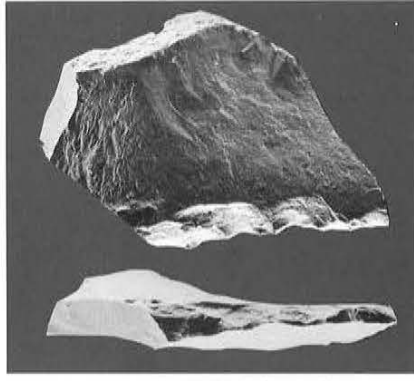
石 匙 Sh



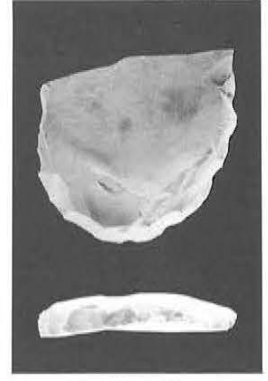
石 匙 Sh



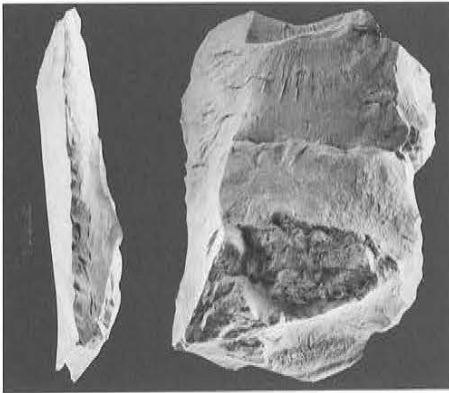
スクレイパー-B類 Sh



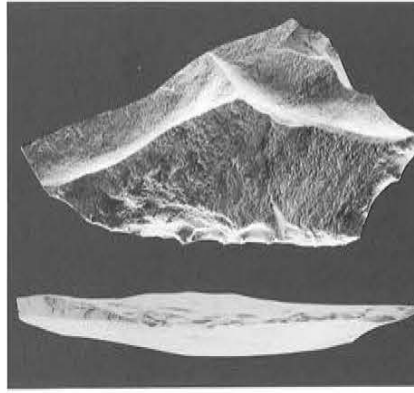
スクレイパー-B類 BA n



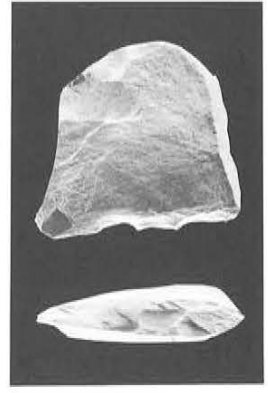
スクレイパー-B類 Sh



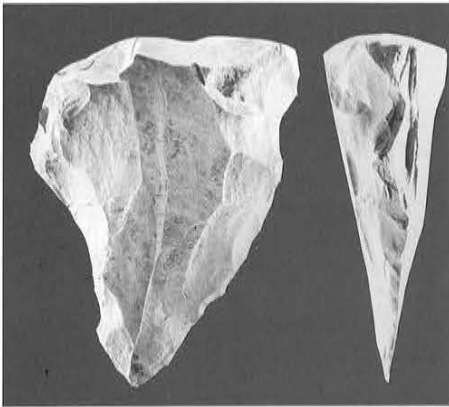
スクレイパー-B類 Sh



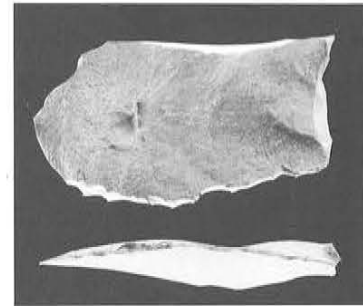
スクレイパー-B類 Sh



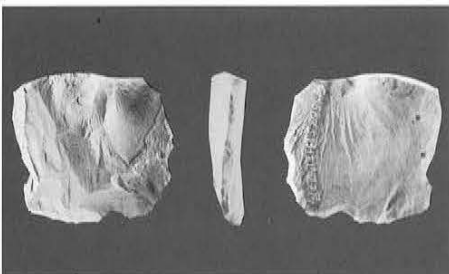
スクレイパー-B類 Sh



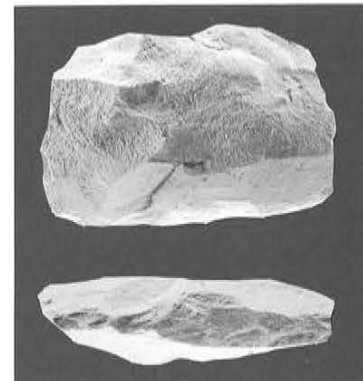
スクレイパー-B類 Sh



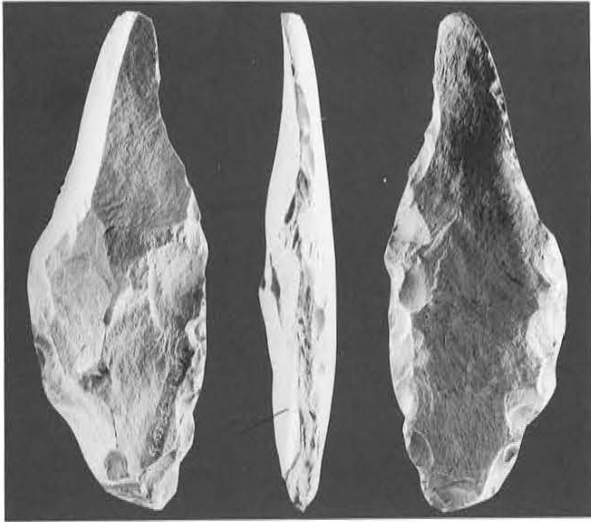
スクレイパー-B類 Sh



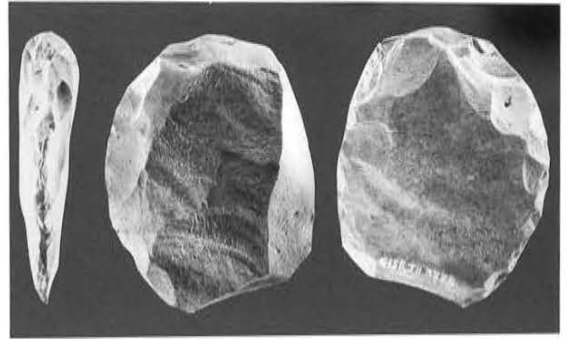
スクレイパー-B類 Sh



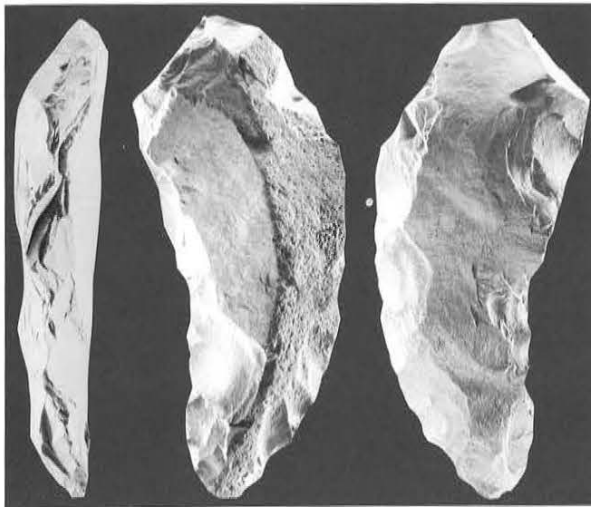
スクレイパー-B類 Sh



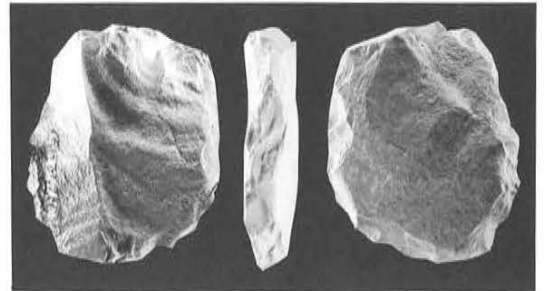
スクレイパー-B類 Sh



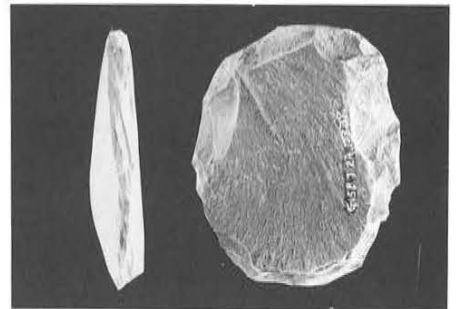
スクレイパー-B類 Sh



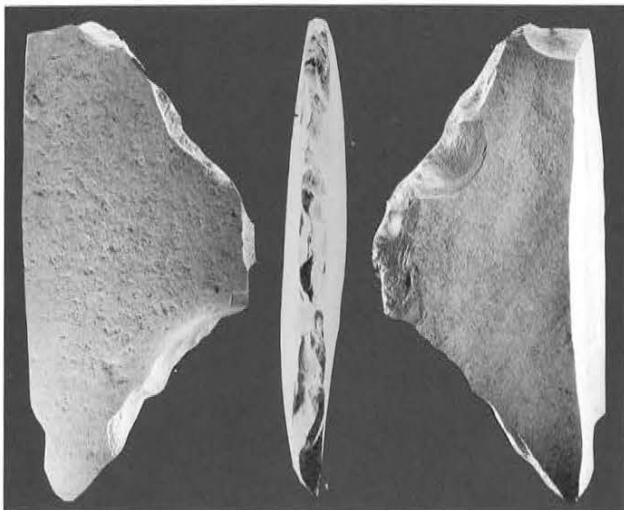
スクレイパー-B類 Sh



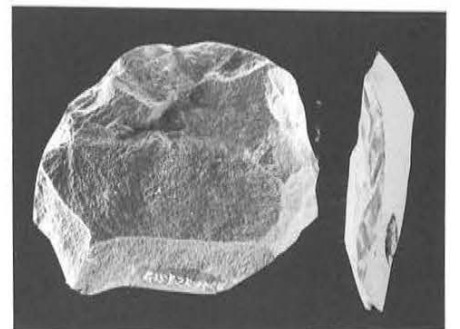
スクレイパー-B類 Sh



スクレイパー-B類 Sh



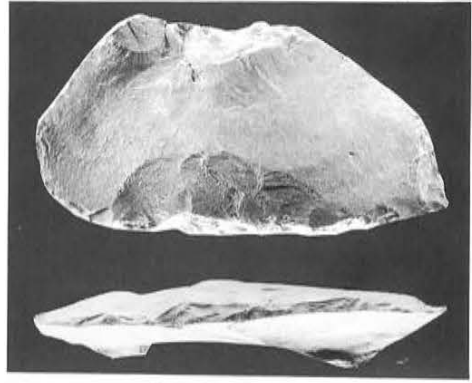
スクレイパー-B類 Sh



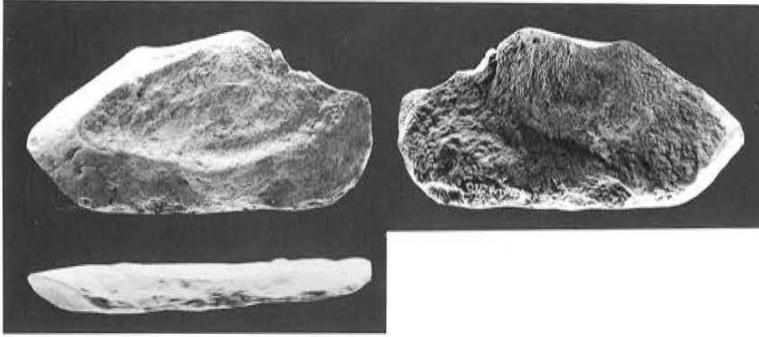
スクレイパー-B類 Sh



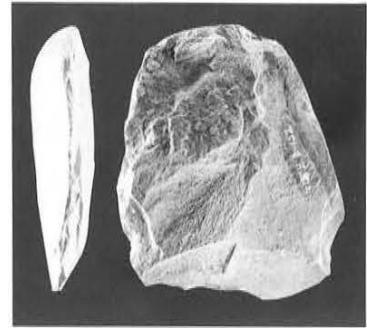
スクレイパー-B類 Sh



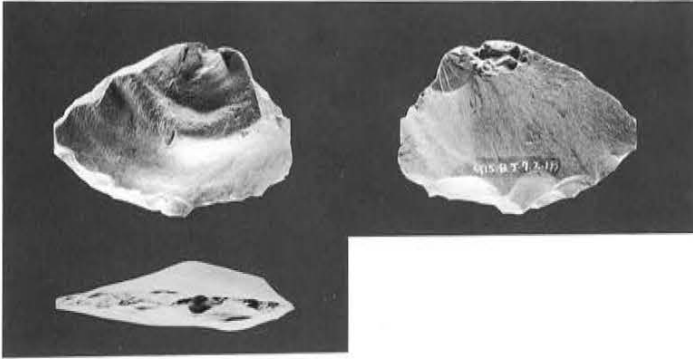
スクレイパー-B類 Sh



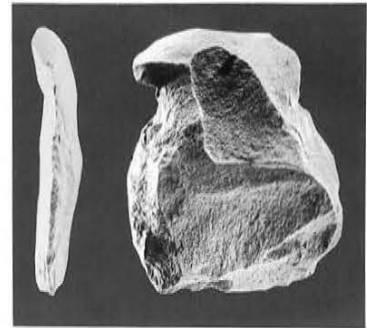
スクレイパー-B類 Sh



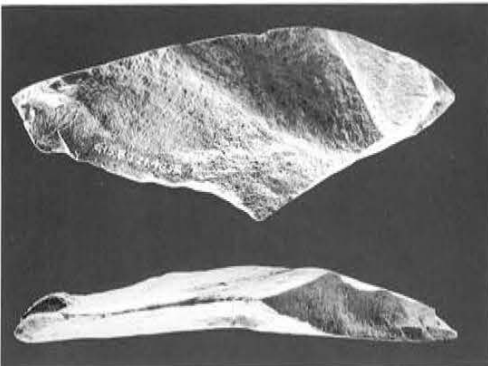
スクレイパー-B類 Sh



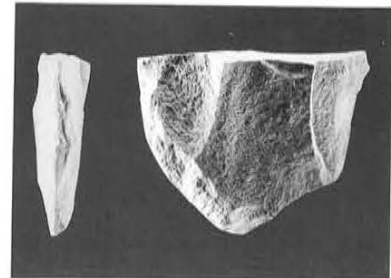
スクレイパー-B類 Sh



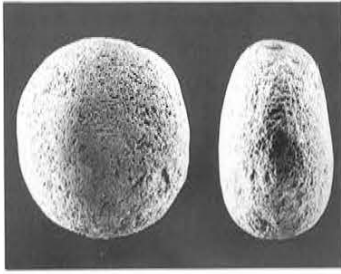
スクレイパー-B類 Sh



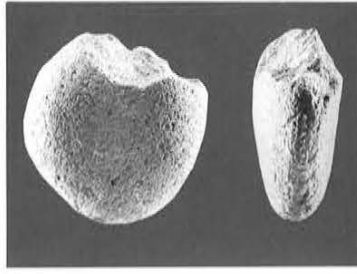
スクレイパー-B類 Sh



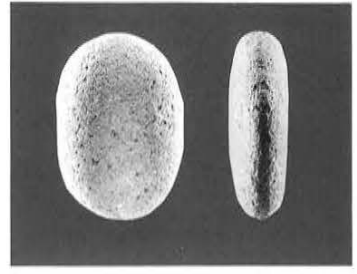
打製石斧刃部再生剥片 Sh



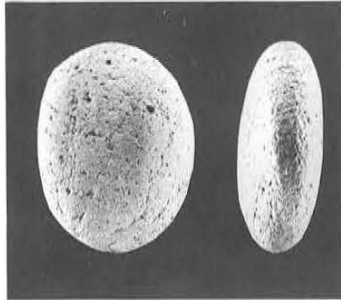
磨石 An



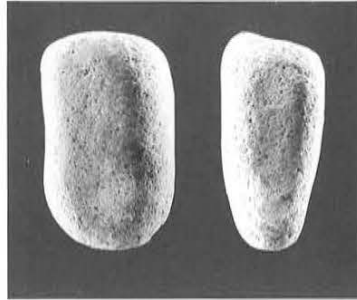
磨石 An



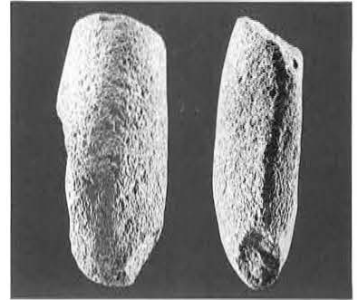
磨石 An



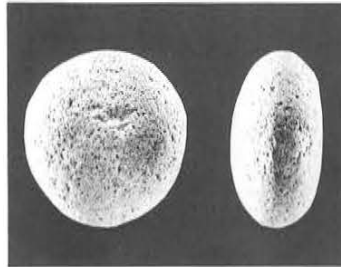
磨石 An



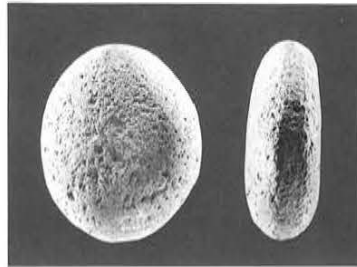
磨石 An



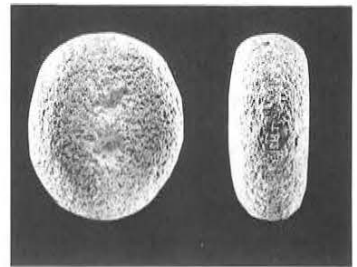
磨石 An



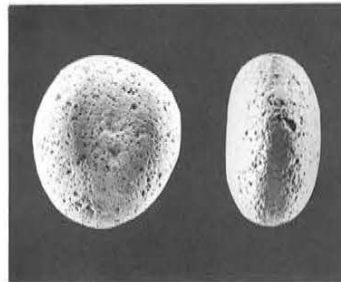
圓石 An



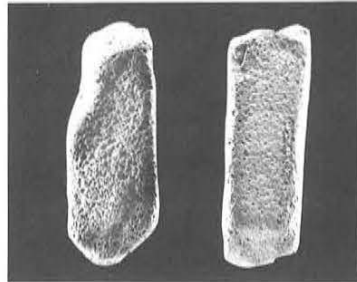
圓石 An



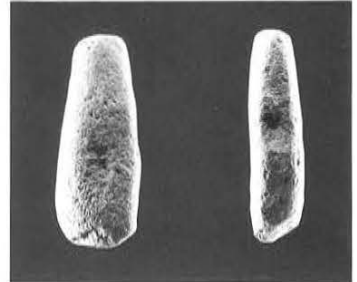
圓石 An



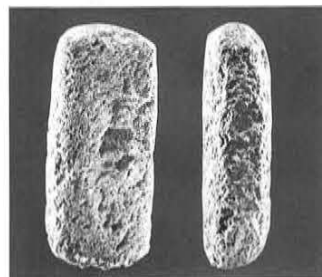
圓石 An



圓石 An



圓石 An



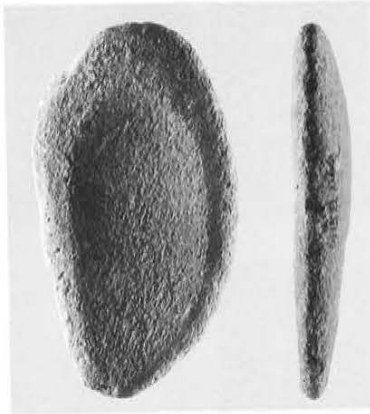
圓石 An



圓石 An



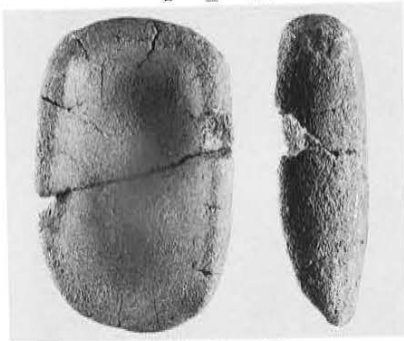
石皿 Sc



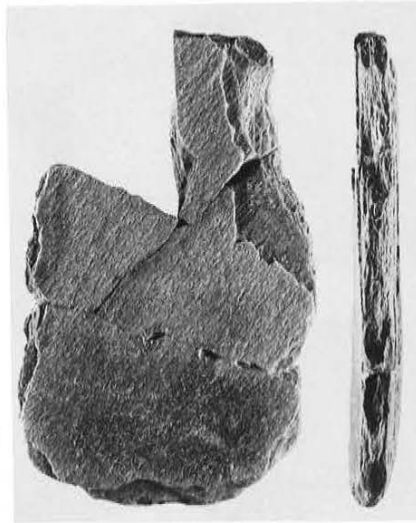
石皿 Sc



石皿 Sc



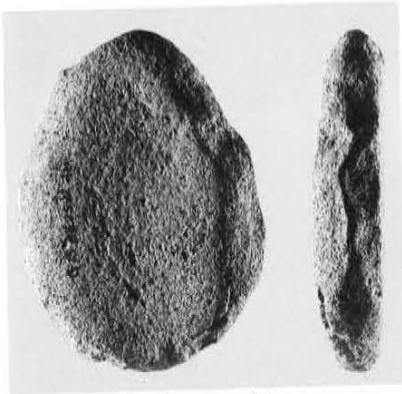
石皿 An



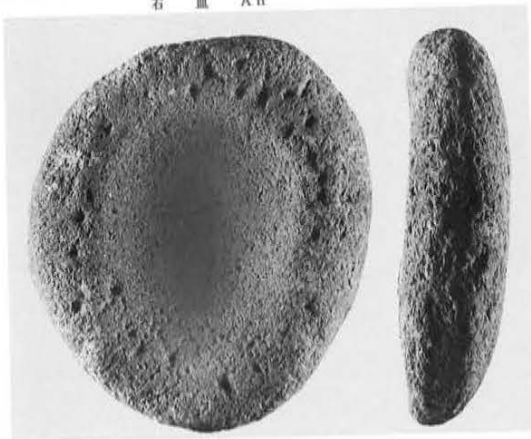
石皿 Sc



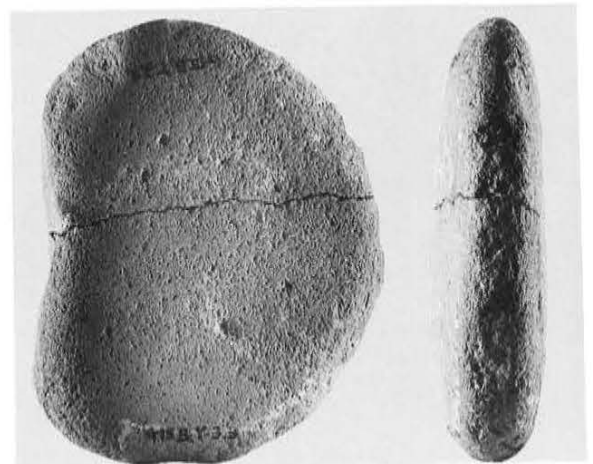
石皿 An



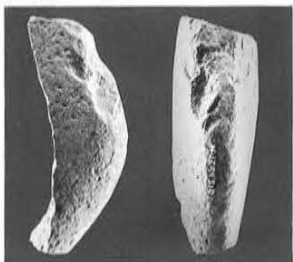
石皿 An



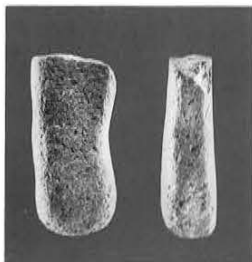
石皿 An



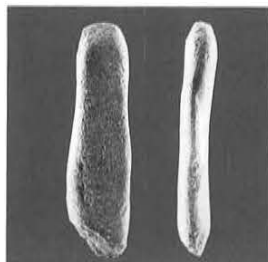
石皿 An



敵石 An



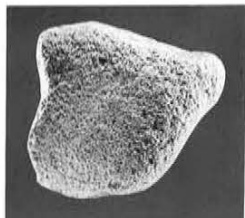
敵石 An



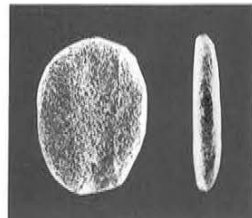
敵石 An



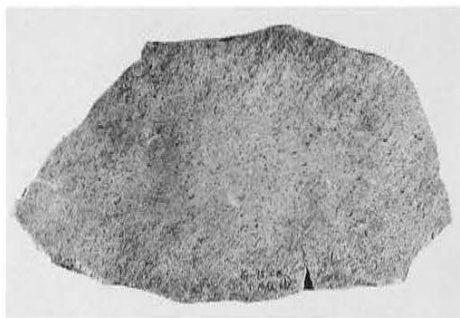
敵石 An



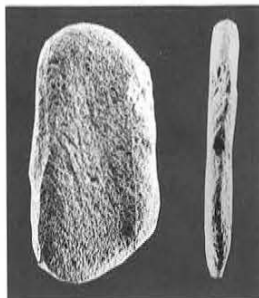
砥石 SS



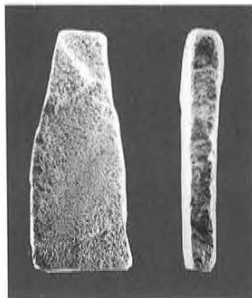
砥石 SS



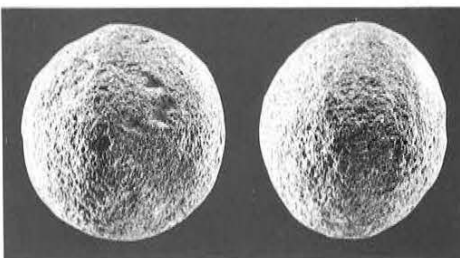
石皿(敵石) An



砥石 SS



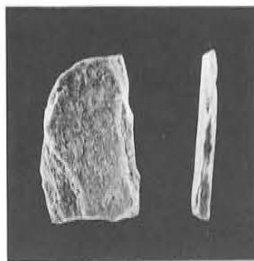
砥石 SS



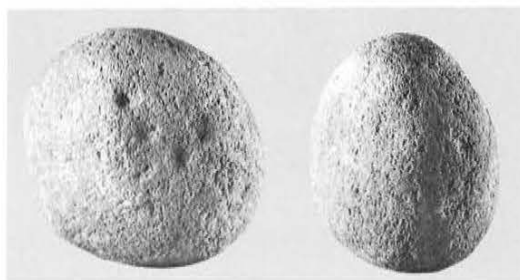
多孔石 An



砥石 SS



砥石 SS



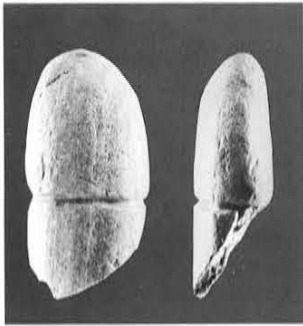
多孔石 An



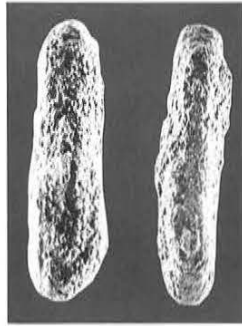
丸石 An



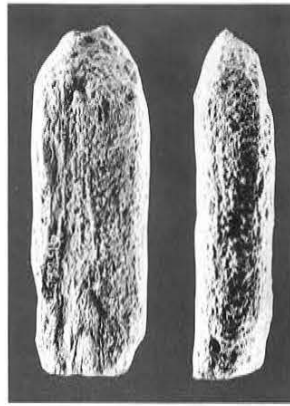
丸石 An



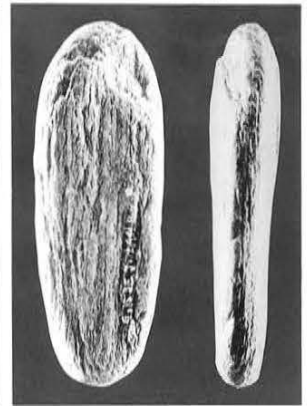
石棒 Sc



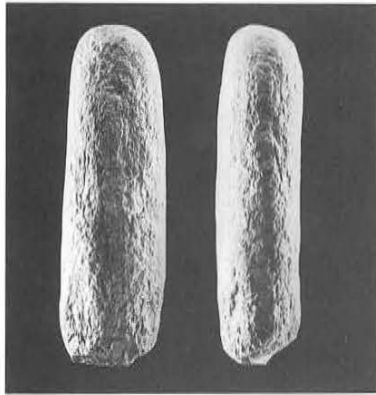
棒状礫 Sc



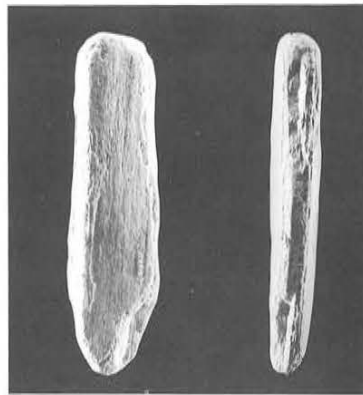
棒状礫 Sc



棒状礫 Sc



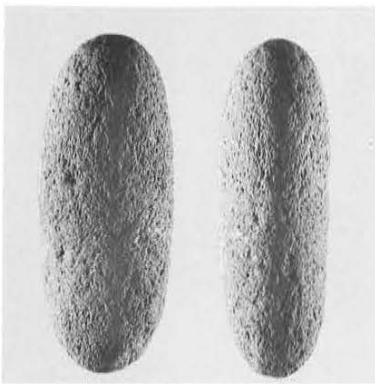
石棒 Sc



棒状礫 Sc



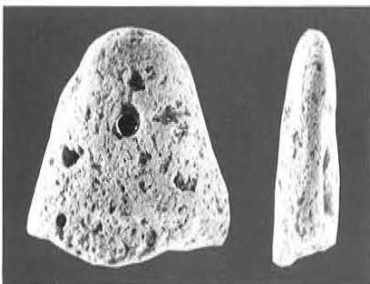
石棒 Sc



棒状礫 An



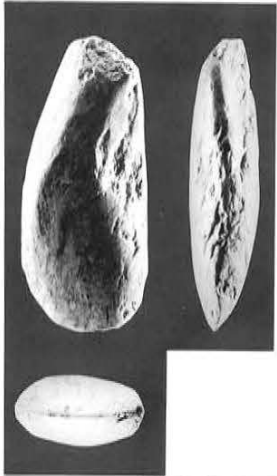
棒状礫 An



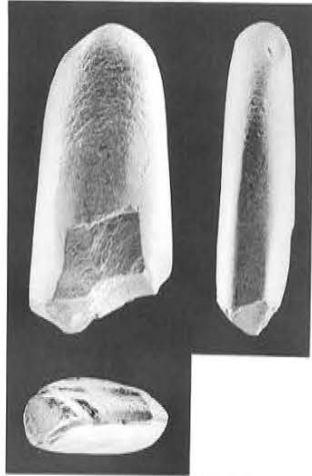
重飾 軽石



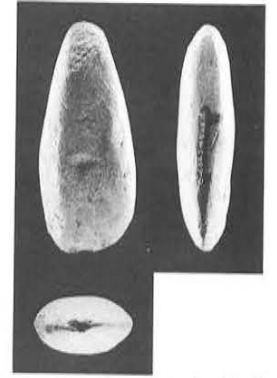
石製品(装身具?) 蛇紋岩



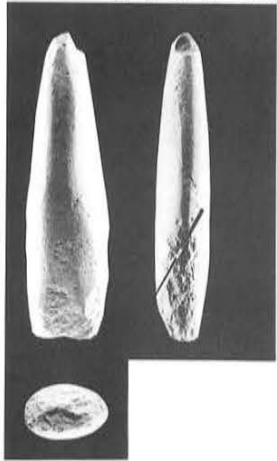
磨製石斧 蛇紋岩



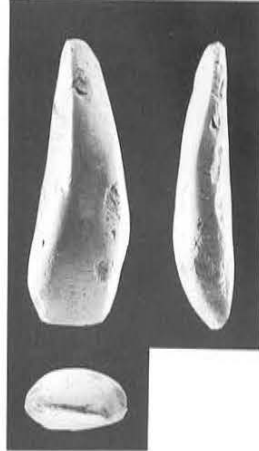
磨製石斧 Sh



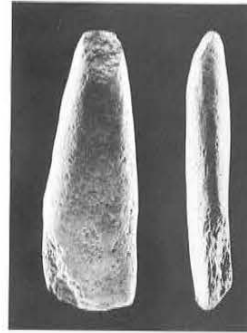
磨製石斧 GrR



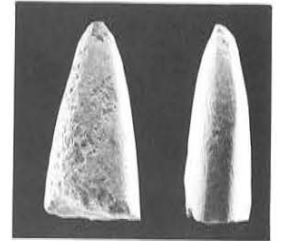
磨製石斧 GrR



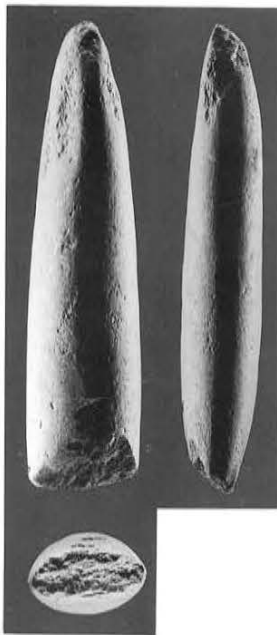
磨製石斧 GrR



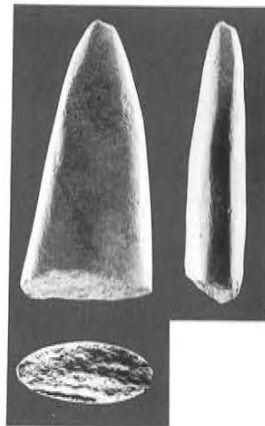
磨製石斧 GrR



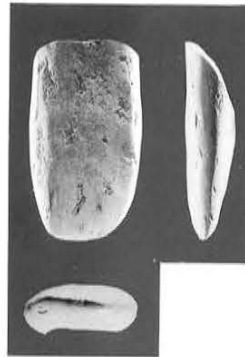
磨製石斧 GrR



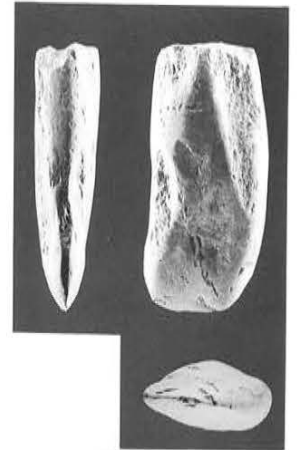
磨製石斧 GrR



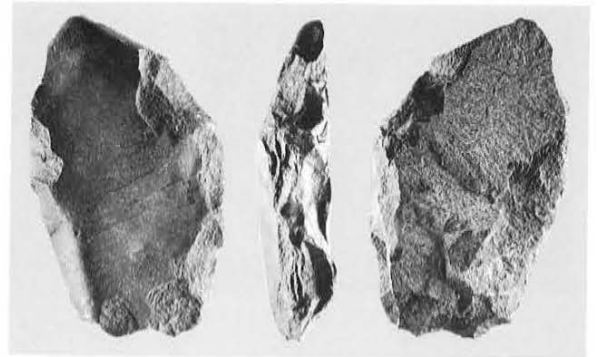
磨製石斧 GrR



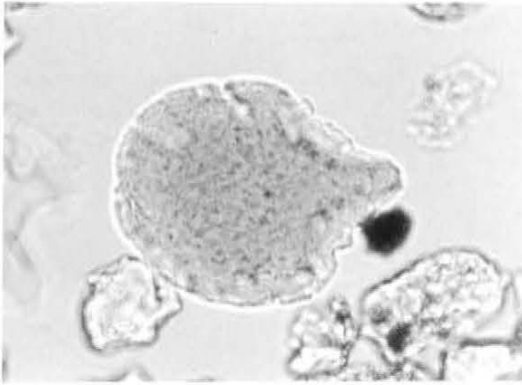
磨製石斧 GrR



磨製石斧 GrR



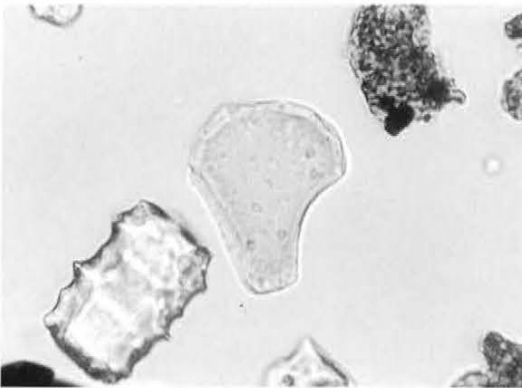
石核 E 類 斑動岩



1 ヨシ属 第20トレンヂ



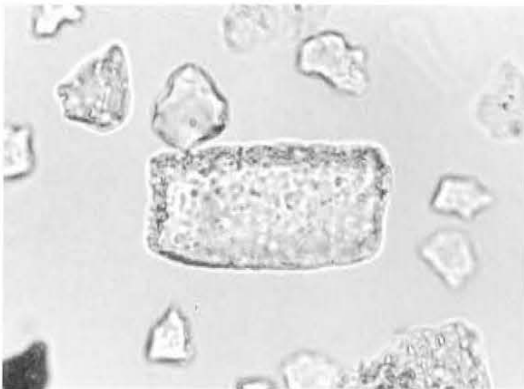
2 ヨシ属 第20トレンヂ



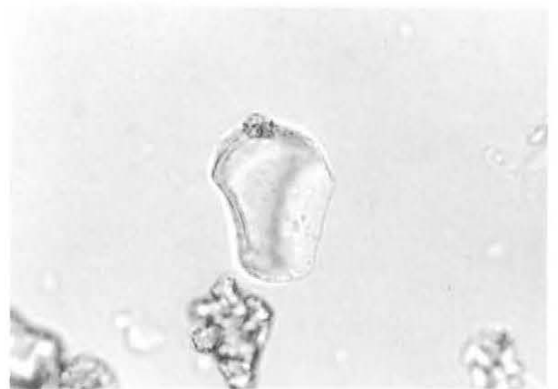
3 ウシクサ族(ススキ属など) 第20トレンヂ



4 シバ属 第20トレンヂ

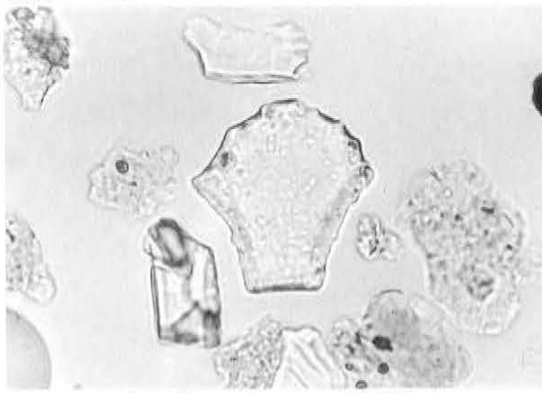


5 イネ科Aタイプ(キビ族型) B区深堀

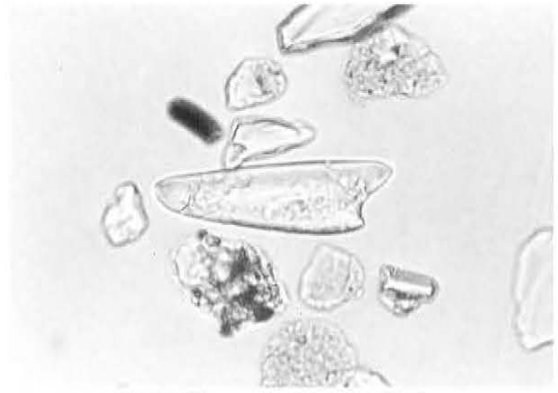


6 イネ科Bタイプ(ウシクサ族型) 第20トレンヂ

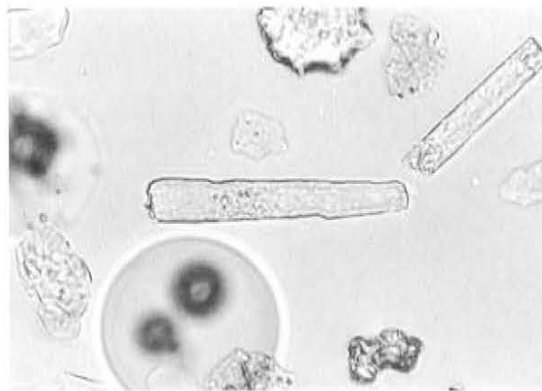
0 50 100 μ m



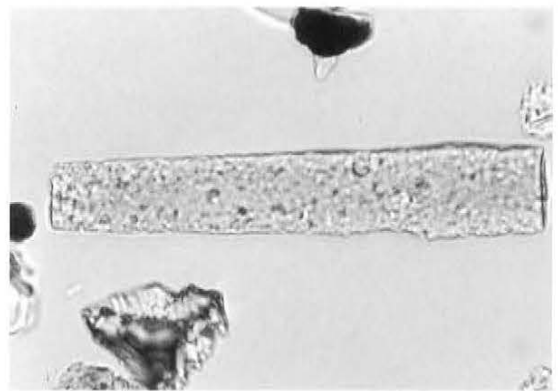
13 タケ亜科 B区深堀



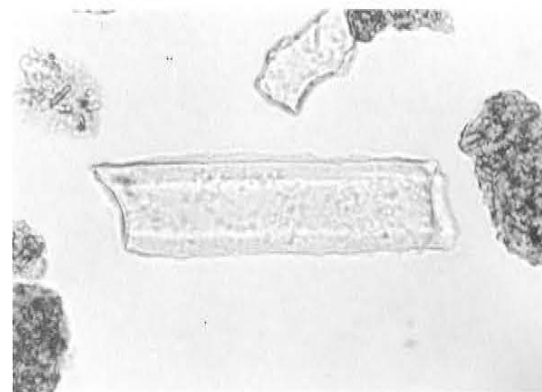
14 表皮毛起源 B区深堀



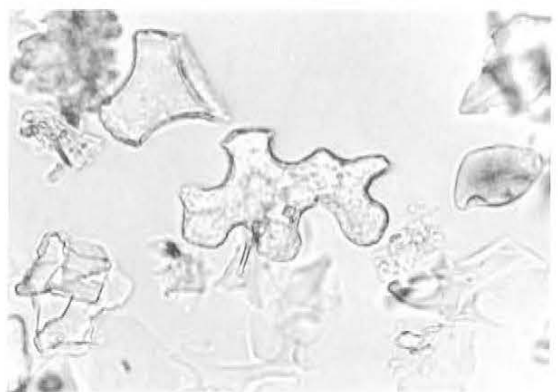
15 棒状珪酸体 B区深堀



16 棒状珪酸体 第20トリーブ

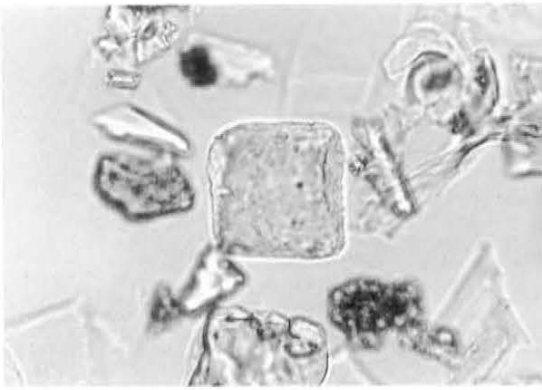


17 イネ科の茎部起源



18 樹木(はめ絵パズル状、広葉樹) 第20トリーブ

0 50 100 μ m



7 イネ科Bタイプ' (ウシクサ族型) 第20トレンチ



8 イネ科Cタイプ' (ウシクサ族型-大型) B区深堀



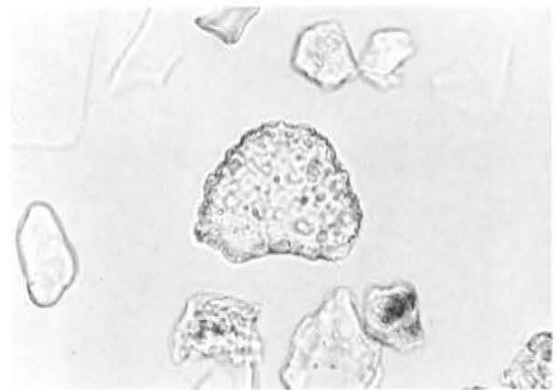
9 タケ亜科A1aタイプ' (ネザサ節など) 第20トレンチ



10 タケ亜科A1aタイプ' (ネザサ節など) 第20トレンチ



11 タケ亜科B1タイプ' (クマザサ属) B区深堀

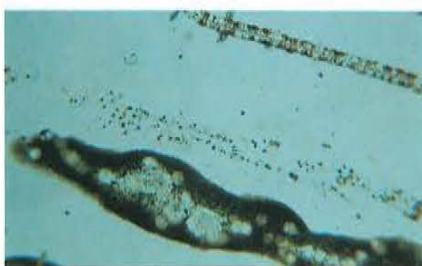


12 タケ亜科B1タイプ' (クマザサ属) B区深堀

0 50 100 μ m



1 黒曜石



黒曜石



2 チャート (赤色)



チャート (赤色)



3 チャート (濃灰色)



チャート (濃灰色)



4 チャート (茶赤色)



チャート (茶赤色)



5 チャート (赤褐色)

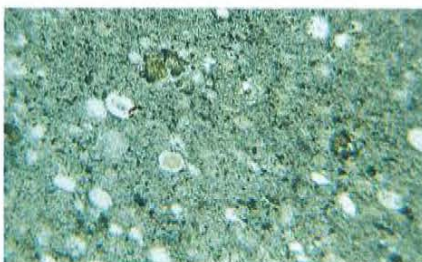


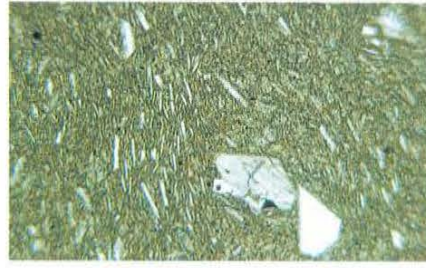
チャート (赤褐色)

倍率2倍

平行ニコル 倍率80倍



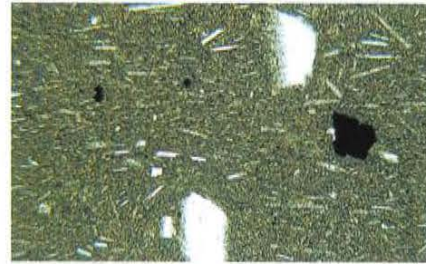
6 黑色安山岩



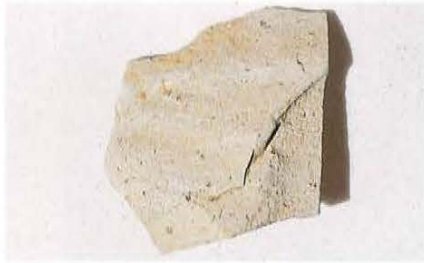
黑色安山岩



7 黑色安山岩 (暗灰色)



黑色安山岩 (暗灰色)



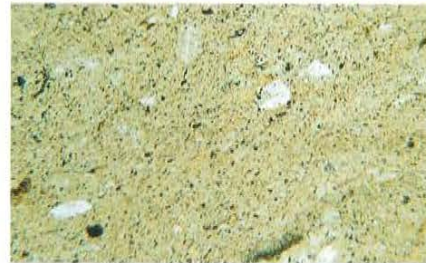
8 黑色安山岩 (灰白色)



黑色安山岩 (灰白色)



9 硬質頁岩 (茶黄色)



硬質頁岩 (茶黄色)



10 頁岩 (灰黑色)



頁岩 (灰黑色)

倍率1倍 (9のみ2倍)

平行ニコル 倍率80倍



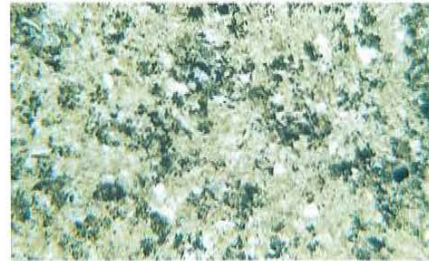
11 頁岩 (黒褐色泥岩)



頁岩 (黒褐色泥岩)



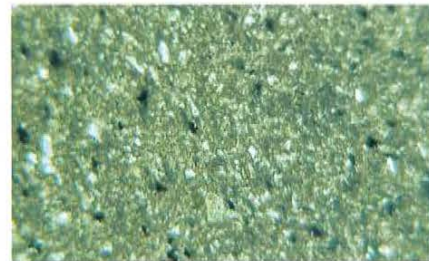
12 頁岩 (灰黑色)



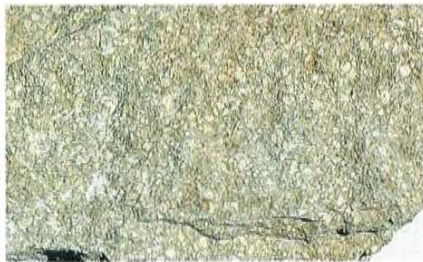
頁岩 (灰黑色)



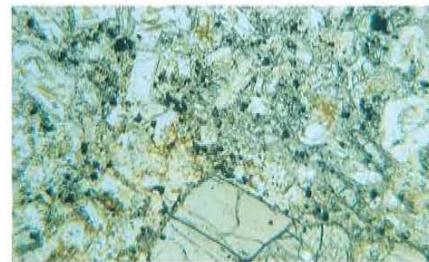
13 頁岩 (黄灰色泥岩)



頁岩 (黄灰色泥岩)



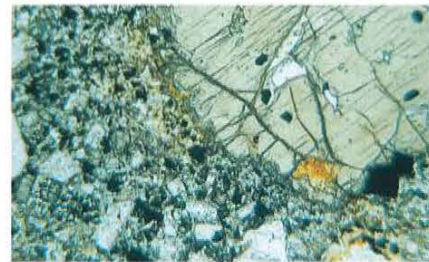
14 安山岩 (粗粒斑晶安山岩)



安山岩 (粗粒斑晶安山岩)



15 安山岩 (大輝石斑晶安山岩)



安山岩 (大輝石斑晶安山岩)

倍率1倍

平行ニコル 倍率80倍



16 牛伏砂岩



牛伏砂岩



17 牛伏砂岩



牛伏砂岩



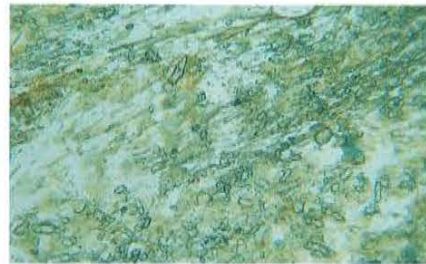
18 結晶片岩 (綠色点紋片岩)



結晶片岩 (綠色点紋片岩)



19 結晶片岩 (綠色点紋片岩)

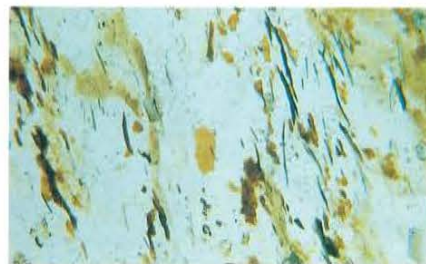


結晶片岩 (綠色点紋片岩)



20 結晶片岩 (絹雲母片岩)

倍率1倍

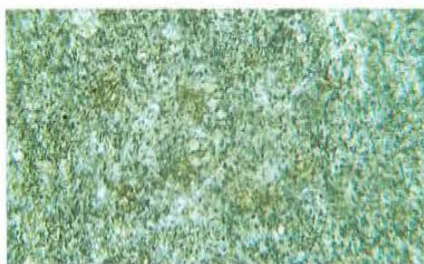


結晶片岩 (絹雲母片岩)

平行ニコル 倍率80倍



21 緑色岩類 (玄武岩起源)



緑色岩類 (玄武岩起源)



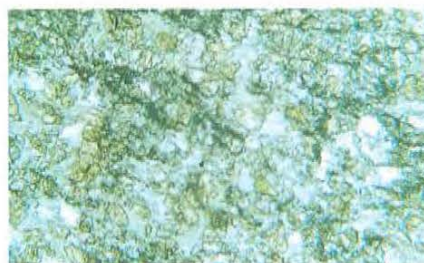
22 緑色岩類 (玄武岩起源)



緑色岩類 (玄武岩起源)



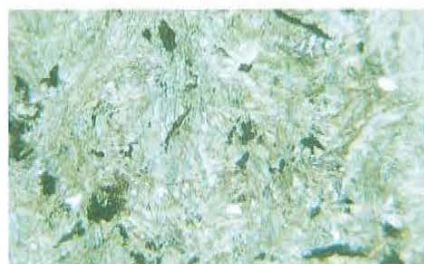
23 緑色岩類 (かんらん岩起源)



緑色岩類 (かんらん岩起源)



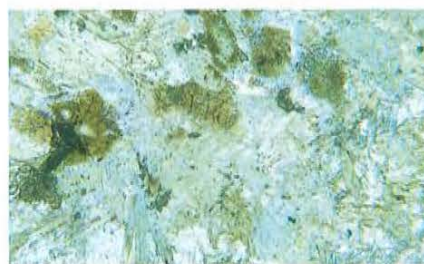
24 緑色岩類



緑色岩類



25 緑色岩類 (はんれい岩起源)



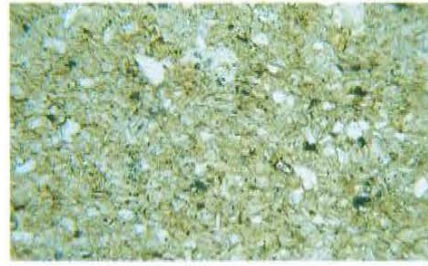
緑色岩類 (はんれい岩起源)

倍率1倍

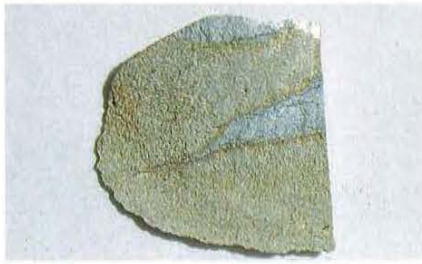
平行ニコル 倍率80倍



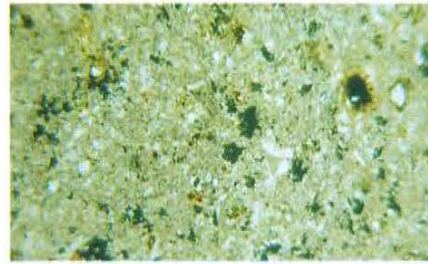
26 頁岩 (黄灰色泥岩) 下仁田町露頭



頁岩 (黄灰色泥岩) 下仁田町露頭



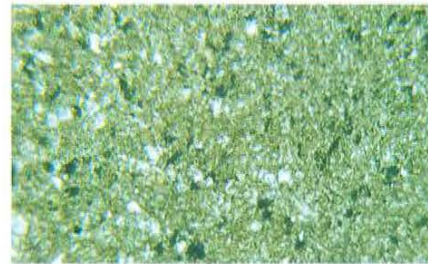
27 頁岩 (硅質頁岩) 富岡市和合



頁岩 (硅質頁岩) 富岡市和合



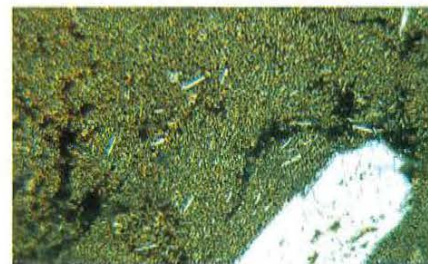
28 頁岩 (硅質頁岩) 下仁田町岩山



頁岩 (硅質頁岩) 下仁田町岩山



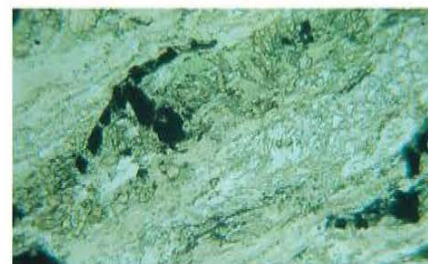
29 黑色安山岩 富岡市曾木



黑色安山岩 富岡市曾木



30 綠色岩類 下仁田町岩山



綠色岩類 下仁田町岩山

倍率 1 倍

平行ニコル 倍率80倍

大下原遺跡・吉田原遺跡

— すみれ工業団地造成事業に伴
う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

発 行 日 平成5年3月31日

編集・発行 安中市教育委員会
群馬県安中市安中1丁目23-13

印 刷 マツダ印刷株式会社